吉田絃二郎全集 第十二巻

目次

旅人……三四三

生くる日の限り

第二感想集

草光る

放浪者芭蕉

私は雪解の道を歩いてゐた。

凍ついた土の底からはすでに小ひさな草の芽生えが頭を擡げかけてゐた。私は一歩また一歩黒い土を踏んだ。「生きてゐるのだ。生きて土を踏んでゐるのだ。」から思つたゞけで、私は自分が生きてゐることに對して、或る驚きとよろこびと寂寞とを感じないではをれなかつた。

私は空を見た。冬の空は靜かに、そして無限に流れてゐた。そこには雪解の野があり、雜木林があつた。黒い土の道が空のつゞくかぎり走つてゐた。そこには煙つた小丘があり、菜畑があつた。白い流れがあつた。

もし私が、家を持たなかつたとしたら、もし私が何の繫縛をも持たなかつたとしたら、私はその刹那に、私が立つてゐた黒い土の上から、さらに次の土の上に、そしてさらに、永遠に土から土へと歩いて行くことができたかも知れない。

家庭といふことを忘れ、社會的繫縛といふことを忘れ、因習といふことを忘れて、黒い土の上に立つてゐる時、私たちの心は靜かな、しかしながら抵抗しがたいほどの強い自然の誘惑を感じないであらうか。

私たちの眼の前に、谷一つへだてゝ流れてゐる丘は、私たちに對して不可思議な誘惑を持つてゐないだらうか。

私たちは谷を越えてその丘に行く。丘に立てばまたさらに谷をへだてゝ丘がある。丘は煙つてゐる。第二の丘、第三の丘すべてが私たちを招いてゐる。私たちは丘から丘へと誘惑を感じつゝたどつて行く。

木の葉の音でもない、水の音でもない、車の音でもない。空の音か。雲の音か。大地そのものゝ音か？　そこに不

可思議なる大地の誘惑がある。

一つの丘に立てば、私たちは響きなき自然のうちに不可思議なる物の響きを見出す。それは耳に響く音でなくして、私たちの心に響く物の音である。不可思議なる誘惑の物の音である。その不可思議なる物の音を聴けば私たちの心はうづく。よろこびと、驚異と、寂寞と、無限とに。

もし私たちが、家といふものを持たなかつたら、社會といふものを忘れることができたら、恐らく私たちは丘から丘へと、不可思議なる音なき物の音の誘惑に魅せられて、かの原始人的な漂泊の旅をつゞけることであらう。

私は丘に立つて、音なき物の音の誘惑を感ずる時、いつも芭蕉を思ひ出す。芭蕉はいつかの手紙に「旅の魔」といふやうな意味の言葉を用ひてゐたやうに記憶してゐる。かれは、ほんたうに一生を旅の魔にとりつかれた男であつた。たいていの人々は時折り、旅の魔にとりつかれるにちがひない。けれどもたいていの人々は家を持つてゐる。社會を忘れることができない。かれ等は旅の魔の誘惑を斷ちながら生きてゐる。それが普通の人間の生き方である。

私はア・サア・シモンズの放浪者(Wanderer)の詩を想ひ出す。

放浪者の眼はいつも海の風に絶えず fresh にせられる。
かれ等の頰は音もない木の葉のそよぎに冷たくせられる。
かれ等はさ迷ふ。
かれ等が通り過ぎた白い路、(White roads)は微かな埃(Fine dust)となつて、かれ等の後ろにのこされる。
かれ等は二度と同じ道を還らない。
人生もこの白い路ではないか。
「人生! 長い白い路が暗から暗へと永遠につらねる。

そしてかれ等もまた、日のごとく、還らない。かれ等は行く
永遠に、旅する星とともに、夜が
かれ等の上にとばりをおろす、つかれたかれ等に。そして黎明が
かれ等をめさます、すつかりつかれを癒して。かれ等は行く。」

かくて日は永遠に流れる。

そこには何の目的もない。究竟の地もない。風のやうに自由に、鳥のやうにほしいまゝに飛び歩くことのみが、この上もない、たゞ一つの生活のよろこびである。

昨日といふものを忘れて、たゞ新らしく生まれ來る明日といふものゝなかに、未だ知られなかつた世界の生面に直接することのみが放浪者の生活のすべてゞある。

"To be free of yesterday, and bownd
Toward a new-born to-morrow"

×

芭蕉はもとより所謂放浪者ではなかつた。しかしながらかれほど執念く旅の魔に憑かれた詩人はなかつたであらう

「……日々旅にして旅をすみかとす古人も多く旅に死せるあり予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず……」(おくの細道)

殊に奥の旅立ちについては、かれの周圍の人たちは無論のこと、かれの舊主すらひどく案じたやうである。

かれが曾良をつれて東北の旅に立つたのは元祿二年といへば四十六歳のころである。かれが大阪で死ぬ五年前のことであることや、普段病弱であつたことなどから考へ合はせて、當時の奥の旅がかれにとつてはいかに不安なもので

あつたかといふことは想像される。

「次郎兵衛物語」には當時のことを記して

「……又正月の末頃より、奥州出立の用意也。年始の取遣りに右の事半左衛門様に申參りければ殿様より御口上にて申參る。其事を我にもかたり給ふ。あつまり給ふ人々も心々にて宜かるべしと申人あり、又御病身ゆへかの寒國に決して宜しかるまじと申人あり。」と言つてゐる。

この周圍の人々の不安危惧の念に對して芭蕉自身の心持ちはどうであつたか。

「我いつも一處に居つき候得ば積聚の事ゆへに惱みもあれと他國行脚の先々にて一度も積氣の惱みなし。喰物とても快し。思立し事なれば一度は奥羽の名所は見まくほしと思ひ究めし也。藤堂君より御止之事は御信切有難けれども、我儕徒の事なれば君命と申にてなし肉兄の事は俗緣の人々の報事にもあらず。一分ンの風流は他のしる事にあらず、年我と共ならず、時失ふべからず……」

芭蕉自身の口から、實際これほど露骨に思ひ切つた强い言葉を語つたかどうかは疑問であるが、少くともかれの心中にはこれほどの堅い決心はあつたであらう。

旅から旅を、恰も風の如く、鳥の如く、自由にかけめぐらんとしたかれの詩情は、たとへかれの舊主であらうとも、肉身の兄半左衛門であらうとも、それを何うすることもできなかつたにちがひない。風流の一分といふ問題になつて來れば、王侯も俗緣もかれに對して何の力も持たないものとなつて來るのであつた。かれは一方に於いていかにも毅然たる風格を所有してゐたやうに思はれる。

かれが死んだ元祿七年の秋、去來に送つた手紙には

「……一類の者別而半左衛門より萬里の波濤を渡り候事頻にとゞめ申候……一年なりとも年若く病もつのり不申中薩

摩潟見申度ふり切て出申候乾坤無住水上の泡沫稻妻の境界に候故行先野山草木之間にて土を枕として此生終り可申覺悟に候……爰にて後の月見終り候故雪時雨は道々の詠にして何國の石上にて老の年を重ね申哉と存候……」

これは惟然と支考をつれて橋立への道中から去來へ送つたものであらうが、旅に對するかれの眞劍な、捨て身的な心持ちがうかゞはれる。淚なしには讀むことのできない大覺悟の言葉である。或ひは正覺を得たる哲人の言葉とも言ふべきであらうか。しかも正覺などといふ言葉を用ふるにはあまりに人間的な寂しいあきらめが漂うてゐる。「遙なる行末をかゝへて、斯る病おぼつかなしといへども、羈旅邊土の行脚――捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なり……」（おくの細道）

恐らく、かれの旅の一生、かれは一日として「野ざらしを心に風のしむ身かな」のこゝろを忘れ得なかつたであらう。

死を現前に見つめながら、迷はず、慌てず、生の與へるすべてのものを靜かに味ひつゝ、感謝しつゝ、侘びつゝ生きて行つたのが芭蕉であつたやうに思はれる。

かの近代藝術に見出さるゝ享樂派の詩人たちの思想と、芭蕉のそれとの間には不思議な一致點を見出すことができる。たとへばシモンズの「放浪者」の感じは、また芭蕉の羈旅邊土の行脚の感じである。たゞ一方はたとへば劇場の脚光や踊り手の黑い瞳に醉ひ、疲れた後の放浪者を思はしめ、一方はかりそめにも享樂といふ明るい春の世界を潜つたことのない靜かな秋のみの寂寞を聯想させるものではあるが。

享樂主義者の生活の基調はその刹那に highest crisis を經驗し、highest moment を見出して行くところにある。シモンズの「放浪者」が白い路から白い路へと永遠の涯なき旅をつゞけてゆくのは、その旅の刹那々々に新らしい海の微風を感ぜんがためであつた。前の一刹那と次の一刹那との間にはすでにちがつた海の微風が吹いてゐなければ

ならぬ。そこにはいつも fresh breeze がなければならぬ。「放浪者」の旅は永遠に新らしきものでなければならぬ。

芭蕉が一生を通じて旅から旅をへめぐつた心持ちのうちには、この放浪者の旅の心がかなり濃く動いてゐたにちがひない。旅の魔は一年もかれの心を一處に安住することをゆるさなかつた。二十五六歳にして箱崎あたりの旅に出て以來かれが五十一歳で旅に死ぬまでほとんどかれは旅人として一生を終つた。

近代の享樂派の詩人たちがその生活の理想として描いたところの生活をば、かれはすでに實生活の上に經驗したのであつた。それはいたましいほど寂しい經驗ではあつたが。

しかも享樂派の人々の「放浪者」についての考へと、芭蕉のそれとの間にはかなり異つた氣分が潜んでゐる。享樂派の人々ほど生活を享樂しつゝも、實は生活を廻避してゐるものはない。享樂派の人々は貪るやうに人生を樂しまうとしてゐる。しかしながらかれ等が實際に感じてゐる世界ほど空虛なものはない。享樂派の人々にとつての人生は、いつも Vision である。

「幻であつてもいゝ。それが人生の與ふるすべてゞあるならば、我々はその幻を樂しまう」といふ傷ましいあきらめの上に、たいていの享樂派の人々の生活があらはれて來る。かれ等は落ちた花瓣を銀皿に盛るものである。

芭蕉の生活は花やかではなかつた。かれはいつも秋の道を歩いてゐた。秋の人生を見つめてゐた。しかしながら、かれの人生は決して幻ではなかつた。落ちた花瓣ではなかつた。

かれは人生の無常を無常とし、虛無を虛無として靜かに受け容れつゝ、無常虛無を實感として、實在として味識しつゝ生きてゆくことができた。かれは決して無常から目をそらさなかつた。かれは決して寂寞からのがれなかつた。苦から廻避しなかつた。かれの生活、かれの藝術は靜かに寂寞と、無常とを凝視諦觀するところから生まれて來た。

「喪に居るものは悲しみをあるじとし

愁に住するものは愁をあるじとし
　徒然に住するものはつれ〴〵を主とす」
喪に、愁に、徒然に住しつゝかれはしづかに喪の衷から、愁の衷から、徒然の衷から生きて行くたゞ一つの正道を見出し得たのであつた。靜かではあるが強い生き方である。あきらめの生き方でなくして、どこまでも靜かな、自然な生き方である。思はせ振りのない生き方である。最も平凡らしく見える生き方である。
芭蕉の一生を通じて殘された印象は、寂寞のうちに最も自然に平凡に無爲に生きた人といふ感じである。その藝術の上に於いて一字不說であつたやうに、その生活の上に於いてもかれはいつも一字不說の態度を持つてゐた。あへてそのやうな態度を意識して維持してゐたといふのではない。生まれながらにしてかれは一字不說の人であつた。生まれながらにして一字不說の藝術家であり、有德の人であつたやうに思はれる。
西行にはたとへば天龍川で舟人（或ひは同乘の武士）に血が流れるほど打たれても、從容として打たれてゐたといふやうな傳說が殘つてゐる。たとへ手足を切られても、命を奪はれても佛道修行のためだから苦しいとは思はぬといふやうなことを西行が語つたといふことが傳へられてゐる。時代が時代であつたからして、いつとなしにかういふ傳說が生み出されたのかも知れないが、その歌などから見ても西行にはその生活にも、いゝ意味で芝居がかゝつたところがあつたやうに思はれる。
西行の歌にはいつも極端な二つの世界があらはれてゐる。
　「身をわけて見ぬ梢なくつくさばやよろづの山の花の盛を
　花にそむ心のいかで殘りけん捨て果てゝきと思ふ我身に
　佛には櫻の花を奉れわが後の世を人とぶらはゞ

今よりは花見ん人に傳へ置かん世をのがれつゝ山に住まんと
わきて見ん老木は花もあはれなりいま幾度か春に逢ふべき」

さかりの花と捨身無常とを結びつけたのが西行の歌である。耽美と寂滅とを一筋の線に貫いたのが西行の歌である。そこには諦め切れぬ諦めの惱みがある、どこまで行つても正覺を得られぬ凡夫の妄執がある。そこには意識せる努力がある。無理にも佛道修行といふやうな忍苦的な觀念を喚びさまして、自分を強くせねばならぬほどの滅しがたい人間的な愛慾の苦燃がある。

芭蕉にも若い日には人並の或は人並以上の功名心もあつたであらう。人を戀ふ心もあつたであらう。「或時は仕官懸命の地をうらやみ云々……」（幻住庵記）しかしながら芭蕉には西行ほどの斷ちがたい愛慾の苦燃といふものは最初からなかつたのではないかと思ふ。少くとも芭蕉は自分自らの生活を、自分自身で強ひて超凡人的にしようとしたり、強ひて苦しんで見ようとしたりしたやうな點は少しも見出すことはできない。

「かちならば杖つき坂を落馬かな」

馬から落ちて、馬子に叱られた折の凡人芭蕉の風貌がこの一句の中に生きてゐる。恐らくかれは馬子に叱られて、顏を赧らめたであらう。痛む腰をさすりながら、怒つてゐる馬子の顏を見ててれかくしに笑つたであらう。

西行と江口の君との傳說と同じやうに、かれにも傾城と一つ家に寢た秋の夜の記錄がある。しかしそこにも何の劇的な事件も起りはしなかつた。その傾城は、江口の君のやうに歌をうたふほどの曲をも持ち合せなかつた。旅の俳諧師と、世間並の傾城とが、偶然にも秋の一夜を旅の宿で泊り合はせたといふだけのことであつた。

「我々にむかひて行衞しらぬ旅路のうさあまり覺束なう悲しく侍れば見えかくれにも御跡をしたひ侍らん衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結緣せさせ玉へと泪を落す不便の事には侍れども我々は所々にてとゞまる方おほし只人の

行にまかせて行へし神明の加護かならず恙なかるべしと言捨て出づ哀さしばらくやまざりけらし

　一家に遊女もねたり萩と月」（おくの細道）

凡人と凡人との邂逅ではないか。語り合つた言葉も凡人と凡人との言葉である。それ以上の何物もない。しかもその短い言葉の底に私たちの心にこの上もなく強くしみ〴〵と響いて來る力があるのは、凡人と凡人との言葉であり、凡人と凡人との悲しみであるからではないか。

×

凡人といふ言葉と共に思ひ出すのは子供といふ言葉である。私たちの藝術が汚され、生活が傷けられるのは、私たちが凡人らしく生きようとしないためである。子供の心を失ふがゆゑである。

「一笑と云ふものは此道にすける名のほの〴〵聞えて世に知人も侍りしに去年の冬早世したりとて其兄追善を催すに

　塚も動け我泣聲は秋の風」（おくの細道）

「塚も動け」といふ言葉は、ちよつと見たゞけでは芭蕉ほどの名人の口から出る言葉としてはあまりに幼稚ではないか。しかしながらこゝにかれの句の力と眞率さと、子供らしさとがある。ラザロの死を悲しみ涙を落したキリストを聯想させるではないか。「やつがれむづかしき句をいたしたる事なし」かう言つてゐる芭蕉の言葉は直ぐにトルストイの藝術論に於ける簡素を想ひ出させる。

私は俳諧についてはまつたくの門外漢である。けれども芭蕉の俳諧ほど私の心を明るくし、快くし、淨化してくれるものはない。そこにはいつも子供の心が生きてゐる。そこにはいつも凡人の凡人らしい心がさながらに動いてゐる。人間の涙と、笑ひとが、一枚の着物をも着せられないでそのまゝに生きてゐる。

生けるものはすべて尊い。あるものはすべてそのまゝでいゝのだ。かう言つた風な心持ちは子供でなければ持つと

とはできない。

花が咲くこと、散つてゆくこと、或ひは人の涙、或ひは野邊送りすらも子供はそのまゝに尊いことゝして、或ひは笑ひの對象としてさへ受け容れるだけの自然に對する素直さを持つてゐる。

「升買て分別かはる月見かな
菊の香や奈良には古き佛たち
まづたのむ椎の木もあり夏木立
わが宿は蚊のちひさきを馳走かな
蝸牛角ふりわけよ須磨あかし
誰人か菰着ています花の春
さまざまのこと思ひ出すさくらかな
月はあれど留守のやうなり須磨の夏」

所謂文章家たちの眼から見たならば、これはまたあまりにあつけない句であるかも知れない。何の匠意も、何の苦しみもない句である。子供が自由畫を描くほどの心持ちでうたはれた句である。しかも私たちの心の觸手がのびて行けばのびてゆくほど、これ等の句の底からは光りがあふれて來る。

子供の心といふことを私は言つたが、所謂文明といふもの、複雜な社會生活といふものゝ最も傷ましい疾病は、子供の心を私たちから奪つてしまふことである。

學校に行つて見るがいゝ。そこには多くの無邪氣な子供たちは、窓の外の草からも、光りからも、小鳥からも、麥畑を吹いて來る柔かな微風からも鎖されてしまつて、社會といふ虛僞な、非人間的な枠の中へあてはまるやうな一つの

型に作り上げられてゐる。そこには教育家といふ職業的な非人間たちが鞭を持つて立つてゐる。かつて自分等の仕事について恐れをのゝくこともしないで。

學校ばかりではない。今日の社會制度はすべて私たちの心から子供の心を滅してゐる。

芭蕉の一生は私たちにいつも子供であるべきことを敎へる。

草の中に遊びほうけて歸り路を忘れてしまつた子供は芭蕉の一生ではなかつたか。かれは一生歸り路を忘れて秋の野と夕暮れの道にさ迷うてゐた子供であつた。乾坤無住の迷ひ子であつた。

しかもかれは乾坤無住の迷ひ子たることを悲しまなかつた。迷ひ子であつたかれの生活は、かれにとつてこの上もない尊い生活であつた。かれは自分からすゝんで迷ひ子の生活を追うた。

「うき我を淋しがらせよかんこ鳥」

淋しさの中にもかれは恰度駄々つ子のやうに自分ひとりで淋しさを味つて行つた。

佛五左衞門の話、紺の染付の緒をつけた草鞋を贈つた加右衞門といふ繪師の話、馬を追うて來たかさねといふ女の子の話、水鷄笛を吹いて日を暮した話、杜國と吉野に行つた折の宿の話などをたどつて見ると、かれくらゐ一生涯、子供らしい心を失はなかつた人はないやうである。かれは子供のやうによろこびをも、悲しみをも人より深く感じ、人より深く現はした。

「夢に杜國が事を云出して涕泣して覺る」(さが日記)

世間にはまだ三十にもならないうちに分別くさくなつてしまふ人もある。芭蕉は死ぬまで笑ふことも、泣くことも忘れなかつた。

かれは一生子供の心で生きてゐたがゆゑに道德家らしい眞似をしなかつたが、かれこそほんたうな無抵抗主義者で

あり、イヷンの馬鹿であつた。「腰に寸鐵を不帶、襟に一嚢を掛て」旅に出かけたかれはまた從者を引きつれて歩くやうな貴族趣味を嫌つた。

「初て赴く遠境に芭蕉が行脚にともつれたりなど古へより類なきことなり西行に登蓮宗祇に宗長あるは同伴也是兩士の魂魄にも申譯なし後代の人の聞前恥べき事也たとへ山賊夜盗に逢たりともとらるゝ物なければ怖しき事なし又のたれ死したり共世を捨たる身の何か苦しからん」（次郎兵衞物語）

どこ迄この記錄を信じて宜いものか知らないが、芭蕉はたしかにこれに似た心持ちを抱いたであらうと思はれる。

「新麥一斗箒三本油やうな酒五升といふは富貴の沙汰なり蕎麥一重小遣錢二百文忝ぞんじまいらせ候」

かれほどの大きな器を持ち、かれほどの多くの弟子を持ちながらもかれは一生イヷンの馬鹿の無欲恬淡な生活の中に終始した。

×

かれは俳諧のために一生をさゝげた。しかしながらかれは俳諧のために自分の生を失はうとは思はなかつた。かれがいかに俳諧のために熱心であつたかといふことは花屋に於ける臨終の記を讀む者は誰でも感じないではをれない事實であるが、かれにとつて俳諧は必ずしも第一義的のものではなかつた。かれにとつて第一義的のものはいつもその生であつた。風のやうに自由に、鳥のやうにほしいまゝに、自然のやうに素直に、子供のやうに赤裸々に生きてゆくことより他に、かれの生活はなかつた。

「木曾寺の或夜の徒然に支考問師今まで發句何程斗り作し給ひしや師の曰百句に足らざるべしと支考曰記憶し給へるや師の曰一句も覺へずしからば筆記し給へるや師の曰その事もなしいかで筆記し給はざるや師の曰筆記して何かせん」（芭蕉談後編）

かれにとつては生きることが第一であつた。人間らしい生き方をすることが第一であつた。かの Wanderer たちが無限の白い路をたどつて刹那々々に fresh winds を見出して歩くやうに、芭蕉は生きてゆくことによつて、生そのものの寂寞と無常とを見出すことをのみ考へてゐた。食つてゆくこと、着てゆくことそれはかれにとつては第二第三の問題であつて、かれは自分の心を生かしてゆくこと、人間として生きてゆくことの寂しさ、尊さを心ゆくまで探り、實感してゆくことをのみ考へてゐたやうに思はれる。

「名をなさんとて俳諧に心をゆだねたるにはあらず」といふ言葉は、まつたく芭蕉の俳諧に對する心持ちの一面を傳へたものであらう。かれは俳諧といふ藝術上の一つの最も簡素な形式を、かれの生活表現の一つとして藉りたまでゝあつたらう。かれにとつては句法を守ることよりは心法を守ることが第一であつた。

かれは枯れたる人間ではなかつた。かれはどこまでもなま〱しい人間であつた。かれには妻もなく、子もなかつた。しかしかれは決して世を捨てたのでもなく、世を厭つたのでもなかつた。どこまでも世の中の人間であつた。世間並の人間であつた。

「我夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散亂の氣夜陰夢又しかり」と言つてゐるが、かれが凡人の心、子供の心を失はなかつたればこそ、夢さめて「又袂をしぼる」ほどのいかにも人間らしい生涯を送ることができたのであらう。

「一微塵中に無量の佛國を現ず」

芭蕉にとつては生けるすべてのものが、無量の佛國を現じてゐたであらう。富士川のほとりの捨て子、木曾路の老僧すべてがかれにとつて有緣の相であつた。かれは强ひてそれらの機緣を斷たうとはしなかつた。かれはフランスの一哲人のやうに「人間よりも木に對してより多くの親しみを感ずる」ことがあり得た時代もあつたかも知れない。しかしながらかれは到底人間を捨つることはできなかつた。かれほど多く人間の中に生きた人はないであらう。

深川の草庵をたづぬる人たちはいつも百人を下らなかつたとつたへられてゐる。かれほど日本國中にたくさんの崇拜者を持つた人間はなかつたであらう。かれの一生は貧しき者と幼き者のみが天國に入るといふキリストの言葉を如實に證據立てたものであつた。

「傘下駄御もたせ被下御世話辱存候蚊帳鼠に喰れ申候おまさに御縫せ可被下候燒跡蚤蚊多殊之外朝寢仕候。」

「五月雨打つゞき扨々淋しく存候一寸御入來可被下候。」

「御手紙被下候昨日は知人にさそはれて四條の芝居見物にまゐり一日遊び申候又々氣も晴候而おもしろく御座候俳諧などゝはちがひ是にてははいかいもやめにして遊興斗がよく候。」

「然ば御約束之水鷄笛贈給忝珍重候此さとの人々聞馴ず女子共も集り我を藝者の樣に申をかしく候。」

「只今田舍より僧達二三人參候俄に出し可申貯無之候さぶく候故にうめんいたし可申候そうめんは澤山有之候酒二升おこし賴入候。」

「大津繪之うつし殊外見事候間一まい御賴申候。」

「北窓之風よけに致し候むしろ二まいほど被遣可被下候。」

「かけどうふ風味甚よろしく候間又々賴入候。」

「幸山娘喜右衞門殿へ娶入致候よし目出度存候よろしく賴入候以上。」

「先日之そば味ひわすれかね申候何とぞ明日賴入候以上。」

「辻占の事御尋なされ度よし隨分信心致候へばあたり可申候御引きなされべく候くしはつげにはかぎり不申候木ぐしに候へば何にてもよろしく御座候。」

「伊三郎殿庭にて的御座候由見物可致と御申越弓見物きらひに御座候間參り不申候以上。」

「久八歸りおそくあんじ申候明後日は歸り可申や殊外あんじ申候御聞可被下候。」

「久八落馬候ゆえ人無御座候間及延引長々忝存候。」

このやうな短い手紙や口狀のうちにもかれの人間らしい、あたゝかさがしみ〴〵と味はゝれる。いかにも凡人らしい凡人の生活を送つた人の心のありがたさがうかゞはれる。そこには凡人らしいユウモアもある。よろこびもある。心づかひもある。我儘もある。淋しがりもある。迷信もある。今日そこいらの長屋を歩いて見ても、このやうな凡人がすぐに見つかりさうな氣がする。

×

芭蕉が死ぬ日まで路通のことを氣にかけてゐたといふことも、いかにも芭蕉らしい心であると思ふが、晩年には一層寂寞のうちに沈潜してゆかうとする傾向が強くなつて來たにかゝはらず、かれはどうしても人間を忘れることのできない矛盾に苦しんだやうである。

このことは私たちの生活にとつても一つの大切な問題である。

まつたく私たちは一方に於いては、人と一緒にうたひたいと思ふ。人と語りたいと思ふ。しかしその半面では人を避けようとする心、たゞ一人でゐたいと冀ふ心の傾向がます〳〵強くなつて來る。

良寛上人の「世の中にまじはらぬとにはあらねども」といふ心持ちがしみ〴〵と感じられて來ることがある。恐らく晩年のたとへば幻住庵あたりに人を避けようとした芭蕉の心持ちもこれではなかつたかと思ふ。

「かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み山野に跡をかくさむとにはあらずたゞ病身人に倦て世をいとひし人に似たり。」恐らくこゝいらが芭蕉の晩年の心ではなかつたらうか。

「人來れば無用の辨あり出でゝは他の家業をさまたぐるもうし。」このやうな心持ちが、どうして私たちの明日にも來

ないといふことを言ひ切ることができよう。
　かれほど凡人らしい凡人はなかつた。かれほど子供のやうに他愛もないことに心から笑ふことのできた人もないであらう。
　かれほど素人らしい藝術家もなかつたであらう。いつまでもかれは芭蕉といふ一個の凡人であつた。市井の貧人であつた。
　それゆゑにかれは最も人間らしく泣き、笑ひ、うたつた。人間らしく人間をも受け容れた。そしてやがて人間らしく人間にも倦いた。同時に倦いた人間をも忘れることができなかつた。
　かれは最初から寂しき "Wanderer" として生まれた。そしていかにも "Wanderer" にふさはしく旅で死んだ。かれの藝術も生涯もすべて "Wanderer" のそれであつた。
　かれは私たちにその思想に於いて、その生活に於いてつねに孤獨なる放浪者であるところの藝術家が、いかに大きな藝術を生むことができるかといふ事實を語つてゐる。
　キリストは放浪者として最も大きな宗教を築き上げた。
　芭蕉は放浪者として、かつて日本が生んだ最も偉大な藝術の一つをのこして行つた。

詩を生む心

魂で書かれた詩といふ言葉を思ひ出す時に私の頭にはロバート・バアンスが描かれ、ワルト・ホイットマンが泛かんで來る。

「詩は魂の響である」と言つた詩人の言葉は眞實である。すべての藝術がさうでなければならない筈であるが、就中詩は最も端的に魂の響を傳へるものであり、魂の香そのものでなければならぬ。

それは理智以上のものでなければならぬ。況んやそれは技巧以上、思ひ付き以上のものでなければならぬ。感能以上のものでなければならぬ。

近代の詩が非常に複雜な感能、理智、想像を內容として持つてゐることは、近代詩の數頁を讀んだだけで誰でも感ずることができる。それは十七、八世紀の詩が餘りに多く哲學化せられ、概念化せられてゐたのとい丶對照をなしてゐると言へよう。

詩は到底詩人でなければ理解することができないといふ言葉は、近代の複雜な感能から生まれた詩に於いて殊に眞理であるやうに想はれる。

けれどもこれはたゞ特殊な詩に於いてばかりではない、俳句に於いても、歌に於いても同樣である。

ほんたうな俳句の味は俳人でなければ理解することはできない。ほんたうな歌の味は歌人でなければ理解することはできないといふことはたしかに一面の眞理である。

この言葉をひろげて行けば、ほんたうな小說の味は小說家でなければ味はふことはできないといふことにもなる。

しかし、このやうな眞理らしい言葉の半面には、また恐ろしい言葉の弱點を含んでゐることをも忘れてはならない。小說家でなければ理解できない小說の味、或ひは詩人でなければ理解することのできない詩の味といふことは、或る場合に於いては所謂玄人らしい味、味噌の味噌くさき味を意味してゐることを忘れてはならぬ。

玄人でなければ理解することのできぬ藝術といふことは、一面眞の藝術といふ意味にも取れるが、或る場合には、所謂、通がりの藝術を意味し、技巧上手の藝術を意味する。淸新、冒險、素朴を失つた無傷な、落ち着いた、磨きをかけられた藝術を意味することがすくなくない。

思想界、文學界の創造的な精神が疲勞して來る時代には、小手先の作品が勢力を占め、通がりの藝術が幅を利かすやうになるのは自然の勢である。こゝに至つて、所謂玄人と素人の隔りといふものが、外面的には極めて廣がつて行くやうに思はれるが、その實玄人と素人との差はたゞ小手先の技巧のみに過ぎないのである。素人は直ぐに玄人に追ひつくことができる。

素人らしい藝術、たとへばホイットマンの藝術、バーンスの藝術と素人との間の隔りは極めて近いやうであるが、實はかなり遠いのである。それは技巧や小手先の差でなくて、大きな深い魂と通俗的な淺小な魂との差であるからである。眞實の意味での天才と凡人の差であるからである。

ブールジュアの藝術、プロレタリアの藝術といふ言葉が色々に解せられてゐるやうであるが魂を失つた藝術、迫力を失つた藝術は誰の手によつて作らるゝもブールジュアの藝術である。魂によつて生み出さるゝ藝術、人間的な心熱に燃えつゝある藝術は誰の手によつて作らるゝもプロレタリアの藝術でなければならぬ。

私はすべての藝術は最もシムプルでなければならぬといふ言葉を信ずる。シムプルとは畢竟魂に迫る最も端的なものといふ意味であると解する。

何等の虚飾なく、何等の準備なく、素つ裸な人間の魂が、素つ裸な人間の魂を抱く時、最も端的な力が湧く。シムプルとは自分の魂のすべてを赤裸々にして、對手の魂を一直線に搏つことである。最も原始的な魂と魂との搏擊である。

最も人間らしい人間の魂から溢れ出る懊惱、歎美、疑惑、驚異すべてがほんたうな藝術の迫力を持つてゐる筈である。

何を祈らんかと思ひ惑ふのは職業的な藝術家の仕事である。何をうたはんか、いかにうたふべきかに惑ふのは職業的歌人の仕事である。私たちは職業的藝術を排せなければならぬ。持たぬものを持てるかのやうに見せかけようとする人たちの藝術の貧しさを氣の毒に思ふ。

×

詩人とは何であるか。最も大きなイヷンの馬鹿でなければならぬ。巧智と名聞欲と打算と傲慢と怠惰から救はれた人間でなければならぬ。詩人は最も勤勉な農夫でなければならぬ。最も正直な勞働者でなければならぬ。最も神を畏るゝ人間でなければならぬ。最も人を愛する兄弟でなければならぬ。少くとも私はこのやうな詩人を尊敬する。

農民の子ロバート・バーンス、ワルト・ホイットマン。そしてかれ等はいつも勤勉な正直な人類の仲間であつた。

かれ等の詩は決して怠惰な特權階級の人たちの玩具としては作られなかつた。かれ等の詩は巧緻な玄人らしい詩ではなかつた。小作人の歎き、無智な人々の迷信、秋の收穫祭、ペンニイ・ボート、汽罐車、汽車、戰爭、かれ等の生活を取り圍んでゐる人間の行爲現象すべてが、かれ等自身の言葉で、何の飾りもなく直ぐに詩となつて生まれて來た。そして一直線に隣人の胸を打つた。

ワオーヅウオースは一七九八年のあの有名なリリカル・バラッドの序文に詩の材料として農民生活をうたひ、詩の言

葉として、またかれ等の日常語を使用するの理由について語つてゐる。

農民の生活が最も本然的な人間性を素裸にし、農民の言葉が最もよく人間の魂の響をつたへてゐるからといふ立場から、かれの農民本位の詩が生み出されたのであつた。

私は今日の社會に於いて誰が最もよく僞りなき人間性の表現を持ち、僞りなき魂の言葉を持つてゐるかを知らない。けれども少くとも詩人はいつも、かれ自身最も無智な農民の素朴さと、敬虔さと、囚へられざる創造力とを持つてゐなければならない。

將來の詩が、プロレタリアの詩でなければならぬといふことはこの意味に於いてのみ言ひ得ると思ふ。かくして工場の中からの詩、汽罐車の中からの詩、坑底からの詩、耕作地からの詩が、やがて大理石の殿堂や、綠色のカアテンの蔭から生まれた詩を驅逐するであらう。

×

私は詩を持たぬ國民の生活の空虚さを想ふ。詩はすべての國民の魂の糧であるからである。

詩は形ではない。詩は心である。詩の形が一般化せらるゝ時、往々にして詩の心を失ふことになる。日本の歌なり、俳句なりを考へたゞけでもこのことは言へると思ふ。

西行以後幾人の歌人があつたか。芭蕉以後幾人の俳人があつたか。その多くは似而非、外道の徒であつた。芭蕉ならずしては芭蕉の藝術は生み得ない。所謂宗匠の俳諧ほど心を忘れたる詩はないであらう。恰もそれはミッションのキリスト教、寺院の佛教がキリストなり釋迦なりの心から最も遠い宗教の形に於いて餘喘を保つてゐるのと似てゐる。そこには戯作心と、匠意と、自負心のみが動いてゐる。

詩人であるといふ信念は、淸教徒の熱や信仰や正直さや勤勉さを持つてゐなければならぬ。

西行なり、芭蕉なりのあの遁世的な生活行爲が、すべての人にとつて正しいことであるか何うかは斷言できないとしても、あれほどの突きつめた心になればこそ、西行の詩が生まれ、芭蕉の詩が生まれたのであつた。芭蕉の詩と遁世的の生活とを別々にして、芭蕉の詩の存在を可能であると信ずる宗匠たちもあるやうであるが、私は芭蕉の廻避的な生活を他所にしては芭蕉の藝術の存在を信ずることはできない。

人生を廻避することが、果して正しい生き方であるか否かは別問題として、芭蕉のあの立派な藝術は、芭蕉ほどの信仰と、心熱と、眞劍さを持つた人でなければ生むことはできないといふのは自明の眞理である。

このことはたとへば宗教の場合にも言へる。キリストほどの十字架を擔はぬ人間にキリストの心はわからない筈である。そのやうな人からキリストの山上の説教が生まれやう筈はない。

生活と藝術とを引き離して考へるやうな不合理なことは誰もしないであらうが、しかしそれは理論の上だけのことであつて、實際生活に於いては人はやゝもすれば生活と藝術とを引き離すやうなことをしてゐたことが多い。たとへば芭蕉の心さへ持つてゐれば、たとへ疊の上に安臥してゐても芭蕉の句はできるといふやうな考へをしてゐる人たちがすくなくない。

このやうな謬見は、その根本に於いて生活と藝術とを二元的に考へてゐるところから生まれて來る。

藝術とは畢竟生活そのものゝ實感に過ぎない。疊の上に安臥する人に、何うして草の上に眠る人の實感があらう。歌人はゐながらにして名所を知るといふやうな言葉も或る意味では正しいかも知れぬが、藝術と生活とを二元的に考へた解釋から出發すれば、寄木細工的な匠氣たくさんな所謂玄人藝を肯定するやうなことになる。

神の子だと自負してゐる人たちが必ずしも救はれないと同樣に、藝術家だと、自負してゐる者が必ずしもほんたうの詩を生むことはできない。

立派な詩を作り上げることも大切である。しかし立派な詩を生み出す心を養ふことは更に大切である。眼に見ゆる詩の形を作り上げることよりは、眼に見えぬ詩のリズムを生む心を培ふことが一層大切である。

詩を作ることよりは、詩人たる心を哺み育つることが肝要である。

詩を作ることよりは、先づ詩人として正しく生きることが大事である。

巧みな詩を作るがために、眞實の詩を生む心の處女性を傷うてはならぬ。

詩を生む心は、キリストの心であり、佛陀の心である。詩を生む心を成長させることは自分の世界の一層深いところ、一層貴いところを見出すことである。生きることの尊さ、悲しさ、寂しさ、うれしさを實感することである。

詩を生む心は生の愛であり、人間愛であり、萬象に對する愛である。詩を生む心は嬰兒の驚異であり、處女の羞恥である。

詩を生む心は聖母マリヤの受胎を聯想せしめる。

聖母マリヤの純淨と謙虚と愛とは、詩を芽ぐむところの母胎でなければならぬ。

輕々しく傷うてならぬものは詩の母胎である。詩を生む心である。

無上の機縁

人間が人生の道伴れとして人間を持つといふことは、神によつて賦へられた無上の機縁である。

ブレークの「天と地獄の結婚」の中に（人間がなければ自然は荒漠たるものである）といふ句がある。さらにかれは（女の裸體は神の作品である）とうたつてゐる。

この心を押しひろげてゆけば、人間あるがゆゑに自然は美しく、人間あるがゆゑに人生は生きてゆく價値があり、人間そのものこそ神の傑作であるといふことになる。女の裸體が神の作品であるとゝもに、男の裸體も神の作品でなければならぬ。さらに人間の善も惡も、幸も不幸も。

神はあらゆる世界を經廻つて覓めた。けれども神がどこにも見出すことのできなかつた虚僞の樹が人間の頭腦の中にたゞ一本植ゑつけられてゐたとブレークはうたつてゐる。

虚僞そのものすらも、人間的であり、人間なればこそ、といふ立場から考ふれば、神の傑れた作品の一つではないか。

獅子の怒り、虎の眼、野羊の性惱、人間の罪惡、すべて神のものであり、神の傑作である。

ブレークにとつては神の作つたものはすべて尊く、すべて美しかつた。かれは無條件に神といふものゝすべてを受け容るゝことができた。

神の傑作である人間を、人間の心を、深く探つて行けば行くほど生きてゐることのありがたさが私たちの魂を顫かす。

ロシヤの作家の或る短篇の中に一人の醜い婢が毎日のやうに或る大學生に頼んで戀文を代筆して貰つては、自分自身を慰めてゐたといふ物語りを讀んだことがある。かの女にはほんたうな對手の男はなかつたのであつたが、かの女は空想に描かれた男の名を思ひ出すことによつて、或ひはその男に宛てた手紙を出すといふ空想的な氣分だけによつて、辛うじて自分自身を慰めてゐたのであつた。

その無筆な婢ばかりではない。それが空想であつてもいゝから、そんなことでもしてゐないでは人生はあまりに（頼りない）といふ感じを抱かせられることが、誰にも經驗せられるであらう。人は絶對の孤獨では一日も生きてをれない。

人生の究竟が何であるか。生とは？　死とは？　そのやうな問題の哲學的考察はしばらく措くとしても虛心になつて自分といふものを考へて見たら、生きてゐるといふことを考へて見たら、人生はあまりに頼りないといふ感じが迫つては來ないか。何だか自分等は摑まなければならないものを摑んでゐないといふ感じがしないだらうか。自分等は夢中になつて踊つてゐた。けれども握つてゐたと思つた對手の手は幻であつた。私たちはほんたうは手を虛くしてゐたのであつた。

誰でもいゝ、人間でさへあればそして自分と一緒に心から憤つてくれるものでさへあるならば、自分と一緒に心から惱んでくれるものでさへあるならば。

すべての人間がその對手の踊り手を探してゐるのである。超人でない限りは、人生は一人で步むにはあまりに落莫たる場所である。

ホイットマンは（一緒に）と叫んだ。人は人と一緒でなければならぬ。

殺人者ラスコルニコフはあの汚されたソニヤと一緒になることによつて救はれた。

「貧しき人々」の無能なる老事務員は、あの若いバルバラに父親らしい愛を感ずることによつて、全く新しい人生を見出した。

×

死後に生存があるか？　私たちは色々な説明を與へられるであらう。或ひは死後に生存があるかも知れない。けれども私たちはこの世界の生存だけで、もうたくさんだ。二度とこの苦痛な生存を繰り返さうとは思はない。人を思ふことの苦痛、生活を恐るゝことの苦痛、死者を泣くことの苦痛。私たちはもうこの世界だけの苦痛でたくさんだ。

永遠を通じてたゞ一度の機緣であればこそ人生は尊く、懷かしく、人生の苦惱もありがたいのではないか。死と共に私たちには永遠の破滅が與へられるであらう。永遠の眠りが。永遠の平和が。死と共に私たちの思惟も、懊惱も、悲しき追憶も無に歸するであらう。

から考へて來ると、惱むことも苦しむことも生ける者の持つ特權であつて、負擔ではない。ゴルキイの「どん底」のアンナの臨終の言葉はほんたうに苦しみを味ひつくした者でなければ語ることのできない眞實の言葉である。「でも、まだ生きてゐたい……もうすこしの間……生きてゐたい……ほんのもうすこしの間……もし次の世界に苦しみといふものがないのなら……もうすこしこの世界に生きて苦しんでゐたい。」

權勢といふもの、榮譽といふものに魂を奪はれてゐる人たちにとつては死は恐ろしいものであるにちがひない。怠惰な人、狡猾な人、人を僞る人たちにとつては死は恐るべきものであるかも知れない。否、すべての人々にとつて死は恐るべきものであるかも知れない。けれども私たちは時として死に對して「どん底」のあの老遍路ルカの傷ましい、しかし優しやかな心を持つことを忘れてはならぬ。

ルカは死の世界について言つた。「お前はそこの世界では何も苦しむこともない……何の苦しみもない！　心から信じたがいゝ！　喜んでお死に、心配しないで……死は子供を寢かせつける母のやうなものだ。」

私はミケランゼロの言葉を思ひ出す。

「魂は幸福である。時がもはや流れない世界で！」

ルカの口を通して語られた近代の苦惱者ゴルキイの言葉と、文藝復興期の苦鬪者ミケランゼロの言葉の底に、私たちは最も良く人生を鬪ひ苦しんだ人たちの人間的な溜息を聽くことができる。

最も正しく生き、最も眞實に鬪ひ、苦しんだ人にとつて死は最後の慰安であり、最も靜かな寢床である。待ち望まれたる休息である。

墓場に行かなければならぬといふことも私たちの負擔ではなく、それは生ける者のみが持ち得る特權である。そして死が與へる特權を特權として喜び持つことのできる人間になるためにミケランゼロもベートーヹンも苦しみ生きた。

殺人者ラスコルニコフとソニヤとは一緒に人間の苦惱をなやむことによつて、バルバラと老事務員とは一緒に貧者の苦を忍ぶことによつて、人生の底に微かではあるが或る光りを見た。同時にかれ等も亦死の休息が賦へる特權をはんたうに感ずることのできる人間となることができたであらう。

墓場に行く前に私たちは人と人との間に築かるゝ神の國を見出さなければならぬ。人と人との苦惱の底から生まれて來る人間のみが持つことのできる一つの世界の光りを、ありがたさを、なやましさを實感しなければならないのではあるまいか。それ以外に生きて行くといふ意味はないのではあるまいか。

×

「人二人以上あるところに神あり」と言つたキリストの言葉は、汚されたる女ソニヤと殺人者ラスコルニコフの場合

にも證明せられた。或ひは汚されたる女と殺人者との場合であつたればこそ、そこに神の世界が生まれたと言つた方が一層正しいであらう。

天使の世界であるならば善人と善人と結びつくことによつて天國が生まれるかも知れない。けれども人間の世界では虚僞と虚僞と結びつけばこそ、惡と惡と結びつけばこそ救ひが生まれるのではないか。

しかしこの言葉は決して反語でもなく、また惡を是認しようとするものでもない。

概念によつて築き上げられた善や、すべての概念によつて動かさるゝ非人格的な生活は、たとひ形式としてはそれがどのやうに立派な道德的生活であらうとも、決してそれはその人を救はないといふことを言ひたいのである。

人間は道德では救はれない。言ひ換ふれば實感としての生活を持たない人、感激に戰く生活を持たない人は救はれないといふことになる。

たとへば「自分一人が救はれるといふことは同時に全人類が救はれることである」といふやうな言葉がきはめて不用意に、無造作に語られたことがある。この言葉は語る人によつて眞理でもあり、また非眞理でもある。この言葉を語るかれ自身がこの言葉に對して眞の實感を持つか否かによつて、眞、非眞は岐れる。

キリストの山上の說敎を、文字通りに受け容れるところからトルストイの無抵抗主義が生まれてゐる。或る人にとつては山上の說敎は詩であり、譬喩であらう。けれども文字通りに、人右の頰を打たば左の頰をも向けることのできる人にとつては、譬喩でもなく詩でもない。最も惠まれた生活の實感である。生活の感激である。

人間の心、人間の至情を概念化することによつて批判するくらゐ間違つた批評はない。神の殿堂は汚されたる人間の觸手をゆるさないと同樣に、人間の魂の底は——よしどんなに卑小な人間の魂のそれであらうと——思ひ上つた人たちの觸手をゆるさない。

「心の貧しき者は幸なり」たゞこれだけの短い言葉の内容でも、ほんたうに實感するまでには幾十年の苦惱を伴はなければならないであらう。ラスコルニコフの苦惱を、ソニヤの辱めを實感した後でなければキリストの言葉はわからないと言へるであらう。

友を亡ふことによつて私たちは人間の悲しみの如何に大きいかを知つた。そこから人生の底に沈んで行つて考へさせられることを知つた。親を失ふことによつて私たちはそこにさらに大きな悲しみがあつたことを知つた。人生はますく空虛になつて來た。けれども一層深く人生そのものを實感する機緣を見出した。子を失ふことによつて、妻を失ふことによつて、人間はさらに大きな空虛と頼りなさを見出すであらう。最後の安息所として死を待ち望む心をも實感するであらう。そこから始めて「人二人あるところに神あり」といふ言葉が實感として生きて來るであらう。

釋迦を見た人は生き甲斐があつたと思つたにちがひない。キリストを見たマグダラのマリヤは人生の光りを誰よりも多く實感したであらう。法然や日蓮と時を同じくして生まれ合はせた人達は無上の機緣として自分等の生くる日を感謝したであらう。

しかしながら、自分の周圍に人間が生きてゐる間は私たちの日もまた感謝されなければならぬ。人間が生きてゐる間は人生は荒漠たるものではない。私たちが思ひ上つた心さへ捨てるなら、私たちの周圍にはいつもソニヤがあり、バルバラがあり、ラスコルニコフも生きてゐる。救ひはソニヤを見出すことによつて、バルバラを見出すことによつて、生まれるであらう。

この世界には私たちが想像してゐるより以上に多く不愉快な、傲慢な、狡猾な、卑劣な、利己的な人間もゐる。實際人生には惡魔的人間があまりに多過ぎる。けれども私たちが自分の醜い心を顧みて恥ぢないではをれないほど心の

美しい人たちもゐる。

心の美しい人たちは私にとつて釋迦であり、キリストである。私たちは自分等の生きてゐる日を感謝せずにはをれない。

心の美しい人たちを見出し得た時、私は、神の世界を見出し得た人々の幸福を想像することができる。

靜日夜

毎晩七時ころになると冬枯れの地平線の上に一直線に列んだ三つの星があらはれて來る。その星の群から右の方にも一直線に列んだ星の座がある。中央の星は赤く光つてゐる。

私はその赤い星を中心とした三つの星を見るごとに亡くなつた母を思ふ。

私は亡母に抱かれて野天の風呂に入りながら、その星を見た故鄕の秋を思ふ。三十年も前のことである。風呂の湯の中に碎けてゐた月の光りが、今もなほ私の眼底に刻みつけられてゐる。

たいていの人が、自分らの母ほどやさしい人はないといふ感じや、記憶を持つてゐるであらう。私も亡母については、私の母ほどやさしい人はなかつたといふ記憶を持つてゐる。

人間の愛を疑ふ人があるとしても、母といふものゝ愛を疑ふことはできないであらう。

子のために夜を徹して泣き、思ひ、苦しみ、祈るものも母である。かの女はたゞ子のために生まれ、子のために生き、子のために死ぬのである。キリストの愛よりも、釋迦の慈悲よりも、私は亡母の愛をありがたく思ふ。

亡母は芝居好きであつたが、私の兄が死んでからこつち、殆んど四十年間一度も芝居小屋を覗かなかつた。芝居を見れば亡くなつた子のことが思ひ出されるからであつた。

私は子を失つた母親の悲しみのいかに深く、いかに切なるものであるかを知つた。

七十幾歳で死ぬころまで、亡母(はゝ)はよく嬰兒で死んだ私の兄のことを話した。そのたんびに亡母は頼りなささうな顏をしてゐた。

「なぜ、神はこれほどまでに深い悲しみの心を人間にあたへたのであらうか？」私は亡母の顔を見るごとにかう思ふのであつた。

×

亡母を失つた悲しみは日を經るにつれて、月を經るにつれて、年を經るにつれて、一層はつきりと私の胸に意識せられて來る。

昨日私は或る友人の手紙に「二十餘年、故郷の父母と別れて都會の生活の渦に漂ひ……」といふ言葉を見出した。あまり感傷的だと笑ふ人もあるかも知れない。しかし私はその友人の手紙を見てゐる間に、自分の瞼の裏がほてつて來るのを感じた。

今夜はめづらしくもこの冬になつての初雪である。

恐らくこの大きな都會の、薄暗い部屋に、壁に面して故郷を思つてゐる若い人たちがあるであらう。故郷を思つて泣いてゐる人たちがあるであらう。私にもかつてその經驗があつた。その人たちの上に祝福あれ。

「人間の事業が何だ。」「畢生の功名が何だ。」私は中學生でもが叫びさうなことを叫びたくさへなる。

私を最も愛してくれた母。私はその母を捨てゝ都會の生活にはいつてしまつたのであつた。そして母の死に目にも逢はなかつた。不幸な子、利己的な子、私は私を呪ふ。

×

日が暮れた。

丘の上の木に暗い冬の夜が來た。

星が青くまたゝいてゐる。

三つ列んだ星が地平線の上に今夜も。
何といふ星であらう。
幾夜見ても、幾年見ても私はその名さへ知らぬ。
その星の名さへ知らず、あの星を見たまゝ老いてやがて私もこの世界から死んでゆくであらう。
まるであの星と何のかゝはりもなかつたかのやうに。

×

私は夜の道を歩いてゐた。
木がすく〳〵と暗の中に立つてゐた。
不圖私は死を思つた。
私は死を恐ろしいとは思はなかつた。
亡母が死の世界にゐるんだと考へた時。
死んでから何うして逢へるものか！
私の心のうちではかう叫ぶものがあつた。
私は死の世界では母に逢ふことはできないかも知れぬ。私はそれを信ずる。
けれども私はもう死を恐れない。
すくなくとも、母はすでに死の世界にはいつて行つたといふことを考へたゞけでも、私は死を恐れなくなることができる。
生の國と死の國の重さが、私の心の上で恰度平均してゐる。

私にはどつちの國もなつかしい。

×

三年前の雪の日であつた。
私は王子の町で下駄の鼻緒を切つてしまつた。
片足を引き摺りながら雪の中を歩いてゐると、長屋から出て來たおかみさんが麻苧をくれた。
それから後幾度も私はその長屋の前を通るが、おかみさんは雪の日はいつも大正燒を燒いてゐる。
私はおかみさんの大正燒を買つてやらうかと思ふが、いつも躊躇しては、俯向いたまゝその家の前を通り過ぎてしまふ。
これからなほ三年も五年も、おかみさんは雪のころになると大正燒を燒いてゐるであらう。
私はいつもその家の前を通るたんびに俯向いて行くであらう。

×

私はかの女を打つた。
かの女は壁に面して泣いてゐた。
いたましいほどに叩き切れたかの女の裾を私は見つめてゐた。
皸だらけのかの女の手を。
私は亡くなつたかの女の父のことを思ひ出した。かの女の母のことを。
「かの女も世界にひとりぼつちである」と私は思つた。
ひとりぼつちの男とひとりぼつちの女と。

しかも私はひとりぼつちの女を擲りつけた。
誰がかの女のひとりぼつちを慰めてやるのだ。
「暴君よ。卑怯者よ。冷血漢よ。」
私は私自身の心を呪はずにはをれなくなつた。

×

雪解の日の小ひさな流れ。
美しい雪解の底に芹の葉が輝く。
三十年前の故郷の土の香が私の胸にひゞく。
故郷の櫨林も、馬を葬つた田も！
私の胸が痛む。

×

雪が降り止んだ。
星が出た。
十數年前、關ヶ原で見たあの星が。
あの夜も米原あたりからひどい雪であつたが、關ヶ原では雪が止んでゐた。
かの女を思ふ。
もう顔も憶えてはゐない。
どこに生きてゐるのかそれも知らない。

何であの女のことを思ひ出したのであらう。
けれどもあの星を見れば、雪の夜のあの星を見れば。

×

尾張も美濃も雪であらう。
あの國境の木曾川に近い桑畑もすつかり雪に埋れてゐることであらう。
あの低い小牧山も。
あの氣の弱いA君が、若い奥さんと二人で物を考へながら雪の夜を更かしてゐることであらう。
二度、三度、同じ昔のクラスメートに騙られて銀行の金を貸し出して、人を疑ひながらも、なほ信じようとつとめては、淵から淵へと沈んで行つたA君の寂しい眼が思ひ出される。
近江にも、飛驒にも、駿河にも、今夜は雪が降つてゐるであらう。
雪が降つてゐるかぎり、そこには幾人のA君があり、幾人のA君の奥さんが胸を痛めてゐることであらう。
雪が深くつもるにつれて、夜が更けてゆくにつれて、地が冷たくなつてゆくにつれて、A君や、A君の奥さんの美しい、いたましい心臟の脈搏が、私の胸に強く響いて來るやうだ。
私は窓を明けて見た。
大きな都會はすつかり眠つてゐた。
雪ばかりが尾張までも、美濃までもつゞいたやうにひろがつてゐた。
ほんたうに、あの人の善い、人を疑ふことのできぬA君とA君の奥さんの溜息が聞えて來さうな靜かな夜だ。

×

Sの町の監獄にも雪が降つてゐるであらう。
與一はあの監獄の中で、今夜何を考へてゐるだらう。
かれが殺した養父母のことを考へてゐるだらうか。
無期懲役の囚人の蒼い顏が私の眼に泛かんで來る。
私が中學の寄宿舍に歸る時、よく與一と別れた土橋のことを思ふ。
與一もあの土橋のことを考へてはゐないか知ら？
ひよつとしたら、あの恐ろしい監獄の中で、私のことを思ひ出してはゐないか知ら？
もう午前一時だ。與一も恐らく眠つてゐるであらう。
できるだけぐつすり眠つた方がいゝ。
與一。眠れるだけ眠れ。
眠つてゐる間だけはお前も昔の自由な世界をとりかへしてゐるんだから。
すべての音といふ音が雪の底にとざされてしまつた。
靜かな雪の夜よ。どうぞ囚人の眠りを深くしてくれ。

×

夜が明けた。
雪が解けて行つた。
雪の間から枯れ草が見えて來た。
氣をつけて見ると、もうその下には小ひさな芽生えが出てゐる。

去年馬糞をやつて置いたオランダ苺の葉も頭をもたげてゐる。

何も彼もこの冬を生きのびたのだ。私の血管の中にも一年を生きのびたといふよろこびがひそかに、しかし力強く動いて來る。

草の芽も生きよ、草の葉も生きよ。生きのびよ。

生きるといふことはうれしいことだ。ありがたいことだ。

もつと美しい人たちの心を掬むためにも。

もつとにがい人間の涙を掬むためにも。

×

五十枚、百枚、二百枚……私は新年のお芽出度うを葉書に書いて行つた。

長崎のNに、大村灣のMに、大野原のS大尉に、尾張のAに、倶知安のNに。

そして心からその人たちと、その人の家族たちの幸福を祈つた。

私の心は幸福に充たされた。除夜の鐘を聽いてゐる時、新しい年の太陽がすでに私の心に照つてゐた。

しかし、私がたゞ一枚の最後の葉書を書かうとした時、私の心は暗くされた。今までのすべてのよろこびと、光りが失はれてしまつた。

私は雪の中のかの女とその夫とを思つた。

かの女の冷たい眼を思つた。

私はもう四年同じ年賀の葉書を書いた。

しかしかの女からも、その夫からも一枚の年賀狀さへ來ない。

私は新しい年が來るたんびに人間の憎みと冷たさを思ふやうになつた。
私は五度目の年賀狀を書いた。
かの女と、かの女の夫は恐らく私の年賀狀をあの雪に埋れた林檎畑の道で讀むであらう。そしてあの雪の中に捨てることであらう。
あの北の國の雪の中に捨てられるために、私は今五度目の年賀狀を書いてゐる。

雜木林の中

ゴルキイの「夜の宿」を讀んだ午後。靜かすぎるほど靜かな秋の日である。田端の丘を越えて荒川沿ひの工場の煙が一直線に水のやうな空にゆれるともなくゆれてゐる。柔かな日の光りが一つ一つの草の葉の上をながれて行く。

しづかに土の憂鬱を抱擁してゐる森の上を渡り鳥が飛んで行く。

私は芭蕉の句を想ふ。「西東あはれさおなじ秋のかぜ」

さらにワルト・ホイットマンの詩を「東も西もわたしのものである。南も北もわたしのものである。」

草はわづかに枯れはじめた。土はわづかに枯れはじめた、雲はわづかにをのゝきはじめた。

そこには近づいて來る恐ろしい寂しい孤獨な多の跫音が土の底にひゞいてゐる。

土を踏んでゐるすべての人間の胸は或る寂しさにわなゝきはじめてゐる。

人間と、創造られたるすべての物が同じやうに一つの寂寞のなかになごみはじめてゐる。

草の上に仰臥して、しづかな秋の空を見上ぐれば「いのちあればこそ！」といふ生者のよろこびとさびしさとが胸を疼かせる。

「夜の宿」の最後の場面は「……うたへ……俺がすきな唄をよ。俺はうたふぞ、泣くぞ。」と叫んでゐる。

草に寢たまゝでぢつと天を見つめてゐると風一つ吹かない秋の空からあのどん底のなかで聞いた絶望的な唄が響いて來るやうに思はれる。犬のやうに首をくゝつて死んだ俳優のすゝり泣きが。

死にかゝつてゐるアンナの咳も聞えて來る。老遍路ルカのしやがれ聲も聞えてゐる。

「だけどあたしはまだ……もすこし生きて……ほんの、もすこし……あの世に苦痛といふものがないのなら……この世で、最後にもすこし苦しんで行きませう……」

木も、草も、黒い土を踏んでゐる人間も、みんなアンナと同じ言葉を抱いてゐる。かれ等は苦しんでゐる。すべてのものは疲れ切つてゐる。日の光りまでがものうくゆれてゐる。

チエーホフの短篇のなかに一本の木が「なぜ、神さまあなたはわたくしを生きてゐなけばならぬやうに束縛なさるのですか？」と叫んでゐるといふ意味の言葉があつたことを記憶してゐる。

私も「夜の宿」のナステイヤと共にテーブルを擊つて「……ほんたうに何故だらう……何故生きてるんだらう……」と考へないではをれないことがある。

同時に生きて、しづかに秋の土を踏んでゐることを涙なしに感謝することはできぬやうな氣になることもある。涙あり、苦あり、懊き日の光りあればこそ生きてゐることはうれしい。

かつてあれほど武藏野を愛した獨歩も死んでしまつた。しかし私は今こゝに生きてゐる。

武藏野の夕暮の道を歩いてゐる。私が土を踏めば、そこにかすかな秋の土の音がする。かすかな落葉の音がする。疲れたる地の溜息が聞える。

×

「千のよろこびよりはたゞ一つの悲しみがなつかしい」と言つたのは、ミケランゼロであつた。人千人を殺さば往生を遂ぐべしといつたのは親鸞であつた。

苦からのすくひ、悲しみからのすくひ、悔いからのすくひ、暗からのすくひほど、端的な實感的な力强い生の意識

は他にあり得ない。しかし苦からの救ひは、苦からの離脱ではない。苦からさらに深く苦に徹することである。涙からさらに涙に徹することである。救ひは苦のなかに一層の苦の深さを摑むことであり、涙の底に一層の涙のにがさを味ふことでなければならぬ。

善人すら往生す、ましていはんや惡人をやといふ言葉のうちにはこの心持ちが如實に語られてゐる。

惡人なればこそ生きてゐる一日の尊さも、ありがたさも、さらに生きてゐることのかたじけなさも深く意識せらるるにちがひない。

「罪と罰」のラスコルニコフとソニヤが、たゞの大學生であり、たゞの處女であつた間は二人の間に救ひは生まれなかつた。

ラスコルニコフが恐ろしい殺人者の苦になやまされ、ソニヤが恥づべき女となされた後に二人の心のうへに神の世界の光りが射して來たのであつた。すべての人間の世界から捨てられた二人の罪人の上に神の國が生まれて來たのであつた。

神の國は光明の世界ではない。神の國は苦の世界である。暗の世界である。しかも苦を苦として、暗を暗として、さながらに受け容るゝ時救ひが生まれる。涙は救ひである。

獻欲は救ひである。涙からの救ひは獻欲である。微笑ではない。悲しめる者はさらに大きな悲しみをあたへられる。そこに救ひがある。

罪を悔ゆる者の涙は眞珠よりも尊い。悲しみを抱ける者の涙はキリストの香油よりも尊くおもはれる。

涙は神の國に入る鍵でなければならぬ。

私たちは自分の涙を人に見せてはならぬ。自分の涙を太陽に見せてはならぬ。

キリストは「汝祈るときはたゞ一人にて祈れ」と言つた。私たちはたゞ一人で悲しみを抱いてゐなければならぬ。私たちは暗のなかにたゞ一人起きて祈らなければならぬ。祈りは魂の底から人間苦の涙を掬むことである。

妻の心に潜む涙を感ずればこそ私たちは妻を愛する。夫の心に潜む悲しみを知ればこそ私たちは夫を愛する。

隱された涙はソニヤとラスコルニコフとを結びつけた。

人間すべてが隱されたる涙を持つてゐる。隱されたる涙をほんたうに感ずることのできる人は大きな宗教家であり、藝術家である。

思ふべき悲しみを持たぬ日ほど空虚な日はない。

×

日暮ころ、武藏野を歩いてゐて、私はよくから思ふ。「私たちの世界に黄昏だけがあつたら！」と。

黄昏の世界ほど尊い世界はない。私はすぐにミレエの繪の靜寂を思ふ。哀傷を想ふ。

一本一本の樹が薄暗のなかに疲れた影を投げてゐる。そこでは高いいかめしい煉瓦塀も、小作人の草葺屋根も一様に沈んで行く薄暗のなかにつゝまれてゐる。

空も、木も、草も、人間も疲れきつた呼吸をかすかに暗のなかに吐いてゐる。

白い道がほのかに暗の底に走つてゐる。後から後からと歩いて行く人々が、みんな默りこんでゐる。みんな申し合はせたやうに俯向きがちに歩いてゐる。

胸に手を結んでほの白い道を歩いてゐる人たちは、その刹那こそほんたうに人生を想ふであらう。悠久を想ふであらう。

たとへ、人生を想ひ、悠久を思ふだけの哲學や、宗教的な知識や言葉は持たないとしても、かれ等はしづかに、自

分の魂の吐息を聴いてゐるにちがひない。
私はよくそのやうな時、馬をいたはりながら歸つて行く馬子を見ることがある。日中かれは重い荷をつけて、馬をひつぱたいてゐたのであつたが。
黃昏の野では、鞭打つた男も、鞭打たれた馬も、相寄りつゝ、白い道を歩いてゐる。啞默つたまゝ。鞭打つた男の眼にも涙がある。鞭打たれたる馬の眼にも涙がある。
巢をもとめてゐる小鳥が、ばさ〳〵と木立の間に音をさせてゐるのを聽けば殊に黃昏は尊い。
空も木も、小鳥も、馬も、人間もひたすらに黃昏の靜寂の前にをのゝいてゐる。
そこには馬と人間との憎惡もなく、人と人との戰ひもない。
すべての生物が一樣に生くることの苦痛、生くることの不可思議、生くることのわびしさに俯向いてゐる。

×

道に逢ふ人間がすべて尊く思はるゝのも黃昏である。
大きな麻の袋をかついで默つて行く老人は、私の胸にレ・ミゼラブルの主人公を想はせる。
木の下に鍬を摑んで立つてゐた男が私に聖ヨハネを想はせたのも黃昏ころであつた。
嬰兒を抱いた若い母が私にマドンナを想はせたのも黃昏の時であつた。
この世界に黃昏のみがあつたらすべての人間がマドンナであり、ヨハネであるかも知れない。
人間の世界に嬰兒の微笑が失はれない間は、
乙女の瞳の美しさが滅えない間は、
嬰兒を抱く若い母の涙が輝いてゐる間は、

千人のうち、或ひは萬人のうちたゞ一人でも心のやさしい人を見出すことが出來る間は私は生きてゐたい。

×

九十九人の心の邪な人々のために人生をくだらなく思つてはならぬ。
たゞ一人の心の美しい人を見出すまでは絶望してはならぬ。
心の美しい人たちを見出し得た自分はほんたうに幸福であると思ふ。
心の美しい人たちが生きてゐる間は私も生きてゐたい。

日の暮るゝころ

日が暮れかゝつて來た。
何といふ小鳥であらう。まるはだかの木に今日も鳴いてゐる。單調な聲で。
私はあの小鳥の聲を四度聽き、五度聽いた。いつも日暮れがたに。
消えかゝつた雪の道に立つて私は小鳥の聲を聽いてゐる。
小鳥と私。そこにはすでに不可思議な機緣が生まれてゐるのではないか。
小鳥と私。何のかゝはりもないとどうして斷言することができよう。
たくたくと小鳥は薄暗の中に鳴く。恰度木と木を叩くやうな單調な聲で。
一つ一つ寂しい小鳥の聲が私の胸を叩く。
小鳥と私。どうして何の關係もないと言へよう。
私は死ぬかも知れない。小鳥はどこかに飛んで行つてしまふかも知れない。それでも小鳥と私と何のかゝはりもないとどうして言へよう。

×

雪はまだ消えがてにのこつてゐる。
私が立つてゐるすぐ下の枯れ草の中からすでに小ひさな草の芽が頭を擡げてゐる。
私はそうつと草の芽を撫でる。

柔かな草の芽の感觸が私の指頭に媚びる。私の指が、私の心臟が、擽られたかのやうな快さに笑ふ。
小ひさな、小ひさな、可笑しいほど小ひさな草の芽である。
こんなに小ひさくても生きるために頭を擡げてゐるのかと思ふと笑ひたいやうな、涙ぐましいやうな氣にもなる。
草の芽と私。何のかゝはりもないと、どうして言ひ得よう。
私はやがて死ぬであらう。草の芽は枯れるであらう。
けれども、どうして、私とたゞ一本の草の芽の間に何のかゝはりもないと言ふことができよう。

×

窓の硝子を傳うて流るゝたゞ一線の涓滴がある。
私はぢいつと硝子戸を滑る一粒の雨の跡を見つめてゐる。
私の心は暗くせられ、寂しくせられる。
たゞ一滴の雨と、私の心と。
涓滴は消ゆる。私は死ぬ。
けれども涓滴と私と、何のかゝはりもないと誰が言へよう。

×

或る日。時。
或る街で、或る女の美しい微笑を見た。黒い瞳を見た。
私は場所をも、女をも、やがてその偶然な出來事をすら忘れてしまふであらう。
しかし、たゞそれだけでたくさんではないか。

それ以上の幸福がどこにあらう。

私は妻を叱つた。

×

妻は四疊半の部屋の机に俯伏せになつて泣いた。
私は六疊の部屋の壁に凭りかゝつて眼をつむつた。
柱時計が冷たくおごそかに時を刻んで行つた。
二人の孤獨者の時を。

×

私は母を亡ふ悲しみのいかに苦しいかを知つた。
私は母といふ字を書くことすら苦しくなつた。
もし誰れ彼れを亡つたら、……。
私は最もながく生きのびん人の悲しみを想ふ。

×

汽車の音が遠く聞える。
亡母は眞夜中に眼をさまして、よく東京にゐる私のことを思ふと語つてゐた。
午前二時である。三時である。
「母はまだ故郷に生きてゐるんだ。今夜も私のことを思つてゐるにちがひない。」
私は自分で强ひて、自分の心にかう信じさせようとする。

私は自分の愚を笑ふ。涙！　涙！
何といふ愚かな自己僞瞞！

×

「次の世界では別れた子に逢ふことができるでせうか？」子を亡なつたM氏の奥さんはかう言つて私にたづねた。
「次の世界ではあの子に逢へるか知ら？」私の一人の姉もかう言つて涙ぐんだ眼で私を見たことがあつた。
「次の世界では母に逢へるか知ら？」私自身、今ではこんなことを考へる。
「どうして逢へるものか！」私はかう私自分自身に答へる。
それでもまた翌日は「次の世界では……」
と自分自身にたづねて見る。
そして同じやうに失望する。

×

私の庭の木に小鳥が啼いてゐる。
何といふ尊い信頼であらう。
私の膝に凭れて子供は眠る。
何といふ尊い信頼であらう。
旅人は私の屋根の下に眠る。
雨は音もなく地を打つ。
草の芽は靜かに柔かな手をひろげる。

何といふ尊い信頼であらう。

×

もしこの世界から
母の膝に眠る嬰兒と
仔犬と
小鳥と
幼稚園の子供たちが
失はれたとしたら!

×

私は郊外のさびしい通りを歩いてゐた。
屋臺店をかついだ老人が私の前を歩いてゐた。
老人は冬枯れの草の上に荷を卸した。
かれは太鼓も叩かない。喇叭も吹かない。チャルメラも持たない。
冬枯れのかなり廣い草原の中にかれは午後の日を浴びてつくねんと立つてゐた。
かれは屋臺店の中から何か取り出して賣らなければならぬといふことさへ忘れてゐるやうに思はれた。
そこいらには家もなかつた。子供たちの影も見えなかつた。
それでもかれは荷を卸したまゝ呼び聲一つ立てるんでなく草の中につくねんとしてゐた。「旦那」とかれは私に聲をかけた。「寒いぢやありませんか。」

私の心は明るくされた。私たちはその刹那まで未知の人であつた。かれの一言によつて、私たちの魂は新しい世界を見出した。(相知ることはやがて相憎むことの始めである)と言つた人もある。

しかし永劫を通じて未知であつた人と人とがたゞ一つの言葉によつて刹那に相知るといふことは不思議なことではないか。

「これで俵一圓六十錢の炭ですと四日しか保ちませんぜ。それが二圓十錢の炭ですと七日は大丈夫です」老人はかんかんと炭を叩いて見せた。私は微笑みながらうなづいて見せた。

老人は火に燒けた黒い鐵板の上に油を塗つた。壺の中からうどん粉を練つたやうなものを板の上に掬み出した。豆だの、干海老だのを手際よくその上に振りかけた。

色々な形の物が鐵板の上で燒かれた。

草の中にはたれひとり來なかつた。

それでも老人は五つ六つと燒いて行つた。

「いつ老人の上に幸福が向いて來るか知ら?」老人はきよとんとした眼つきで草原を見つめてゐた。

日が暮れかゝつて來た。

二三人の子供たちが老人を取り卷いてゐた。

しかしそれは一厘の金も持たない子供たちばかりであつた。

老人は喇叭も吹かず、太鼓も叩かないで、ぢいつと子供たちの寒さうな顏を見つめてゐた。

「誰か買ひに來てくれゝばいゝがなあ。」私はこの新らしい友人のために心からから祈つて暮れかゝつた草の上を見た。

雪解の日

頭がいゝといふことは藝術家にとつて非常な强みであるにちがひない。
レオナルド・ダ ギンチを想ひ出す。
けれどもまた、人間的な苦惱を苦しみ貫いたいかにも人間らしい人間であるといふことも藝術家にとつて、非常な强みである。
ドストイエフスキイを想ふ。
あまりに馬鹿げたほど正直に理想を抱くことができるといふこともまた、藝術家にとつて非常な强みである。
トルストイを想ふ。
頭のいゝといふことは羨ましいことであるが、それは天才でなければ持つことのできぬ希望である。
頭のいゝ天才のみが藝術を生むことができるといふのなら、天才を惠まれなかつた人間からは藝術は生み出されないことになる。
しかし私はさうは信じたくない。
ほんたうに人間の苦しみをいつも正面して苦しむことのできる人からは、必ずいゝ藝術が生まれる筈だと思ふ。
生活の英雄的忍苦者は必ず立派な藝術を生むことができると思ふ。
また馬鹿氣切つた正直な理想家も立派な藝術を生むことができる筈だと思ふ。
世界の天才ばかりが藝術を私する權利はない筈だ。

世界には、無數の凡人がある。凡人が凡人の代言者たる時、世界の凡人は自分等のためのほんたうな藝術を見出すのである。

「罪と罰」、「カラマゾフ兄弟」、「貧しき人々」……みんな凡人が作つた凡人のための代言ではないか。

世界にはまたいつの時代にも無數のドン・キホーテがゐる。

トルストイは最も大きなドン・キホーテの一人であつた。そこからかれの「イヷンの馬鹿」が生まれたのであつた。

藝術家にとつては小ひさく纒まりをつけるといふことが一番危險である。

間が抜けた藝術、大まかな藝術、荒削りの藝術、摑まへどころのない藝術……かう言つた感じの藝術は天才でないところの凡人の間から生まれなければならぬ。

×

テーマを取り扱つた作品がかなり多く見うけられる。

面白いテーマを摑まへたとしても、またテーマの取り扱ひ方が巧いだの、解釋の仕方が巧いだのといふことは、決して第一義的な藝術上の仕事ではない。

イブセンがこんなテーマを取り扱つたとか、ストリンドベルクがあんなテーマを取り扱つたとかいふことは末の末の問題である。

イブセンの作品を讀んでゐて私たちが一番動かされるのは、テーマが何うのかうのといふことではない。その作品の底を流れてゐる無氣味なほどの或る物である。最も現實的な生活の底を貫いてゐる神祕の影の動めきである。神祕そのものである。人生の深みそのものである、人生の魔の淵である。

最も現實的なテーマを取り扱つたと見られるであらうかれの社會劇の底に、私たちはいつも無氣味な人生の魔の淵

を現わせられる。最も無氣味な神秘の世界を暗示せられる。そこにイプセンの作の深さ、强さがあり、魅惑があるのではないか。

頭のいゝだけでは藝術は生み出されない。

頭のいゝといふことの半面には、無限に對する直感、神秘に對する觸覺がなければならぬ。

最も頭のいゝ藝術家を想はせるレオナルド・ダ・ヸンチのヂオコンダの唇の微笑に泛動してゐる神秘の觸覺を見落してはならぬ。

「海の夫人」、「小ひさきアイヨルフ」、「ブランド」そこに永遠の象徴があり、神秘があればこそ、これ等の作品は私、たちに對して永遠の蠱惑を持つてゐる。

永遠に對してあこがれを持つ人、神秘に對して驚きを感ずる人でなければ、ほんたうな藝術を生むことはできない。

私たちが求めてゐる藝術は、頭や手からは生まれない。たゞその人の魂のみから生まれる。その人の呻き苦しみのなかゝらのみ生まれる。

×

冬にさへなれば私は半分は病氣に苦しんでゐる。冬が來たといふことは私にとつては恐ろしい脅威である。

この冬に對する恐れといふやうなものは、とても健康な人たちの想像することもできないことであらうと思ふ。

人に自分とまるでちがつた境遇にゐる人たちに對して、同情を持つことができると言ひ、また自分でもさう信じてゐるやうであるが、私自身の經驗から考へて見ると、人が果してどれだけ人に對して同情を抱くことができるかといふことは疑問である。

到底人間は孤獨であるといふ感じが痛切に喰ひ込んで來る。

どのやうな親しい友人も、その友人の死を何うすることもできない。どのやうに愛し合つた戀人も、その戀人の死を何うすることもできない。

私は一人の隻脚の青年を知つてゐる。恐らくその青年は今日も小田原附近の海岸を松葉杖をついて歩いてゐるであらう。その青年からは時折手紙を貰ふこともある。私はその青年の不具を氣の毒であるとは思ふが、また自分では同情を持つてゐるつもりではあるが、實際の青年の身にとつては私の同情といふものは通りいつぺんのものであるにちがひない。隻脚を失つた人でなければその青年のほんたうな苦惱や、健康者に對する反抗や、いたましい諦めはとても感ずることはできない。

かう考へて來ると人を愛するとか、人に對して同情を持つとかいふやうな立派な言葉を口にすることは恥づべきことでなければならぬ。

自分等こそ貧しい人たちの眞實の同情者であると信じ切つてゐる人の同情にも、このやうな同情がありはしないか。

私の母は七十四歳で亡くなつた。

母の死を悼んでくれた人たちが、たいていは「歳に不足はありませんから」と言つて慰めてくれた。また私自身もかつて友人の母の死に對して同じやうな慰めの言葉を述べたことがあつた。しかし、實際自分の母を失つた時は、私はまだ私の母は歳に不足があると思はずにはをれなかつた。私は人々の慰めの言葉によつて慰められるところはなかつた。

自分の子を失つた人でなければ、ほんたうに人の子の死の悲しみを分ち持つことはできない筈である。

自分自身が實際の苦痛や悲しみの立ち場に置かれて見ると始めて、想像から造り上げられた同情といふものゝ力の弱いこと、腹立たしいことに氣付かずにはをれぬ。

自分自身を正しいとのみ思つてゐることのできる人があれば、その人は禍である。

×

誰しも自分の苦痛なり、悲しみなりを人に打ち明けたいにきまつてゐるが、大抵の場合、人に打ち明くれば打ち明くるほど自分の苦痛や悲しみは輪を大きくして行くだけであつて、救ひは生まれて來ない。結句、救ひは自分自身のうちにある。

戀人からの手紙を見せびらかして歩く男がある。戀を玩具にしてゐる男である。自分の戀を平氣で語つてゐる男がある。輕蔑したくなる。

苦痛も、悲しみも、戀も生命がけであるべき筈だ。

善い夢を人に語るなといふ傳說がある。苦痛も、悲しみも人に語つてはならぬ。ぢつと耐へて行くところから、力が湧いて來るやうに思ふ。

友達を訪ねて行つて、自分の苦痛なり、悲しみなりを訴へて歸る道すがらの空虛な感じはいやといふほど、誰れでもが味つた經驗であるにちがひない。

生きるのも、苦しむのも、死ぬるのも、人に迷惑をかけないで、自分一人で耐へて行きたい。それが男らしいやりかただと思ふ。寂しい生き方ではある。しかし男らしい生き方だと思ふ。

×

キリストの時代から巷に立つて角笛を吹く人はたくさんあつたやうだが、今日もなほ多いやうである。

キリストは、人に斷食した顏を見せてはならぬと敎へた。

斷食しないでも斷食したやうな顏をする人が多い。

悲しんだ顔、苦しんだ顔を人に見せてはならぬ。涙を人に見せてはならぬ。感情いつぺんで藝術家になれるやうな考へを持つた人がゐる。やさしい心一つで作家になれるやうな氣になつてゐる人がゐる。

偉大な作家はいつも力强い男性的な或る物を持つてゐる。

偉大な作家は最も殘忍な解剖批判のメスを持つてゐる。

ミケランゼロ、トルストイ、イブセン……あの人たちのあの落ち窪んだ眼の底の無氣味な光りを忘れてはならぬ。男性的な勇氣、どこまでもたゞ一人で鬪つて行くだけの底力を持たないではほんたうな藝術家にはなれない。

×

今日ほど無技巧、沒技巧の藝術の尊さを强く感ずる時代はない。

今日最も必要な藝術の要素は生新な力である。原始人の憧憬である。處女的な淸純である。凡人的な簡素である。半可通な俗氣でもなく、眞實のねばり强さである。素朴さである。

今日の藝術の第一問題は辭句や、表現の巧みさでなく、端的な魂の力である。內部から爆發して來るところの作家の魂の呻き聲である。

稚重、鈍强な原始人の風格を具へた藝術が欲しい。

沈默の藝術が欲しい。

×

もし神があるとするならばから祈りたい。

いつまでも人を疑ふことを知らぬ人間として生きんことを。

いつまでも自分は自分であることを。
いつまでも自分は獨りで強く生きんことを。
いつまでも凡人の惱みと、悔と、恥と、勤勉とを忘れないことを。
いつまでも平凡人として平凡人らしい藝術を作ることを。

×

雪が白く黄昏の雜林の間から見える。屋根の上にも。弧を描いた坂道にも。
不圖色々な人々のことを想ふ。
故鄕の父にも逢ひたい。
昨日歸つた備後の義兄。
岡山の在から妻子を殘して、本所あたりの工場に働きに出て來た眞面目なNといふ人。
雪の中に自殺した弟の死骸が、春の雪解の日に發見せられたと語つてゐた不運さうな顏の蒼いH氏。
峰山町でアトリエの中に雪を描いてゐるであらうM氏。
いつの間にか、手紙さへ絕え〴〵になるのだが、思ひ出に映つて來る刹那の人々は却つて手紙以上のなつかしさを持つてゐる。
生きることは寂しくもあるが、寂しさの中に懷しさが潛んでゐる。

×

雪が解けてしまつた。
葉が輝きはじめた。銀のやうに、水のやうに。寶石のやうに。

枯れ草の中から靑い色がよみがへつて來た。
太陽の光りがしづかに土の上に、靑い煙に、或ひは建てかけられた郊外の家に、なごみはじめて來た。
見も知らぬ女が、まだ板圍ひもとれぬ家の窓から空を眺めてゐる。
秩父の山も靑く煙つて來た。
家のまはりを走つて行く子供たちの素足の下には、靑い草が一夜のうちに匂ひはじめた。
甘酒賣りの爺さんが、今朝から欅の下に古馴染の顏を見せるやうになつた。
田圃を橫切つて行く馬車の轍が、きらきらと靑い草の中に光りはじめた。
何も彼もが春に生きて來た。
子供も、風も、光りも、馬車もみんな私の心のうちによみがへつて來た。
私は小ひさな流れに沿うて立つた。
猫柳の花が柔かな外套を脫ぎかけた。
あわたゞしい生活のために忘れられてゐた三十年前の子供時代が、私の記憶によみがへつて來た。
三十年前の故鄕の風が吹く。
三十年前の母に買つて貰つた花籠が私の頭によみがへつて來た。
「三十年！」私は獨語ちた。
病み上りの靑い手。
故鄕の父を想ふ。
亡くなつた母を想ふ。

草の光

いつまでも私の心をして子供の心であらせたい。

若い草の葉はやはらかに太陽の光りを抱擁してゐる。

老いたる草の葉はかたくなに太陽の光りを反撥してゐる。

若い草の葉を見ると、私は若い草の柔順さを羨む。

子供を見ると、私はあの澄んだ黒い眼の前にほゝ笑みたくなる。尊くさへ思ふこともある。

老いたる草の葉を見ると私は自分の心の老いて行くことを悲しむ。年々に自分の心のかたくなになつて行くことを悲しむ。

言葉は魂の響であると言つた詩人がある。

子供の聲は澄みちぎつてゐる。子供の魂は澄みちぎつてゐるのであらう。

年寄るにつれて人間の聲はかすれてゆく。年寄るごとに人間の魂は傷つけられてゆくのであらう。

×

子供はいつもうたふ。ありつたけの聲をしぼつて。

今朝は大雪であつた。

私の家の隣りの廣い草の原も、今日はすつかり深い雪につゝまれてしまつた。

通りかゝりの小學校の子供の一人が、草ッ原の雪を見て。

「あゝ見事ッ！」とませた口の利き方をした。
第二の子供も、第三の子供も同じやうに。
「あゝ見事ッ！」と叫んだ。
そして次の刹那には、子供たちはコーラスを作つて、「あゝ見事ッ、見事ッ！」とうたひ出した。きはめて單調な歌の節をつけて。
子供たちの姿が木立の蔭に隱れてしまつても、まだ「あゝ見事ッ、見事ッ」といふコーラスの聲は雪空にひゞいてゐた。
私は思つた。
人間は幾つくらゐから、うたはなくなるのだらう。
人間はなぜ、大人になるとうたはなくなるのだらう。
人間が大きな聲でうたはなくなるころから虛僞だの、僞善だの、僞藝術だのが生まれて來るのではないだらうか。
世界中の大人が、申し合はせて、今日から子供と同じやうに、雪を見ても、雨を見ても、大きな聲でうたふやうになつたら、私たちの世界がもつと明るく、もつと住み心地よく、もつと正直に、もつと親切になるのではないだらうか。
世界中の人がかつてはみんな可憐な卽興詩人であり、卽興唱歌手であつた。
歌もうたはないで、人と人とが憎み合つたまゝ死んで行かねばならぬといふことは、たまらなく悲しいことである。

×

たれも人のゐない寂しいところに行つて、思ふ存分大きな聲でうたつて見たい日がある。

なぜか知らぬが。
たれも人のゐないところで、思ふ存分自分のからだを投げ出して、土の上にころげまはつて見たい日がある。
なぜか知らぬが。

×

このごろは新聞を見てゐても、自殺者の心持ちが幾分わかつて來たやうな氣がする。
その人たちに對して、ほんたうに氣の毒だと思ふこともできるやうになつたと思ふ。

×

夜、町を歩いてゐて、不圖空を仰ぎ見て、久しいこと空を見なかつたことに氣付くことがある。「こんなに美しい星があるのに、なぜ夜の空を忘れてゐたらう？」と思ふことがある。
そんな時は、自分の荒んでゆく心を呪はしく思ふこともあるが、あまり地上の悲しみが多いために、いつも俯向きがちに町を歩いてゐる自分の魂をあはれと思ふ。
空を仰ぐほどのゆとりも持たなくなつた自分自身の生活をいたましくも思ふ。

×

印度の傳說のうちに、神が人間を拜んでゐたといふことがあるさうだが、宗教家も人間を拜まなければならぬ。學者も人間を拜まなければならぬ。
宗教家が「俺は宗教家である」と考へた時、そこに非人間的なパリサイやサドカイの徒が生まれる。

×

說教壇の上に立つてゐて、說教をすることを恥ぢる宗教家は尊敬したくなる。

立派な藝術を生みながら、なほ自分の藝術を恥ぢる藝術家は尊敬したくなる。

私は透谷といふ人の物をまだ幾らも讀んではゐない。けれども透谷といふ人は、たいていの明治時代の作家よりは、私になつかしく思はれる。

立派な藝術家でさへあるならば、たとへ一篇の詩をも作らないとしても、かれがこの世界にかつて生存したといふ事實だけで、人生に何等かのさゝげ物を齎してゐるのではないかと思ふ。

キリストはたとへ説教をしなかつたとしても、或ひはたとへ一人の弟子をも持たなかつたとしても、一生ナザレの大工として平凡な生活を送つたとしても、かれがかつてユダヤに生きてゐたといふ事實だけで、人生に光りを與へることができたのではなかつたらうか。

×

もし、空に、無數の星の群のなかにたゞ一つの黒い星があらはれたとしたら、どんなに夜の空の美がそこなはれるであらう。

もし、私たちの生涯に、たゞ一人の人が絶えず私たちに對して憎みのメスを研いでゐるとしたら、私たちの生涯はどんなに寂しいことであらう。

空には一つも黒い星はない。

けれども人間の世界にはあまりに多くの黒い星がある。

キリストにすらユダがあつた。

人間は永劫に憎みから救はれることはできないものだらうか。

×

愛する者の前に跪いた刹那に、もし自分を憎む敵の眼を思ひ出さなければならぬとしたら、私たちの愛はほんたうに脆いものである。

たとへ千人の愛する者を持つたとしても、たゞ一人の憎む者を持つてゐる間は、私たちの愛は脅かされてゐる。

神の祭壇に獻物をする前に、その兄弟とやはらげと言つたキリストの言葉が、はじめてこのごろ私の胸にはつきりと響いて來たやうな氣がする。

「お互に寛容であれ。お互に人の罪をゆるし合はうではないか。一人でも憎みのメスを懷に隱してゐる者がある間は、人間の世界は救はれない。」

人間みんなが、こんな心持ちから、一緒に抱き合つて踊るやうになる日がいつかは來るにちがひない。

もし、そんな日が來ないのなら、人類はこの刹那に滅びてしまつても惜しくはない。

キリストも、釋迦も、人類のために、人類全體の踊りの音頭を取らうとしたのであつた。

まだ、しかし人類は踊ることを躊躇してゐる。なぜ私たちは踊らないのだらう。

誰でもいゝ、尙一度キリストや釋迦のやうに眞つ先に立つて大きな聲で音頭をとつてくれゝば。

それでも或ひは臆病な人類はなか〳〵踊らないかも知れない。

けれど、音頭取りが後から後からと出て來て、飽きさへしなければきつといつかは人類全體が踊り出すにちがひない。

五月の感想

「お前は神を信ずるか」と私にたづねた人があつた。
或る時は神を信ずる。或る時は神を信ずることができない。とから答へるより他にない。
神を信ずることのできる刹那は、或ひは神を信ずることのできる自分自身は幸福である。
神を信ずることのできない刹那は或ひは神を信ずることのできない自分自身は墓場の中へでも坐つてゐるやうな氣がする。
しかし私にとつては、神を信ずる心も、神を信ずることのできない心も、私に賦へられたたゞ一つの私といふ實在である。實感である。
信と不信の二つの心の絲に綯られた私の生活から、私の宗教が生まれ、私の藝術が生まれる。畢竟は覺り得ぬ凡愚の生活であり、救はれぬ魂の藝術である。

×

凡愚であるがゆゑに褒められるといふことは嬉しいことであるにちがひない。
凡愚であるがゆゑに非難されるといふことはくやしいことであるにちがひない。
チエーホフの「鷗」のなかにも、これに似た作者自身の心持ちが語られてゐたと思ふ。

×

けれども褒められた時よりも非難された時が、どうかするとほんたうに自分といふものゝ底深いところまで内省の

メスが向けられる。少くとも涙を灑いで自分を強くし、深くしようとする努力は非難された言葉の底から湧いて來る。叩かるればこそ、非難さるればこそ、本も讀んで見ようと思ふ。眞面目に思索もして見ようと思ふ。非常な天才は知らず、たいていの人には親切な批評はなくてはならぬ大事な助言である。親切な批評を持たぬことや、或ひは親切な批評に耳を傾けることのできない人はいつまでも無駄道を取ることになる。敵の非難に耳を假すだけの寛容を持てといふことすらあの天才ダ・ギンチは言つてゐる。

眞面目な批評でさへあるならば、もうそこには敵だの味方だのといふやうた差別はなくなつて來る筈である。不眞面目な批評は、たとへ批評家自身は味方になつてゐるつもりでも、作者にとつては敵以上の惡い結果を齎すことになる。

×

一面に於いて藝術家の生活ほど冒險的な、不安な生活はないかも知れぬ。けれども私は藝術家の生活を捨てようとは思はぬ。惡緣であるか善緣であるか知らぬが、こんな生活に落ちてしまつたからは。

生まれて、生きて、藝術を作つて、明日は何うなるか知れぬが、やがて死んで行くことさへ覺悟してゐたら、周圍を見て氣に病む必要もないであらう。

芭蕉は、(われに辭世の句なし、一生を通じて吐き棄てたる言々句々すべてわが辭世である)と言つた。一作、一作は作者にとつてその辭世の作でなければならぬ。

×

芭蕉がその弟子たち、殊に杜國に對して寄せてゐた心を尊く思ふ。

「野ざらし紀行」のなかに杜國に贈つた

白芥子にはねもぐ蝶の形見哉

といふ句があるが、この句のなかには杜國その人の瀟洒な風貌すらも泛かんで來る。

「笈之小文」のなかには

「三河國保美といふ所に、杜國がしのびて有けるをとぶらはんとまづ越人に消息して鳴海より跡ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊る

寒けれど二人寢る夜ぞ頼もしき」

芭蕉が杜國を思うて二十五里を立ちかへつてたづねて行つた心を想像するとそこにいろ〳〵な人間らしい弱さ、やさしさが泛かんで來る。

「彌生半過る程、そゞろにうき立花の我を道引枝折となりてよしのの花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にてちぎり置し人の伊勢にて出むかひともにあはれを見且は我爲に童子となりて道の便りにもならんと自萬菊丸といふ。まことわらべらしき名のさまいと興あり、いでや門出のたわれ事せんと笠のうちに落書す

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠」（笈之小文）

萬菊丸と呼んで芭蕉の旅の伴をした杜國の若々しい姿に、芭蕉の痩軀寂影を配して考へると色々な興味が湧いて來る。

ちる花にたぶさはづかし奥の院

萬菊丸が美しい若衆作りでもして行つたのであつたらうか。乾坤無住の同行二人が――寂人芭蕉と、そして一人の美

しい青年――吉野の花に吹かれて山を下つた春のことが私の頭に寂しくもあるが、美しい繪となつてあらはれて來る。

メレジュコウスキが書いたレオナルド・ダ・ギンチの晩年にもこれに似たシインがあつたことを記憶してゐる。チオコンダの繪を背負つたダ・ギンチが、少年フランチェスカとたゞ二人切りで雪のアルプスを越えてフランスにのがれて行つた。あのシインを想像した時、私はすべての超人が背負はなければならぬ孤獨の寂寞さをしみじみと感じさせられた。

「先生、イタリイが見えます。」と少年が叫んだ時、ダ・ギンチは雪の中を無理に走りながら振り向きもしないで山を越えて行つてしまつた。

あの刹那の振り向きもしなかつたダ・ギンチの心を思ふと耐らなくなつて來る。

涙を流すことは誰にでもできる。けれども人間は年をとるにつれて涙のない悲しみの更に深く、切なることを知るやうになつて來る。

ダ・ギンチの生涯、芭蕉の生涯はたしかに涙の出なくなつた後の更に切なる人生であつた。

×

私は嵯峨日記を讀んでゐて、芭蕉が夢に杜國を見て泣いたといふ文字を見出した時、家の中にぢつとしてをれなくなつた。

私はこれまでに嵯峨日記を讀んだことは幾度もあつた。けれどもあのくだりを讀んで耐らなくなつたのは今度はじめてゞあつた。それだけ自分といふものが世の中といふものを知つて來たせゐかも知れぬ。或ひは「羈旅邊士の行脚、捨身無常の觀念」といふ芭蕉の無常觀が一層痛切に實感せらるゝやうになつたせゐかも知れぬ。

「我夢は聖人君子の夢にあらず終日妄想散亂の氣夜陰夢又しかり」と芭蕉は言つてゐるが、どこまでも人間らしい人、

間の夢を見てゐた芭蕉の日記には、ルソウやトルストイの懺悔錄に見ると同じき親しさが見出される。

あのつゝましやかな中老期の芭蕉が杜國を夢みて、覺めて潸然として泣いたといふことを考へたゞけでも、芭蕉の心の美しさと同時に、かれの寂寞の生涯の切なさが想像される。

かれの厭世的思想が何處から湧いたのか知らぬ。架空的なかれの戀愛に關する浮說や、その主藤堂氏の死がかれの思想に大きな影響を與へたといふことなどについては、私は何處まで信じていゝかを知らない。かれ自身のうちに本然的に、かれの厭世的思想が芽ぐんでゐたと見るのが一番正しいことではないかと思ふ。

そはとまれ、人間は所詮人間である。

結迦趺坐はじめて涅槃の域に達した釋迦の心に一羽の燕の行く方が忘れられなかつたやうに、芭蕉の世を捨てた心のうちにもいろ〳〵な人の俤が思ひ描かれたであらう。かれは聖人君子の夢を見ずして、凡人らしい悲しい夢を見たのであつた。そこからかれの深い藝術が生まれて來たのであつた。

かれの藝術は靑春の日の藝術ではない。

かれの藝術は中老期の藝術である。

かれの藝術はあまりに人を思ひ、あまりに人生を愛したる者の靜かなる囘想の藝術である。

雨の日の暮れゆく

今日もまた仕事に追はれ、時間に束縛せられて歸る
不圖電車の窓から覗いた五月の靑空
雲はゆく
しづかに空が動いてゐるのを見れば
旅人になつた心
ほんの二分間、或ひは三分間
電車の窓に劃られた靑い空は
私の心を旅人の心にする
すべての自由、時間からも仕事からも遁れ得た自由
涙ぐましきほど懷かしい旅人の心
電車は止まる
いきれたる土の照りかへし
醜きペンキ塗りの看板
汗ばみしカフス
よれよれのズボン

時間と日々の仕事とに縛められた青白き魂の木乃伊、いたましき幻の殼を載せて
電車は走る
四角な硝子窓いつぱいに劃られた靑い空を眺めながら

×

雨が降る
病室の扉を洩れて來る嬰兒の泣き聲
父もゐず、母さへゐず、看護婦に抱かれては泣く嬰兒
嬰兒よ硝子窓を叩くものゝありしづかに
嬰兒よ硝子窓を訪ふものゝ音す
雨垂れの白き脚を見よ
雨垂れは踊るに
雨垂れは訪ふに
父も來ず、母も來ず看護婦に抱かれたる嬰兒
雨の日の暮れゆく

×

親に捨てられた女
モヒ注射に眠る。
親に捨てられた男

しづかにベッドの女を見守る。
どこかの病室では讃美歌をうたつてゐる。

×

硬質の白い皿
燒きパンのかけら
煙草の殼の靑い煙
ぢいつと見つめてゐる一と時
とりのこされてゐた幸福がかへつて來る
午後の五時
コスモポリタンの sw.et-pathos
昔わかれたN、昨日わかれたK
泣けるなら突つ伏して泣かうに
人生とはこんなものだらうか
汚れたシヤツの袖口のいたましさ
電車に乘りながら自分の齡を算へる。

×

ほんたうに人生がこれだけのものならとても頼りなくて生きてをれない
電車で、疲れ切つて、家に歸るたんびにこんなことを思ふことがある。毎日のやうに。」

木曾川

ホテルの寢臺に横にならうとしてゐるところに、ボーイがやつて來て「Kといふお方がお目にかゝりたいといふことで……」と扉を明けて待つてゐた、十二時ちかくであつた。

私はヱランダに出て行つた、夜が更けてゐたので他の客たちの影も見えなかつた。私は圓柱の側に立つてゐる一人の青年を見た。

「あゝあなたでしたか！」私は思ひがけない人に、思ひがけない場所で出會つたのに少からず驚かされもし、また旅で親しい人にめぐり逢ふことのうれしさをもしみじみと感ずることができた。

K君は四年前と同じやうに沈默がちであつた。根岸の私の家を訪ねて來たころのやうにおづ〳〵してゐた。「お疲れでせうから……」と言つて、K君は三十分ばかりで歸つて行つた。

K君の痩せた寂しい姿が町の角をめぐつてかくれてしまつてからも私はしばらくホテルの前に立つてゐた。いつまでもK君と話してゐたかつたのであつた。十里ちかくの山の町から夜をかけてたづねて來てくれたK君の志を思ふと旅であるだけに一層人の心といふものゝ美しさが涙ぐまれるのであつた。

私は寢臺の上に横になつた。私は地圖を展げて明日の木曾川下りのことを色々に想像したりした。私はせわしない旅行のためにかなり疲れてゐたが、あまり暑いので殆ど一睡もできなかつた。私は二時が打つのも、三時が打つのも知つてゐた。私は四時には寢床から起きてしまつた。部屋の窓を明けて戸外の空氣を思ふ存分呼吸しようと思つたが、夜明けかたの薄暗い空には微風のけはひさへなかつた。

平原の中の大きな都會はまだ眠つてゐた。雲が低く高い建物を壓するやうに漂うてゐた。どこからともなく地をゆるがすやうに汽笛の音が響いて來た。

朝々聽く工場の汽笛の聲はいつも私の胸に限りなき寂しさを喚び起させるのであつた。

×

約束して置いた八時にK君がホテルを訪ねて見えた。K君は今朝ふたゝび私を訪ねるために近所の宿屋に泊つたのであつた。

太陽はぎら〳〵と平原の都會を照らしてゐた。私たちは一刻でも早く都會の地のいきれから遁れたいと思つた。さすがに郊外にかゝつた時は電車の窓から吹き込んで來る風は涼しかつた。名古屋の町をつゝむ郊外には紅い蓮の花が到るところに見られた。かすかな香が電車のなかまでも漂うて來るのであつた。線路は一直線に桑畑の間を北へ縫うて行くのであつた。濃尾の平原をつゝむ山が刻々に近づいて來た。

「あれが尾張富士といふのです、あの右のが××山。昔、尾張富士と××山とが丈くらべをしたんださうです。尾張富士がたうとう敗けました。で、尾張富士はどうしても××山と同じ高さになるために、麓の人たちに、何うか山の上に石を運んで來て××山と同じ高さにしてくれと頼んだのださうです。ですから今でも年に一度この近在の人たちは夜、炬火をともして尾張富士に大きな石を運んで行きます。二三日前にそのお祭りがありました。」

K君は桑畑の上の高い二つの山を指さした。なるほど尾張富士は××山より低く桑畑の上に、山といふより小丘といふやうな感じを與へてゐた、赭茶けた山道が松林の間に日の光りを浴びてゐた。

小牧附近で私たちは別れなければならなかつたのであつたが、K君はそこで別れるのは名殘惜しいと言つて、私と一緒に犬山城まで行くことに決めた。

「でも、銀行の方の都合が悪くはありませんか？」私は念のためにたづねた。K君はたッた一人で小ひさな銀行の仕事をしてゐるのであつた。

「銀行は一日くらゐ休んだつて大丈夫ですよ。今日私がゐなければ用の人はまた明日出直して來ますよ。」いくら田舍の小ひさな銀行とはいへ、K君ののんきな言葉にはちよつと吹き出したくさへなつた。

犬山口に下りた時は、あまり暖いので眼がまひさうであつた。無花果の下に俥が三臺あつたが、車夫は一人しかゐないといふことであつたので、私たちは草いきれの中を十町ばかりも歩くことにした。

古い沈んだ空氣が古城下の町を包んでゐる中を私たちは喘ぎながら歩いて行つた。どこの城下町にも見出されるやうなくづれた築地や、屋敷跡らしい桑畑の中に八月の太陽の光りがまざ／＼と頽唐の寂寞を漂はしてゐるのであつた。白い壁に沿うて向日葵の花が咲いてゐた。

町の中程から犬山城の天守閣が見えた。私たちは城の前の木蔭につゝまれた家で飯を食ふことにした。「なも……なも……」といふ町の人の言葉がいかにも關西通有の京都風なやさしさを感じさせるのであつた。

繁みの中を、苔むした幾段かの石磴を踏みしめて天守閣の前に立つた時であつた。はげしい雷鳴と共に驟雨が沛然として古木を搏ち赭い土を蹴つて、木曾川沿ひの山々を黝くするのであつた。

私達は天守閣の中にはいつて行つた。一階、二階、三階、とあやしげな階段を上るにつれて風も雨もはげしくなつて來た。私達は厚い壁に仕切られた矢間のあひだからやがて木曾川の一瀬を見、木曾川の一曲を見出すのであつた。私たちは天守閣のいたゞきに達した。

雨に煙つた木曾の流れ、漫々たる水、蒼渺たる山、墨繪のやうな斷崖、木曾川を横切る雨の脚に打たれつゝある岸の松並樹、幾里の白い磧に捨てられた輕舟、桑畑また桑畑の中に散見する白壁の家。そしてすべてが雨に煙り、雨に

輝いてゐる。

何といふ雄大な、何といふ愛すべき山河であらう。

雨が斜に天守閣の北の窓から、南の窓へと吹き通すのであつた。城守の男が木曾川に面した北の窓を閉しめに上つて來るまで、私たちは北の窓を通して木曾川を横切る雨の脚を眺めてゐた。

×

城の直下の斷崖をめぐつて木曾川の水は白い瀨をなして流れてゐた。

雨の中を二隻、三隻と輕舟を曳く男たちが、白い磧を上流の方へたどつて行くのであつた。人の影は豆粒のやうに小ひさかつた。

雨が晴るゝにつれて、雷鳴が南の方へ遠ざかるにつれて、今まで見えなかつた山が急に見えたり、忽然として新たな町が桑畑の中にあらはれて來るのであつた。

各務ヶ原を中央にして、遠く右と左に膽吹山いぶきやまと、鈴鹿が雲の間に、或ひは見え、或ひは隱れるのであつた。

明月の夜、この城に來て一夜を明かして見たいなどゝ思ひながら木曾川の岸へ下つて行つた。私は舟をやとつて木曾川を下ることにした。

私はK君とそこで別れなければならなかつた。

舟が動き出してもK君は岸に立つて別れを惜をしんだ。舟が五町六町と木曾川の瀨を下るにつれてなほK君は草の間を流れに沿うて舟を追うて來た。けれどもK君と私たちの舟の間は刻々に遠ざかつて行つた。K君の姿がだん〳〵小ひさくなつて行つた。

「夜の支度を忘れましたので、ちよつと待つて下さい。」若い船頭はかう言つて舟を磧につないで岸の方へ飛んで行

つた。

私はそこに二十分ちかくも待つてゐなければならなかつた。K君とは十町ちかくもはなれてゐたであらう。

私はK君が岸の草の中をなほ走りつゞけて來るのを見た。K君は再び私の舟をもやつた磧まで走つて來た。K君は全身汗びつしよりになつてゐた。

私は人間の哀別といふやうなことをしみじみと考へさせられた。殊に再び舟が動き出して、K君が草の中を追うて走つてゐたのがいよ〳〵姿が見えなくなつた時、私は絶望に似た寂しさを感じた。

「この世界で或ひは二度と逢ふこともないのかも知れない！」私はかう思つた。

草の中に立つて帽子を振つてゐたK君の姿がいつまでも私の眼底に刻みつけられてゐた。

私は舟の中に立ち上つて見た。しかしK君の姿は見えなかつた。川の瀬が急に早くなつた。K君が走つてゐたあたりには草の深い色が青々とかゞやいてゐた。犬山の天守閣だけが木曾川の絶壁の上に夕陽を浴びてそゝり立つてゐるのであつた。私はぢいつと頭を垂れて流れて行く水の面を見つめてゐた。

×

舟は美濃と尾張の境をしづかに下つて行くのであつた。廣い磧の上を水鷄のやうな寂しい聲の小鳥が飛んで行つた。岸の家が低く草の間に、屋根だけを見せてゐるところもあつた。靑い草の丘を掩うた空は秋の近づいたことを想はせるほど高かつた。もく〳〵と桑畑の中から白い雲が頭を擡げて來ることもあつた。

舟の中からも、ともすれば美濃の桑畑を越えて膽吹や鈴鹿が雲のやうに見ゆることもあつた。

私は芭蕉がこのあたりを旅した日のことなどを考へた。「芋洗ふ女西行ならば歌よまむ」といふ芭蕉の句を思ひ出した。そして芭蕉ならば句を讀むであらうと思ひながら、遠い兩岸の丘や、家などを眺めた。そこにはもう秋の影が

近づいてゐた。

流れは時として船の底を打つほど淺かつた。そこは屹度急な瀨をなしてゐた。瀨を下ればそこはまた深い淵を作つてゐた。無氣味なほど靑い淵もあつた。あまりに水が美しいので私は幾度か流れに手をつけて水を掬んだ。私たちの船は幾度か上流へ曳かれて行く船とすれちがつた。船を流す人も、船を曳く人もすべて啞黙つてゐた。たゞ瀨に來るごとに瀨の音だけが周圍の沈默を破つた。かすかな瀨の音すらが旅人には懷しみを抱かせた。日がだん〳〵鈴鹿の見當へ落ちて行つた。

「今夜はどこに泊るの？」と私は若い船頭にたづねた。

「どこになりますやら……」若い船頭は夕陽を見つめながら考へてゐた。

「どこと決まつてゐないの？」

「えゝ、どこと決まつてはをりません。どこでも日が暮れたところで舟をつないで川の上に泊るんです。」

「あらしの夜なんか？」

「磧に舟を曳き上げて一晩、寢ず番をすることもあります。食ひ物は明日のまでこんなにして拵へてあります。」かう言つてかれは竹の皮に包んだ柏餅見たいな物を私にすゝめてくれた。

私は若い船頭の自由な放浪的な生活を羨む氣にもなつた。

ぢつと耳をすましてゐると、歔欷するやうな水の音が廣い川の面を流れて行くのであつた。

「あれが金華山です！」船頭が指さした桑畑のかなたにこんもりと繁つた山が見えた。いただきには古城の壁が白く見えた。

川はあまりに廣かつた、夕暮の岸に物を洗つてゐる女たちの姿が旅人の心に淡い鄕愁を感じさせた。水の上にも夕

暮の霞がほのかに漂うて來た。川の瀬に舫はれた舟の水車が水鳥の鳴くやうな音を立てゝ廻つてゐるのもあつた。

土手の上に寺の屋根だけが黝（かぐろ）く丘のやうに聳えてゐた。

「あれが笠松です！」芭蕉の句にも笠松の名があつた。

船頭が指さした土手の上には町の電燈が力なげに吐息（といき）してゐた。

草深い土堤を私は二三町も歩かなければならなかつた。

あまり暖いからであらう。雨戸の上に寢かせられた病人が、土手の草の中に、死人のやうな蒼い顔をして空を見てゐた。

空には五日ころの月がかゝつてゐた。月の直ぐ下には鈴鹿あたりの山が暮れてゐた。

私は岐阜行きの道をたづねた。

病人の氷囊（ひやうのう）を抱へてゐた一人の女は、「お宮の森を通りぬけて西においで」と敎へてくれた。

宮の森を通りぬけた時は、夕暗がすつかり廣い桑畑の平原をつゝんでしまつてゐた。

私は暮れてしまつた桑畑の上の淡い月影をながめてゐた。丘には霧がかゝつてゐた。

旅！　だといふ意識が私の心をいやが上に賴りなくせしむるのであつた。

暮れて行く大地そのものも靜かな溜息をついてゐるかのやうにさへ想はれるのであつた。」

枯草の中

自然の本體を愛であるといふことを信じないではをれぬ日がある。

元日から積もつてゐた雪がやつと二月の半ばになつて雨のために解けた。今まで雪の下にかくれてゐた地の上にはすでに小ひさな草の芽が、去年の枯れ草の間から頭を擡げかけてゐる。太陽は一刹那もその小ひさな草の芽一つ忘れないで、柔かな光りのうちにすべてのものを生かし、伸ばす尊い仕事を營んでゐる。

枯れ草の上にしやがんで、ぢつと小ひさな一つの芽を見つめてゐると、自然といふものゝ不可思議な謎の深さがしみ〴〵と感じられる。たゞ啞默つたまゝ、刹那々々に伸びて行く一つの芽の神祕さに驚かずにはをれなくなる。

日暮れ方家のまはりを歩いてゐると、笹鳴きを止めた鶯がつくねんと繁みの下枝に頭をかしげてゐる。何でもないことのやうであるが、ぢいつとその小鳥を見つめてゐると、そこにも自然の神祕、自然の無限な驚異が潜んでゐる。

このころでは少し春らしい日には、笹鳴きからほんたうな鶯の鳴く音にうつらうとする鳥の聲が、いかにも可笑しく繁みのなかで聞える。臆したやうな、はにかんでゐるやうな鳴き聲である。そうつと覗いて見ると、自分で鳴いて自分の聲に不思議さうな眼をして聽き惚れてゐる。

年々同じことであるが、こゝにも自然の無際限な蠱惑がある。神祕がある。

いろ〳〵な草や花が、あわたゞしく、一刹那の小止みなしに、生まれ、生き、死んでゆく姿を見つめてゐても、自然の驚異に惹きつけられてしまふが、何處からとも知れず遠く旅をつゞけて來るであらう渡り鳥の聲を聽くと、殊更、自然の大きな驚異に打たれる。

殊に夏の終りから秋冬にかけての小鳥の群は、自然の寂寞そのものゝやうな儚なさを想はせる。

百舌やかけすのやうな悪戯な鳥でも、秋になれば憎めなくなる。

四十雀、繡眼兒、瑠璃鳥、鶯、頰白といふやうな可憐な鳥が林のなかに鳴いてゐるのを見ると、自然に對するなつかしみが際限もなく湧いて來る。

頰白の頰が白いのも、緋鶲の胸毛が紅いのも、それがあたり前だといへばあたり前であらうがぢつと見つめてゐると自然といふものゝ驚異に打たれずにはをれない。

嬰兒が言葉を覺えはじめること、子供が草の中で歌をうたつてゐること、馬が道傍で秣槽の中の麥を食つてゐること、若い女の瞳が黒くまたゝいてゐること、人が笑ふこと、何も彼も自然の神祕であり、魅惑である。

×

自然の本體を憎みであると信じないではをれぬ日がある。

一人の男が、その妻を失つた日にも、また一人の女がその愛兒を失つた日にも、この世界には木の葉一つ落ちるほどの變化も見出されない。

妻を失つた男、兒を失つた女にとつては、世界は一日にしてまつたくちがつたものとなつてしまふ。昨日までの明るい街も、かれ等にとつては空虚な、墓場の跡のやうに想はれるにちがひない。

けれども、實際には、世界そのもの、自然そのものは、人間の悲しみに對して草の葉一つそよがしてはくれない。

自然のこの無關心は人間の死に對してのみではない。私たちは半日注意して道を歩いて見るがいゝ。

踏みにじられた鼠の死骸が溝の傍に捨てられてある。或る時は臟腑を摑み出された猫や可憐な仔犬の死骸も草の中に投げ出されてゐることもある。

またそこには千年ちかくも生きてゐたであらうと思はれる巨木の屍が、道の傍に冬の日の光りを浴びて横たはつてゐることもある。

しかも、これ等の傷ましい光景を作り出した下手人は大抵の場合、人間そのものである。

このやうな場合にも、自然は殺さるゝものに對しても、殺すものに對しても極めて無關心である。

たまに巨木を伐り倒す男たちが木にくだかれ、へしつぶされて殺されることもあるが、それはほんの偶然な出來事に過ぎない。

自然はまつたくすべてのものに對して殘忍なほど冷たく、無關心である。

自然の無關心といへばこのごろ、最もショッキングな出來事は、親不知の雪崩のために八十餘人の勤勉な農夫たちが悲慘な死に方をしたことであつた。

一村から二十五人出て行つた男のうち、二十三人が雪の下に埋められてしまつたといふやうな記事を讀んだゞけでも、人間の魂は脅かされ、痛められてしまふ。

雪が解けて、春の和かな日が草の上をあたゝむる時、誰かその悲しみにつゝまれた村の徑を、涙なしに通り過ぎることが出來よう。

しかも自然はかつてその村に一つの魂も傷つけられなかつたかのやうに、平和な春の光りを投げあたへるであらう。

殘忍な人間以上に、自然は冷酷である。

私は亡母が胃癌に苦しめられて、あまりの苦しさに（早く庖刀を持つて來てあたしの胸を突き刺してくれ）と叫んだ言葉を、今日なほ忘れることはできない。私はその刹那ほど生の殘忍さといふことを強く感じたことはなかつた。

私は生を呪つた。自然を呪つた。神を呪つた。

生も、自然も、神も、すべて亡母の苦痛に對しては無關心であつた。
しかも亡母は臨終の刹那には自分自身で念佛を唱へるばかりでなく、姉や妹たちを促して、「早くお念佛を唱へてくれ」といつて、佛にすがりながら眠つてしまつたのであつた。
呪ひつゝも、人間は自然の前に跪かなければならぬのか。呪ひつゝも人間は神の前に祈らなければならないのか。
あまりに悲慘な出來事の前には、私たちは却つて無神論者の味方とならずにはをれなくなる。
「神はないのだ。」とさへ私たちは叫びたくなる。
「この世界は盲目的な一つの意志によつてのみ動かされてゐるのだ。」とも私たちは信じたくなる。
「神もゐない。自然は盲目である。」と、かう考へて見ても、しかし、たゞ一つ取りのこされた美しいものがあることを忘れてはならぬ。それは人間の心である。殘忍な人間の涙である。
かれ等は時として人を殺す。平氣で草木を伐り、鳥や獸を殺してゐる。自然以上の殘忍さを示してゐる。けれども殘忍な人間は自然や神が持たない人間的な魂を持つてゐる。自分の罪に對する懺悔の心を持つてゐる。お互の不幸に對して傷み慨くだけのやさしさを持つてゐる。涙を持つてゐる。
自然にも神にも恐らく涙を見出すことはできないであらう。
殺人者は、かれの足許に横たはつてゐる人間に對して全然無關心ではあり得ない。かれはかれの手によつて殺された人間に對してかならず恐怖と同時に幾何かの憐愍を持つにちがひない。少くともかれは自分の罪に對する懺悔の心におびえをのゝかずにはゐないであらう。
街を通つて行く見知らぬ人の柩に對して未だかつて微笑を泛かべた人間を見たことはない。
或る者は立ち止まつて、念佛を唱へて見知らぬ人の冥福を祈つてゐる。

こゝにも自然以上の人間の思ひやりがある。たとへ眼に涙を泛かべないまでも、かれ等は一様なる人間の運命に對し、死せる人々に對してかすかながらも悲しみの言葉をさゝげてゐる。涙の花環をさゝげてゐる。

×

神は存在するであらう。

けれども人間と神との間はあまりに遠い。あまりに感觸がおぼろげである。

人間と人間の間の感觸ほど、實感的な存在はあり得ない。

神の聲を聽くことのできる人は幸福である。けれども、もしかれが人間の聲を聽き忘れたならば、かれは人生をほんたうに摑んだと言へないであらう。

神の祭壇に行く前に、先づ私たちは周圍の人間の聲を聽かなければならぬ。人間の呻きを、惱みを、醜さを、あこがれを摑まなければならぬ。

神は或ひは殿堂には住んでゐないのかも知れない。神は恐らく、最も人間的な呻き聲のうちに、人間的な醜さのうちに潛んでゐるのであらう。

×

もし自分は立派な人間だと想像する人があるならば、恐らくその人は神を持たないであらう。もし自分は慈悲を施したと思ふ人があるならば、恐らくその人も神を見失ふであらう。

もし自分は人を愛し得たと思ふ人があるならば、その人も恐らく神を見失ふであらう。

私たちが、おぼろげながら、神といふ意識や、或ひはほんたうに人間らしい感じを持つことができるのは、大抵は、この上もなく醜い自分を見せつけられた場合である。利己的な、憎惡に滿ちた、嘘つきな自分自身を見出した刹那に、

人生の深みといふものが、ほんたうに、瞬間的ではあるが、感じられるやうな氣がする。

藝術を生むといふことも、藝術を味ふといふことも、この刹那の人生の深みを感ずるといふことに過ぎないのではないだらうか。

この人生の深みに自分の魂がおびえ、をのゝく時、はじめて藝術家はほんたうの藝術を生むことができるのではないか。

人生の深みにをのゝくことを知らない人の藝術は、たとへ何（ど）のやうに巧に作られ、手際よく仕上げられてゐても、それは畢竟（ひつきやう）私たちにとつて第二義的な藝術である。

ブールジュアの藝術とプロレタリアの藝術といふ對照よりも、むしろこの深みを摑んでゐる藝術と、深みを摑んでゐない藝術の對照といふことが一層根本的な問題ではないか。

雪の日

私は學生時代にはよく散步をした。そのころはまだ早稻田はすつかり田圃で、秋になると楡柳(にれやなぎ)の並樹の間に稻が干されてあつたり、面影橋のあたりには水車の音がしづかに聞えたりしてゐた。小石川の久世山(くぜやま)の欅の下から關口の臺を見ると靑い瓦斯の光りが一つか二つ雜林の間にちら〳〵してゐるのであつた。それがまたばかに寂しくもあり、なつかしくもあつた。

夕方の雜林のなかの燈くらゐ私の心にわびしい幻想をわかさせたものはなかつた。

私はいろ〳〵なシインを描いて見た。

溫かい煖爐、しづかな書齋、黑い女の瞳、涙ぐんだ美しい眼。

私はぢつと久世山のあの欅の下に立つて紫色にあせてゆくしづかな夕暮の空をながめた。

大都會の黄昏の喧騷が、一つの大きな葬(とむら)ひの悲しい交響樂を作つて、黑い屋根の下から、灰色の道から、波を打つてつたはつて來るのであつた。

夕暮の燈が一つ二つ、そしてまた無限にまたゝきはじむるのであつた。

箒のやうに灰色の空にそゝり立つた枯木の梢が、闇のなかに溶けこんで行くのであつた。

「燭のあるところに必ず人があり、爐があり、笑ひがあり、輝きがあり、美しい女の手があるにちがひない。たゞわたしひとりが、凍(い)てついた土の上に、枯れ草を踏んで夕暮の空を見つめてゐるのだ！」

こんなことを私は幾度思つたか知れない。私は一年中、太陽の光りを見ない自分の狹い部屋に歸つて行くのであつ

た。そこには一脚の机と、三分心のランプと、小ひさな七輪が夕暮の闇の下に私を待つてゐるのであつた。
「わたしひとりを除け者にして、この大都會のすべての家の燭の下には輝かな、溫かな幸福がころがつてゐるのだ！」
私はこんなことを思ひながら、三分心のランプを點した。七輪の火をおこした。
「孤獨、寂しい孤獨。終日、終夜の沈默！」私はたまらないと思つたことがあつた。
「沈默は恐らく人を殺すであらう」とも思つた。
日が暮れてから路次を通つて行く豆腐屋があつた。時として私はその男に聲をかけた。
私はたれにでも聲をかけたかつたのであつた。
ランプの心が燃えてゆくかすかな音さへ私にはなつかしかつた。闇の中にはねる七輪の炭火の音さへ私にはうれしかつた。
振りかへつて見ると十幾年前になつてしまつた。
私はつくづくこのごろまたあのころの死のやうな孤獨がなつかしくなつて來た。絕對の孤獨が。

×

あのころは何もかも美しく想像されてゐた。
雜林の中の一つの燭の下には、美しい人があり、美しい人の心があり、樂しいさゝやきがあるやうにのみ想はれてゐた。
その後十幾年の時が過ぎた。
私は今も時として同じやうに雜林の中の燭を見ることもある。
しかし今では、もう、私はその燭の下に、かの美しい人の眼や、樂しいさゝやきを想像することは滅多にできなく

なつた。

私の心は、

「燭のあるところに、かならず人が集まり、人の集まるところにかならず苦惱があり、憂鬱があり、憎みがある」ことを想像するやうになつた。

しかし私のこの心の移り様は、たいていの人が一度はかならず經驗しなければならぬ人間の心の自然の徑路であらうと思ふ。

一方から考ふれば詩の世界が散文の世界へと移り替つてしまつたのである。

愛の世界が、憎みの世界へと運ばれたのである。

善人國から惡人國へと押し流されてしまつたのである。

翹望の世界から絕望の世界へと落ちて行つたのである。

精進の生活から懷疑の生活へと墮したのである。

神の國から、煉獄の世界へ。

信仰の生活から、不信の生活へ。

けれども私は詩の世界から散文の世界へ移つて行つた事を決して悲しいとは思はない。神の國から煉獄の世界へ墮したことを後悔はしない。

私は信仰の生活から不信の生活に墮することによつて、一層多くの人間を見、一層深く人間そのものを味ふことができた。

詩は神の國のものである。散文は人間の世界のものである。

善は天國のものである。惡は人間の世界のものである。
私は惡を知ることによつて、人間の心の華を見出したのであつた。
神はすべての點に於いて人間より、より尊く、より豐かなものであるにちがひない。けれども神が持たないで、人間なればこそ持つてゐるものがある。
それは人間の惡である。惡から生まるゝところの懺悔であり、涙であり、人間的な苦惱である。
藝術を生み出すものは善であり、愛であり、眞であり、美であるかも知れない。けれどもすべての藝術の中から人間の惡を取り去り、人間の涙を拭ひ去り、人間の暗、憎み、呪ひ、疑ひ、煩惱を除いたとしたら、どんなものであらう。
人間の醜さを持ち、人間の憎みを持ち、人間の弱小さを持てばこそ、藝術は生まるゝ。
無論、人間的な醜さを持ち、人間的な憎みや弱小さを持つことが人間の名譽ではない。
その醜さを恥ぢ、憎みを憂へ、弱小を悲しむ神の心を持つ者でなければ藝術を生むことはできない。
人間の心と神の心とはいつも藝術家自身のうちに相剋しつゝ棲んでゐなければならぬ。そこからトルストイの藝術が生まれ、ミケランゼロの藝術が生まれる。
人間であるが故に藝術を作り出すことができる。しかしこの言葉は、人間であり、しかも神の或るものを意識するが故に藝術を作ることができると言つた方が、さらにほんたうであらうと思ふ。

×

ほんたうにたゞ一人の人間を愛することのできるものは、恐らくすべての人を愛することができるであらう。
ほんたうにその妻を愛する者、子を愛する者、友を愛するものは、かならずすべての人を愛することができるにちがひない。

千人、萬人を愛すると自信する人々の愛には、ともすれば空疎な感じを抱かせられるものがある。
千人、萬人を愛するといふやうな大それた心を抱く前に、私たちは心からたゞ一人の人間を愛し得んことを冀ふ。
千人、萬人を愛することは今日の宗教家たちにも、社會運動家たちにも出來る。
たゞ一人のイスカリオテのユダを愛することはキリストにさへ困難なことであつたやうに想はれる。

×

色々た人間を知ることは藝術家にとつて必要なことであるにちがひない。
けれども實際は、たゞ一人の人間すら完全に知りつくすことは、一生を費しても不可能なことである。
たゞ一人の人間のうちには、掬みつくすことのできない人間そのものゝ永遠性が生きてゐる。
一生を費しても夫はその妻のうちに藏されたる人間の尊さのすべてを見出すことはできない。
「女の裸體は神の作品である」とブレークは言つた。
人間そのものがすべて神の作品である。
淫賣婦も、無能な老事務員も、白痴も、ドストイエフスキイにとつては神の作品であつた。
娼婦マグダラのマリヤもキリストにとつては神の作品であつた。

×

何のやうな人間にもかならず美しいところがあるといふ信仰は、誰が何と言つても失つてはならぬ。
私は時々、この信仰の非難を聽くことがある。また私自身、さう云つた信仰を持つことができなくなるやうな不安に陷ることもある。
しかし私たちはこの信仰を失つてはならぬ。この信仰が非難せられるのは、決して信仰そのものが惡いからではな

い。この信仰が、たゞ流行性を帶びた概念に墮してゐるからである。
ほんたうにこの信仰を實感することのできる人にとつては、この信仰はその人の藝術の基調となるべき筈である。たゞ自分のうちに、それほどの饒かな心が湧いてゐるか、或ひは概念的な附け燒き刃であるかによつて、この信仰が是認せらるゝことになり、或ひは難ぜらるゝことにもなる。
しかし、私たちはこの信仰の概念を持つといふことだけでも、實はめぐまれた生活であると思ふ。すべての人のなかに美を見出し、光りを見出さうとする努力は、この信仰の概念に伴うてゐる筈だと思ふ。
この信仰の概念が實感的に意識せらるゝまでには大きな努力を要する。トルストイもその努力者であつたと思ふ。概念であるが故を以て必ずしも非難することはできない、私たちは立派な概念であるならば尊んで行かねばならぬ。そして概念を概念で終らさないで、實感にまで押しすゝめて行かなければならぬ。
尊い概念を實感にまで押しすゝめて行かうとする努力のうちから藝術が生まるゝといふことが出來ないだらうか。

×

昨夜から、東京にしては珍らしい大雪が降つた。
雪はすべての人間の心を淨化する。人間の憎みをも、呪ひをも。
SはKを憎んでゐた。
KもSを憎んでゐた。
かれ等は二人とも私の近所の半農、半勞働者であつたが、この夏ごろからほとんど顏を見合はせることさへ避けてゐた。
ところが今朝の雪を踏みながらKがSの家をたづねて行くのを私は見た。

恐らくKは昔の友人のSが戀しくなつたのであらう。Kは手に新聞包をさげてゐた。
一時間ばかりの後であつた。私はKとSが爐の傍で牛肉をつつきながら、酒を飮んでゐるのを見た。
KとSとの顏はかゞやいてゐた。
二人の愉快げな顏を見出した私自身までが、めぐまれた幸福を感じた。

×

雪の日。
故鄕の父のことを思へば、今にも飛んで故鄕に歸りたい。
亡母の納骨堂の屋根にも雪がつもつてゐることであらう。
いつも來て鳴く小鳥も、雪の日には來ない。
私は庭の樹を見ては、幾度か小鳥のことを思ひ出した。
子供のころ故鄕のお寺で、或る人の母親が死んで小鳥になつたといふ昔話を聽いたことが、今日まだ私の頭にのこつてゐるので、私はしづかな森の小鳥の聲を聽くと、母のやさしかつた言葉を想ひ出すことがある。
殊にしづかな雪の日には。

十日の旅

汽車が走るにつれて赤い罌粟が日の光りをいつぱいに浴びて、麥畑の間に燃えてゐるのを見出すのも初夏の旅らしい。

麥は熟れてゐる。スロープを描いたクロバの草地には黄牛が寝ころんでゐる。

遠い地平線を見れば、黄麥の上に雲が湧き、「雲無心にして岫を出づ」の句を想はせる。

汽車の響きさへなかつたら、恐らくあの麥畑の空高く雲雀が鳴いてゐることであらう。

六月の麥畑を見るごとに私はTのことを想ふ。千葉の海岸でかれが自殺をした日の午後、私は雨上りの海岸を一人で歩いてゐた。麥の間の小徑にはまだTが歩いた下駄の痕がのこつてゐた。雲雀が鳴き、紫陽花が咲いてゐた。

箱根を越ゆる時、殊に私はTのことを想ふ。かれが自殺を考へてゐたのは中學を出る一二年前からであつた。かれはいつも一管の笛を手ばなさなかつた。かれは詩人であつた。

かれは學校のことを放り出して日向境の山を歩いてゐた。東京に來てからも十國、乙女、裾野、榛名と山から山、野から野を歩いてゐた。

乙女峠で草の中に笛を失つた時かれは泣いたと私に語つたことがあつた。

箱根には野茨の花が咲いてゐる。翠巒の上に乙女峠の草が輝いてゐる。

Tが死んで七年になる。いつも寂しかつたかれの眼が、かれの聲が、かれの溜息が、あのいたましい自殺の部屋が、まだ私の頭にさながらに刻みつけられてゐる。

死んで行つたTの美しい詩人らしい心を想ひ出せば思ひ出すほど、私は自分の心の醜さを思はずにはをれない。

富士は見えない、裾野の一部分が雲の下に遠くひろがつてゐる。桑を積んだ馬が雲の中にはいつて行く。

御殿場であらう。草と杉と桑との間に白い家の壁が見える、れんげ草が咲いてゐる。

忌はしい病氣のために、十九か二十の若い女が家からも、都からも姿を隱してしまつて、この附近の山の病院に逃げてゐるといふ話を或る若い人に聽いたことがあつた。

「女學校時代にも才貌共に羨望の的だつたのです。それが何といふ運命の呪ひか、その女は遺傳的に恐ろしい病を持つてゐたのでした。それでもやつぱり世の中といふものが捨てられないのか、山の病院を出ては時々東京にやつて來るのです。無論たれにも顔も合はせずまたその女がそんな病氣になつてゐることなんか誰も知らないんですが……」

×

二三年前の夜汽車で眞夜中過ぎまで私は靑年とその不運な女のことを語つたことがあつた。私はその靑年がその女に對して何のやうな關係にある人だといふこともほゞ想像することができた。それだけに私はその靑年をも氣の毒だと思はずにはをれなかつた。

涯しもなく裾野の草が雲に濡れてゐるばかりである。

或る寺の聖マリヤの御像が抜け出して、巷に出て行つたといふ外國の古い話のことなどをその時、私は聯想したこともあつた。

どこにその山の病院があるのだらう？

名も知らぬ雜木の花が一面に白く咲いてゐる。卯つ木の種類でもあらうか、野茨は一とかたまりになつては苗代田のあたりにやはらかな葛のやうな枝をしをらせてゐる。

草は裾野を埋めてすく〳〵と靑く伸びるといふよりは天に向つて燃え上つてゐるといふ感じを抱かせる。

二里三里歩いて行つたところで人の影一つ見えさうもない。

その廣い、燃え上つた草の中でたゞ二人の裸體の若い男が赭い土を掘りかへして一本の電柱を樹てゝゐる。今、野から生まれたばかりの原始人の力强さ、男らしさ、自然さがかれ等の日焦けした顏にも胸にも漂うてゐる。かれ等の眼は野獸の如く、また嬰兒の如くも見える。

私はゴッホの繪に見出さるゝあの線の强さを、たくましさを、暗さを想ひ出した。

無限なる野の中に放り出されたたゞ二人のたくましい筋肉勞働者？　一本の電柱！　やがて一本の電柱は天を指さして無限の草原の中に突つ立つであらう。

夜が明けかゝるころ私は中央山脈を見た。去年亡母が危篤であつた時、私は同じ汽車で同じ夜明け方に桑畑の間から遠く中央山脈を見た。

桑畑の上に白く雲をいたゞいた山々が連なつてゐた。美濃飛驒地方の山々であらうか、あの朝の心を思ひ出しながら、私は窓をしづかに明けた。故鄕に待つ母を持たぬわびしさが身に迫つて來る。

伊賀地の山であらうか。遠い麥圃の涯に斜に一脈のかすかな弧を描いて靑くかすんでゐる。山も家もまだ半ば眠り心地である。「鷹一つ見つけてうれし」の芭蕉の句を思ひ、芭蕉の旅心を偲ぶ。

京都に下りぬつもりであつたが、あの東山の黑い塔や、見るからに打ち沈んだ古都の空氣を思ひ出しただけでも素通りするのは惜しいやうな氣がして、わづかの時間で智恩院から淸水にまはることにした。

やつと夜が明けたばかしのやうな朝の氣が、東山に沿うた京の町の半分をつゝんでゐる。霧が深く山をも塔をも埋めてゐる。

オーバーをひつかけても肌寒いほどの朝風に吹かれながら加茂川に沿うて上る。疏水の土堤には柳の嫩葉が草の吐息を想はせるほどにやはらかに俯垂れてゐる。

疏水に沿うて加茂川の磧を眞正面に控へて、隣りから隣りへと夜の歡樂地らしい家の戸が、まだ堅くとざされてゐる。柳に沿うて夜の名殘りの燭だけが白く力なく消えがてにまたゝいてゐる。

低い軒の、暗い格子戸の前には眞つ白な大根を荷車に積んだ男と遍路の女とが立ちながら話してゐる。

×

燕がその低い軒の下から飛び去つてはまた歸つて來る。

木も石も伽藍も一樣に黒い頽唐の影につゝまれてゐる。黒い高い影の下で人々はかすかに動いてゐる。塔の下をめぐる下駄の音までが遠い過去の幻影の世界に私の心を誘ふ。智恩院の奥からは絶えず木魚の音が靄の中を響いて來る。一段二段と磴を踏むごとに私の心は過去に還る。山も塔もまだ暗く靄につゝまれてゐる。お茶湯の大釜の前には二人連の旅人が休んでゐる。

暗い、しかしながら言ひやうもなく端麗莊嚴な須彌壇の前に額付いた刹那に人は宗教と、藝術と、敬虔と耽美と、憧憬と享樂とが融然として一處に結びついてゐる至境の尊さに撃たるゝであらう。

智恩院から淸水へ行く途中であつた。そこは藪の下の窪地になつてゐた。昔、加茂川の磧でさらされた獄門首の捨て場だと車夫は語つた。そこには隱元豆の花が美しく咲いてゐた。

淸水では御札を賣つてゐる男の横柄なのが不愉快でもあり、可笑しくもあつた。

奈良への道は宇治の白い磧が茶畑の間に隱見するあたりがいつの旅にも面白いと思ふ。

この前は秋のはじめころで、あの低い小山には柿が赤く熟れてゐた。山は紅葉しかけてゐた。

今日は白い手拭を冠つた茶摘み女たちが茶畑の中に、宇治川を背にして柔かな點景を作つてゐる。
奈良はいつ見てもいゝ。三笠山の青草と、あさぢが原の芝生と、あの思ひ切つて晴やかな春日社の丹色と。もし細雨でもしづかに灑いでゐたら何んなにかいゝだらうと思はれる。
馬醉木の花はすつかり散つてゐた。
法隆寺は二十年前に汽車の窓からあの塔を眺めたゞけであつた。
小ひさな法隆寺驛から俥を走らせながら私は麥畑の間にあの黒ずんだ塔の影を見ては心を躍らせた。
私たちの祖先人の宗教はいかに尊い藝術的な憧憬に燃えてゐたであらう。あの鵬翼を羽打つたやうな五重の塔の屋根の曲線はまさに天界に翺翔らんとする祖先人の虔ましい、しかしながら明るい、大膽な、力強い享樂的な宗教と藝術の至境を象徴してゐる。麥畑の間に聳えた塔の影を見た刹那に、私はロシヤの寺の黄金の屋根の話を想ひ出した。
恐らくこゝでも菜畑や麥畑の間に旅をつゞけて歩く遍路たちは、どんなにかあの山の麓の塔の影を見出すことによつて慰められ、勵まされたことであらう。
そこには人間の赤裸々な悠久に對する翹望欣求の心が、太い、ナイーヴな、大膽な塔の線によつて語られてゐる。
そこには悠久な實在に對する人間の最も虔ましい讃歌があの山の麓の麥畑の間から何の飾り氣もない節でうたはれてゐる。驚くほどそれは原始的な節奏である。けれどもそれは驚くべき程の偉大さと淳朴さと調和とを持つてゐる。
「夢殿への道」といふ道標を見出したゞけでも、私の心は或る懷かしみを感ずることができる。
麥は刈りはじめられてゐた。白い罌粟の畑越しに、葛城や金剛の山々が夏の光りに靑くかすんでゐる。

×

奈良、法隆寺からの歸り路に私は伊豆にまはつた。

かしこには開かれた山、古びた山寺があつた。こゝにはまだ開かれぬ山がある。五月雨ちかい天城の腰は雲につゝまれてゐる。

私は麥秋といふこゝろをつくぐ味ふことができた。

伊豆の盆地、或ひは天城の谿間までも、或る時は山のいたゞきまでも麥が熟れてゐる。もし靑い夏の山を見ないで、あの黄色に熟れた麥畑の平原だけを見つめてゐたならば、誰が秋と夏とを區別することができよう。麥の上にかゞやいてゐる日の光りも秋のやうに靜かである。平原を埋めてゐる空氣も秋のやうに沈んでゐる。

さくくと麥を刈る鎌の音さへ秋を聯想させる。

伊豆の山には五月雨がかゝつてゐるのに、鶯が啼いてゐる。

日がかげつて來れば谿川を傳うて河鹿が鳴く。それは恰度村の若い男たちが麥畑の道で柴笛を吹いてゐるのを聽くやうなわびしさを旅人の心にわかさせる。

五日、六日ころの月が天城の谿を覗くやうになつた。私は夕方になれば谿川に沿うて河鹿の聲を聽くのを樂しんでゐる。

河の瀨の音につれて鳴く河鹿の聲は懶い初夏の夜を一層懶くする。單調な河鹿の聲の底には人生の無常と、靑春の儚さとを想はせる深い愁がある。

「自然は何ゆゑに、こんなにまで可憐な、同時にこんなにまでさびしい聲を作つたのであらう！」

私は河鹿の聲を聽いて暗い道を宿に歸つて來るたんびにこんなことを考へる。

この二三日、伊豆の谿間では村の若者たちが夜になると笛を吹き始めた。

感謝

私は今地の上に立つてゐる。

芝草は紅葉して秋の陽を浴びてゐる。素足の指に觸れた地は眞冬の寂しい眠りを想はせるほど、冷たく、靜かである。

私は小暗い木蔭の下に立つ。

四十雀の聲、かけすの聲、魚狗の聲、すべて秋の聲はあまりに靜かである、秋の雲のやうに。

私は小鳥の聲を聽く。

どこからあの美しい、あの靜かな、獨語の聲が生まれて來るのか。聲と言つてしまふには、あまりに美しい、あまりに淸淨な聲である。唄である。

私は芝草の上に立つて空を眺める。

何といふ偉大な、そして閑寂な雲の影であらう。

眠りかゝつた午後の空を、絹のやうに白い三條の雲が水平にためらうてゐる。

欅　上の空には無數の綿を千切つて捨てたやうな雲の群がある。

私はラスキンの "Modern Painters" の中の雲の話を思ひ出す。

見てゐる間に形が變つて行く、色合ひが變つて行く。

何といふ偉大な、何といふ無限な自然であらう。

私はたゞ驚きに打たれるばかりである。私は私が生きて、空を眺めてゐることをほんたうに嬉しいと思ふ。ありがたいと思ふ。

草紅葉した原の上に、小ひさな丘がある。そこには紅と白と薄桃色の山茶花が咲いてゐる。黄ばみかゝつた銀杏樹、紅葉した櫻、下葉の焦げたひば、檜、杉などが山茶花の背景を作つてゐる。さらに水のやうな秋の大空が遠景を作つてゐる。そしてこのやうなシインをば渾然として或る一つのゆたかな色が、一つの調子がつゝんでゐる。いや無限の色である。無限の調子である。掘りつくすことのできぬ。

私は枯れ草の上に坐つてこの豐かな自然を眺めてゐる。

私が百年生きてゐたとしても、無限に生きてゐたとしても、この自然の美しさは、神祕さは感じつくせないであらう。私の魂はこの自然の美と神祕さとにむせびさうだ。

私はこの世界に生きてゐることを感謝せずにはをれない。

私の足の下に白い野の花がある。見よ私の頭の上の梢に、最後の葉が、落日の光りに顫へてゐるではないか。

たゞそれだけのものゝ中にも生きて行くことの尊さ、ありがたさを思はせるものが十分ある。

地の上に靄が下りて來た。

かけすの聲、魚狗の聲。何といふ音樂的な聲であらう。

私は靜かにその聲を聽きつゝある私自身の生活を祝福せずにはをれない。

秋の芝草を踏む時

秋の芝草を踏む時、私の心は涙ぐむ。
私は人間として持たなければならぬ色々な苦しい思ひを思ひ出したのである。
人間と人間の間の憎み、憤り、呪ひ。
人は一日一日と憎みの墓を掘り、呪ひの碑を列べてゐる。
振りかへつて見る私たちの生活には、いつも暗い憎みと呪ひと悲しみの道たけが取りのこされてゐる。
生とは憎みと呪ひと悲しみの骸を負うて墓場に行く寂しい葬ひの道ではないか。
かつて心を傷るまでに愛したる者の記憶が、不圖遠き日の旅人を思ひ出すやうに、たゞかすかなる煙のやうな俤となりて、胸に還つて來ることがある。愛とはこんなに儚いものであらうか!
私は私の心を悲しむ。私は明日の私の心をさへ信ずることができない。
この世界で、人間の愛は最も尊いもの、最も美しいものであるにちがひない。その愛すらが次の瞬間には、私にとつて何の力をも持たないものとなつて來る。
かつて愛したる者と、かつて愛したる者とが、その死の寢床に於いて、思ひ出すことすらなしにこの世界から去つてしまふことの可能を信じなければならぬ時、私の心は暗くされる。
兄と弟、姉と妹。かつては同じ爐のはたで母の膝によりかゝつて、やさしい母のお伽噺に眠りこけてゐたいたいけな子供たちが、——あのつぶらかな黑い眼、あの赤い唇、あの可憐な手——二十年の後三十年の後、まるで見知らぬ

人たちのやうに、冷たい眼で見合ふことがあらうとは誰が想像することができよう。

「自分は正しいのだ」人はいつもかう思ふ。そして自分の憎み、呪ひを是認しようとしてゐる。

けれども、人を憎み、人を呪ふ心は、かれ自身のすべての善を打ち消してしまふ。それはたゞ一つの愛が、すべてのかれ自身の惡を償うてしまふのと恰度いゝ對照をなしてゐる。

この世界にはあまりに正しい人々が多い。人を殺す者も、人を怒る者も、人を呪ふ者もみな自分を正しいと思つてゐる。

この世界にはあまりに寛容さが少ない。この世界にはあまりに惡人が少ない。

ラスコルニコフの悲しみを持てる人、ソニヤの罪を悔ゆる人のあまりに少ないことを思はずにはをれない。

この世界にはあまりに正しい人、善人、サドカイ、パリサイの徒が多い。

私は善人の國を欲しない。正しい人の國は住むに息苦しい。私の魂は窒息しさうだ。

私は罪人の國に住みたい。ラスコルニコフやソニヤの國に住みたい。學者や道德家の世界に住まないで、マグダラのマリヤの國に住みたい。

私たちの現在の世界は、寛容を持たぬ正しい人のみの世界ではないか。

「自分は正しい」かう信じてゐる人たちは、夜も晝も憎みと憤りのメスを研いでゐる。私の胸を夜も晝も正しい人々の憎みのメスが貫いてゐる。

私は生の孤獨を思ふ。呪はれたる者の寂しさを思ふ。

枯れ草の上を歩いてゐる私の心は暗くされる。

けれども私は生きてゐることを感謝せずにはをれない。何の爲であるか、私にも知ることはできないが。

孤獨であればこそ、苦しめばこそ私は心から靜かに芝草を見、秋を見、人生を考へ、悠久を想ふのではないか。
生まるゝ時、私は木の葉一枚携へては來なかつた。
見よ、野の草、秋の空、夜の空、すべて今、私のものではないか。
私の心は人の憎み、呪ひを思ふ時暗くされる。しかし、私は一文の値を拂ふことなしにいかに悲しみの尊きかといふことを味ふことができた。悠久を思ふ心を賦へられた。秋の野を、秋の空を。
私は生きてゐることをありがたく思ふ。

×

日暮れころであつた。
私は玉蜀黍畑の傍を通つてゐた。
重い荷を擔いだ女が暗がりの中から出て來た。私は亡くなつた母を思ひ出した。私の母もよく重いものを擔いで、貧乏な生活を苦しんだ人であつた。
畑の中につくねんと立つてゐた寂しい母の俤が浮かんで來た。
自然は、あの心の弱いやさしい母に對してあまりに冷酷であつた。
私は玉蜀黍の傍に立つて泣いた。
私は暗い道を歩いてゐた。母を泣く心、悲しむ心をあたへられた夕暮を感謝しつゝ。

キリストの言葉

H兄。

この梅雨のせゐか例の神經痛がぼつ〱おこつて來ましたので、ペンを握ることさへ苦痛な日があります。右手の指先から、手首、臂、肩、頸、やがて右の足といつた風に痛みが追々に迫つて來ます。頭が痺れて來ます。ペンを擱いてはしばらく肩を叩いてゐます。悪血が肩に凝滞してゐるやうな氣がします。

今朝私は石川啄木の後援會から、啄木の碑の繪葉書を數枚送つて貰ひました。

「朝な朝な撫でてかなしむ下にして寢た方の腿のかろきしびれを」

といふかれの歌がありました。

病人でなければ味ふことのできぬさびしさであります。さらに詮じつめて言へば啄木自身でなければほんたうに感じることのできないさびしさであります。私たちはたゞ自分の病氣にひきくらべて想像するだけのことです。

ところで私たちの思ひやりだの、想像だのといふことが、實は隨分的を外れてゐることをこのごろだん〱多く氣付くやうになりました。

先日或る新聞の死亡廣告に、その遺族の人々の名で「八十五歳の高齢を以て目出度死去云々」といふ文字がならべてあるのを見たことがありました。

第三者から言はせると八十五歳で亡くなつたといふことはお目出度いことであるにちがひありません。けれどもほんたうな子の心としては、たとひ親が百で死んでも、百二十で死んでも決してお目出度くはない筈です。この心持ち

はほんたうに親を失つた人は誰でも直ぐ合點がゆくことだと思ひます。

親に別れないまでは、親を失つた者の悲しみの深さといふものはたゞ想像だけに止まつてゐます。實感としては訴へて來ません。ですから親を失つた人の心持ちは、ほんたうはわからないのです。

親が死んだといふことは、子にとつては少くとも世界の大部分が空虚になつたことになるのです。ですから、親が死んだ後では、自分等の生といふものに對する執着が餘程うすらいで來ます。いつ死んでもいゝといふやうな氣にもなります。

これは妻を失つた人、子供を失つた人の場合にも同じことであらうと思ひます。

私は夫に死に別れた若い女が、一人の子を殘して夫の墓場で自殺をしたことを知つてゐますが、このやうな心持ちは第三者から言はせると夢であり、精神錯亂であるかも知れません。しかしそこには最も尊い人間的な心が動いてゐるのです。そしてそれは決して第三者の批判をゆるさないほど嚴肅なものであります。その女にとつては動かすことのできない最深の事實であります。

子供を失つた親の狂氣染みた振舞の中には第三者が窺ふことのできない最も嚴肅な事實の世界がある筈です。第三者から見れば、それが狂氣染みてゐたり、作り事であるやうに思はれるにちがひありませんが。

私は去年溫泉嶽に上りました。その時、七廻りの池といふのを見ました。或る坊さんが死んだ稚兒の俤を追うて七日の間池のまはりをめぐつて、狂ひ死んだといふ傳說がそこにのこつてゐるのです。

この僧の心持ちにしても、傍から見れば狂氣染みてゐるかも知れませんが、本人から言へばそれこそ絕對唯一の事實なんです。

一昨年の秋でした。私は故郷に歸りました。故郷の甥の土産にと思つて銀座に行つて玩具を買つて行きました。甥を

も私が東京から玩具を買つてかへることを樂しみにして待つてゐたのでした。ところが私が銀座で玩具を買つてゐた日の午後、恰度私が銀座を歩いてゐたころ、甥は急病で死んでしまつたのでした。
一週間ばかり前です。雜司ヶ谷にゐる私の友人の弟もたゞ一日の病氣で死んでしまひました。
一日生きてゐれば、一日生きのびるだけ、私たちはこんなことがあり得ようかと思ふやうな人生の奇蹟を多く見せつけられます。まつたく人生は奇蹟の連續です。奇蹟こそ實は絶對の事實なのです。
この奇蹟を實感したことのない人たちは、奇蹟を見せつけられた時、夢であるといひ、詩人の空想であると評します。
人の悲しみを、人の苦しみを概念的に批判し盡すといふことは恐ろしいことであるといふことが、このごろ漸やく私にもわかつて來たやうです。

×

昨夜からトルストイの宗教論を讀みかけてゐます。
キリストの山上の説敎が三十幾歳になつて、まつたく新らしい意味を持つてかれの心に映つて來たとトルストイは言つてゐますが、一年なり、二年なりの間を置いて讀むごとにキリストの言葉は私たちに一層深い意味を持つて來ます。これはキリストの言葉ばかりではなく、すべてのいゝ言葉、いゝ藝術はさうである筈だと思ひます。

塚も動け我泣聲は秋の風

芭蕉のこの句を見て、最初の四字だけが或る人にとつてはハイパボリカルな言葉だと思はれるかも知れません。しかしほんたうに人を失つた悲しみを實感した者にとつてはこの四字はなくてはならぬ事實の言葉となつて來ます。

死もせぬ旅寢の果よ秋の暮

愚案ずるに冥途も斯や秋の暮

涙なしには讀むことのできない句です。この句の心持ちがわかつて來たと思ふのも、つひ近年になつてからのやうです。しかしもつと私の生活に悲しみが湧き、苦しみがつのれば一層この句の味がわかつて來るのでありませう。

トルストイが宗教論のなかで言つてゐますやうに、私にとつても山上の說教はいつも新らしい意味を持つて來ます。それはキリストの言葉を受け容るゝ私たちの心の世界が前よりもだん〳〵拓かれて來るからであることは言ふまでもありません。

いろ〳〵な苦痛な經驗を積み重ねた人ほど山上の說教を意味深く感ずる筈です。

トルストイは馬太傳五―七章の說教は誰にでもわかるやうに最も平易に述べられてあつたと言つてゐます。あの言葉はトルストイにとつて大發見でありました。私たちにとつてもまた大發智の言葉であります。

キリストの言葉は嬰兒にわかる言葉でありました。それを神學上の色々なむつかしい學說などから解かなければならないと考へたのは、人間の行爲がすべてキリストの言葉と矛盾し、その行爲を無理に是認しようとつとめたところに原因してゐます。

馬太傳五―七章の山上の說教は神學上の砂を嚙むやうな概念の羅列によつて解くべきものではありません。あのキリストの言葉は、一つ〳〵私たちが感ずるか、感じないかによつて、その深さ、その偉さが出て來るのです。

あの言葉を知るといふことはどのやうな不信の徒にもできることです。しかしあの一つ〳〵の言葉を如實に、實感するといふことは選ばれたる人でなければできないことです。

あの言葉はパリサイの徒も聽くことはできました。けれどもあのキリストの言葉を感じたものはガリラヤの湖畔の數人の漁夫と、嬰兒ばかりでありました。

あの日、キリストの第一の言葉は「心の貧しき者は福なり天國は卽ちその人のものなればなり」（馬太傳第五章第三節）でありました。

パリサイの徒は、キリストのこの言葉を譬喩であると考へました。漁夫や嬰兒はキリストの言葉をそのまゝに事實として受け容れました。トルストイもこの嬰兒や漁夫と同じやうな態度でキリストの言葉を受け容れようとつとめました。

パリサイの徒はキリストのこの言葉をも譬喩として聽いたのでした。かれ等はキリストの言葉をそのまゝに受け容れることは到底人間には不可能であると考へたのでした。

「凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したるなり」（馬太傳第　章第二十七節）

嬰兒やトルストイはキリストのこの言葉をそのまゝに受け容れようとしてゐるのでした。

「惡に敵する勿れ、人なんぢの右の頰を打ば亦ほかの頰をも轉して之に向けよ」（馬太傳第五章第三十九節）

トルストイの無抵抗主義も畢竟嬰兒の心を以て、キリストのこの言葉を聽いたところから生まれて來ました。

トルストイは私たちに註釋なしに聖書を讀むことを敎へました。

「汝等天空の鳥を見よ稼ことなく穡こともせず倉に蓄ふることなし……」（馬太傳第六章第二十六節）

このキリストの言葉を實感として受け容るゝことができた時、私たちは西行にも芭蕉にもキリストにもなることができるでありませう。

ほんたうにこの言葉を絕對の最後の事實として受け容るゝだけの心の準備ができた時、私たちは始めて山上の說敎がわかつたといふことができるのでありませう。

山上の說敎はいつも私の心を叱責します。同時にかすかではあるが遠い世界に慰めの光りをほのめかしてくれます。

私たちの心に映つて來る世界が醜くなつて行けば行くほど、山上の說敎かしみ〲と味はゝれます。私たちのいろいろな人間的な苦しみがつのればつのるほどキリストの言葉が胸に實感として響いて來ます。キリストの言葉は感じる人にとつては全であり、感じない人にとつては空であります。素直な心、嬰兒の心にはキリストの言葉は、そのまゝで事實であり、眞理であり、力であります。

魂の香

東京を出てから恰度半月ばかり旅を歩いてをります。昨日は長崎から東海道に引きかへして、日が暮れかゝるころ伊豆に來ました。天城のいたゞきが暗い空にかすかな輪廓を投げてゐました。私は車に搖られながら狩野川に沿うて山の麓を走りました。川の面には霧がこめてゐました。

私は故郷で別れて來た父のことや、人生といふことや、それからそれへといろ〳〵のことなどを考へました。私は時として人生に對してかなり希望を抱くこともあります。けれども夕暮の旅などでは果して人生といふものにはそれほど希望があるものであらうか、などゝいふ消極的な考へを多く抱かせられることがあります。トルストイのやうな理想家たちは人類の未來に對して明るい希望を持つてゐますやうですが、私は何うもあんなにまで明るい希望を持つことはできません。

それかと言つて人生には生きてゐる價値がないものだなどゝそれほど虛無的な心にもなれません。人生を墓場であるかのやうに見るには、人生はなほ多くの尊いもの、蠱惑的なものを持つてゐるからであります。たとへば殺人者ラスコルニコフと汚されたソニヤの間に見出された人間的な心のうるほひであります。人間的な魂のひらめきであります。魂の香であります。

私のやうな人間にはいつも絶えず人生に對して同じ緊張さを持つて希望をつないで行くことはどうしてもできません。病的かも知れませんが、神に對して生きてゐることを心から感謝したくなる時もありますが、同時に何で自分は生存といふものを賦へられたらうかなどと思ふこともあります。死といふものが殆んど少しも恐ろしくも悲しくもな

くなつて來るやうなこともあります。

年と共にこのやうな死を恐れない心が強くなつて來るやうに思はれます。けれどもまた一方から考へるとそのやうな暗い心が强く湧いて來るにつれて生そのものゝ姿なり、感じなりが幾分づゝはつきりと私の實感となつてあらはれて來るやうです。

人間の心といふもの、人生といふものは、少年の日に考へてゐたほどに美しいものではなかつた。こんなにまで醜いものかといふことが、何よりも第一に自分自身の心のうちに見出されて來ました。しかしこれがために人生そのものゝ蠱惑は多くこそなれ、少くなることはありませんでした。「宇宙は對照なしには存在しない。善と惡、靈と肉、理智と勢力……」といふやうなことをブレークは語つてゐますが、この世界から苦惱が除かれ惡が滅び肉が失せてしまつたとしたら、どんなにか人生は單調なものでありませう。

たとへば夫婦の愛、戀人の間の愛といふやうなことを、詩的にのみ考へるやうなそんな樂天的な見方は今日の私たちには何うしてもできません。人間の愛は到底エンゼルの愛ではない。そこには征服欲があり、所有欲があり、獸的殘忍性が潜んでゐます。ですから一歩誤まれば、かつて最も深い愛を持つてゐた戀人ほど最も深い憎みを持たなければならなくなります。かつてその戀人のために自分の生命をさゝげようとした男がやがてその戀人を殺すといふやうな矛盾が最初から人間の戀愛の中には潜んでゐるのです。戀人は一年後の或ひは一時間後のかれ自身の心を信ずることすらもできないのであります。或る人はこの人間の心を淺猿しいと思ふでありませう。賴りなく思ふでありませう。

けれども人間のこの淺猿しい心、賴りない心のうちからこそすべての藝術が生まれ、宗教が生まれて來るのではありませんか。人間の心ほど不可思議なものはありません。人間の心のうちでは神と惡魔とが一緒に手を握り合つてゐます。天國と地獄とが結婚をしてゐます。私たちは時として人間の心から地獄の呻き聲を聽きます。同時に人間の心

から天國の福音を聽きました。

善惡といふやうな大ざつぱな差別の立て方によつて定義するには、人間の魂はあまりに不可思議なものです。あまりに深いものです。複雜なものです。人間の魂はあまりに微妙な味を持つてゐます。デリケートな香を持つてゐます。感觸を持つてゐます。

神といふやうな正しいもの、澄んだもの、淨いものでないだけに、人間の魂は無限の陰影を持つてゐます。神が持たないものを人間は持つてゐます。たとへば罪を悔ゆる心、涙、懊惱、憎惡、溺愛……これ等の心はすべて人間なればこそ持つことのできるものでありませう。そこに微妙な人間の生活の味があります。人間の魂のあやがあります。神は清冽な川の單調さを想はせます。人間は濁流の醜さと共に無限な變化を想はせます。寂寞を想はせます。神は秋の夜の天界を想はせます。人間は春の夜の懶き地上を想はせます。そこに人生そのものゝ深い豐かな魅惑が潜んでゐます。近松の藝術、ドストイエフスキイの藝術はその懶き地上の世界から生まれて來ました。

私は或る時は神を信じます。或る時は神を見失ひます。けれども人間の世界に生みつけられ、生きてゐることに對してはいつも涙ぐましいほどの感謝を感ぜずにはをれません。生きることはあまりにうれしい、同時に生きることはあまりに苦しい。しかしあまりに苦しい生存であればこそ、靜かに苦惱に打ち勝つて行くことの雄々しさに自分を顧みていたはりもし勵ましもしたくなります。到底私たちの最後のステップは墓場である。その墓場に入る日まで靜かにすべての苦惱を忍んで行く人間的な生活に悲劇的な莊嚴さがあります。何も女々しいことを言はないで、ぢいつとすべての人間的な苦惱を忍んで靜かに確實に人生を生きて行く人たちの行爲くらゐ雄々しいものはありません。

人生を概念的に生きて行かうとする人があります。或る時は無智、無感覺から、或る時は、強ひて苦痛を避けようとする弱い心からこんなことになるのでせうが。

人生の苦惱に對して、私たちはできるだけ銳い感受性を生かしてゐなければなりません。苦惱を避けようとする弱い心を無理にも引き立てゝ、いつも苦しみに對して正面しなければなりません。どうせ、どのやうに苦しんでも、辱められても、結局いつかは死が私たちに永久の安息をあたへてくれます。苦しめば苦しむほど、苦しみに對して銳い感覺を生かせば生かすほど人生そのものゝ味が實感として湧いて來ます。人間の魂の香といふものが感じられます。神の國を見出すことはできないかも知れないが、人間の魂の香だけは、涙を通して、苦惱を通して味ふことができます。人間の魂の香を感じるといふことは人生に於いて人間にあたへられた唯一の神のめぐみであります。

「たいていの人は一生他人で終つてしまふ。」といふやうな言葉をワイルドは語つてゐますが、私たちは先づほんたうな自分といふものを摑まなければなりません。自分を摑むといふことは自分自身の人間的生活を、自分自身の實感によりて味ふことであります。自分自身の銳い批判によつて生活の苦惱を意識することであります。あらゆる人間生活の惡、醜、矛盾、殘忍を通して、自分自身の人間感を生かすことであります。他人の哲學によつて、人生を概念化しないで、自分自身の直觀によつて、瞑想によつて、忍苦によつて、實感によつて、生きたる人間生に身顫ひを感ずることであります。即ち人間の魂そのものゝ香に擊たるゝといふことであります。

身顫ひすることを知らぬ人は、一生ほんたうな自分の生活を持たないのです。他人によつて發見せられた千の眞理よりは、自分の惱、愛、憎、涙、歡喜によつて自分自身實感したるたゞ一つの眞理が無限の價値を持つてゐる筈です。自分の實感によつて見出された眞理のうちにのみ人間の魂の香は感じられます。

殺人者ラスコルニコフと汚された女ソニヤはたしかにかれ等二人の間に燃やされた愛によつて、苦惱によつてたゞ一つの眞理を實感しました。かれ等の魂は身顫ひを感じました。

かれ等は自分自身に摑み得たたゞ一つの眞理によつて生くる價値を知りました。

人間の心についての空想

年一年と年をとつて行くにつれて人生の相(すがた)といふものが、概念的なものから漸次實感的なものとなつてゆくことを知るやうになつた。詩から散文への移り變りが、私の人生觀の上へあらはれて來たやうに思ふ。

かつては人生を見て私は泣いた。笑つた。胸を躍らせた。けれども私の胸は滅多に躍らなくなつた。私は人生を見ても滅多に涙を落すこともなく、笑ふこともなくなつた。私は人生に對して無關心になつたのであらうか。

私はさうは思はない。私は前よりは一層人生に對しては無關心ではをれなくなつたのである。私は一日も人生を考へないではをれなくなつたのである。

私は前よりは一層細かな注意をもつて人生を見る。私の注意がこまかになればなるほど、私は笑ふことも、泣くことも、うたふこともできなくなる。

私の目の前にあらはれて來た人生は、泣くにはあまりに深く、うたふにはあまりに嚴肅(げんしゆく)である。

私は多くの人生の矛盾を見る。醜さを見る。殘忍さを見る。けれどもそれ等の醜い相(すがた)の底には涙を落すにはあまりに深い或る物がある。私はたゞ靜かに、驚きの眼を瞠(みは)つて暗い醜い生活面を凝視するばかりである。人生の醜惡そのものゝ底には人間の單なる感傷以上のものに訴ふべき嚴かな或る物が潜んでゐる。それは殆んど人間の理智的批判をゆるさない本然的な或る物である。

人生の醜惡な方面が一層深く意識せられて來たと同時に、人生の美しい方面が以前よりは私の胸に一層はつきりと

映つて來るやうになつた。これは私にとつて、この上もない大きな惠みであると思ふ。

かつては私は人生を、無心にうたひながら歩いて行つた。そこは五月の野のやうに光りに充ちた世界であつた。私は今冬枯れの世界を歩いてゐる。もう私は無心にうたふことはできぬ。私が歩いてゐる徑には、光りは褪せ、草は枯れてゐる。私はたゞ落葉のかすかな音を聽くばかりである。けれども私は今では落葉を踏む私の輕い跫音の一つ一つをすら感謝の心を持つて聽いてゐる。私は、僅かに取り殘されてゐる落日のかすかな光りの一つの吐息に對してすら心からの感謝をさゝげたいと思ふやうになつた。

日が落ちかゝつてゐる。武藏野の冬木立の間に。

黑い土の荒地を隔てゝ私は木立の中の落日に對して立つてゐる。

「日は落ちる。私もやがて死なゝければならぬ。人類がつゞくかぎり、幾多の青年が落日を見て、私と同じ感慨を經驗するであらう!」

このやうなことを考へて私は幾度か心を暗くしたこともあつた。現在もまた私の心は落日を見るごとに暗くされる。けれども私は、同時に、私が死んだ後にも幾多の青年たちが、恐らく無限に、私と同じやうな感慨を抱くであらうことをも、一つの不可思議な、嚴肅な生そのものゝ實相として靜かに觀照する氣持ちを味ふことができるやうになつた。生まるゝこと、苦しむこと、うれしいこと、美しいこと、惱ましいこと、死ぬること、すべてが私にとつて昨日よりは深い意味を持ち、確實性を持つたものとなつて來た。

×

1+1=2…… この眞理は今まで私にとつてはたゞ概念としてのみ與へられてゐた。私はこの概念から出發して、或る時は一つの恒星と他の一つの恒星との和は2であるといふことをも知つてゐた。信じてゐた。それは大きな、殆ん

ど無限大な世界についての確信であり、知識であつた。

しかし、その知識はいかに大きな概念であつたにせよ、畢竟どこまでも概念に過ぎなかつた。たとへ私はAの星とBの星の和を2であると信じても、月と太陽との和が2であることを信じてゐたとしても、その知識は、私の髮の毛一本どうすることもできなかつた。

私は一つの林檎を見出した。私はさらに他の一つの林檎を見出した。私は一つの林檎と一つの林檎の和が2であることを、私の手の平の上で實感することができた。

それはほんたうに小ひさな經驗であつた。たゞ二つの林檎についての經驗であつた。けれども私はこの小ひさな二つの林檎についての經驗を尊ばずにはをれない。

二つの林檎についての私の經驗は、何といふ小ひさな經驗であらう。かのA星とB星との經驗に比べて。しかしながら、二つの林檎についての私の經驗はどこまでも生きた經驗である。生きた實感である。生きた世界の所有である。

私はたゞ二つの林檎についての私の實感をこの上もなくありがたいことであると思ふ。

×

1+1=2……といふことは眞理である。けれども人間の魂の場合に於いては必ずしもそれだけが眞理であるとは云へない。

一つの魂と、一つの魂の和は2でなくて、1であることを私は信じないではをれない。無論これは譬喩的な云ひ表はし方であるが、「二つの林檎は二つであるが二つの魂は一つにもなり得る」と云ふことができると思ふ。

この不合理的合理性は神と人間との間に於いて、人間と人間との間に於いてたしかに證明することができる。

神と人類、一人のキリスト或ひは佛陀と、全人類との和もまた1である。
人間の魂の働きほど奇蹟的なものはない。
人間の魂の奇蹟をほんたうに探り得ることのできる人こそほんたうに人生を生きた人である。
人間の魂の美しさを知るといふことは、人間の魂の奇蹟を探り得たといふことでなければならぬ。たとへ概念的に全世界を探り知ることのできる知識を持つてゐる人であつても、實感的にたゞ一人の人間の魂の奇蹟を掴むことは必ずしも可能ではない。
パリサイの學者たちが掴み得なかつたキリストの奇蹟を掴み得たものは、無智なマグダラのマリヤであつたことは、私たちに面白い暗示を語つてゐる。

×

人間の醜い心は恐らく惡鬼以上であらう。同時に人間の美しい心は菩薩そのものであらう。
昨日私が想像してゐたよりも、今日は一層強く人間の心の醜さといふものが感じられて來た。同時に人間の心の美しさも一層深く感じられるやうになつて來た。
たゞ一人の人間の心の美しさは、世界のすべてのものを掩ふに足るだけの光りを持つてゐる。私はこのごろこのやうな實感を、まだきはめておぼろげながら、持つことができて來たやうに思ふ。
無論たゞ一人の人間の醜い心が全世界の美しい花を枯らしてしまふものであることをも、私は知るやうになつたが、たとへ千の醜い心があつてもこの世界にたゞ一つの美しい心があれば、私たちの世界は決して光りを失はないことを信ずるやうになつた。
私がこのやうに一人の人間の美しい心の光りを高く見積ることを、或る人は空想だと思ふかも知れない。

けれども佛陀の涅槃もキリストの天國もこの空想から生まれたものではないか。否、空想ではない。知識以上の、たしかな實感ではないか。

トルストイの「イヷンの馬鹿」の思想を不可能な空想として笑つた人はたくさんあつたであらう。しかし「イヷンの馬鹿」の王國は決して不可能な空想ではなかつた。世界は日一日と「イヷンの馬鹿」の王國へと進みつゝあるではないか。

どのやうに高い、どのやうに大きな空想であらうとも、それが人間のものであるかぎりは、決して神の仕事にまで手を伸ばすことはできない。神の仕事はいつも人間の空想以上に、大きな、確實な空想の上に築き上げられてゐる。人間がどのやうに大きな空想を描いたとしても、人間の空想は到底、神の仕事の無限さにまで手を屆かせることはできない。

人間の愛についての空想、人間の魂の美についての空想は實はまだ人間の愛そのもの、人間の魂の美そのものゝすべてをつゝみ得てゐない。人間の心の美しさは私たちの空想を絶してゐる。

人間が描く最善のユートピヤは、神の最も貧しい寒村に過ぎない。

私たちは人生に對して、もつと〱大膽な、親切な空想家的見方を持たなければならぬ。私たちはまだあまりにいぢけた心を以て人間を見てゐる。

「嬰兒の如くあれ」と云つたキリストの言葉はいつも生きた言葉である。

私たちはかすかに過去の日の世界を記憶してゐる。かつて私たちの少年時代に、私たちの眼に映つた世界はどんなに美しかつたであらう。

そのころ私たちの心に映つた母の眼、月の光り、水の流れ、雜草はすべて惠まれたものであつた。今よりはずつと

すべてのものが光つてゐた。私たちの頰を撫でゝ行つた微風すらがこの上もなく尊かつた。

それ等はみんな少年の夢であつたらうか。

否、それは現實以上の現實であつた。めぐまれた者の現實であつた。

私たちの眼は濁らされて來た。私たちの眼は輝きを失つて來た。私たちの眼は鹽辛い淚のために傷つけられてしまつた。私たちは素直に物を受け容れることができなくなつてしまつた。

けれども私は感謝する。鹽辛い淚に傷つけられた眼にも、なほ明かに映つて來るほど、人の魂の美しいことを。

たとへ私たちの眼が何物をも見ることのできない盲になつたとしても、神は私たちが生きてゐる間は、私たちの耳を通して、觸覺を通して、否、直接魂より魂を通して人間の心の美しさを實感せしむるであらう。

醜惡に充ちた人間の心の渦の中に、神そのものゝ美しさを見出し得た刹那に、私たちは神をたゝへないではをれない。

祈りとは何であるか。

祈りとは神への哀訴でもあらう。懺悔でもあらう。

しかしながら祈りの中に感謝の言葉を見出すことのできない人は最も不幸である。

美しい人間の心を賦へられたることに對する感謝、罪の底に蠢めいてゐる神の心を見出し得たることに對する感謝、母の美しい眼をあたへられたることに對する感謝、美しい友をあたへられたることに對する感謝……、私たちの祈りをして感謝に充たしめよ。

×

日は落ちかゝつてゐる。

私は故郷の父を思ふ。亡母を思ふ。きやうだいを思ふ。私の周圍の心の美しい人たちを思ふ。
人を思へば思ふほど一方に於いては孤獨さを感じる。孤獨は時としては、私を死以上の寂寞にみちびく。
けれども私は思ふ。
私が孤獨である時も、私をめぐつてゐる人々の美しい心は絶えず私の上に美しい波紋を描いて流れてゐる。
私の心はたゞそれだけで滿足させられる。
私はたゞひとりで生を感謝しつゝ死ぬことができると思ふ。

子供等

「坊(ぼ)つちやん、もうおうちへかへりませう。」と婆やがいつた。
子供等はみどりの小山の上にあそんでゐた。
「まだお日様があるんぢやないかッ！」子供はかういつた。
落日はまだみどりのをかの上にかゝつてゐた。
「それではおあそびなさい。」
ふたゝび子供等は草の上をたのしげにとびまはつた。最後の日の光りがたゞようてゐたまで。
このやうなシインをブレークの詩でよんだことがある。
小鳥と共に日をさますものも子供等である。太陽と共にをどるものも子供等である。落日の最後の光りまで草の中をかけずりまはるのも子供等である。光りにめぐまれ、土の香にめぐまれ、やはらかな春の風にめぐまれるのも子供等である。
太陽の光りのいかにうれしく、いかになつかしいかを知るのも子供等である。
雪がちら〳〵とふつてくればをどり、風がふいてくれば路次(ろじ)中を走りまはつてうたふのも子供等である。椿の花に來て鳴くめじろの眞似(まね)をするのも子供等である。落ちた椿の花を糸に通して、花輪を首にかけては王様のやうな幸福な心を持つことのできるのも子供等である。
かりんの花がさき、ざくろの花がさいたのをほんたうに驚異の黒い瞳(ひとみ)をみはつて小半日窓から見つめてゐるのも子

供等である。

賣られてゆく仔牛の背に秋の雨がそぼふつてゐるのを窓からながめてゐるのも子供等である。

土堤下の廣場で伯樂たちが馬をかけてゐるのを不思議さうにながめてゐるのも子供等である。

そらまめ畑の隅に死馬をはうむるために深くほられたばかりの穴をのぞいて、しやがんでゐるのも子供等である。

野火を眺めて未知、神祕の世界を夢にえがくのも子供等である。

母の背から小ひさな手をのばして、空のお月さまが手にとれると信じ切るのも子供等である。

地震があつても、大風がふいても、母といふものゝ懷を無限に信頼することのできるのも子供等である。

父の懷からとり出されたおみやげの獨樂一つにも世界中の光りをあびたやうな幸福を見出すことのできるものも子供等である。

兵隊さんと、玩具店のセルロイドの人形とを一緒くたに考へて、世界中の幸福といふ幸福を黑いひとみに見てゐるのも子供等である。

やがて子供等が娘となり、靑年となり、母となり、父となる時、かれ等は太陽の光りを知らない。落日を見ない。やはらかな風を感じない。小鳥の聲をきかない。

遠い日にわかれた人を思つてたまにさびしい涙を目にためることがあつても、かれ等は「この氣まぐれな心」を自分で笑殺する。

子供等の心を失つた人間ほどあはれなものはない。生活に迫はるゝ大人の目はいつも黑い土ばかり見つめてゐる。

「空には星があつた！」一年に一度くらゐ、不圖夜の空を仰いでこんなことを思ひ出すこともあるが。

幻影の旅

性といふ問題が二三年來むしろ不愉快なほど論ぜられた。私はこのことについて今日まで殆んど一言も書いたことも、話したこともない。將來も恐らくこのことについて書くこともないであらうと思ふ。私にとつては、それはあまりに概念的に議論するにはデリケートなものであり、尊いものであり、神祕的なものであるからである。

宗教といふことがまた急にこのごろの流行問題となつて來た。性を考へるといふこと、宗教を考へるといふことは、一面から見れば人間が眞面目に人間といふものを觀察し、思惟するやうになつたといふことを意味するのであつて、人間そのもののために祝福すべきことであると思ふ。けれどもこれ等の重大問題が、ジヨーナリズムのために左右せらるゝところの流行的傾向を取るに至つては、むしろその浮薄な流行を悲しまずにはをれない。

親鸞もいゝ、キリストもいゝ。けれども親鸞の宗教の偉大なところ、キリストの宗教の生きてゐるところは、親鸞ほどの苦惱を嘗めた人、キリストほどの愛に燃えた人でなければほんたうに味ふことはできない筈である。安價な小苦惱をもつて親鸞の救ひを得、キリストの救ひを見出さうとするものは邪道に落ちなければならない。淺い、イージイ・ゴーイングな自卑的な考へから出發したのでは他力本願の宗教も何を私たちに與へようぞ。小ひさくとも、卑しくとも、自分は自分だけで自分の救ひを見出すだけの苦惱を忍ぶ者でなければキリストの弟子にも、親鸞の弟子にもなれないであらう。

「主よ、主よと呼ぶ者必ずしも天國に入るあたはず。」とキリストは言つた。

シヤロウなイージイ・ゴーイングな宗教心の流行は必ずしも人間を祝福はしない。

迷ひ、苦しみ、惱み貫いた底から或る世界が生まれて來なければならぬ。

恐らくそれは更に深い惱みと暗の世界であるかも知れない。けれども私たちはそれを恐れてはならぬ。眠つた天國よりは、生きた地獄を私たちは愛する。

×

しばらくの春の旅からかへつて來たばかりのせゐか、何となしに心までが疲れ切つたやうな氣がしてならぬ。家を出る時はまだ冬枯れの草の氣色が殘つてゐたが、もうすつかり春も闌けてしまつた。

旅にゐる間は東京の家がこひしかつたが、さて家に落ちついて見ると再び旅がこひしくなつて來る。

旅には誰も知つた人もなかつた。けれども旅では誰とでも打ち解けた心で話しかけてゆくことができた。心細いこともあつた、それだけに豐かな自由さを持つことができた。

私は春になれば——殊に野が靑くなつたり、水邊の葦が輝いて來たりすれば——いつも人類の祖先たちの遊牧時代の生活を想ふ。人類の祖先は餘程長い間草と水を追うて遊牧生活を送つてゐたことであらう。そのころの原始人の血が私たちの血管のなかに今もなほ眠つてゐるのであらう。それが春になれば再び私たちの血のうちに眼ざめて來るのであらうか。春になれば、殊に水が輝き、草がかをるやうになれば、旅を思ふ心が切に湧いて來る。

靑い草原に劃られた水平線上の白い雲がどんなにか、原始人の心を遠い南方へと蠱惑したことであらう。

その白い雲の蠱惑が、今もなほ私の血管の中に感じられる。

欅も、銀杏も、ヒマラヤ杉も、躑躅も、茱萸も柔かな芽生えを油のやうな四月の日光に輝かしてゐる。

黒い土までが柔かな日光と柔かな草につゝまれて、そこからは素絹のやうな陽炎が燃えはじめて來た。
私の皮膚を撫でゝ行く柔かな微風が、冬の間脅かされてゐた私の心の底の思ひ出を喚びさまして遠い地平線の靑い草原を見せる。
私は靑い草原に劃られた地平線を愛する。
私の心の底に眠つてゐた靑春が再びよみがへつて來る。
私は昨夜遠い日の夢を見た。昨日逢つたばかりの人の夢を見た。
靑い草原の地平線を見ながら、私は遠い日に別れてしまつた人を思ふ。
地平線の上の白い雲を見ながら、私は昨日逢つた人の俤を思ふ。
私の心の底にはまだ靑春の悩ましさがとりのこされてゐる。悲しくもあるが、うれしくもある。
四月の草の上に立つて地平線を見ればかすかにも私の心臟は波打つ、誰を戀ふともなく、誰を思ふともなく。
ひよい〳〵と糸のやうに伸びた楡の列樹が、水に沿うて光つてゐる。
楡の芽生えが白い雲をバックにかをつてゐる。
地平線が低く、そして遠く沈みかゝつてゐる。
私は遠い日に別れた人を思ふ。
昨日逢つた人を思ふ。
このまゝに別るゝことのあまりに寂しきを思ふ。

渡り鳥のやうに

渡り鳥のやうに自由に、年中旅から旅を經めぐつて歩くことのできる放浪者をなつかしく思ふことがある。

またそのやうな放浪者の心理がわかるやうな氣持ちもする。

アーサー・シモンズの詩のなかにはよく放浪者のことだの、ヂプシイのことだのがうたはれてあるが、旅人だのヂプシイだのいふ名を思ひ出しただけでも、若い人々の胸は波打つであらう。

近代のいたましい耽美派の人々はかう考へる。

「どうせ人間の世界は暗から生まれて暗のなかに滅びてゆかなければならぬ。悲しいといふことも、うれしいといふことも、愛といふことも、憎みといふことも、現實刹那限りのものである、どうせ人間は墓場の上で踊つてゐるのである。

月が落ちて、夜が暗くなれば人間の世界は永遠に滅びてしまふ。

蒼白い月の光りが草の上に漂うてゐる間に、できるだけうたつて見ようではないか、できるだけ美しい對手を探し出して踊らうではないか。」

かういふ風な刹那主義者の心持ちは、若い人の胸にかならず經驗されることであるにちがひない。

旅から旅を經めぐるといふことも、畢竟はできるだけ、心ゆくまで現實の世界に快い巣を見出したいからである。

できるだけの美しい踊りの對手を――おぼろげではあるが――豫想してゐるからである。

旅を思ふ若い人の心は、高い空をあてもなく翔つてゐる一羽の小鳥を聯想させる。

小鳥の眼に映つて來るものはいつも新らしい地平線である。蒼然として走れる山脈である。新しい微風である。地平線の上に白い塔の、或ひは黄金の丸屋根の反映が發見せられた刹那に、小鳥の胸はどんなにか波打つであらう。

旅を思ふ若い人の心は、白い塔の反映を見出し得た刹那のエクスタシイに歔欷するであらう。地平線の上にあらはれて來た白い塔、或ひは黄金の丸屋根は空を翔つてゐる小鳥にとつてはまだ現實ではない。それはまだ手に觸れることのできぬ彼岸の光明であり、彼岸の翹望である。美しい幻影である。

それは幻影だから美しいのである。彼岸の翹望であるがゆゑに若い心を波打たせるのだ。夢であるがゆゑに若い心を魅するだけの魔力を持つてゐるのだ。

いつまでも幻影に醉ふことのできる人は幸福である。いつまでも夢に胸とゞろかせることのできる人はめぐまれてある。

×

現實の都市のみを見る人は禍である。そこにはあまりに多くの虚僞があり陷穽がある。

都市の美しさは地平線の上に反映する幻影のなかに結晶してゐる。

若い人の心はいつも地平線上の幻影の塔を見つめてゐる。

詩人の心はいつも幻影の金字塔に翼を羽打つてゐる。

私たちの心から永久に幻影の塔を失つてはいけない。

人生に對して幻影の塔を築くことのできぬ人は禍である。幻影なればこそ人生は詩である。

幻影の世界に住めばこそ、近松の藝術が生まれ、ブレークの詩が生まれる。

幻影の世界を見失つた刹那に、人は天國から地獄に落ちる。

幻影の世界を見失ふことは、家を失ふことよりも、財を失ふことよりも悲しいことでなければならぬ。

「たとへ全世界を得とも、汝その魂を失はゞ……」

とキリストは言つた。

「たとへ全世界を得とも、もし私たちの幻影を見失はゞ……」

と私は言ひたい。

私たちの心をして、いつまでも夢の世界の扉を覗く嬰兒であらしめよ。

自分自身のために

俳人其角が、芭蕉の紹介ではじめて季吟に會つた時の話である。

「季吟其角を一日見て云其方は器用也と見ゆ定而利口ならん其利口器用は我よく利口なる者我よく器用なる者と自ら思ふ事なかれ……我作したる能句を記憶して人に聞かせ吹聽されんと思ふ事なかれ我句に腰をかける者は其句の上をこす句は出來ぬもの也……」

自分の天才を信ずることはいゝ。けれども天才に自惚るゝことは恐ろしいことである。自分の藝術を愛し、自分の藝術を信ずることはいゝ。けれども自分の藝術に腰をかけることはつゝしまなければならぬ。

大抵の人が一生のうち一度や二度は立派な物を發表することができる。けれどもそれに腰をかけるがゆゑに、さらに第三の物、第四の物を生むことができない。

藝術を作る動機は何よりも先づ自分自身に對する要求からでなければならぬ。自分の生活意識をもつと深く、痛切にしたい要求からでなければならぬ、ほんたうな人生といふものゝ實感に身顫ひを感じたいための要求からでなければならぬ。

あれほど立派な藝術家であり、あれほど立派な藝術を作り出した芭蕉が、自分の作を評して自分で宜いと思ふ句はせいぜい二三十であると言つてゐる。また自分の句は人に見せるべきものでもないと言つてゐる。

名聞を思ふ心を全然滅すといふことは私たちにはなか〳〵困難であるにちがひない。しかし名聞を思ふ心が強ければ強いほどその人の藝術に曇りがかゝつて來ることを忘れてはならない。

トルストイは「藝術とは何ぞや」の中に、將來の藝術は專門の藝術家といふ者によつて作られないで、すべての必要を感じた人たちによつて作られなければならないと言つてゐるが今日はすでにその時代になつて來てゐると思ふ。すべての人々が創作をするといふ言葉のうちには、藝術創作を職業的にしないといふ意味が含まれてゐる。眞實な要求からしてのみ藝術を作るといふ心が含まれてゐる。自然名聞のために作らないといふことになるであらう。

「名をなさんとして俳諧に心をゆだねたるにはあらず」と言つた芭蕉の心は想像することができる。

立派な藝術を作つて名譽を得るといふことは人間として誰でもが自然に持つてゐる欲望である。そのやうな單純な欲望をも殺してしまへと言ふことはできない。

しかし、名聞を思ふ心の裏には、殊にそれが職業的藝術家であればあるほど、色々な不純な分別が動いてゐることを見のがすことはできない。

至境に達した藝術家にとつては、藝術的に與へられる名譽すら何の價値もないものであらう。群盲の賞讃といふもののほど空虛なものはないことを、眞の藝術家はあまりによく知ることができる筈だ。

メレジュコウスキイの「先驅者」のなかに描かれたダ・ビンチが、モンナ・リザの繪をかついで、容れられぬ故鄕を後にして、アルプスの雪を越えて行つた日のことを私は時々思ひ出す。

眞の天才と、群盲の喝采或ひは非難との間に何の關係があらう。

私たちは自分自身のために藝術を作ればいゝ。ほんたうに自分自身のために作られた藝術は屹度また自分以外の人人を動かすにちがひない。私たちは人間であり、人間の心を持ち、人間の喜びや苦しみを持つといふ點に於いて、一人の心は同時に全人類の心であるからである。

ほんたうに自分の生活に苦しむことは、同時に隣人の生活の苦惱に慰めをあたへることである。自分の生活のため

に涙を絞ることは同時に隣人の生活から涙を拭ふことになる。

×

腹這ひになつて書かれた作品と、きちんと坐つて書かれた作品との間には、作の上手下手はともかくとして、必ず人を動かす力の强弱が潛んでゐることを信ずる。第一にその作に動かされ、影響せらるゝ者は作者自身であることを忘れてはならぬ。

腹這ひになつて筆を執つてゐる刹那には、かれの藝術よりも先づ作者かれ自身の生活は光りを失つてゐる。人間としての威嚴と藝術家としての感激とを失つてゐる。

藝術はいつも藝術家自身を第一番目に救ふものであることを忘れてはならぬ。出來上つた藝術よりは、藝術を作りつゝある刹那の作者自身の生活や、心がけが大切である。

×

藝術とは何であるか？　トルストイでなくとも誰でも、今日この問題については惱みもし、色々な疑をも持つてゐる筈である。

トルストイの「藝術とは何ぞや」の最初に描かれてゐる今日の藝術に對する疑問は、私たち自身が現在味はつてゐる疑ひである。

私はかつてエルマンを聽きに行つたことがある。

エルマンを聽いて帝劇を出たのは午後の三時半か四時ごろであつた。まだ太陽が高くかゞやいてゐた。私はその時隣りの高いビルデイングの上で働いてゐる人たちを見た。私は何だかすまないことをしてゐたやうな氣がしてならなかつた。

「あの人たちはあんな高いところで命がけの仕事をしてゐる。私たちは藝術といふ名によつて眞晝間から怠けてゐる。」私はこんなことを考へながら、アスファルトの上を歩いて行つた。

このやうな心持ちは、有樂座の廊下を歩いてゐる時でも、その他の芝居を見てゐる時でも、いつも私の胸に湧いて來る。何だか私たちは藝術の名によつて、してはならないやうなことをしてゐるやうな叱責を心の底に感じないではをられない。

藝術といふものが、「人間と人間との間の統一であり、同じ一つの感情によつて人間を結びつけるものであり、個人及び人類の幸福をすゝめて行く爲になくてならぬものである」といふトルストイの言葉は極めて簡單ではあるが、力を持つた藝術家の信念として尊敬したい。

今日の音樂會に行つて見るごとに、今日の劇場に行つて見るごとに、今日の文藝に接するごとに、トルストイの言葉が私たちに不安を感じさせはしないか。

×

昨日私は雨の中を歩いてゐた。恰度日暮れ方だつたので、電車の終點附近は一日の仕事に疲れ切つた人たちが、草臥れた足を引き摺るやうにして、郊外のぬかるみへと急いで行くのであつた。

私は不圖その時ガアドの下で一人の男が何かの廣告のビラを撒いてゐるのを見た。その男は十枚も二十枚ものビラを一緒にして人々の手に渡してゐた。

私の頭には二十年以前の或る日の私自身のことが浮かんで來た。

私は二日間Sといふ男に賴まれて終日走りながら廣告のビラを配つて歩いたことがあつた。

恐らく一萬にちかい數のビラであつたらう。私はそれを飛び飛びになつた田舍の家から家へと殆んど一軒の洩れな

く配つて歩いたのであつた。わづか一枚のビラを配るために時としては五町も六町もの峠を越さなければならなかつた。

私は子供の力としてはできるだけの事をつとめた。そして私は二日間の報酬として二錢銅貨を八枚貰つた。

Sといふのは、もと私の母の家の作男をしてゐたのであつたが、私の母の家は沒落する、Sは公金をどうかしたといふ疑ひなど受けて未決監にはいつたりしたが、そのうちに金を蓄へて縣會議員にもなるし、町でも指折りの富限者になつてゐた。

私が二日目に二錢銅貨を八枚貰つて日が暮れてからSの家から歸つて行つた時母はたまらなく寂しい顔をして、私の手の中の銅貨を見てゐた。

「あの男　昔は、家の裏口に來ては握り飯など貰つて食つてゐたのだよ。いくら子供にしろ、たつたこれつぱかしの金をくれて二日も働かせるなんて……」私はその時の母の言葉を思ひ出した。

私も時としてSの傲慢な顔や、忘恩的な態度を憎まないではをれないこともあつた。そしてあんな男のためにわづか二日間ではあるが、一枚のビラさへ無駄にしないで配つて歩いたことを後悔するやうな氣になつたこともあつた。

けれども私は昨日は、ガアドの下にビラを配つてゐる男を見た時、そしてその男が大抵のビラ配りと同じやうに面倒を省くために二十枚三十枚と一緒にして捨てるやうに配つてゐるのを見て、二十年前の私自身とを比べて見た。そして馬鹿正直であつた私自身をうれしいと思はないではをれなかつた。

「かつては、私の魂のうちにも、あれほどの正直な心が宿つてゐたのだ。」かう思つたゞけで私はうれしかつた。

私はSに雇はれて働いた二十年前の二日間の私自身の行爲をかへりみて、何となしに氣強さを感ずるのであつた。

誰でも子供時代にはあのやうな正直な心を持つてゐるにちがひない。何もあの二日間の私の經驗は珍しいことでも

何でもない。けれども、私はかつて私の心にもあんな素直さがあつたのだといふことを思ひ出した時、どうしても自分の心の底の微笑を隱すことはできなかつた。

×

「人生は短い、しかし藝術は永遠である。」こんなことを信じたこともあつた。けれども、私は今ではそんな信仰を持つことはできない。私たちにとつてホーマーの作はクラシカルな物として魅力は持つてゐる。しかし實際どれだけのアッピイルする力を持つてゐるか。わづか五百何十年前に死んだチョウサアは何うだ。ダンテは？　三百年前に死んだシェークスピヤは？

藝術の生命と人間の生命の長短は五十歩百歩ではないか。

それならば私は藝術に失望しなければならぬか。

「藝術もまた滅びる。」この考へ方は頼りない氣がする。けれども頼りない考へのうちに、私は今までにも增した懷しさを藝術のうちに見出すことができて來たやうな氣がする。

唱歌手は歌ふ。

かれの歌の聲は美しい。

刹那に唱歌手は歌ひつゝ死ぬ。

唱歌手の歌の餘韻はまだ森に谺し、雲に響いてゐる。

人々は歌の餘韻に聽きとれてゐる。

唱歌手の呼吸はすでに永遠に斷たれてゐる。

餘韻はなほ遠く遠く雲の中に響いて行く。
人々はなほ唱歌手の聲を聽いてゐる。
けれども餘韻はやがて滅えなければならぬ。
ダンテの餘韻、シエークスピヤの餘韻、近松の餘韻。
みんな古人の藝術はやがて雲の中に滅えて行くのではないだらうか。
藝術家はすべて歌をうたふ男だ。
かれが歌ひつゝ地に倒れた後、なほ二秒、三秒、五秒……かれの聲は雲に谺してゐるにちがひない。
しかしそれ以上の生命は藝術も持つことはできない。二千年といひ、三千年といひ、二秒三秒といひ、滅びることに於いては結局一つではないか。
私と共に生き、私と共に死ぬ藝術？　私はそれで滿足する。それこそ私にとつての眞實の藝術ではないか。

雑草

キリストが人間は救はるべきものだと考へたのは、キリストの心が利己的でなかつたからだ。キリストの心が寛大であり、あたゝかであつたからだ。

善人は人生にはあまりに善人の多いことを氣付くであらう。したがつて善人の見た人生には光りがある。惡人は人生にはあまりに多くの惡人があることに氣付くであらう。したがつて惡人の見た人生には光りがない。

正直な人の眼には、人間も家畜も正直なものとして映るであらう。不正直な人の眼には、人間も家畜も不正直なものとして映るにちがひない。今日の道學者的な宗教家や教育家の眼には娼婦はやはり娼婦として映るであらう。かの女の魂は度し難きほどそこなはれたものとして映るであらう。かの女の肉體は、いやしい感情をそゝるものとして映つて來るであらう。

キリストの眼に映つたマグダラのマリヤは娼婦ではなかつた。かの女はキリストの足にナルドの油を塗るにふさはしい女であつた。

實際一面から見れば人間ほど醜いものはないかも知れぬ。けれども同時に、また人間ほど美しいものが何處にあらう。

人間以外に何處にキリストの愛が生まれたか。釋迦の慈悲が生まれたか。

私たちの村に善人がゐないにしても、それが決して人生を呪ふ理由にはならない。隣りの村を探して見るがいゝ。

日本にゐなければ世界中を探して見るがいゝ。現代の世界にゐなければ人間の過去の記錄をたづねて見るがいゝ。未來の世界に待つがいゝ。

たとへ千人の詐欺漢に出逢つても、たゞ一人の正直な人、心の美しい人を見出すことができれば、その人は幸福である。

たゞ一人の正直な人、心の美しい人は、私たちの人生をすつかり明るくしてくれる。

もしこの世界に心の美しい人、親切な人、正直な人がゐなかつたとしたら、世界はどんなにか寂しいことであらう。

たゞ私たちの心さへ美しかつたら、親切であつたら、正直であつたら、世界には現在、直ぐ自分の周圍にありあまるほどに心の美しい人、親切な人たちが生きてゐる。

パリサイやサドカイの徒には、無學であり、度し難き賤民の地と認められてゐたガリラヤの湖畔で、わづか幾片かのパンと幾尾かの魚に、五千の人たちが滿腹してキリストの說敎を聽いたではないか。キリストの眼にはかれ等は無學でもなく、また度し難き人間でもなかつた。

×

ちかごろ宗敎だの、無我の愛だの、親鸞だのといふ言葉が一つの流行であるやうに表はれて來た。結構なことである。當然行かなければならぬところに、思想の流れは行きつくものであるといふ考へを起させる。

けれどもいつも流行に對して注意しなければならぬことは、流行的傾向を帶びて來る場合にはすべての思想が、鵜呑みにされ、無批判的に取り容れられるといふことである。

宗敎が考へられ、無我の愛が考へられ、親鸞が考へられることはたしかにいゝことである。

しかしながら、この種の流行的思想は往々、宗敎の本質的なものを取り逃がす恐れがある。宗敎の深みにまでたど

りつくだけの執着や、苦鬪を避けて淺く見究めをつける弊がある。このことは私たちがお互に注意しなければならぬことである。

どのやうな宗教上のありがたい言葉も、他人の手によつて調理せられ、他人の匙を持つて私たちの口に移されたのでは何の足しにもならない。

宗教は想像でもなく、いゝ加減の見當をつけることでもない。宗教はどこまでも體驗的でなければならぬ。實感的でなければならぬ。宗教上の言葉も眞理も、自分自身に苦しみ貫いて生み出したものでなければならぬ。

親鸞が人千人殺せといつた言葉の底の味はこゝにあるのではないか。

ラスコルニコフはニイチエの超人の哲學では救はれなかつた。その理由は、かれはまだ哲學によつては何等の體驗をも實感をも持つてゐなかつたからであつた。

ラスコルニコフが救はれたのはあの恐ろしい殺人者の苦惱を嘗めた後であつた。あの人間として持ち得る最も大きな悔恨の實感を持ち得た後であつた。

一日には一日の救ひがなければならぬ。

キリストは「今日は今日にて足れり」と言つた。私たちは今日は今日の救ひを持たなければならぬ。

私たちは今日の救ひを持つために、今日は苦しまなければならぬ。最も深く、端的に苦しまなければならぬ。

今日の苦しみを明日に遺して置いてはならぬ。明日はもつと大きな新らしい苦痛を持たなければならぬ。

「今日は今日にて足れり」といふ言葉は、さらに端的に言へば「この刹那はこの刹那にて足れり」でなければならぬ。

朝救はれた者も、午後には救はれないかも知れない。朝の惱みを午後に忘るゝ者は救はれない。念々刻々神を思ふ者でなければ救はれない。

今日救はれた人が明日必ず救はれるとは限らないであらう。

明日怠惰であり、傲慢であるならば、かれは明日は救はれない。

自分は救はれたクリスチャンだと思つてゐる人、自分は貧しい人々の友人だと思つてゐる人たちの中に存外怠惰者があり、利己的な人があり、人間らしくない人があり、不遜な人がある。

自分は人類のために働き、社會のために盡してゐると言明して仕事をやつてゐる人々にかぎつて不愉快なところがある。憑き物がしてゐる。妙な我がある。えらがりがある。キリストのいはゆる巷に角笛を吹く人である。

×

富士の裾野に沿うて汽車が走つてゐる時、あの青い曠野の中に、或るフランスの宗教家によつて營まれてゐる病院のことを思ひ出す。（フランスの老宣教師は、自分で、そのうみたゞれた癩病人を洗つてゐるのです）といふ話を聽いて以來、私は裾野を通るたんびに、その宗教家の神のやうに深い愛を想ふのである。

あの裾野の深い草の中で、誰にも知られないで、不幸な病人のために默々として一生をさゝげてゐるフランスの老宣教師の俤を描いては畏敬の念に打たれる。

裾野を下つて、沼津の方へ行けば沼津の西に原といふ古い宿場がある。汽車の窓から直ぐ傍によく見えるところであるが、畑の中に「白隱禪師塔所」といふ文字を刻んだ碑が建てられてある。畑のまはりにこんもりとした木立があり、富士の姿が眞正面に眺められる。畑の隅には柿か何かの嫩葉がかゞやいてゐる。

昔の東海道の往來であらう。松の列樹と、道に沿うた家とが調和よく、富士を背にして並んでゐる。富士の裾野をめぐつた廣い沼には葦が青々と繁つてゐる。

富士を眺めながら、淡々たる貧者の生活に聖福を樂んだ白隱のことが色々に思ひ出さるゝのであつた。

かれが腐つた醬油だの、饐ゑた飯だのを貰つて歩いたであらう道や家なども、そこいらにあるのであらう。白隱との關係を疑はれた娘の家や、またその娘のほんたうな情人であつた男の家の跡も、あの草のなかにあるであらう。

かつて人間が生きてゐた場所には、或ひは今日人間が生きてゐる場所には、私たちが少し氣をつけて探しさへすれば、人間性の尊い或るものを暗示する傳說や、實證がかくれてゐるにちがひない。

×

去年越後から東京に働きに出て來てゐた男が、百合の根を私に吳れた。「うまいから喰べろ」と言つて持つて來たのであつた。

しかし喰べてしまふのは可哀さうだつたので、草の中に生けて置いたが、この春になつて芽を出して來た。

私はその男が越後の何といふ村の男であるかさへ知らなかつたし、忘れるともなくその男のことさへ忘れてゐたのだつたが、百合の芽が出てからは再び越後の男のことを思ひ出すやうになつた。

夏になつてその百合は赤い花を持つた。私は暇さへあれば百合の赤い花を見てゐたが、そのたんびに越後の男のことを思ひ出した。

百合の花が散つて、葉が枯れてしまふころは再びその男のことを忘れてしまふかも知れない。

けれども、來年の夏になつて赤い百合の花が咲いたら屹度私はまた越後の男のことを思ひ出すであらう。

山の溫泉から

K兄。

四五日前から再び山の溫泉に來ました。今年はやつと夏が過ぎたばかりだのに、いつもの神經痛がおこつて來ましたので、毎日湯に浸つてゐます。

山にはすでに秋の色が漂うてをります。一枚一枚の葉が光つてをります。朝と夕暮には屹度雨が湯の町を洗つて、山を越えて行きます。

こゝの町では今夜が明月だと言つて、芒の穗などを川の緣から手折つてをります。

山の月はまた驚くほど澄んでゐます。白い雲が山から出ては山に隱れて行くのを見てゐると、子供のころのことなどを思ひ出します。

私は月を見がてらS寺の山門をくゞつて行きました。

恰度夜のお勤めがはじまつてゐるところでした。八九人の坊さまたちが、須彌壇の前を輪を作つて廻りながら讀經をしてゐました。水のやうな月の光りが、高い窓から御堂の中に流れこんでゐました。そこには暗い柱の蔭に一人の雛僧が合掌して立つてゐました。小ひさな猫が雛僧の足もとで背のびをして、須彌壇の後ろの方へのそ〳〵と歩いて行つたのを面白いと思つて見てゐました。

坊さまたちは幾度か全身を投げ出すやうに、跪いては祈り、祈つては讀經しました。

一本の蠟燭の前に幾人もの坊さまたちが、毎夜、このやうなお勤めをすることを考へると、何だか嚴肅な心持ちに

ならずにはをれませんでした。
何故あの人たちはお勤めをしなければならないのか。世間の人たちは申します、「佛教は腐敗してゐる。たゞ佛法の形骸だけが殘つてゐる」と。
そんなことも言へるかも知れません。
けれども私はこの山の中の古刹で、薄暗い蠟燭の前にお勤めをしてゐる人たちを見た時どうしても無遠慮にそんなことを言ふ氣にはなれませんでした。
たしかにあの形骸の底には何かゞ潜んでゐるにちがひない。
十二三人の湯治客らしい男女が緣に近く跪いてゐるのを見たときも、私は同じことを思ひました。
人間は何かを永遠に求めてゐるのだ。人間は悠久、永遠を想ふことなしには生きてをれないのだ。
人間は自分で何物かを求めつゝも、實際は何を求めてゐるのか、恐らく永久に知ることはできないであらう。けれども求めずには生きてをれないのだ。
經を讀んでゐる人も、頭を垂れてゐる人も何物かを求めようとする心、何物かに賴らないではをれないといつたやうなたゞそれだけの純な、しかし本然的な魂の衝動にうごかされて、蠟燭の前に坐つてゐるのではないか。
人類が生まれて幾千年來、すべての人類が何を求むるかを知らず、たゞ祈り、たゞ經を讀み、跪いて來たのではなかつたか。
八人九人の御堂の僧侶たちの黑い衣を見てゐる間に、私の耳には人類全體の悲しい聲が聽えて來るやうでした。
誰でも神を忘れてはならないのだ。誰も永遠を想ふことを忘れてはならないのだ。
私はこんなことを考へながら山門をくゞつて河の岸へ出ました。

高い山と山の間に挾まれた湯の町の燈が消えかゝつてゐました。私はこのやうな山の中にも、夜每永遠を想ふ人間の祈りがあり、跪きがあることを思ふと、非常に人生といふものが、寂しくはあるが、嚴肅なものであるといふ氣にならずにはをれませんでした。

人間が住むところには、必ずそこには永遠を欲する、或ひは悠久にあこがるゝ宗教的な欣求心が生きてゐることを考へると、どうしても人生に對していゝ加減な心ではすまされなくなるやうな氣がして來るのでした。

私は夜が更けてから宿に歸つて來ました。

「私が生きてゐる間は、私から祈りの心を失つてはならない」私は自分の心にかう命じました。

「神さま、私は何のために生きてゐるのか知らない。けれども神を思ふ心を生みつけられ、悠久を思ふ心を生みつけられたことを感謝せずにはをられません。私は何もせず、何も知らないで死んでしまふかも知れない。それでも私は生まれて來たことを後悔はしない。何だかわからないが、悠久を思ふ心を人間にあたへた神に感謝せずにはをられません。」

K兄。私はこんな殊勝な心になつたのでした。私は近ごろになく愉快でした。

×

K兄。

昨夜から腸を痛めてしまつたゝめ、今日は絕食同樣な辛い目を見ました。

旅で病むといふことは心細いことですが、私は今日は不思議と落ちついてゐました。

「死ぬなら何處で死んでもいゝ。何時死んでもいゝ。」こんな諦めを持つこともできました。感情いつぺんでこんなことを考へたのではありません。私はこの數年來色々な人間的な苦痛を嘗めました。その苦痛がこのやうな諦め方を私

にさせたのでした。
私はこんな諦めをするやうになつた自分の生活をいたはるやうな氣にもなりました。
人間は哲學から生きるよりは、何でもない家庭的なこと、人間と人間との間の何でもないやうな事柄をモーチーヴとして、より多く生きて行くものだとつく〲考へさせられました。
芭蕉翁に妻があり、子供があつたとしたら芭蕉は恐らく旅人となつてさ迷ひ歩くことはしなかつたであらうと思ひます。
芭蕉が死を恐れなかつた心持ちも幾分わかるやうな氣がします。

×

今日或る一人の若い人が山の宿をたづねて來ました。
その人はかつて自動車に轢かれて入院した時の自分の經驗を語つてゐました。
「わたしは、別に、わたしを轢いて逃げて行つた自動車を憎いとも思ひませんでした。また自動車の番號を知らうとも思ひませんでした。わたしはたゞ自分が死んで行くのだなといふことだけを寂しく思つてゐました。」
私はその若い人の言葉を聽いた時、尊い物に打つかつたやうな感じがしました。

イヴンの馬鹿

私は或る席上で或る人が、故島村抱月先生の話をしてゐたのを聽いたことがある。

「君は地方興行をして歩いて、そんな正直なやりかたでは、ごまかされてしまひはしないか？」とたづねたのに對して、島村先生は

「いやさうではない、こつちが正直に出て行けば先方だつて正直に出て來る。」といふやうなことを話されたといふことであつた。

私ばかりではない、その座に居合はせた人たちは、この話を非常に興味を持つて聽いてゐたやうであつた。

この短い島村先生の言葉のうちには、直ちに故先生の正直な生一本な人格をほのめかしてゐるものがある。同時に正直といふものゝ持つ或る尊さについて考へさせられるところがある。

世間の人間がみんな悪賢い不正直な人間に見えるのは、自分の心にも曇りがあるからであらう。

人は他人の蔭口（かげぐち）を利（き）いてゐる時は、たいてい自分自身の缺點を最もよくさらけ出してゐる。他人を非難する時最もよく自分自身の缺點をさらけ出し易い。語つて行く自分の心の底にひがみがあり、嫉みがあり、僞りがある間はほんたうな批評はできない。

正直といふことは人生を見る場合にも、藝術を作り出す場合にも、藝術を鑑賞する場合にも一等大切なことである。

正直は、愛と熱とを、その內容として持つてゐる筈である。

私はこのごろキリストの言葉について、ルナンとオスカア・ワイルドとトルストイの三人の見方をくらべて讀んで見

た。ルナンの見方は馬太傳五章ー七章のキリストの言葉を、ガリラヤの湖畔の自然や生活と結びつけて考察し、說き明かしたものであつて、成る程とうなづかれるものであつた。ワイルドの見方は藝術至上主義者、刹那主義者的な立場からして說かれたもので、如何にも興味深いものであつた。きはめて新しい解釋であつた。最後にトルストイの見方は平凡と言はるゝものであつたが、その實、私を最も強く動かすものであつた。トルストイの見方は、たゞキリストの言葉をそのまゝに受け容れるといふことであつた。嬰兒の心を以て、「人上衣を乞はゞ下衣を與へよ」といふ言葉を、さながらに受け容れるといふことであつた。

素直な心、謙虚な心、嬰兒の心を他にして宗教はない。藝術はない。

もし自分自身を天才とすることによつて、思ひ上つた藝術家があるとするならば、私はその人の藝術を疑はずにはをられない。

或ひは藝術家の名によつて、或ひは藝術志望者の名によつて、傲慢であり、怠惰でありブウルジュアー的であるとするならば、私はその人たちの藝術をも生活をも疑ふ。

私たちは藝術家である前に先づ人間でなければならぬ。勤勉な農夫でなければならぬ。勤勉な職工でなければならぬ。忠實な律儀な市民でなければならぬ。眞面目な研究者でなければならぬ。親切な人間でなければならぬ。

天才でない人が立派な藝術を作ることは不可能であるかも知れぬ。けれども、いつたい天才とは何であるか。

天才とは小ブウルジュアーの巧智を持つた人間といふ意味ではない。天才とは小才の利く人間といふ意味でもない。

人以上鋭い良心を持つた人、人以上に親切な人、人以上に正直な人、人以上に熱を持つた人こそ天才ではないか。

ダンテ、ミケランゼロ、タ・ギンチ、トルストイ……とかう並べてかれ等の一生を考へて見ると、ほゞ天才といふものゝ意味がわかるであらうと思ふ。

藝術創作といふことはしばらく措くとして、藝術批評は少しく藝術に對して趣味を持つてゐる人には、それ相應に可能なことである。

この場合に最も必要なことはやはり正直といふことである。その藝術に對して自分が如何に考ふるかといふことを率直に語ることができる時、必ずその人の批評はどこかに光りと生命とをもつてゐる。

その人の批評に光りがなく生命がないのは、その人の心が先入主となつてゐるところの或る物に曇らされてゐるか、或ひは自分自身に對して正直でないところから生まれてゐる。

常套的な概念によつて批評するか、或ひは世間的な眼をもつて批評するからである。自分自身の眼をもつて見ないからである。

ドストイエフスキイは「愛は努力なり」と言つてゐるが、正直もまた努力であるといふことができよう。まつたく、私たちは決していつも正直であるとは信じられない。隨分自分で自分を欺かうとする場合がすくなくはない。私たちの心は曇りがちである。

一つの藝術を批評する場合にも、私たちの心は曇りがちである。この心の曇りを取り除いてしまふためにはかなりの努力が必要である。私たちはどんなに苦痛であらうとも、その努力を忍ばなければならぬ。

自分の批評眼から曇りを取り除かうとする努力は一種の宗教的な忍苦を伴ふ。嚴かな自責の念を伴ふ。これだけの準備の苦痛を嘗めて後に、試みられる批評は、たしかに批評家自身に對して藝術の救ひを齎すであらう。

×

宗教生活はいつも全か然らずんば無である。救はれるか、墮地獄かである。

藝術生活もまた中途半端をゆるさない。死身にやるか、でなければ止すかである。イヷンの馬鹿の生一本さを持つて

ゐない人は、最初から藝術生活はやらない方がいゝ。
嬰兒の心をもつて、キリストの言葉を受け容るゝと言つたトルストイは、聖書に對してイヴンの馬鹿の生一本さを持つてゐたのであつた。
「カラマゾフ兄弟」の中でドストイエフスキイは長老ゾシマの唇を通して「……全世界を歩いて行け、人を愛せよ。汝を受け容れる人がなく、汝を地の上に叩きつけるかも知れない。それでも汝は絶望してはならない。汝は地に涙を落して地を濕ほせ……」といふやうな意味を語つてゐるが、私たちがドストイエフスキイのこの言葉を文字通りに受け容るゝことができるなら、それほどの生一本さが私たちの心にあるなら、私たちは屹度立派な藝術を生むことができるであらう。立派な宗教生活を實感することができるであらう。
私たちはあまりに都會人的になつてはゐないか。私たちはあまりにお體裁を作ることを考へてばかりはゐないか。私たちはあまりに纒つた言葉を語らうとはしてゐないか。私たちは拔け目のない、氣の利いた物を作り上げようとはしてゐないか。
小さく纒つてはゐるだらうが、そつはないだらうが、原始人的な潑剌たる生命を缺いてゐるのが文明人の仕事ではないか。
藝術には文明人の小悧巧さや、小ぢんまりとした手先の仕事は禁物である。
藝術はどこまでも不器用でなければならぬ。藝術はどこまでも内に燃えた熱をもつてゐなければならぬ。
キリストの大宗教が、ギリシヤ人の大學から生まれないで、大工の子と漁師と、收稅吏と賣淫婦たちから築き上げられたことを考へて見ると面白い。
大きな藝術も文明人の手に汚されないイヴンの馬鹿から生まれて來なければならない。

モンテーヌは「本を捨てよ」と言つた。私たちは今日までのあらゆる藝術上の約束やテクニックを捨てゝしまはなければならぬ。そしてイヷンの馬鹿になつて、ほんたうに自分の要求を大膽に、正直に訴へて見なければならぬ。

何を自分はほんたうに考へてゐるのか。何を自分はほんたうに語らなければならないのか。これに對するほんたうな解答はイヷンの馬鹿の正直さを持つ人のみが與へることができる。

食卓の十三人目の男

イプセンは「鴨」の中でグレヱゲルスの口を通して「人生には幸福よりもつと高いものがある。」と言つてゐる。また「鴨」の最後に同じグレヱゲルスの言葉として、かれが生きて行く使命は「テーブルの十三人目であるために」と語つてゐる。

グレヱゲルスはイヤルマアの一家に眞實を持つて來た。しかしその事はイヤルマア一家にとつて決して幸福を生まなかつた。その結果はグレヱゲルスが最初から期待してゐた通りの苦痛な鬪ひを齎したのみであつた。可憐なヘドキッヒの死を齎したのみであつた。

グレヱゲルスはまつたく食卓の十三人目に坐るべき氣味の惡い喪服を着た男であつた。

イプセンにとつて人生に最も大切なことは自分に忠實であるといふことであつた。自分自身に噓をつかないといふことであつた。かれは眞實のために、一生を虛僞に對して苦鬪しつゞけて行つたのであつた。

かれは「鴨」のグレヱゲルスが步いた道をかれ自身步いて行つたのであつた。

かれの作品は私たちにいつも食卓の十三人目の男の言葉を語つて聽かせる。「人形の家」、「ロスメルスホルム」、「ジヨン・ガブリエル・ボルクマン」、「ヘッダ・ガブレル」……みんなその中には食卓の十三人目の男の言葉が盛られてゐる。

私は或る場所で或る人からこんな話を聽かされたことがある。

「イプセンの物が日本に紹介されてから、自分の周圍の家庭だけにでもかなり家庭上の破壞といふことを見せつけられた。」

その人はイブセンの物に對してむしろ不愉快な眼を向けてゐるやうであつた。

この話をした人は恐らく「鴨」のギイナのやうに、何でも幸福でさへあればいゝ。過去の虚僞や不眞はそつとして置いた方がいゝ、幸福でさへあればいゝんだといふやうな、極めて眞實といふものに對して鈍感な人であると思ふ。

ギイナは世間普通の人間であつた。

かの女はかつてグレエゲルスの父に自分の貞操を賣つた。それでゐて平氣でイヤルマアと一緒になつた。もしグレエゲルスが事實を打ち明けなかつたらイヤルマアは、一生そのことを知らなかつたにちがひない。そしてギイナが望んでゐた通りにイヤルマアはヘドキッヒを自分の眞實の娘であると信じ、また自分の妻を貞節な妻として信じ通すことができたにちがひない。かれはまつたく幸福な一生を終ることができたであらう。

けれどもかれは食卓の十三人目の男に訪れられた。

グレエゲルスはイヤルマアの今までの虚僞の生活に對してこのやうな嚴かな命令を下してゐる。

「あなは最後まであの男に苦痛な鬪ひを鬪はせるために放つて置いた方がいゝ。」

「あなたや、それからすべての人間といふものはいつたい幸福でなければならぬといふ權利を持つてゐるのですか？」

幸福といふこと、平和といふことを土臺にして生活を考へるがために虚僞がゆるされ、偸安が認めらるゝのである。しかし一度食卓の十三人目の男の訪れをうけた人間には幸福といふもの丶價値は極めて低いものとなつて來る。人生には幸福以上の或るものがなければならぬ。

人生を喜悦の上に据ゑようとする人たちは、安價な自己肯定、妥協、平和といふものを是認する。しかしそのやうな人たちの生活はきはめてシヤロウである。その人たちは淺い河の流れを歩いてゐる。船が沈む恐れもない。最初から船を浮かべるだけの深さゝへ持つてゐないからである。

食卓の十三人目の男はいつも暗い顏をしてゐる。憂鬱な顏をしてゐる。かれの顏を見るといふことは私たちにとつて幸福ではない。かれは私たちに喜悅を與へないで悲哀を齎す、私たちに犧牲を求める。私たちに小ひさきアイヨルフの死を求め、ヘドキッヒのいけにへを覓める。私たちを苦痛な闘ひの場所へ追ひやる。眼をつむつた幸福の世界から、眼を開いた苦闘の世界へと導く。

×

話はもとに戻る。

イプセンの作品の影響が幾多の家庭に波瀾を起させたといふ人の話は、それは恐らく眞實であらう。さうあつてこそはじめてイプセンの作品の力がほんたうに生きてゐるといふものである。イプセンはほんたうな作家であるといふものである。

イプセン自身が、食卓の十三人目の男である。だからかれの本を讀むことは、食卓の十三人目の男の訪れをうけることになる。

私たちの家庭は、また私たち自身は、かのイヤルマアが要求せられたと同じやうないけにへをかれの前にさゝげなければならぬ。

それは頭を石にたゝきつけて死ぬほど苦しい事であるにちがひない。けれども、十三人目の男の聲はきはめて嚴かである。どうしても拒(こば)むことはできない。十三人目の男の命令を拒み得たと思つてゐる人は、自分で自分の魂を痲痺させてゐるのである。その人の生活は決して深くせらるゝことはない。その人はそれつきりの俗人である。脾弱(ひよわ)な人間である。

×

「カラマゾフ兄弟」のなかで長老ゾシマがアリヨシヤに言つた言葉がある。

「愛は努力である。」

この言葉は憎みの多い私自身を非常にはげましてくれた。

この言葉を押しすゝめて行けば、

「眞實を求むる心も努力である。」といふことができるであらう。

私たちはあまりに多くのギイナ型な妥協偸安を持つてゐる。

イヤルマアにしても最初はギイナとかはりはなかつた。けれどもかれはグレエゲルスの訪問をうけてからすつかり變つてしまつた。かれは苦しんだ。かれは苦しくはあつたが眞實を求めて闘つた。かれは何物にもかへがたいヘドキッヒのいけにへをさゝげた。

かれは闘つた。かれは闘ひ終はせた。かれはその結果として何を與へられたか。私たちはそれを知ることはできない。

イヤルマアが自己犠牲と寛容の尊さを自覺した生活に入ることができたであらうといふやうなことを、わづかにグレエゲルスの言葉を通してかすかに想像するだけの暗示しか與へられてはゐない。

しかしこのことだけは明かである。

イヤルマアは苦しい闘ひをした。闘ひに勝つた。かれはその結果として決して幸福は與へられなかつた。喜悦は與へられなかつた。

あらゆる眞實のための苦闘者が神によつてめぐまるゝものは幸福でなく、喜悦ではなくそれ以上のものであるといふことだけは、私たちは暗示せられてゐる。

キリストは荊棘の冠を與へられ、サヴオナロラは焚殺の苦を與へられたことを思ひ合はすれば、すべての眞實の追求者がいたゞかなければならぬ冠は、たいてい想像がつくであらうと思ふ。

×

イブセンにとつて立派な藝術を產み出す力は、無論かれの巨匠的な天才にあつたことはいふまでもない。けれどもその天才がかれのペンにあり、技巧にあり、文才にあつたと思ふならば大きな誤りである。

かれの大きな作品は、かれ自身のうちにひそんでゐた食卓の十三人目の男の峻嚴な命令から生まれてゐる。

「社會の柱」も、「ブランド」も、「建築師」もみんな食卓の十三人目の男の聲ではないか。

藝術家にとつて一等恐ろしいことは、食卓の十三人目の男の聲を聽き損ねることである。食卓の十三人目の男の聲に對して居眠りをしてゐることである。或ひはその聲を無理にもごまかさうとすることである。

「わが地上に來るは平和を出さんがためにあらず、地に劍を樹てんがためである。妻をして夫に背かせんがためである……」と言つたキリストも、また同じく食卓の十三人目の男であつた。

イブセンの「鴨」のグレエゲルスの最後の言葉と、千九百年前のキリストのこの言葉とを並べて見ると面白いと思ふ。

憎むことでも、愛することでも、どつちでもいゝ。ほんたうに苦痛なしに愛することができ、憎むことができるといふやうな場合には、たいていはそれはギイナの低い幸福本位の生活から生まれてゐることが多いやうに思はれる。

愛することにも劍を樹つる苦痛があり、憎むことにも劍を樹つる苦痛がある筈だ。

私たちの生活すべてがいつも闘ひを持ち、劍を持つてゐる筈だ。

ドストイエフスキイは、愛は努力であると言つたが、私たちの生活すべてが苦痛な努力である。大きな藝術はこの

人間的な苦痛な努力の記録に過ぎない。

苦痛な努力を持たない藝術はどんなに美しくとも、巧みであらうとも、それこそブウルジュアーの玩具である。それを模倣する者はいかなる名においてするも、やはり恥づべき小ブウルジュアーである。

×

立派な藝術を生むために、先づほんたうな苦惱を持たなければならぬ。眞實を覓むる者の苦しい闘ひを追ひ求めなければならぬ。

私たちの現在の生活にも、家庭にも、社會にも、まだ／＼私たちが眞實のために闘はなければならぬ不合理や虚僞があまりに多くあり過ぎはしないか。殊に私たち自身のうちに最も多くの偸安と怠惰と不眞心とがあり過ぎはしないか

私たち自身あまりに臆病ではないか。私は誰よりも臆病である自分の心を恥づかしいと思ふ。

一方では生活のために眞つ黒になつて叫んでゐる人たちがあまりに多いのに、一方では或る種の人たちは驕り狂つてゐる。官吏も、大學生も、たれもかれも。こんなことで社會はいいのか。

いつの間にか人道主義の名も忘れられてしまつた。

社會全體が銘々に自分だけのことに、自分ひとりの幸福のために個人的生活に沒頭してゐる。これでいいのか。

食卓の十三人目の男は私達の耳にこんな叫びを叫んでゐる。

イヤルマアは行くところまで行つた。ヘドヰゴを失ひ、苦しい闘ひを闘つた

私たちはイヤルマアにならなければならぬ。

このごろ他力本願の宗教が流行して來たやうであるが、たゞわけもなしにありがたいといふ他力本願の文字に囚へ

られて、無暗に偶像にとりすがつて行くだけのことであつたら、私たちに何の力をも齎してくれないであらう。「人千人殺せば往生」は一定と言つたあの言葉をよく考へて見たならば、他力本願といふ意味がわかるであらう。親鸞は親鸞である。私たちは私たちである。

人に依り頼む前に、私たちはもつと自分の力で戰はなければならぬ。人に援けられて戰ひに勝つよりは、自分一人の力で戰つて、敗けるなら敗けてもいゝ。それの方がどれほどか深く人生の意味を摑むことができる筈だ。私たちにとつて、今日一番缺けてゐることは、自分自身に對して、社會に對して戰つて行く力の缺けてゐることである。

永久に私たちは食卓の十三人目の男を持たなければならぬ。

憎みといふこと

京都の未知の人からであつた。

「憎むといふことは悪いことか。なぜ人生に憎みといふものがあるのだ。」私はこのやうな手紙を受けとつたことがあつた。忙しいのと、とてもそんな問題を短い手紙などで直ぐに返事をすることもできないので、そのまゝにしてゐる間に、その手紙をも無くしてしまつた。手紙をくれた人には非常に心苦しく思つてはゐるが。

それから二ヶ月ばかり前にも或る人から、同じやうな家庭上の苦痛を訴へた消息を聴いたことがあつた。非常に不人情な仕打ちであつたが、私はその時も手紙を出さなければならぬと思つてゐる間に、その人のアドレスも無くしてしまつた。

私はそのやうな手紙を受けとつた時、まことにお氣の毒だとは思ふが、かうなすつたらいゝでせうと言ふやうなことを手紙に書いたり話したりすることは、心苦しくてならないのである。そのやうな手紙を貰ふたんびに、私はかなり複雑な苦痛を感じないではをれない。

私自身が随分、人と爭つたり、憎んだり、怨んだりしてゐるのであるから、實際そんな手紙を貰つたりすると、自分を眞つ先に責められるやうな氣がしてならぬ。

學校の成績が悪かつたので、教師を怨んで學校に放火した靑年があつたといふ新聞記事を讀んだことがある。私はその時、その放火犯人が自分でなかつたことを思ひ出して、ほつとしたことがあつた。

人に辱しめられたことを怒つて、人を切り殺した男の記事を讀んだ時も、私は自分がその犯人でなかつたことを思

ひ出して、ほつとしたことがあつた。

私自身のうちにはたしかにその放火した靑年や、人を切り殺した男と同じ、或ひはそれ以上の殺伐な血が流れてゐると思ふからであつた。

イスカリオテのユダや、提婆の性格が私自身に近いやうな氣がする。

人を愛せねばならぬとか、人の罪をゆるせとか言つてゐる間は、他人の言葉を藉りてゐるやうな氣がしてならぬことがある。人を憎み呪つてゐる間こそはほんたうな自分の言葉を持ち、自分自身を生かしてゐるやうな氣がしてならぬこともある。

いつたいこの數年來、愛だの、獻身的だの、人類的だのといふことがあまりに概念的に安易な心持ちで語られたやうである。

それと同時に、自己を極端まで卑下する思想や、無抵抗主義的な思想もかなり強く流れ込んで來たやうである。

愛の強調にしても、自己否定にしても結構は結構である。しかしそれは芭蕉の藝術に於けると同じく一字不說の場合に於いて尊い光りを持つてゐる。

愛の强調にしろ、自己否定にしろ、それが一時的流行性を帶びて、我が佛尊しになつて來れば、決して尊いものではない。いつしかそこには外道が迷ひ込んでゐる。

人間に愛の心があると同時に、或ひは愛以上に憎みの心が燃えてゐることも眞實である。恰度光りあるところに暗があるやうに。

私たちは無論できることなら誰とでも一緒に笑つてゐたい。手を握りかはしてゐたい。私たちは愛こそ天國であることを知つてゐる。けれども私たちの心はあまりに多く憎みに燃えてゐる。自分で自分の煉獄を作つてゐる。恐らく

死ぬる日まで煉獄の懊惱に喘ぎつゝ歩いて行くのであらう。ダンテの「煉獄」の挿繪に重い石を擔いだ人たちが腰を二重に曲げながら歩いてゐる圖がある、たいていの人たちは毎日憎みの重い石を擔いで墓場へと急いでゐる。

私は一二年置きには家を移つて歩いた。そしてたいていはその隣りの人たちと親しみを持つことはできなかつた。引つ越して歩く第一の理由は、いつも快い隣人を持たぬといふことであつた。

人と人との隣り合ひに住む場合にはたいていは新らしい愛を生むことよりは、憎みを生むことが多い。

人と人とが一つの仕事に從事する場合にも新らしい愛を感ずるよりは、憎みを見出すことが多い。

無抵抗であれと敎へる人があるにちがひない。けれども正直な自分の心に訊して見たならば、私たちの心はそのやうな場合に憎みに燃え、憤りに燃えてゐることがすくなくはない。

一つの家庭に、一人の若い女性がはいつて來る。愛よりも先に動くものは嫉みである。やがてそれが憎みと變つてゆく。若い男、若い女の魂がそのためにどれほど傷つけられるか知れない。

人が人を殺す。これほど恐ろしいことはない。しかもかつて愛したるがゆゑに、憎み殺すといふやうな悲劇が毎日のやうに人生の記錄を縫つてゆく。

かつてこの世界中で、最も愛し合つた者が、この世界中で最も憎み合はなければならなくなるといふことは何といふ恐ろしい矛盾であらう。しかも私たちは毎日この恐ろしい矛盾を見てゐる。

これがたいていの人間の心の實相である。

×

しかし私たちは自分の憎みの心をそのまゝ是認してはならぬ。

憎みはどこまでも憎みである。正しいことではない。無論、不善に對する憎みは別問題であるが。必然的なもの、

不可避なものではあるかも知れないが、憎みは人間の心の歩みの最後のもの、最上のものではない。憎みは止むを得ないものではあるが、憎みを尙一歩すゝめて轉化させる心がけは持つてゐなければならぬ。

憎みは或る意味では愛と一歩の差の所に置かれてゐる。憎みは愛の姉妹であることがある。薄い境の紙一枚破れば憎みは愛に更生ることができる場合があるやうに想像される。

しかし憎みは私たちの眼を曇らせる。憎みによつては正しい判斷はできない。憎みを是認しようとする心にはたいてい無批判的な傾向が附きまとうて來る。憎みは一つの憎みからさらに深い憎みへと私たちの心を誘うて行く。

憎みについて思ふごとにいつも考へ出すのはドストイエフスキイのことである。

シベリアの囚人として煉瓦を運んだりしてゐた日のドストイエフスキイには、或る人に對してはかなり强い憎みの心も燃えてゐたやうである。「檻の中の狼」と呼ばれるほど憎みに充ちた眼をしてゐた時もあつたやうである。あの金貸しの强慾な老人を殺したラスコルニコフの憎みは、シベリヤの監獄の冷酷な某少佐に對する燃えるやうなドストイエフスキイ自身の憎みであつたかも知れない。

しかしドストイエフスキイには憎みに打ち克つだけの、或ひは憎み以上の隣人に對する思ひやりがあり、同情があつたにちがひない。ともかくかれは自分の心を淨化することに對していつも專念したであらう。またかれはそのために殆んど一生をつくして愛憎の境に苦しんだであらう。

正しいことのために憎むといふやうな場合を除いては、憎みを持つことは決していゝことではない。しかしながら人間である以上は憎みを持たないといふことは殆んど不可能であるかも知れない。悲しいことではあるが私たちの心は憎みに燃えてゐる。

私たちの生活には或ひは無碍無障の救ひはないかも知れない。けれども救ひのかすかな光りといふものはおぼろげ

ながら感じられるやうな氣がする。

憎みを憎みとして感じ、悲しみ、悔ゆる心のうちにおぼろげな救ひの光りが見出さるゝやうに思ふ。

人に鞭打たるゝことは苦しいことである。しかし時としては鞭打たるゝ者以上に鞭打つ者は深い苦しみを經驗しなければならぬ。人を憎む者は、憎まるゝ者以上に苦しまなければならぬ。悔いなければならぬ。憎むことのいかに苦しきかを知る者の心には、或ひはかすかなる救ひの光りが射して來るのではないだらうか。

神の愛、人間の愛を信ずる人の上にも救ひがあるであらう。しかし隣人の憎みに、或ひは自分自身の憎みに恐れ、悲しみ、悔ゆる心の底にもかすかなる救ひがないと何うして言へよう。そこから苦しい愛が生まれて來ないと何うして斷言することができよう。

ラスコルニコフの憎みが、どうして長老ゾシマの愛となり得ないと斷言することができよう。

私たちにとつて最も悲しいことは憎みを持つてゐるといふことではない。憎みのために憎みを持つことである。憎みを愛に轉化しようとする努力の足らぬことである。憎みを悔ゆる心の足らぬことである。無批判的に自分のすべての憎みを是認しようとすることである。

ドストイエフスキイは深い愛を持つてゐたであらう。けれどもかれにラスコルニコフの憎みがあり、その憎みをやがて長老ゾシマの愛へ轉化しようと努むる精進の惱み苦しみのうちからかれの藝術が生まれたと見ることはできないであらうか。

このことはトルストイの場合にも同じやうに言ふことができると思ふ。

イブセンの場合にも言ふことができる。

ミケランゼロの場合にも。

トルストイの眼、イプセンの眼、ミケランゼロの眼に、私たちは愛を多く見出し得るか。或ひは憎みを？
「地獄とは人を愛することのできない苦しみだ。」と長老ゾシマは言つてゐる。
トルストイもイプセンも同じ地獄の苦しみを苦しんだ人ではなかつたか。
地獄の苦しみから救ひ出されようとあせるところに藝術があるのではないか。
キリストは弟子たちが、「人の罪を七度ゆるすべきや？」とたづねたのに對して、「さらに七十倍せよ」と敎へた。
キリストの愛の心は、私たちにとつてあまり高過ぎる。しかし私たちの憎みを轉化し憎みを淨化することによつて、私たち自身を救ふためには、キリストのこの言葉は何うしても忘れてはならぬ。
現在、あまりに多く自分自身のうちに憎みを持つてゐる私として、このやうな言葉を語るのは氣恥かしくもあるが、キリストのこの言葉に從つてゆくことは正しいことであると思ふ。

伊豆の山から

伊豆の山の池にも白い睡蓮が咲いた。
去年は五月の十日に初めて咲いた。恰度母が亡くなる四日前であつた。
まだ夏までは大丈夫保つであらうといふので、私はS町から一と先づ東京に歸ることにした。五月の七日であつた。
朝から雨が降つてゐた。
「お前が旅に立つのに雨が降るなんて珍らしい。」と亡母が言つた。私は今まで旅立ちをするのにほとんど雨に會つたことがなかつたからであつた。
私は亡母の言葉が妙に氣になつて仕方がなかつた。
私は東京を立つ時、歎異鈔をバスケツトの底に入れて持つて行つた。今日は、明日はと思ひながらも、病みほうけた亡母の枕邊で歎異鈔を讀んで聽かせる勇氣はなかつた。
「あなたは直きに死ななければならないのです……」歎異鈔を讀むといふことは、畢竟母に死の宣告をすることのやうに想はれるのであつた。
出立の時間が差し迫つてからであつた。私は思ひ切つて歎異鈔を讀んだ。雨の音が時々私の聲を曇らせるほど強く雨戸を打つた。
結果は豫想外であつた。亡母は
「何故もつと早く讀んで聽かせてくれなかつたか」と言つてよろこんだ。

「お前は今まで耶蘇教になつたとばかし思つて悲しんでゐたが、そんなに佛教のことも知つてゐたのか、こんなに嬉しいことはない。」とも言つた。

汽車に乘つてからも私の眼には病み衰へた亡母の姿ばかりが浮かんで來た。二十年來滅多に一緒にゐることもできなかつた氣の弱い亡母の寂しい眼が、枯木のやうな白い手が、鳩尾の癌の隆起が私の胸を痛いほどに締めつけるのであつた。

雨に打たれた紫雲英が北九州の曠野を埋めてゐた。そこには亡母の故郷の低い櫨山が雨に煙つてゐた。そこにはかつては父の家の酒倉の白い壁も遠くから眺められたのであつた。

亡母は故郷を出て三十幾年目に旅のS町で死んだのであつた。

父の事業の失敗から、故郷を逃げるやうにして亡母と私たちきやうだいが幾日もの旅をつゞけてS町に行つた日のことなどがそれからそれへと思ひ出さるゝのであつた。私は荷物と一緒に荷車の上にくゝりつけられてゐた。曼珠沙華が咲いてゐた。亡母と姉たちは曼珠沙華の紅い道傍で泣いてゐた。私は父が買つてくれた土の鳩を握つてゐた。口を當てゝ吹くたんびにほうほうと虚ろな聲を立てた。

何といふ村であつたか知らない。私は亡母に抱かれて野天の風呂にはいつた。月が照つてゐた。風呂の水を搔きまぜるたんびに月の光りが美しく碎けた。

その夜の月と星とは、私が生まれて初めて頭に刻みつけられた空の光りであつた。

何處かの小ひさな町を通る時、私は軒の下に雨戸を横に置いて、土の人形が飾られてあるのを見た。私はそれが欲しかつたが、父はどうしても買つてくれなかつた。一箇の土人形を買ふだけの餘裕も父は持たなかつたのであつた。

睡蓮の白い花が夕暮の水の上に眠りかゝつてゐる。

濕つぽい空氣の香も、去年亡母の柩を送つた日を思ひ出させる。

日が暮れかゝつてゐた。山の麓の寺に着いた時は蠟燭の炎が赤く薄暗の中に見えた。お寺からさらに嶮しい山道をたどつて柩は火葬場へ送られた。野茨の花が白く雪のやうに暗のなかに仄見えてゐた。

一生を良人のために泣き、子たちのために苦しむために生きてゐた亡母の生涯が今更のやうに私の胸に迫つて來るのであつた。

一生のうち一度も私達を叱つたことのない氣の弱い善良な母のことが、私たちきやうだいの心に一樣に思出されてゐるのであつた。

數人の子、數人の聟、十數人の孫たちに送られて善良な、しかもほんたうの忍苦的生涯を忍んで死んだ亡母の柩は野茨の道を山の上の火葬場に送られてゆくのであつた。

亡母はあれほど歸りたいと言つてゐた故鄕にも歸れないで旅の町で死んだのであつた。

「早く胸を突いてくれ小刀でッ！」亡母は鳩首の癌腫を指さしてはかう叫んだといふことであつた。

あの善良な氣の弱かつた亡母の七十幾年の忍苦的生涯に對して、自然はあの殘忍な死を與へた。

私は自然の盲目を呪ふ。憎む。

「いゝお天氣です。星が降りさうな……」と妹が言つた。

「あたしはいゝお天氣に死んでゆくのかい？……」と言つたのが亡母の最後の言葉であつた。

私は何の悲しみも持たない人のやうに窓を明けて辨當を買つた。新聞を買つた。

下の關の海峽をわたる時、日が暮れかゝつた。

私は日がすつかり暮れてしまふのが待ち遠しかつた。早く寢臺にもぐりこんで自分ひとりで思ふ存分泣きたかつたのであつた。

私は亡母の死後今日までぢつと無理にも自分の心を強くしてゐなければならなかつたのであつた。

一年が過ぎた。かうしてまた幾年かゞ過ぎるであらう。亡母が死んだ五月のなやましい空が幾度かくりかへされるであらう。

×

人間の一生の經驗といふものがほんたうに狹いものであるといふことがだん〳〵分つて來るやうな氣がする。それだけに、自分の生活の圏外にある人々のことを傍觀的に批判したり、大ざつぱに片付けてしまつたりすることのいかに不親切であり、恥づべきことであるかといふことが一層痛切に考へられて來た。

子を亡くしたことのない人には子を亡くした人の悲しみは分らないであらうし、妻を失はぬ男には妻を失つた男の心は分らないであらう。

旅をしてゐても、汽車の人たちを見ても、私は母が死んでから後はじめて汽車の中に私と同じやうにその親しい人の死を悲しみつゝ旅をしてゐる人々のあることを知るやうになつた。

このごろの新聞を讀んでゐると毎日のやうに若い人や、若い夫婦者の自殺などを見るが一つの家を持つて見て後にはじめて夫婦者の自殺といふやうなことも或る點までは、今までよりは實感的に胸に應へて來る。

若い妻と子供とを故鄕に置いたまゝ東京に出て働らいてゐるNといふ一人の男の心持ちが分るやうになつたのも、家を持つてから後であつた。

人の前で泣いたり、笑つたりすることのできる間は人間は幸福であらう。泣くにも泣けないやうな時代が、もう私

の上にも近づいて來たやうな氣がする。

×

宗教生活にでもはいつて靜觀裡に神を見ようとするやうな殊勝な心がけの人になりすますことのできる人間ならいいが、どうも私にはそれほどの決心はできないやうだ。綱島梁川氏の「病間錄」などを讀んでゐると、あの見神の歡喜に陶醉した心情は羨ましいが、私のやうな人間にはまだ〳〵遠い隔りがあるやうだ。隔りといふよりは寧ろ道がちがつてゐるのかも知れない。私の血管のなかにはあまりに多く反逆者の血が流れてゐるやうだ。

或る人々は人間の思惟の世界を絕してそこに神がある。神は知ることのできない絕對である、たゞ信ぜよといふ。私にもその人たちの心持ちは分る。しかし私にとつてはそれはまだ實感となつては動いて來ない。

私はタイタンの子孫である。考ふる力を賦へられてゐる。天上の炬火を自分の手に握つて見たいのだ。たとへそのために自分の胸を鷲に裂かれるにしても。

無知の天國よりは有知の煉獄に生きてゐたいと思ふ。

私たちは愛といふことを口にする。けれども人間はいかに、愛を口にする資格のないものかといふことをつく〴〵考へさせられる。

あの華やかな大都會の夜、そこに幾百、幾千の人が、恰も籠の小鳥が空の自由を欲するやうに、自由をあこがれてしかも得ず、傷ましいあきらめに夜の空を眺めてゐることを誰が想像することができよう。

×

私はこのころわづかな病院生活によつて、はじめてそこにも、私たちが今まで氣付かなかつた、傷ましい人生苦の潛んでゐることを知つた。

夏の夜である。

病院の屋根上の運動場のベンチに腰を卸した若い患者がゐる。白い服の看護婦が傍に立つてゐる。氣を付けて見ると、暗の中に彼方にも此方にも生と死の境に惱みつゝある若い患者たちが屋根上の運動場で星を眺めてゐる。

あの若い患者の眼に、大都會の夜の光りの波はどんなに映るであらうか。

或る患者は五年が間一つのベツドの上に、或る女は十幾年一つのベツドの上に寢かされてゐるといふやうな話が、屋根の上の運動場でくりかへされてゐる。

私はかつて華やかな夜の町を歩きながら、あの城のやうな亘きな建物の上に、高い星の下で黑い□人の影が動いてゐることを想像したこともなかつた。

私たちが都會生活のいろ〳〵な刺戟に快く醉はされてゐる時、屋根の上の若い患者たちは白い布につゝまれた柩のことを想ひ出してゐたであらう。

ぢいつと耳をすましてゐたら、私たちはあの黑い城のやうな建物の上からしづかな滅入るやうなハアモニカの音が流れて來るのを聽くに違ひない。

健康な私たちは恐らくその時華やかな夜のカフヱで生くることの幸福に、自分等の胸の血を高波打たせてゐたであらう。そして二言目には人類愛だの、民衆だのといふやうな利いたか風な口のきゝかたをしてゐたであらう。

私たちが草の上に仰臥して思ふ存分太陽の光りと、野の空氣とをめぐまれてゐる時、草原に沿うて四人馬車が通る。光りからも、草原の空氣からも堅く鎖された鎧戸の中に押しこめられた四人と私たちと何の關係もないと誰が言ひ切ることができよう。それだのに私たちは夜の病院の露臺の上のハアモニカや、草原を走つてゆく四人馬車のために胸を痛めることが曾てどれだけあつたであらうか。

×

私たちは色々に人のために思ふことがある。けれども私たちの思ひやりは極く狭い世界のみに限られてゐる。ほんたうに嬰兒を可愛がつてゐる若い母の愛を以てしても、嬰兒のすべての心を理解することはできないではないだらうか。死んで行く友人に對する私たちの思ひやり、悲しみに打たれてゐる隣人に對する私たちの思ひやり……それがどんなに深いものであらうと、所詮は半解なものに過ぎないのではないだらうか。

木から落ちて腦を打つて氣の狂つた兄のためにすべてをさゝげて苦しんでゐる一人の若い人を私は知つてゐる。その弟は、兄のためにどんなに盡してもほんたうに兄のこゝろになることはできない。さらに周圍の私たちは、どんなに盡してもその弟のこゝろにはなれない。

國府津から三島までの汽車の間で、私たちはあの嶮峻な山間に牢獄のやうな紡績工場を見出す。

かつて私はあの牢舍のやうな建物の窓から若い女工たちが汽車を目がけてハンカチーフを振つてゐたのを見た。私たちの汽車からは數人の支那人がハンカチーフを振つてこれに應へた。女たちはうれしさうに、汽車が見えなくなるまで未知の外國人に對してハンカチーフを振つてゐた。あの女工たちはたゞ誰でもいゝ、自由に人間に語つてみたかつたのだ。人間に飢ゑてゐたのだ。

あの美しい函嶺の翠巒のなかに誰があの資本主義の牢獄に囚はれた幾千の若い女工たちの苦惱を想像し得よう。

この世界にはあまりに多くの苦惱がある。けれども私たちは自分の周圍の極めて狭い範圍以外には實は何の同情をも理解をも持つことはできないのである。

自分にとつて最も親しい筈の母のこゝろをさへ、妻のこゝろをさへ私たちはほんたうに知ることはできない。

秋の詩人芭蕉

芭蕉の句を讀んでゐると、俳諧といふものはどこまでも秋の藝術だといふ感じがする。芭蕉は西行の歌を、西行の遁世的な生活をあこがれてゐた。しかし西行ほどの現世に對する執着は持ちきれなかつたやうに思ふ。

「ねがはくば花の下にて春死なんそのきさらぎのもちつきのころ」

とうたつた西行は、近代的享樂主義の色彩を聯想させる。少くとも芭蕉を老莊佛の思想に近いとすれば、西行は萬葉の思想に近いものを持つてゐたやうに思ふ。

西行は鴫立つ澤の夕ぐれの寂しさを感ずると共に春の花に物のあはれを感ずることができた。芭蕉はより多く、ひたすらに秋のあはれを感じた詩人であつたやうに思ふ。芭蕉はどんなに考へても秋の詩人である。

芳野の春を探つた貞享五年の旅は芭蕉にとつて、珍しいほど興ある旅であつたにちがひない。

旅の道づれとしてはかれが特に愛してゐた杜國があつた。その前年かれはわざ〳〵二十餘里の道を後戻りして、道もない危險な海岸を傳うて杜國をたづねて行つたのであつた。

その杜國と二人づれの旅の門出には

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

といふ句をうたつてゐる。旅の先き〴〵に對する意氣込がうかゞはれる。

道の旅籠々々で芭蕉は杜國が高鼾をかくので安眠ができないで困つた。しかしかれはそんなことは何とも思はなか

つた。かれは杜國の餅の戯畫を書いて杜國をからかつたりしてゐる。
この樂しい春の旅の收穫として芭蕉の句の上には殆んど何も得てゐないやうに思はれる。何故であつたらうか。絅景に句なしと見るのも一理である。
しかしかれはどこまでも寂寞の詩人であり、秋の詩人であつたからだと考へることはできないであらうか。かれはたゞ一人寂寞の底に生きた時、はじめて立派な藝術を生んだやうに思はれる。

×

芭蕉はいつも死を覺悟してゐた。かれが元來蒲柳の質であつたところからでもあらうが、死といふことを考ふることなしにはかれの藝術は味はゝれないやうに思ふ。
西行が「花の下にて春死なん」ことをねがうたのに對してかれは冷たい秋の石上に眠らんことを望んだであらう。無論かれは一種の厭世家たちのやうに、決して死を願つたことはなかつた。かれは生に對しても、死に對してもどこまでも從順であつた。できるならば一日でも長く生を樂しんでゐたいと思つたにちがひない。かれの生活は決して孤獨ではなかつた。かれほどその生存中に藝術的にめぐまれた人はなかつたであらう。かれの名は日本全土津々浦々まで聖德の士として、不出世の天才としてうたはれた。かれの深川の草庵を訪るゝ者はすこぶる多かつた。幻住庵に隱れた後にもなほかれは訪客の多いのに困り拔いて、猪を防ぐための垣根などを利用して訪客を防いだやうである。かれは生きながらの詩聖として、人德者として日本國中の人々にかしづかれたのであつた。
かれが死を冀はなかつたのは自然のことである。しかしかれは決して死を恐れなかつた。生の寂しさと共に、死の寂しさを知りつくしてゐながらも、素直に死を待つ心を持つてゐた。物的生活に對して淡々無慾であつたと同樣に、死の來迎に對してもかれは淡々たるものであつた。かれは急がず、恐れず、運命のまゝに死を靜かに凝視してゐた。死

の静かな凝視の底からかれの藝術が生まれたといふこともできるであらう。

×

芭蕉の出奔についていろ〳〵な戀愛關係を無理にも作り出して考へる人がある。が私はさう信じたくはない。「此の阿兒（若殿）こそ其方（芭蕉）が主よ必ず生涯見わすれなよ阿兒は能き臣を持しよと仰られし事あり云々」（次郎兵衞物語）これはかれの譜代の主藤堂良精の信頼である。これほどの言葉を殿樣からいたゞくほどの仲（令嗣君と）になつてゐたとすれば、その令嗣君の早世に對して、芭蕉ほどの人が出家の志をいだくのは自然のことであると思ふ。時代は封建時代であつたし、かれの俳諧の師であり同時に友であつた若君良忠の死が、いかに多感の芭蕉の一生涯を根強く搔き動かしたかといふことは想像するに難くはない。

「おくの細道」の中の「一家に遊女もねたり萩と月」といふ句を讀んだ人はかれがたゞ一夜偶然に屋根を同じくしただけの女に對してすら「不便の事には侍れども我々は所々にてとゞまる方おほし只人の行にまかせて行べし神明の加護かならず恙なかるべしと云捨て出つゝ哀さしばらくやまざりけらし」と書いてゐる心持ちを推しはかることによつて芭蕉の人となりをうかゞふことができると思ふ。

これほどの心を持つた芭蕉が絶えずおつき添ひ申してゐたかの令嗣君の死に對して、どれほど魂を奪はれたであらうかといふことも想像がつく。

　さま〴〵の事思ひ出す櫻かな

かれは二十幾年後なほ令嗣君のことを思ひ出でて故鄕の櫻に泣いたのであつた。

芭蕉が美男であつたこと、世にも珍しい秀才であつたことからして、いろ〳〵な戀愛のシインが想像はされるが、かれの出奔と戀愛（よしあつたとして）との關係がそんなに深いものであるとは信じたくない。後のかれの一生や、

その作品から想像しても。

×

「一年たりとも年若く病もつのり不申中薩摩潟見申度ふり切て出申候乾坤無住水上の泡沫稻妻の境界に候故行先野山草木の間にて土を枕として此生終り可申覺悟に候是を心の樂に　彌相決候得ば天地之間居所究申間數と存候……爰にて後の月見終り候故雪時雨は道々の詠にして何國の石上にて老の年を重ね申哉と存候……」

涙なしには讀まれぬ文章である。尊い文章である。これほどの大きな悟りと決心の上に生きてゐたればこそ芭蕉の藝術が生まれたのであつた。ほんたうに死を凝視しつゝ作られたる藝術である。

×

「我句をわれと講釋せしは人丸已來不承候やつがれむつかしき句をいたしたる事なし人の句の聞へぬといふは我俳諧の其域に至らぬ故也餘人の句の聞ゆる樣にずいぶん修業し給へ短き桔槹にては深き井の水は汲れぬものに聞傳候」

芭蕉の句ほど初心らしい句はない。芭蕉の句ほどやさしい句はないであらう。しかし芭蕉の句ほど深い句はない。トルストイが將來の藝術に對して簡易、簡明といふことを說いてゐるのと照り合せて見ると面白い。私たちはずゐぶん修業すれば修業するほどやさしい藝術を生むことができるであらう。

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

凩の町にも入るや鯨賣

こがらしの吹やるうしろすがたかな

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

紙子にも霜や置かと撫て見し

金屏の松の古びや冬ごもり

酒のめばいとゞ寢られぬ夜の雪

何のかざりもない、何の匠意もない。たゞあるがまゝの現實が、たゞあるがまゝに描かれてゐる。たゞかれの心が限りもなく深いが故に、かれの心の鏡が限りもなく寂しきが故に、そこに映された自然の影はまた限りもなき深さと寂しさとを以て私たちに訴へて來る。

×

「我戯れに奥羽行の時、のみ虱馬のはりする枕元、と詠せられしはいかにそやと申せしに師の我一生に虚言を言たる事なし是のみうそを言たりと大きに笑ひ給へり……」（俳諧芭蕉談）

この短い一文のうちに芭蕉の人となりが躍如として動いてゐる。このやうな芭蕉の生活を聞くだけでも、私は恥づかしいやうな氣がする。

かれは徹頭徹尾嬰兒の心を以て一生を終始したのであつた。

×

芭蕉が大阪、花屋の裏座敷で臨終の床についた時、弟子たちが句を讀んでかれをなぐさめた。そのうち丈草のをかれは二度讀み上げさして、

うづくまる藥のもとの寒さ哉

「丈草出かされたり」と言つて褒めてゐる。

この句を褒めた芭蕉の心をうかゞへば、またかれの藝術の妙諦が奈邊にあつたかといふことを知ることもできると思ふ。

自然の人の心をそのまゝに、自然の人の言葉で語りいでたまゝのところにかれの藝術がある。

×

「伊勢松坂の人のよし三千風と云が……ある時いへらく今江戸に芭蕉桃青といふものあり俳諧は上手也しかれども埒明ぬ俳諧也……」

芭蕉の俳諧を埒明かぬ俳諧と評したのは面白いと思ふ。芭蕉その人が世間的に埒明かぬ人であつたにちがひない。かれは才子ではなかつた。かれの藝術のうまみは埒明かぬところにある。

「去年追付日本國中は芭蕉が一風とならん其故は其性柔和にしてしかも和漢の學に渡り博識多才にしてしかも天然と大人の相あり萬人の歸敬すべき人なり……」（俳諧芭蕉談）

かれの藝術が、まつたくかれの人格の香であつたことがうかゞはれる。

×

此の道や行人なしに秋の暮

「……今度は忍びて西國へと思ひ立給ひしかど何となく物わびしく世のはかなき事思ひつゞけ給ひけるにや此の句に付きてひそかに惟然等に物がたり給ひける」（俳諧芭蕉談）

花屋臨終の前の月の事である。肉體的にも餘程衰へてゐたであらうが、さて五十一年の生涯を振りかへつて見て、かれは自分の生涯に就いて、また藝術に就いて、色々な疑ひを持つたのではなかつたゞらうか。かれはすでに恐らく自分自身のうちに死の近づいたことを感じたのではなかつたゞらうか。いづれにしてもかれは、かれが一生をささげて來た藝術そのものに對してすら何等かの疑ひを挿むことはなかつたであらうか。

この文を讀んでゐるとミケランゼロの晩年を思ひ出さずにはをれない。すべての偉大な人間の晩年の暗い人生に對する疑ひを思ひ出さずにはをれない。

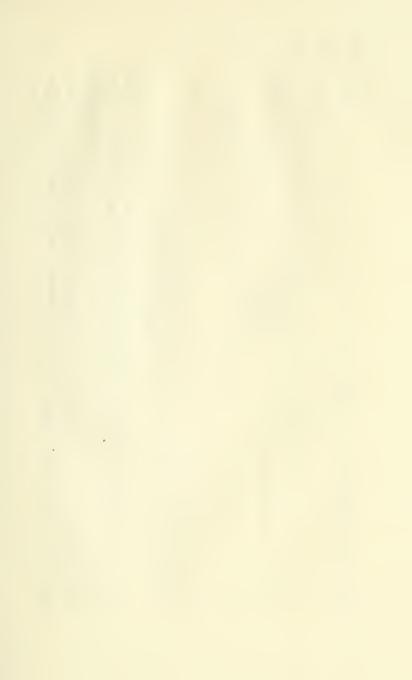
×

「先頃實永阿闍梨より路通が事を仰あり其後汝が丈草乙州等に送りし消息露霜とは聞捨ず併し少しいみはゞかる事ありて雲井のよそには成し侍りぬ彼が數年の薪水の勞努々わすれおかず我なきあとにはおよそに見捨て給はず風流交り給へ此事頼置侍る」

迷へる一匹の小羊を探す牧者の心ではないか。かれから去つて行つた路通を死の日まで忘るゝことのできなかつた芭蕉のあたゝかい心は尊いかぎりである。

山家日記

自序

わか夢と三尺へたつ野分かな

野分をきけば旅も終りを思ひ、山の冬ごもりを慕ふ。
旅を愛し、靜居を冀ふ年來の習癖、今さらいかんともなしがたき病となつてしまつた。
伊豆の赤松山に榾火を焚きては天城の雪を眺め、信濃の高原に落葉松の枯枝を拾うては幾日幾月の孤獨をたのしむ。
山には山の友あり、高原には高原の侶ありてわたくしを待つ。
山には山の雪あり、雲あり、小鳥ありてわたくしの魂を誘ふ。
自然わたくしは一年のやゝなかばを山に住むことになつてしまつた。

昭和四年十一月十四日　著者識

秋の山をたづねて

九月十七日はちやうど仲秋の明月にあたるといふので信濃の山の人たちは芒を切り、朝から月見の支度をしてゐた。一茶の句を藉るまでもなく、昔から信濃は月の名所である。千曲、犀川の流れが一つに流れ合ふ善光寺平の水に映る仲秋の明月の影を姥捨の山から見おろす感じはまた格別であるにちがひないが、高原の國であり山の國である信濃の月は何處にゐて眺めても他に見られない月の光りの美しさをもつてゐる。恐らくその原因の一つは海遠く、山澄み、空の色が深いせいであらう。

十五日の朝……といつてもまだ午前三時であつた。わたくしは山に登る時の習慣として、いざ山に登るとなればほとんど眠れないほどに興奮することがある。いつも山に登る朝は三時ころには起きて裏の落葉松の中で飯盒飯を焚く。その日も飯盒飯を焚いて夜の明けきらぬうちに家を出た。

前の澤で水鷄が鳴いてゐる。水鷄は夏も五月雨のころ鳴くものとばかり思つてゐたが、九月に入つてもまだ鳴いてゐる。無論五月雨ころに鳴くのと、秋ちかくなつて鳴く水鷄とは種類もちがふさうだが、思ひなしかこのころのは聲も低くわびしい。

十五日の朝淺間の根腰を越えて、上信の國境を六里ヶ原に入つて秋草をながめた。六里ヶ原は南に淺間、北に白根を控へた大廣野である。この前たづねたころは天明の淺間の大噴火にもたゞ一軒燒け殘つたとつたへられてゐる別去の茶屋があつたが、今は二三年前の雪の日の噴火に燒けて新らしいバラックになつてゐる。

別去の茶屋あたりまでは數年前までは熊も出て來た話を聽いたが、今は自動車も通ふほどになつたので、熊が好く

といふ淺間葡萄は昔のまゝにみのつてゐるが、熊の話はめつたに聽かれなくなつた。

六里ヶ原を横切つて秋草の花を見てのかへりにわたくしは不圖上信國境あたりの大空を見上げた。こんなに美しい空、こんなにも深い色の大空があり得べきものであらうか。わたくしは幾度かさう思つては立ち停り、空を見上げた。海の潮風が吹かないせいもあらう。山の高いせいもあらう。ともかく上州から信濃にかけての高原の空の色はいひやうもなく深く、青く、みがき出されてゐる。信濃の月の名はいさゝかの割引もなく恐らく天下無比であらう。

十七日の明月を見るといふたのしみは、數日前から、毎夜空を仰ぐことを忘れさせなかつた。十五日の夜も月は落葉松の林の中に蒼白い光りを投げてゐた。十六日の夜もほとんど雲もなき月の光りを落葉松のなかに浴びることができた。

「明月を見るならば碓氷の峠まで歩いて行つてのことだ。」と思つたので、沓掛から輕井澤を通りすぎて碓氷峠まで歩くことにした。避暑の客たちはほとんど歸つてしまつたので、廢墟の中をたどるやうな心で芒の中を步まなければならぬこともあつた。貸馬と書いた札を懸けた馬小屋には三四頭の馬が秣を喰んでゐた。

舊輕井澤の出外れ、峠へかゝらうとするすこし手前の老木の下に芭蕉の「馬をさへながむる雪のあしたかな」の碑がある。碓氷峠にかゝるごとに忘れかねる句碑である。

「今日こそ空には一點の雲もない！」峠にゆき着いて見晴し臺の上に立つた刹那、わたくしたちは子供のやうになつて空といふ空をながめた。妙義から榛名赤城まですでに夕暮の色をこめてゐる。西の空には八ヶ嶽、さらに遠く穗高、槍ヶ岳までが明かな輪廓を描いてゐる。淺間はいたゞきの石までが拾はれさうに大空に映つてゐる。

待つてゐた明月はまだ夕陽も落ちきらぬ間に忽然として利根川の白い流れの上に淺黄幕に懸つた舊劇の月のやうな

色と形であらはれてゐた。日が暮れて、いくらかの間を置いて地平線の上に徐々にあらはれて來る滿月を想像してゐたわたくしたちには、いさゝかあつけなさを感じさせないわけにはゆかなかつた。

山の上はあまり寒いので、碓氷權現の社家町の方へ行つて火を焚いてもらふことにした。

裏の藤棚にはまだ岐阜提灯などがつるしてあつた。藤棚の下に女が持つて來てくれた木を焚いてあたゝまりながらわたくしたちは月をながめた。妙義も榛名も月の下に沈んだ恰好で、山の腰あたりには霧ともなく、雲ともなくほんのりと山をつゝむ山氣がたゞよひはじめてゐた。殊に妙義の怪奇的な曲線を描いた懸崖峭壁が月光を浴びて銀のごとく、鐵のごとくそゝり立つてゐる風情は碓氷の月をして一層神祕的にさへ感じさせた。利根の流れが月の下に杳然として漂ふ。しかしそれも間もなく消えて、野といふ野は一樣に黝く、空のみが秋らしく澄みに澄み、磨きに磨かれてゆく。

地に這ふて一つの燈がまたゝく。二つとなり三つとなり、十となり、二十となる。

「高崎ですよ。」

「前橋、富岡、それから高崎のさらに向ふに一つの大きな火が見えませう。あれが熊谷の火ですよ。」焚火をめぐつてこんな會話が取りかはされる。

運ばせて來た行厨が開かれる。けさ南の松山で狩つた初茸が煮られてゐる。酒を掬む。天下の秋はわたくしたちのものである。

「こんな雲一つない明月といふものは信濃では十年に一度もありません。」と社家町の老婆はいふ。いかにも信濃らしき明月である。高山の明月である。話は偶然にも見晴し臺の老婆のことに移る。十日ばかり前わたくしは霧の深い日、見晴臺の老婆の店に憩うて茶を飮んだことがあつた。今夜も嫗一人で信濃上野の國境の月を眺めてゐるであらうと思

つてゐた。

「あれは輕井澤のお祭の夜碓氷峠を歩いてゐて腦貧血で死にましたよ。」と社家町の老婆はいふ。今夜は嫗一人眺むる山の月もないのかと思ふと無常寂滅の感慨もわく。

わたくしたちは峠を下りて、二里ばかりの道をふたゝび沓掛の方へ歩いて歸つた。淺間のいたゞきにはめづらしくいつもの白い噴煙も見えなかつた。近道をするために、わたくしたちはキャベツ畑の中を横切りながら幾度か仰いでは月をながめた。キャベツ畑の隅にはキャベツや木炭を積んだバラック建の倉庫があつた。數年前の秋、田舍廻りの旅役者が來てそこの倉庫の中で芝居を打つたことがあつた。お姫さまに扮した若い女が舞臺衣裳のまゝキャベツ畑を歩いてゆくのを見たこともあつた。その可笑しさを思ひ出しながら、わたくしは淺間を見た。淺間は秋よりも靜かに明月の光りを浴びてゐた。

「あんまり月がいゝでとても眠れない。一層のことこのまゝ淺間の根腰をまはつて六里ヶ原までのして見るか。」などといふ男もあつた。

わたくしは家に歸つてもなほ寢るのが惜しかつたので、落葉松の下を歩きながら月を眺めた。雪よりも白く野菊が咲いてゐた。

突然夢を破られた。屋根も壁ももみくちやにされるほどの激震である。空といふ空、地といふ地が摧け、裂け、落ちる音であらうか。わたくしは寢卷のまゝで飛び起きて北の縁側の雨戸を明けた。淺間の爆發である。仲秋の明月は照つてゐた。いかにも靜かに。

北の半天が爆煙のために眞暗になつてゐた。黑い爆煙の柱が幾千尺の高さに登つてゐた。黑い柱をめぐつて、或ひ

は黑い柱の懷から幾十條の青い電光が走つてゐた。幾百千尺の高さに打ち上げられた石と石と相搏つ音が凄じい光りを誘ふ。明月の夜の靜寂を壞る爆音の凄じさはまさに天空の嵐といふべきであらうか。地の底一面に湧きかへる熔岩の煮え立つ音であらうか。地を搖り、山を動かし、空に谺して響く。まことに名狀しがたい無氣味さである。山の人たちは噴火口を御釜と呼ぶ。いかにも思ひつきな呼び方である。噴火口全體が、否、淺間の山全體が一つの釜となつて、岩を煮、熔岩を沸かしてゐる。岩の煮立つ音が秋の空にこだまして萬馬の空を翔けるよりもなほ凄じい響を立ててゐる。山は吐息するやうに呻つては熔岩を吐き出す。そのたんびに空は鳴動する。稻妻、空に相搏つ石、火山のスロープを跳躍しつゝ落ちてゆく火石、碎くる火岩、見る間に淺間はいふまでもなく、谿をへだてた前掛山も石尊山も一面の火の石につゝまれてしまつた。方幾里の間ことごとく火の石に掩はれてしまつた。幸ひわたくしの家は落葉松の中の一軒家であるために人聲も聽かなかつたが、沓掛の町では女子供の泣きさわぐ聲が悲慘であつたといふことを後で聽いた。爆發とともにわたくしたちの胸に泛かんだのは、夜の十時頃家の横を通つて淺間に登つて行つた人たちのことであつた。小諸口からもまた登山者があつたに違ひない。そんなことを考へてゐると天に冲して燃え立つてゐる爆煙の恐ろしさが犇々と胸に迫つて來る。庭の草の中に石の落ちて來る音がする。壯觀といへばまことに壯觀であるが、山に登つた人たちのことを考ふれば悲愴きはまりなきものである。一臺の自動車が沓掛から峰の茶屋に走つて行つた。これも後で聽いたことであるが、峰の茶屋の娘は沓掛の自動車屋にかしづいて來てゐるといふことであつた。嫁の里の安否を氣づかつた男は自動車を運轉してまだ石の降つてゐるなかを沓掛から峰の茶屋まで飛んで行つたのであつた。午前三時ごろであつた。七十幾歳の依田老人が沓掛の方からわたくしたちの安否を氣づかうてたづねて來てくれた。歸りに老人は溫泉に浸つて夜明けちかくまで六里ヶ原で熊を擊つた話などを若い者たちに噺してきかせてゐた。

夜が明けると淺間はいつもの靜かな淺間であつた。熔岩の一部分が燃えてゐるほかは山の肌もいつものやうになめ

らかであつた。
「峰の茶屋では石が飛んで來て屋根や床を突き拔いたほどだつたので、親子五人が抱き合うて泣いてゐたといひます。」上州から繭を積んだ馬を曳いて來た男は、噴火のことなどは忘れたやうな顔をして通り過ぎて行つた。
二日前淺間の根腰を越えて、六里ケ原に歩いた時わたくしは峰の茶屋で三人の子供たちが、大きな空箱の中に入り、上から糸立を冠つて笑ひながら寒い風を避けてゐたのを見た。わたくしはその時のことを思ひ出しながら馬子の咄を聽いてゐた。正午ころには峰の茶屋まで行つた輕井澤の若い配達夫が拳大の石を拾つて來てくれた。石はまだ硫黃の香がしてゐた。
十八日の空は飽くまでも晴れてゐた。庭の落葉松の幹には、胸毛の眞つ赤な啄木鳥が來てさかんに木を啄いてゐた。山は死より靜かであつた。

十九日の朝は雨が降つてゐた。午後の二時の汽車で信濃大町から山案内の茂市が來るといふ電報であつた。雨の中を沓掛の驛まで出かけてゆく。茂市はきよとんとして雨の中に下りた。
「山はどうだらう？」雨の中を歩きながらわたくしは山のことをたづねた。
「今年は早雪でな、十三日に立山は眞つ白でした。十四日には爺ケ岳も、蓮華も眞つ白になりました。」
「出發がすこしおくれたかな……」
「山に登るのはすこしおくれたやうですが、途中までどもお伴しませう。」茂市は淺間の爆發のことは知らなかつた。相かはらずのんきな山男である。
雨がひどく、霧が深いので外にも出られず、茂市は溫泉に浸つては秋の山をながめてゐた。

二十日も雨であつた。わたくしたちは雨のなかをリウクサックを背負つて汽車に乘つた。小諸あたりでは蕎麥の花が眞つ白に咲いてゐた。千曲川が霧の底に眞つ白な渦卷をなして流れてゐた。小諸の古城も、上田の古城も雨に濡れてゐた。わづかに取りのこされた城の石垣、矢倉の一部分も靜かな秋の雨に濡れてかへつて尊かつた。わたくしは古城を見るたんびに茂市に指さして見せた。茂市はそのたんびに「あゝさうかな」と朴直な視線を向けた。秋の雨は行く先、來る驛ごとに冷たく降つてゐた。姥捨を越ゆるころから日は暮れかゝつてゐた。旅役者の群がどか〳〵と汽車のなかに駈け込んで來た。いつの間にか秋の雨に見入つて眠りこけてゐるものもあつた。

明科で大雨のなかを大町行きの自動車に乘りかへて、眞つ暗な道を走つた。大町に着いたのは九時ちかくであつた。雨は夜つぴてどしや降りに降つた。

二十一日の朝も雨であつた。

こけら葺きの屋根、石を載せた屋根から屋根へとつゞく大町は、なつかしい信濃の山の町の一つである。舊い糸魚川街道が北から南へ走つてゐる。その街道を中心に行儀よく山の町は並んでゐる。老木があり、高瀨川の磧があり、湖水があり、雪をいたゞいた鹿島槍や爺ヶ岳があり、いかにも落ちついた町である。對山館の三階の欄干に凭れて街を眺めてゐるとしみじみと旅のこゝろも湧く。松茸やしめじを並べた店頭に秋の雨がけさもしと〳〵と降りつゞいてゐる。この前大町をたづねた時わたくしはしづかな時雨の中に笛の音を聽いたことを記憶してゐる。

雨を冒してわたくしたちは大町を出た。大町から松本、松本からさらに島々までは電車である。今年の秋は登山者の絶えたるを見はからつて燕から、大天井、槍に出て初雪の山を越ゆるつもりであつたが、雪は十日以前から降つてゐてすこし危險だといふことであつたので急に計畫を改めて先づ上高地に入ることにした。

島々からは奈川渡を經て中の湯まで自動車が通ふやうになつてゐた。上高地入りもこれではあまり樂すぎると思つた。

連日の雨で梓川の水も濁つてゐた。島々から稻核へと、山路にかゝるにつれて雨は一層はげしくなつて來た。崖がくづれ自動車を下りて歩かなければならぬこともあつた。谿が深く、山が急峻なために自動車に乘つてゐてもしば〱ひやりとさせられることがある。谿の紅葉が點々と燃えはじめてゐる。

奈川渡で自動車を乘りかへるために一時間餘も待たなければならなかつた。待合所の人たちは將棋をさしてゐる。雨はます〱降りしきる。懸崖の紅葉は炎よりも赤い。中の湯行きの自動車に乘つて出發する。紅葉はさらに紅くなる。水が澄み、雨は小降りになる。中の湯から一里半の山徑は燒岳に沿うて歩かなければならぬ。淺間の爆發を見たばかりの者にはあまりいゝ氣持ちではない。燒ヶ岳は靜かに燃えてゐた。河童橋の畔の旅舍五千尺にたどりついたのは薄暮のころであつた。宿の人が氣をきかせて運んでくれた大盥のすゝぎ湯に冷えきつた足を入れた刹那は、さすがに古風な旅をうれしいと思つた。

この前上高地をたづねたをりは島々から大あらしの中を德本峠を越えて夜の十時すぎに五千尺に着いたが、上高地に來るたんびに不思議に雨に緣がある。五千尺の窓に凭れて梓川の磧と水楊の並木を越えて穗高の雪溪に魂を奪はれてゐる間に日は暮れてしまつた。今夜はひつきりなしにはげしい雨の音である。

夜に入つて提灯の火が雨の中を走り、やがて消えた。中の湯まで出かけて行つた若者を探すためである。あらしの中を走りゆく提灯の火は何となくものすごいうちにも寂しいものである。

二十二日の明け方から山はあらしになつた。穗高も明神嶽も雲につゝまれてゐる。時々姿を雲の上にあらはす。九時ごろになつて俄にあらしが止み、空が晴れて來た。穗高の懸崖を縫ふて幾十條の瀧が落ちる。走る。砕ける。

飛ぶ。銀のごとく雲をへだてゝかゞやく。わたくしは雨の日の穗高を愛する。雨上りの穗高を愛する。
見よ、見よ。わたくしは叫んだ。
嶺はけさの雪につゝまれてしまつた。
雪と雲の間に火に燃ゆる紅葉が。雪と岩の間に、岩と草の間に、天に懸つて紅葉が燃ゆる。空は飽くまでも深く、高く、靑く、紅葉は天に懸つて燃えてゐる。見よ、見よ。わたくしは叫ぶ。
わたくしたちは明神池を見るつもりで五千尺を出かけた。小梨平の片隅には水車の音が笛のやうに響いてゐる。山鳩が飛び、駒鳥が鳴いてゐる。
梓川の丸木橋をわたつて取つ付きのところに嘉門次爺の小屋がまだとりのこされてゐる。この前たづねたころは小屋のまはりに蔦うるしの花が雪のごとく咲いてゐた。
明神池の岩の上で飛驒に歸つて行くといふ商人らしい男と一緒になつて朝の山をながめた。
空はすつかり晴れてしまつた。駒鳥は澤といふ澤、溪といふ溪に鳴きはじめた。わたくしたちは牧場を歩いた。さらに二三十の丸木橋をわたつて槍見河原まで歩いて行つてしまつた。あまりに水が美しく、山の紅葉が燃え、空が靑いので。……槍ヶ嶽は黝い岩山の姿を天にそびえさしてゐた。はじめてこの河原に立つて槍を見た日、涙を落したことなどを思ひ出した。
日が暮れ五千尺に歸つた。五千尺の主丸山氏も松本から夕方山に歸つて見えた。丸山氏に相談して明日の朝槍ヶ嶽に登ることに決める。案内二人に米四升、味噌、醬油、罐詰、夜具、木炭二貫目を運ばせることにする。
二十三日。三時には眼がさめた。星がまたゝいてゐる。大町からつれて來た茂市のほかに五千尺の案內人を連れる。松下といふ頼もしき靑年である。かれは默々として山を歩む。いかにも忠實なる靑年である。山の男らしき男である。

「いゝお天氣だ……」日本晴れの秋日和である。駒鳥はけさも澤から澤に鳴き、溪から溪に囀る。一溪を横切るごとに駒鳥の音を聽く。一澤を見出すごとに駒鳥の唄を聽く。山に登ることはうれしい。しかし澤に來、溪に來るごとに駒鳥の聲を聽くのもうれしいことである。幾度か足をとゞめては澤の駒鳥を聽き、尾根の紅葉を仰ぎ、初雪に飾られた雪溪をながむる。栗鼠が跳び、野兎が走る。

秋の山はまつたく登山者の姿を絶つ。うれしいことの一つである。山の尊さがとりもどされ、山の高さがとりもどされ、山は靜寂のうちにかの女のまことの相をとりもどしてゐる。

一の俣の小屋も、槍澤の小屋もとざされてゐる。紅葉のみが燃えてゐる。雪を待つ白樺の林には駒鳥が鳴いてゐる。赤澤の根腰を越え、大喰と中岳を眞正面に受けて一時間も歩めば千島桔梗、岩桔梗、うさぎ菊、龍膽が夏のさかりのお花畑の名殘をとゞめて咲いてゐる。薄雪草はやゝ終りにちかい。わたくしたちはごろ〳〵の石道にしやがんで岩の間の木の實を摘む。二三日前に降つたばかりの初雪がほんのりと雪溪の古雪を化粧してゐる。

坊主の小屋には幡龍上人の石像が岩の間に置かれてある。昔の坊さまはえらいものだと思ふ。道もなく、案內もない時代によくもこの山奧にたどりついたものだと思ふ。

大鷲が西岳の方から槍をかすめて大喰の岩にかくれる。

殺生小屋の戶を明け、茂市と松下靑年が夜の支度をする。小屋の横の天水溜には氷が張つてゐた。松下靑年は氷の水を割つて米を洗ひはじめた。富士も見え、赤石も見え、八ヶ嶽も見える。小屋の直後の槍の穗先が今にも落ちかゝつて來さうである。

夜の空は殊にうつくしかつた。一萬尺の岩山にたゞ一人立つて大空を見上げてゐる自分自身の姿に氣附いた刹那、をのゝきに似た感じもわいた。岩も動く、空も動く、わたくし自身の姿も岩のごとく冷たく動かつた。

星の數の無限なる。天の無限なる。槍の沈默の深さ。おぞましさ、尊さ、神祕さ、孤獨なるわが影の寒さ。八時ころであつた。わたくしははじめて落石の音を聽いた。中岳であらうか赤澤であらうか。奧穗高であらうか。沈默そのものゝ山の靜寂を破つて遠い嵐のごとき落石の音が響く。嵐よりも遠く、嵐よりも近く、やがて嵐よりも遠くへだたりゆく落石の音は、秋の山の神祕の一切をこめて暗に消えてゆく。あたかも滅びゆく人間の魂の行方を聯想させるやうに。

落石の響は一萬尺の空をかすめて秋の空遠くやがて暗い溪の底に吸ひこまれるやうに消えてゆく。十分或ひは二十分の間を置いてはものすごき落石の音がつゞく。山の吐息のごとく。山の死滅のごとく。一切の偉大なるものゝ最後の日が刻まれてゆくわびしさをこめて。

二十四日。午前三時ごろからふたゝび山の岩のくだけ落ちる音がつゞいた。

「落石だなあ……」茂市と松下靑年が暗のなかで語つてゐる眠さうな聲が聞えた。

落石の響は空をかすめて、遠い溪に消えてゆく。わたくし自身の魂を誘ふやうに。

「寒い、實に寒い……」と誰かゞいふ。茂市が屋根裏のやうな寢床から下りて來てわたくしの枕もとに炭火を焚きはじめた。

夜が明けかけて來た。

落石につゞいてはげしい雷鳴がはるかな下の溪に響く。

「雪が降つて來ましたよ。」と松下靑年が土間の竈の方から聲をかける。わたくしは起きて行つた。松下靑年は氷の張りつめた水を掬んでは朝の支度を急いでゐる。

「昨夜は槍の絕頂の月をながむるつもりでゐたが、月が出ないうちに眠つてしまつた。けさはこの雪が……」茂市は

きよとんとして槍から大喰、中岳をうづめた雪をながめてゐた。

「早う山を下りんことにやあぶない……」茂市は暗い顔をしてゐた。見てゐる間に雪は三寸になり四寸になつた。「もしこの勢で半日もつゞけられた日には……」そんなことを考へてゐると不安な想像がわいて來て仕方がなかつた。

「出來るだけたくさん食べて置くに限る。」そんなことを語りながらわたくしたちは味噌汁を飯にかけて無理に喰つた。

幾度か窓を明けては空をながめた。

この冬有名な登山家が落ちて死んだ穗高のピイクも見えなくなつた。中岳も見えず、直ぐ眼の前の大喰も雪あらしにつゝまれてしまつた。

「雷鳥ですよ。雷鳥が鳴いてゐます。」

「親鳥を呼んでるのでせう。」

わたくしたちは耳をかたむけて、雪あらしの中にわびしく響いて來る雷鳥の聲を聽いた。

春の町春の山

京の町はまだ眠つてゐた。

東山の塔を曉の微明のなかに見た。逢阪山の舊道を越ゆる黄牛が眞つ白な霜の道を京の方へ下つてゐた。誰かゞ初日の出だ初日の出だとあわたゞしい、しかしいかにもうれしさうな聲で叫んだ。

夜明けたばかりの近江の平原の涯に、朱で描き出したやうな太陽が一竿ほどの高さに燃えてゐた。比叡も比良も眞つ白な雪につゝまれてゐた。近江の山も田も家も川も林も一樣に深い雪の下にまどろんでゐた。湖は燻し銀のやうに鈍く、暗かつた。瀬田から唐崎へ通ふ白鳥のやうな小蒸汽船の舳の國旗が殊にはつきりと春の朝の印象を深くするのであつた。

東海道を往き來するたんびにわたくしは近江はいゝ國であると思ふ。冬は寒く、夏は暑いであらうが、あの靜かな湖をめぐつて、あの靜かな雪の山につゝまれてゐる近江はいゝ國である。芭蕉が湖畔を慕うて住んだのもいかにもと思はれる。

走つても走つても雪の原である。どこまでが近江の雪かはてもない。

日が雪の上を照らす。春の雪の上を照らす。春の雪だとおもへば心もおのづとをどる。

大垣を過ぎて岐阜に近く、金華山を見るやうになると長良川の淵が雪の原に碧水をたゝへてゐるのを見る。まだ雷は堅いが幾株の老樹が竹藪のあたりを緣取つてゐる。藪の中には古風な構への家がある。鵜匠の家でゝもあらうかなどと春らしい想像を描く。

元日の朝はどこの町も貧いほどに靜かである。どこの町も大かたまだ眠つてゐる。殊に雪に埋められた町や村里は、その朝ばかりは聖市、聖鄕とでも呼んで見たいやうな氣がする。

年の瀨の町を歩くのもまたうれしい、夜になれば夜になるほど年の瀨のあわたゞしいやうな、あはれなやうな情趣が刻一刻と募つてゆく。

松飾りを商ふ人々のわめき聲、伊勢海老、藪柑子、穗俵、橙、破魔弓と、自然人の心は子供時代のわれに立ちかへる。年の瀨を急ぐ心にも何となく幼時代のなつかしさがわいて來る。わたくしはお正月になるとよく父に破魔弓を買つてもらつたことを覺えてゐる。父の家の前にはかなり廣い池があつた。池は秋から冬にかけて水の底が見えるほどに涸れた。雪の日など尾の先が少し黄色な鶺鴒が飛んで來ては、その涸れはてた池のまはりに鳴いてゐた。鷦鷯も池のまはりの低い笹の下をあさつてゐた。わたくしはよく破魔弓を抱へて池のはたに立つてゐた。獨樂も亦忘れられぬ春の思ひ出になつてゐる。獨樂をまはす紐の一端は總になつてゐて赤く染めてあつた。わたくしたちは少し大きくなつてからは山へ行つて木を伐つて來て、自分で獨樂を拵へたりした。獨樂の心に打込む劍だけは近所の鍛冶屋に行つて作つて貰つた。

凧もたいていは自分で作つた。

年の瀨の町を歩いてゐると一番あの頃のことが思ひ出される。

わたくしは十軒店の羽子板を見て歩くのも好きである。地震からこつちすつかり羽子板が年々惡くなつてゆく。繪も惡いし、いつたいに昔風な落ちつきを失ひかけてゐる。

いよ〱年の瀨も迫つて、大晦日の夜、すでに除夜の鐘が鳴り渡るころになれば賣れのこりの松飾りや裏白、ゆづ

り葉などが寒さうに電燈の光りを浴びてゐるのを見るのも何となく心を惹かるゝ。
逝く年を送る除夜の鐘はミレーの「御告げの鐘」にもまして嚴かな、懷かしい心を喚び起させる。
すべての過去は嚴かに、はた靜かに逝く。

わたくしは冬になれば神經痛になやむ關係からこの幾年か伊豆の山の湯の町に春を迎へることが多くなつた。暮から山にはいつてしまつて、年の瀨のあわたゞしさも、春のざわめきも知らず、冬枯れの芝山を眺め、谷川の音を聽いてゐるのもうれしい。

山の人々の春を迎へる心には都會の人たちのそれにくらぶればさらにさらに深い本然的なよろこびがひそんでゐるやうである。年の內に山と畑の仕事は一段落ついた。麥は雪の下に伸びた。施肥はすんだ。冬ごもりの薪も榾も家のまはりに積みかさねられた。かれ等は快き休息を欲してゐる。かれ等はその快き休息のために春を待つてゐる。

山の人たちのために快き休息の春が來た。富士は裾野まで眞つ白な雪である。人々は靜かな冬の富士をながめながら春の快き休息を樂しんでゐる。

都會に馴れた眼には雪の中の蕭條たる桑畑を見たゞけでも旅の情を覺える。爐の榾火を見る。傾きかゝつた厩の馬車馬を見る。川のほとりの椿の花を見る。たゞそれだけのものにも心をひきつけられる。

山の人たちは自分自分で、刈り取つた藁を打ち、山の稚松を伐つて來ては松飾りを作る。

子供にとつて春を迎へることが愉快であると同樣に、山の中では春を待つことは大人たちにとつても樂しみである。

かれ等は手斧を携へて山に入る。そして稚松や椎の木を探すことにも子供たちのやうな好奇心を持つてゐる。汗を拭きながら杵を摑んでゐるかれ等は、餅を搗くといふ平凡な行事にさへ子供たちと同じやうにかゞやく心のうれしさ

を見出してゐる。

山ではおんべ(御火)といふものを建てる。周圍が一尺二三寸或ひはもつとそれより大きさうな笹つきの竹を切つて來て、ちやうど七夕祭の笹のやうに、色紙や、おき上りこぼしなどを無數に結びつけて村の中の程よき空地の眞ん中に建てる。風に倒れぬやうに幾條もの綱が張られる。そのやうな仕事は子供の仕事であるが、いつの間にか村の大人たちが集まつて來ては自分たちの遊び事のやうにして、熱心に竹を建て、綱を結び付けてゐる。そしてどこのおんべよりも自分等のおんべを高く、美しいものとしようとあせつてゐる。

幸福な大供たちよ！

天城の北を流るゝ狩野川に沿うて天城を超ゆる一條の道が通つてゐる。旅人等はけふも天城を超ゆる。見知らぬ人々である。

しかし、天城の雪を眺めつゝガタ馬車に搖られてゆく旅人を眺めてゐると、聲でもかけて見たい氣がする。

草山には疎な雪がつもつてゐる。

疎な雪はかへつてあはれである。

旅人を乘せたガタ馬車は一つ一つの谿へ來るたんびに一人或ひは二人の旅人を卸してゆく。谿にはたいてい小ひさな湯の町がある。湯の煙が立ち上つてゐる。

旅人等は湯の宿の窓から谿川を眺めてゐる。

毎日眺めてゐる間には、そこにたゝずんでゐる一つの黝い岩、淵を覗きつゝ垂れてゐる一本の梢にすらも何となし

に心の底の交渉を感じる。

屋根の上に殘つた雪、落ち忘れたいたゞきの一顆の柿の實、日に幾度となく石磴を下りては流れに物洗ひに來る女、そのやうなものに對しても靜かな心のうごめきを感じる。

山から山へと飛ぶ雪雲、晴れた日の纖細い絹絲のやうな雲、空の色、そんなものに對しても旅人は無心でゐることはできぬ。

ほんの十日か二十日の旅であるが、山の湯の宿に訪ねる人もなく雪の日をかぞへつゝこもつてゐる春をあはれにも思ひ、ありがたくも思ふ。

山よ雲よ

山を戀ふ者は先づ翡翠よりも青き山の水の美しさに魂を躍らす。上高地に入る日鰭留あたりで溪川の瀨の霧と散るあたりに石南花の夢のごとくほのかに咲けるを繪よりもうつくしいと思つた。岩間から湧く眞淸水を一町にして掬み、半町にして嚙む。山の水の甘美さのゆゑにわたくしは山を戀ふ。

かつらの葉蔭暗く、つたうるしの花白き島々南澤のほとりには「飛驒の城主三木某の妻杣人等に捕へられ木に縛せられて殺さる」といふ旅人の面を伏せしむるあはれな物語がのこつてゐる。北の庄の落城の日、雪の山々を越えし美しき女たちの傳說の黑百合も雪溪を橫切る山の人たちの心を惹く。美しきかなしき物語あるがゆゑにわたくしは山を愛する。

梓川の水楊の蔭こそ美しき夢の巢である。岩燕は水楊をかすめて雪溪にかけり、天に飛ぶ。

槍見澤の磧にしやがんではじめて巨人槍ヶ岳に對した刹那山の尊さに泣いた。岩は鐵のごとく黝く蒼空にそゝり立つ。雲は紗よりもうすく岩山をつゝむ。

中房から燕への徑で炎と燃ゆるみやまななかまどの間に立ちてをりからの初雪に降られつゝ遙かに富士を眺めた嬉しさも忘れかねる。

雪また雪、岩また岩、死靜また死靜。尾根の這松の小蔭に雷鳥は雛を懷く。山よ、雲よ、わが魂を汝に託す。

秋の跫音

夏の旅は苦しいが春ほどあわたゞしくないし、秋ほどさびしくないので、わたくしは夏の旅を愛する。夏の旅は靑あらしのなかを走り、靑田の原を横切り、雲の峰に入るがゆゑにいかにも男性的である。殊に汽車が高原を過ぎるころかゞやく草原の間に桔梗の群を見、白百合の香りにつゝまるゝなど、夏でなくては經驗されぬ旅のうれしさである。釧路の友からのこのごろのたよりに「山から歸つて來た牛の乳をしぼつたが、牛のからだ中鈴蘭の香がしてゐた」といふことが書いてあつた。すくなくとも夏の高原を走る汽車の窓は靑い草の香につゝまれてゐる。

岩手富士の高原、木津川の谷に沿うて大和から伊賀に入る高原、信濃の高原を旅する人々は桔梗の美しさを忘るゝことはできないであらう。

昨日わたくしは久し振りで東海道の汽車に乘つた。たのしみにしてゐた箱根あたりの百合はまだすこし早いやうであつた。涸れ〲の谷川に沿うて合歡（ねむ）のやはらかな花が咲いてゐた。合歡は箱根と關ヶ原から米原へ出る山地伊吹山の麓あたりが多い。

裾野あたりにかゝるころから天城が見える。伊豆北端の達磨山が白い雲を抱いて靑黑い駿河灣の水に對してゐる。わたくしの記憶にはこの春そこで逢つた一人の老炭燒きの面影が浮かんで來る。妻も持たず、子も持たず七十歳の老人は三千尺の山上に小屋を建て、木を伐り、炭を燒いてゐる。紫つゝじと馬醉木（あしび）だけは切るに忍びないといつて切り殘してゐたが、わたくしが訪ねて行つた時は紫つゝじが咲き、うぐひすが鳴いてゐた。

わたくしは汽車の窓から眼をはなさず山を眺めてゐた。靑い煙が山のいたゞき近くから立つてゐるやうにも思はれ

るのであつた。

ウォーヅウォースの詩に、木を伐つてゐる老翁が手斧を揮ふ力もないほどに衰へてゐることが書いてあつた。若い詩人は手斧を借りて老翁のために木を伐つてやつた。

生きることはありがたいことである。しかし手斧を振りあげる力もなくなつてたゞ一人で生きてゐなければならぬとしたら！

汽車は走りに走る。

伊豆の山は細り、雲につゝまれる。

富士川の岸にはすゝきの穂がかゞやいてゐた。汽車は浦より浦、なぎさよりなぎさへと走る。そこには怒濤あり、子供等あり、岩あり、子供等あり、小舟あり子供等あり、雲の峰あり子供等あり、われ等の世界は今子供等のよろこびにつゝまれてしまつた。

かつてたれもが一度は子供たちの世界を持つてゐたといふことを考へるだけでも生まれて來たことをありがたく思ふ。

夾竹桃は關西の花であるらしい。蒲郡あたりから殊に眼につくが、須磨、明石、瀨戸内海に沿うてさらに美しい。

濃美の單調な平野はやゝもすれば旅人の心を傷る。地は遠く、山はいつも雲にとざされてゐる。しかも平原の市街をめぐりて紅蓮の花のかをるを見出す時、いかに旅人の心は明かるくされるか知れない。夏の東海道を旅するごとに、わたくしは名古屋から犬山あたりの蓮の花の美しさを見ることを忘れない。

木槿が咲き、紫陽花が咲き、蓼の花が咲いてゐる。山の土が白く、修竹につゝまれたつゝましい家が見出される。京都に近づいたといふ感じがひとりでにわいて來る。

鈴鹿の上には十日ごろの月が出てゐた。

二匹の犬が眞つ白なほこりの道をあへぎ〳〵車をひいて行つた。

祇園の宵山といふので四條通には飾り立てられた山や鉾が竝んでゐる。四條通から鴨川緣、祇園へかけておびたゞしい人出である。わたくしたちは靜かな裏町通の家々に飾られた燭臺の前の祕藏の屛風を見て步いた。どこからともなく祇園ばやしの音が流れるやうに傳はつて來る。空氣がすんでゐるせゐか空の星も明るい。

町を步いて疲れたので庭の水の音を聽きながら緣側に仰臥する。月は入つてしまつたらしい。隣の寺あたりで鈴蟲が鳴いてゐる。

「祇園さまはきまつてお暑うございます。」と宿の女はいふ。汽車の疲れで昨夜は夢も見なかつた。

笹の葉には露が落ちてゐた。

街にはまだ朝の影が漂うてゐた。

麩屋町の通りを人々にまじつて南へ〳〵と四條の方へ步いてゆく。鉾を見る人々は四條の大通に沿うて或ひは開放された家々の二階に集まつてゐる。屋根の上にしやがんでゐる男たちもある。はやしにつれて鉾が動き出す。鉾の上からは群集を目がけて粽を投げる。

「こつち投げておくれやす……」と二階の子供等は鉾の上の男たちをさしまねく。男たちは笑ひながら粽を投げる。

古都の町中の人たちがみんな晴衣を着て道ばたに立つて鉾を待ち山を送る姿にはもう東京あたりでは見れらぬ鄕土的な、こまやかな情味がある。祇園まつりはたしかに古都の町中の人たちの心からなるよろこびのうちに營まれてゐ

る。

出町で電車から下りて、加茂の河原の草に濡れて近ごろ建てられたばかりらしい別莊風な家々の間を歩いてゐる間に、出雲路といふ町の名を見出した。大震災の最中に妻に裏切られて故鄕の山も畑も失つてしまつた一人の男が東京の家を捨てゝ出雲路の庵寺にはいてしまつたことがあつた。

三年ばかりそこの庵寺で經を讀んでゐたので、すつかり世を捨てたものとばかり思つてゐたが、また東京に舞ひもどつて來て電車の軌條に油を塗つたり、高層建築のクレーンを動かす勞働をやつたりしてゐる。どこへ行つても人間の世界では悟りといふものはないらしい。

比叡はまだ半ば眠つてゐる。大原、八瀨(やせ)あたりは靄の下に靜かに夜明けの影を守つてゐる。大原女が橋をわたつて來る。

比叡の嶺が洛北の朝をその濃かな影につゝんでゐる。南禪寺の前を松並木に沿うて疏水の方へ歩む。釣を垂れた男たちが夏の朝の凉味を河心にこめてしやがんでゐる。

瓢亭の薄暗い一室にこもつて朝がゆを待つてゐる。緣の下を流れてゆく水とひた〳〵にすでに秋草が咲いてゐる。淙々として水は流るゝ。流れてゆく靜かな水を見つめてゐれば魂も消えさうである。

京の旅だと思ふ心のせゐばかりでもない。たしかに京の水はあまりに靜かであり、あまりに澄んでゐる。

京の夏は暑い、たしかに暑い。しかし頽塘の古都の夏は秋よりもわびしい。シモンズに「秋の都」といふ作品がある。若い女を伴れた旅の男は或る古都を訪れて、頽廢の氣に浸さるゝ暇もなく、明るい光りにあこがるゝ若い女に散

々になやまされる。秋の都は近代女性のものではないかも知れない。けれどもわたくしは「秋の都」を愛する。三寶院の池に櫻が散りかゝるころ訪ねても京は秋の都である。京にはたゞ秋のみがある。

麩屋町の柊家の緣の端にゐて、半日庭の石を眺め、泉水の魚を眺めてゐてもすでに秋近き感じがわく。他の町に見出されぬ空氣の淸澄さ、沈靜さを感じる。

朱がかつた壁から壁、塀から塀にとりかこまれた狹い天地にひとり〳〵の靜寂と追憶の世界をぢつと見守つてゐるのが京の町家の庭である。

隣境の高塀には野木瓜がはひ、つたが綱の手をひろげてゐる。「寂光」といふ文字が一番あてはまると思はれるほどのかすかな日の光りがその高い塀から狹い整つた庭の上に落ちてゐる。靑空もほんの僅に隣境の野木瓜の葉とすれすれにのぞかれるばかりである。どこからともなく冷たい風が流れて來る。すでに秋の風である。

石にも苔が濡れ、燈籠にもかへでにも苔は柔かに水を含み、秋の風を懷いてゐる。

竹の植込みをめぐつて水がわき、藻にかくれては魚が遊んでゐる。鰉に似た形の小魚である。たゞ一叢の藻草、たゞ一尾の細鱗、それにもこまかな注意を拂ふほどに旅人の心は落ちついて來る。

透明な空氣、磨きあげられたやうな水底に悠々自適の境地を見出してゐる小魚の呼吸、そこにも秋の都の寂然たる影が動いてゐる。

洛北の時雨を聽くまでにはまだ遠い。けれども三千院あたりの竹の下かげの小道を步めばすでに時雨の音をわが胸に感じないではをれぬ。京の風物は一草一石に至るまで頽塘の秋を呼吸してゐる。

數年前の旱魃のころであつた。わたくしは四國の到るところで夜毎山上に焚く雨こひの火を眺めた。雨をこふ里の

人々の悲痛な心願が炎となつて眞つ暗な天に燃えてゐるのだと思ふとむしろ凄慘な感じがした。
その年の同じ夏大和を旅したをりにもわたくしは夜の空に雨こひの火を山の上に見た。京都に滯在してゐる間わたくしはたびたび三條の大橋の上に立つて鞍馬あたりの山に燃えてゐる雨こひの火を見出した。
このころ夜になつて京都の町を歩きながら不圖比叡を暗のなかに見るせつな、わたくしは四明ヶ岳の燈を見出す。比叡の山にケーブルが作られたことは悲しいことに思ふが、比叡の夜の火はすこし遠く離れて桂川あたりから眺むれば捨てがたき情趣を持つてゐる。琵琶湖に沿うて汽車が走るころ湖をへだてゝたまたま比叡の火を見ることがある。高い山の燈といふものは何となしに尊いものである。暗の中に合掌して拜みたいやうな氣がする。
京の大文字にしても山に焚く火であればこそあれほどに人の心をひきつけるものであらう。ともかく夏の夜に火を焚くといふことは昔風にいへばあはれである。情趣が深い。
長良川の鵜飼の面白さも夏の夜の火焚きのあはれさであらう。おもしろうやがて悲しきの歎きは、ひとり鵜舟ばかりのものではない。京の山の大文字の燭が一つ一つ暗の中に消えてゆくのもまた鵜舟に劣らぬほどのあはれさを感じさせる。
昨夜は月が秋のごとくすんでゐた。霧島の温泉宿に薩摩潟の漁火をながめつゝわたくしは遠い旅を思つた。山の人たちと佛法僧を聽きにゆく約束をしたり、萩の下に猪の足跡を見出した話などを聽いてゐる間に夜が更けてしまつた。しかしわたくしはどうしても眠れなかつた。枕もとの草鞋の紐を繃帶の布で卷いたり、地圖をひろげて見たりしては明日からの山の旅を描いてひとり微笑んだ。（霧島山中にて）

爐邊春信

元日から一日も缺かさずわたくしは伊豆の松山に登つては小屋に入つて榾を焚いてゐる。左の小窓からは箱根が見え、右の小窓からは天城が覗かれる。二子にも天城にも雪がうら寒くつもつてゐる。海を越えて來る暗い雲が天城の嶺を撫でゝは雪をのこして行く。

榾の火のはぜる音！ わたくしは過去幾年が間多になればこゝの赤松山に來て小屋の爐のはたに坐つてゐる。たゞ榾の火のはぜる音を聽かんがために。

榾火を見るごとにわたくしの頭には故鄉の少年時代の姿がよみがへつて來る。そこには父があり、母があり、姉妹たちがある。わたくしたちは夜深く山の風を聽いた。わたくしたちは爐の燠を灰のなかに立てゝは一番大きな燠を父と呼び、次の燠を母と呼び姉と呼び、一番小ひさな燠を妹と呼んだ。玩具といふものを持たない山の子たちにとつては榾の火も冬の夜の玩具であつた。

春の獨樂、紙鳶、破魔弓を父に買つてもらつた夜のうれしさを忘れることはできない。わたくしは夜半に幾度眼をさましては枕もとの破魔弓を眺めたことであらう。「あの夜の幼きよろこびも父も母も今何處にかある！」わたくしは悵然として山の小屋の榾火を見つめてはかく思ふ。

春に買つてもらつた獨樂、紙鳶、破魔弓、たゞそれだけの玩具が一年を通じての山の子たちの玩具であつた。紙鳶はお正月も過ぎぬうちに破れてしまつた。破魔弓は椿に來る繡眼兒を脅かす武器ともなり、獨樂のみはいつまでも少年の懷に抱かれてゐた。

まだそのころはわたくしたちの故郷では子供等は紐付の白足袋を穿いてゐたものであるが足袋の紐はよく解けて困つたことがある。

榾の火を見つめてゐると今もなほ紐付の白足袋を穿き、獨樂を懷にして、椿の幹や、畑の石垣に凭れながら遠い山を眺めてゐた少年時のわたくし自身の姿が浮かんで來る。

「父何處！　母何處！　さらに少年時のわたくし自身の夢何處！」わたくしはかく思ふ。

山の小屋の榾の火ははぜる。その仄かなる音！　そこに父あり、母あり、少年時の夢あり。わたくしは榾の火を愛する。

わたくしはまた吹矢を拵へた。山に行つて手頃の女竹を切つて來て、節を開けては火に矯めて吹矢を作り上げると小鳥をさがしに行つた。或る時はすぐ眼の前の椿の花のなかに鵯がとまつてゐるのを見て胸を踊らせたこともあつた。しかし一度もわたくしの吹矢に中るほどの小鳥は見つからなかつた。

伊豆の松山のなかにゐて爐の火を見つめてゐると吹矢を抱へながら芝山を走つてゐるわたくし自身の少年の姿がはつきりと描かれて來る。

春の故郷！　春の山！　春の徑！

麥は三四寸伸び、太陽はかゞやいてゐる。

伊豆の山の榾火のはぜる仄かな音のなかに春の太陽あり、麥のかゞやきがある。

毎日わたくしの爐の前に坐つてめづらしげに旅人をながめてゐる山の小娘がゐる。年は十四だといふ。

わたくしは小娘の可憐なる手を見て驚いた。

岩の如く堅く、岩の如く裂け、指端悉く血を吐いてゐる小娘の手はまことに見ろからに痛ましい。
わたくしの追憶は再び故鄕の少年時に還る。
よく父や姉たちが終日働いて夜になると、手や蹠のあかぎれに山蘭の根を擦つて附けてゐたことを思ひ出す。
「どうしたんです？　その手は……」思はずわたくしは小娘にたづねた。山の小娘は恥かしさうに笑つてゐた。
近年伊豆の谷々ではさかんに煙草を植ゑてゐる。小娘たちまでがそのために每夜十二時くらゐまでは夜なべをしなければならぬ。學校から歸つて來る。復習もそこ〳〵にして小娘たちは夜なべに取りかゝらなければならぬ。
わはくしは山の可憐なる小娘の血ににじんだ手を銀座通を歩いてゐる都會の若い人たちに見せてやりたいとさへ思ふ。
温かなフルウツ・パーラーに紫煙を燻らしてゐる都會の幸福な男たちよ、女たちよ、伊豆の山では御身等のために十四の小娘は天城の凩の音を聽きつゝ煙草を乾してゐるのだ。見よかの女の可憐なる指もその腕も血ににじんでゐる。
珠のごとき指、絹のごとき指を誇る都會の若い女たちよ、御身等の指はまことに美しい。しかし伊豆の山の小娘等の血ににじむ指はさらに尊い。
恐らく神といふものがあるとしたら神は先づ伊豆の山の小娘等の血ににじむ指を戴き給うであらう。
默々として血をにじませつゝ煙草を乾しつゝある伊豆の山の小娘等を思ふ時、伊豆の草山も尊く拜まれるではないか。
暖かなストーヴの前で人生を論じ、藝術を論じつゝある都會の若い人たちよ、君等は賢い。しかし君等はかつてそれによつて一人の人生をも豐にすることができたか。君等の社交室のおしやべりがかつて一度でも貧しい隣人の空腹を滿たし得たか。

默々として伊豆の山に連枷を打ち、煙草を乾しつゝある小娘の血ににじむ手を思へ。
恐らく君等の大なる都會はいつかはまた大なる天災か、或ひは外敵の空中襲擊に燒き盡されることもあるであらう。
もしわれ等の日本が都會のみのものであるならば日本は滅びなければならぬ。
けれども日本は都會のものではない。日本のいのちは伊豆の山にある。信濃の山にある。美濃尾張の平原にある。薩摩の海のほとりにある。默々としてそこに働きつゝある人々の魂のなかにある。

銀座のフルウツ・パーラーに飾られた和蘭陀莓の美しさ。窓の外には雪が降つてゐる。
銀のスプーンに掬はれた和蘭陀莓の美しさ。窓の外には一月の風が荒れてゐる。
都會の若い人々よ。君等はまたそこにも血ににじむ小娘たちの可憐なる指を感じなければならぬ。
駿河の久能、蛇塚、搢、駒越一帶の海岸に沿うて積み上げられた石垣畑に働いてゐる女たちは、濱の石を積むごとに爪は折れ指は裂けてゐるのだ。
莓の苗を植ゑては石を積み、石を積んでは苗を植ゑる。女たちの指の血が苗とともに石の間に落されてゆくのだ。
可憐な女たちの指の血が今、君等の銀のスプーンの上にかゞやいてゐるのだ。踊つてゐるのだ。獻欷してゐるのだ。
都會は滅びるであらう。銀のスプーンは火に燒かれるであらう。しかし駿河の海のほとりにはいつまでも美しい和蘭陀莓がみのるであらう。

こゝの溫泉町から一里、谿の奥に昔弘法大師が修行せられたといふ古刹がある。ひどく寂しいところなので一日に一人の參詣者もないほどの寺である。今そこには七十幾歳といふ老僧がたゞ一人で住んでゐる。たいした學問のある

坊さまでもないらしいが話を聽くと面白い。「先住は若い人でしたがなか〳〵新らしい學問もある人でした。ところで町に行つては酒を飮み、魚を食つて歸つて來るので夜になると弘法さまに取つちめられて苦しんでゐました。わしは學問も何もない馬鹿ですからこゝに來てお寺にゐる間は酒も飮まず、魚も食べません。弘法さまもわたしのやうな馬鹿者にはかゝづらうても詮がないと思し召してか夜になつても一度も出てもござりませぬ。」

この話は二三日前そこの山寺を訪ねた友人から聽いた話であるが、なか〳〵味のある話だと思ふ。その坊さまは「わしも家にかへれば魚も喰べるがこの寺の番をしてゐる間は酒も飮まず……」といつたさうである。

伊豆の山深く人間が住んでゐるかぎりは尊い小娘があり、尊い坊さまがある。

尊い小娘が住み、尊い若者が住み、尊い人々が生きてゐるかぎりわたくしたちは日本の山を、日本の土を尊く思ひ、明るく思ふ。日本の明日を力強く感ずる。

いつも午後の三時ころになれば小鳥の群が小屋の直ぐ前の赤松の間に飛んで來る。小鳥の群も赤松山を忘れることができないらしい。

去年までこゝの小屋に住んでゐた少年が昨日突然三島の町から小屋をたづねて來た。

「三島の町の方が賑かでいゝだらう！」とわたくしはたづねた。

「町はつまんない！」と少年は寂しげに笑つた。

この少年は二三年前東京に連れられて行つて、再び山に還つて來た時も同じやうなことをいつた。

「東京はつまんない。埃だらけの風が吹く。」

少年は小鳥の如く赤松の間を飛び歩いてゐた。

わたくしは毎年冬になればこゝの松山を歩いて啄木の音を聴いたが、今年はまだ一度も啄木の音を聴かない。何となく寂しい氣がする。

啄木も留守になつたか冬の山

小屋の裏の梅もすでに綻びはじめた。

梅

久し振りの快晴。昨日の霙の雲の名殘りも見えない。わたくしは朝早く家を出て玉川のほとりを歩いた。日曜ではあるし郊外の人出もさこそと覺悟をして出かけて見たが、さて玉川の磧にたどりついて見ると冬の風のみ白く人の影もない。なるほど年の暮であつた。あわたゞしい年の瀨をわざ〳〵秩父颪に吹かれに玉川まで出かけてゆく醉狂な人もないのであらうなどゝ自分の考への足りなかつたことを笑ひたいやうな氣になつて歩いて行つた。

富士は眞つ白である。いつ見ても尊い山である。箱根あたりの山であらうか。靑く煙のごとく南の空を流れてゐる。秩父は墨の如く黑い。わたくしは磧に面した丘の雜木林の中にしやがんで心ゆくまで靜かな山と川とをながめた。不圖わたくしがしやがんでゐる草の中から五六歩はなれたところに、一株の梅の老木が雜木のなかにまじり、雜木の梢に壓されてゐるのを見た。しかも枝頭すでに可憐な蕾を懷いてゐる。わたくしはむしろ淡い驚きを感じた。

玉川の彼岸の久慈の梅林に梅を觀に行つたのは二三年前の紀元節の日であつた。玉川あたりの梅の見頃は紀元節頃から始まつて三月にわたつてゐる。それだのに藪の中の老梅は來ん春を待ちつゝすでに虔やかな春の支度をしてゐる。これから二月花の開くまでには、幾度か霙にも、雪にも、冷たい風にも打たれることであらう。そんなことを考へてゐるとたゞ一輪の梅の花に對しても頭が下るやうな氣がする。

わたくしたちは所詮東洋人である。自分等の血のなかに流れてゐる東洋人的な趣味なり、嗜好なり、感慨などといふものが一年々々と年をとるにつれて、明るい、幅の廣い西洋風なものから、やゝ暗い深さを愛する東洋風なものへ還つてゆくのをしみ〴〵と感じさせられる。鼓の音、竹笛、さういつた日本の樂器のきはめて單純な音のなかに揃ま

んとして掬みつくせない味を見出すやうになつて來る。

東洋の藝術、殊に日本の足利時代このかたの藝術、或ひは藝事(げいごと)の最もすぐれた點は簡素といふことにある。聖なりと感ずるほどに枯淡なることにある。靜勁なることにある。弱きがごとくして底に力强き靜かな深いところのものを持つてゐることにある。

笛のたゞ一聲の裡にわたくしたちは纒綿としてつきざる餘韻を感ずる。やる瀬なき餘情を感ずる。靜かなるものゝ强さを感ずる。無限なる深さを感ずる。

わたくしたちは梅を愛することを敎へられて育つて來た。一頃は梅を愛するといふやうな趣味を退嬰的なことゝしてけなしたく思つた時代もあつた。しかし今日では自分からすゝんで梅を愛するやうになり、菊を愛するやうになつた。誰が暗香といふ言葉を使ひはじめたのか知らないが、いゝ言葉である。東洋藝術の特長はたしかに梅のかすかな虔やかなかをりのごとく、そのあるがごとく、なきがごとく、靜かにして幽(かすか)に、掬みつくせぬ味の深さにある。

珈琲よりも、紅茶、紅茶よりも日本茶のうまさを知る。淡々たる日本茶のうまさは日本の藝術或ひは藝事のうまさである。味である。

味を知る。噛み分けるといふことが眞の智慧である。利休がいつたやうに茶道の奥義は「茶を立てゝ飲むことなり」にちがひない。茶の味を知ることである。眼をつむつて茶の澁味を愛することである。靜居して、雜念を去り、思惟を一念に凝らして、空に息し、虛に合一して一碗の苦茗を喫することにある。いひ換ふれば、親切な、こまやかな心で一碗のお茶をいたゞいて飲むことにある。

お茶を振舞はれる。がぶ／＼と無雜作に飲んでしまふ人がある。さげすまれる人である。

高い山から山を歩いてゐる人たちはいつも經驗することであるが、たま／＼渾々として岩間からわき出づる眞淸水(ましみづ)

を掬む刹那にはじめて水のうまさを感ずる。ありがたさを感ずる。その場合にはリウクサックに結びつけたアルミニウムの小ひさな水飲のなかのわづかな眞淸水には深山そのものゝ幽邃さも嚴かさもこめられてゐる。たゞ一椀の水とはいひながら、そのなかには天をもつゝみ地をもこめてゐる。

一椀の水、一碗の茶のありがたさ、尊さを味ひ感ずるだけのこまかな親切な心が茶の心であらう。わたくしはそのやうに考へてゐる。

草のなかにしやがみながらわたくしは雜木にいためられてゐる老梅を見た。小ひさな蕾を見た。黑い樸々たる梅の梢を見た。昔から東洋の畫人たちがこの枯淡な梅を取りあつかつた心持ちを想像するといかにも尊いものがある。わたくしたちの胸にぴつたり來るものがある。

雜木林の片隅に顧みらるゝこともなき老梅は十二月の寒空の下に春を待つてゐる。すべての生けるものは淚ぐましいほどの根强さと靜けさとを持つて生くることとの努力を盡してゐる。

十二月の太陽は靜かに老梅の蕾をあたゝめてゐる。あたかも可憐なる蕾をいたはるかのやうに。

生くることの寂しさ。生くることの尊さ。

すべてのものは靜かに忍びつゝ生きてゐる。

がさ〳〵と草を踏む人の跫音が聞えた。わたくしから半町ばかり離れた草のなかに一人の男がわたくしと同じやうにぽつねんと磧をながめてゐるのであつた。

わたくしは磧の方へ歩いて行つた。わたくしはそこでもまた一人の男がぽつねんと冬の山を眺めつゝ歩いてゐるのを見た。

山がある限り、人間が生きてゐる限り、世界のいたる處で、誰かゞいつでも、山を思ひ、人生を思ひつゝ歩いてゐる。

十月

秋

十一日振りで山の雨が降り止んだ。

前の夜までは明日もやつぱり雨であらうと滅入るやうな氣になつて雨の音を聽いてゐた。

「でも夕方雉が鳴いてゐました。雉が鳴けばお天氣になるといふぢやありませんか！」

「さういへばほんたうにさつき草の中で雉が鳴いてゐたな。」わたくしと妻はこんな會話をとりかはしてゐた。人の聲を聽くといふことが珍しいほどに靜かな山の生活であつた。わたくしたちはふたゝび沈默がちに雨の音を聽いた。

「こんなに雨が降りつゞいたのでは發狂する人間もあるかも知れない。」わたくしはこんなことをも考へた。

わたくしはまだなかば眠つてゐた。夢うつゝのなかに雉の雛の聲を聽いた。絶えず雉の雛は鳴いてゐる。つゞいて啄木の聲を聽いた。

「たしかに鳥の聲だ！」わたくしは十幾日振りで朗かな鳥の聲を聽いた。わたくしは飛び起きて行つて雨戸を明けた。わたくしは今日もまた鬱陶しい時雨空を豫想してゐた。

何といふさわやかな、何といふほがらかな、何といふ珠のやうに磨き上げられた秋の空であらう！　わたくしは縁側を飛び下りて草の中に出た。空は一面に十月の秋だ！　淺間のゆるやかなスロープを十月の日の光りが柔かに肌寒くつゝみはじめてゐる。白い噴煙がくつきりとけさの秋空に劃られてゐる。

わたくしは落葉松の林を通して八ヶ嶽を見出した。けさは尊きほどにかゞやいてゐる。重なる山、重なる山の影。空と尾根とを限る一線を描くのみにして秋の空は溶けこんでゐる。わたくしの魂は靑い煙のやうな遠山の陰翳のなか

に溶けこんで行く。
秋の山、沈默せる秋の山、朝の霧よりも淡く、草を燒く煙よりもかすかな秋の山！　わたくしの魂はその遠い山を眺めてゐる間に消えて行きさうだ。
わたくしは本を捨てる。ペンを捨てる。鍬を捨てる。馬の手綱を投げる。わたしはたゞ遠い今朝の山をながむる。
わたしは怠惰者だ！　朝の仕事を捨てゝ遠い十月の山をながめてゐる。
わたしは怠惰者だ！　朝の瞑想を捨てゝ夜明けの遠い山に見入つてゐる。
だけどけさの遠い山、そこに徂徠する靜かな白い雲、刹那々々に朝の日につれて移りゆく山の陰翳、山の香、山のけだかさ！　それを捨てゝどこにわたしの人生があらう。
わたしはけさすつかり怠け者になつてしまつた。わたしは本を捨てた。鍬を捨てた。わたしは子供たちのやうに懷に手を入れて十月の山を眺めてゐた。朝の薄霜は懷に手を突つ込んで山を眺むるに恰好の寒さを感じさせた。

野菊が霜よりも白く咲いてゐる。
わたしは怠惰者になつてしまつた。
わたしは本を捨てた。鍬を捨てた。そして道ばたにしやがんで朝の小徑の野菊を見つめてゐる。
人間といふ人間がどんなに墮落しようとも、世界の女たちがどんなに虛榮をもとめて華やかな都會へ飛び込んで行つてその魂を汚さうとも、わたしの野菊だけはさゝやかな流れのほとりに、櫟林の小徑に、馬小屋の裏に、堆肥のまはりに、國道の砂利のなかに、虔しやかなかの女自身を守つてゐる。
わたしは小徑の可憐な野菊を見るごとに永劫に傷つけられざる自然の尊さを思ふ。わたしはけさも怠け者になつて、

霜よりも白き野菊の群を見つめてゐる。

秋の朝、わたしはけさもまた怠け者になつて本を捨て、鍬を捨てた。」

霜はかすかに草に寢て秋の朝を夢みる。

山茶花は畑の隅に咲き、無緣塚のほとりに咲いてゐる。

秋の朝は山茶花咲くがゆゑにわたしは怠け者になつてしまう。

時雨を待つがゆゑに寂しいのか？

冬を待つがゆゑにわびしいのか？

山茶花はあまりに寂しく、わびしい花である。

ぢつとお前を見つめてゐるとわたしはかつて忘れてゐたさま〳〵の思ひ出を描く。悲しき思ひ出、やる瀨なき思ひ出、靜かなる思ひ出！

人は生き、人は死ぬ。その生と死の間の靜かな宿命の道を歩み行くものゝ跫音をわたしはお前に感ずる。

一切を捨て、一切の思惟を捨て、生と死の境をも忘れ、秋そのものゝ靜寂を無心に凝視するものゝ姿をわたしはお前に感ずる。

秋あるがゆゑにわたしは生きんことを冀ふ。

山茶花咲くがゆゑにわたしは秋に生きんことを祈る。

畑の隅の山茶花！　遠い山には雪が下りはじめた。わたしはけふも怠惰者になつた。わたしは半日お前をながめてゐた。わたしは本を捨てた。鍬を捨てた。

秋十月の靑空よ、わたしの魂はお前を仰ぎ見る時生きてあることのよろこびに獻欷する。」
十月の靑空よ、わたしはけふもまた怠け者になつてしまつた。
わたしは本を捨てた。鍬を捨てた。わたしは終日十月の靑空をながめつゝ歩いた。「

思へども思へども遠き靑空よ
魂の翅を羽打てども羽打てども遙なる靑空よ
思惟すれど思惟すれど永劫なる十月の靑空よ
わたしは小徑のはたの野菊を手折つて誰に贈るともなくたゞ十月の靑空を仰ぐ
生きてあれど生きてあれど無限なる十月の靑空よ
惱めども惱めども
祈れども祈れども悠久なる十月の靑空よ
わたしはわたしの小ひさな魂が、翅翼が、思念が、憧憬が、憂鬱さが、わびしさが、十月の靑空に羽打ちつゝ白鳥のごとく翔りゆくを感ずる。
しかしあまりに遙かなる十月の靑空よ、わたしはお前を思ひ、お前を仰ぎつゝ靜かに土に突つ伏して獻欷する。
天と地の遠さ。人間のわびしさ。
わたしはけふも本を捨てた。鍬を捨てた。

こほろぎは玉蜀黍の葉蔭に鳴く。

こほろぎはかつてありし母の絲繰り車に鳴く。
こほろぎは父の墓に鳴く。
兄よ、姉よ、妹等よ、われ等ともに父と母の墓に行き、こほろぎを聽かん。
こほろぎは鳴く
こほろぎのわびしさを聽くためにわれ等生きてあることを感謝す。
わたしはけふも本を捨てた、鍬を捨てた。
こほろぎの聲を聽きてたゞ生きてあることのうれしさとわびしさを思ふ。
わたしは十月の怠惰なる日を愛する。

蕗の薹

「光悦世の中のわざとては一こともしらず、心にもなし、我はさこそすべけれどこしらへたるに更になくて、生れ得たる心のいさぎよきにてぞ有ける。」(賑ひ草)

三四年前の秋わたくしは洛北鷹ヶ峯に本阿彌光悦の墓に詣でたことがあつた。

京の町を北へ〳〵と出はづれて道はやがて丹波路へと爪先上りとなつて、兩側には修竹の林がつゞく。かへりみれば京の町は遥かに低く、鴨川の淸流に秋の日ざしが漂うてゐる。

光悦が鷹ヶ峯のほとりに地を賜はつて一家眷族を率ゐてそこに一門の藝術村を切り拓くまでは、あの附近は草賊出沒して旅人をなやましてゐたと言ひ傳へられてゐる。

當時の光悦としては京の眞中のどのやうな繁華な地をも自由に選擇することもゆるされたであらうに、わざ〳〵丹波路に沿うた草原の中を請うて行つたといふことも藝術家らしい光悦の無慾さとゆかしさを思はせる。

修竹の下に苔むした光悦の墓にぬかづきながらわたくしは「世の中のわざとては一ことも知らず……生れ得たる心のいさぎよきにてぞ有ける」といふ「賑ひ草」の文を思ひ出さずにはをれなかつた。

わたくしたちの周圍にはあまりに世の中のわざを知りすぎたる人々が多い。學究は學究の他一ことも知らず、藝術家は藝術の他一ことも知らずありてこそゆかしくもある。己を賣ることを知り、名を賣るすべを知り、媚びへつらふことを知るがゆゑに學究の學腐れ、藝術墮し、俗人以上の俗人になる。

「生れ得たる心のいさぎよき」を持たぬ人々が藝術にたづさはり、學究にたづさはるのはかへつて藝術を汚し學問を

はづかしむることになる。

同じ「賑ひ草」の著者は光悦を評して「又世に有べき人間とは覺侍らず」といつてゐる。いかにもありがたき人間であつたことが想像される。

「光悦は世をわたるすべ一生さらに知らず、若かりし時より物の數を合するものゝたぐひ、おもしかるしとしるもののたぐひ、一生我家の内になし、金銀手にのせたること、昔加州の大納言直に判金を給ければ手に取りていたゞきたると覺えたり、其外一度も手に持たることなし。」（賑ひ草）

「本阿彌行狀記」には「小袖屋といふ者の瀬戸かた付を黃金三十枚に光悦が買求ける。加賀大納言利家公未だ御小身の時より、親光二に御扶持を被下大きに御念比成故に云々」としてその小袖屋のかた付を加賀公に持參いたし茶を立てたことが書いてある。その時加賀公は白銀三百枚を光悦に與へた。光悦は「數年來御蔭を以てため置申候故求申たり」といつてつひにその金を拜領しなかつたといふことになつてゐる。「賑ひ草」の「判金を給ければ云々」の文句は恐らくあやまりであらう。或ひは又全く他の場合の出來事でゞもあらうか？

その小袖屋のかた付を買ひ求めるにつけても面白い逸話がつたへられてゐる。

「小袖や宗是茶入を光悦金三十枚にかひ被申候、まけ可申と被申候へばそれならはいやと申、家を十枚にうり廿枚はかり候てかひ被申候、卅枚いたすべき茶入を安くかひ候はいつはりにて候故、實を立申根性に而候」（日允書簡）

これによれば小袖屋の茶入を買ふためには金を借り、わざ〳〵家を賣つてゐるほどである。したがつて當時の光悦の嚢中は決して裕福ではなかつたことが想像できる。それにもかゝはらずかれは加賀公の黃金を突きかへしてゐる。その淡々たる風貌が想像される。

金錢についての話にはなほかれの面目を傳へたものがある。

「もとよりこゝろばせ正しき人にてありし、その一事は七月十四日にある町家へ行たるに、常に同じく家職をいとなみてありしかば怪あやしみて「けふは貴賤となく金錢の出納に閙しき日也、などかくつねにかはらぬぞ」といふに、あるじ「町家には、利用をはかるをむねとしさふらふ、けふ與ふべきものを五日過て與ふれば、何計の利を得ることにさぶらふゆえに、けふは心急ぎも侍らず」といひしに、悦こたへもせず、家の內のものどもの面をひとり〳〵にらまへて「よき畜生めら」といひすてゝ出、それよりふたゝび來らざりしとなり。」（續近世畸人傳）

この話は恐らく大晦日の出來事の誤りであらう。「賑ひ草」には大晦日の夜のことになつてゐる。かれは商人の利をのみかへりみて、人情をわきまへぬを憎み「彼者いと念頃にいひかよひけること、四十年のあまりにや有らん、かゝる心ある者と少も見しらざる我まなこのおろかなること、いと口惜し、抑人は正月の用意にとても萬物をとゝのへ、たれも〳〵年のはじめのことふきせんと、おもはざるはなきを、晦日の夜半迄またせてあたひをわたしけんいかばかり數人腹立のゝしりなん、今世にまさしく報を得、地獄の業因と成べしさてもあさましくかなしき事かな……」と語つたとつたへられてゐる。「續近世畸人傳」の書き方は大晦日のことを聞きちがへたものでもあり、「畜生めら」云々も恐らく後の世の人の假言であらう。そはとまれ光悦といふ人の面目がしのばれる逸話である。

清濁合せ飮むといふことが政治家や、事業家といつた風な人たちには大切な性格の要件であるやうに考へらるゝことがある。しかし大抵の場合、淸濁合せ飮むつもりでゐる人が多い。そんな人は濁つた水のみを飮んで淸洌な水を飮むことをしない。

日本アルプス上高地に行つた人たちは梓川のほとりの嘉門爺の小屋を見るにちがひない。

十四五歲のころ山に入つてから五十幾年の間あの美しい上高地の雪溪をながめつゝ一生を終始した嘉門爺の生活も

ありがたい。
光悦が美の世界にのみ入つて、つひに一生世のわざを知らなかつたと同樣に、嘉門爺は山の世界にのみ入つてつひに一生世のわざを知らなかつた。かれは尊き山の英雄である。
登山家M氏が日本ではじめて穗高の縱走を試みた時の話である。かれは老軀をひつさげて先頭に立つて先人未踏の雪の世界、岩山の世界をすゝんで行つた。しかも絕頂に達する數步のところで立ち止まつた。そして後からすゝんで來たM氏をして先頭第一步の足跡を雪の上に踏ましめた。何といふうるはしい古武士的な心がけであらう。
わたくしは信濃に行つて雪の山を見るたんびに嘉門爺のうるはしい心を思ふ。嘉門爺は死んだ。雪の山の中でいかにも寂しく死んだ。しかしかれの山案內人としての一生はいかにも英雄的であつた。
人間の世界にはあまりに多くの虛僞と、小悧巧さと、打算がある。しかし遙かなる山のあるところ、荒寥たる草原のあるところ、いやしくも人間が生きてあるかぎりは、嘉門爺がをり、光悅がをる。
わたくしは時々人生に對して失望する。しかしふたゝび光悅を思ひ、嘉門爺を思ふことによつて明るい明日を想像することができる。

いつの間にか狹い庭の隅に蕗の薹が頭をもたげて來た。まだ地は氷てついてゐる。
日も日ゝ淺春の太陽は照り、蕗の薹は伸びるともなく伸びてゆく。
生きるものゝなやみ、生きるものゝ强さ。
いのちは忍び、いのちはなやみ、いのちは伸びゆく。
すべての生けるものは靜かに忍び、靜かに伸びてゆく、たかぶらず、僞らず、あるがまゝに。

人間よりも木を愛すといつたフランスの哲學者の言葉を思ひつゝ庭の隅の蕗の薹に見入る日もある。

春の青空は語る、可憐なる蕗の薹を通して。
春の大地は語る、可憐なる蕗の薹を通して。
庭の隅にうづくまりて伸びゆく蕗の薹に對する時わが望(のぞみ)足る。

イヷンの馬鹿の人々

金も欲しい。名も欲しい。命も欲しい。それが人間の自然である。無理にその欲望を殺してはならぬ。しかしいつかは金も名も命も要らぬといふ心の境地を見出さなければならぬ。これは恐らく一生の努力精進を覺悟してかゝらねばならぬ。それが悟りといふものであらうか。

トルストイの「イヷンの馬鹿」はいつの世にも最も尊敬すべき人間である。イヷンの馬鹿は誰よりも勤勉であつた。しかも誰よりも報いらるゝところは常に少かつた。かれは働いても働いても愚なるがゆゑに、その賢き怠惰なる兄弟たちに奪はれてしまつた。しかもかれはたゞ働きに働いた。

イヷンの馬鹿は國王になつてからも國王自身野良に出て働いた。自然働くことの嫌ひな大臣や學者たちはイヷンの王國から逃げてしまつた。後にはイヷンをはじめ愚な勤勉な人間のみが殘つてゐた。

イヷンの馬鹿の王國に敵が攻め寄せて來た時、かれらは愚なる者のみであつたゆゑに、敵を憎むといふことを知らなかつた。かれらは家毎に敵を迎へて懽迎し馳走をした。イヷンの馬鹿の王國では敵といふものを發見することはできなかつた。

イヷンの馬鹿の王國では賢いといふこと、愚であるといふことは問題でなかつた。問題は掌の皮が厚いか薄いかといふことであつた。勤勉な男たちは、いつも厚い掌の皮を持つてゐた。かれらはいつも第一番目に食卓に列するの名譽をあたへられた。

禪僧案山は甲斐國都留郡藤崎鄕の人である。かつて木曾を越えて追ひ剝ぎに襲はれた。かれは一つの財嚢を盜人にわたした。「これだけか？」、「それだけだ。」盜人と禪僧は上と下に別れて行つた。案山は突然立ちどまつた。「わしは飛んだ事をした。わしはもう一つ金嚢を持つてゐたことをすつかり忘れてゐた。」かれは尙一度同じ山道をもどつて追ひ剝ぎをたづねて行つた。「わしはお前に嘘をいつたやうだが、實はすつかり忘れてゐたのだ。金入をもう一つ持つてゐたことに氣付いたのだ。」といつて更に金嚢を盜人に渡した。

わたくしはいつもこの禪僧の物語を面白いと思ふ。常識で考へられないところに禪僧の尊さがある。宗敎のありがたさがある。こんな物語は聞くだけでも人生を明るくしてくれる。トルストイが描いたイヷンの馬鹿は空想の世界にのみ生きてゐるのではない。わざ〳〵盜人を追つかけて行つて金をわたしたこの禪僧のごときはたしかにイヷンの馬鹿を具象化したものである。まことに世にありがたい聖である。

汽車で東海道線を走る旅人は、沼津から四五分程西に隔てゝ原宿の昔ながらの宿場の姿を見出すであらう。さらに線路に沿うて麥や桃にかこまれて白隱禪師塔所跡の碑を發見するにちがひない。

白隱の悟道、宗學の深さはわたくしたちはほとんど窺ひ知ることもできない。しかしわたくしたちは東海道の一破驛になほ語り傳へられてゐる二三の挿話を聞くことによつてすら、いかに人類にとりての光りを感じさせられるか知れない。白隱を思ふごとにわたくしは「厨下枯淡益々甚だし、商家捨る所の敗醬を乞うて日用に給す」といふ當時の生活振を忘れることができない。或る朝味噌汁を吸つてゐたが味噌が腐つてゐたので、椀のふちに蛆が這ひまはつてゐた。かれは蛆を殺すに忍びなかつたので蛆がのくまでぢつと椀をかゝへて待つてゐた。

原驛に南某といふ人があつた。白隱の高德に歸依ししば〳〵財物をさゝげた。たま〳〵その娘か家僕と通じ子を生

んだ。父に責められた娘は生まれた子は白隱の子であると噓をいつてしまつた。父は怒つて子を抱いて寺に行き「このなまぐさ坊主！」といつて白隱を罵りながら、子を白隱に押しつけて歸つてしまつた。白隱はあへて爭はず飴を買つて來ては子を育てゝゐた。あたかも自分の子でゝもあるやうに。或る日白隱はその乳呑み子を抱いて雪の中を步いてゐた。その姿を見た娘はさすがに良心に恥ぢて、實情をその父に告げた。娘の父が罪を謝した時白隱はたゞ「さうであつたか」といつてまるで他人ごとのやうな顏をしてゐた。

岡山城主池田侯もまた深く白隱に歸依してゐた。或る時池田侯は江戶に上る途中、原驛に白隱を訪うた。ちやうどその時典座の僧が厨の大擂鉢を破つた。清談が終つて歸る時、池田侯は白隱に向つて「何か御入用なものはありませんか」とたづねた。白隱は「生憎大擂鉢がないからいたゞきたい」といつた。池田侯は岡山に歸つてから數個の備前燒の大擂鉢を送りとゞけてやつた。

恬淡無慾な白隱もまたイヷンの馬鹿の一人であつた。

良寛についての逸話はたびく繰りかへさるゝことであるが、その子供らしさはいつもわたくしたちをして微笑を禁じ得ざらしむる。庵の床下にたけのこが芽を出したが伸びることができないのを見て床を破つてやり、さらに天井に穴を明けてやつたといふ話もある。

ある時民家に食を乞うて盜賊と誤られ、縛られ、鞭打たれ、土に埋められてなほ頭を垂れてあへて辯明しなかつた。やがて良寛和尙であることがわかつた時、人々は驚いて縛を解き、いたく謝しつゝ「何ゆゑに和尙さまはだまつてござらしたか」とたづねた。良寛は「かやうな憂き目に逢ふのも業が盡きないからだ」といつた。そして「うつ人も打たるゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀」とうたひながら立ち去つたといふことである。

良寛は子供が好きであつた。或る時子供等と隱れん坊をして遊んでゐた。鬼になつた良寛は兩手で眼を掩うて子供

等の聲を待つてゐた。日が暮れ、月が出ても子供等は「ようし」といはなかつた。良寛はやつぱり兩手で顏を掩うて子供等の聲を待つてゐた。子供等は實は良寛を置いてけ堀にして家に歸つてしまつたのであつたが、良寛は月が出て、夜が更けるまで子供等を待つてゐた。

かういつた話はまつたく聞くだけでも愉快である。小ざかしい人間ばかり多い世の中にかくのごときイヷンの馬鹿を見出すことはいかにも尊いことである。

越後長岡の國上山の草庵を五合庵と名づけ住んでゐたが庵にはたゞ一つの「擂醬瓦盆を藏し、醬を擂り、粥を炊くにも之をもつてし、手足を洗ふにもまた之を以てす。」と傳へられてゐる。

信濃の柏原は越後境に近い寒村である。俳人一茶の故郷であり、今もなほ一茶が晩年を過した小ひさな籾倉は町裏の畑の隅にとりのこされてゐる。

一茶は米がなくなると近村の弟子たちの間を行脚して歩いた。籾倉には瓢が懸けられてゐて、弟子たちは米を持つて來ては瓢のなかに入れて歸つて行つた。

或る日一茶は例によつて米を貰つて柏原の庵に歸つて來た。たま〳〵途中でかれは雀の群を見出し一握り、また一握りと嚢の米を撒いてゐる間に貰ひためた米を全部失つて、そのまゝ草の中に眠つてゐた。

芭蕉が深川の芭蕉庵に住んでゐたころの消息によれば芭蕉もまたすこぶる枯淡の生活を送つてゐた。弟子たちが來ては無駄書きしたので半帖一帖の紙にも困り、一升の米一椀の味噌の無心にも常住俳弟たちを驚かさなければならなかつた。

俳人丈草はその師芭蕉の死後石山幻住庵に近く庵を結んで師の冥福を祈つてゐた。

丈草庵の壁にはいろ〱な日誌や、紀行文や、芭蕉翁の手蹟などが貼り交ぜられてあつた。「これは惜しいものだ。壁から剝ぎ取つて版木にきざむか、翁のものは翁のものとして市に賣れば大したものだ」などゝいつて勿體ながる人が多つた。しかし丈草は死ぬまで壁に貼られた日誌や翁の手紙などを見ながら樂しんでゐた。丈草が紙衣を着て寒がつてゐるのを見て或る人が見事な絹の夜具を運んで來て丈草に贈つた。丈草は直に貧しい人にやつてしまつた。そしてやはり紙衣を着て顫へてゐた。

僧圓通はかつて或る人のために書の跋を題したことがある。ところが圓通の字は非常に讀みにくい字で誰にも讀めない。そこで圓通にたづねたところ、「實はわたしにもよく讀めない。わしの字は門人の某が能く讀むから、その男に讀ましてくれ」と答へた。

或る京の某の家を尋ねる途中ですつかり某の名をも町をも忘れてしまつた。そこでかれは「わしが尋ねて行く家は何所だ!」といつては京の町をたづねて歩いた。

桃水和尙の逸話もまたあまりに有名である。桃水かつて攝州法巖寺を去る。法弟二人桃水をたづぬること三年、京の安井門前に乞丐の群に桃水を見出す。弟子たちは師とともに乞丐の群に入つて生活せんことを願ふ。たま〱桃水、道に乞丐の死骸を埋め、死者の食ひ殘したるものを食ふ。弟子も師に倣つてそれを食うたが臭穢に耐へず吐いてしまつた。「お前等にはとてもわしの眞似はできない」とさとして寺に歸らせてしまつた。

このやうな古人の言行はたしかに今日の世の中の人たちの常識をもつてしては判斷のできないことであるかも知れない。たしかにイヷンの馬鹿の國に住むべき人たちである。

常識結構である。しかし常識のみに賴らうとする社會は小ざかしい人間の世界のみを見なければならぬ。イヷンの馬鹿は常識を超越し、眞理そのものゝ中に住んでゐる。

唯物史觀的な考へ方のみが生活を支配してゐる現代に於いて、イヷンの馬鹿の生活法はいかにも愚かなことのやうに想像されるかも知れない。愚かなことであるかも知れないがたしかに尊いことである。ありがたいことである。今日の社會にはあまりに賢い人たちが多過ぎる。働かず勞せずして生きて行かうとする人たちが多過ぎる。わたくしたちは現代の小ざかしい常識のみの人たちに飽いた。かれ等の小我的な人生論、社會論、藝術論に窒息しさうだ。わたくしたちの魂は常識と打算と小我と世間的といふことのために歪曲になつてしまつた。小ひさく固まつてしまつた。もすこし原始的な生活の力が欲しい。もすこし太い生活線が欲しい。もすこし生まれたまゝの大膽さと率直さが欲しい。

一日々々の生活の尊さをその底深く味ふといふことが、今日のあわたゞしい生活においては、忘れられがちである。靜かな生命そのものゝありがたさを、或ひは滋味を、味ふといふことが忘れられてゐる。天と地と自分の小ひさな魂を一つにするといふことの他には宗教も哲學もない。小ひさな自分自身のすべてを天と地の間に投げ出してかゝらない限りは天も地も自分を抱き入れてはくれない。着物を脱ぎ捨てなければならぬ。素つ裸になつて天と地の間に飛び込んで行かなければならぬ。嬰兒は素つ裸になつて飛び込んで行つてこそ母の懷の溫かさにつゝまれる。母の懷の溫かさを感じることができる。天と地を賴り、天と地に一切を委ねなければならぬ。一切を捨てゝ天地そのものと一つにならなければならぬ。天地一切は自分のものである。東の風も西の風も、星も大空も。

桃水や良寛や白隱和尙たちが行き着いた程の道に達することはなか〳〵容易なことではない。けれどもわたくしたちも或ひは達し得ないとは限らない。しかしたゞ日々夜々聖僧たちの步いた道を思ひ出すだけでもわたくしたちにとりて日々夜々の救ひである。

人間である以上は人相應の金錢に對する欲望、名譽に對する欲念を抱くといふことは自然である。またそれ等の欲

望あればこそ勤勉や努力といふ美德も生まれて來る。しかし人はやゝもすれば金錢や名譽を得るためにやがて自分の魂を賣つてしまふ。金錢や名譽といふものが存外つまらないものであるといふことを一度は知らなければならぬ。それがわたくしたちの悟りの第一步である。ともかく一度は乞丐になるだけの機緣を見出さなければならぬ。一瓢の飲一簞の食の中に樂しみあることを知るといふことはすべての宗敎生活の第一步でなければならぬ。

現代において殊にイヷンの馬鹿の偉さを思ふことが切である。

佛法僧　駒鳥　雷鳥

この夏霧島の溫泉にゐたころ、月夜の物語から偶然佛法僧の啼が出た。霧島神宮の老杉に佛法僧が巢食ふてゐるから見物に行かうといふことになり、高千穗の裾を橫切つて霧島神宮まで步いて行つた。さらに狹野神社の老杉にも巢食ふてゐるといふことで、この時は高千穗の峯を越え、恐らく霧島連峯の最難所と思はるゝ嶮所を日向の方へ越えて、東霧島神宮の裏の森に下り、さらに南國の焦きつけるやうな七月の午後の日の光りを浴びて狹野神社まで步いて行つたことがあつた。この日の行程は山案內人にとつても二日行程の山路であつた。

わたくしははじめて霧島神社と狹野神社の老杉に巢食ふてゐる佛法僧といふものを見た。數年前までは單に宮鳥と呼んでゐたさうであるが鳥博士の黑田侯爵がはじめて佛法僧であることを發見されたといふことであつた。翅をひろげてのどかに老杉の間を飛んでゐる姿を見ればいかにも宮鳥とでもいひさうな鳥である。ひろげた翅の中程には眞つ白な紋がある。羽根は翡翠色で、鳩よりも小ひさい。

わたくしの鄕里にはかちがらすといふ鳥がゐる。肥前からすともいつてゐる。かちがらすにも翅に斑紋がある。佛法僧のそれに似てゐる。霜の降つた朝など田のなかによく鳴いてゐる鳥である。霧島の佛法僧よりはるかに大きく、これは里の家のまはりを飛んでゐる鳥であるが、他鄕には見かけない鳥である。

狹野神社や霧島神宮の人たちにたづねたが佛法僧と鳴くのは夜か、または夜明け方ださうである。時候にも依るらしい。

いつたい佛法僧は高野山か、叡山か、豐橋からはいつて行つたあたりの山寺（鳳來寺山？）に限つて鳴いてゐるものと聽いてゐた。故人牧水氏が佛法僧を聽きに行つた紀行文の中には、豐橋あたりから山に入つたことが書いてあつた。

霧島に行つて佛法僧の啼を聽いた時はちよつと驚かされたが、佛法僧を聽くためには、六里や七里の山道を歩くことは何の苦にもならなかつた。

霧島からかへつて間もなくわたくしは八月のはじめ箱根の仙石原に行つた。長安寺の和尙さんと咄をしてゐるうちに、こゝでも佛法僧の話が出た。

「いや、佛法僧は箱根にも鳴くといふことでございますよ。」と和尙さんがいつた。しかしこれはわたくしが見たわけでもなく、聽いたわけでもないので何ともいへないが、ともかく佛法僧といふ鳥は南洋あたりから渡つて來て靜かな山で子を育てゝかへるのであるから、今まで知られてゐない日本の諸所の深山幽谷に巣食ふてゐるのであるかも知れない。今に佛法僧の巣食ふてゐる山が二ヶ所も三ヶ所も發見されるかも知れない。

九月の二十二日、三日、四日とわたくしは上高地から槍ヶ岳の間を往復した。登山者の姿はまつたく失はれてしまつて、山は久し振りで山自身の靜寂をとりもどしてゐた。殺生小屋では雪にふりこめられたりした。

上高地から槍までの間で聽いた駒鳥の聲はいかにもうれしかつた。二十二日の朝槍見澤まで出かけて行つてあまり駒鳥の音がよかつたのと、槍の誘惑を感じたので、二十三日の朝ふたゝび槍見澤を通り過ぎて槍にのぼることにしたが、二十三日の朝の駒鳥の聲も實にうれしかつた。

一つの澤には一つの駒鳥がほとんど例外なしに鳴いてゐた。一つの溪、一つの澤には、その溪を支配し、澤を支配

する駒鳥があるものと見える。だから一つの澤で一つの駒鳥の聲を聽き、それが終つて次の澤にかゝる折には次の駒鳥をたのしみにして耳を傾けて丸木橋をわたる。かならず次の澤の駒鳥が白樺や栂の木蔭に鳴いてゐる。

玉を轉ばすといふ言葉を思ひ出さずにはをれないほどの朗かな鳴き聲である。日が翳つて來ると鳴かない。朝の日の光りが爽やかに、かゞやきはじめる。初雪に燃えはじめた紅葉がほんのりと薄化粧した雪渓に映る。山は春よりも明るい感じにつゝまれる。靑空は海よりも深くかゞやきわたる。駒鳥ははじめて鳴くべき晴れの舞臺を見出して鳴く。

廿五日は德本峠を越えて島々に出ることにした。偶然にも友人N君に「五千尺」の二階で幾年振かで逢ふ。N君は前穗高に登る筈の豫定を一日延ばして德本峠まで別れを惜んでくれることになつた。

「霞澤の紅葉を見がてら……」といふことで峠にかゝつた。霞澤から峠の紅葉はまつたくさかりであつた。けふも駒鳥が鳴いてゐる。N君は無性にうれしがる。

「けふは牧場あたりへ行つて一日駒鳥を聽いてかへりませう。」N君は秋の山を訪ねたことを心からうれしがつてゐるやうに見える。

峠から七八町ばかりのところでわたくしたちは別れた。二三町離れたところで聲をかける。しばらく經つと谷の方からN君の聲が聞える。また一町ばかり歩いてさらに聲をかける。谷の方からN君の聲がやゝ細く、かすかになつて響いて來る。さらに聲をかける。かすかにN君の聲がこだまして來る、つひに聞えなくなる。

「送られつ送りつはては木曾の秋」の古人の句を思ふ。

山はふたゝび、元の靜けさに還る。

駒鳥は啼く。

廿四日の拂曉殺生小屋で雪に降りこめられたわたくしたちはかなり不安な心に囚へられてゐた。見てゐる間に奥穗高も、つひ目の前の中岳も、大喰も、しまひには、三四間先の岩さへ見えなくなつた。悲愴な想ひに打たれながら、案內の男が炊いてくれた飯を食ふ。

「秋の山に來て雪にとぢこめられるなんてまつたく珍らしいことだ。」年寄つた方の案內人は若者を對手に愚癡とも絕望ともつかぬやうな句調で話してゐる。

「こんな時はせいいつぱい食つて置くに限る。」さういつてはまたわたくしたちはうまくもない山の飯を無理に胃の腑につめこんだ。

「幾らか雪が小降りになつた。」といつて若い方の案內人が殺生小屋の土間の戶を明けた刹那であつた。わたくしたちは吹雪のなかに訴へるやうな鳥の聲を聽いた。

「雷鳥が鳴いてゐます。」

何といふ可憐な聲であらう。何といふさびしい聲であらう。岩の間に吹きためられた初雪そのものゝごとくわびしい聲である。

三十年來故鄕の山で繡眼兒ばかり飼つてゐる友人がある。

かれは半白の頭をしながらも山に入つて繡眼兒を鳴かせる時だけは少年時のやうなかゞやかな顏をしてゐる。

「繡眼兒にも簡單な言葉はあるやうだ。お早うとか、お天氣がいゝとか、危險だとかいふ言葉だよ……それから一番子はきつと見晴しのいゝ奥山の靜かな場所をゆづられてゐる。二番子、三番子と下るにつれて里に近く、だん〳〵惡い場所を割當てられてゐる」と友人は語つてゐた。

その後氣をつけてゐるが、深い山に入れば入るほど鳥の鳴く音はよくなるやうだ。
靜かな山、かゞやかな山、美しい水、美しい雪、美しい草木、美しい空……そんなことが鳥の鳴く音には一番深い關係をもつてゐるやうだ。

夏の山々

霧島の溫泉は海拔二千幾百尺のところだけに、南國の八月といつても秋のやうに凉しい。都會から離れてゐるだけにきはめて原始的で、湯治客のうちには米味噌を背負うて山を上つて來、溪川の水を掬み、流れ木を拾うてゐる素朴な人たちもある。薩摩潟、櫻島、開聞岳も遥に眺められる。湯から上つて午睡の夢をむさぼつてゐると水のやうな山氣につれて郭公が鳴いて來る。二里ばかり處女林を横切つて峇の徑をたどつて行くと、山は急に展けて草原地帶に移る。躑躅はすでに散つてゐるが草あやめをはじめ名も知らぬ草花が五千尺の高原を埋めてゐる。まつたく花は多い。その草花の原を正面にして韓國岳がそびえてゐる。

韓國岳の懷に千尺の斷崖と處女林に抱かれて大波池がある。舊噴火口に水を湛へて出來上つたものである。水はいかにも深く、深碧の底に白い雲を抱いてゐる。わたくしはかつて大波池ほど神祕的な山上の湖水を見たことはない。周圍二里ばかりの池を横切つて郭公が鳴き、鶯が鳴き、河鹿が鳴いてゐる。その聲が太古さながらの處女林や斷崖にひゞいて幽邃な交響樂を奏でゝゐる。わたくしはあまりのうれしさに草の上で踊り上つた。霧島の溫泉では月明の夜、薩摩隼人たちの燒酎飲の唄を聽くのも哀婉きはまりなきものである。

雲仙の溫泉で夜つぴてはげしい雷鳴に脅かされ、翌早曉牧場の馬の群に草をあたへなどして雲仙嶽の絶頂普賢に登つたのは八月も末であつた。普賢のいたゞきの風穴で西瓜を冷やし萬斛の凉味を喫しながら、白い雲の下の有明を見、さらに海を越えて九州中部のほとんど全體を一眸の下に見ることのできた刹那の快適さは今も忘れることができない。雲は普賢の岩にあたつて千切れては飛んだ。雲の千切れ目から、遥かに下方に靑い夏の山が見え、海が見え、筑

紫の平原が見えた。雲を縱横無碍に斷ち切つては岩燕が擲つごとき速さで飛んだ。

夏の山の旅行で殊にうれしかつたのは雨の日の日本アルプス上高地の經驗であつた。松本に下車して、島々を立つころから珍らしい强雨であつたが、德本峠では冬のやうに寒く、日は暮れてしまつた。上高地に着いたのは十時であつた。尺にも近い岩魚の馳走にあづかつて山の家に梓川の瀨の音を聽きながら寢床についたが嵐の聲に夜つぴて眠れなかつた。夜が明けて雨は止んだが穗高も燒も雲の海につゝまれてしまつて、わづかに川沿ひの水楊や白樺の幹をながむるくらゐのことであつた。

正午ごろであつた。穗高のかぐろい岩の一角から急に雲が晴れ、霧が消えはじめた。その刹那、赫と太陽がかゞやきはじめると同時に、穗高の鐵のやうな黒い數千尺の懸崖に沿うて、幾百條ともなき大小の瀑布が落ちて來た。或るものは天に懸り、雲に入つてさらに雲に入り、或るものは雲の間から飛んで岩に落ち、霧を貫いて幾屈折して霧に隱るゝといふ有様で、玄妙、莊嚴、優婉、豪宕、纖麗あらゆる審美の姿を盡しては落ちた。をりからの日の光りに雨に濡れた穗高全山の岩が銀のごとく光れば、幾百條の瀑布はさらに銀よりも白くかゞやくといつた鹽梅で、まつたく恍惚たらざるを得ない。わたくしはあの時ほど强く山の靈感に打たれたことはない。

翌日上高地の牧場を通りぬけてやがて槍見澤の磧からはじめて山の間に雪溪の上にそびえてゐる巨人槍ヶ岳の風貌に接した刹那には思はずも涙が落ちて來た。わたくしは大地に接吻するといふロシヤの順禮たちの物語を思ひながら徂徠する雲の上に動かざる槍ヶ岳の姿を拜んでゐた。

いつたい雨に濡れた山が急に月にしろ、太陽にしろ、光りに照らさるゝ時は特異な美を感じさせるものである。三年前の夏、月明をたよりに信濃沓掛から淺間に登つた時、峰の茶屋あたりから細雨が降り、いよ〳〵淺間の五六合目にかゝつた時は二三間先は見えない程の霧につゝまれた。ところが急に風が强くなつて山の雲を拂ひ、石を飛ばし、雨

を叩きつけてしまつて冲天に月が輝きはじめた。わたくしは突然雨に濡れた眞つ黒な小淺間が北の半天を劃つて月に照らされつゝ雲の中に巨人のやうな姿で現はれたのを見た。その刹那にもわたくしはどうしても山を拜まずにはをれないやうな氣になつてしまつた。

吾木香

吾木香は地味な花である。ちよつと見には花とも見えぬほどのくすんだ花である。小ひさな鋸葉、すい〳〵と曲(きよく)もなく伸びたる數條の莖。桑の實にも似たる黒ずみし花は秋の野の中でも一番わびしい花であらう。芒の穗にすら秋の光りはたゆたふてゐるに吾木香(われもかう)ばかりは秋ともなく冬ともなく同じやうにいつも黒ずみし法衣をまとふた法師でも見るやうな寂しさにつゝまれてゐる。花といふ以上は桔梗にしろ、女郎花にしろ、藤袴にしろ、秋草ながらそれ〴〵のあでやかさを誇つてゐるに、吾木香ばかりはいつも秋そのものゝわびしさを一つにこめて咲いてゐるやうに思はれる。秋草のさかりには輕佻な人々の目には恐らくその存在をすら認められてゐない。

一度霜が下り、野分の風が吹き、蕭條たる天地にたゞ白雲の遠きを歎(かこ)つばかりのころになれば秋の花といふ花の影もなくなる。世界はまつたく空虚となり、世界の美といふ美は失はれてしまつたやうに思はれる。しかもそのやうなをりわたくしたちは不圖野分の小徑のほとりにわびしい吾木香の枯れもせず取りのこされてゐるのを發見する。いかにもあはれでもあるが、冬枯れちかき野はわびしい吾木香のためにどれくらゐ慰めを見出してゐるか知れない。

吾木香、お前はいつも虔しやかな自分を秋の野の片隅に見守つてゐる。しかしお前が冬枯れちかき蕭瑟の野に爲し遂げてゐる仕事は決して小ひさなものではない。わたしはお前の地味な桑の實のやうな花を見出すがゆゑに荒寥たる野分の草原をも歩むことができる。お前はいつもわびしい。いつもくすんでゐる。しかしお前の慰めは、どの秋の花よりも大きい。お前は秋の哲學者のごとく靜かである。お前は秋の野の忍苦者である。

冬枯れちかき蕭殺たる世界はたゞお前のわびしい姿によりてのみ救はれてゐる。

數年前の秋わたくしはこゝの山にゐて毎日上州吾妻高原の牧場から、淺間の根腰を越えて信州に通ふ馬を見た。母馬と仔馬であつた。

草津道を通ふ旅人の背を隱すばかりに芒の穗は伸びてゐた。母馬の背のみ見えて、やゝもすれば仔馬の姿は芒のなかに隱れることもあつた。

母馬の先に走り、遲れては急に母馬を追ふ仔馬の姿はいかにも可憐なものであつた。わたくしはたいてい午後の二時ころになれば草津街道の傍に立つて、信濃の町から吾妻牧場へかへつて行く母と仔の馬を眺めてゐた。

或る日わたくしは町の人から、その仔馬が近々母馬から離されて賣られてゆくといふことを聽いた。わたくしはその話を聽いた夜は何となく暗い心に囚へられてしまつた。

母と子とともに生きてゆくことは世界の最も美しい詩である。

母と子と別れなければならぬことは世界の最もいたましい悲劇である。

馬も母と子とともに生きよ。

鳥も母と子とともに生きよ。

わたくしは町の人にたづねて見た。「あの仔馬はどれくらゐで賣られてゆくのです。」

「牡馬ですから安いでせう。たか〴〵三四十圓がものでせう。」

わたくしはその一夜、眞面目に仔馬を買つて、來年の秋まで母馬の家にあづけて置かうかなどと考へた。

二日經ち、三日經つた。わたくしは決心がつかなかつた。

そのうちに仔馬は吾妻牧場から山を越えては來なくなつてしまつた。

どこかの馬市へ連れられて賣られてしまつたのであらう。

秋も終りごろになつて、或る日わたくしは高原の町で、たゞ母馬だけが一匹で荷車を曳きながらさびしさうに吾妻高原の方へ還つてゆくのを見た。

信濃沓掛の町を散歩しながらわたくしは時々亡命のロシヤ人とよく邂逅つたことがあつた。

かれは革命のさわぎにたゞ一人の娘とも、妻とも別れ〴〵になつてしまつた。妻の生死も知れず、一人の娘はシベリヤ地方を旅役者の群にはいつて放浪してゐるらしいといふ噂だけをかれは聽いてゐた。

かれは六尺豐かな偉丈夫であつたが、いつも寂しかつた。中世紀の修道院の托鉢僧を聯想せしむるやうな繩のバンドを無雜作に、浴衣の上にぐる〳〵と纒うてゐた。大きな掌に五六房の葡萄を載せては歌をうたひながらキャベツ畑の中の小徑を歩いてゐた。

いつであつたかわたくしは、かれが東京の病院にはいつてゐるといふ噂を聽いた。はげしい神經衰弱に惱んでゐるといふことであつた。

妻と別れ、娘と別れ、天涯孤獨な亡命のロシヤ人のことをわたくしは今芒の原に立つて想ひ出してゐる。

人、その妻とともにあるはよし。

人、その子とともにあるはよし。

秋の風が吹く。

どこかでロシヤ人のすゝり泣くがごとき風の聲が響く。

昨夜は淺間はひどい爆發をした。二十年來の大噴火だといふことであつた。

をりからの仲秋の明月に照らし出された淺間の嶺は刹那にしてものすごき鳴動と數千尺の炎、幾十條の電光につゝまれてしまつた。わたくしたちの窓は飛び、壁は裂け、沓掛の町では泣き叫ぶ人々の聲まことに凄慘なものであつたといふことを聞いた。

爆發のことはかねぐ話には聽いてゐたが、午前一時、ぐつすり眠つてゐる間に十年に一度か二十年に一度といふほどの大爆發に襲はれては多少驚かないわけにはゆかなかつた。

昨夜は信濃の明月を見るために、この附近ではわれもくと人々は碓氷峠に登つて行つて、酒を掬んでゐたものもあつた。しかも明月が中天に懸つてゐる間に淺間は煉獄を想はせるほどの大爆發の姿を月光の前に展げた。月の下を五六人の若者たちが淺間に登つて行つたが。さぞ恐ろしい火石の洗靈の下におびえつゝあるであらう。或ひは刹那に熔岩に燒きつくされたであらうか。そんなことを考へながら冲天の炎と噴煙をながめてゐると自然の偉なる力と人間の運命のはかなさについて今更のごとき感慨が湧く。

淺間の根腰に峯の茶屋といふ山の小屋がある。沓掛や追分口から淺間に登る人たちはたいてい峯の茶屋に休憩して、いよくく淺間のスロープにかゝることになつてゐる。昨夜は屋根を貫き、床を裂いて雨のごとく落ちて來る火石の下に、親子五人が泣きがら抱き合つたといふ話も聽いた。三日前わたくしが峯の茶屋を訪れた時は三人の子供が一つの空箱のなかにはいつて、折からの冬のやうな寒い山風を避けて遊んでゐた。そしてわたくしを見て羞恥みながら笑つてゐた。

幸福な靜寂そのものゝやうな山の生活にも恐ろしい運命は押し寄せる。たゞしかし如何なる場合にも父と子とあるところ、母と子とあるところ、夫と妻とあるところには、かならず人間の美しさが描き出さるゝ。「もし人間なくば自然は容漠たるものならん」といつた詩人の言葉を思ひ出す。人間と人間とが相接する時、そこに醜き噴地獄の世界が

現はるゝこともある。と、同時に神の國も現はるゝ。否、人間と人間の間にありては時として神以上の美しき世界が生み出さるゝ。
今朝黎明とともに淺間の嶺は靜かな秋の山を靑空にくつきりと浮き出さしてゐる。山は常のごとく雲のごとき白き煙を吐いてゐる。啄木は木をつゝいてゐる。
何といふ靜かな秋の山であらう。
わたくしの胸には親子五人が抱き合つて泣いたといふいたましい、しかしながら最も美しい人生の姿のみが永久に鏤みつけられてゐる。

數日前わたしは日暮ころ沓掛の町を歩いてゐた。
二頭の仔馬が高原の牧場から里の方へかへつてゆくのを見た。
仔馬の可憐なる姿はいつもわたしの心を惹きつける。
わたしは町の八百屋に走りこんで胡蘿蔔を買つた。
しかしわたしが三本の胡蘿蔔を手にして往來に出た時は二頭の仔馬はすでに町外れの橋を渡り終つてゐた。
わたしは三本の胡蘿蔔をポケットに入れたまゝ家に歸つて來た。
わたしは寂しかつた。

わたしは毎日のやうに高原の牧場から村の方へかへつて行く牧場の馬をながめてゐる。
芒の原を横切つてゆく仔馬の可憐な姿は山の生活者にとつては快き救ひである。

昨日の朝わたしは仔馬の姿を芒の原に見出した。

わたしは二本の胡蘿蔔を握つて馬を追つかけて行つた。

「仔馬に胡蘿蔔をたべさしてください。」わたしは馬をつれてゆく若者に聲をかけた。

「仔馬は乳を飲んでるで、胡蘿蔔は喰べまいよ。」さういつて若者は一本の胡蘿蔔を厄介さうに母馬の口へ押し込んだ。母馬は半分喰べて半分を地に落してしまつた。馬方は落ちた胡蘿蔔をいま／＼しさうに見たまゝ行き過ぎてしまつた。わたしの心は暗くされた。

直ぐうしろから一人の老牧夫がさらに一頭の馬を曳いて來た。

「お爺さんこれを……」といつてわたしは抱へてゐた胡蘿蔔を老人にわたした。

「これは結構なものを……」押しいたゞきながら老牧夫は胡蘿蔔を馬に嚙ませた。そして若い牧夫が捨てゝ行つた胡蘿蔔を拾つて丁寧に砂を落しながら默禮して行つた。わたしの心は明るくされた。

わたしは芒の原を横切つてゆく二人の牧夫についてしばらく考へてゐた。

或る日わたしは淺間の根腰を越えて六里ヶ原を歩いてゐた。

淺間は曇り、白根と四阿山のいたゞきには白い雲が徂徠してゐた。

淺間葡萄や甘露梅の顆を摘みながらわたしは吾妻の方へ歩いてゐた。數里の間たゞ別去の茶屋と牧場の家が二三軒あるばかりで、昔はよく追剝が出たなどといはれてゐる土地だけに人の影も見えない。

突然わたしは遠い芒の原のかなたに一人の旅人を發見した。

二十分、十分……かれとわたしの間は近づけられて行つた。かれは白い手甲を穿めてゐた。かれは老年の巡禮であ

つた。
かれとわたしは六里ヶ原の一本の夜叉の木の下で逢つた。襟には白い布に高野山といふ文字が見出された。
わたしは「御報謝……」といつて紙に包んだ銀貨をかれの掌に載せてやつた。
かれは懐から鈴を取り出して經を讀みはじめた。二町三町歩いて振りかへつても、尙かれはわたしの方を向きながら經を誦んでゐた。
かれは最後に丁寧に頭を下げて淺間の方へ歩いて行つた。わたしは白根の方へ道を急いだ。
わたしは數日前胡蘿蔔を丁寧にいたゞいて馬にやつた老牧夫と、今逢つたばかりの巡禮のことを思ひながら六里ヶ原を歩いて行つた。
世界が明るくされたやうな氣がした。
人間が生きてゐるかぎり、人と人と接するかぎり、そこには美しい心の世界が拓かれる。

落葉松

九月一日。朝から霧のなかに山鳩が鳴いてゐた。
けふはこの秋に入つてはじめてのいかにも秋らしい日であつた。豁然として秋空が晴れわたつたといふ感じであつた。山はなほ靑く、秋風はかすかに吹いてゐた。
朝から妙義にも八ヶ嶽にも白い雲がわいてゐた。恐ろしい九月一日の大震災日を思ひ出させるやうに。
東京ではいろ〳〵な記念の催しが行はれることを新聞で讀んでゐた。わたくしたちも二三日前沓掛のステーションまで下つて行つて時計をあはせて置いて十一時五十八分を待つた。そして床の間に香を焚いて瞑默した。
こゝでは合圖の汽笛も鳴らず、何のものゝ音もない。たゞ机の上に置いたニッケル時計の低いセコンドを刻む音だけが近づいて來るあの恐ろしい思ひ出の時を知らせるのみである。わたくしたちはたゞ香の前に默禱した。落葉松の林には小鳥の聲すら聞えなかつた。寂然たる空山のなかにあつてわたくしは瞑默しながらあの恐ろしかつた灰燼のなかのあさましい黒焦げの死體を描いてゐた。眼をつむつてゐると草のなかにこほろぎが鳴いてゐた。
亡くなつた妻の母、若い婿、誰れかれの姿が山の中の靜かなわたくしの生活のなかにあの恐ろしい日のまゝによみがへつて來るのであつた。
死せる者のかなしみ、生ける者のかなしみ。
わたくしは沓掛の町まで山を下つて行つた。小ひさなステーションの開札口の手摺にもたれかゝつて汽車をながめ

た。上野から新潟行の汽車が通つて行つた。あの恐ろしい日もわたくしは王子驛に立つてゐて機關車に、石炭車に汽車の屋根の上に蟻のやうにたかつて逃げゆく人たちを見てゐた。
あの日のことを思ひながら、わたくしは高原を過ぎてゆく汽車の窓の人たちを眺めてゐた。
旅人の心は旅人を見ることによつて何となき慰めを見出す。
初秋の雲の下を高原の涯に汽車は走つて行つた。
わたくしは沓掛の十字路の薄暗い水菓子屋の前に立つてゐた。トマトだの、葡萄だの、梨だの、キャベツだのが秋のやはらかな日ざしに抱かれてゐた。

沓掛の町は燕が多い。家毎に軒端には幾つかの巣が作られてゐる。繪馬が釘付けられてゐる。電線の上には三十も五十もの燕がとまつてゐる。追分の町の方へ淺間のスロープがいかにものび〱と氣持ちよく緩やかに流れてゐる。その青い美しいスロープを背景にして屋根の勾配の緩な、庇の長い沓掛の古宿の家々が裾野の草に這ふやうにしてつらなつてゐる。
わたくしは落葉松の林を分けて山葵澤の方へ歩いて行つた。去年の秋もかなりたけてから訪ねて行つたことがあつた。寒い夕暮であつたが、若い夫婦は冷たい澤の水に浸つて石を積みかへてゐた。わたくしはその若い夫婦と小一時間も話をしてかへつて來た。二三日經つてから若い夫婦は東京へのみやげにするやうにといつて一束の山葵を持つて來てくれた。夜提灯をともして霧のなかを訪ねて來てくれたのであつた。
わたくしは去年の秋のことを思ひながら若い夫婦へのみやげにすこしばかりの菓子を包んで落葉松のなかの徑を分けて行つた。秋草がふかくしげつてゐた。山葵澤から三四町手前の木立のなかにかれらの小屋があつた。赤い壁が遠

くから目立つて見えた。小屋の戸は堅くとざゝれてゐた。

「山葵畑に働きに行つてゐるのであらう」と思ひながらわたくしは小屋の周圍をめぐつて見た。向日葵（ひまはり）は重たげに咲いてゐた。小屋のまはりの野菜畑にも去年の秋見たまゝに紅い花などが咲いてゐた。

たゞ鷄舍も馬小屋も空虚なのが何となくさびしかつた。わたくしはさらに裏の物置を覗いて見た。そこには編みかけの莚だの、馬の草鞋だのがそのまゝに置かれてあつた。

わたくしは蛇の多い徑をさらに奧の山葵畑の方へはしつて行つた。四人の男たちが石を運んだり、崖をくづしたりしてゐた。

山葵畑は荒れていたづらに畑の石のみがから〳〵と乾いてゐた。わたくしはそこに働いてゐる人たちに夫婦のことをたづねた。

山葵澤が今度町の水源地になつたために幾らかの金を貰つて家も山葵畑も捨てゝ何處かへ移住してしまつたといふことであつた。わたくしはぼんやり立ちつくしてゐた。

わたくしは歸りしなにふたゝび小屋のまはりを覗いて見た。あの男の帽子らしい古いハンチングが赤い壁にかけられたまゝになつてゐた。夕顏の花が白く壁に沿うて咲いてゐたりした。何となく寂しい心に囚へられた。

わたくしは若い夫婦の祝福を祈りつゝ落葉松の林を出た。

終日落葉松の葉は音もなしに落ちてゆく。今日北海道からのたよりには、まだ北海道では落葉松の葉は落ちはじめないと書いてあつた。北海道よりも早く信濃の高原にはすでに秋が訪れて來た。

草山の徑

朝まだ暗いうちに起きてわたくしは桂川に沿うて溪の間を歩いて行つた。正月の十四日御火焚きの朝である。天城の谷々、村といふ村、五戸十戸の家のあるところではかならず一處にあつまつて朝まだきに門松を焚き、青竹を焚いて子供たちは天に冲する炎を見守りつゝ夜の明けるのを待つてゐる。小高い草山にのぼれば狩野川に沿うて幾十幾百ともなき御火焚きの炎を薄明の靄の下に見ることができる。炎をめぐる子供たちの手には昨日山から切つて來た櫟の枝にさしたお團子がある。子供たちは御火焚きの炎に燒いたお團子をかゝへては火のまはりを踊りまはる。十國峠あたりの草山の上に曉の雲が紅く燃えはじめる。雪につゝまれた富士の姿が神々しきまでに空に浮かぶ。

大人も子供も夜明け方の御火焚きをめぐつていかにも嬉々として笑ふ。けさは山の中の小ひさな町中がほがらかに笑うてゐる。

隣りから隣りへ異邦人のやうな冷たい眼を瞠つてゐる都會人の生活に比べて何といふありがたい、あたゝかな生活であらう。山の人たちは眞に生くべき道をあたへられてゐる。よろこびをめぐまれてゐる。わたくしはかつてシングが演劇の目的は人々によろこびをあたへることにありといつた言葉を思ひ出さずにはをれなかつた。

人生にはあまりに多くの苦しみがあり、惱みがある。ぢつとそれを耐へてゆくところに生活の深みがある。しかしながらそれと同時によろこびをよろこびとして素直に受け容るゝところに生活の美しさがあり、豐かさがある。わたくしたちの都會生活はよろこびをよろこびとして受け容れなければならぬ魂の素直さを、ひどく傷つけてゐる。さらにまことに人間らしいよろこびの機會をも奪つてしまつてゐる。わづかに音樂、演劇といつた種類のものが、生活の

よろこびをあたへてゐるのみである。しかしそれらのよろこびは極めて一部分の人のみに限られたるよろこびであつて、町全體の人々のよろこびではない。きりつめていへば衆と共にたのしむところのよろこびでなしに、最も個人的なたのしみである。主我的なよろこびである。腐つた空氣、息詰まりさうな人いきれのなかのよろこびである。あまりに人工的なよろこびである。人々は生活のよろこびをもとめて山を捨て、田園を捨てゝ都會に集まつてゐる。しかも生活のよろこびはかへつて山にあり、田園にあることを忘れてゐるやうに思はれる。

わたくしはたいてい朝六時半には眼をさます。薄暗い溫泉に浸されてゐる間に天城の空が明けて來る。小鳥が窓ちかく飛んで來ては鳴く。朝は狩野川のほとりまで白い路を歩む。川端の藪のなかに椿の花が眞つ赤に咲いてゐるのを毎朝新たな感じで受け容れる。伊豆の旅が持つ一つの靜かな誘惑は馬小屋の裏、橋の袂、淵のほとりに、あるかなしかの姿に咲く赤い椿のそれである。いかにも華やかないかにもわびしき草のなかの椿は山の乙女のごとく尊くもありいとしくもある。語ることを知らず、うたふことを知らぬ黑い瞳の乙女を思ふ。

午後になればわたくしは草山に登る。松の間をさ迷ふ。時としては啄木を聽き、鳩の聲を聽く。草山をのぼりつめたところに梅林がある。二三町歩の梅林で、相當に手も入れてあるがやゝ高い山のせゐかいつ行つても人の影を見ない。幹は苔につゝまれ、さるをかせが梢に垂れてゐる。蒼然として暮れゆく山にをりて、かすかな梅の香とともに暗につゝまれてゆく靜かなよろこびを一人ほしいまゝにするのは勿體なさすぎるやうな感じがする。

梅林のいたゞきからは南に天城が見え、北に眞つ白な富士の嶺が眞正面に見える。天城と富士の間に乙女、十國の草山が枯れ〴〵の姿を見せてゐる。

わたくしは夕方の山を眺めるのが好きで、毎日陽がかたむきかゝつてから梅林のいたゞきに登つてゆく。

昨日はたゞ一朝で天城連山がすつかり雪につゝまれてしまつた。雪につゝまれた天城は見ちがへるほど高く、尊く

感じられた。天城から十國、乙女峠あたりに美しい雲がなびいてその雲の上に、或ひは雲の間に山を眺めるやうになつたので、いつになく天城の山が深く、秀でゝ見えた。わたくしは思はず感嘆の聲を放たずにはをれなかつた。ぢつと見つめてゐる間に薔薇色に染められた夕燒雲が天城をつゝみ、富士をつゝみはじめた。富士は夕燒雲の上にいたゞきのほんの一部分だけをさらに白く尊く浮かしてゐた。たうとうわたくしは最後の夕燒が消えてしまふまで草山の上に立つて富士をながめてゐた。草山を越えて駿河灣の波の音が遠い嵐のやうに聞えて來た。ちやうどその時、わたくしが立つてゐた草山の前を走つてゐる谷向ふの草山の背をつたうて、柴を負うた男が柴を負うた馬を追うて家路を急ぐ姿を見た。夕暮の空に影を投げた寂然たる二つの點景を暮れてゆく富士の前景として眺めた時、わたくしはミレエの繪を見た刹那にも似た魂のよろこびを感じた。

　わたくしにとつてめぐまれた一日であつたことを思ひながらわたくしは草山を下りかけた。

　草山の中程まで下つた時、わたくしは枯れ草の徑をたどつてゆく一つの黒い人影を見た。恐らく草山を超えてかへる山向うの人であらう。男であるか、女であるか、それさへわからぬ。たゞ石につまづいたのか一度石を蹴るかすかな音を聞いた。不思議にもわたくしの胸には亡くなつた故郷の母のやさしい眼が映つて來た。わたくしは年にたゞ一度くらゐの割で故郷に歸つてゐた。それもほんの數日の滯在であつた。わたくしが東京へ歸る日の寂しさうな母の眼を恐らくわたくしは死ぬ日まで忘れることは出來ないであらう。二十幾年の間わたくしは故郷を出てゐたのであつた。わたくしが最後に東京に歸つた時、母が夜具を引つ被つて泣いたといふことをわたくしは後で聽いた。草山を歩いてゐる間にわたくしはそのをりのことを思ひ出した。

　わたくしは草山を歩きながら、耐らなくなつてしまつた。

母は神よりも尊く、神よりも寂しき人であつた。

山の秋

七月の十七日京都の祇園祭を見、二十四日には鹿兒島に行つて偶然にも鹿兒島の祇園祭を見ました。京の祇園祭はいふまでもありませんが、鹿兒島の祇園祭もなか〳〵捨てがたく思ひました。土地が土地だけに社杯を著け笠を冠つた人たちが、美しい櫻島の夕燒け空を背景にして鉾のうしろから町を歩いてゆく姿はいかにも古雅な感じをあたへました。

霧島の處女林を六日間歩き通しに歩いて、谿といふ谿の淸水を掬みました。九州の山は雪溪が見られないのは淋しいですが、處女林の美しさ、山の人の純朴さ、水の豐かさ、鹿や猪の足跡や空の晴れやかさは、すつかりわたくしの心を囚へてしまひました。

高千穗をやゝ日向の方へ下つてから野苺を嚙みながら日向の曠原をながめた景色の雄大さは、なか〳〵忘れがたく思ひます。神武天皇のお生まれになつた王子原は處女林のはづれで草がまつたく文字通りにかゞやいてゐました。王子原につゞいて狹野神社の杉の木立があります。まことに類のない見事な木立です。佛法僧が鳴いてゐるといふことをきゝましたので、高千穗から三里ばかりの道を下つてゆきました。

佛法僧の美しい羽根を杉の下で拾つて大切に信濃の山まで持つて來ました。

わたくしは今信濃の山にゐて、淺間の煙をながめながら王子原のかゞやかな草原を思ひ、奈良の佛さまのことを頭に描いてゐます。

鹿兒島の旅のかへりにふたゝび京都に下りて奈良を訪ねました。大軌の電車が出來たので京と奈良の間は便利になりました。電車が巨椋の池の傍を通るやうになりましたので、ちよつと目新らしい旅でした。巨椋池の蓮はわたくしが今まで見たうちでは一番見事なものでした。このごろは京の人たちは朝早く巨椋池の蓮見に出かけるさうですが羨ましいと思ひました。蓮の上を數羽の白鷺が飛んでゐました。

奈良の夏は暑いといふことは聞いてゐましたが、百濟觀音を拜みたい一心で出かけました。百濟觀音はいつ拜んでもやさしい母のやうな眼で旅人を見てくれます。奈良に百濟觀音一つあれば奈良を訪ねても不足はないやうな氣がします。疲れては椅子に腰掛け、起ち上つては百濟觀音を拜みました。

歸りには春日神社に詣りましたが、ひどい雷で雨さへ降つて來ましたので、三笠山へはまはりませんでした。去年は秋も老けてから奈良をたづねました。折からの時雨に逢つて、二月堂の階の下で奈良の鹿と牛座を分けて時雨の晴るゝのを待つたことなどを思ひ出しました。

信濃の高原はすつかり秋になりました。それにつけても奈良の秋を思ひ出してゐます。百濟觀音のやさしい御眼とやさしい御手を描いてゐます。

けさ大町からたよりがありました。山の客もすくなくなつたから山に登りに來ないかといふことでした。山に初雪が降るころになつたらゆくといつてやりました。九月の二十日ごろには雪も降るだらうと思つてゐます。尾根の偃松の間のみやまなゝかまどの紅葉の美しさを今から想像してゐます。

落葉松の葉が落ちはじめました。青鳩の聲をきゝながらぢつと落ちてゆく葉を見つめてゐますと、魂の底まで秋を感じます。

生きることもわびしく、死ぬることもわびしく、旅のみつゞけてゐる身をあはれに思ひます。

山は一月おくれのお盆です。月も良し、毎晩太鼓を叩いては火を焚き、火をめぐつて村の若い人たちが踊つてゐます。

半年を雪のなかにとざされてゐる山の人たちにとつて夏の夜は狂ふほど踊りたくもうたひたくもあるだらうと想像されます。

「踊れ踊れ若い間だ！」太鼓の音をきゝながらわたくしは寢床の中にころがつたまゝそんなことを考へてゐます。

「四十年をどる夜もなく暮しけり」古人の悲しみはまた今人の悲しみ、地に突つ臥して歔欷したい氣にもなります。

何といふ蟲だか鈴蟲よりもすこし寂しい聲で地の底からさゝやいてゐるやうな聲で鳴いてゐる蟲がゐます。いつの年もその蟲が鳴きはじめるころになれば霧がふかく山をこめて落葉松の葉は落ちはじめ、山氣も墓場のやうに沈んで來ます。二三日前の晩からその蟲が鳴きはじめました。

夕方、澤のあたりに水鷄を聽きに行つた歸り路にその蟲の音を聽いてはぢつと立ち止まつてしまひます。一茶は「死支度いたせいたせ」とうたひましたが、その蟲の音を聽くと妙にそんな氣がいたします。

今年はいつもより遲くまで水鷄が鳴いてゐます。このごろ夜が明けかゝるとともに前の流れの葦の中あたりでよく鳴きます。すこし遠くはなれてきいてゐるとまつたく戸をたゝくと形容した古人の言葉をほんたうだと思ひます。

或る地方で火戀といふ鳥なのか、或ひはそれとちがふ鳥なのか、水鷄と同じくらゐ朝早くから落葉松に來て鳴く鳥がゐます。天城あたりで水戀と呼んでゐる鳥の鳴く音にやゝ近いものですが、水戀よりはやゝ朗かな感じを持つてゐま

す。

八月はじめまでは朝の四時にはきつと裏の落葉松の梢にとまつて鳴きはじめましたが、このごろではもう四時半ぐらゐにならなければ鳴かなくなりました。

このごろは日が暮るゝと直ぐ寢ることにしてゐますので、朝は水鷄か、落葉松の中のその小鳥の聲で四時か四時半にはかならず起きるようにしてゐます。小鳥の聲を聽き、落葉松の梢の間に黎明の空を眺めながら歩いてゐますと、星が消え、やがて靑鳩も鳴きはじめます。

もう野菊も咲いて來ました。渡り鳥の群が眞つ紅な木の實をつゝいては遠い嵐のやうな聲をのこして飛んでゆきます。

昨日の夕暮でした。赤く夕燒けした空を幾百といふ燕の群が鳴きながら白い雲を切つて飛んでゆきました。ちよつと千鳥のやうなわびしい聲を聽きました。

雷を伴うた雲の峯がいつの間にか鰯雲に似た靜かな雲の群にかはつてしまひました。霧がわき、霧が消えては山の色も澄み、山の肌もみがかれて來ました。山を尊く感ずるのもこれからだと思ひます。

山の男たちはいつもどこかにユウモラスなものを持つてゐます。數年來わたくしの家を訪ねて來る魚屋は十六の年から山に入つて、渡り鳥の來るころになれば越中の山に出かけて行つて霞網を張つてゐたのださうです。この男はよく山の話をしてくれました。熊に出會つた話などもよくきゝました、東の空が白みかゝるとともに幾萬とも知れぬ渡り鳥の群が夜明けの大空をかけて飛んでゆく雄大な秋の山の物語をはじめて聞いたのもこの男からでした。またかれ

はよく鳥の鳴く音を知つてゐます。
「なぜ山を下つてしまつたか！」とたづねたことがありますが、かれは「あまり鳥を殺すのが可哀想だから」といつてゐました。しかし魚屋にしても同じことで、かれは到底殺生から離れられない因果らしく思はれます。
昨日の朝、かれが頓狂な聲をしながらやつて來ました。わたくしは落葉松の下で飯盒飯を焚いてゐました。
「昨夜家の若い衆が夜中に大きな聲を出したんです。びつくりして二階から下りてゆきましたら、寢ぼけて大きな聲を出したんです。」
「そんなに大きな聲だつたの？」
「えゝ、停車場ぐらゐまでは響いたでせうよ。」
「どうしてそんな大きな聲を出したのだらう？」
「夢を見たんださうです。自分が猫になつたんださうです。」
わたくしは昨日一日中魚屋の話を思ひ出しては笑つてゐました。

もう一人親切な老人がゐます。Yといふ老人ですが山の見まはりをしてゐます。七十幾歳といふのですが、毎年秋の祭になれば相撲の行司に頼まれますので、老人は馬に乘つて淺間の腰をめぐり、上信の國境を越えて六里ヶ原を横切り、往復十幾里の道を日歸りに軍配團扇だの裝束だのを借りに行きます。自分で作つた馬鈴薯などを持つて來ては山の話をして歸つてゆきます。六里ヶ原の官林を伐りにはいつてゐたころ、岩の中の清水を掬むつもりで首を突つ込んだ一人の若者が、どうしたはずみか岩と岩の間に首をはさまれて抜けなくなつてしまつたので、岩を削つて若者の首を出してやつた話をしては老人は笑ひ出します。

この春の話です。老人は落葉松の林の中で卵を抱いてゐる雉を發見しました。老人はまる二日草の中にしやがんでは雉の番をしてゐました。ところで卵から出るや否や雉の子はどん／＼草の中に逃げて行つてしまつたので、老人はまる二日といふものを臺なしにしてしまつたわけです。

草の中にしやがんでぢつと雉を見守つてゐたであらう老人の姿を想像しては微笑ましい氣にもなります。忠實そのものといつた姿で、落葉松の林のなかを歩いてゐるY老人を見るだけでも愉快です。

この老人も六里ケ原で熊を撃つた話をします。熊はきつとたゞ一つの道を往き來するものださうです。熊の道を發見した老人は銃をかついで道傍の岩の上に隱れてゐたんださうです。そして數歩の近距離まで熊を近づけて置いて引鐵を引きました。

「それから一生懸命逃げ出して岩の蔭に隱れたものです。恐ろしいほどうめきましたよ。しかし一時間ぐらゐでうめき聲も止みましたので、いよ／＼熊の傍に近づいて行きました。」

老人の熊狩の話をわたくしは幾度か湯のなかで聽きました。

四年前の秋わたくしが六里ケ原を横切つた日も、數日前奥の方へ熊が出たといつて鐵砲をかついだ男が別去の茶屋に腰を卸してゐるのを見ました。

このごろはあまり熊の話も聞かなくなりましたが、山に來て熊の話を聞かないとちよつと寂しいやうな氣もします。

日本の土と人と言葉

わたくしはこのころアンドレエフが大戰中の或るペトログラードの氣の弱い勤め人の生活について描いた小說を讀んだ。英譯の題は "Confession of a little man during great day" となつてゐる。筋は一人の下級の勤め人の妻、妻の母、二人の子供、勤め人自身を含む家庭の出來事を日誌體につゞつたものである。妻の弟が戰地で死ぬ。先づ悲慘な暗い影が一家をつゝみ初める。妻は夜晝の差別なく戰傷者の看護に病院に出かけてゐる。家では子供の面倒を見てやる人もない。そのうちに一人の子は急死する。主人公が勤めてゐる店が急に破產したゝめに主人公は職を失ふ。それでも妻を失望させるのが辛さに朝になれば社にゆくのだといつて出かける。夕方になれば社から歸つた振りをして家にもどる。失職の果は川に身を投げて死ぬつもりで暗い橋の上に立つ。しかしいざとなると氣おくれがして死ぬこともできない。たうとう一切を妻に打ち明ける。案外にも妻は雄々しい心を持つてゐた。妻は今まで病院で無給で働いてゐたのを有給にしてもらつてその金で一家を支へる。こゝで主人公がいかに心からその妻に賴つて行つたか。ちよつと日本人には想像がつかないほどロシヤ人は女に對して弱い。弱いといつただけでは言ひつくせないが、ともかく弱い人間となつて女にあまえる。女の膝に凭れかゝつてうれし泣きに泣くといつた風なことが描かれてゐる。

かういつた男の心理はやはりアンドレエフの「毆られる彼」の主人公にも見出すことができるが、これはアンドレエフばかりではない。ドストエフスキイの「虐げられし人々」を讀んだ時もわたくしはロシヤの男が自分を捨てた女にいつまでも纏綿の情を寄せるばかりか、蔭になり日向になつてその女のために盡してゐるのを見てほとんどわれわれ日本人には想像もつかないことだと思つたことがあつた。(尤も昔から日本人の間にもそんな例もあるにはあつた

であらう。」アンドレエフを讀んで見るとやはり「虐げられし人々」に於いて感じたと同じさういつた男の性格が眼につく。女に毆られる、毆られても毆られてもよろこぶ。女にいたはられる、いたはらるればいたはらるゝほど弱くなつて女にすがつてゆく心理。この心持ちはどこの國にもあるにはあるが氣のいゝロシヤ人には殊にその傾向が多いのではあるまいか。

これはたまたまアンドレエフの作を讀んでゐてかつて懷いてゐた感じを再び新たにした一つであるが、さらにロシヤ人の作を讀んでゐていつも考へてゐたロシヤといふ祖國に對するロシヤ人の愛の强さについてわたくしは一層感慨深くさせられた。

international といふ言葉がソヴィエット・ロシヤのこのごろの流行語のやうにも考へられるが、作品を讀んでゐると實はロシヤ人くらゐお國自慢をする民族は他にないやうにも思はれる。どんな苛政が行はれやうともロシヤ人にとつてロシヤくらゐ愛すべき鄕土は世界のどこにもないのである。暗い空、寒い地、いつも自然の冷たい手に虐げられてゐるやうな大ロシヤといふマザア・ランドはロシヤ人にとつていとしい愛人であり、母の懷であり、魂の巢である。

ロシヤ！　ロシヤ！　ドストエフスキイもアンドレエフもゴーゴリもその灰色の空の下の母國に對して呼びかけることを忘れない。

メレジユコフスキイの「ピイターとアレキシス」を讀むと、イタリイの外交官仲間の會合で、ロシヤの公使が最末席に坐らせられてゐることが書いてある。それからロシヤは非常に寒い國で、冬になれば川を隔てゝ聲をかけてゐると聲が途中で凍つてしまつて向ふ岸まで屆かず川の中に沈んでしまう。春になつて川の水が流れはじめると川の中から冬中凍つてゐたその聲が解けて來るので急に川の底から「馬を賣つてくれ！」といふやうな聲が聞え出して來る。それは冬ロシヤまで馬を買ひに行つた外國人たちが川の此岸に立つて彼岸に向つて怒鳴つてゐた聲だといふ話などを

眞面目な顏で當時のヨーロッパの外交官たちが語り合つてゐることを書いてある。恐らく三百年以前のロシヤはどこまでも歐洲人には半開の野人の地としか考へられなかつたであらう。しかしロシヤに對する歐洲人のこの種のさげすみは今日迄なほつづいてゐるにちがひない。ロシヤは歐洲にありながら、いつも歐洲人の仲間はづれにされた傾向がある。いつも寂しい顏をしてたゞ一人で木の下にぽつねんと立つて、嬉戲する幸福な多勢の子供たちを眺めてゐるやうな暗さがある。

それだけにロシヤ人はこの不幸なさげすまれがちな母國に對して一層のいとしさを感じてゐる。ゴーゴリのものを讀んでも、ドストエフスキイのものを讀んでも、ツルゲネーフのものを讀んでもよくこの心持ちがわかる。アンドレエフの作を讀んでわたくしはさらにこの感を新たにしたのであつた。かれらはたとへ世界中の嫌はれものになつても、どんなにロシヤが自然に惠まれなくても、愛すべき母國を持つてゐるのである。歸りゆくべきあたゝかな巢を持つてゐるのである。

この點に於いてわたくしたちはやゝ羨ましい感じがする。

日本人はなるほど國を愛するといふ。しかしその愛國はいかにも軍閥者たちに利用されさうな愛し方である。ロシヤ人がそのトロイカに、その廣漠たる草原に、ウオルガ河に、ロシヤ人そのものに、その祖先の言葉に、その黑い土に、灰色の空、倦怠い地平線に對して抱いてゐる愛、わたくしはこのやうな祖國の愛し方をなつかしく思ふ。

このごろ東京の町を歩いて一番强く感じることは浮薄な現代化である。アメリカ化である。よく外國から歸つて來た人たちは二三年のうちにアメリカをたゝへ、英吉利をたゝへ、フランスを、獨逸を伊太利をたゝへる。結構なことである。お互、小まつちやくれた日本人に對して愛憎が盡きることがある。

しかし日本の土に對して、山に對して、この小ひさな小悧巧な人間に對してなほ愛すべき幾多のものが潛んでゐる

ことを見のがしてはならぬ。わたくしは、ロシヤ人でなく、フランス人でもアメリカ人でもなかつたことをありがたいと思ふ。わたくしは日本人であることをかたじけなく思ふ。

ロシヤ人はロシヤ人を愛することによつて、ロシヤの土を愛することによつてロシヤのすぐれた文學を生んだ。

自分らの母國の土を愛することによつて、母國の言葉を愛することによつて、母國の同胞を尊敬することによつて、われ／＼の力強い新らしい藝術が生まれなければならぬ。

アンドレエフの同じ作を讀むことによつてわたくしがふたゝび感を新たにしたことは「苦惱とその救ひ」といふ問題である。アンドレエフはその作の最後に主人公をして「苦惱は世界的である。手は互に伸ばされてゐる。しかし二つの手はまだ握り合ふことはできない。」と言はしめてゐる。かれはアルメニヤに於ける悲慘な虐殺について語る。死骸は山と積まれた。就中人をして面を掩はしめずには置かないところの大虐殺の一光景は、木に倒さに吊されて全面血にまみれつゝ死んで行つた母と、かの女の嬰兒の泣き聲である。母は樹上に吊されて死につゝも嬰兒の方へ手を伸ばしてゐた。嬰兒は樹上の母の方へ手を伸ばしつゝ死んで行つた。いつ地上の嬰兒の手と天上の母の伸ばされたる手は握り合ふことができるか。この二つの手は何時かは握り合はなければならぬ。その刹那に救ひは生まれるであらう。ながい時代を通じてロシヤ人はこの二つの手を結びつけんがために苦しんだ。メレジュコフスキイの神人と人間神との結合もそれであると見ることができよう。

いつかは地上の嬰兒と樹に吊された母との苦惱は救はれなければならぬ。かれらはそれを信じてゐる。かれらは今そのめぐまれたる日を見ることはできない、苦惱のまゝに死んでゆく。かれらは運命の前にはたゞ小ひさな一細胞であるにすぎないことを諦めてゐる。「一細胞としてわたくしは生きてゐた、一細胞としてわたくしは死なねばならぬ。た

だ運命に對してわたくしが冀ふことはわたくしの苦惱、わたくしの死が無駄でなからんことである。わたくしはこの二つを靜かに受け容れる。」

わたくしたちはゴルキイの「夜の宿」の老順禮と死にゆく若いアンナとの會話に於いてもこれと同じ忍從者の敬虔さを見出すことができる。次の世界には苦惱はない。苦惱は現世のみのものである。それならばせめてさらに現世の苦しみを經驗したいから生きのびてゐたいといふのが死にゆく女の祈りであつた。かの女は苦惱そのもののために生きてゐたいといふのである。イブセンが「鴨」に於いて「人生は幸福のために存在してゐるものではない」と喝破してゐるのと好一對の強い言葉である。賴もしい言葉である。

苦しきがゆゑに生きる。惱みあるがゆゑに生きる。いつかはこの地上からこの惱みが取りのぞかれなければならぬ。わたくしたちはその日を見ないで死ぬ。しかしながらその日は來なければならぬ。幾千萬の、忍從の中に滅びて行つた一つ一つの細胞の尊い苦惱！

アンドレエフが描いたたゞ氣の弱い意氣地なしのサラリーマンであるところの人類の一細胞がびくびくと痙攣しつつ生きてゐるみじめな人生の相。そこに「來れ、さあ一緒に手を握らう！」といふ弱きがゆゑに強き人間的ないたましい叫びがある。尊い光りが隱されてゐる。

「ちやうど夢の中で見るやうな心でわたしは秋の田舍道を見ることができた。農夫の家では火がまたゝいてゐた。一人の農夫は馬車の上に乘つてゐた。その馬すらがわたくしにはなつかしかつた。」ロシヤ人たちはその田舍道を通して、そのみすぼらしい馬車を通してロシヤを愛することを知つてゐた。

たとへどのやうにロシヤの社會制度が變つて行かうともロシヤの土を愛し、ロシヤの馬橇の鈴の音を愛し、ロシヤ

そのものを愛するロシヤ人の心が變ることはありえない。さらに苦惱から苦惱へとあきらめつゝ生きてゆくその根強い生活力も亦。

やゝもすれば日本の言葉を愛することを知らない浮薄な流行、日本の言葉に對して親切な研究をすることすらも忘れようとしてゐる人たちに對し、幸福を人生の目的のすべてゞあるかのやうに考へてゐる人々に對して、ロシヤの文學はいろ〳〵な暗示をあたへてくれる。

無智のやうに見える日本人、無作法のやうに見える日本人、そこにも日本人でなくては持たない光りがあるにちがひない。お互にもすこし日本の土と日本の人間と日本の言葉とを知らなければならぬ。

日本橋から直ぐアメリカに水がつゞいてゐることは日本にとつてあまりうれしいことではない。

內面の世界に生きて

一人の人間が生まれて來る。と、いふたゞそれだけの事實はきはめて何でもないことのやうにも思はれるが、實はこれほど嚴かな事實はない。一人の人間が今生きてゐる。生きつゝありといふ事實は、すでにそのことだけでこの上もなく嚴かな事實である。

わたくしたちは今現に生きてゐる。そして生存者が內的に持つことのできるあらゆる特權を賦へられてゐる。人生の喜び、憂ひ、悲しみ、苦しみ、あこがれ、すべてを經驗してゐる。それらの生存者の特權も亦この上もなき嚴かな事實である。

文學は、或ひはすべての藝術はこれらの人間の生存、これらの人間生活の內的な特權をば最も嚴かな事實として取り扱つて行くところから生まれて來る。言ひ換ふればすべての藝術は人生のすべてを尊しとして受け容れ、人生に存在する尊きものゝ片鱗をも見遁さないことを思念してゐる。

われ〳〵は藝術的生活といふ。その意味は、人生に於けるすべてをそのまゝに善しとして受け容るゝところの生活方法である。眞の人生の相をその根本義に於いて見分ける生き方である。底に徹して人生の相を凝視せんとする生き方である。念々刻々生活の眞の相を凝視することから、われ〳〵の思惟を忘れないことである。

生きてゐることはうれしいことである。その生存のうれしさの底に徹して人生を觀る時、わたくしたちはたしかに、かすかではあるが、人生の深さについて、無限さについて、ありがたさについて、一種の宗教的な感激を見出すにちがひない。

この心の境地からトルストイの藝術が生まれ、良寬和尚の生活が生まれる。

また一面から考へて、生きてゐることは寂しいことである。賴りないことである。その寂寞、その賴りなさの底に徹して人生を思惟する時、人生の悠久、人生のかたじけなさについて宗教的な感激を見出すにちがひない。この境地から西行の生活が生まれ、芭蕉や近松の藝術が生まれる。

われ〳〵は或る種の樂天家たちのやうに人生をたゞ光明遍照の世界とのみ見ることはできない。また或る種の厭世家たちのやうに人生は老病死苦のみに滿たされてゐるものと見ることもできない。

正直に、僞らず人生を感ずる人であるならば、そこに太陽の光りのよろこびとともに親の死あり、妻子の死あり、友人の死あることを認めないではをれぬ筈だ。むしろ人生にはあまりに多くの悲しみがあり、苦惱があり過ぎる。藝術は光明とともに暗黒を、怡樂とともに苦惱をそのまゝに受け容れ、そのまゝに尊しとし、ありがたしとするものである。

善はめぐまれてあれ、惡も亦めぐまれてあれ。悲しまれてあれ。

善はたゞ人間の世界にのみ存在する。惡も亦人間の世界にのみ存在する。善も惡も人間的なれば尊し。

人は善によつて救はれるであらう。しかしもし善のみによつて救はれなければならぬとしたら、はたして一人の人間でも救はれるであらうか。

人は惡によつてもなほ救はれなければならぬ。古來の宗教はことごとく惡人のための宗教であつた。法然の宗教、親鸞の宗教、キリストの宗教みな惡人のための宗教であつた。

人を憤らぬ人間がありえようか、女を見て思慕の情を感じない人間がありえようか。人を僞らぬ人間がありえようか。人を憤るがゆゑに人間である。人を思慕するがゆゑに人間である。

このやうな人間にも救ひの道はなければならぬ。昔は宗教はわれ〳〵凡夫のために救ひの道を指さしてくれた。今日の藝術はかつて宗教がわれ〳〵のためにつとめてくれた仕事を宗教にかはつてつとめてくれる。

藝術は凡夫の救ひである。下根の淨土である。

藝術は「惡の花」のなかにかすかに閃く悠久の光りを見出した。人間は本來「惡」そのものであるかも知れない。けれども「惡の花」の蘂に絡みついてゐる、あまりに人間的なものゝ美しさ、あはれさ、尊さは、たゞ人間のみが持つてゐる。近代の藝術は、これらの「惡の花」の蘂に絡む、人間的なものゝ尊さを收穫することを、究竟の理想としてゐる。

わたくしはふたゝび藝術的生活といふ。われ〳〵凡夫下根の生活の底に徹してこれらの人間的な尊さ、あはれさを刹那々々の人間生活の裡から見出し、味識することによつて、人間として生きつゝあることを心からありがたく感じるのが藝術的生活である。

そも〳〵人間として生まれて來たといふその一事實はこの上もない尊い機緣でなければならぬ。わたくしたちが親を持ち、子を持ち、友を持つといふこと、見知らぬ人々と相接してはそこにいろ〳〵な人間的な愛憎、思慕、苦煩の情に躍り、惱み、憂ふといふことも人間なればこそめぐまれたるところの機緣である。

人生とは何であるか。これらの人間的な愛憎、思慕、苦煩の底に潛みて人間であることのありがたさ、わびしさを切々と魂に感じることではないか。

一本の草の葉のそよぎにも意義はある。黎明の湖面を吹く微風にも神の聲はかくされてゐる。無限なる深さと、無限なる或るものを祕めてゐる人間生活の一つ〳〵のあらはれの根諦に諦して、これこそ眞の人間の相であり、これこそ

人間そのものであり、人生そのものであるといふ悠久のものを掴むことができたとしたら、われ〱は生きてゐる者の幸福を感謝しないではをれぬ。

哲學も宗教も藝術も齊しくこの境地を目ざして歩いてゐる。

しかしわれ〱の智慧でその境地に達することができるか、或ひはこの企ては絶望に終るかも知れない。けれどもわれ〱はたゞ刹那的に、片鱗的には人生の眞の相(すがた)について實感することができる。恐らく哲學にせよ、宗教にせよ、藝術にせよ、たゞ刹那的に片鱗的に悠久そのものゝ閃きを味識することを究竟の目的として自らを慰めなければなるまい。われ〱はそれだけで滿足すべきであると思ふ。人間の智慧の觸手(しよくしゆ)をもつて觸るゝには天はあまりに高い、人生そのものはあまりに深い。

たゞしかし、片鱗といひ、刹那といへばいかにも限られたものゝやうに考へられるが、實は刹那のなかに永遠の影があり、片鱗のなかに全一の姿が象徴せられてゐる。われ〱はその個を感じることによつて、その全を感ずることができる。

世の中には世間的に、いろ〱な華かな仕事をしてゐる人もある。しかしこれらの人々は概ね内的な生活を忘れてゐる。その人の生活が幸福であり、明るく、順調であればあるほど、かれの生活は上滑りになり易く、その底に潜むことを忘れがちである。かれはたゞ空虚な人生のみを生きてゐる。

一生何事も成しえないで終る人がある。しかし、かれの内面的生活が豊かであるならば、すなはちかれが人間生活の底に潜んでゐる人生の相について靜かに考へ、靜かに味識することがあるならば、かれは決して人生を無駄に生きたといふことはできない。

かれは何事をも成就しえなかつた。しかしかれは一生自己について考へた。人生について考へた。內面的生活に於いて惱んだ。かくのごとき人間は尊敬せらるべきである。

今の世の中ではあまりに外的な仕事、世間的な仕事に思ひを走らせ過ぎる人が多い。或る程度までそれも必要である。しかし外的な仕事、世間的な仕事が完きものとなるためには、その人の世間的な仕事に光りが添ふためには、かれは先づ靜かに內面の世界を觀ることをしなければならぬ。

內に溢るゝほどのものが湛へられた時、外にあらはれて來る仕事に無理がなくなる。內に漲るほどの光明が藏された時、外にあらはれたその人の仕事に尊敬せらるべき自然さが伴うて來る。人格の甘味、人格の濕ひといふのは畢竟これらの內に湛へられた力でなければならぬ。內に貯へられた力があまるほどになつた時、ひとりでに外に溢れて來るその自然さを持つた仕事でなければ尊敬されることはない。

人は社會的に仕事をしなければならぬ。しかし仕事とは形而下のものばかりではない。形而上のものもさらに尊い仕事でなければならぬ。

一生一本の草をも植ゑなかつた男があるかも知れぬ。しかしかれがもし一生人生について靜かに思惟し、靜かに思念したとするならば、かれも亦尊敬せらるべきである。

二十年の間ベッドの上に靜思しつゝ仰臥したまゝ死んで行つたオブローモフは氣の毒な男である。しかしわれ〳〵はかれの親切な心と正直な心とを尊敬しないではをれぬ。

われ〳〵は生きてゆかねばならぬ。社會的に起きて働かねばならぬ。しかしそれと同時に生きてゆくことの意義、起きて働くことの意義、人間であり、凡夫下根であることのありがたさ、わびしさを心から感じつゝ生きてゆくことを知らなければならぬ。

雨

六月二十六日ひどい雨の午後わたくしは兩國驛にかけつけて千葉行きの汽車に乘つた。十年前の出來事である。二十六、七、八日と或る時はかつと日が照り、或る時は驟雨が襲つて來た。

千葉の衞戍病院の一室に咽喉を突いたTはむし暑い日を苦しんでゐたのであつた。

わたくしは六月になれば殊にかれの自殺を思ふ。いつもそのころになれば梅雨の日がつゞくので一層寂しい心を喚び起して來る。

あのころはまだわたくしの近所の森に鳥が啼いてゐた。Tが自殺した日は殊にたくさんの鳥がさわがしく前の椎の木立の中で鳴いてゐた。

麥は刈られ、南瓜の花が咲き、月見草が雨上りの日の光りを浴びてゐた。

雲雀が高鳴きしてゐた。

わたくしはTが自殺をする前日まで滯在してゐた稻毛の海岸の松林の中の或る旅館をたづねて見た。紫陽花が咲いてゐた。Tが讀み捨てゝ置いた新聞紙や雜誌もそのまゝになつてゐた。

稻毛海岸から步兵學校の裏の農家——そこにかれは宿をとつてゐた——までの道は滅多に人も通らなかつたので、二三日前に步いた人の下駄の齒跡がそのまゝにのこつてゐた。わたくしは下駄の齒跡を拾うて步いた。恐らくそれはTの下駄の齒跡であつたであらう。

地は憂鬱であつた。涯までも涯までも平原の中を一直線につらなつた鐵道線路がわたくしの憂鬱な心をさらに遠く

運んで行つた。
人間といものは自分ながらあさましいと思ふが、日が經つにつれて、ともすれば過去の悲しい思ひ出をすら忘れがちになつて來る。
しかしそのころの季節がよみがへつて來ると不思議にも忘れかけてゐた悲しみがよみがへつて來る。季節がめぐつて來れば忘れられてゐた花が枯木枯枝の間から頭をもたげて來るやうに、人の心の中に忘れられてゐた過去といふ物が一年の中の或る季節になればふたゝびよみがへつて來る。
麥が刈られ、紫陽花が咲き、雲雀が高鳴きする初夏の季節がめぐつて來た。と、同時にわたくしの胸にもあの日、あのころがよみがへつて來る。
あの日もひどい雨であつた。
千葉のステーションから丘の上の衞戍病院まで行き着くまでにわたくしはびしよ濡れになつた。暗い夜であつた。
このころの雨を聽くにつれてわたくしの胸にはTの自殺の日がよみがへつて來る。
紫陽花の打ち沈んだ靜かな色
刈りとられた後の麥畑のさびしい曠がり
空に黜影を投げかける雲雀
わたくしはそれから十年生きのびてゐることになる。

惠まれたる者

人間が人間であるかぎりは相應の所有欲を持つことも自然であらう。わたくしは震災の最中に住むべき家を探さなければならなかつた時、あたかも放浪者のやうに日暮れた町を妻と二人で雨に濡れつゝ歩きながら、つくづく巣を持たぬ者の悲しみを味はゝせられた。

どんな小ひさな家でもいゝから、あのやうな災難の最中に、誰にも追ひ出されないだけに、自分の家として一つの巣を持ちたいと思はないことはなかつた。

もしあの時、自分の家といふものがあつたなら、わたくしたちはあれほど苦しまなくつても、辛い目を見なくつてもよかつた筈である。

一方では、行方不明になつた妻の母を探さなければならなかつたし、一方では住むべき家を見出さなければならなかつたし、雨に濡れたまゝわたくしたちは燒け滅びた街に立つて、幾度絶望の溜息を吐いたか知れない。

わたくしは自分の藏書も妻の着物も庭に出して燃してしまはうかとすら思つたこともあつた。自分等の軀だけなら、わたくしたちはその日からでも旅に出ることができたからであつた。

わたくしたちは二十日ばかりの間に二度引つ越しをしなければならなかつた。わたくしはそのたんびに荷物といふものゝ厄介になやまされた。

最小限度のネセシテイの上に生きて行くといふことは賢いことである。わたくしはつくづくさう思はずにはをれなかつた。わたくしたちの家には見る影もないものではあつたが三つの机があつた。わたくしはその一つを捨てた。し

かしまだ二つの机がある。わたくしは一つの机だけあれば充分な筈だが、まだ一つを捨てかねてゐる。
わたくしは三つの椅子を持つてゐた。椅子だけは三つとも捨てた。しかしまた新たに一つの椅子を借りて來た。
わたくしはすべての藏書をすら燒いてしまはうと思つたこともあつたが、二三日前本郷の通りを步いた時、新しく二册の本を購めて來た。
何も彼も捨てた方がいゝ、何も持たない方がと考へながらも、同時にわたくしは何物かを所有しようとつとめてゐる。愚なことだ。
繪なんか持たない方がいゝ。繪を見たいと思つたら博物館にでも行つて見ることだとも考へたが、夜店を步いてゐると版畫でも買つて歸りたくなつて來る。
わたくしはこの矛盾を、矛盾として放り出して置いていゝとは思はない。何も所有してはならぬ。わたくしはわたくしの心にかう命ずる。はたして、いつ、わたくしの心が素直にこの言葉を聽くやうになるだらう!
あの九月一日、二日、三日ころの燒跡を步いた人は、誰でも生きてさへゐればそれでたくさんだといふ感じを抱いたであらう。生きてゐることのいかにありがたいことであるかを感じたであらう。
兩國の袂や、吉原の池や、被服廠の跡に燒けたゞれた死骸の山を見た刹那に、恐らく泣かないものはなかつたであらう。同時に生きることの價値のいかに限りもなく貴いかといふことを知つたであらう。
濡れたボール紙を足に結びつけて穿き物の代りにして灰のなかを步いてゐた女たちでも「生きてあればこそ」といふ感激に充たされたであらう。
誰れもかれもが親切であつた。一時所有欲を忘れた人々はお互に生きつゝあることの喜びの淚を分ち合ふことができたのであつた。

四日五日となつて雨が降つて來た。人々は急に寒さと飢とに脅かされた。人々は生きるために必要な衣と食と家とを持たなければならなかつた。

人々は自分を生かしてゆくために食をあさらなければならなかつた。まだそこには美しい相互扶助の心が動いてゐた。電燈もつかない暗いバラックの中に、妻子を失つたたゞ一人の男が呻きつゝある時、かれの枕頭には隣人によつての蠟燭が點され、慰めの言葉がそゝがれてゐた。バラック内の生活者の間には同勞者といふ意識が美しく動いてゐた。

人は何物をも持たないうちの方が、却つて隣人に對する思ひやりをも持ち、眞劍な同情をも持つことができるやうである。わたくしが行つた龜戸の救護所に集まつて來てゐた人々はたいてい本所や深川の貧民窟か或ひはその近くの人々であつた。かれ等はわづかに五六枚の鹽煎餅をも同室の人々に分け合つてゐた。

兎も角食ふことに對して、着ることに對して、幾分の餘裕を持つやうになつた時、人は却つて利己的となり、貪るやうになる。

一つの嚢と、一つの杖のみを持つて生きてゆくといふことは何時の時代に於いても最もいゝ生き方であるやうに思ふ。キリストの弟子も、然かすることを誡へられた。芭蕉も一嚢一笠の生き方をした。

必要以上の物を所有する時、人は更に新らしく必要以上の或る物を貪らうとする。

芭蕉が何故にあのやうな枯淡な生活の中に生きてゐたか、わたくしは今度の震災に逢つて一層よく芭蕉のあの心持ちが分つたやうな氣がする。

人間の行爲は概念的な思想や、哲學から動かされることは割合にすくない。むしろ偶發的な現實的事件から動かされることが多い。

芭蕉でなくとも、あの恐ろしい、むごたらしい震災や大火災に逢つた人は、一度は屹度芭蕉のやうな氣にならない

ではをらぬであらう。あの恐ろしい刹那の心を突きつめて人生を見るか、或ひはあの恐ろしい刹那の心を忘れるかによつて、或る者は靈的に救はれ、或る者は再び物欲の念に自分の生涯を汚してしまうかになるのであらう。

何物をも持たないで逃ぐる人は救はれるといふことは、震災の場合のみでなく、人生そのものに於いての事實でなくてはならぬ。

商業といふものがなかつたら、今日の都市は成立しないかも知れぬが、わたくしは他人の勞力を奪ふやうな今日の商業制度にはどうしても賛成することはできない。この考へは今度の災害に際して一層痛切に感じないではをれなくなつた。或る種の人々は必要以上の富を積まんがためにこの機會を利用することに夢中になつてゐる。やがて必要以上の富を作るべく、人間の心を失つたやうな行爲を敢てしてゐる。

わたくしたちはこの前代未聞の大震災によつて、いかに一嚢一笠の生活の尊きかを敎へられた筈である。しかもかれ等は再び空虛な見榮と貪欲のために眞人間の心を失つてゐる。わたくしは今日の銀行業者、保險業者、企業家、所謂手腕ある商業家といふやうな種類の人間を極度に輕蔑しないではをれない。

今はすべての人間が、亡びたる過去の都のために、亡びたる幾萬の人々のために瞑默して祈るべき時だ。心を淨くして隣人のために墓場を作らなければならぬ時だ。それが生存の喜びを賦へられたわたくしたちの第一の仕事でなければならぬ。

かれ等はさらに來るべき大震災の日、燃やさるべき必要以上の物を積まんがために自分の魂を滅ぼしつゝあるのだ。笑ふべく、輕蔑すべく、憎むべきすべての企業者よ、勞力の搾取者たちよ。

私の一友人Hは日本橋の眞中で家も家財もすつかり燒かれてしまつたが、かれは逃ぐる時、三階の窓に掛けてあつた二つの鳥籠だけを抱いて出た。そして山の手の森に着いた時はじめて籠から小鳥を逃がしてやつた。

「山の手なら逃がしても殺すやうなことはあるまいと思つたので……」とかれは語つた。

わたくしはこの若い友人の心をほんたうに尊く思つた。

わたくしは夕方、麴町三丁目から英國大使館の前を歩いてゐた。四十を越した品のいゝ婦人が夕刊を持つて立つてゐた。かの女は「夕刊」といふ呼賣の聲を立てることもできないのであつた。

わたくしはぢつとかの女を見た。あはれな罹災者の一人であることは直ぐに感じられた。

わたくしはかの女の前に立つた。

しかしかの女が持つてゐた夕刊はすでにわたくしが讀んだものばかりであつた。

「他にはありませんか？」

「これだけでございます。」

かの女の顏にはあり〳〵と失望の色が動いた。わたくしはこの氣の毒な女を失望させるに忍びなかつた。

「では、これとこれとこれを下さい。」

女は寂しさうに笑つた。

わたくしはすでに讀み終つた夕刊を、再び拾ひ讀みしながら濠端に沿うて歩いてゐた。

神田佐久間町の一劃は殆んど奇蹟的に燃え殘つた。日本橋の住友銀行も燒け殘つた。

わたくしは佐久間町に川上といふ熱心なクリスチャンのお醫者さまが住んでゐて、あの火事の最中に、神の言葉によつて人々にすべての物を捨つることを教へたことや、あの町中の人たちが女子供に至るまで死力をつくして火を防いだことを聽いた。住友銀行が燒け殘つたことについても死力を盡したる數人の行員があつたことが傳へられた。人間の精神力があれほどの恐ろしい自然の暴力に對してすら勝利を贏ち得たことは、わたくしたちの心に非常な勇氣を與へる。

わたくしたちは家を持たなかつたがために、あの悲しみの最中に家を追はれたことを運命に對して感謝せずにはをれない。

すべての家を失つた人々と一緒に、わたくしと妻は毎日疲れ疲れて夕暮の道を歩かなければならなかつたが、悲しみを持つた人々と一緒に悲しみを分ちつゝ歩くことのできた數日は、わたくしたちにとつて最も惠まれた日であつた。家を持たず、巢を持たず、わたくしたちはたゞ靑空の下を歩きに歩いた。

裏伊豆から

住むならば伊豆に住みたい。そして世間といふものから遠ざかつてしまひたい。

わたくしは伊豆に來るたんびにさう思ふ。

今、伊豆の山には恰度梅が咲いてゐる。川の縁や、畑の隅には紅い椿が咲いてゐる。寂しい山の多い國だけに、燃えるやうな椿の花が目立つて可憐な感じを湧かさせる。

蜜柑畑の多い表伊豆は何となしに海の色までが温かな感じを與へるが、裏伊豆の人煙稀な冬枯れの野には死のやうな郷愁が漂うてゐる。

裏天城の雪が消えがてに雲の上に連なつてゐるのを見るのも旅らしい哀愁を湧かさせる。狩野川の兩岸には黑い土の桑畑が、幾重にも迫つた山と山との間を縫うてゐる。黑い桑畑の間を下田行きの白い縣道がうねりうねつてゐるのも寂しい。

わたくしは修善寺から桂川、狩野川に沿うて大仁の町まで菓子を買ひに歩いて行くことがあるが、桂川と狩野川の合流點の月見ヶ丘あたりからは、富士の眞つ白な姿が裾野まで一面に見渡せる。あの銀のやうな美しい山の肌を蹴るやうに吹きつのつて行く嵐の脚が、やがて山に打つ突かつては眞白な煙のごとく碎けて行く物凄い光景が、そのあたりからはつきりと見出される。

伊豆の山から伐り出された木材が大仁の町に集められて、そこから汽車で方々に運ばれるのであらう。大仁の町には新らしい木の香りがいつも漂うてゐる。

往きに狩野川の右岸を通つた時は、わたくしは還りには左岸を通つて修善寺に歸つて來るやうにする。ちよつと道の感じに變化があつて面白いからである。そこいらには板を挽き割る水車小屋がある。また古風な渡し舟もある。わたくしはよく狩野川の附近で、伊東や下田あたりから天城を越えて來た猿曳などに出逢ふことがある。黒い土、冬枯れの山國の單調な縣道で、眞つ赤なちやん〳〵衣を着た小猿を見るのは、何となく春めいた氣がする。小猿は猿曳の背から下りて、先に立つて縣道を歩いてゐることもある。猿も、猿曳ももくもくと口を動かして、何か頰張つてゐることもある。

狩野川ではよく情死の話を聽かされた。美しい流れであるが、廣くて周圍に荒寥たる山の多いせいか、易水寒しといふやうな感じがしてならぬ。

村外れの畑地などに大きな笹を樹てゝ、それに大きな達磨だの、赤い紙などを吊したものが何處の村にも見られるが、正月の十四日の未明には村の子供たちが火を焚いて、燒いてしまふものであるが、笹竹そのものは七夕祭に似て何となくわびしいものである。

正月が近づいたせいであらう、大仁から來る馬車も、來る馬車も都會人らしい客を運んで來る。

しかし何時見ても、溫泉地の客といふものは何となく頼りない感じを喚び起させるものである。

一つの溫泉場から、一つの溫泉場へと病を養つて歩く蒼白い顏色の人たちを見れば、まつたく人生の落莫たる世界をのみ思ふ。

戰爭で負傷をしたのが原因で幾年となく溫泉場廻りをしてゐる男、たゞ一人の病弱な若い娘を連れて溫泉場を歩いてゐる母親、不治の病を抱いて死場所を探して歩いてゐるやうな青年……このやうな種類の不幸な人たちが、この寂しい裏伊豆の湯の町を訪ねては、數日の後、ふたゝび何處へか去つてしまふ。

狩野川から岐れて桂川に沿うて修善寺の谿にはいらうとすれば、旅人は先づ山の上の白い教會堂を見る。小ひさな禮拜堂であるが、枯れはてた山の上に眞つ白な尖塔を見出すといふことは、旅人にとつていひやうもなき慰めである。谿川の淙々たる音や小鳥の聲が何處からともなく絶えずつたはつて來る。

わたくしは大抵日中は附近の山を歩くことにしてゐる。城山に登つたり、大芝山に行つたり、時としては狩野川の吊橋をわたつてお萬の方がわびずまひしてゐたといふ妙國寺などへ出かけて行く。須彌壇の前にぬかづいて、榛の葉を投げては禍福を卜つてゐる人たちと一緒に、わたくしも暗い御像の前に跪くこともある。

東京近在の人たちのやうに人擦れがしてゐないだけに、道をたづねても、道づれになつて話しかけても、ゆつたりした田舍人らしい氣持ちになることができる。

女郎上りのおかみさんは寒い川風に吹かれながら橋錢を取つてゐる。

わたくしは大芝山の嶺の一本松の下に行つて、小半日枯れ草の中に寢ころんでゐることもある。草枕を外してちよつと頭を上ぐれば、富士から中央山脈の雪の連亙が、淺葱色の冬空を背景として大空に浮かんでゐる。その山脈の涯がかすかに海のなかに蒼茫として滅えてゐる。

一本松の下には修善寺に通ふ山徑が一筋通つてゐるので、一日に幾人かの女や、少年配達夫などが口笛を吹いて山の裾から上つて來ることがある。

わたくしが草のなかに寢ころんでゐるのを見れば、屹度挨拶をして通る。こんなところでは誰でも人間はほんたう

に兄弟のやうな心持ちになれるものだといふ感じがする。

一本松の下にはお地藏樣があつて、そこには竹の花筒と水筒とがある。水筒には山の麓の寺の坊さんの名で（この山を往き來する人は、往きにこの水筒を下げて谿の水を掬んで、歸りに水を運んで來てお地藏樣に御水を供へてくれ）といふやうなことが書いてある。

わたくしは修善寺に來るたんびに、この一本松の下に來て、この水筒の文字を讀んで、ほんたうに有難いといふやうな心持ちになる。

都會地ではやゝもすれば、宗教の存在さへ疑はれる今日、この山の中にこのやうなありがい宗教の心が生きてゐるかと思ふと、一度播かれた種子は屹度何處かで芽生えしてゐるといふやうな心强さを感じないでは居れない。

修禪寺の若い坊さんたちには感じの宜い人が多い。

この寒い日に暗い御堂のなかで板の間に坐つて經を讀んだり、太鼓を叩いたりしてゐる雛僧たちの素足は尊いやうな感じがする。

わたくしは修禪寺の鐘の音が好きである。鐘を撞いてゐる雛僧たちを見るのが好きである。黃昏ころ、黑い衣の雛僧が撞木の綱を握つて、鐘の下に立つてゐる姿は何といふ寂しさであらう。尊さであらう。

庫裏の方では雛僧たちが衣の袖をたくし上げて、しきりと齋の物をこしらへてゐる。いかにも禪寺らしい簡素な感じがする。

賴家や範賴の墓を見るたんびに、死者の魂を尊敬することを知らぬ人々の心がうとましくなつて來る。

輪塔の一つ〱を持ち上げては吉凶を占つてゐる無智な顏の男女を見れば腹立たしい氣もする。

賴家が馴染んだ修善寺の女は菓子屋の娘であつたとかいふことを聽いた。その子孫がまだこの町にゐるといふやうなことも聽いたが、しかしそれもどんなものであらう。

修善寺の町を貫いて流れてゐる桂川のほとりを歩いてゐると、よく左團次の夜叉王を想ひ出すことがある。

川には黑い岩の上に鶺鴒がとまつてゐる。岩燕が靑い淵をかすめて翔んでゐる。

少し湯の町を外れると燈心草などが流れに沿うて繁つてゐる。

遠い山の雪をながむればいかにも寒さうだが、伊豆の谿間には春が來たやうな感じがするところが多い。

脊の低い、毛の深い馬が突然山から下りて來ることもある。山の娘たちは上氣したやうな顏をして溫かい太陽の光りを浴びながら、湯の町から山の方へ二三人四五人づゝ群をつくつて歸つて行く。

わたくしはその若い素朴な女たちを見るたんびに「幸福な人々よ」と呼びたくなることさへある。その人たちの明るい顏を見るたんびに都會といふ空氣に痛められつゞけて來た自分の冷たい心がいぢらしくなつて來る。

修善寺の町にも去年は悲しい情死があつた。桂川に臨んだ溫泉宿の二階で田舍の豪家の息子と看護婦とが、毒を仰いで死んだといふことであつた。二人の間には五つになる子供があつたが、夫婦にはなれず、男は米國に出かけて行くといふやうなはめになつたので、別れを惜むために溫泉地から溫泉地を歩いてゐる間に、女はたうとう男に別れる悲しさに耐へ切れないで毒を嚥んで死んだのであつた。男も女の死を見てたうとう毒を仰いで死んだのだといふことであつた。

わたくしはその若い二人の不幸な男女の心を想像して、川のほとりを歩いてゐることもある。

愛、戀、別離、死、男、女といふやうな問題が後から後からとわたくしの頭のうちに渦を巻いて起つて來る。

詩心に生く

詩を持たぬ日の生活の空虚さを思ふ。
詩は生活の幻影である。
幻影は空無ではない。幻影は現實以上の現實である。
若い母はその嬰兒の眼に天上の星よりも美しいかゞやきを見出すであらう。それは詩である。幻影である、現實以上の現實である。
神は詩である。幻影である。
詩を持つことのできぬ人には神は存在しない。
神は幻影なるがゆゑに無限に深く、無限に幽かである。幻影なるがゆゑに心の素直なる者のみが神を見ることができる。幻影なるがゆゑに嬰兒の心を持てる者のみが神の世界に詣ることができる。
木の葉のさゝやきに神の聲を聽くことのできた古代希臘の人々
草の中に燃ゆる神の炎を見ることのできた舊約の人々
かれ等は幻影の中に眞實の神を見ることができたのではないか。
嬰兒は手を伸ばして月を取らうとする。
嬰兒にとりて月は直ぐかれの隣りに在るところの現實なのだ。
嬰兒にとりて月は握手することの出來る現實なのだ。

嬰兒は星のまたゝきを信ずる。星はかれにとつて眞實に生けるものなのだ。
嬰兒は草の葉に置く露を寶石と信ずる。日の光りが草の葉に落ちる時、そこに草原いつぱいに寶石が撒き散らされる。
嬰兒のみが神の手によつてめぐまれた草の中の寶石を信ずる。
嬰兒は黄昏の風の音にも或るものゝ聲を聽きて恐れをのゝく。
たしかに嬰兒は或るものゝ聲を微風のなかにも聽きわけることができるのだ。
或る人は笑ふであらう、嬰兒のすべての幻影を。
けれども嬰兒にとりて幻影は現實以上の現實である。
神を見るものも亦幻影を見るものとして笑はれるであらう。しかしながら神を見るものにとつて神は現實以上の現實である。
幻影を持つことのできぬ俗人の生活の空虚さよ呪はれてあれ。

生活は詩でなければならぬ。
起きる時私たちは祈らなければならぬ。詩の心をもつて。
食卓に就く時祈らなければならぬ。感謝の詩をさゝげなければならぬ。
友と逢ふ時、友と別るゝ時私たちの言葉は詩でなければならぬ。神への祈りでなければならぬ。
嬰兒の生まるゝ時、
老いし人々の眠り行く時。

私たちは祈りをさゝげなければならぬ。
詩をさゝげなければならぬ。
寢床に行く時私たちは、一日の生活に對して神に感謝しなければならぬ。詩をさゝげなければならぬ。
詩はすべての生活を、すべての現象を、根本的に視、根本的に考へる。
詩は盲目になりたる人々の眼にふたゝび神の國の大なる花を見せる。
詩は聾したる人々の耳にふたゝび神の聲を聽かせる。
詩は神を忘れたる人々にふたゝび神の面影を記憶せしめる。
詩は私たちを驅りてふたゝび嬰兒の世界に還らしめる。
詩は幻影に生きるものなるがゆゑに
詩を思ふ時私たちの心は嬰兒のごとく、大人らの世界に對しては愚かなるものとなる。
詩を思ふ時私たちの心はイヴンの馬鹿の如く。
詩を思ふ時私たちの心はたゞ嬰兒と神の世界を見んことにのみ一念する。

詩は生活の精進である。醇化である。更生である。革命である。
我いかに生くべきか？
我何を思ふべきか？
我いかに祈るべきか？
我いかに語るべきか？

私たちはこれ等の疑ひに對してきはめて曖昧な答解をしてゐる。
時としてはこれ等の疑ひをすら忘れて生きようとしてゐる。
詩はこれ等の本質的な生活の疑ひを絶えず私たちの心に向つて放つ。
詩は、そして、これ等の本質的な生活の疑ひを念々刻々僞らず解かんことを欲する。
そこには逡巡なく、左顧右眄なく、打算なく、
すべてを神に任せたる心、すべてを運命に任せたる心のみ動く。
詩はたゞ一筋の道をまつしぐらに走る。
神の言葉は最も平易である。簡明である。詩は神の言葉に聽くものなるがゆゑにいつも最も平易、簡明でなければならぬ。
それ故に惡を惡とし、善を善とすることに於いて最も僞らぬ判斷を下し得るものは詩の心である。
詩の心は嬰兒の心であり、神の心である。
嬰兒は星の世界をもかれの小ひさな心に抱くことができる。
私たちの生活にありて詩の心のみが星の世界をも私たちの小ひさな心につゝむことができる。
神の心、嬰兒の心、そして詩の心よ。

一木一草一石の味

西洋の庭園といふものゝ味はわたくしには西洋を見たことがないのでわからない。庭といへばどうしても日本の庭でなければならぬやうな氣がする。garden といふ字は庭園といふ字を當てはめてもいゝだらうが、庭といふ字に當てはめることはできないやうな氣がする。獨斷かも知れぬが繪や本で見た感じから來る西洋人の garden は庭ではないといふ感じがする。

こんなことをいつたからといつてわたくしは日本の庭といふものについて何も知らない。京都あたりの古いお寺の庭などを拜見してゐると初めてこれが日本の庭だなあとつくづく思ふことがある。そして日本の庭を見ることのできるやうに日本に生まれたことをありがたく思ふことがある。たゞそれだけの感じを庭といふものに對して持つことができるといふだけのことである。

同じ庭でも京都あたりの庭と江戸の庭とはまるでちがつてゐる。それぞれの人情、人氣、空の色、土の色、石、木、草、山と平野、經濟、時代さういつたいろ／＼なものが關係してゐるのであらう。しかしそれについてもわたくしはどういふ風にちがふなどと論ずるほどの何一つ材料も持たず、また庭も見てゐない。

京都の八坂神社あたり、建仁寺、淸水、あのあたりを歩いてゐてわたくしはよく胡麻斑のはいつた纖細い竹の植込みを見かけたことがあつた。それは十五六年前であつたらうか。案内してくれた車夫が豌豆畑の花の中を通る時、こゝいらは昔のお仕置場であつたなどと話したことがあつたが……。この秋同じ淸水あたりを歩いた時は胡麻斑の竹には氣付かなかつたが、ともかくあちらではまだ竹といふものが植込みにも、籬はむろんのことであるが、關東より多

く用ゐられてゐるやうに思ふ。それは庭に適當した竹が容易にえられる關係からであらうが、見て感じのいゝものでもあり、品位も、落ちつきも、陰翳も、寂びもある。東京では篠、業平、寒竹、孟宗などが多く植ゑられてゐるやうである。が、いつたいに東京の下町のやうに六坪か七坪のせまい庭には寒竹ぐらゐのものであらう。蝦夷松などをこのごろは東京の庭に植ゑてゐる向もあり、信州あたりから白樺の小ひさいのを持つて來て植ゑてゐる人もあるやうだが、まだしつくりと庭に映つたのを見たことがないので何ともいへないけれど、新らしい試みではあらう。

岐阜あたりから伊賀、大和、關西にかけては竹が多く、赤松が多い。自然竹と赤松が庭木として一番多く取り入れられることになる。

庭専門の人たちにいはすれば石の置き方がどうだの、庭木の種類がどうだの、飛び石の竝べ方がどうだの、茶室がどうだのと面倒なことをいふであらうが、われ〳〵はたゞ一種の禪として、一種の茶道として、一種の瞑想靜思靜觀の室として、場所として、自分の小ひさな庭を眺むる氣分さへ纒められるものであればそれでたくさんだと思ふ。いい石が一つ、なるたけあまり小ひさくないのんびりした木が一本、山蘭が一莖、たゞそれだけでも狹い庭にはたくさんだと思ふ。或ひは梧桐が一本、その根もとに寒竹一叢、副へとして春はぼけ一株、或ひはおもと一莖、それだけでも心持ちのいゝ庭はできる。

木津川に沿うて大和から伊賀の高原へ登る兩岸に幾個の手ごろな小村が竝んでゐる。前には白い磧の木津川を控へうしろには青々とした山を負うてゐる。白い倉の壁や、ゴシック風に似た強い勾配の屋根の家が一かたまりにつゝましやかに屯してゐる。蓊々たる修竹がそれらの景物を一とまとめに抱いてゐる。わたくしは今でもあのあたりの景色をはつきりと眼窩に刻みつけてゐる。まことに結構な庭である。作らざる眞の庭である。

庭師に見せたならあの景をとりたがるであらうが、下手に小ひさく纒められたのでは打ちこはしである。あのやう

な景物は專門家にまかせて置くことであつて、われ〳〵の狹い庭にはそこいらから買つて來た五六本の木があれば、そしてをり〳〵の草があればたくさんである。木があれば時折は珍らしい小鳥も飛んで來てくれる。鶯も來、繡眼兒も來る。夜は梟も來てくれる。

木を植ゑてから小鳥が來てくれるのはうれしいものである。頰白のやうな鳥は季節がきまつてゐるし、また來るにしてもたいてい時間もきまつてゐる。朝の十時ごろとか、午後の三時ごろとか。

靑木を一本買つて來てその下につくばひを置いた。靑木の露が落ちてつくばひに早くいゝさびがつくために。鶯が來てつくばひの水を飮んでゐる。きんばらのやうな鳥が來て同じやうに水を飮んでゐる。障子の中からそつとのぞいてゐるとうれしいものである。鶯は、庭がせまいので笹鳴きだけはするが、ほんたうに鳴くころになれば近所の廣い邸の木立へ飛んで行つて鳴いてゐる。ちよつと鶯に對して怨みもいひたくもなるが、それでも狹い庭を忘れないで時折つくばひのほとりにしやがんでゐてくれるのを見ると怨みも忘れる。

わたくしはまたS氏から小鳥の巢箱をいたゞいた。庭の隅の楓の蔭につるして置いたが、一年くらゐ經つてから飛んで來た頰白がはじめて巢箱の穴を覗いてくれた。

あまりうれしかつたので「十二月×日頰白巢箱へとまる」といふやうな日記をつけて見たりした。

わたくしたちには無論庭らしい庭を持つ力はない。殊に轉々として居を移すのであるから石一つ氣に入つたものを持つことはできない。だから緣日を歩いてゐてたま〳〵見付けた竹だの、山茶花だのと、氣が向いたまゝに買つて來て思つたまゝに植ゑて置くだけのことである。

さて自分が探して來て自分で植ゑた木に對しては情がこもるもので、暇をぬすんでは木の肌の貝殼蟲をとつてやつたり、寒肥をやつたりする氣にもなる。家を引つ越して行く時は植木をのこさねばならぬがちよつとつらい氣もする。

いゝ庭が眺めたいと思へば京都へでも旅をした序に見て來る。せめてそんなことでゝも自らを慰めるより他はない。わたくしの趣味としては大きなすくすくと伸びた木を植ゑて、石の二つ三つもころがしたまゝにして成るべく自然のまゝに放り出してあるやうな庭が好きである。小ひさく纒めた庭は氣がつまりさうである。

金閣寺の玄關の前にある亭々たる水松樹は見てゐても氣持ちがいゝ。

高野槇、松、梅、吉野櫻、榧、椎、公孫樹、椿、楓、ぬるで、山茶花、桐、柘榴、連翹、木蓮、竹ならばすべて好きである。

伊賀上野の蓑蟲庵には落葉が二三寸も積つて、雜然たる繁みの隅に、朽葉に埋もれた池があつた。あのやうな庭はお寺の堂よりも靜かでいゝ氣持ちなものである。

落葉ならば五寸積もつても六寸重なつてもうれしいものである。

たま〳〵訪れて來る人の煙草の喫ひ殼や燐寸を遠慮もなくそこいらに捨てゝ去るのは、後で箒を持つて掃きながら腹立たしく思ふ。

六七年も前のことであつた。わたくしは中國を旅してゐる際に、庭の赤松の幹がすべ〳〵と磨き立てられたやうになつてゐるのを見た。今はどうか知らぬが、そのころは松の幹を磨くことがあの地方の庭師などの流行であつたらしい、いやな流行だと思つたことがあつた。

草や木や石までが何の邪氣もないので、輕薄な人間よりは、こちらの親切を素直に受け容れてくれる。二三日水を怠つてもすぐにかれ等の面にそれがあらはれる。雪のころに親切を盡して置けば雪の解けるころ、夏、秋にかけて木も石も草もこちらの心を受けたしるしを見せてくれる。わづか數本の木や三四株の草であるが、それでも三百六十五日、人間と草木との交際が最も正直に行はれてゐる。そんなことがわたくしたちをして木草や石ころに心を向けさせ

るのではないだらうか。

わたくしは地震前に、九州から名工柿右衞門の柿の實を持つて來て、郊外の家の庭に播いて、それが一尺ばかりに伸びたころ急にそこの家を追ひ出されたが、今でもあの柿のことは忘れない。

二三年前ふたゝび柿右衞門の子孫の家へ出かけて行つて、柿の實をもらつて來て今度は大井川のほとりの島田の或る舊家の主人である友人の庭に播いてもらつた。酒倉の前で、芭蕉の「五月雨」の句碑のかたはらに種子はすく〳〵と芽を出したといふたよりを聽いた。

もし火事でもあつたらといふので、さらにその種子を三四ヶ所に分けて播いたといふたよりもあつた。

三年前信濃の善光寺にはじめてお詣りをした時善光寺の裏の山から樫の實を拾ふて來て、これは巣鴨に居た家の庭に播いた。三本芽を出したが、一本は折れてしまつた。今では七八寸にも伸びてゐるであらうか。

去年上州六里ヶ原を歩いた日淺間の熔岩の間から甘露梅を掘つて來て、沓掛の落葉松の中の家へ一坪ばかりの庭を作つて林檎と一緒に植ゑて、木札を立てゝ置いたが、今ごろは深い雪に埋もつてゐることであらう。

轉々として居を移すごとに、小ひさな庭を造つて別れてゆく、考へて見ると寂しい氣もする。

しかし一本の木にも面白い味があり、一つの石にもなか〳〵捨てがたい味がある。そのかすかな味を見出すために人は庭を作る味を捨てえないのであらう。

菊を焚く

このごろ谷中の墓地を歩いてゐると、そこにもこゝにもかなめ垣の間からかすかな菊の香が漂うて來る。墓地の入口の花屋を覗いて見ると店頭いつぱいに黄菊白菊が露を帶びたまゝに堆く積みかさねられてある。あの菊が一日でみんな萎れてしまふのかと思ふとちよつと驚かされる。成るほど菊を手向けた墓を見ればいかにもゆかしい。地下に眠つてゐる人までが心ゆくまで靜かな秋をたのしんでゐるやうな氣がする。

墓地近くの通りに沿うたむさくるしい家で、一尺の土もないやうな壁のまはりに五六株の菊が植ゑられてあるのを見た。わたくしは谷中の塔のわきから芋坂を下りて日暮里の方へ歩いて行つた。十年ばかり前まではすつかり田圃であつたが、今はもう隅から隅まで工場だの、長屋だの、活動寫眞館などが建てこんでしまつた。おはぐろのやうな溝ばかりが流れてゐる。むせつぽい硫酸の香だの、護謨の香だのが漂うてゐる。そこにもわたくしは二三坪の空地いつぱいに作られた菊を見た。或る長屋では十鉢ばかりの大輪の菊を土間に飾つてあるのを見た。鐵道の踏切番の小屋の横手にも懸崖作りが枕木の上に置かれてあるのを見た。

菊を南山のほとりに植ゑるといふことは支那の昔の詩人ばかりの嗜好でなく、われ／＼日本人の間にも久しい以前からの秋の趣味の第一になつてゐる。恐らく漢詩趣味から生まれて來たことであらうが、今ではわれ／＼日本人の血の中には、秋といへば直ちに菊を聯想するほどの深い因縁を持つたものとなつてゐる。

十日ばかり前Kといふ大工さんが懸崖作りの菊を自轉車に載せて持つて來てくれた。

かれは菊を作ることが好きで毎年菊を作つてゐる。
「旦那、洋服の古いのを一つくれないかねえ。」
「あげてもいゝが……何にするの？」
「わたし着て見たいのです洋服を。」
「さがしてあげよう。」
「實は必要があるんです。今度都合で復興局の指定請負師になるかも知れませんで、はゝはゝは……」
「へえ、そりや結構だな。」
「もう金を四五百もつかひましたよ。」
「どうして？」
Kの話はかうである。
復興局の誰かに紹介してやるといふ名目で、何とかいふ老人が三百圓出せといつたさうである。
Kは三百圓をその老人にわたして一本の紹介狀を書いてもらつたといふことである。
「その老人といふのはどんな人です？」
「七十あまりの親爺ですが、何でも明治何年とかに大學を出たといふてゐましたよ。いつもぶら〳〵遊んでゐる爺さまですよ。苗字は神田といふのですが、名はむづかしい字でわたしには讀めません。」
「狐につまゝれたやうな話ぢやないの。」
「さうかも知れません。もし詐欺だつたらバケツにいつぱい泥水を掬んで、あの爺の頭からひつかけてやるばかりでさあはゝはゝは……」Kは人ごとのやうなのんきな顔をしてゐた。

洋服をもらつて得意な顔でかへつて行つたKはそれつきりしばらくわたくしの家をたづねて來ない。

「Kはだまされたのかなあ！」わたくしは毎朝Kが持つて來てくれた菊をながめてはKのことを考へてゐる。Kは愉快な男である。

菊を作る男はよく人にだまされ易いのかも知れぬ。

わたくしの父もよく菊を作つてゐたが、ありもしない金をこしらへては惡い男たちに絞りとられてゐた。よくだまされて馬鹿を見てゐた。

八十八夜といふ名は子供の頃から頭に刻みつけられてゐた。それはその日菊の苗を切つて土に挿すのが父の仕事であり、またわたくしたちはそれを手傳はせられたから。

黒い柔かな土に、四五寸の長さに切つた菊の苗を挿す。上から米のとぎ汁をかけてゆく。

梅雨ころになると靑々と芽が伸びてゆく。

九月ころになると蟲がつきやすいので、たえず蟲をとらねばならぬ。一番かなしいのは根喰ひ蟲にやられることである。泣くにも泣かれないことがある。

小ひさな蕾が出る。蕊の一つを殘して、他の蕾は絕えず摘み捨てなければならぬ。

時としてはその蕊のたゞ一つの蕾をとられてしまうこともある。やはり泣くにも泣かれぬかなしさである。

十一月三日の天長節には父は屹度畑の菊の花を二三の人に贈つてゐた。わたくしはいつもその菊を持つてゆく役目を仰せつかつた。

たいていそのころは霜が降りてゐた。

花が散り、葉がかさ〳〵になるころは霜が毎朝雪のやうに白く降りてゐた。
枯れ枯れの菊を畑の隅に見れば、逝く年のあはれさを身にしみて感ずる。
わたくしたちは枯れ枯れの菊を刈つて束にして背戸の軒下につるして置くのであつた。そして大晦日の夕暮になれば枯れ菊を門口に焚いて逝く年を送るのであつた。
大晦日のたそがれころに菊を焚くのはたいてい母とわたくしの仕事であつた。
わたくしはこのごろ故郷の姉から「菊の花が咲き、父上のことを思ひ出します」といふたよりを受けとつた。
まつたく父は菊が好きであつた。

南方の山

わたくしは故郷の春の山に立つてゐる。平戸から五島、長崎の岬までが一眸の下に見られる。わたくしは「日本聖人鮮血遺書」のことを思ひ出した。フランシスカン派の神父たちを載せて來たであらう春の海はかすかな白波を立てて煙つてゐる。呂宋の據點から一路直ちに海を横ぎつてラテンの文明が日本にその第一歩を踏んだのは今わたくしの眼前に髣髴として漂うてゐる平戸の岬である。わたくしは子供のころから故郷の春の山に登るごとに日本の花らしくない花を見てゐた。花は天鵞絨のやうになめらかな肌をして眞紅に燃えてゐる。アネモネの一種であらうか。

平戸から志佐、小値賀、佐々など海岸の村々を傳ふてポルトガルやスペインの商人たち、フランシスカン派の教父たちは長崎へ通つたであらう。その道すがら今わたくしが立つてゐる草山を越えて行つたにちがひない。その旅の間に異國の人たちがあの草の花の種子を落して行つたのではないか。

鮮血遺書の中には「二月四日の正午時頃大村領にて……彼杵といふ里に走り着く……奉行は道すがらルドビコの優しく美麗なる童顔に愛情を催し憫然さ遣方なく……」と書いてゐる。

その大村や彼杵を抱いてゐる後の山も霞みながら見える。黒島の白い教會堂の高い塔が波の上に見えてゐる。黒島といふのはクロスの島である。クロスは十字架の意である。ラテン文明が遺して行つた修道院と嚴肅な修道者の生活は今もそのまゝにその島にのこされてゐる。

二十六聖人が殺された立山の刑場は今どこいらになつてゐるか知らぬが、ともかく浦上や、筑後町や、大浦のロマン・カソリックの高いお寺の塔からは朝晩しづかに鐘の音が響いてゐる。あの鐘の音はいつ聴いても懷かしい。

浦上の禮拜堂は建てかけられたまゝわたくしの子供のころから草の中に埋まつてゐた。貧しい信徒たちは一枚の煉瓦を買ふ金ができるたんびに一枚の煉瓦を運んで行つた。そして何十年振りかでつい近年になつて出來上つた。禮拜堂の裏の山には殉教者の血で染められた雜草の中に十字架が雨に打たれてゐる。

彌撒かへりの信徒たちの胸の十字架、小鈴を首につけた牛、花賣り女、丘から丘へつゞくナポリ風な古い町、アーチ型の石橋の下に舫はれたゴンドラ風な小舟、異人さん、あちやさん、朱欒の實、無花果の下の井戸、ホスピタルな心を持つた町の人々…… 殉教時代のラテン文明の面影を一番ゆたかに持つてゐる長崎の町はなつかしい港である。近代の功利的なアングロサクソンの文明を眞つ先に取り入れた横濱と比べて見ると面白い。

山家日記

八月二十六日　午前五時起床。いかにも秋らしい朝である。八ヶ嶽も淺間もこの秋に入つてはじめて磨かれたやうに晴れ〴〵と見える。けさ落葉松の林のなかにはじめて緋がらの鳴く聲を聽く。午後S氏と輕井澤の離山に登る。芒やゝ白く、鷹一羽嶺をかすめて飛ぶ。八時半眠る。

八月二十七日　午前五時起床。朝燒の空美し。東京のN氏より古文眞寶を送つていたゞく。半日讀む、「赤い鳥」の原稿を送る。夕暮沓掛の町まで歩む。午後九時就寢。

八月二十八日　午前五時起床。長篇小説執筆の件についてI氏へ電報を打つ。午後不動瀧を見にゆき日暮ころかへる。佐久高原の夕景色殊によし。

八月二十九日　午前五時起床。淺間、八ヶ嶽のながめ太だよし。午後雷鳴あり。夕方沓掛まで散歩す。

八月三十日　午前五時起床。S氏の令夫人、令息東京へかへらる。沓掛驛まで見送る。急に寒さ募る。雨降り雷鳴る。中央公論へ小説の校正を一部分送る。久し振りにみやまどりの聲を聽く。雉子飛び、山鳩鳴く。

八月三十一日　午前六時起く。いかにも秋らしき好天氣。山鳩しきりに鳴く。朝沓掛の町へ下り中央公論小説校正の殘部を送る。去年の秋はワノフスキイ氏とよく沓掛の町で逢つたものであつたが、今年はどこへ行きしか。

午後S氏來訪。山葵畑を見にゆく。沓掛の水源地に選まれたるため畑は荒れ、去年働いてゐた夫婦の人たちは他へ移つて行つたらしく家は深くとざされてゐた。

夕、霧ふかく急に寒氣募る。ネルを出して着る。夜、家のことについて思ふ。東京の狹苦しい埃だらけの落ちつき

なき生活を思ふと東京は決して永住の地でない。房州、伊豆、大和いろ〳〵な地を想像に描く。秋は大和、山城、近江あたりよく、伊豆は靜かな地であり、房州は春殊によからん。夜十時半やすむ。

九月一日　午前六時起朝。山鳩鳴き、雉子飛ぶ。午前十一時五十八分香を焚き默禱す。空晴れ雲白く、あの恐ろしかりし震災の日をそゞろに想ふ。淺間近ころになく噴煙多し。

九月二日　朝沓掛までゆく。ブウニンの「村」を讀む。終夜雨強し。

九月三日　夜明とともに空晴る。東京より正午の汽車にて甥來る。沓掛驛まで出迎へ、午後古瀬の溪を歩む。芒(すゝき)ずでによく、やゝ紅葉したる樹あり。黑鶺鴒飛ぶ。今日も淺間の噴煙多く、ほとんど嶺をつゝむ。近ころ珍しき現象なり。殊にけふは北風のためか硫氣家のほとりまで漂ひ來る。

夜十一時二十分輕井澤着の急行にてN氏見ゆ。輕井澤まで出迎ふ。月入り、夜寒し。

九月四日　午前六時千ヶ瀧にて遠矢を射る。午後碓氷(うすひ)峠(たうげ)に遊ぶ。空晴れて榛名(はるな)、赤城(あかぎ)、男體(なんたい)、利根(とね)の流域、妙義、秩父、八ヶ嶽、淺間、日本アルプスを眺む。

九月五日　午前八時沓掛驛にS氏を見送る。午後ふたゝび沓掛驛にN氏を見送る。正宗白鳥氏と奥さんにお目にかかる。提灯をさげ途中までお送りしてかへる。月曇り、雨催ひの空に淺間の影黝く見ゆ。

九月六日　寒さ加はる。午前八時起く。終日雨。湯に浸り、午睡、夕刻千ヶ瀧まで散歩。啄木裏の林にとまる。霧深し。

九月七日　霧深し。雨止むも空はなほ曇る。山の裾の霧徐々に晴るゝを見て小諸(こもろ)に出で炏、原湖に遊ぶ。

家のまはりの叢より雉子群がり飛ぶ。

温泉宿の仔犬霧雨に濡れて來り、いつの間にか緣の上にあがる。鴉の鳴く聲にもおびえる。臆病犬なり。

修善寺風景

山の櫻が散り、瑠璃鳥が鳴き、河鹿の音を聽くやうになつた。

一筋の溪澗に凭りて細長く、爪先上りの道に沿うて作り上げられたのが修善寺の溫泉場である。

桂川はいかにも清冽な流れである。川といふにはやゝ狹く、どこ迄も溪澗といつた方がぴつたりと胸に來る。水勢もやゝ早い。時としては瀧をなし、瀨をなし、淵をなして流れてゐる。椿あり、欅あり、直杉ありて溪に沿ふ家をつつみ溪川を掩うてゐる。

東京からは箱根を越え、さらに三島からにしろ、沼津からにしろ、八九里の道をへだてゝゐるためか、都會の風が吹いて來ぬだけ居心地がいゝ。

修善寺驛を下りて狩野川をわたる間もなく、旅人は先づ第一に桂川の右岸の丘に眞つ白な禮拜堂の小ひさな尖塔を發見する。カソリックの教會堂である。日曜には小田原から教父が見えて禮拜を司つてゐる。日曜の朝になれば禮拜堂の鐘が新綠にこだまして響く。修善寺の町はカソリックの禮拜堂の丘の內懷につゝまれた形になつてゐる。

農繁期を前にして地方の農村の人たちが、川に沿うた素人屋の二階を間借りなどして、川の眞ん中の獨鈷の湯に浸つては部屋に歸つて夜具をひろげて寢こんでゐる。いかにも湯にはいつて來ては寢ころんでゐるのがたのしさうである。三百六十五日野良に出て働きに働いてゐる農村の人たちにとつては、時もなく、日もなく、疲れ切つた肉體をやはらかな湯に浸らせて、のび／＼と四肢を伸ばして新綠の山を見、初夏の青空をながめてゐることはいかにもたのしさうである。

かつてわたくしは日本アルプスに登つた折、信濃の大町から山案内をつれて行つた。第一日には中房温泉に泊つた。山を下る時もまた同じ温泉に泊つた。わたくしは山案内の男が夜の二時三時ころにも起きて温泉の中に浸つて唄をうたつてゐるのを聽いたことがあつた。

この湯の町でも農村から來た人たちは夜晝の差別なしに湯に浸つては悠然として雲を仰ぎ、山をながめてゐる。いかにも湯をたのしんでゐる形である。溫泉の效能に對する傳統的な信頼と享樂とがいかにも自然な形式に於いてあらはされてゐる。湯治場氣分といふ別趣な暢然さが、桂川を中心として、磧の上にも、兩岸の家の窓にも、欄干にも描かれてゐる。

土曜や日曜にはともすれば塵除け眼鏡をかけて自分でハンドルを握つてオートバイを飛ばして來るやうなモダーンな若者たちもたまには見出されるが、普段はまだ昔のまゝのガタ馬車が、驛と町の間十五六町の田圃道を往き來してゐる有樣である。

駿河灣に沿うて蜜柑の產地として有名な木負といふところがある。沼津から修善寺へ來る途中少し海岸を西にそれてはいつた土地である。冬の間はよくそこの女たちが籠を負うて蜜柑を商ひに來てゐたが、このごろでは特有な枇杷を籠に負うて來る。そして道を歩いてゐる湯治客たちに呼びかけてゐる。小粒だがなかなかに甘い。

旅から旅をめぐり歩く旅役者たちが芝居の舞臺そのまゝの姿で、俥に搖られながら麥畑や蓮華草の間を町まはりをしてゐることもある。樓門の五右衞門らしい百日鬘の男の、刺繡の金絲も手擦れてしまつた褞袍に、丸ぐけの姿を初夏の麥畑に見出すのはむしろあはれな氣がする。

東京では二十年も前に影をかくしてしまつたやうな夫婦づれの門付などが月琴を彈きながら、手甲、草鞋穿きの姿で俯向きがちに歩いてゐるのを見れば、人生そのものに對する切々たる哀憐を感ずる。

朝の三時半には修禪寺の鐘が鳴る。このころでは晝と夕暮と夜の九時と同じ鐘を聽くことにも馴れてしまつた。町の入口にカソリックの禮拜堂があり、その中央に修禪寺があるといふことも、こゝの湯治場の空氣に何となしに落ちつきを感じさせてゐる。修禪寺の本殿に副島種臣の額がかゝげられてゐるが立派な字である。

寄木細工や麥藁細工はどこの溫泉場にもあるが、こゝでは風がはりの或る男がひところ支那の翡翠や臘石などを賣つてゐたことがあつた。何でも以前支那を步いてゐたことがあつたので支那の商人から直接輸入してゐたといふことであつた。このころでは支那の翡翠も賣りつくしたか、商賣替へをして天城の材木を賣つてゐる。いつものんきな顏をして町を步いてゐる。

吹矢などゝいふ遊びはわたくしたちの子供のころのものであつたが、こゝの町に來ればまだ幾軒となく吹矢のかはりに空氣銃で卷莨や博多人形を射落させてゐる店が並んでゐる。このころの日永をキルクの彈丸を飛ばしてゐる湯治客を見るのも山の溫泉場らしい。

十年ばかり以前川に沿うて大弓場があつたが、旅の男であつた大弓場の主人は妻と子を捨てゝ行く方も知れずになつてしまつた。後には幾人かの子供を抱へた若いおかみさんがゐたが、しまひには大弓場も人手にわたして土地を立ち退いたといふ噂を聽いた。人間が住んでゐるかぎり、どこの世界にも悲劇はあるものである。

町の入口にガタ馬車の立場がある。いつも五六頭の馬車馬が倒れかゝつた馬小屋につながれてゐる。そのうちの一頭はいつでも客を乘せて走り出すことができるやうに、道ばたの馬車に着けて準備をしてゐる。わたくしは每日立場の前を通つて山に行くのであるが、わたくしの顏さへ見れば馬車に乘れとすゝめる。わたくしは山に散步に行くのだからといつてことわるが、翌日も翌日も同じことを繰りかへす。愚直むしろ愛すべきである。微笑みたいやうな氣にもなる。

七二年前の初夏の頃、賴家や若狹の局たちの五百何十回かの遠忌が營まれたことがあつた。今も賴家の墓は終日若葉の下に香煙をこめて湯治客たちの心に懷古的な感慨を抱かせる。範賴の墓はすこしへだゝつてゐるせゐかいつも寂しい。賴家が刺されたといふ浴室の跡ちかくにはいつも眞つ白な鵞鳥が遊んでゐる。

賴家の墓の前には御籤の箱が置いてある。わたくしは山に登る時、よく戯れに御籤を引く。昨日は第八十一小吉で、道合須成合。先憂事更多。所求財寶盛。更變得忠和とあつた。時々御籤箱の錢をあつめに來てゐる小娘に逢ふこともある。そこの山には終日杜鵑が鳴いてゐる。

風のない、靜かな日ほど杜鵑はよく鳴く。わたくしは山に登つては杜鵑を聽く。

雨もよひの日、天城も曇り、嫩葉の上に霧がかゝり、今にも一雨降りさうなころになれば溪の底から水戀といふ鳥の聲が聞える。ものあはれな聲である。川向うを歩いてゐる旅人でも呼びかけてゐるやうな靜かな遠い聲である。わたくしは桂川に沿うて、或る時は狩野川に沿うて(狩野川は直接天城の懷から流れて、沼津を經て駿河灣に入つてゐる。桂川はその支流になつてゐる。)麥畑や桑畑の間を歩くことがある。そのやうな折、川向うの遠い柴山から旅人を呼びかけてゐるやうな水戀の聲を聽くことがある。二十年も前の學生時代にでも立ち還つたやうな氣になつて、わたくしは草の上にしやがんで水戀を聽く。

水戀の聲はあはれさの底に一種の音樂家的な技巧を持つてゐる。洗煉されたかなり複雜なリズムを持つてゐる。水戀に似てしかももつと單調な、むしろ一本調子なやゝ線の太い鳴き方をするものに尾長鳥といふのがある。これもこのころの曇り日など、山氣が澄んだころ溫泉場の裏山でよく鳴いてゐる。

いつたい初夏の山で聽くものはあへて鳥ばかりではない。溪澗の河鹿にしろ澄んだ聲を持つてゐる。そしていかにも憂鬱のなかに見出さるゝスヰートなものを持つてゐる。

朝まだ早いころ、或ひは日の暮るゝころ、あたりの山氣が沈んでゐるころ浴槽に浸りながら、ぢつと耳をすましてゐると、水戀が鳴き、尾長鳥や老鶯が鳴き、河鹿が鳴いてゐる。初夏の憂鬱のなかに織りこまれてゐる靜かなスキート・ペーソスが湯治客の魂をつゝんでしまふ。杜鵑は眞晝間の山の奧深く分け入つて小暗い木の下で聽くのがいゝやうに思ふ。

どこの溫泉場もさうであるが、雨の日は殊に溫泉場らしい落ちつきを見出す。いつたい天城の溪々には鶺鴒が多い。雨に濡れた河原の石や、柿葺の上につくねんと雨を見守つてゐる鶺鴒をながむるのも溫泉場らしい情景である。夕方になれば川のはたの湯には野良で働いた馬をつれて來て浴みさせてゐる男たちもある。

この冬頃から旅から來た彫刻師が、いつも修禪寺の石磴の下で、竹を刻んでゐる。まことに巧みなものである。いつも七八人の湯治客たちが立ちどまつて見物してゐる。字もうまいし、繪もうまい。切り出し一つで卽座に山を出だし、雲を湧かさせる。髮を肩のあたりまで垂らし、頭巾を冠つて、石磴に腰を卸していかにも愉快さうに刀を動かしてゐる。修禪寺の鐘樓をかすめて杜鵑が鳴いて飛ばうと、天城が雲にかくれてしまはうと、かれは寸刻も竹を刻む手を休めない。

かれは羨むべき路傍の藝術家である。かれも亦溫泉場から溫泉場をめぐる旅役者の一人である。

蕨も老い、蕗も堅くなつたが、まだ町の子供たちは籠を提げては葺山に登つてゆく。狩野川を中に挿んで細長い裏伊豆の平原にはなほ菜疇麥圃の眺めも捨て難きものがある。下田や伊東通ひの乘合自動車の間にまじつて悠暢な喇叭の音を響かせながら天城を越ゆるガタ馬車を見るのも山の溫泉場らしくていゝ。

花にはうとまるゝが、櫟の嫩葉はどの嫩葉にもまして初夏の山をかゞやかに飾つてゐる。初夏の伊豆を旅するごとに、わたくしは櫟の嫩葉の美しさを思ふ。

雨上りの山徑を歩いてゐると、天城を下りて來る鹿や、猪の足跡を見出すこともある。戸田へ越ゆる達磨山にはあの恐ろしい大震災に世をはかなんで世を捨てた男が炭を燒いてゐるといふ噂を聽いたこともあつたが、今は果して住んでゐるか何うか。

炭を燒く煙は今もなほ天城の溪の到るところに蒼然として立ちのぼつてゐる。炭燒く竈を作つては一つの山を伐りはじめる。一つの山を伐り盡せば山を捨て、竈を捨てゝはまた他の山に移つてゆく。これが炭燒く人たちの山の生活である。牧草を追うて居を移した原始時代の生活を思ひ出させる。

かつてこのあたりの山を歩いてはわたくしは幾度か柴山のなかに小屋を建て、赤土を叩いて炭竈を築き上げてゐる男と語つたことがあつた。

わたくしは今も同じ道をたどつて草山を散歩する。柴山の木は伐り盡され、小屋は壞され、炭竈は雨に打たれて、いたづらに空山寂寞の感に耐へないことがある。幾つかの溪をへだてゝたま〳〵炭燒く煙を見出しつゝ佇立することもある。

二三日前わたくしは奧の院まで歩いて行つた。約一里の川上である。まだ奧では躑躅のさかりである。弘法大師が苦行を積んだといふ岩窟に御室を構へた幽邃の地である。どことなく洛西苔寺を想ひ出させる。

お守りを受けたいと思つたので、庫裡に行つて聲をかけたが誰もゐない。

三人の老婆が裏から出て來て「わたしたちも弘法さまにお詣りに來たんですが、爺さんが留守だで、茶をわかして辨當だけいたゞきました。幾らでも、思し召しだけ金をこゝに置いて、幾枚でもお守りを持つておいでなさい。」といふ。

苔むした石に腰を卸してゐると弘法大師時代の天城の奧といふものゝ姿が暗く映つて來る。

頭の上の繁みではしきりに老鶯と瑠璃鳥が鳴く。
千幾百年も前に弘法大師のやうなえらい人が生きてゐたことを思ふと、人類の進歩などゝいふことはあまりあてにもならない。
川上の方から一人の男が釣竿をかついで山を下つて來た。魚籠のなかには山女のやうな魚が二三尾光つてゐた。かれはわたくしを見、微笑みながら溪を下つて行つた。

雀右衛門の死

旅に出てゐても別に東京へ歸りたいと思ふことは滅多にないが、いゝ芝居がかゝつたことを新聞などで見ると、東京へ歸つて見たいと思ふ。われ／＼と同じ時代にいゝ芝居を見せてくれる幾人かの俳優があるといふことはありがたい。團十郎のやうな古今の名優と時代を同じくして生まれた人たちはともかく果報者であつたと思ふ。淨瑠璃では亡くなつた名人越路一人でも聽くことのできたのをわたくしは今にも仕合せであつたと思つてゐる。太十にしろ合邦にしろたゞ一度聽いたゞけであるが、幾年經つてもそのをり／＼の感激は燒きつけられたやうになつてゐて消えない。その後いろ／＼な人の太十や合邦を聽くが芳醇な酒の後に水を混じた酒を飲まされるやうな氣がする。

時勢からいつてももう二度と淨瑠璃界ではあのやうな名人は出ないであらう。

雀右衛門が亡くなつたのはもう去年のことになつてしまつたが、あの人も段四郎などと一緒にまだ生かして置きたい名人であつた。近松の女性をやらして、あの人の右に出づる役者は恐らく東西を通じて今のところ誰れもなかつたであらう。近松の作の面白味、作の骨はむしろその渾然たる情味、寂然たるリズムにあるが、それらの情味なり、リズムなりを一つ一つの神經の端々までも舞臺の上に生かしてゐたのは雀右衛門であつた。

世の中がすゝむにつれて、すべての稽古事がぞんざいになつてゆく。亡くなつた粂八が帝劇女優の稽古をことわつたのも女優にとんぼを切らせる切らせぬからの問題であつたとかいふ噂を聽いたことがあるが、その問題の眞相はともかくとして、何れの方面に於いても今の世では稽古事が一體にぞんざいになつて來たことは否むことのできぬ事實である。

ちよつとした女學生あがりの女がスターとなつてさわがれる世の中である。ちよつとした學生上りの男たちがフイルムの世界で大手を振つて歩ける世の中である。一般の眼が低いためか、ほんたうな藝人がないためか、ともかくいい加減なことですまされる世の中である。このやうな時代に血を吐くやうな稽古事をするのは愚であるかも知れない。しかし、まだわたくしたちの周圍には、かつて血を吐くやうな稽古をさせられた見巧者が千人のうち一人はゐる。千人の盲目に褒められたにしても、一人の見巧者に笑はれるやうなことがあつたら、藝に生きる者にとつて何といふ恐ろしいことであらう。

雀右衞門のおその、玉手、お光――あゝいつたものであれば恐らく千人の眼明きにも千人の盲目にも納得されるにちがひない。あの域まであの人の藝を引き上げて行つた環境はすでに今日の世界には見出すことはできないやうな氣がする。さすれば二度と雀右衞門のやうな役者も生まれはしないであらう。それを考へると寂しい氣もする。

わたくしはかつて舞臺上に於ける近松の研究を東京の役者たちによつて試みて欲しいと思つたことがあつた。今もこの希望を捨てたわけではない。しかし今日のやうな東京の芝居の環境では無理なことかも知れない。それは今日の大阪に於いては一層無理な註文であるにちがひない。一般の時勢がさうなつてしまつた。それだけに芝居の社會的な使命といふやうな立場からしても、わたくしは一層近松物の新らしい上演を希望したくなる。

左團次はこの二三年南北物を時々試みてゐるが、南北物ならば今の人たちにも受けるやうである。尙一歩すゝんで近松あたりまで行つてもらつたらと思ふことがある。さうなつて來ると雀右衞門の死はますます惜しまれる。

木槿咲く

落葉松の山のなかでは町よりも早く夜が明けた。三時半には家のまはりの草村のなかで水鷄がたゝきはじめた。朝はいつも水鷄が眞つ先きに鳴いた。草は重く濡れてゐた。落葉松の下葉にはまだとりのこされた夜の小暗が低く漂うてゐた。

水鷄のたゝく音は夜明け方と夕暮れと一日に二度聽くことができるが、夜明け方に聽く音の方がいかにもたゝくといふ感じを起させる。時としては眠つてゐる枕もとから二三間はなれたばかりの庭の草の中に來て鳴いてゐる。たしかに草のとぼそをたゝかれる感じがする。木をたゝく音よりはやゝもつと鋭い。鋭く急調であるが、しかし佗びしい。家から稍はなれて鳴く水鷄の聲は例へば木立一つ、或ひは小溪一つ距てた家の戸をたゝいてゐる感じである。夕方に聽く水鷄は低くさらに寂びてゐる。

水鷄がたゝきはじめてたいてい四五分經てば杜鵑が鳴き、尾長鳥が啼く。鶯はやゝ朝寢坊のやうに思はれる。朝の鳥が一しきり鳴きわたれば山はしばらく朝の靜寂にかへる。ちやうどその靜寂のなかに山鳩が鳴く。山鳩の聲もわびしい。雉子もたいていそのころ山に谺して鳴く。

梟と鳩と郭公はどことなく調子が似てゐる。木立に谺してはいかにも陰にひゞく聲である。杜鵑は鶯と同じく陽の聲である。郭公にしろ、杜鵑にしろ疳積持ちであるやうに思はれる。

たとへば郭公が鳴いてゐるところに杜鵑が鳴き出して來る、郭公は急に調子を速め調子を上げて無茶苦茶に鳴く。それがいかにもやんちや小僧のやうに可笑しいので、聽いてゐると笑ひ出してしまふ。

山雀、四十雀、頬白の群が下枝から下枝をあわたゞしげにあさり鳴く。落葉松の山の中を歩いてゐると溪をへだてゝ山鳩の聲を聽く。土を蹴るわたくし自身の跫音のみが山の死靜のなかに吸ひ込まれてゆく。
信濃の山には白い雲がかゝつてゐる。不圖東京のことを思ふ。東京にかへる日のことを思ふ。あまり歸りたいとも思はないが、やはり東京はなつかしい。
旅に疲れたやうな氣もする。
三月をわたくしは伊豆の山で暮した。天城にはまだ雪の日が續いた。
四月には京にゆき、山科の勸修寺や醍醐寺あたりをさ迷うた。宇治は花の頃であつた。平等院の池のほとりには稲荷山躑躅が咲いてゐた。
わたくしは初めて芳野の花を探つた。
大和の春は麥にかゞやいてゐた。
吉野川の水も美しかつた。吉野川に沿うた上市の町はいかにも山の町らしいすが〳〵しい町であつた。下、中の千本はさかりであつたが、霜が眞つ白に降つてゐて夜は冬のやうに寒かつた。花もうれしかつたが、とく〳〵の苔清水、奥の西行庵、西行庵のまはりの馬醉木の雪のやうに白い花はさらにうれしかつた。
五月には三度長良川の雨を見、十八樓の跡をたづねて、月下に京の街に入つた。山城から攝津あたりの野は眞つ白な罌粟の花につゝまれてしまつたかと思ふほど美しかつた。
この春はわたくしは天城の溪の河鹿を聽き、雨の長良川の河鹿、同じく雨の日の嵐山の河鹿を聽いた。

柔かな落葉松の葉は霧につゝまれてしまつた。

わたくしは霧のなかで眼をつふる。

ふたゝび五月の京の空が泛かんで來る。

桂川から長岡天神の方へ竹藪の多い洛西の道を走つた日のことが思ひ出される。

東寺の池には菖蒲が咲いてゐた。五月下旬であつた。

五月の末にはわたくしは碓氷を越えて信濃の高原を歩いてゐた。

山にはまだ雪が殘つてゐた。山櫻が咲きはじめてゐた。炬燵に入りながら花をながめた。

新潟の町外れの砂丘の上に立つて佐渡ヶ島を眺め、羽越國境の山に思ひを寄せた。出雲崎、彌彥山みななつかしい名であつた。暗い北の海には雲が低く垂れてゐた。かしこにもこゝにも桐の花が咲いてゐた。曠野は赭く、木は痩せてゐた。

そこいらには芭蕉が奥の旅から病みがちにたどつた海沿ひの道がものうく續いてゐた。暗い北の海を見つめながらぢつと考へあぐんでゐるやうな漁村が濱から濱、砂丘から砂丘へとつゞいた。死のごとき漁村であつた。

山には山藤と接骨木が咲いてゐた。

一ふり、親不知子不知、そこいらは嶮峻な岩山と荒波の間をたえ〲にたゞ一筋の白い路が走つてゐた。恐らくその道こそ芭蕉が遙かに加賀の雲を望みながらたどつたほとりであらう。一草一石すべてなつかしく思はれた。

加賀も越中もアカシヤの花のさかりであつた。千鳥が鳴いてゐた。

雪の山はなほ春淺い越の國々の南の半天を劃つてゐた。

六月のはじめ東京に歸つたわたくしは、月の半ばころには再び伊豆の山に入つてゐた。

て杜鵑を聽きに行つた。
　そこでもわたくしは毎日杜鵑を聽いた。風の強い日は里近くでは杜鵑を聽くことができないので、溪の道をたどつて杜鵑を聽きに行つた。
　七月の初めわたくしは伊豆から歸つて來た。そして月の半には日本アルプスの雪を見に行つた。松本で汽車を捨て、島々から上高地までは折からの大あらしに二度シャツを替へて暗のなかに德本峠を越えた。
　わたくしは上高地への往きとかへりとに二度姥捨から夜明け方の善光寺平を見た。わたくしはまる一年振りで七月と八月とを信濃の高原に過すことになつた。
　朝になれば落葉松の枯枝を拾つて裏の草のなかに飯盒の飯を焚く、味噌汁をこしらへる。それだけでわたくしたちの簡單な食事はすむ。わたくしは生來胃腸があまり强くないためか油つこいものや、しつゝこい食物よりはいつたいにあつさりしたものがいゝ。だから山の生活はわたくしには極めて適してゐるやうに思ふ。食麵麭にしても燒きもせず、切りもせず、そのまゝむしり取つては砂糖をつけて喰べる。バタやジャムよりは白砂糖がいゝ。それにコップ一杯の眞淸水。そけだけで一度の食事はたくさんである。粗末な飾臺が一つ。それがすぐに机にもなろ。
　その飾臺を南して置けば八ヶ嶽の連峯が裏の落葉松の林を通して蒼然として南の天を劃してゐるのを見る。北して置けば前の草原を越えて淺間の全幅を眺める。淺間は例年よりは噴煙が多い。わたくしの窓からは淺間を北に見ることになつてゐるので、太陽の光りをまともに浴びた山の煙はいつも眞つ白に見える。風がない日など靑い空に高くたゞ一筋の白煙が一直線に立ちのぼつてゐるのはいゝ姿である。
　明日はわたくしは北海道の旅に立つ。
　北海道の旅は數年來思ひ立つてゐたことであつたが、いつもそのたんびに果さなかつた。明日ははじめての北海道への旅立ちである。仙臺に一宿、函館に一宿、札幌に三四泊、狩勝峠を越えて帶廣から北見の奧へはいつて見るつも

りである。

先月の「隨筆」にK氏が有島武郎氏が生きてゐられたころのことを書いて、その中にわたくしがホイットマンの記念祭の折、有島氏と初對面の挨拶をしてゐたのを見てちよつと驚いたやうなことが記されてあつた。わたくしも實はあの記事を讀むまではそのことはすつかり忘れてゐた。わたくしは有島氏とは一度も口を利いたことはなかつたやうに考へてゐた。

なるほど、早稻田の恩賜館の會議室であつたか、わたくしたちはホイットマンの三十年の記念祭を催したことがあつた。有島氏もホイットマンについて話してくれられたが、わたくしは自分の話をすませると、急いだ用のために會場から出て行つてしまつた。その時わたくしは戸口のところで有島氏と初對面の挨拶をした。そして別れた。それが有島氏とわたくしとの最初にして最後の會合であつた。

K氏が驚いたのも無理からぬことであつた。わたくしは一度も有島氏を訪はず、又何等私交上の關係をも持たなかつたのであつた。

いつたいわたくしは訪問嫌ひである。人の尊い時間をつぶすことを思へば、どうしても人を訪ねる氣にはなれない。それからやつぱり人見知りといつた風が今にも殘つてゐる。人を訪ねることはよく〳〵の場合でなければすることができない。そのやうなわたくしの性格から一度も有島氏を訪ねたこともなかつた。單に有島氏ばかりではない、わたくしは今日までたゞ一二の先輩をのぞいては殆んど誰れをも訪ねたことはない。心のうちでは訪ねて見たいと思つてゐる人もある。けれどもいざとなれば生來の人見知りと、氣おくれからして誰れをも訪ねない。

有島氏とはその實、氏が自殺された年か或ひはその前の年あたり、一度お逢ひする機會がわたくしたちの間に出來

やうとしてゐたのであつたが、いづれそのうちにと思つてその機會を延ばしてゐる間に、あんなことになつてしまつたのであつた。

芥川氏の自殺を知つたのは落葉松の林のなかに於いてゞあつた。

芥川氏とは住まひもさう離れてもゐなかつたが一度も訪ねたこともなかつた。どこかの講演會で一二度廊下でちよつと挨拶したくらゐのものであつた。五月の末春陽堂の文學全集の講演會が朝日講堂で催された夜、わたくしたちは春陽堂のあるじに招かれて日本橋のさる所で御馳走に預かつた事があつた。その時偶然にもわたくしは芥川氏と隣りして坐つてゐたので珍らしく始めて親しく口を利いた。みんなが何か畫帖に書くといふ段になると芥川氏は自分の顔をうまく書いて「水洟や鼻の先だけ暮れ殘る」と認めた。わたくしが「かすかなる雨ふりてあり草あやめ」といふ句――それはこの初夏東海道の旅で得た句であつたが――を書いてゐたのを、氏はからだをわたくしの方に寄せて覗きこんでゐた。

わたくしはその前夜北國の旅からかへつて來たばかりで疲れてゐたので、中座しようとしたら、氏は「一緒にかへりませう。おい吉田さんを早く歸らしちや駄目だぞ」とそこにゐた女たちにいつた。わたくしは何氣なしに笑ひながら芥川氏の肩を輕く叩いた。それほどその夜の芥川氏は親しめる人であつた。

これが芥川氏との最初のそして最後の會合であつた。

一昨日わたくしは碓氷を下つて來た。

碓氷は雨に煙つてゐた。

雨に煙つた山の姿はとりわけて尊い。

雨につゝまれた山の間からたえ〴〵な雲の間を縫つては溪川が時々銀よりも白い姿を見せてゐる。
雲の間から、また時としては懸崖に沿うて瀧がかゝつてゐる。
普段はさしてとも思はぬ峯までもが、雨の煙るために非常に尊い姿に見える。
雨が尊いのか、山が尊いのか。

雨に濡れた姿は何にかぎらず尊いものである。
横川、松井田あたりのあの青い山を背景として雨に濡れた白壁、こけら葺きの屋根、石を置いた屋根、蠶飼ふ窓、すべてが畫中のものである。
わたくしは旅人となつてそれらの雨に濡れた、窓や、山や、白い壁をながめてゐた。
旅人の心はすべてのものを靜かに柔かにありがたく抱き入れる。
一つ一つの雨の脚までも尊く受け容れることのできる旅の心をありがたく思ふ。
安中あたりの一むらの町をつゝむ雨の朝の空氣の色、朝の空氣につゝまれた白い壁の色、小徑の色、木立の色、桑畑、桐畑の色、そのやうなものをもわたくしはこまかに汽車の窓から觀察することができた。不用意に通り過ぎてゐる人には何の感興をもあたへないであらうが、わびしい旅人の心をもつてぢつと自然の底を見つめると、そこには尊いともありがたいとも思はれるほどなかすかな色なり、トーンなり、ムードなりが、柔かに溶けこんでゐるのを感ずる。
旅人のこゝろはまた日常の生活の上にも向けられなければならぬ。
三等室の堅いベンチにいぎたなく眠りこけてゐる出稼ぎ人風な人たちの顏にもゴルキイの「夜の宿」の心は見出さるゝ。あはれさも、尊さも。

秋近い市場の人々の囂しい聲のうちにも、巷のざわめきのうちにも。

不圖見たる秋の朝の妻の顏、友の顏、巷の人々の顏、灰皿の上の卷莨の煙、茶のけぶり、澄める水の底にも旅人の心はわびしきもの、ありがたきものを見出す。

白い蓮の花が咲いてゐるのを見た。

木槿(むくげ)が咲いてゐるのを見た。

田のなかに草をとつてゐた一人の男は汽車を見ておどけながら踊つて見せた。

旅人の心にはそれもこれもうれしかつた。

旅は儚(はかな)いものである。あてもないものである。身も心も疲れ果つるものである。しかもなほ旅を欲するわたくしの心。

大隅のかなたへ

先生のおたよりは東京を立ちます數日前に拜見いたしました。鹿兒島においでゝございましたらお目にかゝれることゝ樂しみにいたしてゐましたが、大隅の方へお歸りになつてしまひましたさうで、失望いたしました。

わたくしは十八日の夜鹿兒島に着き、翌十九日は磯御殿前の海岸をドライブして、國分から霧島に登りました。櫻島を見ながら磯の波打ち際に月照南洲入水の跡を訪ねました時は、流石に瞼の裏がほてつて來ました。こんな弱い心は、現代の若い人たちは輕蔑するかも知れません。しかしわたくしはそれでいゝのだと思つてゐます。ともかく南洲先生ほど男らしい男、頼り甲斐ある男は何時の世にもまたとあるまいと思ひます。智の人、才の人はありあまるほど生きてもゐますが、たゞ一人の南洲翁はもう後の世にも出ではしないと信じます。マルクスばやり、現代萬能も結構ですが、たしかにわたくしたちの生活には濕ひがありません。義理人情などといふことは、むしろ笑ひの種子になりさうでございます。

淨光妙寺の南洲翁の墓に詣でました時、わたくしは十五歳十六歳の少年たちが翁と枕を竝べて討死してゐることを知りました。士は己を知る者のために死すといひますが、南洲翁のために死んだ少年たちの心は涙なしには受け容れられませぬ。

つひこのころ或る人から聽いた話ですが、十年の役から二十年も經過した後のことです。國分の或る家に泊り合せた旅人はその家の主婦が未亡人であり、主人は十年の役に西郷さんに隨いて行つたきり、何處で戰死したのか消息もないといふことを知りました。

そこでわたくしに話をしてくれたこの旅人はたづねました。「あなたは二十年も空閨を守つておいでだが、あなたの御主人を戰死させた西鄕さんを恨むことはないか？」

ところが未亡人の答へは「西鄕先生を恨むなんて勿體ない。わたしたちは自分の夫がよく西鄕さんの幕下で討死をしてくれたと思つて感謝してゐる。わたしはその時嫁に來たばかりで十八でしたが、わたしたちはみんな自分の夫をはげまして西鄕さんの陣へ送り出したものです。」

今日でも西鄕さんのあたゝかい人情といふものは薩摩の人々の心を一つに抱きしめてゐるやうに思はれます。美しい薩摩の自然！　美しい南洲の情！　わたくしはこんなことを考へながら霧島へ登つて行きました。

I先生。大正十二年の八月でした。わたくしは長い旅に腸を痛めて霧島の溫泉宿に眠つてゐました。わたくしはその夜のことをまだはつきり記憶してゐます。

月が秋のやうに澄んでゐました。わたくしは寢床の上に橫になつたまゝ加治木・國分の低い山や、薩摩潟をへだてゝ櫻島をながめてゐました。旅といふものゝ心細さがしみじみと湧いて來ました。

わたくしはその夜思ひがけなくも先生の御訪問を受けたのでした。先生は交通不便な大隅の海岸から小ひさな汽船に乘り、馬車に乘りして櫻島までわたくしをたづねて下さつたのでした。わたくしたちは一日霧島の處女林を步きました。溪川に沿うて原始的な山間の溫泉場をたどりました。郭公や老鶯が啼いてゐました。

三日目の朝霧の中を先生の馬車が山を下つて行つた時、わたくしは大きな力を失つたやうに感じました。わたくしはその日も亦同じ處女林のなかを一人で步きました。たゞ一人で山をお下りになつた先生のことを思ひながら、霧につゝまれた國分あたりのかすかな燭を見守つてゐました。

I先生、先生はやつぱり情の人でした。あまりに美しい情の人でありました。大隅の山を思ふ時、先生の寂しい眼

はあまりに尊くも、あまりにわびしく、わたくしの胸を打ちます。

I先生、かつて教會をお捨てになつたあなたはさらに一家の團欒をも捨てゝおしまひになりました。あなたはすべてのことに對して正直でした。あらゆる誹謗の中に敢然として行くべき道をお歩きになりました。世間的にいへば先生は家庭の破壞者でありました。ともかくあなたは家を捨て、お子たちを捨てゝ、大隅の涯に寂然たる二十餘年の生活をお送りになつたのでした。

「眞理は尊い。しかし眞理の道は寂しい。」

わたくしは先生を思ふ時いつもかく感じます。

わたくしが巣鴨に住んでゐたころでした。哲夫さんが見えられて

「父は大隅に行つたきりで家に戻つて來ません。もう父と逢ひたいとも思ひません。僕はトラピストに行くかも知れません。このごろはカソリック教會に通つてゐるのですが、時々迷ひが出て仕方がありません」と話しておいでになりました。それから一年ばかり經つてから哲夫さんがふたゝびお見えになりましたが、その時は「僕はこのころ小說を讀み初めました。敎父さんや、仲間の人たちは僕の態度を異端的だといつて非難しますが、僕はさうは信じません。僕はもうすこし實人生について知りたいのです。」といふお話をなさいました。わたくしはその時或る恐ろしいものに撃たれたやうな刺衝を感じないわけにはゆきませんでした。

哲夫さんの魂のなかにすでに先生そつくりの生一本な反逆的な血が流れてゐることに氣付いた時、わたくしは無氣味な深い淵にでも立つてゐるやうな感じがいたしました。若い日の先生御自身がわたくしの前に立つておいでのやうな氣さへいたしました。

I先生、いかにも突然でした。あなたは大隅を出て、あの恐ろしい大震災の二日目に瀧の川のわたくしの家をおたづね下さいました。

わたくしたちはコスモスの花の傍で餘震に脅かされつゝ晝餐をいたゞきました。

午後わたくしは大塚から牛込矢來町あたりまで先生のうしろから歩いて行つたと記憶してゐます。被服廠で幾萬の人が燒死したといふこと、逗子や鎌倉が全滅したといふこと、軍艦で幾千俵の米が運ばれたといふやうなことが辻町の角に掲げられてありました。先生と途中でお別れしてからわたくしは行方不明になつた妻の母を探すために兩國の方へ歩いて行きました。

I先生、あなたは大隅の家をそのまゝにして武藏野の一隅にお住まひになりました。しかもわたくしの家を訪ねてくださることさへ遠慮なすつておいでになりました。「一年に一度くらゐ」とよくおいひになりました。

I先生、あなたが東京に職業を求めておいでになつたことを知つてゐました。わたくしはそのことを、念頭に置かなかつたわけではありませんでした。

高圓寺で電車を捨てゝ、まだ武藏野の俤をゆたかに殘してゐる櫟林や芒の原を横切つて先生のお宅をおたづねしましたのはちやうど昨年の今頃であつたと思ひます。あれつきりたうとうお目にかゝれませんでした。

わたくしはあの時餘程哲夫さんのことをおたづねしたいと思ひましたが、先生に寂しい思ひをおさせすることを恐れましたので、默つてゐました。

「家を捨てた以上は妻もない子もない」先生の御覺悟はさうであつたかも知れません。しかし父と子が同じ東京に住んでゐて……わたくしはいつも先生の御心をいろ〳〵に想像して見ました。氣の弱い先生であるだけに、武藏野の生活がいかにわびしいものであつたらうと思はないではをれません。

I先生、あなたを思ふ時わたくしの眼には美しい球磨川上流の山村の一小塾が泛かんでまゐります。三十人足らずの村童とゝもに、秋の山に栗を拾ひつゝある先生の姿を尊く思ひます。

「僕はあのまゝで山村にゐた方が宜かつたのだ。村の子供たちは泣きながら幾山越えて僕を送つて來てくれた。」と先生はお話しになりました。

「僕はたゞ一人の婦人のために僕の一生をさゝげた。しかしそれを後悔はしない。」とも仰つしやいました。

武藏野の芒の原の中に、わたくしは今もなほ先生の孤影悄然たる俤を描いてゐます。

I先生、わたくしは大隅に廻つて先生に逢つてかへらなかつたことをたゞ〳〵後悔してゐます。先生がどれほどわたくしをお待ちになつておいでだつたらうと思ふと衷心お詫びする言葉もありません。

I先生、あなたは武藏野の家を捨てゝたうとう大隅にお歸りになりました。「武藏野の孤獨からふたゝび大隅の孤獨に還つた。」恐らく先生の生活はさうでありませう。

眞實のために生くることの苦しさ。自己を僞ることのできぬ男の一生の苦しさ。

I先生、家庭は時として天國であります。しかし、それはたゞめぐまれた人にとつて。

もし家庭がめぐまれない場合に於いてはそれは夫にとりても、妻にとりても、子供等にとりても苦行苦煉の世界であります。

ストリンドベルクの「死の舞踏」を思ひ出します。父をあはれといふべきか、母をあはれといふべきか、子をあはれといふべきか。

父に罪ありといはんか、母に罪ありといはんか。

恐らく父に罪なく、母に罪なく……すべてたゞ宿命と申すべきものでせうか。

I先生、あなたを思ふ時わたくしはどうしても不運なる宿命について考へないではをれません。妥協をゆるさゞるがゆゑに、自己僞瞞をゆるさゞるがゆゑに、教會を捨て、家を捨てゝ大隅の海岸に生涯の孤獨を忍ぶ寂人の姿。

高千穗に登つた日でありました。

案内の少年は逆鉾の前に立つて大隅の山を指さしました。霧の上に聳えた大隅の高隈山はいかにも尊く拜まれました。家を捨て社會を捨てゝ靜かに半生の苦行苦難の跡を顧みつゝある寂人の姿を思ふ時、大隅の山は一層尊く拜まれました。

「たゞ一人の可憐なる女を愛するがゆゑに……」ラスコルニコフは敢て恐ろしき殺人の罪を犯しました。古來如何に多くの男性がたゞ一人の可憐なる女を愛するがために家を捨て、生涯を捨てたことでありませう。

一人の可憐なる女、汝も亦悲しき宿命の下に生き、やがて死すべきか。ソニヤはラスコルニコフとともにシベリヤに行かなければなりませんでした。

I先生。わたくしの眼にはなほ霧の上の高隈山が杳然として映つてゐます。そこに別れて來た妻を思ひ、子を思ひ、人間の一生を靜思しつゝある孤獨者の姿が泛かんで來ます。

男と女！　人生のすべてはたゞこの一つの問題に盡きてゐるのではないでせうか。

不思議にも悲しき宿命。幸運なるべきか不運なるべきか。男と女の愛といひ結婚といひ費の目はたゞ宿命の手にあるのみ。

I先生。不運なる人生の賽の目を凝視しつゝ大隅の涯に獨居する寂人の尊き姿を思ふ時、わたくしの心も亦暗きを感じます。

眞理に生きることの苦しさ。

愛に生きることの苦しさ。

たゞ一人の可憐なる女のために、一生を苦しみしラスコルニコフの悲しさ！

I先生。信濃の高原もすつかり秋になりました。わたくしは毎朝落葉松の下に立つて雷鳩の聲を聽いてゐます。

落葉松の葉も散りはじめました。

晩秋詩

こちらむけ我も淋しき秋のくれ（芭蕉）

こほろぎの聲も日ごと夜ごとに細りゆき、玉蜀黍の葉摺れの音も武藏野の黒い土に沈んで行く。いかにも天地寂然として、三界の涯、魂の家をもとむべきすべもなきほどのあはれさを感ずる。

いつであつたか、わたくしはまだ學生時代にディッケンズの小說を讀んだをり、部屋の隅に鳴いてゐるこほろぎのことを書いてあつたのを記憶してゐる。何ういふわけであるか今でもわたくしはこほろぎを聽くたんびにディッケンズの小說のことを思ひ出す。晩秋のあはれさはたしかにこほろぎの聲に盡きてゐる。

わたくしは武藏野の秋を愛する。亭々として秋の空に聳ゆる欅の列樹、欅の林、小高い丘の玉蜀黍畑、行けども行けども盡くるところを知らぬ黒い土、赭い土の道、武藏野の秋はあまりに廣きがゆゑに白雲も疲れ、空も疲れ、道を歩む人々も疲れてゐる。

武藏野の秋はあまりに靜かなるがゆゑに天も思ふことあるがごとく、地も惱むことあるがごとく、行人も亦憂ふることあるがごとく沈んでゐる。

武藏野の原はあまりに廣きがゆゑに道のほとりの野菊、道のほとりの蝗までがもの思ふごとく靜かである。もしわれら死なば靜かなる墓場を武藏野の草のなかに覓めん！　わたくしは晩秋の武藏野を歩むたんびにかく思ふ。

ちかづきの落書見えて秋の暮（一茶）

信濃の奥はもう冬のごとく寒い。飯綱も黒姫も妙高も遠い雪を見せてゐる。

わたくしは信濃の秋を旅するごとに一茶の句を思ふ。

善光寺に詣した老俳人一茶が、善光寺の壁に落書されてゐた幾十年前の長崎の舊知の名を見出した時どんな感慨を抱いたことであらう。たゞ一日ちがひのためにつひにかれは長崎の友と遠き幾山河を隔てゝ永久に邂逅ふ機會を失つてしまつた。かつては崎陽にありて一つ鍋の物をつゝき合つて食べた仲の友であつたものを。

秋の暮の落書。しかもつひに逢ひえざりし悲しみを遺して秋の風は吹く。

人生の思ひ出、人生の百事、すべて秋の暮の落書ではないか。形影相凭るところなき過去の落書のみがわたくしたちに遺されてゐる。

木津川の美しい流れをさかのぼつて、大和伊賀の國境をなしてゐる高原のあたりに秋の草を埋めて咲いてゐた桔梗を見出したことを忘れることはできない。木津川兩岸の修竹につゝまれた靜かな村の美しさは稀に見る風光である。況んや晩秋の空の青さ、山のかゞやかさにつゝまれた木津川沿ひの情趣に至つてはいつまでも忘れることのできぬ思ひ出である。

伊賀の上野の町を愛染院から蓑蟲庵へと古風な俥に揺られながら芭蕉翁の古跡を探つた秋の日を思ふ。

道傍の葉鷄頭に秋のわびしさをこめ、古苑の木影に秋の諦觀を鎮めたかのやうな伊賀上野も亦晩秋の城下町である。

高野の秋、吉野の奥西行庵のほとり、嵐山小督の塚のあたり、陸中平泉の中尊寺丘、秋の老くるにつれて曾遊の地を思ふこと深く、旅を思ふこと切なるものがある。

むざんやな甲の下のきりぎりす（芭蕉）

合掌して古人の句を思ひ、晩秋の詩を思ふのみ。

一茶の故郷まで

S兄。お障りもございませんか。一昨夜十一時二十分の汽車で上野を立ちました。一週間ばかり前、信州から來た人の話で大變寒いといふことを聽きましたので、冬の外套を支度して汽車に乘りました。赤羽、川口あたりまでは憶えてゐますが、それからは冬の外套を頭から冠つて寢てしまひましたので汽車がいつどこに着いたのか少しも知りませんでした。輕井澤ではかすかに夜が明けかゝつて來ました。汽車の窓から、雨に濡れた板庇をぢつと見つめながら、死んだ有島氏のことなどを考へるともなく考へました。草はもう眞冬のやうに枯れてゐました。淡い霜が下りてゐました。

雨につゝまれて淺間はまつたく見ることもできませんでした。しかし草枯れの高原をへだてゝ信濃の連山を一眸の下に見る景色はいかにも雄大でございます。

碓氷はまだ紅葉には早いやうですが、輕井澤から北へ、越後の方へかけて山はもう燃えてゐます。千曲川の上流幾百仭の懸崖に沿うて到るところ蔦紅葉を見ることができます。高原の野菊も今盛りのやうに思はれます。高原の小ひさな驛に汽車が停るたんびに、ちよつと汽車から下りて野菊と蔦紅葉を手折つて來たいと考へたことも幾度かありました。

高原の雲は可憐な雪のやうな野菊の群をかすめて徂徠してゐます。

小諸だの、上田だの、姥捨だの、かつてたゞ名のみに聽いた町や山が千曲川に沿うて指呼の間を走つて行きます。信濃はわたくしにとつて初めての旅だけに、何も彼も印象的に訴へて來ます。

小諸ではかつて讀んだ島崎先生の小說のことをも思ひ出しました。上田城の一廓が桑の畑の間に取りのこされてゐるのを見ました。

信濃の山はまつたくいゝと思ひました。少し寒すぎるとは思ひますが、庇の長い、板葺きの屋根の下で一冬過して見たいとさへ思ふ氣になりました。

「雪が深いでせう？」とたづねましたら、「なあに、幾らも積りません、たつた三尺か四尺ぐらゐです」と柏原の人は言つてゐました。

善光寺さまにも三度おまゐりをしました。今恰度屋根の葺き替へ中でしたが、高い山につゝまれて丘の上に立つた大伽藍を見るのはいゝ感じでございます。

日本國中の人たちがこの高原の大伽藍一つを目あてに遠い旅をつゞけて集まつて來るのかと思ふと、昔のお伽噺にでもありさうなことです。

善光寺さまの後の山には林檎畑がたくさんあります。今がしゆんだと見えて、善光寺さまの町中、どこに行つても眞つ紅な林檎が小山のやうに積まれてゐます。

信濃の蕎麥(そば)を喰べたいと思つて、善光寺さまの仁王門の前の角の大丸とかいふ店の二階で月をながめながら蕎麥を喰べました。

「信濃では月と佛におらが蕎麥」

これで一茶の句の三つの名物を一擧にして味ひえたことになりました。

S兄。今日も朝から時雨が降つてゐます。雨のなかを柏原へ來ました。もう冬のやうに、大きな爐の中には炭火が

かん〳〵と燃えてゐます。旅人は濡れた草鞋を爐の中へ入れながら名物の蕎麥を喰べてゐます。

「これはボラと申す魚でございます。」宿の主人は越後から來た客の前に煮魚を出しては、魚の説明をしてゐます。

ステーション前のちよつとした旅籠屋とはいへまるでお寺のやうにがらんとした大きな家です。わたくしたちが足をあぶつてゐる爐の直ぐ上の天井には、丸い二階の爐の尻があらはに見えてゐます。雪國でなければ見られぬ圖です。

小學校から歸つてゆく子供たちが旅人をものめづらしげに眺めてゆきます。雨が降つてゐるのにめつたに傘といふものをさしてゐません。毛布や、古い外套を頭から冠つて歩いてゐます。いかにも雪國らしい姿です。

自轉車は滅多に見ません。そのかはりに小ひさな純粹な日本馬ばかりです。薪や炭を積んだ馬が廢墟のやうな北國街道の古驛を時雨に濡れながら後から〳〵とつゞいて來ます。繼母の子仙六を負ぶつては一茶がそこいらを歩いたであらうと思ひながら、わたくしは町の眞ん中を貫いてゐる小ひさな流れを見ました。向日葵や白い菊が咲いてゐました。

一茶が晩年を中風になやみながら送つたといふ小ひさな倉の前には小半時も立ちつくして案内の男と語りました。それはほんたうにひどい倉でした。厩の馬が、大根畑一つ隔てゝ時々、旅人の方を見ました。

一茶の四代目の孫といふ人とも語りました。一茶と同じ名の小林彌九郎といふ人です。眉毛の黒く、髭の濃き、見るからに山國の人らしい頑丈な體つきの人です。

柏原の本陣の中村氏の家では不幸ばかり續いて、今でも中村家の人が昔の邸跡の直ぐ裏に住んでゐるさうですが、昔一揆が起つた際に本陣は襲はれて火をつけられたので一茶の物もたいていその時紛失したといふことを聽きましたので、立ち寄りませんでした。

中村氏の本陣の跡には大きな寺のやうな家が建つてゐますが廢寺のやうな感じを抱かせられました。戸はほとんど

とざされてゐました。「今では貸家になつてゐまして、いろ〳〵な人が住んでゐるやうです。」と案内の男は語つてゐました。

一茶が仙六と二人で父からゆづりうけた家は間口九間三尺八寸奥行二十三間一尺かになつてゐますが、奥行は果して二十間以上のものであつたかどうか、雨がひどかつたものですから邸跡を量ることができませんでしたが今現存してゐる倉の位置から考へて見て、どんな風にはかつたものですか？

しかし長野から北に旅をすると家が非常に大きいのに驚きます。十七八間の間口の農家は到るところに見出されます。さうすると一茶の家の大きかつたことも自然に想像がつきます。

雨雲の間からぬつと頭をもたげた黒姫や妙高を俥上に眺めながら白樺の多い木立に沿うて野尻湖に下るころは日が暮れかゝつて來ました。

越後の山はすつかり雨につゝまれてしまひました。雨はどしや降りに降つて來ました。

黒姫も妙高も飯綱も見てゐる間に霧に隱されてしまひました。たゞ白樺の幹と、コスモスの色だけが路傍の秋をさらにうら寂しくしてゐます。

野尻湖に下る坂道に沿うて點々と農家が散らばつてゐます。

「明日の朝、法事の饅頭を取りに行くで。」

一軒の農家から飛び出して來た老爺が、わたくしの乘つてゐる俥屋に話しかけたりしました。

丘の上から暮れかゝつてゆく野尻湖を見出した刹那、旅人の心は自然界の神祕に觸れたやうな感に打たれました。

野尻には一茶の妻の家があつた筈です。

高原靜秋

日ごと落葉松の葉が雪のやうに落ちてゆく。八ヶ嶽の白い斷崖が雪溪のやうに反射して見える。いよ〳〵高原の秋は深まつてゆく。

山の子たちは大きなメリケン粉の袋をかついでは山を下つて來る。中には胡桃(くるみ)の顆(み)がいつぱい詰められてゐる。

食後讀みかけの本を置いたまゝ寢ころんでゐると、庭の草のなかで雉の子のしきりに鳴く聲が聞える。そつと草のなかを覗いて見ると三四羽の雉がきよとんとして頭をもたげてゐる。この春孵(かへ)つた雉の子であらう、態(なり)は大きいが何となく稚氣を帶びてゐる。可憐である。

雉の子は鳴きに鳴く。啄木(きつつき)の聲のごとくわびしく、草の葉摺れのごとく靜かである。半日裏の落葉松の下草のなかで雉の子は鳴く。いかにも秋である。

山の子たちは栗の顆を拾ひ、初茸を狩り、野葡萄の實をあさりはじめた。

山の子たちの嬉戲(きぎ)する聲が空山に谺(こだま)して響く。秋の深まるにつれて山の子たちの聲は朗かに鋭く響く。

信濃(しなの)沓掛(くつかけ)から淺間の根腰(ねごし)を越えて、六里ヶ原を北へ北へとゆけば、白根の煙が草の上に高くなびいてゐる。數年前までは馬の背にまたがつた旅人たちが、六里ヶ原を橫切つて草津の方へ行くのを、毎日のやうに見たものであつた。今は輕井澤から草津まで、高原の電車ができたので、日本畫風な旅人の點景を、淺間の裾野に見出すこともできなくなつた。

午前二時ころ……恐らく高原の夜の空の美しさはそのころであらう。宵の霧が霽れ、まだ黎明の霧が立ちはじめぬ

眞夜中の空は文字通りに星の光りが草の上に落ちさうに思はれる。その午前二時ころに起きて裏の落葉松の下草を分け、落葉松の枝を折つて飯盒飯を焚く。研ぎすました初秋の夜空をこめて白い煙が漂ふ。眞夜中の空の美しさ、初秋の風の冷たさをしみ〴〵と味ひたいためにわたくしは眞夜中に起きて幾度か林のなかに飯盒飯を焚いた。味噌汁を煮た。

黎明の霧が星をつゝみ、草の路を被ふ。さく〳〵と山の土を踏む草鞋の穿き心地さへもたとへがたなくうれしいものである。

わたくしは幾度か黎明の山をながめつゝ六里ヶ原を歩いて行つた。

淺間の根腰の峰の茶屋までは一里半、峰の茶屋からは一里足らずのところに別去の茶屋が一軒ある。天明の淺間の爆發のころ、六里ヶ原には幾つかの村があつたが悉く埋もれてしまつた。今も熔岩の下から時折人骨を掘り出すことがあると傳へられてゐる。その大爆發の時、別去の茶屋だけがたゞ一軒半燒のまゝ取りのこされた。屋根の半分には熔岩がのしかゝるやうにして落ちてゐるのを傾いたまゝに支へながら別去の茶屋は昔のまゝに殘つてゐた。一抱へにもあまるほどな大黒柱が土間の上り框に煤光りしてゐた。土間の廣さは三四十疊もあつたであらう。土間の隅には馬小屋があつて、馬が二頭つながれてゐた。雪の深い國では馬も土間の片隅に置くのが一般なのか、信濃の柏原に俳諧寺一茶の家をたづねた時も、馬は土間の片隅に藁を嚙んでゐた。

信濃沓掛から北へ淺間の腰を上州境に出た刹那に、四千尺の高原がぱつとかゞやくほどに視界に映つて來る。日本の風景としては珍らしいグランド・スケールな展望である。南に淺間、北に白根、この二つの白煙を吐く火の山と火の山の間に抱かれて六七里の間かゞやかな草原を抱いてゐる六里ヶ原はまことになつかしき自然である。

その六里ヶ原にたゞ一軒の別去の茶屋も、二三年前の冬の淺間噴火の時燃えてしまつた。雪が深く草津行きの旅人

も絶えたころだつたので、茶屋が燒けたことが沓掛に知れたのは二日ばかり後のことであつたらしい。

わたくしがこの前別去の茶屋を訪ねた時は九十歳の老婆がゐたが爆發の時はその老婆がほとんど一人で働いたといふ話であつた。

爆發の後さらに新らしく建て直されたといふことであるが、あの古風な骨太な障子戸を立て切り、上り框に沿うて疊二三枚分もありさうな大きな爐を仕切つた百幾十年前の建物を見ることはできなくなつてしまつた。

別去(わかさり)の茶屋から草津の方へ七八町歩いたところに淺間牧場の家が二三戸並んでゐる。牧草と天と雲と相接するあたりを牧場の馬は飛んでゐる。

末は榛名(はるな)の裏山をくゞつて大利根に流れ込む水であらうが、六里ヶ原の草の根を浸してかすかなる溪川の流れが見出される。

「昔はよく追剝が出たものですよ。追剝といへば六里ヶ原にきまつてゐました。それによく熊が出ましたよ。」山の湯に浸されながらわたくしはよく山の人の話を聽いたものである。六里ヶ原の草の中に點々たる道しるべの地藏菩薩の姿は尊く拜まるゝ。

最初に六里ヶ原を横切つた時はまだ今のやうに自動車も通はず、ちやうど淺間葡萄が實つたころだつたので、二三日前熊が出て來たといふ噂に多少の警戒をして行つたものであつた。

山に熊がゐるといふことは一面危險なやうな氣もするが、もし熊がゐないとしたら寂しいことであらう。山に登る氣分の大半は危險に對する警戒、細心、緊張を特色としてゐる。

熊も殖えよ、鹿も殖えよ。山に登るたんびにわたくしはさう思ふ。

秋に入つたので山では何としても熊の話が多い。同じ熊でも北海道の熊のやうに大きく、獰猛であるのははなはだ危險であり、あれではあまり殖えられては困るが、わたくしのいふ熊は内地のおとなしい愛すべき熊である。内地の熊だけはなるべく保護して置きたいものだと思ふ。山の神聖のためにも。

山にはもう楢や樫の實がみのるころである。子を伴れた熊も追々に山を下るであらう。楢の幹に登つて枝をたわめながら楢の實を食つてゐた熊を見て驚きかへつて來た男の話などもよく出て來る。

足尾の奥で子熊に石を叩きつけたところ、仔熊の悲鳴をきゝつけて頭上の楢の木から母熊がどしんと飛び下りて來たといふ話も聽いた。

徳本峠を越えて島々に歸つて來る途中で、峠にやすんでゐた山の男たちが穂高の雪溪を今熊が歩いてゐたといつて指さしてゐたのを見たこともあつた。

いづれにしても秋の山を歩く者にとつては熊は神聖なる山の物語の主人公である。

熊について思ひ出すのは北海道へ旅した折、札幌の大學植物園内で見た檻の中の熊である。いかにも北海道産の熊だけに大きな熊であつたが、三歳といふ仔熊だけにあどけないところがあつた。

その日わたくしたちは月寒の牧場を見るつもりだつたが、時間がすこしあつたので、先づ植物園へ行つて見ることにした。早稻田の杉森先生と同行であつた。

植物園にはいつて間もなくわたくしたちは三歳熊の檻に打つ突かつた。

熊はわたくしたちの接近するのを見るや、叩頭する眞似をしては手を檻の外に出した。いかにも可憐なる仕草である。そこいらに落ちてゐる菓子やビスケットを拾つてやれば　熊はふたゝび叩頭しては柔和な眼で　わたくしたちを眺むる。

「これはいゝ、これは可愛いゝ……」杉森先生は子供のやうになつて喜ぶ。

熊に興がる先生を無理に熊の檻の前から引き離してわたくしたちは月寒の牧場へ急いだ。

ともかく札幌植物園の仔熊はいつまでもわたくしたちの心を惹きつけてしまつた。

それにしても熊の大きさに比較してその鐵の檻の小ひさゝ、そのコンクリートの床の冷たさはいたくわたくしたちの心を暗くした。

可憐なる仔熊は罪なくして狹い身動きもならぬほどの鐵の檻に囚へられてゐるのであつた。札幌の名譽のため、大學の名譽のためにもあの熊の檻はもつと廣く、もつとコムフオータブルなものに改めらるべきである。

これは三年前の見聞であれば、或ひは今ころはあの熊の檻は造り替へられてゐるかも知れないが、わたくしは時々札幌の植物園の熊を思ふことがある。

その翌日わたくしたちは熊へのお訣れと思つたのでビスケットを購めてふたゝび植物園を訪れて行つた。

八月の初めころから山の櫻の顆が眞つ紅に熟れて花のやうに美しい。いつたい山の木の實は花のやうに紅く美しいものが多い。秋になれば高い山といふ山の木の實は紅葉にも劣らぬほどの紅さを競うてゐる。その紅い山の木の實を目がけて渡り鳥の群が集まつて來る。渡り鳥の群を呼ぶために山の木の實は紅く燃えるのでもあらうか。

眞白な雪溪を背景にして珊瑚よりも紅い山の木の實が熟れてゐる。木の實をかすめて霧が湧き、渡り鳥の群が飛ぶ。

わたくしの落葉松の中の家の前に小ひさな流れがある。美しい水である。このほどは五尺ばかりの蛇の抜け殼を二つその水のほとりで發見したが、つひ半月ばかり前まではよく水鷄が水際の葦の中で鳴いてゐた。

水に沿うて深山櫻が一本ある。眞つ赤な櫻の實をたづねて毎朝五六十羽の渡り鳥の群が飛んで來てゐた。二三日前

夫婦づれの山の人が來て、藥物にするといつて櫻の實をすつかり取つて行つてしまつた。それつきり渡り鳥の群は櫻に來なくなつた。山住まひの身にとつてはかなり寂しいことである。

芒の穗が枯れ、萩の花がこぼれ、靑鳩のみが山の靜寂をふかめて鳴くころになつた。

淺間牧場の馬や牛が一日一日と里の方へ連れられてかへる。その馬や牛の背のみが草の上に見出さるゝ。わたくしは牛日草の原を歸つて來る牧場の馬をながめて暮すことが多い。

いつの年にも母馬に連れられた仔馬を見出す。今年も每日のやうに仔馬を連れた母馬は荷車を引いては牧場から淺間の根腰を越えて沓掛の町へ下つて來る。仔馬は先になり後になり、時としては道草を食つては一町も遲れては驚いて走りつゝ母馬の跡を追ふ。そのすがたはいかにも可憐である。ユウモアに充ちてゐる。微笑ましい氣にもなる。

しかしやがて仔馬も三十圓か四十圓の金に賣られて行くのかと思ふとあはれである。高原の秋のさびしさの一つである。

いつの間にか野菊が咲いて來た。

信濃の高原の秋を特色づける花の一つは野菊である。わたくしはこのあたりの高原の野菊にまさる美しき野菊をあまり見たことがない。それはたしかに雪のやうなといふ形容によりてのみ想像し得らるゝ野菊である。落葉松の下に或ひは秋草の路邊にむらがり咲き、懸崖に沿ひ、山徑をうづめて咲いてゐる。雪のごとく。

野菊とともに信濃高原の秋を飾るものに野葡萄の葉がある。落葉松の幹にまとひついて炎のごとく燃えてゐる紅葉は野葡萄の葉である。

去年の十一月、紅葉はやゝ過ぎたころであつた。わたくしは岩村田から御代田に出て、追分から沓掛に車を走らせたことがあつた。追分、沓掛、輕井澤の三宿は昔は各千戸の軒をつらねて北陸、中仙道の旅客の足を留めた驛路であつたが、輕井澤の別莊地はともかくとして何れも秋蕭條たるものである。枯れ枯れな草の中に北陸街道、中仙道の岐れ路を見出した時はさすがに懷古的な感慨に擊たれないではをれなかつた。

追分の町跡には今二三十戸の舊い建物を遺してゐるばかりである。本陣油屋の名によつてわづかに昔の宿場の俤を偲ぶのみである。わたくしたちは草の中、木立のほとりにその昔の繁榮の跡を想像することができる。庭の石であつたらしいもの、庭の木であつたらしいもの、礎の跡。蕭殺たる秋雨の中に佇んで感深からざるを得ない。

頽塘の宿場の跡に何といふ可憐な野菊の花であらう。

恐らく宿場の若い女たちが一夜の情を賣り、一宿の別れをかこつ朝にもあの野菊は咲いてゐたことであらう。まことに雪のごとく白く霜のごとく寂しき花である。

信越線を碓氷峠を越えて信濃の高原に入る秋の旅人たちは黎明の汽車の窓ちかくこの可憐なる野菊と、燃ゆる野葡萄の葉の美しさに秋の魂を感ずるであらう。

落葉松の葉が落つるごとに秋は靜かに深まつてゆく。

石を並べたこけら葺きの屋根の上に霜が下りるのも間もあるまい。屋根に這うた南瓜が紅く熟れるころになれば高い山には雪がほのかに白くかゞやく。

雪袴を穿いた山の人たちが、冬ごもりの支度に木を伐る斧の音もわびしくこだまして響くやうになる。

天城の春

あわたゞしい年の暮の仕事だけを片付けてしまうころは、もうわたくしの神經はくた〳〵に疲れはてゝゐる。暮の二十九日か三十日ころ東京驛を立つころはもうわたくしは汽車の窓にもたれかゝつてはじめて救はれたやうな自分自身を感じてゐる。そこには訪客もなく、仕事といふものもない。空を見れば冬の雲がいやが上にも寒く、白く悠々として飛んでゐる。空は海よりも靑い。久し振りにボヘミヤンのやうな自由なのび〳〵した呼吸を感ずることができる。大磯、國府津あたりからおひ〳〵に旅といふ感じがわきはじめる。海の色がかゞやきはじめる。

箱根を越ゆる。たゞその一事だけでもいかにも旅に出たといふ感じをはつきりとさせられる。箱根はいゝ山である。箱根まではまだ東京といふものゝあわたゞしい生活がこびりついてゐるやうであるが、冬枯れの箱根を一つ越ゆれば、豁然として東京といふものから切り離されてしまう。今まで夜も晝もわたくしの魂に冷たく纏ひついてゐた東京のあわたゞしい生活の鏈が箱根を越えた刹那にいかにもすが〳〵しう斷たれてしまう。

わたくしは何のかゝはりもない旅人として雲のごとく、風のごとく、冬枯れの駿河の山を見、笹原を見る。御殿場あたりから神々しき富士の峰を仰ぎ、遠く裾野の冬草の上に駿河の海をながむる時、たしかに旅人の魂は飛ぶ。狩野川の水はいつも靑く靜かである。岸にはすでに眞つ紅な椿が咲き、梅がちらほらと春を待ちげに薫つてゐる。

わたくしは大晦日の夕暮の山寺の情趣を愛する。終日裏伊豆の蕭條たる谷々を托鉢した雛僧たちは夕暮に山門をくぐつて、冷たい甃に疲れ果てた足を引き摺つてゐる。庫裡の緣には托鉢の編笠が脫ぎ捨てられてある。暗い土間では雛僧達が山寺らしいお正月の支度をしてゐる。大根を切る者、午蒡をそぐ者、昆布を煮る者。

本堂では除夜の勤行が始まる。凪につれて夕暮の鐘が鳴る。

湯治客たちはもの珍しげに御堂の御あかしや、庫裡の榾火をながめる。

除夜といつても、温泉場ではもう九時にもなれば眞夜中のやうな感じがする。谿川の音のみが枕頭に迫る。

大晦日の夜ほどなつかしい夜はない。いかにも嚴かな夜である。どんな人でもあの除夜の鐘を聞けば人生について思ふであらう。旅に居ればなほ更に除夜のわびしさを、除夜の深さを感ずる。

たゞ一夜明けたばかりで春の山である。たゞ春來たると思ふばかりでも何となくうれしい。ほがらかな心がわく。

天城にも、十國にも乙女峠にもほんのりと化粧雪が積つてゐる。

狩野川の白い早瀨に沿うた梅林にはうぐひすが笹鳴きをしてゐる。萬歳の皷の音も春の山にこだましてのどかである。

枯れ草を分けて伊豆の芝山にのぼれば、形よく、程よき松の小蔭に道しるべの地藏尊は富士をまともにをがみつゝ春の風に吹かれておはす。松の下に草をしきて春の富士をながむれば世のなかのわづらはしさも打ち忘るゝ。

芝山の裾に川があり、川に沿うて白い道がある。晴れ著の山の人たちが打ちつれて湯の町から家路へと道をたどる。

天城を越すガタ馬車の幕もけふばかりは紺の香もあたらしく、馬のたてがみも美しい色どりにかざられてゐる。

旅から旅をへめぐり歩く旅の藝人たちが伊豆の谷々のまばらな家々にたゝずんでは唄をうたふてゐる。三味線を抱へた女、唄をうたふ女の姿は二十年も前に都會の街頭から失はれた古風な面影である。なつかしくもあり、あはれでもある。伊豆の芝山の靜かな春の日はうらぶれの旅の男をも女をも一樣につゝんでゐる。

お正月になれば、そして春の山を見、春の海を見れば、春の富士を見ればいかにも日本に生まれたことのありがたさを思ふ。なつかしさを思ふ。何となしになつかしく、何となく尊く、うれしいのはこの美しい自然につゝまれた日

本の正月である。

下田街道に沿うて椿の多い狩野川のほとりを歩いてゐると、たまく厩のなかゝら二三頭の馬が首を突き出して旅人をながめてゐる。それすらが春のやさしい情趣を添へる。

一つの芝山を越ゆればきつと春の富士が銀よりも白く聳く青い空にそびえてゐるのを見出す。さらに一つの芝山を越ゆれば春の富士がさらに近く、さらに嚴かに、さらになごやかに天に懸かつてゐるのををがむ。

天城の谷にものどかな羽子の音が聞える。魂の底までもしみいるばかりの靜かな音である。

あたゝかな伊豆の小川には燈心草が流れにゆられてゐる。川柳の芽がかゞやいてゐる。

遠い枯れ枯れの草山の雪をながめながら旅人は春をよろこび、春のわびしさをかなしむ。

旅人

奥の旅

偶然にもその日は芭蕉忌にあたつてゐた。北にすゝむにつれて山の雪は深く、かゞやいてゐた。
那須野の荒寥たる、伊達も黒塚のあたりもたゞ曇りがちな月明りの下に杳然としてつらなつてゐた。
「奥の細道」によれば芭蕉が日光に詣拜したのは四月朔日になつてゐる。それから行を起して、白河を越え、黒塚の岩屋を見、飯塚の里に佐藤庄司が舊館を訪ふたのは早苗とるころであつた。
わたくしは鞄の中から「奥の細道」を出して讀みながら、月の下の黒い山や、地の涯の明滅たる町の燭を拾ふてゐた。まつたく東北の旅は落莫たる感じを喚び起す。走れども走れども冬枯れの野ばかりである。
汽車の中があまり熱いので寒暖計を覗いて見た。八十度である。外套を脱いでもまだ汗が出る。これまでの冬の旅の經驗ではいつもこの殘酷なヒーター責めのために咽喉と氣管支をやられる。冬の旅で一番不愉快なものは、汽車のヒーターである。ちくちくと針で刺すやうに右の胸が痛んで來た。旅に出たことを後悔する氣にもなつた。去年の冬汽車中で發熱して、伊豆の温泉で寢てしまつたことを思ひ出さずにはをれなかつた。
名取川は月の下に白く流れてゐた。
「名取川を渡つて仙臺に入る。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。こゝに畫工加右衞門と云ふものあり……」
「奥の細道」で畫工加右衞門といふ男を「風流のしれもの」と芭蕉はいつてゐるが、今でも仙臺にはそんな人が住んでゐるやうな氣がする。寒い夜の風に吹かれながら歩いてゐると仙臺の町は田舎の京都といつた感じがする。地方に

行つて落ちついた、のび〳〵した町を歩くのはいゝものである。

芭蕉は四五日逗留して宮城野を歩き、松島を訪ねてゐるが、「宮城野の萩茂りあひて秋の色おもひやらるゝ」といつてゐる。わたくしは冬の東北をたづねて來た。しかし幸ひに秋の色はさすがにまだどこかに殘つてゐる。枯れ〳〵の野を、こゝにもかしこにも杉の木立があり、程よき丘がある。木立も丘も散り殘つた雜木の紅葉にかざられてゐる。雜木は櫟、楢のたぐひが多い。地の色が黑く、空が暗いせゐか、關東關西の旅に比べて頼りないが、遠い雪の山までも旅人の心は惹き入れられてゆくほどに靜寂である。走れども走れども遠い雪の山を見るのはうれしい。どこにも見出されぬ東北の旅特有の情趣であらう。

多賀城のこと、壺の碑文のことは度々聽いてゐたが、汽車を降りて訪ねる暇もなかつたので、陸地測量部の地圖をひろげ汽車の窓から大體の見當をつけて南の方を眺める。

そこにも程よき丘阜が連なり、杉の木立あり、炭を焚く煙が漂ふてゐた。

「奧の細道」にある奧淨瑠璃を語る法師は今もゐるものであらうか。冬枯れの遠い山沿ひの村里を見るごとにわたくしは古風な琵琶法師を頭に描いてゐた。筑紫の平原を歩く旅人は恐らく今でも盲目の琵琶法師たちが門付をしてゐるのを見出すであらう。物語をうたふて門ごとに錢を乞ふ邊土の唯一の昔の遺風は何處の地でも琵琶法師によりてのみ殘されてゐる。盲目の法師であるだけに一層昔を思ひ出させる。あはれである。

伊豆沼は汽車に沿ふた靜かな沼である。前景に枯れ蘆の中を行く馬上の人影があり、後景に遠山の雪がかゞやいてゐる。沼に映つた紅葉はなほ捨てがたく思はれた。鹽釜あたりを見物して來た人たちであらう。五六人の男がどかどかと車に乘つて來た。酒に醉つた一人の男がしきりに伊豆沼の話をしてゐた。沼の中ほどに水禽の群が下りてゐた。雲の影も沈んでゐた。このあたりでは農夫たちはみな馬に乘つてゐる。蓑の形が關東關西と全然異つて袖がついたや

うな恰好になつてゐるのも珍しい。

一の關の北に城跡らしい丘がある、たしかに城跡であらう。杉の木立につゝまれた古刹がある。こゝに來ればすでに平泉のおもかげをとゞめてゐる。

南すれば冬の田をへだてゝ平泉の山が寒げに迫つてゐる。

雪が早いせゐか、麥を播くことが東京あたりより早いと見えて、麥は十一月の半ばだのにすでに二三寸にも伸びてゐる。蕭條たる冬の山につゝまれた感じが、二三寸の麥のために思ひがけなく明るくされる。

北上川を南に見た丘の麥畑の中の小ひさな停車場、そこが平泉の驛である。昔はそのあたりは、何々の館などが立ち並んでゐたところである。柳の御所、伽羅の館などが今は麥畑になつてゐて尋ねるすべもない。または北上川の底に沈んでゐるものもある。

「三代の榮耀一睡の中にして」と芭蕉は書いてゐるが、まつたくあまりにひどい變りやうである。

北上川の砂利を運ぶためのレールが川底からステーションの方へ引かれてある。ステーションはすこし小高いところになつてゐて、川の方へスロープを描いてゐる。レールの兩側は一面の麥畑で、今は施肥時期なのか、農夫たちはしきりに黑い土を起してゐる。そこいらは芭蕉が「秀衡が跡は田野に成て」と記してゐるあたりである。

毛越寺を遠く左の田の中に見ながら東南の方へ家まばらな道を歩む。

何々の館跡などゝ印されてあるが、みな冬枯れの草の中である。

義經の高館の跡にのぼり、直下の北上川をへだてゝ束稻山をながめ、さらに雲の下の洞然たる奥地を見ては芭蕉ならずともどんな男でも涙を落すにちがひない。

平泉の諸所でわたくしは義經の繪や、木像を見た。若い、美しい武將である。今に至つてもわれ〳〵の誰にも愛せ

らるゝ武將である。その一生はまことに氣の毒であつたが義經といふ名はいつまでもわれ〳〵の間に愛せらるべき名である。いかにも悲壯ではあつたが、羨ましい一生でもあつた。平泉をたづねて一層かういつた感じが深くなる。長い傾い一生よりも、悲壯な花やかな義經の一生はめぐまれたものであつたとも考へられる。

中尊寺はいゝ位置にある。北上川を南西に瞰下する丘阜の上にある。

老杉の木立の下の光堂、經堂、辨天堂のほとりに至つて人ははじめて平泉を訪れたことをこの上もなくうれしいと思ふ。

「經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉既に破れ金の柱霜雪に朽て既に頽廢空虛の叢となるべきを四面新にかこみて甍を覆つて風雨を凌ぐ。暫千歳の記念とはなれり」芭蕉の短い一文で光堂のあはれさは盡されてゐる。

光堂のあたりたゞ二三株の紅葉が散りもせで火のごとく燃えてゐるのを見た。

光堂を出でゝ、辨天堂の横から白山社の裏に立てば崖の下に衣川が横たはり、西してやがて北上川と結びついてゐるのを見る。

滿目眞に蕭瑟である。日本の涯かとも思はるゝほどのわびしさを見せて、たゞ低い山のみが雪雲の下につらなつてゐる。

芭蕉をして「義勇忠孝の士也」と歎稱せしめた和泉三郎の城跡は左手に、琵琶の柵の跟をのこして空山いたづらに冬の日につらなる形である。

日は傾いて來た。ばら〳〵と落葉を打つて雪が降つて來た。

茶の花

伊賀上野の蓑蟲庵を訪れたのは秋なかばの時雨欲しげな日の午後であつた。薄曇りの空には煙ほどの雲がかすかに動くともなく大和境の方へ動いてゐた。軒の低い小暗い京都風な店を並べた街が、大和や伊勢境の高い山を背景に、いかにも落ちついた風に或る時は南北に、或る時は東西に流れてゐる。町を東西に走る時は鈴鹿の山を眺め、南北に走る時は伊勢路の山であらうか高原の稻田をへだてゝ寂然たるを見る。

落葉むすばかりにつもりて、枝古り、苔ぬれたる蓑蟲庵の木立に凭りてふと見出したのは、枯枝に身を寄せ、病葉の蔭にうづくまりて、幾年月の夢を結んでゐる蓑蟲の姿であつた。

時雨催ひの空をかすかに風の音する毎に枝はいさゝか秋らしきわびしさにゆらぎ、葉は寂びて落ちては石を撃つに、蓑蟲は眠りから覺めようともしない。

わたくしは芭蕉が信濃の旅の夕暮れに山徑にねむりたる乞丐を起こさんとして、手をとめ、ねむりたるまゝに捨て行つた日のことを思ひ出した。

「おきなおきな起きばうき世の秋を見む」

伊賀の高原にもすでに秋はたけて、時雨は一村のちかくに、一藪のほとりまで近づいて來てゐる。蓑蟲の蓑深く打ちこもりて浮世の秋を見ず、浮世の時雨を聽かぬげに眠つてゐる姿のあはれにも、いぢらしくも思はるゝのであつた。

ちゝとなく蓑蟲の音にひとりの秋を心ゆくまで思惟し、徹し悟つたであらう寂人の姿も今はそこの落葉の上にも、池のほとりにも、石の上にも見るすべもない。

幻と悟ればこそ人間の世はうれしく、幻と悟ればこそ人間の世はわびしく、人もうれしく、人もしたはし。
蓑蟲の蓑をかりて人間の世の悲しみを、人の思ふ心の苦しさを、時雨の音を忘るゝ日のあらば。

×

明月の夜。雲を洩るゝ折々の月の光りに誘はるゝまゝに小路より小路をたどる。
或るしづかな坂のほとりに、色白の女一人、しきりに格子の下の五尺ばかりの櫻の枝をはさみで剪らうとしては枝をたわめてゐる。
女は二度三度はさみに力をこめては枝を剪らうとした。枝はやはりいつまでも元のまゝであつた。
女は何のために櫻の枝を剪らうとしてゐるのか。秋の月は折々雲間を洩れては女の白い顏を照らす。明月の夜、櫻を剪る女を見ることが何とはなしに惹かるゝ心地して、わたくしはそこに立ちどまつてゐた。
まつたく人通りはとだえてゐた。女ひとりがいつまでも明月の下に櫻の枝を剪らうとしてゐた。

×

庭前四五尺のところに三尺に足らぬ萩二本を植う。ことしは植ゑかへたため痛んだのでもあらうか、たゞわづかの花がうら一尺ばかりの間にちらほらと、秋になつて咲いた。萩に隣りして鷄頭二本。これもはなはだ見ばえなき咲き方。
蓑垣の根に這はせて植ゑた美男かつらの葉裏にふと、茶の花に似たる可憐な花を見出した。その名に似ず美男かつらの花は寂びてゐる。
この秋のわたくしの貧しい庭の花といへば、たゞこの三種の花のみである。
昨日雨の中を駿河に歸つて行つた大井川畔の友人は、この秋は駿河の茶の實を送つてくれる約束をしてゐた。
幾年かの後にはわたくしの庭には駿河の茶畑の花が一色殖えることであらう。

わたくしは友人から送つて來る茶の實を待つてゐる。
しかし茶の花が咲くころは、わたくしはまたどこかへ居を移してゐることであらう。
一つの家から一つの家へ、一つの土地から一つの土地へと一生放浪者のやうに轉々として移りあるく人間にとつて、茶の花を殘してゆくことは一番ふさはしいことであるかも知れない。

句の味と旅

去年の秋伊賀の上野に芭蕉の故郷塚を訪ねた。愛染院といふお寺のなかに故郷塚があるが、そこは昔の士族町であらう、修竹などの繁つた森閑とした邸だの、くづれかゝつた築地などがつゞいてゐる。何でも愛染院の裏手の方向で、やはり修竹の繁つたあたりに芭蕉の兄の家があつたやうに聞いた。秋であつたせゐもあらうが、いかにものんびりした高原の町といつた感じである。

愛染院で芭蕉の塚の前にぬかづいて、庫裡の方でいろ〳〵な遺物などを見せてもらつてから俥を走らせて、蓑蟲庵まで十五六町のところをたづねて行つた。

蓑蟲庵は今は土地の物持ちの別荘にでもなつてゐるらしく、誰も住んではゐなかつた。隣りの小ひさな家にゐる人が管理をしてゐるらしく、その家にたづねて行つたら五十ばかりの女が出て來た。生憎腹痛だとかいふのを、わざわざ起きて來て案內してくれた。二百坪ばかりもあらうかと思はれる邸のうちは落葉が一二寸も積つてゐて、ほとんど飛石を埋めてゐるやうなありさまである。松の枝にも、櫻の梢にも、蓑蟲が眠つてゐる。

もう今にも時雨が訪れて來さうな庭の小暗い隅々に蝸牛と蓑蟲が、しつかりと黑い枝にかぢりついて眠つてゐる。恐らく芭蕉がそこの池のあたりを逍遙した時雨のころから、眠りつゞけてゐるのではあるまいかと思はるゝばかりによく眠つてゐた。

濡れ緣に腰を卸して不圖思ひ出したのは、

こよひ誰れ吉野の月も十六里

の句であつた。
そして芭蕉のあのたゞ一句の味が初めてほんたうに分つたやうな氣がして、うれしくてならなかつた。
「夏草」の一句を味ふためにはやはり平泉まで旅をして見なければなるまい。
「馬に寢て」の一句を味ふためには東海道をかち歩きして小夜の中山を越えなければなるまい。
數年前駿河に入り、阿部川をわたり、宇都谷峠を越え島田の町に泊つた時、わたくしははじめて「梅若菜」や「駿河路や」の味がわかつたやうに思つた。芭蕉の句を相當に理解するだけでも、十年や二十年の旅の生活が必要といふことになつて來る。
わたくしは別にたいして欲望も持たないが、せめて一生の間に芭蕉の句を味ふために芭蕉が歩いたところだけは、歩いて見たいやうな氣がする。そして芭蕉の句の味だけでも分るやうになつて見たいと思ふ。

信濃沓掛にて

この夏から信濃の諸處で一茶の百年祭のことが噂されてゐた。八月八日の早朝わたくしは沓掛の宿から越後高田への旅に出たが、長野驛から乘り合せた二十人ばかりの新聞記者らしい人々の一行もその事に關聯して一茶の故鄕柏原におりるのを見た。越後の高田でもわたくしはいろ／＼た人々から一茶百年祭のことについて聞いた。その後東京でも大阪でも一茶についての何等かの催しが行はれたり或ひは行はれつゝあるやうに聞いてゐる。昨日と今日は柏原からわづか離れた野尻湖でも三尺球の大花火を揚げるなどゝいふ噂がこの沓掛あたりまで傳へられてゐる。たゞし三尺球の花火と一茶百年祭が關係してゐるのかどうかは知らぬが、ともかくことしの信濃の秋には柏原の俳人一茶の百年祭を中心として信濃の人たちの意氣軒昂たるものが見出されるやうな氣がする。當然信濃の人たちはこの偉大なる鄕土の詩人のために大に記念すべきものを記念し誇るべきものを誇るべきである。

かつてわたくしたちは近松巣林子の記念祭を見出した。わたくしたちはさらに芭蕉の記念祭を見出すべきである。西鶴や南北のそれを見出すべきである。このやうな人類への立派な貢獻者の一つの記念祭を持つといふことは三つや四つの內閣の改造や更生を持つことよりも國民の精神を淨化することにおいて、更新することにおいて幾十倍の力を持つてゐる。このやうな詩人の記念祭に際してはもつと／＼日本中の人が神經を新たにしてわれ／＼の祖先のうちに見出さるゝ力強いもの、偉大なものゝ前に感激しなければならぬ。數年前藝術敎育といふ言葉が一般の敎育者の間に行はれた。しかしそれもいつの間にかあまり聞えなくなつた。藝術敎育の一番好適な機會はこのやうな場合である。日本全國津々浦々の小學中學の先生がこの一機會において、かつて眞に生き、かつて眞に人生を苦しみ生きて行つた一

俳人について、眞實の人間について語るといふことはどれだけ若い人々の魂を深くするか知れない。

一茶ばかりではない、わたくしたちはその祖先の中に多くの立派な藝術家を持つてゐる。思想家を持つてゐる。眞實に人生を苦しみ生きた人々を持つてゐる。その人たちを思ふ時わたくしたちは日本人として生まれたことを勇氣づけられる。

一茶の百年祭が比較的廣く、比較的多くの人々の頭にかすかではあるが記憶せらるゝやうになつたのは、一茶その人の生涯、その作品の持つ本質的な價値によることは無論であるが、一方では社會の機運といふものが數年來餘程日本自身に還つてゆくといふ傾向を生じてゐることも一原因であると見ることができよう。誤り傳へられた膚淺なはゆる文化式生活や思想にはわれ〳〵は飽きた。わたくしたちは日本人として自分自身のものを作り出さなければならぬ。わたくしたちは日本の國語を愛さなければならぬ。日本人として生きなければならぬ。日本の文學の眞の味を噛み分けなければならぬ。日本の土を知らなければならぬ。徹底的に日本人として生きなければならぬ。イエッやシングはアイルランドの作家であつた。チエーホフはロシアの作家であつた。その意味でわれ〳〵の間からは眞に日本の作家が出でなければならぬ。うぬぼれでなくわれ〳〵はそれだけの勤勉と精進を持たなければならぬ。もうそれだけの自信を持つてもいゝ時代に達したのではないか。

先に近松の三百年の記念祭を持つたわたくしたちはこの秋は一茶の百年祭を持つた。このやうな人々のために記念祭が行はるゝやうになつた今日の時勢といふものを考へたゞけでも文學にたづさはる人々にとつて昔の人々の想像もしなかつた幸福な環境が或ひはアトモスフイヤが釀されつゝあることを感謝したい。しかし物事はいつも利弊相伴ふ。藝術を要求さるゝことの多い時代の作家たちは幸福の半面において如何にその魂をスポイルされ易いことよ。元祿以後の俳人が、一種の高等幇間に墮してしまつたことはそのいゝ例である。

わたくしは一昨年柏原に一茶が住んでゐた菜畑の中の籾倉をたづねた。さらにあまり豐でもなさゝうな一茶の子孫といふ人とも語つた。わたくしはこの文を書いてゐる時恰度ドストエフスキイの子がモスクワで餓死したといふ外電の記事を讀んだ。文學者と子孫といふことについていろ〳〵に考へさせられる。そはともかくとして一茶自身の生涯があらゆる人間の苦楚を嘗め盡くし、悲劇の絕頂とまではゆかずともほゞそれに近い人生を終始しなければならなかつたことを思ふと、冷嚴な人間の運命の前にぢつと頭を下げて恐れをのゝかずにはをれない。と、同時にそれらの悲劇にも不遇のなかにも踏みにじられることなく芽生えた眞の人間の惱みの藝術の尊さの前に頭を下げないではをれなくなる。

信濃の奧ではすでに雨の日は炬燵を出してゐる家もある。一茶もかつて見たであらう信濃の高原の野菊も咲きみだれてゐる。

これがまあつひの棲家か雪五尺

散々に一茶の一生をいぢめ拔いた越後境の山の雪を見るのも遠くはあるまい。

夜空

まだ月が殘つてゐるのかも知れぬ。西の空を負ふて東向になつてゐるわたくしの家の緣端から空を覗いて見ると、幾らかそれらしい光りが七月の夜空に漂ふてゐる。

夜が更けたので滅多に人の跫音も聞えぬ。庭を掩ひ盡すほどにこんもりと繁つた木立の間で、急に小鳥が羽ばたきをして、梢の間を騷ぎながら啼いた。梟にでも追はれたのではないだらうか。

今日は珍しく庭に來て聽き馴れない小鳥が鳴いてゐた。かけすの一種だらうかと思ふ。

あまり日中は暑かつたので庭には水を撒いた。敷石の上に溜つた水を見出した雀が五羽も六羽も來ては紫陽花の下で、水を浴びてゐた。

瀧の川にゐたころは臺所の裏の梅の下に御飯を撒いて置くといつの間にか雀の群が集まつて來てついばんでゐたことを思ひ出す。

朝起きて落ちついてあの單調な雀の鳴く聲を聽いてゐるのも面白い。眞晝間砂の中にもぐつてゐるのを見たり、夕燒けの空を背にして屋根の上に囀つてゐるのを見たり、雨の日に濡れそぼちながら電線の上にとまつてゐるのを見たりするのも面白い。もしわたくしたちの生活から雀を取り除いたとしたらかなり寂しいことであらう。

今年もまた新しい精靈を迎へなければならぬ。新盆には切籠ときまつてゐるが、あまり寂しさうに思はれるので、普通の燈籠にした。

電燈を消してしまつて、軒端にたゞ一つの燈籠を點して、ぢいつと暗い空を眺めてゐると我ながら殊勝氣な心が湧

いて來る。香でも焚いて瞑默して見たいやうな落ちついた心持ちにもなる。

迎へ火を焚いて、遠い世界からの精靈たちを迎へるといふやうな心持ちは過去の時代の人達の美しい想像であつたにちがひないが、昔の人々の生活には詩があつた。草市といふ名を聽いたゞけでも夏の夜の靜かな詩を思ひ出させる。

朝の新聞には今夜は七夕祭だと書いてあつた。しかしやはり七夕は陰曆の七月七日でなければ、天の川がそれらしく浮いて來ないから面白くない。いかにも鵲の群を聯想せしむるほどに銀河が白くかゞやいて、北から南へ地平線から地平線へと幅廣い一脈の洪河を描き出すのは、もう秋を偲ばせる涼風を夜氣の中に感ずるころでなければならぬ。

都會ではこの優美な星祭りが年々にすたれてゆくが、まだわたくしたちの田舍ではすべての子供達によつて樂しまれてゐる。煙の多い都會の濁つた大空では星の美がほんたうに味はゝれない。短册を染むる露を掬む蓮の葉や、稻の葉も都會では見出しがたい。自然、そのやうなことが都會の子供たちから星を祭る遊びを奪つてしまつたのであらう。詩を持たぬ都會の子供等は氣の毒である。

七夕近くなつて來ると、父は天の川だの、牽牛星だの、織女星だのを天を仰いで夜毎數へてくれた。

父は三十年以上も故鄕を離れてゐたので、星を數へてくれるたんびにまたわたくしたちの故鄕の見當を指さして見せた。

故鄕は私にとつて未知の黃金鄕であつた。

×

わたくしはこの頃ドストエフスキイの子によつて書かれた「ドストエフスキイ」を讀んだ。

讀んでゐるうちに久しい間ドストエフスキイに對して懷いてゐた疑ひが大分闡明されたやうに思ふ。

ドストエフスキイが取り扱つてゐる作中の性格や、場面が非常に多種多樣であり、複雜であるといふことは大抵の批評家たちが繰りかへしてゐるところである。しかしわたくしはこの考へ方に對しては疑ひを持つてゐた。その取り扱つてゐる場面はかなり多いかも知れない。しかし色々な作中に現はれて來る人物にいたつては、わたくしはさほど數多いとは思はない。「貧しき人々」の女主人公、「白痴」のそれ、「罪と罰」のそれ、「カラマゾフ兄弟」のそれ、「虐げられし人々」のそれを取り出して來てその性格を解剖したならば、恐らくそこにはドストエフスキイが最も愛してゐたであらう、偶像化するほどに憧憬してゐたであらうたゞ一人の最も弱い、人間らしい、いろんな缺點を持つた、しかも弱きがゆゑに最も愛すべき一人の女らしい女が現はれて來はしないか。

かれを裏切つた最初のかれの妻、かれを歐洲まで引き廻してかれを捨てた女、さう言つた冷たい賢い女性がいつもかれの作品には脇師の役目をつとめてゐるが、同時にかれの二度目の妻のやうにいかにも忍苦的な、素直な、信心深い女が仕手の役目を果してゐるのを見る。

「白痴」の主人公が誰であるか。カラマゾフ兄弟が誰であるか。はつきりし過ぎるほどわたくしたちはそのモデルをはつきりと知ることができる。

このことは、ドストエフスキイのやうな大きな作家でも、大抵の人が想像してゐるほど多種多樣の人間を書き分けることは困難であり、或ひは不可能であるといふこと、さらに一つの性格を深く掴むといふことが、その作家の取材のだゞつ廣いといふことよりは一層本質的に必要なことであるといふことを敎へはしないか。

ドストエフスキイ兄弟と、その父との間はいつも面白くなかつた。兄弟たちから父への手紙はほとんど金の無心で盡きてゐた。父は大酒飮みであり、酒を飮むと亂暴で、疑ひ深くなつた。かれはその娘たちが夜になつて外出しなければならなかつた時は、自身娘たちに伴いて行つた。また眞夜中に娘たちの寢室にはいつて行つて、娘たちがもしか

情人でも連れ込んではゐないかを檢べたりした。かれはまたその農奴に對してもひどく苛酷であつた。醉へば一層殘忍であつた。そのためにかれはつひに農奴に殺されてしまつた。或る夏の日であつたが、かれは馬車で外出したまゝ家に歸つて來なかつた。かれは馬車の中に入れてあつたクッションの下で窒息してゐた。御者は馬車に乘つたまゝ逃げた。それと同時に村の幾人かの農夫も姿を隱してしまつた。

この記錄はわたくしたちをして直ちに「カラマゾフ兄弟」の物語を聯想せしめる。ドストエフスキイ自身イヴン・カラマゾフの立場を經驗しなければならなかつた。

ドストエフスキイが浪費者であつたこと、また慈悲深かつたことについてはメレジュコフスキイの論文のなかにも書かれてある通りに、たしかにかれは人に金をねだられて拒むことのできない人であつた。「かれはたしかに慈悲心から、さうせざるをえなかつたのだ。しかし、疑ひもなく、またかれの父の貪欲な心を養ふことを恐れたからだ」とかうドストエフスキイの子が言つてゐるのはちよつと、ちがつた觀察である。ドストエフスキイ自身、かれの祖先の遺傳のなかに貪欲の血が流れてゐたことを知つてゐたといふことである。

ドストエフスキイの癲癇も、末弟ニコライの病弱も父の大酒の結果である。

「罪と罰」では金貸の强欲な老婆が大學生のラスコルニコフに殺されることになつてゐるが、偶然と言はうか、ドストエフスキイの姉妹の一人は、その門番のために非業の最期を遂げてゐる。かの女も「罪と罰」の老婆のやうに貪欲な女であり、現金を家に藏して置いたのを、門番に見付けられた。門番は浮浪人の博徒とぐるになつてその女を殺してしまつたのであつた。しかしこの事件はドストエフスキイが死んでから大分經つてから起つたことである。この事件だけはドストエフスキイの作が讖をなした感じがする。

旅行をすれば一等のホテルに泊り、買ひ物に出かくれば懷は忘れて買ふ。ちよつとしたことにも餘分なテイップを

出す。「母と買ひ物に行くと母は程よい買ひ物をして腕にかゝへて歸つて來る。父と買ひ物に出かけると父は空手で歸つて來るが、吾々より先に、或ひは吾々に跟いて幾人もの小僧たちが、にこ〳〵して大きな籠を運んで來た、きつとテイツプがどつさり貰へると思つて……」と言つてゐる。

ポーランドやリスアニア地方の貴族たちは家の中では飢ゑてゐても、何かの集ひには金ぴかの馬車を驅り、すばらしい天鵞絨のコートを引つかけて出かけて行く。そして踊り騷ぐ。かう言つたリスアニア人の血がドストエフスキイの父方の血統に流れてゐた。ドストエフスキイはたしかにこの浪費者の血を享けてゐたにちがひない。

「貧しき人々」の非常な成功に對して、かれの周圍の文學者たちが一時にかれを蹴落しにかゝつた。かれの成功を喜んでくれるであらうと期待してゐた友人までが今日はかれの敵となつた。かれの成功はます〳〵かれを孤獨無援の境地へ追ひ込んだ。かれが眞實に味方を見出したのはペテルブルグの知識階級でも文學者仲間でもなく、シベリヤの囚人の中に於いてゞあつた。

かれはシベリヤの囚人と一緒に暮すことによつて始めてロシヤといふものを知つた。愛すべきロシヤ人を知つた。「死人の家」はロシヤの囚人の單なる記錄でなくして、まことにいかなる暴政も、いかなる不運も、罪惡も滅すことのできない美しいロシヤ人の魂の記錄である。

マリヤ・ドミトリエヴナはシベリヤでドストエフスキイが戀に落ちた或る士官の未亡人である。かれはマリヤ・ドミトリエヴナと結婚した。まだ女の連れ合が肺病で苦しんでゐたころからドストエフスキイは女とその連れ合に對して親切を盡してゐたが。

女の連れ合ひが轉任するやうになつたので、かれは友人の親切な取りはからひで雪の夜にその女と二人で同じ馬車で別れを惜しむことができた。このことはまちがひのない事實であるやうだが、マリヤ・ドミトリエヴナは決してドス

トエフスキイに對して心からの愛をさゝげなかつたやうに見受けられる。無論ドストエフスキイにも惡いところがあつたかも知れぬ。ドストエフスキイが若い女を愛したことなどが一層マリヤ・ドミトリエヴナを冷たい人間としてしまつたのかも知れないが、ともかくかの女は「監獄の人間なんかを誰が心から愛するものか」などゝドストエフスキイの前で言つてゐる。女には若い家庭教師がいつも影のやうにくつ付いてゐた。

ドストエフスキイが死んだ時、かれの遺志にしたがつて詩人ネクラソフの墓の傍にかれの屍を埋める考へでかれの友人は尼寺に出かけて行つた。

黑い衣を着た尼さんが出て來た。

そこで「あの有名な作家のドストエフスキイが死にましたが、ネクラソフの傍に埋めて貰ひたいといふ遺言でございましたが、何分こちらの墓地はずゐぶんお高いといふことは當人も知つてゐましたが、遺族にのこされた金といつては幾らもありませんから、どうぞ御無理でもできるだけお廉くして下さい。」といふ相談を持ちかけた。

尼さんの言葉は、かうであつた。「吾々尼僧といふものはこの俗世間には屬してゐません。ですから世間的に有名だなんていふことは吾々には問題にはなりません。こゝの墓地に埋葬なさるとすればちやんと一定した値段がありますので、吾々はどなたに對しても値段をどうするといふわけにはまゐりませぬ。」

「では今年中に月賦でゞもお拂ひいたすことにしますから。」

「駄目です。全額をお拂ひすみになつた上でなければ墓をお掘りになるわけにはゆきませぬ。」

話はたうとう纏らなかつた。

墓地の選定はこんな風で變へられなければならなかつたが、ドストエフスキイの死を傳へ聽いて集まつて來た人々は町を埋めた。お葬ひの當日はいかに多數の人々がこの偉大なる作家の死を悼まんがために集まつて來たかといふこ

とが次の插話で想像される。
二月一日といへば寒い絶頂のころであつたが、朝から人々は墓地にも、庭にも、石碑の上にも、鐵の欄干にもといふ風に押し寄せて來たので、つひには警官が出るといふさわぎであつた。警官はお寺の門を閉めてしまつた。後から來た人たちはお寺の前の廣場に集まつてゐた。
ドストエフスキイ夫人は子供たちをつれて朝の九時ごろお寺の門の前まで行つたが、警官は門內へ入れなかつた。そこで夫人は「わたくしはドストエフスキイの妻でございます。みなさんはわたくしらが行くのを待つておゐでになるんです。」と言つた。
警官は言つた。「嘘をついたつて駄目だ。お前はもう六番目の未亡人だ。みんなドストエフスキイの奧さんだと嘘をついては門の中へはいらうとする！　ほんたうの奧さんのほかは誰も入れないよ。」
それでも都合よく、未亡人の到着を待つてゐた人たちが門のところへ來てくれたので、未亡人ははいることができた。

×

去年鹿兒島への旅行に二十餘日の夏の眞盛りを一緒に步いた少年と、この夏は北海道へと約束して置いたが久しい間病氣になやまされてゐるといふ消息があつた。若い人の病氣は殊に氣の毒である。
東京からの旅といつては、箱根までより遠く出たことのない少年が、博多、霧島、鹿兒島、阿蘇、二日市、宮島、近江と默々と跟いて來る姿を見てはいぢらしい心にもなつた。
博多の宿では二十度くらゐ少年を搖り起して眞夜中の汽車に乘つた。霧島と阿蘇ではわたくしが病んだ。
旅をつゞけてゐる間に人は親戚以上の親しさを道づれの人に見出すことがある。旅では何も彼も捨身である。自分

を捨てゝお互ひが頼り合ふ。人間の心の一番奥の光りを見出すのは旅である。

南信の或る山寺にはいつたといふ靑年の葉書を受けとつた。雜誌記者、一燈園同人、いろ〳〵な經驗を、くゞつた靑年であつたが。ともかく若い人の方が正直である。眞劍である。

×

年をとるにつれて自分の心は一層醜く曇つて行くのが眼につくやうだ。

同じ日に北海道のH氏から手紙が來た。

去年の震災で日本橋の家を燒かれ、兄弟三人が先祖代々の暖簾を疊んで北海道に行つてしまつたのであつた。周圍の人たちがどさくさまぎれにあさましい商人根性をむき出しにして金儲けに夢中になつてゐる際に、三人の兄弟たちはウイリアム・モリスが描いた夢にも似た美しい夢を北海道に描いてゐるのであつた。

人々はたしかに夢だと言つてゐた。たしかに美しい夢であつたかも知れぬ。

しかし三人の兄弟たちは、自分らの腕で原始林の木を伐り倒し、家を建て、山を開拓した。牛を飼ひ、仔牛を育て、麥を蒔き、麥を穫つた。トマトを植ゑ、馬鈴薯を掘つた。私たちが東京の埃の中で喘いでゐる七月、三人の兄弟たちは、夏のワイシャツの上に毛のシャツを着、毛のズボン下を穿いて草を挘つてゐる。八月の空氣は七月よりはさらに乾いて、さらに氣持ちがいゝといふことである。三人の兄弟たちは馬を追ひ、仔牛を可愛がりながら八月の太陽を樂しみに待つてゐる。

南信の山の中のお寺で合掌してゐる靑年、北海道の曠野で土を耕してゐる三人のH氏兄弟を考へる時、自らを顧みて忸怩たらざるを得ない。

若い人たちは眞劍である。

野尻湖畔から

今朝長野を立つ。山の林檎畑美し。

柏原に一茶の墓を訪ね、時雨に濡れた草路を分けて北陸街道に出たのはまだ午後の二時ころであつたが、飯綱や黒姫の高い峰の麓の村ではもう日が暮れさうな氣がした。

方一間もありさうな爐に、雨にぬれた足をあたゝめて黒い蕎麥に腹をこしらへて準備はできた。

宿の主人が挽いて來た俥に乘つて、柏原の宿の中程からやゝ爪先あがりの畑の中の赭土道を北へ／＼と急ぐともなく急ぐのであつた。

道は丘のいたゞきを縫ふて走つた。左手にも右手にも蕎麥畑と雜木林がつゞいてゐた。雜木林の白樺の肌の色さへ旅人の目には珍らしく、なつかしく見られた。

蕎麥畑を越して越後の山々が青く、低く流れてゐるのがまだ踏んだこともない國だけに一層旅人の心を惹くのであつた。

時雨にとざされた丘も村もすでに冬近い蕭條たる影を漂はせてゐた。

コスモスも寂び、ダリヤも寂び、古い農家の中二階の窓に並べられた南瓜が黄色に赤色にかすかな色彩を時雨の窓にたゝへてゐるのもあはれであつた。

道は急に下つた。野尻湖が山の裾に見えた。山と山につゝまれて千古の水をたゝへた山の中の湖ほど神祕的なものはない。

湖に近づくにつれて昔の宿場らしい暗い家が並ぶ。長い軒、雪釣りをしつらへた屋根、苔むした板びさし、すべてが雪國の冬を想はせる。

ぬかるみの道を湖に沿ふて走る。

横なぐりに時雨を叩きつけて風が吹く。

湖の水聲をきゝつゝ旗亭の欄に凭りて湖面をのぞく。

昔、湖心に身を投じたと傳へられてゐる勇將の物語りが時雨の日なれば一層人の心をしみ〴〵と打つ。湖の中の島に傳說中の主人公の宮がある。赤い鳥居が雨にぬれてゐる。

妙高も、黒姫も時雨につゝまれてしまつた。

一町はなれたばかりの丘も見えぬまでに時雨が襲ふて來る。

草紅葉が美しく湖畔の地をつゝんでゐる。

わたくしは今夜また長野へかへらなければならぬ。

風は强し、雨は冷たし、はたして長野へかへれるかどうか。

湖面を走る嵐の音のみが刹那々々に增してゆく。

日暮れ頃

わたくしはよくこのごろ夕陽が近くの武藏野の欅の森にかくれはじめるころになると、庭に出て弓を射ます。庭の西を向いて弓を射るやうになつてゐるものですから、私は毎日のやうに、森に落ちて行く夕陽の美しさを見ることができます。森がまるで燃えるやうに落日の光りに映つて來るころは、わたくしは幾度か弓を草の中に立てかけたまゝ、魅せられてしまつて西の空を見つめてゐることがあります。

武藏野の夕暮を――殊に秋から冬にかけて――歩いたことのある人は欅の森の上に燃えてゐる夕雲の美しさに、幾度か黒い土の上に佇立した經驗を持つてゐるでありませう。

刹那々々に雲の色が變つて行きます。雲の形の變化よりは、色の變化の方が、夕暮れには殊に速い。何といふ美しい雲の色であらう。紅蜀葵を西の空いつぱいに咲かせてそれに瑠璃の鍍金でもしたら、まあ幾分似通つた色も出るだらうかと想はれるやうな色が箱根から秩父にわたつての山の上を掩ふてゐます。次の瞬間にはその燃えるやうな紅い色の間に、紺青の淵を偲ばせる色が漂ふて來ます。直ぐ次の刹那には何、何と……何うして自然にはあんなに豐かな色彩が藏されてゐるのだらうと思はれるほどの色のかたまりが後から後からと湧いて來ます。

わたくしは弓を投げ出したまゝいつまでも草の中に突つ立つてゐます。

「何のために自然は、あのやうな美しい色彩を天に漲らせてゐるのか。無意識にといふのか？　何でもないことだといふのか？」

わたくしは神祕的な偉大な力を想像せずにはをれなくなつて來るのです。それは神なんていふ言葉以上の言葉で言

ひ表はさねばならぬやうな偉大な力です。

空が暮れてしまひます。

いつものやうに星がまたゝき、月が出ます。

今日一日生きてゐたといふことが「たしかに永遠の一日を生きてゐたのだ」といふ實感がわたくしの胸に湧いて來ます。

苦しいことの多い人生ではあるが永遠の一日を生きてゐたといふことがありがたいやうに思はれてならないことがあります。

わたくしの父の家には佛壇があります。そこでは夕方になると亡くなつた母がお明りをあげてゐました。わたくしは佛壇を持ちませんので、日が暮れると、本箱の上の香爐に香を焚きます。線香を燃やすこともあります。わたくしはたゞ眼をつむつて祈ります。亡母の俤をはつきりと思ひ浮かべることのできるのも、一日のうちのその刹那だけです。

生きてある者の上に神のめぐみ！　死んで行つた人の上に神のめぐみ！

よろこびもない、かなしみもない、たとへて見れば星の光りのやうに青白い靜かな世界がわたくしの心のうちによみがへつて來るのです。

×

日誌をつけてゐると、草の花がはじめて咲いた日や、いろ〳〵な小鳥が鳴いた日のことなどが、いつも過ぎ去つた日のことをなつかしく思はせます。

去年のわたくしの日誌には「十月二十四日はじめて鶯の笹鳴きを聽く」と書いてあります。翌日の日誌には、十歲

で死んだわたくしの甥の一周忌のことが書いてあります。
同じ日に、五位鷺が池の魚をとりに來て困ることが書いてあります。
十月二十六日　池に魚狗鳴く。
同　二十七日　白の山茶花咲き始む。
同　三　十　日　サフラン咲く。
十一月　二日　鵯來て鳴く。
同　　五日　椿咲く。
同　　九日　鶯、家の中に飛びこむ。笊に入れて半日飼ふ。午後庭に放つ。
同　　十八日　月寒し。
同　二十一日　庭の紅葉雨に打たれて寂し。
同　二十四日　霜深し。
同　二十五日　風寒し。銀杏の葉ほとんど落ちつくす。
わたくしの家の周圍は、まだ草がしげつてゐますので、七月ごろの鈴蟲をさきがけとして、馬追だの、草ひばりだのが夜も晝も鳴いてゐます。蜩は武藏野で聽くのがたいへんいゝやうに思ひます。それも今では荻窪から多摩川あたりの深い木立のなかで聽くのがいゝやうです。

いろいろの旅

「駿河路や花橘も茶のにほひ」（芭蕉）

茶を摘むころの駿河路は小高い丘も畑も茶の煙にむせさうである。

宇津谷峠を越え、藤枝の町を過ぎ、東海道の松並木を島田の町にかゝれば麥の穗には柔かな春の雨がそゝぐともなく降りそゝいでゐる。

島田の町は落ちついたいかにも心持ちのいゝ町である。町を出はづれたところに大井川が流れてゐる。川霧をへだてゝ金谷の町が明るい色のスロープに沿うて流れてゐるのが見える。

大井川に沿うて歩きながら川千鳥の聲を聽いたこともあつた。

鳥の聲で忘れられないのは、島田の町に泊つた同じ夏の旅に久能山の若葉の奧で聽いた瑠璃鳥の聲である。まことに珠を轉ずる聲といつたらいゝか、或ひはむしろそれよりは幾分堅い、男性的な強い感じであると言つたものであらう。

春の祭りの準備だといふので、堂の外圍ひの黒い板が取り除かれて、朱塗の殿堂が靑葉嫩葉の奥にかゞやいてゐた。絶えず霧のやうな雨が峰から峰を傳ふて、かすかな海の風に吹かれて行つた。

細い雨が若葉楓の葉をしとやかに濡らす音さへも、懷かしまるゝほどの靜かな山の奧から、瑠璃鳥の聲が響いて來るのであつた。

×

霧島の處女林で聽いた杜鵑の聲も忘れられぬ。

霧島の溫泉場は二千幾百尺の高地にあるので、そこからは麓の加治木、國分を越えて薩摩潟や、櫻島の眺めが繪のやうに美しく展げられてゐる。

夜が明けるごとにたゞ一眸の霧の海が旅人の前に展かれる。

八月の空には秋の色が漂ふてゐる。

鶯が啼き、やがて霧の海が靜かに動き始むれば麓の山が見え、平原が見え、海がたゝへられて來る。そのやうな時杜鵑の聲が二三十歩へだてた老樹の間から聞えて來る。

霧島の處女林を通り拔くれば、そこは一面の草山になつてゐる。展望はさらに擴められる。そこには千古の碧水を湛へた大波の池がある。わたくしは郭公が靜かに池を越えて飛んでゐるのを見た。聲は靜寂そのものである。

×

秋の夜、もう冬近い空には霜を思はせる星の光りが白くまたゝいてゐた。

わたくしは京都の町を歩いてゐた。

女はわたくしの後からおくれがちに歩いて來た。

わたくしたちは道に迷つてしまつた。それでも人にたづねるのが億劫だつたので、大體の見當をつけては北へ北へと靜かな京の町を歩いてゐた。軒の低い、いかにも昔の町らしい靜かな空氣にとざされた家々の奧からはかすかな燭の光りが荒い格子戸や、板戸の間から往來に流れてゐた。

女は草臥れてゐたので、ともすれば子供のやうにむづがつた。

「あなたは宿屋を知つて居て？」

「知つてるさ。」
「あたしもう歩くのはいや。」
「ばかを言へ。」
「あたし、明日は東京へ歸るわ。」
「お前一人でお歸り。」
「えゝ一人で歸りますとも。」
私たちはお互に口を利くことさへなくなつてしまつた。
實はわたくしは宿屋へゆく道を見失つてしまつてゐたのだつたが、いよ〳〵そんなことを話すと女がどれほど不安がるかわからないので、女には嘘をついて置いたのであつた。
默りこくつて歩いてゐると、細かな砂を嚙む二人の下駄の音が一しほに旅の心細さを增すやうに響くのであつた。薄暗い軒の燭を見るごとに、わたくしは近松の心中物に現はれて來る男や女たちのことを想像して見たりした。今にも薄暗い荒い格子戸の中の女たちのやつれた面影が覗かれさうに思はれた。
指の先に冷たさを感ずるほどになつた。天の川がはつきりと、鵲の群のやうに白く見えた。
「あゝ、川緣に來ましたわ」と女が言つた。
川に映つてゐる燭影がしばらくの間わたくしたちの心を明るくした。
わたくしたちは川に沿うて再び北へ北へと歩いた。
「千鳥が啼いてゐる。」立ち止まつてから言つた時は、わたくしたちはすつかり旅の疲れからも救はれてゐた。
「まあ……」女は千鳥の聲を追ふやうに暗い川下の方を眺めて、しばらくそこに立ちつくしてゐた。

わたくしたちは川岸から離れて、再び薄暗い町へはいつて行つた。

「もう直きに冬が來る。」千鳥の聲はまだ私の耳にのこつてゐた。私は一日も早く東京へ歸らなければならないと思つた。

冬は旅人にとつて一番物さびしい時である。すべての生けるものが秋の風を聽いて冬籠りを急ぐやうに、旅人も亦東京の家を思ふことが切になつて來るのであつた。

「明日はもう東京に歸ることにするか。」わたくしは女を振りかへつて言つた。女はわたくしから五六歩もおくれて歩いてゐた。

「明日ですか？　ほんたう？」女はわたくしの後から走るやうにして追ひついて來た。

×

旅人にとつて折々の花もまた忘れがたい印象を刻みつける。

東京を立つ夏の旅人は蒲田あたりから色々な花を見るであらう。横濱が焼けない以前には鐵道に沿うていろ／＼な花畑があつた。

戸塚、程ケ谷、藤澤あたりの丘や、農家のまはりに白と紅の罌粟を麥畑の間に見るのも夏らしい旅の感じを湧かさせる。

七月になれば箱根の百合が旅人の眼に最も鮮かな印象を刻みつける。碧玉のごとき草山の風にそよぐ白百合は見るからにすが／＼しい。

同じころに東海道を旅する人々は、合歡の可憐な姿を愛することを忘れてはたらぬ。

少しおくれては箱根を越ゆるころ、或ひは關ヶ原、伊吹の裾あたりに、蜩の聲を聽くのもうれしい。夕暮れの旅人

は時雨のやうに降りそゝぐ蜩の聲をどんなにかありがたく聽くであらう。

×

名古屋附近には蓮の花が多い。
名古屋から犬山に行く道に幾度か蓮の淸香に電車の中の假睡の夢を破らるゝことがあつた。
靑い靑い水田がはてもなく續いてゐるあの平原のなかに、白や紅の蓮の花を見出すのはあはれである。蓮の花は夢の世界のものゝやうに思はれる。

×

私は夏の犬山を愛する。
犬山はいゝ町である。昔は立派な陶工も住んでゐたであらう。俳人丈草も犬山の藩士であつたといへば、芭蕉も犬山の町を歩いたこともあつたであらう。
鬱蒼と繁つた丘の上に、白い天主閣を眺めながら犬山の町を歩いてゐると、まだ桑畑に取りかこまれた築地の中に遠い時代の夢を追つてゐるやうな品のいゝ老人などを見出すこともある。
苔むした古城の徑を幾曲折して天主閣に昇れば、木曾の流れは遙かな崖下を洗つて、悠揚として美濃尾張の境を南しつゝ漂ふてゐるのを見る。
犬山城から眺めた木曾川はたしかに絶景である。舟を曳いて川を上る男たちの影が豆粒大に見える。鈴鹿から伊吹へかけて夕立雲が暗く半天を鎖してゐる。

×

犬山から舟を賃して木曾を下ること五里。流れをかすめて黒い水鳥が啼きもせず川を横切る。

笠松といふ土堤下の町に舟を捨てゝ岐阜までの電車に乘る。

夏の岐阜はまた忘れがたい地である。

日が暮れかゝるころから岸の家にも、長良川の舟にも提灯が點される。

鵜飼を見る人々の船からはさかんに煙花が飛ぶ。

川上の暗を下つて鵜飼の炬火が近づいて來る。

川中の舟ト舟とは炬火を追うて競ひ集まる。

やがて鵜飼する舟だけが炬火を連ねて矢のやうに川を下る。やがて鵜飼する舟の火も見えなくなれば、川の上には煙花もなく、見物に集まつた人々の姿すら見えなくなる。

長良川の兩岸に忘れられたかのやうに提燈の燭が夜更けまで明滅してゐる。

川の眞ん中にはたま〳〵星の光りが碎けてゐるのみである。川は暗く眠つてしまう。

鵜飼の後の夜ほど寂しいものはない。

母

もしこの地上に神の愛に似たる愛があるとするならば、子に對する母の愛がそれであらう。否、母の愛は神以上であるとすら思はるゝこともある。

神には愛があると共に、憎みもあり、怒りもある。母には愛のみがある。

どのやうな利己的な、獸的な女でも、母としての愛に生きてゐる刹那だけはまつたくうまれかはつた人間となつてゐる。子をいだいてゐる刹那の女たちはたいてい聖母のまなざしと微笑を持つてゐる。

男は一生或ひは、心から人を愛することのたふとさと、苦しさと、うれしさとを、知らないで死ぬものがすくなくないと思ふ。嬰兒を生んだ女はこの點において祝福された運命を持つてゐる。母といふ經驗は最も切なる、最も端的な愛の實感そのものである。

わたくしたちはこの世界の、この人生の、この人間の心のあまりに空漠たることに、あまりに蕭條たることに失望させられることが多い。ほんたうに虚無的な心持ちになされることが多い。

けれども、そのやうな時、道でもあるいてゐて、不圖縁側にすわつて嬰兒を見つめてゐる若い母親のまなざしを見出だすならば、わたくしたちの暗い心はまつたくよみがへさせられるであらう。あたかもそれは暗い雨ぐもりの夜、不圖、雲の間からたゞ一つの小ひさな星のさゝやきを見出だしたうれしさにも似た心持ちである。

この世界には千萬億劫の利己や僞瞞や、嫉妬や、排擠があるであらう。またわたくしたちが知つた千人の人がわたくしたちを失望せしめたかも知れない。けれどもわたくしたちは或る刹那に、或る機會にたゞ一人の心の美しい人を

見いだすことが出來るならば、わたくしたちは人生に失望しないであらう。嬰兒をいだく母の目を見よ。微笑を見よ。そこに千人にたゞ一人の心の美しい人類が生きてゐるではないか。

人間の愛がどれほどまで深いかといふことを知るために、釋迦の言葉やキリストの言葉を聞くことも必要であらう。けれども平凡なたゞ一人の母を見るがいゝ。嬰兒を抱く若い母を見るがいゝ。そこには神以上、キリスト以上の愛がまたゝいてゐる。

わたくしはインドの物語りを思ひ出す。油をたくはへた一つの壺があつた。油は永い間壺のなかに入れられたまゝであつた。油はたゞ暗いみにくい自分自身をのみ見つめてゐた。或る時壺の油は點火せられた。燦たる光明が暗いみにくい油自身のうちからかゞやき出でて四周を照華した。おのれをさゝぐることによつて、おのれを燃殺することによつて、油ははじめて眞實の自己の美しい本然を發見した。すべての女は、男とおなじやうに利己的で、僞瞞的であるかも知れない。それが人間といふものであるかも知れない。けれどもすべての女が母となる時、かれは自分の臟腑をさいて雛鳥に食はせたといふイタリーのペリカンの傳説を思はせるところの尊い犧牲者の生活に生きる。かの女は自分自身をその嬰兒にさゝぐることによつて、壺の中の暗い油のやうに、みにくい自分自身のうちから神以上の光明を見出す。母たることによつて女は神そのものゝ姿を體現する。

都會

夜の銀座を歩いてごらんなさい、いつたいこんな生活法は正しいことであらうか？
わたくしはいつもさう思ひます
自分もあの人たちと一緒に同じことをくりかへしてゐるのですが、都會生活について疑をさしばさまないではをれなくなります

信濃の山を歩いてごらんなさい
桑を摘む女の手をごらんなさい
土を掘る男の手をごらんなさい

×

酒を飲んだ男が通ります
眞つ白に白粉（おしろい）を塗つた女が通ります
流行の服を着た男が通ります
眼をつむつて信濃の山の人たちの生活を想像してごらんなさい
恐らくこの夜半にも山の人たちは絲を繰つてゐるでせう
霜夜（しもよ）の寒さをかこちながら夜なべをしてゐるでせう

×

わたくしは輕井澤の夏の生活を不愉快に思ひます
馬に乘つた男、馬に乘つた女、幸福な笑ひ聲、白足袋の女たち
しかしあの桑畑の中をごらんなさい。
山の乙女(をとめ)たちは歌もうたはないで桑の葉を摘んでゐます
ぶら／＼とそこを歩いて通る自分が恥づかしくなります

×

美しい芝草のリング、球(たま)を拾ふ子供たちは芝の上を終日走り疲れてゐます
紳士たちのするゴルフ、幸福な笑ひ聲
しかしあの球を拾ふ貧しい少年たち！

×

音樂會、ベートウヴエン！
何といふ偉大な尊敬すべき名であらう
しかししかし
美しく着かざつた淑女たち
思ひ上つた紳士たち
戀を語るデカダン！
わたくしの眼には孤獨な憂鬱な樂聖の顏が映(うつ)つて來ます

大井川

四月十四日。朝九時半の汽車で東京を立つて、靜岡に下りたのは、午後一時何分。驛には、島田町からわざ〳〵八木君が自動車を用意して迎へてくれた。

踏み切りを越えて、南の海の方へ平坦な畑の間の道を走るのであつた。蠶豆や、隱元の花が道に沿うて咲いてゐた。麥の穗が五六寸も伸びてゐた。

ポプラの列樹に沿うて三十分も走れば海が見え、海を隔てゝ伊豆の山が曇つてゐるのであつた。東京では見ることのできないほど大輪の椿が、海岸の漁家の垣根に咲いてゐたりした。

自動車は海岸に沿うて十分ばかりも、まだらな漁夫町らしい家並をかすめて走るのであつた。麥の間を走りながらわたくしたちは海をへだてゝ天城を見た。

麥畑の上に、海岸から直ぐ切り立てたやうな崖を作つて久能山がそゝり立つてゐるのであつた。幾曲りの石磴が青葉の間を空に馳けのぼつてゐるのであつた。大鳥居の前の廣場にはすでに二三臺の乘合自動車が着いてゐた。

十幾曲りといふ石の段々も思つたよりは樂であつた。「これならば幼稚園に通ふくらゐの子供でも十分登ることができる」などと話しながらわたくしたちは一歩一歩石磴を拾つて行つた。梅若葉、樟若葉はかゞやき、八重櫻は恰度さかりであつた。

御前崎が見え、駿河の海は天城を控へて雨雲に掩はれてゐた。箱根はかすかに見えたが、富士は生憎見えなかつた。登るにつれて深く繁つた楤の間から、閑古鳥を聯想させるやうな靜かな鳥の聲が聞えて來るのであつた。嫩葉がす

がく／＼しくかゞやいてゐるせゐか、鳥の聲までが澄みちぎつてゐるやうに思はれた。

奈良を思はせるほど木は老い、葉は輝いてゐた。

二三日後に春の祭りが近づいてゐたので、男たちが山門や、樓や、拜殿の外圍ひの板をはづしかけてゐた。そのためにわたくしたちは新緑に照り映えた金色の垂木や、丹塗りの圓柱を見ることができた。

小鳥はしつきりなしに鳴いてゐた。春らしい雨が若葉を靜かに撫でながらやがて煙となつて山をつゝんでしまつた。頰を輕打する煙雨をなつかしみつゝわたくしたちは山を下つた。直下の白沙長汀を縫ふて波の帶が、春雨のなかにたゆたうてゐた。天城も箱根も雨にかくれてしまつて、瀰漫たる駿河の海がさらに遠く、さらにかすかに想はるゝのであつた。

山を下つてさらに東へ、山の麓の海岸に沿うて自動車を走らせた。

「この上の山が樗牛の墓のある龍華寺ですよ。」と八木君は左の山を指さして見せた。

あたゝかな海の風を受けた石垣には、紅い寶石のやうなオランダ苺がみのつてゐるのであつた。東京へ出る走りの苺や野菜物などは、南のあたゝかい海風を利用して、この附近で早くから作り出されるのである。

江尻に出て、さらにわたくしたちは靜岡へ自動車を走らせた。この附近からかの廣重の繪に描かれた東海道の松並木にかゝるのである。一抱へも三抱へもありさうな老松が、水田や遠山を背景として、連なつては村に入り、村を出てはまた曠野を走つてゐる。今日なほそこいらに、廣重時代の人々が歩いてゐるやうに思はれる。それほど松並木をつつんでゐる空氣は靜かに、落ち着いてゐる。

靜岡に着いたのは四時ころでもあつたらう。靜岡の町を走り、舊城の濠を見、靜岡の町を通りぬけて、やがて安倍川の岸に出た。橋は鐵橋に架け替への工事中であつた。

安倍川をわたれば道は再び東海道の松並木を見出すのであつた。しかしそこから島田までの東海道は、道の兩側に迫つた山を控へてゐるので、松は一層深い落ち着きを色の上にも、形の上にも見せてゐた。松並木の根を縫ふて谿川が流れ、白い花が咲いてゐた。

山はいよ〳〵迫り、坂は急になつて來た。

毬子の宿である。

廣重の繪に見る馴染のとろゝ汁の家は春の山を背にして、古びた障子に曇り日の光りを浴びてゐた。

「梅若菜まりこの宿のとろゝ汁」わたくしは芭蕉の行脚を思ひながら山を越えた。

文彌殺しで劇的な傳說をのこしてゐる宇津谷の峠を越ゆる時、わたくしは道に沿うて不圖小ひさな一つの塚を見出した。

「つひこのころまで、この峠には追ひ剝ぎが出たさうです」と運轉手は言つた。

西行法師の墓もこの附近の或る寺にある筈だなどと考へながら山を下つた。「夢にも人にあはぬなりけり」わたくしは口のなかで古人の歌をくりかへした。

今ではたいてい汽車の便を借りるので、この峠を越す人も稀らしい。安倍川から島田まで六里ばかりもあらうか、その間わたくしたちはたゞ一臺の俥にも、旅人らしい人にも出逢はなかつた。

山を越えて、嫩葉の下を潜りぬけて藤枝の町に出たころはすでに暮色が古い町の軒端に迫つてゐた。

わたくしたちは再び麥畑の間を走る坦々たる平原の松並木に出た。走つても走つても松と穗麥ばかりである。をりをり細い春の雨が橫なぐりに吹きつけて來るのであつた。子供たちは珍らしげに自動車を追ひかけて來た。廣重の繪に見るやうな子供たちが橋の袂に凧を抱へたまゝ立つてゐるのを見たこともあつた。

憂鬱なる長途、無限なる松並木、麥と松の間を走る旅人の心は暗くされる。
島田の町の八木君の家に着いた時は日はもうすつかり暮れてゐた。軒並に電燈がまたゝいてゐた。
こゝは「朝顔日記」で有名な町であるが、德川時代に大井川を控へた宿場として、幾多の朝顔物語を殘したことであらう。靜かな暗い島田の夜の町を歩いてゐると、ほんたうに旅だといふ感じが湧いて來る。下駄の音までが寂しい何となしに京都の三條あたりの町を聯想させる。古い町特有な落ち着きがあり、沈んだ夜の空氣が冷たく旅人の胸にしみこむやうに思はれる。
八木君の家でふるまはれた鰹はいつまでも忘れられぬほどの美味なものであつた。
町で逢つた人たちも美しく、親切であつた。朝顏のローマンスにはふさはしい町である。
八木君の家に一夜を明かして、靜かな旅の氣分を心ゆくまで味ふことのできたのも古い町だからであらう。町の名家である八木君の庭には苔むした八重櫻が散り初めてゐた。そこには芭蕉の「五月雨の雲吹き落せ大井川」の碑が半ば缺けたのが露を帶びた草花の傍に立てかけられてあつた。八木君の先考が、大井川の土堤の石垣かなんぞに築かれようとしてゐたのを發見して、酒三升と代へて家に持つて來られたものがその碑であつたといふ話を興深く聽いた。
八木君の家を出てわたくしたちは大井川に遊ぶことにした。島田町を南に出て、東海道の鐵道線路を橫切つて川の方へ麥畑の中を步いて行つた。
奧大井へ、島田から四里ばかり、發動機船の便があるといふことである。大井川の上流に遊ばうと思ふ人には、恰度一日の行樂として適當な距離であらう。殊に夏になれば鮎もよし、水もよし、昔の名殘りを大井川に沿うて探るのも面白いと思ふ。
わたくしたちはあやふげな橋をわたつた。二三人の人が一緒に步けば橋がめり〳〵と音を立てゝ搖れるのであつた。

磧のところ〴〵に瀨をなして流るゝ水もあり、奥から切り出された木材が川一面に流れついてゐるのであつた。
「河鹿が鳴いてゐます。」と誰かゞ言つた。磨き上げられたやうな礫が、大井川の廣い河原に柔らかな春の日光を浴びてゐるのであつた。
「河鹿にはまだ早い。」とまた一人が言つた。
「もう來月くらゐになればこゝでは河鹿が鳴きます。」と他の一人が付け足した。松山の下の崖に沿うて、碧珠のやうな水が流るゝともなく流れてゐた。
「千鳥だよッ!」と一人が叫んだ。白い翅をひるがへしながら二羽の水鳥が川下の方へ飛んで行つた。その聲はたしかに千鳥のやうに寂しかつた。
「川千鳥だ……」
八九町もあらうかと思はれるほどの長い橋の中に立つてわたくしたちは鳥の行く方を眺めてゐた。
崖に沿うて小松山を登りつくせば、そこは金谷から大井川の右岸に沿うて駿河の海まで流れてゐる緩傾斜の高原であつた。
幾里のスロープは日光に燃え、陽炎に顫いてゐた。見わたすかぎりは柔かな、半球形に刈り込まれた茶の畑である。
「五月になれば山も、村も、茶の香にむせさうです。」と誰れかゞ言つた。
わたくしは芭蕉の「駿河路や花橘も茶のにほひ」といふ句を思ひ出した。
茶畑にかこまれて、小ひさな森があつた。そこには馬場や、大弓場の跡などが殘つてゐた。
「德川幕府が瓦解した時、千代田城の紅葉山にあつた權現さまをこゝの森に持つて來たんださうです。この茶畑も當時の幕臣がこゝに世を隱れて來てゐる間に開拓したんださうです。」八木君はこんな話をした。

草の上にしやがんでゐるわたくしたちの頭の上では雲雀が鳴いてゐた。

わたくしたちは半日草の上に寢ころんではあわたゞしい東京の生活の不愉快なことなどを語つた。大井川を隔てゝ富士が見えて來た。雪をいたゞいた南日本アルプスの山の一部分が見えて來た。

夕方までには東京に歸り着きたかつたので、わたくしは午後の汽車で島田の町を立つことにした。

五月の天城

遲咲きの八重の櫻が天城の谿のところ〴〵に雲のやうに咲きのこつてゐるのを旅人はあはれとも見るであらう。雪のやうな梨の花が里の家をめぐつて、或る時は水車小屋の屋根をつゝむやうに、或る時は名もない塚をいたはるやうに五月の天城の麓をかざつてゐる。

櫻から梨、梨から新綠とあわたゞしい自然の變化を抱きながらも、天城の五月は憂鬱である。暢然たる光りの底に旅人の悲しみを喚びおこさせる。

夜な〳〵野火の暗の空に燃ゆるをあはれに眺めてゐた草山にも五月の光りと、三四寸の青草がかゞやくやうになつた。

わたくしは、天城の草山に來てはじめて櫟の新綠の美しさを知つた。鳩の胸毛を想はせる柔かなその色、その梢。

五月の太陽は疲れたる旅人のために柔かな櫟の蔭を作つてくれる。そこには青い寶石にも似た若い旅人の眞晝の夢が結ばるゝ。

谿のやゝ開けたるところには狹いいびつな田がある。紫雲英の花がいびつな田を柔かに掩ひつくしてゐる。若い二人の男と女が終日黒い土を打つてゐる。嬰兒は紫雲英の花の中に、搖籃の中に眠つてゐる。

仔馬は櫟の木立をくゞつて草山へ、草山を下りて紫雲英畑の傍を、草を負うたまゝ走つて來る。

岫を出でゝ岫に入る白雲を谿に見つゝひたゝきの聲をなつかしむ旅人の夢を誘ふやうに五月の畑からは陽炎が立

つ。

狩野川に沿うて白い下田街道を走る幌馬車の御者も旅人も五月の日の光りにめぐまれ、雲雀の唄にめぐまれ、椿の花にめぐまれてゐる。

十國峠、乙女、足柄を幌馬車の窓に見ながら、天城に入る日、旅人は、人間の世界の憎みをも、呪ひをも、愛執をも道ばたの柔かな草の中に捨てゝしまふがいゝ。

かなしくもコスモポリタンのあきらめの涙が五月の草の上に落ちる。

天城の五月は寂しき旅人の魂を輕撫する母の手を想はせる。

梨の花につゝまれた狩野川の水車のきしり！

柔かな梢の芽につゝまれたひたゝきの唄！

天城を越ゆる白い道の五月の眞晝！

岫を出づる白い雲！

暮から春

春を迎へるといふことはいつになつても何となく嬉しいことである。

東京も今日のやうな燒野原になつてしまつたので、ちよつと春を迎へる氣分にもなれないやうだが、歳も押しつまつていざとなれば、焦土の東京で春を迎へるのも、また寂しいうちに特別な感慨を覺えるであらう。

べつたら市といふ聲を聽けばすぐ歳の暮が近づいたといふ感じが湧いて來る。今年はべつたら市もなかつたし、何となしに寂しかつた。べつたら市ころから霜夜の空が美しくなり、大鳥さまの市が開かれるし、熊手をかついだ人たちがどこの往來にも見られる。大鳥さまだけはこの冬も燒野の原のバラック町で景氣よく市が開かれた。

氣持ちのいゝほど冷たい風が都大路を吹きまくるころになれば、十軒店には美しい羽子板が飾られる。一軒々々と覗いて歩くのも新らしい春を迎へる感じをしみじみと味はゝせる。

歳の暮も二三日に迫れば、ぢつと落ちついてゐようとしても、どうしても落ちついてゐられなくなる。世間といふものと自分との交渉を一番はつきりと感じさせられるのもそのころである。たとへ世を避けてゐる人でも、そのころだけは世間の人となり、世間のあわたゞしさのなかに、一脈の最も人間らしいペーソスを味ふであらう。

大晦日の夜は殊に面白くもあり、あはれでもある。

日本橋あたりの、店を廻つてごまめだの、屠蘇だの、勝栗だの、ゆづり葉だの、裏白だの、それからそれへと春の支度の物を買ひあつめて夜遲く山の手の家に歸つて來るのも、子供にでもなつたやうな氣がして面白い。

床飾りをしてゐるとたいていは除夜の鐘が鳴り出す。

雪など降つた晩だと殊に鐘の音がしんみりと響く。
あつちの丘の鐘、こつちの森の蔭の鐘、どこだか見當もつかないほどの遠い寺の鐘や近い鐘や、東の鐘や、西の鐘や、いろ〳〵の鐘の音が多の夜空を靜かに交り響いてゆく。古い年が送られて行くのだと思ふとさすがに逝く年が惜まれもする。
わたくしは除夜が一番好きだ。戶外は往き來の人もはげしいが、家の中にをれば來客になやまさるゝこともなく、一年のうち一番靜かな時を持つことができる。
元日は朝だけはちよつと引き締つた心にもなるが、終日を形式的な訪問などに費さなければならぬので、どつちかと言へばあまり面白い日ではない。わたくしは元日に新年の挨拶などにまはることはあまりないが、ぶら〳〵と戶外を散步するわけにもゆかず、元日はまつたく妙な日になつてしまう。一年の中一番窮屈な日は元日である。

×

旅で年の瀨を送り、春を迎へるのも面白い。
わたくしはよく伊豆の山の中で多の休みを過すことがあるが、除夜の鐘を聽くことが出來ないだけは寂しい。
はじめて伊豆で除夜を送つたのは、今から七八年も前であつた。早川口から輕便鐵道の車に乘つて、石橋山あたりから雪に降られて、日は暮れてしまうし、客は込むし、門川に下りた時は雪が眞つ白に積つてゐた。
門川にたゞ一軒しかなかつた小ひさな宿屋に泊つて除夜を送ることにしたが、隣りの部屋には旅めぐりのちんこ芝居の小娘たちが夜おそくまでさわいでゐた。湯川原通ひのがた馬車の鈴の音が、かなり遲くまで雪風につれて聞えてゐた。
咽喉が痛んだので十二時になつても眠れなかつた。除夜の鐘一つ聽くことができなかつたのは寂しかつた。夜つぴ

て浪の音のみ高かつた。

元日の朝の山は淡雪で飾られてゐたが、砂丘の上の船には、國旗がひるがへつてゐた。靜かな漁村の元日は、旅人には非常に落ちついた尊いやうな感じを與へた。

修善寺でも幾度か除夜を送つたが、除夜の鐘を聽くことができないのは寂しかつた。

しかし旅にゐれば元日も落ちついた氣になれるし、たづねて來る人もなし、儀式張つたこともしないですむから、できることならお正月は旅で暮したいと何時も思ふ。

旅人の心には除夜の淋しさも、元日の靜けさも沁々と味はゝるゝ。

伊豆の湯の町にはたいてい挽物細工を賣つてゐる。兵隊だの、投げ輪だの、そんな物までが挽物細工で出來てゐる。そんな物を買つて來ては宿屋の部屋で輪投げなどする心持ちになれるのも旅のお蔭である。旅の宿で心靜かに屠蘇を祝へば、さすがに軒に迫る山までも新らしく甦つたやうに思はれる。

山から出て山に落ちる太陽も元日だけは殊に尊く思はれる。

晴衣を着た山の女たちが卸し立ての手拭を冠つたりして湯の町を歩いてゐるのものどかである。

お正月だけは怠けてもいゝやうな氣がする。のんびりと遊ぶために人間に與へられた自由な日であるやうに思はれる。

たま〳〵山の家で羽子をつく音など聽けば、一層快い怠惰な心が溶けこんで來るやうな氣がする。

七月の空

芭蕉の幻住庵の記にならつたわけではないが、偶然にも馴染の植木屋が二本の椎の木を運んで來て座敷の正面に植ゑてくれた。庭の木としてはもつこくだの、もちだの、松だのときまつてゐるやうだが、何の愛嬌もない太い幹の椎の木を二本、目の前に植ゑつけてくれた植木屋のあまりに曲もないやり方がかへつて面白い。

うんと根に水をやつて土をかむせた日から屋根の雀が子雀をつれて椎の木の梢に凭つて鳴いてゐた。今朝は忘れられた絳絹の裂が一枚椎の下枝にかけられたまゝ眞紅に七月の日の光りを浴びてそよ風に動いてゐる。

狹い庭の上に、隣りの屋根に劃られた梅雨上りの空がかすかに夏らしくぎら〳〵とかゞやいてゐる。

眼に見えぬほどの微風にうら葉をそよがしてゐる椎の梢を見ればすでに秋の跫音が迫つて來たやうな氣がする。

秋はあはれといふ。しかしぎら〳〵と照りつける眞夏の太陽の中のやはらかなうら葉のそよぎこそ秋にも劣らぬ靜寂と沈思とを伴ふてゐる。

四五日前、家の前の狹い横町に賣つて來た男から一鉢のあぢさゐと五鉢のあさかほを購めた。

あぢさゐはまだ色をかへないで白のまゝで狹い庭の隅に七月の眞晝の夢を抱くかのやうに咲いてゐる。あさがほは昨日は三輪咲いてゐたが、今朝は一輪も咲かない。盃ほどの小ひさな黒い、脆い素燒の鉢をたよりに五寸にも足らぬ蔓をいのちの綱とさしのべて、賣られた家の日當りの惡い庭の隅に、一尺ばかりのあぢさゐとひとかたまりになつて捨てられたやうに生きてゐる姿を見れば、これもまたあはれといふ言葉を思ひ出さずにはをれない。

髮結新三の芝居を見るたんびに思ひ出すことであるが、新三がひらせいの手拭浴衣を着てうしろむきになつて、植

木鉢に水をやつてゐる姿も夏のあはれさを感じさせる。水をやつてゐる長屋住まひの男のいのちもつかの間であれば、水をもらつてゐる植木鉢のいのちもつかの間である。宏大な邸宅の中に生きてゐる人たちの生活は別として、狹い庭を、または植木棚をたゞ一つのいのちとして夏の苦熱と鬪つてゐる人たちの生活くらゐ人間の世のあはれさを想はせるものはない。

七月の都會を歩けばわづか疊一枚くらゐの庭からひよろ／＼と棗の枝が垣根越しに往來へ顏を出してゐるところもある。古い石油箱に土を盛つて三株か四株のコスモスをたんせいしてゐる家もある。幻住庵の芭蕉は椎の木立に頼つて夏を生きてゐた。都會の多くの人たちは三株四株のコスモスや一株の棗に夏を頼つて生きてゐる。夏のあはれの一つである。

この夏は父の新盆で、また切籠燈籠を買はなければならぬ。

四年前に母の新盆に切籠燈籠を買ひ、去年は義母の新盆にふたゝび切籠燈籠を買つた。このころは切籠燈籠をともす家がすくなくなつたのか、ちよつとそこいらを歩いても店に賣つてゐない。母の時は巣鴨から本郷あたりまでさがし歩いて、やつと一つだけ店にあるのを見た。しかも一年くらゐ前にこしらへたものと見えて骨はだいぶすゝけてゐた。盂蘭盆がすんでから、もう二度と切籠燈籠をともすことがないやうにと思つて、庭で燒きすてゝしまつたが、四年のうちに三度新らしい切籠燈籠をともさなければならぬことになつてしまつた。

普段は忙しい仕事や、腹立たしいことやに追はれてゐてもお盆が近づいて來て、さていよ／＼草市に出かけたり、苧殼を焚いて夕まぐれに精靈を迎へたりするやうになればその時だけは昔の子供にかへつたやうな心を見出す。西洋にはどんな夏のおまつりがあるか知らぬが、お盆が來れば佛敎國に生まれたことをありがたいと思ふ。

地震の前の年あたりであつた、久し振りで長崎へ行つた時、崇福寺の庫裡で十五六人の若い支那人たちがいろ／＼

な形の美しい燈籠を作つてゐたのを今でも思ひ出す。わたくしたちが子供のころは、長崎にゐた支那人はみんな辮髪を垂れて、支那の服を着てゐた。梅ヶ崎あたりから大德寺の下、管内あたりには支那そのまゝであらうと思はれる異國風な店がつゞいてゐて、お盆には豚の丸煮をかざつて、爆竹を鳴らしてゐた。無花果の並木の蔭の石作りの家の窓からはユダヤの若い女たちが支那人町のさわぎをながめてゐたりした。

このころでは長崎の町もすつかり昔とはちがつてしまつた。

お盆ちかくなれば今でもわたくしはよく千住大橋をわたつた川向うのやゝちや場あたりを朝早く歩くのが好きである。新らしい蓮根の香を嗅ぐだけでも氣持ちがいゝ。

佛にあげろ草花をあの長い橋の上で買つてゐる人もある。

荒川の上にはすでに秋のやうな冷たい風が吹いてゐる。

一つの疑ひ

隨分立派な仕事をし得たつもりでゐる得意な人があるかも知れない。はたから見てほんたうにその人はいろ〳〵な仕事をし得たかも知れない。

しかしそれがはたして人生にとつてそれほど立派な仕事であつたかどうかは神でなければ知ることはできない。

一生何事もし得ないで死ぬ人がある。

しかしそれがはたして意味のない生活であつたかどうかは神でなければ知ることはできない。

百冊の本を書いて死んだ人、一冊の本をも書かないで死んだ人。この二人が神の前に立つた時恐らく神は一冊の本も書かず、一度の說敎もしないで死んだ人を褒めるであらう。

小說を書いたり、詩を書いたりする時、殊にそれを纏めて一つの本にする時、わたくしはそんなことを考へることがある。

農夫が生きてゆくために土を耕し、工人が食ふために木を刻むと同じやうに、自分も生活のために筆を執るのだと思へば、幾分自責の鞭を感ずることもすくなくなるが。

自分が机に凭りかゝつて原稿を書いてゐる時、高い煙突の上で鎚を振つてゐる人たちを見ることがある。そんな時、自分の仕事を恥ぢないほど、わたくしはまだ自分の仕事に對して自信がない。

すくなくともあの人たちはたしかにわたくしたちの生活の幸福のために、家を拵へてくれた。道を切り拓いてくれた。米や、麥や、果物を作り出してくれた。パンを握るわたくしたちは果して何を人のために與へ得たか。

わたくしは學校の敎師として毎日敎壇に立つてゐる。もし何か善いことを敎へるのだと思へば苦痛であるが、語學を敎へてゐるのだと思へばその苦痛は大分なくなつて來る。

語學の敎師をしてゐるのだと思ふと、恰かも工人や農夫たちと同じやうに、ほんたうに働いてゐるのだといふ喜びが湧いて來ることもある。敎師といふ一つの勞働者なる自分自身を見出し得るからである。

白い手の若い男や女たちが幸福の眼をかゞやかしながらベートウヱンの音樂を聽いてゐる。窓の外では雨に濡れた男たちが、默々として働いてゐる。

藝術に對して悲しい疑ひが起る。

麥は五六寸に伸びてゐる。

雲雀がたゞ一つの黒點に見ゆるほど高く舞ひのぼつては春を啼いてゐる。

草は芽生えはじめてゐる。露はまだ冷たい。霞は昨日今日辛うじて立ち初めてゐる。

春が來た！　さう思ふだけでもわたくしたちは、あの暗い冬に脅かされつゝ生きのび得たことのありがたさをしみじみ感じないではをれぬ。子供たちは遠い雪どけの山を眺めながら黒い土の上に踊上つてうたふ。人といふ人が碧玉のやうにかゞやき初めた空を見、湖の面のやうに和やかに土をつゝむ青い草を踏んでは、更生のよろこびに魂をわななかす。

子供等の春のよろこび、大人等の春のよろこびを一つに集めて青い麥畑のほとりに象徵したのが桃の花であらう。大地のよろこび、空のよろこび、空のよろこびはたゞ一つに麥畑の隅の桃の花に燃えてゐる。

春のよろこびとともに春のあはれを思はせるものも桃である。たとへば桃は人馴れぬ田園の處女を聯想させる。たまたま旅をつゞけてゐると古驛の頽廢した空氣につゝまれた道のほとりに色白な、瞳の黒い乙女たちを見出すことがある。不用意につけたかの女の髮の紅いかざりなどがきは立つて艶にも見え、あはれにも見えるものである。麥畑の隅に寂然として咲いてゐるたゞ一本の桃の花を見るたんびにわたくしは古驛で見た美しい乙女を思ひ出す。

わたくしの貧しい父が麥畑のなかに小ひさな家を建てたことがあつた。家といつても小舍であつた。わたくしたちはその小舍のなかに六年も七年も住んでゐた。雨が降ればよく雨が漏り、壁の隙間からは星が見えてゐた。その小舍

を建てる時わたくしたちは麥畑のかたはらに母指くらゐの桃を一本植ゑた。はじめてその桃が花を持つた春をわたくしは忘れることができない。わたくしたちは麥畑の中に躍り上がつてよろこんだ。桃は年々咲き、年々實を持つた。麥を刈る頃になればわたくしたちは桃の實を取つては喰べた。

母が死に、父が死に、きやうだいたちはちり〴〵になつて、その小舍みたいな故鄕の家は取りこはされてしまつた。しかしその桃だけは今では家よりも高くなつて故鄕の春ごとに花をさかせてゐる。まことに年々歲々相同じのなげきのみ殘つてゐる。

故鄕の桃で思ひ出したが、わたくしたちの鄕里の習慣として三月の雛祭には、きつと桃の花をさかづきに浮かべて酒と一緒に飮んだものである。雛祭のころとなれば、たゞ一人の男の子であつたわたくしは母にいひつかつて麥畑の隅の桃の木にのぼつて桃の花を手折つて來るのであつた。

武藏野を歩いてゐてもたま〳〵麥畑のほとりの桃の木を見ると、わたくしは故鄕のまづしい小舍と、そこに生きてゐた父と母とを思ふ。

東海道の春の旅は殊にうれしいと思ふが、程ケ谷、戸塚あたりから藤澤、平塚とすゝむにつれて松林の間、丘の上、麥畑のほとりに桃の花を眺むる景色は捨てがたいものである。さらに西して沼津、田子あたり、まだ雪をいたゞいた富士を背にしての桃畑のながめはとりわけ忘れがたい。

沼津を出て東海道原の宿にかゝれば麥畑のなかにかの白隱禪師塔所の跡に建てられた一基の碑がある。あのあたりは桃のさかりのころになれば、殊にのどかな古驛の情趣をたゝへてゐる。

春の美

春なれや名もなき山のうすかすみ　芭蕉

春を思ふごとに直ちにわたくしの胸に泛かぶものは芭蕉のこの句である。まことに春の美は融然としてすべてのものを柔かな霞の衣に相擁きつゝ愛撫するところにある。

雪は谷川に解け、土は眠りからさめて、草の芽は二三寸に伸びた。地に手を觸るれば、地はかすかに春の日を浴びて、乙女の胸を想はせるほどにふくよかにもあたゝかい。かすかなる柔かさと、かすかなるあたゝかさとが草の芽をつゝみ、小川のせゝらぎを撫でゝゐる。

春の美はすべてが柔かな感じのうちにつゝまれてゐる。かすかな、うぶな感じである。和むといふ感じである。たとへば遠山の霞、おぼろ日、陽炎燃ゆ、水ぬるむといふやうな言葉が象徴してゐるやうにすべてがきはめて幻覺的なところに春の美はひそんでゐる。花やかではあるが、けばけばしいところや、刺戟の強いところはすこしもない。たとへば唐美人の長い睫を聯想させるやうなまどろめるものゝ姿がそれである。

春の風はわたくしたちの感覺によみかへりの日のよろこびを涙ぐましいほどに感じさせてくれるが、決して秋の風のやうに遽然として心腸を斷たしむるといつた風なものではない。駘蕩靉靆といふ感じのものである。

靜かに、ゆるやかに、のびやかにわれ〳〵の柔かな皮膚に迫り寄るのが春の風物の特色である。

明るくはあるが春の美を思ふごとにわたくしはまた平家物語を思ひ出す。はなやかな榮華の後のあはれさを思ふ。春の美ほどあでやかなものはない。しかしその美のなかにはすでに滅びゆくものゝあはれさが潜んでゐる。春は生

まれ來るもの丶よろこびである。と、同時にそこにはすでに頹廢しゆくもの丶すゝり泣きがひそんでゐる。

春の美といへばわれ〳〵は直ちに吉野の櫻を想ふ。櫻ほど日本の春の美を完全に象徵したものはないであらう。艶かではあるが、決してくどくはない。いかにも淡い艶かさである。そこには何の執着も未練もない。あまりに淡いあきらめに滿たされてゐる。

近松巢林子の心中物のなかに出て來る若い美しい女たちも亦春の美を聯想させる。死を急ぐかの女たちの戀はあまりに幻覺的である。あまりに美しい。しかもあまりにあはれであり、あまりに儚い。春の花は脆くして散りやすきところに、人の心を惹きつけるものがある。近松の女たちの運命はそれであつた。

春の美はそのあまりに早く、あまりに脆く滅びゆくところにある。

繚亂、爛漫といつた春の美の底には淸淨、聖純といつた風な汚されぬもの丶光りが漂ふてゐることも見のがすことはできない。たとへば處女の美である。春の曙、春の野、春の流れ、春の山……とかう春の自然をとり出して見てもさういつた感じは得られると思ふ。たとへば聖マリヤの瞳を聯想させるもの丶美である。

忍び音にすゝり泣くやうな近松の若い女、たとへば「心中二枚繪草紙」のお初、「薩摩歌」のおまん、「紙治」の小春といつた風な女のやさしさ、あはれさと聖マリヤの淸淨さとを一つに結びつけた姿も春の美であらう。恐らくそれは春の美の極みであらう。

一言にしていへば春の美はあはれといふことに盡きるであらう。

あはれにして淨きもの、それが春の美であらう。

詩の心

詩を持たぬ人の生活ほど膚淺なものはない。

詩とは文字の上にあらはされた或ひは文學上の所謂詩のみを指していふのではない。

詩とはすべての生活表現の根柢的要素を意味する。生活に於ける詩とは、生活の背景をなすところの最深所を指すのである。

詩はすべての表現の基調であり、生命であり、光りである。力である。

詩は無限そのものゝ端的な表現である。わたくしたちは悠久そのものゝ相については知ることができない。しかしながらわたくしたちは、或る機會に、或る機緣によつて刹那的に悠久そのものゝ相を觀ずることができる。その刹那的な觀照の世界に映つて來る實在の相を實感するものは詩である。

哲學にも散文にも詩がなければならぬ。言ひ換ゆれば哲學者も小說家も、美術家も詩人でなければならぬ。何故なれば詩はすべての人間の行爲の最深所に生きてゐるものだからである。

眞に生きんことを欲する人間はすべて詩人でなければならぬ。詩人はいつも最深所を目あてとして生きるものであるから。

詩は神の心である。最も淨化された人間の心である。詩を持たぬ人間は俗人である。

わたくしは詩を持たぬ哲學を憎む。詩を持たぬ文學を憎む。詩を持たぬ詩を憎む。詩を持たぬ俗人の生活を悲しむ。

學問をするといふことは大切なことである、しかし學問がたゞ單に功利的な考へにのみ支配されてゐるならば、そ

の學問は尊敬せられることはない。それは俗人の學問である。
醫學も法學も詩を持つてゐなければならぬ。でなければそれは俗人の學問に墮してしまう。
勤勉な農夫の生活にも詩はある。否、勤勉な農夫こそ最も詩にめぐまれた生活を持つてゐる筈である。
かれは誰よりも自由である。かれは誰よりも日の光りと微風と青空と小鳥の聲とをめぐまれてゐる。かれは誰よりも大地そのものをめぐまれてゐる。
俗人にとりては日の光りや微風や青空は何でもないであらう。それらのものゝ眞の價値を知る人にとつては、それは高い塔や都會の美よりも、もつと深い本質的な美を持つてゐる筈である。
一莖の草の葉のゆらぎにも詩はある。嬰兒の微笑にも詩はある。
これらの不思議な詩を見出すことのできないのは、その人の心が曇らされてゐるからである。
詩人は最も澄んだ心の所有者でなければならぬ。
詩人は嬰兒の魂を持つた者でなければならぬ。
詩人は槲の葉のそよぎに神の言葉を聽くことのできる者でなければならぬ。
最も澄んだ心を持ち、嬰兒の心を持つた人間でさへあるならば、かれは立派な詩人である。
文字で表はされた詩を書きつゞるといふことは第二義的な仕事である。一番大切なことは詩人の心を持つといふことである。
たとへ一生たゞ一行の詩をも綴らぬ農夫にも立派な詩人はあるべき筈だ。
立派な哲學者、立派な學究、立派な工匠、立派な農夫はみな詩人である。
詩人はその生活に對して、かれをめぐる自然のすべての表現に對して最も親切な心を持つ人でなければならぬ。

人生そのものに對する親切な心を措いて他に詩の心はない。

わたくしたちは偶然にも、一つの人生といふものを賦へられた。この無限絕對の人生についてわたくしたちは果してどれだけ思ひを潜めたことがあるか？

たとへば生まれるといふことについて、生きつゝあるといふことについて、或ひは死といふことについてどれだけ眞面目に人生を考へたか？

或ひは生活の上にあらはれて來る色々な生活の相について、たとへば友情といふことについて、愛といふことについて、憎みといふことについて、苦惱について、歡喜について、どれほどの深さにまで人生を考へたことがあるか？

或ひは親と子の間のいろ〳〵ないきさつについて、友と友との爭ひについて、社會生活の中に見出さるゝ矛盾について、不正について、不合理についてはたしてどれほど眞劍に考へたか？

或ひは今、現在に生きてゐることについて、生を享樂しつゝあることについて、若いといふことについて、日光の快適について、人情の美しさについて、人生のありがたさについて、苦しさについてどれほどまで徹底的に考察したことがあるか？

これらの生活上の諸相について眞劍に、根柢的に考へることのうちに詩がある。

これらのことについて眞劍に考へる人でなければ人生に對して親切な人といふことはできない。

考へるといふことは苦痛であるにちがひない。しかしその苦痛の中にこそ一層かれを深くし、かれの生活を嚴肅化するところの詩がある。

學問をするといふことの第一の目的はわたくしたちの生活を深くするといふことでなければならぬ。わたくしたちの生活を嚴肅化するといふことでなければならぬ。

俗人と詩人との差は、わたくしたちに賦へられた人生そのものゝ價値を低く見つもるか、或ひは絶對的のものと見つもるかにある。

俗人にとつては、人生はたゞ一つの手段に過ぎない。

詩人にとつては、人生は絶對のものである。

キリストにとつては湖畔の漁夫も神の子であつた。釋迦にとつては一人の無智な人間も佛の化身であつた。

俗人はかれ自ら自分の人生をきはめて廉價に見つもる。詩人は全世界の寶にも優つてかれの魂を高く見つもる。

俗人はかれ自らの人生を廉價に見つもるばかりでなく、宇宙そのものゝ價値をもきはめて低く見つもる。

詩人にとつてのみこの世界は神の國となつてあらはれる。

俗人は物欲と虚僞と排擠の中に生活を苦しみ、詩人は神と偕に呼吸し、神と共に欣ぶ。

詩を持たぬ人の生活は神を見失つてゐる。詩を持たぬ人は、實は、人間の生活を失つてゐるのだ。

人は神と偕に生きることを考へなければならぬ。いつも自分らの生存の最深所に於いて考へなければならぬ。

わたくしたちは永劫の時を通じて、この刹那の生存をのみめぐまれてゐる。實際、人間にとつて、この人生は無限た自然のめぐみである。絶對の機緣である。絶對値の生存である。

この最上絶對の機緣を心ゆくまで感謝もし、實感もするのが詩の心である。

全身の血を躍り立たせるほどに、生きてゐたことのありがたさを、感じようとするのが詩の心である。

これほどの突きつめた心で、白熱的な思念で、生活に面する眞劍さが詩の心である。

いつもわたくしたちは心を若々しく持つてゐなければならぬ。

嬰兒は木の葉を戰かせる微風にも驚異の眼を瞠る。

わたくしたちは生活の諸相に對して、自然の一つ一つのあらはれに對して、いつも嬰兒が感ずるやうな驚異を感じなければならぬ。

わたくしたちはいつも人生に對して燃ゆるやうな熱心さを持つてゐなければならぬ。生悟りであつてはならぬ。死ぬ日まで人生に對する眞劍な努力を失つてはならぬ。

人生に面する時わたくしたちの心はいつも無邪氣な若者でなければならぬ。いつも處女でなければならぬ。若者はよく笑ひ、よく泣き、よく憤り、よく躍る。

人生に對してわたくしたちはいつまでも正直に笑ひ、正直に泣き、正直に憤り、正直に踊らなければならぬ。詩人の心はそこから生まれて來る。

人間は年をとるにつれて自然に魂の美しさを曇らされ易い。或る者は社會的空名に、或る者は富といふものに、或る者は權勢に自分の魂の美しさを賣つてしまう。

靑年のみがいつも人間の魂の美しさを保つ。老いてなほ靑年の魂の美しさを保つことのできるものは詩人である。

わたくしはこのごろ仕事の必要から西鄕南洲を少し研究した。西鄕はまつたく世界の史上にも稀な偉大な人であつた。かれの偉大さはどこにあつたか？　その嬰兒のやうなかれの無邪淸淨な心であつたと思ふ。「名も欲しくない、命も欲しくない」といふかれの一氣な心熱にあつたと思ふ。かれこそ立派な詩人であつた。

かれは詩人であつたがゆゑに、靑年の美しい魂を持つてゐたがゆゑに、一萬五千の靑年たちと共に美しく死ぬことができた。

どれほど長く人生を生きのびたかといふことは第二、第三の問題である。

どれほど美しく深く人生を生き得たかといふことが第一義的な問題である。

生くる日の限り

自序

「人々よ、もそつと靜かにしてゐてくれ、私は今眠らうとしてゐる。」

私の靈(たましひ)は今靜かな眠りをもとめてゐる。私は默つてゐたい。私はたゞひとりでゐたい。

私の周圍にも私に好意を持つてくれる人、私の生活を慰めてくれる人々のあることを、私は知つてゐる。私はその人々に對してひそかに感謝することを忘れてはゐない。人間として最も多くの缺點のみを持つて生まれたこの利己主義者をも生かす自然と周圍の人々に對して私は忘恩者であることはできない。かつては私はこれ等の自然と人々とを、私自身の小ひさな心のうちに温かい愛をもつて抱き容れようと努めたこともあつた。けれども私は餘りに小ひさな、餘りに不純な自分の心と愛とを悲しまなければならなかつた。

一日一日の私の生活の徑路を顧るとき私は小賢しくも人々と共に愛を叫んだ自分をさげすまずには居れない。

私は武藏野の涯もなき自然のなかに立つ日を愛する。そしてそこに限りなき自然の沈默せる愛と力とを見出すごとに、饒舌な私自身の愛の不純と力弱さとを感じないでは居れない。

自然は默しつゝすべてのものを生かし、すべてのものをはぐくむ。そこでは生長も、廢滅も、光りも、暗も同じ自然の沈默せる愛と力の懷に抱かれてゐる。

自然は何の哲學も宗教もイズムも持たない。けれども自然は最も赤裸々な愛と力とを刻々に生かしてゐる。

言葉なき愛、言葉なき力、言葉なき生長の偉大さ。
　私は自然の生活を欲する。沈默せる生活を欲する。私の唇から人間の言葉が奪はれた時私の靈（たましひ）は自然の大きな愛に觸れることができる。自然の赤裸々な力を感謝することができる。
　私は人を愛することをもとめない、人を憎むことをもとめない。私の憎愛悲喜のすべてを赤裸々な自然のまゝであらしめたい。
　風は海を越えて廣野の樹を吹く。しかし風は再び樹を想ふことはない。かれは更にあてもなく、野より丘、丘より海へと歸ることなき永遠の空間を走りつゝ、或ひは樹或ひは海を吹く。しかもかれは永遠に吹きつゝ永遠に一所に執することを知らない。
　私の憎愛、悲喜の悉くをして自然の如く刹那的な無執無緣のものであらしめたい。
　私は旅に出て見知らぬ旅人と語る、旅人の愛を感ずる。けれども私は旅人の名を記憶してはならない。私を虐くる者の名を訊（き）いてはならない。
　私は自分の貧しい心に愛を感ずるとき、恰かも自然が雨をそゝぐやうに、見知らぬ人々の心に私の愛をそそがなければならぬ。私は決して振りかへつてその人々を見てはならぬ。私の心に何の愛も目ざめない時私は無理强ひに私の愛を絞り出してはならぬ。樹は實るべき時に實る。熟すべきときに熟する。不熟な果實をもぎとつてはならぬ。それはやがて樹を枯らすことゝなるから。
「人々よもそつと靜かにしてゐてくれ、私は眠らうとしてゐる。」
　愛と力の空乏を最も强く自分のうちに感じてゐる私はもそつと靜かにひとりでゐなければならぬ。

「私は人間よりも、より多く木を愛する」と言つた天才の言葉は今私の心に強い共鳴を感じさしてゐる。私は今仄かに自然を愛せんとする心の一日一日と強まり行くことを感じてゐる。

私は自然の前に跪いて静かにたゞひとりで祈つてゐなければならぬ。

人々よ私をもそつとひとりで居さしてくれ。

大正六年十月七日秋雨の日駒込にて

著者識

メレジュコフスキイの二つの世界

一、凡てのものは死す

草や木が芽生えして、花を開いて、實を結んでやがて枯れて行く流轉の相（すがた）を見ながらも、私たち人間は「草木とは全然異つた自然の恩惠を持つてゐる」と考へてゐる。そして屢々人間の死を實見してすら「しかし人間は靈的に永遠にどこかで生きてゐる」といふやうな想像を描いて自らの運命を慰めてゐる。

けれども人間は果して本質的に草木とはちがつた運命や恩惠の下に置かれたものであらうか、私の人生に對する疑の第一歩はこゝにある。たとへ驚歎に値するほどな偉人の生涯であつても、生まれ、生き、そして死んで行つた足跡を時間的に遠くかけ離れた位置に立つて見たならば、恐らく芽生え、咲き、實り、やがて枯れて行く草木の運命と何のけぢめがあらう。

人々は餘りに尊く人生を見積り過ぎてゐたのではあるまいか。人間力、人間の創造力をば餘りに過大に信じてゐたのではなかつたらうか。

人間は最初自己をより以上に大なるものと見、終りに自己を最も卑小なるものと信ずるやうになる。人間の運命と草木のそれと何等の差別もないことを感じなければならぬやうになる。こゝに至りて人生ほど儚なく、望なきものはないやうになる。たゞ人生は死を待つ悲しみの聲にのみ充てるものとなる。

「全世界が泣いてゐるとき何うして笑ふことができやう。生まれたばかりの人のために祝宴を開く人の心なさよ。汝は生ける人の、やがて死なん日のために汝のよろこびを藏（かく）して置け。」

「おう、世界よ、汝の魅力！　汝は平和を約束する、けれども汝は平和を持たぬ。汝は安息を約束する。けれども安息は人間が生まるゝ以前既に失はれてゐる。」

私たちはミケランゼロと一緒に生に面してこのやうな絶望的な哀愁の情を訴へる。しかしながら私たちは果してミケランゼロと共に靜かに絶望的な死の日を待つことができるか。

木の實は運命のまゝに靜かに落ちて行く。けれども人間はしかく運命に對して柔順ではない。かれ等は人生の究竟が死と絶望とであることを知りながらも、最後の呼吸が眠るまで死と闘つて生命の一路を見出さうと焦つてゐる。「二つの世界」を調和させようとするメレジュコフスキイは畢竟、死の脅迫を恐れつゝ、尙ほ死と闘つて「如何に生くべきか」を索めんとする作家の一人である。

木の實は運命に反抗することなくして死んで行く。

人間は運命に反抗する、けれども同じく死ぬ。

私はこの論文に於いては、死の恐怖から遁れて專ら眞生命の一路を切り拓かんとするメレジュコフスキイに就いての み論ずる。かれの藝術品の價値、材料の取扱ひ方、千變一律な概念的な技巧に關する私の不滿に關しての論は他日にゆづる。

二、人神と神人との闘ひ

ドストイエフスキイ、トルストイの後を受けて近代露西亞文學の一つの巨星として生まれた作家……背教者ジュリアンのうちにより多くのクリスチャニテイを見出した作家、人間に知識の翅を與へようとしたダ・ギンチの、巨人のやうな冷たい知識の後ろに女のやうにやさしい愛を見出した作家、ピーター大帝の嵐のやうな力の蔭に悲壯な超人の寂し

い孤獨な姿を見出した作家……メレジュコフスキイの思想のなかには何時も享樂主義と嚴肅な宗教との鬪ひ、または異端者とクリスチヤンとの戰ひが描かれてある。最も人間的な香ひの强い性格と、肉體を失つた心靈ばかりの非人間との戰ひが描かれてある。

しかしかれの思想を神人(ゴッド・マン)に對する人神(マン・ゴッド)の戰ひであると見、またその理想とするところが神人と人神との調和であると見ることが一般的な批評であるとしても私たちはたゞそれだけとしてかれを論じ去ることはできない。果してその調和なり統一なりが可能であるか、またかれ自身果してそこまで行き着き得たか。或ひはかれは二つのもの〻統一といふことを目標としながらも中途で回避的な方法に墮しはしなかつたか。又それを私たち自身の問題に引き直して見てかれの靈肉一致の問題、神人合一の問題をば私たち自身如何に取り扱ふべきであるか、果して二つものが統一せられた第三の帝國が人間によりて建設し得らるべきものであるか、否かといふことはメレジュコフスキイ研究者にとりて興味ある問題であると思ふ。

有體に言ふならばかれの理想は立派である。構へも大きい。けれどもかれはまだ完成してはゐない。かれは直進的に歩かないで途中で宗教愛、または享樂生活といふやうな方面にはいつて、この問題の解決を着けようとしたのであつたが、そこには世紀末的な氣の弱い善人の回避的なトーンが多く漂ふてゐるといふことを認めないわけに行かぬ。

かれが見出した人間はすべて偉大なる人神の權化であり、悲壯なる生活者であつた。マアカス・アウレリウス、ジュリアン、ダ・ギンチ、ピーター、トルストイといふやうな最も偉大なる力の所有者をかれは好んで論じてゐる。そしてかれが描いたこれ等の人々は最も偉大なる力の所有者であつたと同時に、最も偉大なる悲劇の主人公であつた。

何故にかれは最も偉大なる人々を描き、偉大なる人々の大悲劇を見たのであつたらうか。かれは非基督教徒と呼ばれるジュリアンやピーターに多くの同情を持つてゐる。かれは傳統的、迷信的なキリスト教の成すなきを知つてゐる。

かれは合理的な、どこまでも人間の智慧と力との上に築かれた世界を索めようとしてゐる。
クリスチヤンと自稱せし皇帝アウガステナスに引き換へて、背基督教徒と呼ばれしジュリアンこそ愛を解したる君主ではなかつたか。神の反抗者ダ・ギンチこそキリスト自身の愛を持つてゐたのではないか。メレジュコフスキイは所謂クリスチヤンの迷信冷酷に對して所謂惡魔主義、享樂主義、人間主義の美しさをたゝへるのである。
かれの所謂二つのもの ゝ統一といふことは實は享樂主義、ギリシヤ主義のうちにクリスチヤニテイを生かすことであつた。決してクリスチヤニテイとギリシヤ主義とを同時に並立せしむるといふ意味ではなかつた。肉のうちに靈を見出し、人間力のうちに神を見出すといふことであつた。即ち絶對的人間力の解放である。しかしながらかれの人間力の解放には幾多の悲劇を生むだ。かれはジュリアンのうちに、ダ・ギンチのうちに、ピーターのうちに人間力解放者の一樣なる悲劇を見出したのであつた。悲劇の發生は何處から來たか。かれは人間力の解放がさゝやかな人間的愛慾のさゝやきを捨てゝひたすらに力の方面にのみ走らんとしたるところに悲劇が發生したとするのである。こゝに於いてかれの享樂主義、人間主義はキリストの愛を取り容れ、宗教的要素を取り容れなければならなかつた。しかしてキリスト教の愛は、實にこれ等の神の反抗者、人間力の解放者のうちに本然的に潛むでゐたのであつた。かれが主張する人間主義はどこまでも人間的であり、自然的であることを要求する。人間が所有してゐるすべての力をも情念をも生かすことを要求する。この點に於いてかれは人神ともいふべきジュリアンやダ・ギンチに對しても慊らないところがある。それは何故にかれ等が力の一面をのみ見て、さゝやかな愛や人情のさゝやきに耳を傾けなかつたかといふことである。メレジュコフスキイが抱いてゐる人間主義にはダ・ギンチやピーターの力以外にさらに宗教や愛の力を加味してゐる。かれは新しきヘレニズム、新しき人本主義の主張者と見做すことができる。
舊約時代のバベルの塔は根柢から頽された。その後幾千年が間、人間の子はバベルの塔を築いては失敗した。新し

きバベルの塔は或ひはジュリアンによりて、或ひはダ・ギンチによりて、或ひはピーターによりて築かれた。しかも新しい人間力の塔には塔の頂にかゝぐべき燈が忘れられてあつた。天に達する人間力の塔はこれ等の大建築者をしていたづらに虚無界の暗と寒さとを感ぜしむる最高の階段であることを意識せしむるに過ぎなかつた。かれ等はその築きし塔の絶頂から暗い淵をのぞいてわなゝかなければならなかつた。

かれ等は何故に高塔を築き行く第一歩から石と共に燈（ともしび）を運ぶことをしなかつたのであつたか。石は積まれてバベルの塔となつた。けれどもそれはかれ等にとりて幸福と光りとを與ふべき高塔ではなかつた。かれ等は自分の手によつて築いた塔の上に立つた刹那に如何にかれ等自身の人間力の偉大なるかを知つた。そしてかれ等自身と遥か塔の下に低徊（ていくわい）せる愚鈍な凡人との距離の如何に遠きかを知つた。超人タイタンの矜りは如何にこれ等の偉人の胸に燃えたことであらう。けれどもかれ等は燈を持つことを忘れた。かれ等は燈をかゝぐることを忘れた。かれ等は天上界への梯子を見出すことを忘れた。巨大なるタイタンの悲劇がこゝから生まれた。

メレジュコフスキイの描いた巨人はこの種のタイタンであつた。メレジュコフスキイ自身タイタンたらんことをのぞむでゐる。しかもかれは先人の失敗の跡に鑑みて、塔の建設と同時に燈の準備を主張する。

かれはプロメシゥスたらんことを欲する。同時に嬰兒のごとくならんことを欲する。愛の胸に抱かるゝ無我無念の信從者たらんことを欲する。蓋し嬰兒の心、愛の心、信從者の心のうちにこそ塔上にかゝぐべき燈の光りが潛（ひそ）むでゐるからである。かれは智慧と力とをあこがれた。同時にかれは信仰と愛とをもとめた。

十九世紀後半の思想上の暴風雨がやゝ靜まつて次に來るべき嵐の前の少かの休息時にかれは生まれた。かれは「マアカス・アウレリウス」の卷初にアウレリウスの時代を評して次のやうに言つてゐる。

「マアカス・アウレリウスの時代は短き休息であり、二つの嵐と嵐の間の深き碇泊所である。夏の雷雲が滅（き）えてしま

つて、恐ろしい冬が大地をかこむ前に、秋の日が迫つて來る。大氣が冷され、太陽の溫かな光線が翳つてやがて倦怠ややさしき憂鬱さやまたは溫柔なトーンが大地を支配する……歷史上に於けるかやうな秋の日は皇帝マアカス・アウレリウスの時代である。あらゆる方面に於いて羅馬文明の祝福がかゝやき、更に外部的繁榮があり、文化榮え、國民は皇帝に對して感謝しつゝ皇帝を愛した。國民は何等不平を言ふべき原因を持たなかつた。しかもかれ等は名づけがたき不安と弛緩とを感じた。文化發展のすべての收穫を收め得たるこの時代に、爛熟したる文明の高潮時に、死を豫示する一陣の風は既に吹いてゐたのであつた。大皇帝の大智はやがて破滅せんとする世界の上に燦として輝いてゐた。しかもそれは老秋の太陽の如く何人に對しても、何等の慰安をも法悅をもあたへなかつた。」

この紀元二世紀後半のローマはまた十九世紀末のロシヤ帝國であつた。卽ちこの二つの時代は「同じ外的繁榮、內的不安、同じ懷疑、同じ信仰の疑惑、同じ悲哀と疲勞」とを持つてゐた。

メレジュコフスキイ自身も亦この世紀末の懷疑と信仰との間に生まれ、二つの世界の間をさ迷ふたのであつた。終にかれは暗いキリスト教的信仰をすてゝ明るい人間力の世界に入ることによりて自分の世界を見出さうとつとめた。かれの三部作を通じて私たちは原始的な人間力、また科學的な人生を見出さうとしてゐるかれの努力が如何に烈しいかといふことを察することができる。けれども私たちは他の一面に於いてかれの思想がタイタンたらんとすると同時に基督教徒たらんとする矛盾を持つてゐることを見出す。卽ち極端なこの人間力の歎美者、肉體美の歎咏者はやがて人間力の否定者となり、往々人間生活そのものをすら捨てんとするやうな懷疑者に墮してゐることがあることに氣付く。

ジュリアンはペルシヤの陣中に曙の光りを待ちのぞみながら「ガリレア人、汝は勝てり」と叫びつゝ死んだ。メレジュコフスキイの人間力の最高潮をあこがるゝ心のうしろには、既に蒼白き顏色のガリレア人を待ちのぞむ心が潛むでゐる。かれはアポローの神殿を築いた。けれどもかれは橄欖山の神を拜せなければならなかつた。かれはピーターの近

代的大事業を承認する。けれどもその偉業の後ろに潜む大悲劇をも認めなければならぬやうになつた。それ等の悲劇の壓迫に打ち勝ちつゝひたすらに大ロシヤの建設にのみ夢中になつたピーターだけの大確信——人間力に對する——を持つにはかれの心は餘りに近代人的である。かれは最後まで研究室の祕密の鍵を握つてゐたダ・ギンチの執着を持つことはできない。かれはマアカス・アウレリウスほどのストイック風な禁慾生活に對する底力を持つてゐない。かれはトルストイほどの心靈の世界に對する生一本な努力を持つてゐない。かれは禁慾主義者たるには餘りに人間美の禮讃者である、かれはトルストイたるには餘りに異端的である。しかもかれは他の半面に於いては少年ティションの如く隱者的生活裡に神の靈光を見出さんことをもとめてゐる。そこにかれの世紀末的な信と不信との混惑と矛盾とがある。私たちは先づこのやうな矛盾性を育んだかれの生活の出發點から考へて見よう。

三、かれの生活

一八五六年かれはペテロスブルグ宮中の官吏の家に生まれた。かれには最初から生活上の苦痛はなかつた。かれはゴルキイやアンドレーフやチエーホフやドストイエフスキイ等とはその出發點からして異つた生活のレヱルの上に置かれた。かれの作物がやゝもすれば餘りに概念的になり易いのはかれが書物に接近する機會のみ多くして、實際に人間生活の苦痛を味はゝなければならぬ機會が少かつたといふ事實に多くの關係があるのであらう。

大學卒業後間もなく第一の詩集(一八八八年)を出し、續いてラテン、ギリシヤの飜譯をした。このころ一としきり人道主義者風な傾向もあつたが、第一の詩集にあらはれたかれの思想は「生のよろこび」といふことが中心になつてゐて、「美のみが詩人にとりて眞實である」と考へられてゐた。そのころの作で若い大學教授と病身な乙女の可憐なる戀物語を書いたのももあるが、その後かれはそのやうな現實味の豐かな作品を出してゐない。その後かれは專ら古代

物の研究に沒頭してしまつた。その結果としてかれはギリシヤ哲學を讃頌したり、自己中心の快樂主義を主張したりした　キリスト敎の愛他主義とは相容れないものであつた。尙ほ愛他主義に對するかれの超人間的な主我的な思想の傾向はニイチエから來たものも少くはないであらう。かれはソフオクリーズやユウリピデイズを譯し、同時にギリシヤの異端主義に對して熱心な愛をさゝげるやうになつた。かれの三部作「神々の死」、「先驅者」、「ピーターとアレキシス」はこの時代の所產である。かくてかれはこの三部作を通じて二つの思想の戰ひを描いた。

かれがかやうな二つの思想の戰ひを描くに至つた動機としては旣に述べたやうに世紀末的な懷疑と信仰の葛藤といふやうな背景を忘れることはできぬが、同時にかれの家庭が非常に嚴格な父と、やさしい母とを持つてゐたといふやうなことにも幾分の關係があつたのかも知れない。「ピーターとアレキシス」のなかのピーター大帝と皇太子アレキシスとの間のいきさつは、ストイック風な敎育を施した嚴格なロシヤ宮中の官吏なる父と作家自身との間を暗示するものではないかともおもはれる。かれは時代の人としては信仰と疑惑との間にさ迷ふてゐると同樣に、家庭の人としては力と愛の間にさ迷ふたのではなかつたゞらうか。

人生の目的はひたすら幸福と美とをもとむるところにあるか、または靜かに死と苦痛とに順從すべきところにあるか。言ひ換ふれば自ら全世界の創造者となり、又は運命の開拓者となるべきであるか、或ひは自らすべてを神祕の世界にさゝげて柔順な歸依信從者の生活を送るべきであるか。メレジユコフスキイは久しい間この問題になやまされた。

人間の心からタイタンの血が取り除かれない限り、人間は翅を持たんことをのぞみ、天上の炎を得んことを欲するにちがひない。

四、人間に翅を與へんとするダ・ギンチの企

メレジュコフスキイは人類の歴史に於いて三つのタイタンを見出した。ローマの古代に於けるジュリアン、文藝復興期のダ・ギンチ及び十八世紀の當初に於けるピーター大帝である。この三つのタイタンはアポローの崇拜者であり、人間美、人間力の解放者であつた。作者はこれ等の巨人を通じて悲壯なタイタンの運命をたゝへ、壯烈な人間力解放者の偉大さをうたつてゐる。そこには靈に對する肉の勝利があり、信仰に對する不信の徒の凱歌が聞える。同時にかれ等が當然受けなければならなかつた神の怒りと、新しき人本主義者の步まんとする方向についての暗示があたへられてゐる。

かれの三部作を一貫してゐる神人對人神の戰ひは何時もタイタンの傷ましい失敗に終つてゐる。しかしメレジュコフスキイはこれ等の謀叛者、人間神を呪つてはゐない、かれはどこまでも人間神の偉大さをたゝへてゐる。かれの三部作は人間力崇拜の讃歌である。超人の讃頌である。

古來多くの偉大なる超人的人格が步いて來た道は何時も純一なものをは二つに分つことから始まつてゐる。靈の世界に入らんがために人は肉を斥ける。智慧の世界を切り拓かんがために愛慾の念を殺す。そこから偉大な人格の嚴肅さと近附きがたい悲劇的崇高さとが生まれる。メレジュコフスキイが選んだ性格は皆この種の典型であつた。

モンナ・リザの繪が出來上る少し前ダ・ギンチとモンナ・リザとの會話のなかに作者は次のやうなことを言はせてゐる。

「私は自然の新しい姿や祕密な創造を見たくてたまらなかつたので、到頭、空洞の中に行つた、そしてそこに驚いて立ちすくんだ。私は屈んだ、右の膝の上に左の手をのせて、眼を暗に馴らすために自分の手で目を掩ふた。それから私は氣を取り直して空洞のなかにはいつて行つた、暫く步いた。それから、困つたことだと思ひながら、一生懸命に眼をひらきながらどこだかはつきり道を見出すつもりで探りながら步いてゐたが、何時の間にやらすつかり途を

はぐれてあちこちさ迷ふてゐた。が、何うしても暗さには勝てなくなつて來た。それから、暫く經つて恐怖と好奇心とが私の心のうちに烈しく鬪ひ始めた……」

そこで女が訊ねた。

「その二つの心の何ちらが勝ちました？」

「好奇心。」

「そしてあなたはその大きな祕密をお見出しになりまして？」

「見出した……見出すことのできるかぎりは。」

人生の祕密を鎖してゐる空洞の中にはいつた時この巨人の心のなかに起つた二つの心――恐怖と好奇心――その一つを殺してかれは人生の祕密を探りつくさうとした。かれの心のうちに戰つた二つの心、それは自然に對する驚異と疑惑との戰ひであつた。信ぜんとする心と疑はんとする心との戰ひであつた。キリストたらんとする心とタイタンたらんとする心との鬪ひであつた。かれはこの二つの心を一つにすることはできなかつた。卽ちかれはその何れか一つを選ばなければならなかつた。かれは信ぜんとする心を捨てゝ、疑はんとする心、知らんとする心を選んだ。

かれは「あらゆるものを知つてゐた、かれは何物をも信じなかつた、かれは惡魔をも神をも信じなかつた。」かれはひたすらに自然の泉のなかに飛び込むで直接に智慧の水を掬むだのであつた。

かれには知識の外何ものもなかつた。かれにとりて神は機械力であり、數理であつた。2+2=4であつて、祈りといへども決して=5を作り出すことはできない。人々はキリストを失ふことを悲しむ。けれどもかれは悲しまない。何故なればかれにはキリストは永遠の機械力であり、數理であると考へられてゐたからである。かれはその愛弟子ヂオヴ・ンニーに言つた。

「泣くな！ キリストはゐない、けれども愛がある、大きな愛がある、大きな知識の娘の愛がある。知識はすべてのものを知り、すべてのものを愛する。……人々は愛は虚弱から生まれ、驚異から生まれ、無智から生まれると教へた。けれども愛は力から生まれ、眞理から生まれ、知識から生まれる。」

「蛇は決して人間を僞らなかつた。」「人間は善惡の知識の木の實を喰ふことによりて人間自身が神のごとくなる」といふことはダ・ギンチにとりては決して僞りではなかつた。かれは蛇の豫言を實現せんがためにその一生をタイタンの手にさゝげたのであつた。

天上の火を盜むだプロメシウスは胸を裂かれて死んだ。善惡の知識の木の實を喰ふたダ・ギンチも亦疑惑絶望のうちに死んだ。けれどもその生涯は大なる反抗者の雄々しい苦鬪であつた。悲痛なる反抗者の矜恃の生活であつた。

夏の夕暮れであつたか、一羽の燕が逃れてかれの軒端に落ちた。かれはその處女のやうに柔かな燕の翅を擦つてやつた。かれは燕をいたはりながら靜かに空に放つてやつた。燕は輕げにさも快げに大空を翔つて行つた。

「人間は何故に空をかけることができぬか？」

翅を持たぬ人間の悲しみと、持たぬものを持たんとするプロメシウスの謀叛心がかれの心に萠した。かれの一生は人間に翅を與へんがためにさゝげられた。神は燕に與へて、人間に翅を與へなかつた。かれは神の心を裏切つてかれ自ら全能者となりて、人間に翅を與へようと決心した。

神は人間に對して、しかく容易に神の力を與へない。バベルの塔を築くものは永遠に神の怒りを免れることはできない。

かれは數理に基いて飛行機を工夫した。その企ては見事に失敗した。盲目的にかれを信じてゐたかれの弟子の一人は空から落ちて病床に呻いてゐた。

「俺が破滅さした男がこゝにもゐる。」

かれはかれの知識の犠牲としてさゝげられた幾人の氣の毒な男たちを見た。かれは拂はなければならぬ犠牲の高價なることを知つた。しかしかれはその悲しみのためにかれが選んだ知識の世界への道を歩むことを斷念しなかつた。かれが實驗用のために毒素を注いだ林檎は腹黒いイル・モロ夫妻のために利用せられて却つてかれの愛護者たる若いミランの侯爵を殺すことゝなつた。かれは悲しむだ。それでもかれは初志を飜さないで、ひたすらに自然界のあらゆる祕密を化學のなかに見出さうとつとめた。新たにミランを支配したイル・モロ――かれの十餘年の愛護者となつた――が佛蘭西軍に追はれてミランの城から逃げ去つた時、かれは丘の上に立つて、兵燹に燃ゆる城を見て何を悲しむだか。かれは決してイル・モロの運命を悲しまなかつた。かれは城のなかに描きかけて置いた自分の作品を悲しむだ。かれはまた侵入軍の大砲の音や、亡國の悲しい鐘の音を聽きながら、それ等の音が一つ〱の中心を持つて、そこから音波を描いて傳はつて行く音響學上の原理を實驗することのできたことを喜んだ。

フランテエスカといふ少年を伴れて高い山に上つた時、かれは數千年前の山上の貝殼を掘り出しては少年に太古の物語りをしてゐた。地平線の涯に白い烟が見え、間もなく砲火の響きが轟いて來た。それは佛蘭西の侵入軍であつた。しかし老天才には侵入軍が勝たうとも、母國軍が敗れやうとも、それは問題ではなかつた。かれは少年をとらへて「嘗てこの山上、今鳥が鳴いてゐるあたりには海の魚が泳いでゐた」といふやうな話をくり返してゐた。

かれにとりては一つの小ひさな眞理を見出すことが王國の興廢よりも大切なことであつた。

かれはまた或る日、窓に凭れて、町の外を流れて行く二つの長流を見た。その一つは自然が作つた流れであつた。それと並んで正午の光りを浴びた流れがあつた。それはダ・ギンチによりて設計せられた運河であつた。かれはかれ自身の力と知識とによりて開鑿せられたその大事業を見てほゝ笑むだ。

「俺は“Prime Mover”である。」

恐ろしい知識の謀叛人！　勝ち誇つたタイタン！

けれどこの知識の矜持が何時までか續かう。嘗て熱狂せる幾萬の群集中にかくれてたゞ一人靜かに壇上のサヴォナロラの姿をスケッチしてゐたかれは今や靜かに自分自身の淋しい姿をば見なければならなかつた。弟子はかれを捨て世間もこの老天才を顧みず、ラファエルやミケランゼロの名はやがてあはれなるこの先驅者を國外に追ひやつてしまつた。

かれにとりて故國ほど呪はしきものはなかつた。嘗てはかれが小脇にかゝへて暗い空洞を探つた少年フランチェスカは今や立派な靑年となつた。今やかれは却つてこの靑年に支へられて氣息奄々としてアルプスを越えねばならなかつた。

「先生！　伊太利の平原が見えます！」

今まで靜かに歩いてゐたかれはこの言葉を聽くや、飛び上るやうにして雪のアルプスをフランスの方へ逃れて行つた。かれは一度も母國を振りかへつて見ることをしなかつた。

かれは今や望みなき世界へ、たゞあて途なくまつしぐらに進むより他はなかつた。

かれはアルプスを越えてフランスに入つた。そこでもかれは知識の世界へとたづね入ることを忘れなかつた。當時かれはパプテスマのヨハネを描いてゐたが、かれは繪師であるよりは寧ろ科學研究者であつた。かれの祕密の研究室にはまだ飛行機の材料が集められてあつた。かれは何人にもかれの知識の寶庫をうかゞはせなかつた。かれが病重りて起つことを得なくなつた際にもかれは研究室の鍵を忘れなかつた。かれは弟子に命じてその鍵をかれの寢床の下に置くことによつて始めて安心して眠ることができた。

かれは研究室の鍵を握つて死んだ。けれども終にかれは知識の究竟に詣ることはできなかつた。文藝復興期のファウ

ストはかくして眠つた。

五、ピーターと背教者ジュリアン

更に私たちは「ピーターとアレキシス」に於いて人間の知識または人間の力にのみ生きんとするタイタンを見出すことができる。ピーターは近代のタイタンであり、ダ・ギンチである。かれは「人はかれ自身の主でなければならぬ」ことを信じた。かれは「かれ自身神である」ことを信じた。かれはロシアの近代文明に點火すべき知識の炬火を盜まんとしたプロメシュスであつた。かれは自ら、「予は新しき民族を創造すべし」と言つた。かれは人間力によりてなさるゝ創造のうちに神ありと信じた。

「神を拒むものは狂者である、愚者である。眼を持てるものは神の創造のうちに神を見分けなければならぬ。」かれのいふ神はかれ自身の人間力である。

かれは神の創造力と人間の創造力とを同一であると見做した。かれも亦神が機械力であることを信じ、數理であることを信じた。嘗てペテロスブルグに大洪水があつた時、驚き惑ふ廷臣等のなかにゐてかれは從容として市民の救助に人力の最善を盡した。戸外には恐ろしい嵐が狂ふてゐた。しかしかれの眼は輝いてゐた。かれは氣壓計を指して言つた。

「見よ、驚くべき理由はない。恐れることはない、氣壓計は噓を言はぬ。」

知識を神と信じ、"Prime Mover" であると確信したピーターには知識の命ずることの外、何の權威もなかつた。かれは自ら濁流のなかに浸されて多くの市民を救ふた。暴風雨が強ければ強いほど、かれは自分の力を信ずることが強くなつた。粗末な水夫のジャケツを着、長靴を穿き、髮は後ろに吹かれ、帽子は風に飛ばされ、小舩の上に突つ立つ

て、濁流と暴風雨に虐げられてゐるペテロスブルグの市を見つめてゐるかれの面には彫刻のやうな靜けさと確信とが漂ふてゐた。そこには何の恐怖も哀憐も混亂もなかつた。

かれはあらゆる自然力の暴虐に打ち勝てる超人であつた。皇太子アレキシスはその折の父の姿を見て「かれは神であるか、惡魔であるか？」とさゝやいた。惡魔にも神と等しき力がある。アレキシスもロシヤ全國民もピーターの力を惡魔の力であると見たのであつた。

たとへそれが神の力であらうとも、惡魔の力であらうとも、ピーター自身にとりては善惡の差別はなかつた。すべて強きこと、合理的なること、民族を幸福ならしむることはピーターにとりて第一になさねばならぬことであつた。

背教者ジュリアンはローマの市民をして人生のあらゆる幸福を享樂せしめんがためにキリストを捨てゝ希臘の神々を拜し、アポローの神殿を築いた。かれが希臘の神々を選び拜するの根據はより幸福なる生活、より明るき生活を人人に與へんとするところにあつた。ピーターもまたアポローをロシアに齎した。久しい間溫かい南方の地中に埋められてあつたオリンプスの神々は雪深いロシヤにあがめられることになつた。アポローはピーターにとりては力の神であり、智慧の神であつた。かれは自ら鐵鎚を振り上げて軍艦を造つた。かれは鐵鎚を振つて眠れる大ロシヤの大地を擊つたのであつた。かくしてかれは眠れるスラヴ民族の夢を破らうとするのであつた。かれは皇太子アレキシスを海外に留學せしめて造船、造兵、築城、戰術といふやうな大ロシヤ建設のために必要な科學知識を養はしめた。けれども優柔不斷なアレキシスは父の心を掬むことをしなかつた。アレキシスは父を目して非キリスト教徒とし、神の敵であると信じた。父は飽くまでもアレキシスを自分の大理想——大ロシヤ建設——を完成せしむべき後繼者たらしめようとした。かれは嘗てスヱーデンの戰ひから歸つた折、戰勝の大觀兵式を行つたことがあつた。その時かれは當時嬰兒であつたアレキシスを抱きながら軍隊の前に立つて大ロシヤの後繼者に對して軍隊のウラーを浴びせさせたことがあつ

た。けれどもアレキシスの自意識が強まるにつれて、またピーターの事業が大きくなるにつれて父と子との間の愛は取り去られて行つた。皇帝にとりては國家はかれの生活のすべてゞあつた。かれが築き上げた新ロシヤを受け繼ぐだけの力を持たぬアレキシスに對して皇帝の愛はやがて憎みと變じて行つた。皇帝にとりては國家の前には父子の愛は容赦もなく踏みにじられてしまはなければならなかつた。父と子の間の幾多の波瀾の後皇帝は自ら手を下してアレキシスを殺さなければならなかつた。

以上かれの三部作のヒーローは悉くアンチ・クライストの人々であつた。そしてすべてがプロメシウスと同じ運命を見出したのであつた。バベルの塔は神の怒りに觸れて頽れた。しかしその音は凄じい英雄的なものであつた。善悪の智慧の木の實を喰つた最も偉大なる人神の破滅を代表するものであつた。そこに絶大な人間力の頽れ行く悲劇美があつた。

六、信仰に生きんとする弱き人々

次に私たちはメレジュコフスキイの三部作のなかに大なる力、大なる知識の悪魔と並んで何時も信仰の人間が描かれてあることを見のがしてはならぬ。即ち私たちは何時もアンチ・クライストに對するクライストの徒を見出す事ができる。ジュリアンの兄弟ガルス或ひはダ・ギンチの弟子ヂオヴァンニー或ひはピーターの子アレキシスは同じ型に屬する信仰の徒である。是等の人々は同じやうに意志の弱い、運命に反抗することのできない、何時も受け身になつて動いてゐる人々である。たとへばジュリアンは皇帝アゥガステナスに召し出された時、外袍の下に短劍を忍ばせて皇帝に近づいた。かれは死地に陷つても猶ほ活路を見出すことを考へてゐた。かれは運命の自主たらんことを欲した。かれはアポローの使徒である。けれどもこれに引きかへてかれの兄弟ガルスは死の最後まで神――キリスト――に救ひを求

めつゝ殺された。こゝに人間力、人間美歎咏者としての作者のヘレニズム對ヘブライズムの見方が潜むでゐる。

ダ・ギンチの弟子ヂオヴァンニーは或る時は當時の大宗教家サヴオナロラに走つて全く信仰の生活にはいらうとした。けれどもかれはまたダ・ギンチに歸つて來た。しかしかれは頼るべき神なくしては生きて行くことのできぬ男であつた。かれは信仰にも生きず、知識のみに生くることもできぬ極めて世紀末的な色彩を豐かに持つた意志の弱い正直な男であつた。かれは自殺を選ぶの外、行くべき道を持たなかつた。

「キリストと非キリストは一なり」かれはダ・ギンチに隨つてかくも考へた。けれどもその考へは直ぐにサヴオナロラの心によりて打ち消された。「否！　否！　寧ろ死！　おん身に我が靈を委ぬ、神よ！　おん身は我が審判者たれ！」かれはかくして落日の光りを浴びつゝ自殺した。

ヂオヴァンニーのこの心は同時に信仰と知識とを抱きながらその何れにも一身を委ぬることのできぬ多くの近代人の悶えであり、またメレジユコフスキイ自身の心を語つてゐるものである。作者自身がダ・ギンチたることを得ず、ピーターたることを得ないところに世紀末的な惱みがある。三部作を通じて見出さるゝ幾多の人物の中でヂオヴァンニーは最も興味ある、また世紀末の人々に共鳴多き性格の一つである。

更にアレキシスに至りては私たちはガルスよりもヂオヴァンニーよりも自覺せる信仰に立てる、しかも複雜な心理を持てる近代人的な色彩を見出すことができる。アレキシスの性格はガルスやヂオヴァンニーに見るほど純なものではない。かれのキリストに對する信仰意識は餘程確實な根柢を持つてゐる。かれは極めて堅い信仰を持つてゐる。神のためならばかれは父ピーターを敵として戰ふだけの決心を持つてゐる。けれどもかれも到底意志弱き近代人の典型である。かれはキリストを信じた、けれどもかれは大酒をあふつて少かに寂寞と恐怖とを取り除くことのできる人間であつた。かれは小刀を振りかざして宮中の卑しい女を手に入れるほどの亂暴者であつた。かれは善人であり、惡人であ

つた。心から自分の罪を神の前に悔ゆることのできる純な心の所有者であつた。嘗てピーターの病が一時危篤を傳へられた時多くの國民は皇帝の死を神に願つた。アレキシスも亦ロシャ國民の幸福のために父の死を神に祈つた。しかしかれは後にそのことを非常に後悔して僧侶の前にかれの罪を告白した。かれは僞ることのできぬ男であつた。鋭い良心を持つた近代人であつた。けれどもかれには力がなかつた。強い意志がなかつた。かれは弱いクリスチャンにはなれたが強いアポローの信徒にはなれなかつた。

ガルスもヂオヴァンニーもアレキシスも運命の前に屈從してしまつた。かれ等はみな或ひは殺され、或ひは自殺の途を選ばなければならなかつた。かくの如く信仰によれる人々の末路も亦悲劇的なものであつた。しかもかの人間神の死に比して極めて光りのない、みじめな悲劇であつた。

私たちはかれの作物を通じて對蹠的な二つの性格を見せられた。ジュリアンとガルス、ダ・ギンチとヂオヴァンニー、ピーターとアレキシス。即ち信仰に生くる人々と人間力に生くる人々である。私たちは人間力に生くる人々の如何に美しく、如何に強いかを見せられた。そしてキリスト敎の信仰に生くる人々の如何に意氣地なきかを見せられた。人間の力を生かし人間の肉のうちに靈を見出さんとするメレジュコフスキイの惡魔主義的人間主義の力強い主張を見出すことができた。けれどもかれは最後まで生一本に人間主義を主張することができたであらうか。かれが力強い人間神の生活を主張する裏にはやさしい人間愛の主張が頭を擡げてゐたではないか。私たちはこの人間力の解放者、タイタンの味方たるかれの心のうちにやさしい信從者の心が起つて來ようとしてゐることを興味を以て見なければならぬ。

七、嬰兒の如くあれ

私たちは尙一度モンナ・リザの言葉をかりて來なければならぬ。ダ・ギンチが好奇心のみをもつて空洞のなかにはい

つて行つたと語つた時女は訪ねた。

「もし好奇心だけで充分でなかつたとしたら……もつと他のものが、もつと深い感情が必要であるとしたら？」

深い空洞の祕密を探るためには好奇心だけでは充分ではない。人間の知識だけでは充分でない。もつと他の心の要素がなければならぬ。

空洞のなかに歩いてゐたダ・ギンチの胸に湧いた恐怖と好奇心の二つを何故にダ・ギンチはさながらに生かして行かなかつたか。何故にかれはその二つの心を同時に味はゝなかつたか。ダ・ギンチは恐怖心を殺して好奇心のみを生かした。メレジュコフスキイはこの二つの心を生かして行くことを思念してゐるのではないか。ダ・ギンチの知識の人とメレジュコフスキイの人間神との間にはこれだけの差がある。

肉と靈、宗教と科學、神と人、善と惡、これ等の二つのものを差別なき一つの世界に見出すところにかれの理想の境がある。神人と人間神の合一、そこに第三の帝國が生まれる。さりながらこの思想はかれ一人の考へ方ではない。文藝復興期の人々も、近くはウォルター・ペーターもイブセンもこの世界をもとめた。但し、然らば如何にして第三の帝國を見出すことができるかといふことになると、その辿り行くべき徑路にはそれ〴〵の差別がある。メレジュコフスキイが歩き行く徑路は如何。

メレジュロフスキイの徑路は一言にして言へば「自然に歸れ」といふのである。「嬰兒の如くあれ」といふのである。現在の社會に對してはかれはまだどこまでも知識の世界、人間力の開發を要求してゐる。かれは現在の宗教に對してはどこまでも不信を抱いてゐる。かれは科學の味方であつて、宗教の味方ではない。しかしかれが宗教の味方でないといふ理由はたゞかれが求めてゐる宗教が未だ發見せられなかつたからである。背教者ジュリアンを基督以上の基督者としたかれはジュリアンを通して、ダ・ギンチを通して眞實の宗教、眞實の教會を見出さうとしたのであつた。それは

肉の上に築かれ、人間力の上に築かれた宗教であつた。

かれはダ・ギンチで止ることはできぬ。否、ダ・ギンチすらその晩年には知ることのできぬ世界があることを認めなければならなかつた。「知識は人間に、神祕は神に」委ねなければならぬことを知つたのはダ・ギンチではなかつたか。

近代を通じて見出された科學力、人間力に對する自信と努力は世紀末に至りて恐ろしい弛緩と倦怠とを覺えた。メレジュコフスキイ自身また晩年のダ・ギンチとなり、ファウストとなつた。ダ・ギンチの神祕はモンナ・リザの脣のほゝ笑みの上に仄かな暗示をのこして永遠の謎を語つてゐる。肉の上に建てられ、人間力の上に建てられんとしたるメレジュコフスキイの第三帝國はかれの「來るべきキリスト」、「來るべき教會」といふ言葉のうちに普通のギリシャ主義、享樂主義といふやうなものとは餘程異つた內容や要求を持つてゐることを暗示してゐる。

八、「白き死」と「赤き死」

かれが言ふ教會とは何であるか、かれの「自然に歸れ」は一面「教會に歸れ」と見ることができる。かれの言ふ教會は自然そのものである。

かれは「ピーターとアレキシス」のなかに「赤き死」と「白き死」といふ事を書いてゐる。少年ティションは眞實の教會を見出さんがためにオーソドックスの教會に入つた。けれども、それはかれにとりて眞の生活を與ふべき教會ではなかつた。更に少年は森に分け入つてそこに現世をのがれんとする極端な迷信を持てる教會を見出した。そこでは幾十人の人々が一とかたまりになつて大きな會堂のなかに燒き殺されてゐた。かれ等は肉體を燒き亡ぼすことによりて靈に生き、眞の天國に昇ることを得ると信じてゐるのであつた。けれどもそれは少年にとりて生命の「赤き死」に過ぎなかつた。またかれは地下の暗い室に世をかくれて建てられてある快樂の教會に入つた。少年は女王の素肌を接吻

しなければならなかつた。一度大盾間の燈明が消さるればそこには夜を徹して多くの裸體の男女の抱擁と接吻とが行はれた。かれ等はすべての習慣を憎むだ。かれ等は性交を解放して、縱まに自由な肉的快樂をたのしむだ。かれ等はかくの如き放縱な生活から生まれて來た嬰兒を屠つてその血をキリストの救ひの血とした。しかし少年はこゝにも眞の教會を見出すことは出來なかつた。少年はそこに殘忍な「白き死」を見出すばかりであつた。

少年は更に森深く分け入つた。かれは深い森の湖畔に世を隱れた二人の教父に逢つた。教父ヒラリオンは極端な禁慾主義者であつた。かれは何時も斷食を守つてゐた。或ひは數週間一片の麵麭すら取らないこともあつた。かれは松の皮と麥粉とを混ぜたものを糧としてゐた。かれは蟾蜍の湧いた溜り水を飮んだ。冬になれば膝まで雪のなかにはいつて祈つた。夏になれば沼に入つて自己の裸體を蚊に喰はせた。かれは決して體を洗はない。かれは痒いところがあつても決して搔かない。極端な無抵抗主義者である。反官能主義者である。

ヒラリオンに對して尙一人の教父サァヂアスは極めて自然のまゝな宗教を持つてゐた。かれは極端な不合理な禁慾主義は滿腹主義よりも一層多くの害を伴ふことを信じてゐた。かれは與へられたものを食つた。かれは快樂をも拒まなかつた。「神によりて作られたるもの、與へられたるものはすべて貴い」ことを信じてゐた。かれは救濟は外的生活に據らずして、內的にあることを信じてゐた。

「汝自身の心のうちに汝の理性を抑へて、できるだけ呼吸を控へよ。最初は心のうちに深い暗がある、困難がある。神と汝との間に障壁がある。しかし恐れてはならぬ。絕えず祈れ、さすれば終には障壁は取りのぞかれて汝の心のなかに光りが射して來る。言葉が止つて、汝の祈りはやがて心靈と靜かな悲しみの吐息となり、跪拜となり、あこがれとなる。全き平和が生まれ、大歡喜が生まれる。……そこに人間と神とが冥合して一つとなる。」

サァヂアスのこの信仰は後にメレジュコフスキイが進まんとした教會への道とほゞ相似たものである。二つの世界が

一つに融合するのはメレジュコフスキイに於いては何時も沈默の境に於いてゞある。少年は二老人の庵を出て再び森をさ迷ふた。かれはまた一人の老翁に逢つた。かれはその老翁によつて來るべきキリスト、來るべき眞實の教會を暗示せられた。かれは天上の雲が分れて靈しき光りがかれの心の底を照らすのを感じた。かれはその刹那から啞となつた。メレヂュコフスキイの宗教は沈默に終つてゐる。

九、トルストイとドストイエフスキイと

人間は嘗て一つの絕對そのものゝなかに抱かれてあつた、豫言者はジュリアンに言ふ。

「すべて吾等が持てるものは嘗て眼に見える光りのうちに神の懷に抱かれてあつた。」

しかし吾々の個體は考へた。

「俺は神に似てゐる。俺は神から離れて、俺自身のうちにすべてを所有しなければならぬ。」

こゝにタイタンの反抗が生まれ、ジュリアンの謀叛が起つた。けれども如何にして神を離れた個體が、個體そのもののみで眞實に生きることができやう。

「生と死の永遠の梯子によりてすべての心靈、すべての存在物は」神の家へ或ひは上りつゝ或ひは下りつゝある。かれ等は大地に安住の地を見出すことはできない。かれ等は絕えず絕對實在にあこがれてゐる。かれ等は絕えず父の家へ歸らんとする放蕩兒である。

メレジュコフスキイは「人及び藝術家としてのトルストイ」論のうちにトルストイを天上から落された天使の一人であるやうに言つてゐる。天使はたえず天を仰いで天上にかへらんことを願つてゐる。しかしこれはトルストイ一人ではない、すべての人類が天の聖座から蹴落されたエンゼルである。かれ等は天の故郷を忘れることはできない。

メレジユコフスキイのなかに現はれてゐる人々も皆な天界に歸らんことを待ち望むでゐる地上の天使である。トルストイは肉を捨つることによりて、財寶を捨つることによりて、天界に昇ることを得ると考へた。けれどもかれほど強い肉と財寶に對する執着を持つたものが他にあるか。かれが財寶を捨つべきことを主張すればするほどかれの著書は多くの財寶をかれの家に集めた。かれは肉食を禁じた。けれどもかれほど贅澤な菜食主義を實行したものがあるか。かれは二千ルーブル(?)の年俸を支拂はれた料理人の手になる野菜を喰つた。かれは農民を愛すべきことを主張した。けれどもかれは或る時には溝を飛び越えて見すぼらしい農民から遁れたではないか。

トルストイのかくの如き矛盾は畢竟するにかれの出發點が誤つてゐたからである。かれは何故に肉の生活をしかく呪ふたのであつたか。かれは肉と靈と二つのものを一として生かすことを忘れてゐた。こゝに恐怖を捨てゝ好奇心にのみ生きようとしたダ・ギンチと同一の蹉きがある。

「近代ロシヤ文學に二つの大なる柱がある。」メレジユコフスキイは言ふ。トルストイとドストイエフスキイである。トルストイを靈の世界に生きる作家とするならば、ドストイエフスキイは肉の世界に生きたる作家である。しかもドストイエフスキイほどキリストの愛を持ち、隣人を憐むだ作家はなかつた。トルストイは萬民の救濟を叫んだけれども少かのポケットの金を持つて一日町を歩いてもすべてを與ふることはかれには困難であつた。かれは貧者の幸福を唱へてしかも富むでゐた。ドストイエフスキイは金をもとめて一生貧しく死んだ。かれの見た世界は天上ではたかつた。かれは肉につき、地につける作家であつた。けれどもかれは貧しき嚢中の金を人に與ふるに何の苦痛も覺えなかつた。こゝにまた肉に生きんとする生活者のなかに見出さるゝ尊い宗教……メレジユコフスキイの……がある。

メレジユコフスキイはこの二つの大なる柱こそロシヤの未來の大なる教會を打ち建つべき大黑柱であると考へた。かれは決してトルストイの靈に生きんとする宗教を呪ふものではない。かれはトルストイの宗教を認める。けれど

も更にドストイエフスキイの肉に生きる生活のなかにより人間的なより博大な心の宗教が潜むでゐることを信ずるものである。こゝに人間力解放者としての作者の心持ちが明かにされてゐる。

私たちは天に詣らんとするトルストイの理想を持たなければならぬ。けれども同時に貧しき隣人のために自分をささげることを忘れてはならぬ。私たちはトルストイと共に死後を考へなければならぬ。けれどもドストイエフスキイと共に現在の貧しき人々にパンと涙とを分ちあたへなければならぬ。

一〇、ニイチエからキリストへ

かれはトルストイとドストイエフスキイとを來るべき教會の二つの柱といふ。しかしてその奧殿に祭るべき神は何物をも持たず、何物にも執せぬ自然さながらの嬰兒の心である。

かれにはロマン・ローランのやうな最後まで戰ひつゞけて行くといふ強い戰鬪的なところはない。かれにはどこまでも世紀末的な一種の見切り、諦めといふやうな回避的なところがある。かれはトルストイとドストイエフスキイの靈と肉との二つの柱を前廊に樹てた。けれども畢竟かれはその奧殿に靜かなる安住の地を見出さうとしてゐるのである。かれはモンテーンほどの懷疑者にもなれぬ。またモンテーンほどの否定者にもなれぬ。けれどもかれとモンテーンには共通なところがある。それは思想上のデイレッタントといふ點に於いてゞある。モンテーンは久しい間錢の勘定も知らず、麵麭が何から作らるゝかも知らず、自分自身の名をすら忘れんことを欲した。かれはどこまでも簡易生活を欲した。かれは讀書から生まるゝ知識をも捨てようとつとめた。この點に於いて殊にメレジュコフスキイ自身相似たる點がある。メレジュコフスキイ自身が餘りに讀書し過ぎた。かれは自分の生活が讀書に支配せられたことを悲しむでゐる。人間は讀書以上のものであり、知識以上のものである。

「最も賢き方法は自然に對するあらゆる單純性を以て自己を支配することにある。まことに選まれたる者の快き貴き柔かき枕は心の無智と單純さとにある。」

「モンテーン論」のなかにかれが引用してゐるこの言葉はまたかれ自身の行かんとする安住の地を指さしたものではあるまいか。

單純、無智、無我、自然、沈默の後に來る靜かな愛の世界、そこにかれの未來の敎會がある。

「謙遜、柔和——かれ等は臆病なるが故にかれ等の敵を免す。奴隷！　奴隷！」

「憐むこと勿れ？　愛すること勿れ！　免す勿れ！　起て、そしてすべてのものに勝て！　汝の肉體をしてかの半神半人の像が刻まれる大理石の如く堅からしめよ！　奪へ！　與ふる勿れ！　禁制の木の實を喰へ、悔ゆる勿れ！　汝はタイタンたるべし——神に反抗せし天使たるべし。」

ジュリアンに語つたマキシムスのこの言葉はニイチエの超人主義に心醉してゐた作者自身の人間力解放者としての最初の聲であり、要求であつた。かれは人間の巨人的な力を愛し、自我獨尊をたゝへた。けれどもかれは今や最も柔和なるべきものゝ生活の尊さを知り、弱き者の福音を知るやうになつた。嘗て征服者、光榮者の矜りを感じたかれは今や打ち勝たれたるもの、貧しきものゝ祝福を知るやうになつた。

嘗てダ・ギンチの限りなき惡魔の力を讃美したかれは今やダ・ギンチの隱れたる愛の力を限りなく尊きものと信ずるやうになつた。

ダ・ギンチほど冷酷な人間はなかつた。けれどもかれほどやさしい人間はなかつた。かれは多くの人を殺すべき武器の發明に苦心してゐた。けれどもかれは道に這つてゐる小ひさな蟲を避けて通り、痩せたる牝馬をあはれむだではないか。かれは今日惡魔であり、明日聖徒であつた。「誠に人間は野獸の王なり、かれほど殘忍なるものはなし」と言つた

のもダ・ギンチであつた。しかしかれは肉屋の店頭に立つて悲しげに言つたではないか、「吾々は他の動物の死によりて生活してゐる」と。かれを捨てゝ去つた弟子のために研究室の暗がりに淋しく祈つたものもかれであつた。嘗てダ・ギンチの偉大なる力の方面を見たメレジュコフスキイは今やかれのキリストの如き愛の方面をなつかしむやうになつた。

アレキシスをしてかれは次のやうな言葉をくり返さしてゐる。

「父と自分との間には遠い〳〵溝がある。けれど、もし父がたゞ一つのやさしい聲をかけるならばこのギヤツプは取り去られるであらうに。」

さらにメレジュコフスキイはこの父と子の永年の確執に對してかう說明してゐる。

「父の一語、一瞥、または一つの相圖でかれ（アレキシス）は父の膝下に跪いたであらう。かれは父の膝を抱き歔欷いたであらう。その涙は二人の間の恐ろしい障壁を溶かし、壞つたであらう、恰かも日光が氷を溶かすやうに。……アレキシスが少年であつたころピーターはかれを胸に抱きしめて「アリオシヤ、可愛いゝ子供！」と言つた。もし父にしてあの時のやうにやさしい言葉をかけることあらんか、かれは喜んで父のために死なんことをねがつたであらうに！」

作者はジュリアンやダ・ギンチやピーターの偉大なる人間力をたゝへた。けれどもかれは何故にかれ等がこの愛の一と言を忘れたかを怪しむでゐる。かれ等は人間力、自己の智慧をのみ見ることに急にして愛の力を見ることをしなかつた。かれ等はバベルの塔を築くべく石のみを運んだ。けれどもかれ等はやさしき人情の燭を運ぶことを忘れてしまつた。そこにかれ等の悲劇が生まれた。

メレジュコフスキイは今や無我、沒我、無智の愛の世界にまではいらうとしてゐる。かれは一コペックを與ふる毎に

も慈善の結果を考ふるやうなトルストイでなくて、何の思慮なしにすべての所有を與へんとするドストイエフスキイたらんことを望むでゐる。トルストイはより眞なる、より正しき生活を與ふるために人々にコペックを與へた。ドストイエフスキイはたゞ人々をよろこばせむがためにかれの貧しい財嚢を傾むけた。「貧しき人々」のヒーローは憐れなる女に玩具を買ひ與へんがためにのみ苦しむだ。メレジュコフスキイも亦「貧しき人々」のヒーローたらんとしてゐる。

嘗てニイチエの超人たらんことを欲したかれは今やキリストの嬰兒となつた。嘗て全世界を征服せんとしたジュリアンは今や「狐には穴あり、空の鳥には巣あり、」と悲しむだ貧しき神の子たらんことを冀ふやうになつた。ピーターの理想は東洋と西洋との統一であつた。メレジュコフスキイは力と愛との冥合を理想とした。しかしてかれの思想、殊に愛の解釋は極めて佛教の沒我的な愛に近きものである。

一一、佛陀の慈悲

私たちはかれが「藝術家としてのトルストイ及びドストイエフスキイ」の中に引用してゐる古代印度の傳説の一つを掲げてかれの愛についての暗示を得よう。

昔惡魔が兀鷹の姿に化けて一羽の鳩を追ふた、鳩は佛陀の懷に逃れた。惡魔は佛陀を詰つて次のやうな意味のことを言つた。

「鳩を食ふことができないならば自分は餓死せねばならぬ。あなたは何故鳩のみを愛して私を愛せぬのか。もしあなたが鳩を殺すのが厭であるならば、あなたは自身の肉を鳩と同じだけ切つて渡して下され。」

佛陀は自分の肉を切つた。秤の一方には鳩を載せ一方には自分の肉を載せた。秤は少しも動かなかつた。かれはま

た更に自分の肉體を切つて肉を載せた。秤は鳩の方に下つてゐた。骨は露はれ、血は流れた。佛陀は終にかれ自身を秤に載せた、秤は初めて動いて鳩が載つてゐる方の皿が高く上つた。

「吾々は全自我を與ふることによりて始めて人を救ふことができる。」

最も力強い自我を主張し、自力を主張したところのメレジュコフスキイは今やこの全沒我的愛の境を目がけて進まうとしてゐる。

「マアカス・アウレリウス論」の中にかれはまた佛陀の傳說を引いてゐる。

釋尊は久しい年月の間人間界の愛慾の紲を斷つて苦行してゐた。かれは永遠を想ひ、終に梵天の世界に詣らんとしてゐた。かれが差し伸べてゐた手は瘦せて枯骨のやうになつた。やがて燕が翔んで來てかれの掌に巢食ふた。春になるごとに燕は歸つて來て巢食ふた。或る日燕は飛んで行つたきり歸つて來なかつた。既に人生の愛慾、生別死苦の煩惱から離脫してゐた釋尊は悲しい心をもつて何時までも燕を待つてゐた。

この釋尊が燕の行く衞を案ずる心は智者にとりて大なる弱點である、しかしこの「大なる弱點こそ、その大なる力ではないか。」

かれはダ・ギンチにも、ピーターにもジュリアンにもこの捨てがたき愛の心を生かさむことを要求したのであつた。

かれはゲーテの言葉を借りて始めと終りとを一致せしむることのできるものは全人であると言ふ。

トルストイが七八歲の頃のことである。櫻の花の盛りのころ郊外に出たことがあつた。露に濡れた櫻の花が餘りに美しかつたのでかれは小ひさな顏を花のなかに突つ込むですつかり花の露に濡れてしまつた。トルストイは何故最後まで、その少年の日の嬰兒らしい心を保つことができなかつたのであらう、トルストイ自身しかあらんことを祈つてはゐたが。

メレジュコフスキイはトルストイを一度七八歳頃の嬰兒に立ち歸らさうとしてゐる。ダ・ギンチは知識の世界をのみ見て死んだ。しかも知識の世界の祕密を究め得ないで死んだ。かれは自らを大なるタイタンであると信じつゝ死んだ。けれどもかれが淋しく悶えつゝ異郷に永遠の眠りを眠つた時、かれの胸の上に靜かに燕が宿つてゐたではないか。タイタンは自分では意識しないやさしい愛の心を持つてゐた。メレジュコフスキイの人間神は智慧と力とのみを持つ以上にこの愛の心を生かすことを目當てとして進むでゐる。

本然的に深く〳〵培はれた心奥の愛すらも打ち忘れてひたすらに人間力の勝利をのみ急いだタイタンは、何故自分の胸の底に永遠の神祕の鍵が藏されてあるのを知らなかつたのであらう。

嬰兒は何時も生まれなかつた前の世界を見てゐる、後の世界を見てゐる。愛はすべての知識を光被する力である。嬰兒の心を忘るゝとき人間界の知識が生まれる。人間界の知識が生まれるとき、心の世界の扉が鎖され、愛が眠る。そこにタイタンの偉大さと人間の苦惱とが生まれる。

力と知識にと眼覺めた偉大なるジュリアン、ダ・ギンチ、ピーターは何といふ英雄的な運命の建設者であらう。その生活は何といふ悲壯なタイタンの生活であらう。かれ等は何といふ尊い人間神の權化であらう。けれどかれ等が嬰兒のやうになつて神を拜し、尙一度地に下りて隣人を愛し、鳩を愛し、草木を愛するときかれ等の偉大さは更に大きなものとなるのではないか。

かれ等はバベルの塔を築いた。けれども塔の頂に立つて天を喚ぶべき呪文を忘れた。天に相圖すべき炬火を忘れた。メレジュコフスキイの人間神はこの炬火を準備しなければならぬ。かれの人間神はトルストイの靈を持ち、ダ・ギンチの智慧を持ち、ジュリアンの力を持ち、更にドストイエフスキイの最も人間らしい愛憐の心を持てるものでなければならぬ。

一二、かれも亦悲しき迴避者である

遮莫偉大なるタイタンの運命の悲慘さよ。「汝の力は孤獨のうちにあり」と叫んだのはダ・ヰンチであつた。「眠ることは嬉しい、されど石となることはさらに嬉しい」と言つたのはミケランゼロであつた。

「おう死の影よ、あらゆる苦しみを斷ち、靈と心の敵を滅ぼす死の影よ……汝は吾等の淚を涸かし、吾等の疲勞を救ふ……」

かれはかく死を待ちつゝも不眠の苦痛から遁れるために最後まで鑿を離さなかつた。しかしてかれも亦「我は常に一人なり」と言つた。

バルチック海の夕陽が血のやうに燃えた時――恰度アレキシスの死を想はせるやうな――ピーター大帝はかれの手によりて建設せられた二十隻の新艦隊を率ゐ、荒浪を蹴つて沖へ〳〵と出た。人々は恐ろしい暴風と戰つた。艦橋の上に血の如き落日を見つめてゐた孤獨な大帝の影の寂しさ。

「朕は一人の談合者を持たぬ。朕は一人の助手をも持たぬ。」

超人は常に孤獨であつた。そして何時も人間の肉の世界を犧牲にすることによつて不朽の大悲劇の傑作を築き上げてゐた。

メレジュコフスキイにはその孤獨の寂寞は耐へられないことであつた。かれは孤獨者の苦痛、運命の苦痛を免れんとするアレキシスである。

「我は醉へり、我は多量のウオツカを飮めり。神は知り給へり、そは我は恐怖を忘れんがために、我自身を忘れんがために醉へることを。」

「死の恐怖は我が上に來れり。終りの日は近し、斧は根に置かれたり、死の大鎌は我が頭に置かれたり。」

「キリストは生まれ給はん！　キリストは來り、汝のうちに住み給はん。」

アレキシスのこの言葉はまたメレジュコフスキイ自身の言葉である。かれはピーターたることを得ない。かれはトルストイほどの力強さを持つてゐない。世紀末的な絶望の苦痛はかれをして肉の世界の享樂にその悲しみを忘れさせやうとしたのであつた。

かれは世紀末の苦痛を忘れんがために愛慾の夢にまぎれ、肉の香に眠り、現世的快樂の酒に醉はんとしてゐるのである。かれにとりて酒と教會、肉とキリストとは同一である。かれは頼ることなしには、醉ふことなしには生きて居れない世紀末の正直な心弱い人間である。私たちは酒場に醉ひ倒れ、教會の前に祈り、泣き、さめては酒場をあさつて歩いた詩人を知つてゐる。メレジュコフスキイもまた教會に祈り、肉の生活に醉はんとする世紀末の詩人である――但し私がこゝに言ふ肉の生活または享樂的といふ言葉は神に對する人間の生活又は不自然なオーソドックスの宗教生活に對する人間的生活といふ意味である。一言にしていふならば神に對する人間の力と智慧の生活である。

かれはどこまでも現實の世界に與へらるゝだけの享樂を貪ぼることによりて、超人的な人間の運命の寂しさを忘れやうとしてゐる。死ほどかれにとりて恐ろしいものはない。かれは死の幕が下される前に醉ひつゝ祈りつゝ、醉ふことによりて最も幸福な最も人間的な眞實な日々の生活を見出さうとしてゐる。

あはれなる世紀末の正直なしかし弱い心の善人！

かれはバッカスとキリストの殿堂を一所に築かうとしてゐる。

「力は孤獨から生まれる。」「人は二人の主に仕ふることを得ない。」人は一人の主に仕ふる時最も強い。

かれは二つの主に仕へやうとしてゐる。かれは世紀末の人々の迷ひと、弱き執着心と、悩みとを最も豐かにあらはし

てゐる。
かれは久しい間人間神のために雄々しく戰ふた。けれどもかれは戰ひに疲れた。そしてかれは今や神人の殿堂に隱れ家を索めようとしてゐる。
しかしメレジュコフスキイのこの戰の疲勞はまた自らのうちにすべての力を信じてゐる私たち人類すべてが一度は必ず味はゝなければならぬ戰ひの疲勞を暗示するものではあるまいか。
人生は苦鬪する。けれどもすべてのものは滅びる。しかも人類は死と絶望の面前で醉ひつゝ祈つてゐる。

默せる男

かれは何時も沈默を守つてゐた。かれは殆んど表情といふものを知らなかつた。かれは何時も瞑つた眼をもつて孤獨者の寂しい世界を見つめてゐた。

かれは何時も眼を瞑つてゐた。かれは眠ることはできなかつた。眠るにはかれの心は餘りに多くの苦痛にかきみだされてあつた。

かれは何時も眼を瞑つてゐた。かれは眼を開くことはできなかつた。眼を開くにはかれの心は餘りに多く勞らされてゐた。

夜もすがら眠れないで床上に反轉する苦痛は誰れしも經驗するところである。しかしそれは一夜か二夜の苦痛である。かれは終生を――少くとも十餘年――夜も晝も眠れないで死んだのであつた。

私、千葉の衞戍病院に冷たい屍室に眠つてゐるかれを見出した時「初めてかれは眠れり」と思つた。

かれは何時も目さめてゐた。しかも何時もかれは默してゐた。かれは何も語らないで死んだ。けれどもかれは限りない力を持つてゐた。

語りつゝ、語りつゝ……饒舌な私を恥づる。

饒舌な私は何の力をも持つてゐない。

春が來た。花が散つて雨が降つた。欅の頑丈な梢から可憐な芽が目ざめて來た。いろ〳〵な哀愁が湧く。

沈默の男と渡つた二子の流れを想ふ。沈默の男と眠つた多摩川上流の麥の畑を想ふ。

沈默の男よ。お前は何時も沈默であつた。お前の心はいつも悲しい俤でいつぱいに充たされてあつたのだ。

私は沈默な男の傍に立つて歌をうたふてゐた。私の心は空虛であつたからだ。

沈默の男よ。お前には一つの悲しい歷史があつた。お前はその悲しい一つの歷史を胸に祕めてゐた。お前は過去の夢に生きてゐた。お前は何時も靜かにお前の追憶の窓をのぞいてゐた。お前は跫音を愉むで暗い窓をのぞいてゐた。お前は涙を落す音さへも恐れてゐた。……お前の追憶の窓は涙の音にさへ破壞せらるゝからであつた。

お前は何時もたゞお前の心の世界をのみ見つめてゐた。それは限りなく悲しい過去の夢の世界であつた。お前は外の世界に向つて聲をかける遑はなかつた。

お前は年一年と言葉少なになつて行つた。お前の悲しみは年一年と深くなつて行つたからだ。

お前は終に悲しみに敗けて死んだ。けれどもお前は敗けたのではない。お前自身の悲しみの湖にかへつて行つたのであつた。お前は夢の鄕の藻の花を摘みにかへつて行つたのであつた。

×

言葉にのみ意志の交通を見出してゐる人々や、肉の生活の上にのみ人間の生活の存在を信じてゐる人々にはお前の生活は餘りに寂しく、お前の死は餘りに無意義であつた。

けれどもお前自身にとりては死は來なければならぬ運命である。死こそお前にとりては最も意義ある生き方であつた。

お前はこの十餘年が間ぢいツと專念にたゞ一つの靑い暗い未知の世界の淵を覗いてゐるのだつた。お前は何時の間にか肉につける世界の言葉を忘れようとしてゐたのであつた。

お前は何時も默してゐた。お前は何時も死の世界の靑い花を見てゐた。お前は死の世界に咲く黒い花の香に醉うてゐた。

默したる男！　お前は今永遠の夢のなかにかへつて行つた。お前は永劫の虛無のなかに行つた。お前の聲がはてしもない虛無のなかゝら私を呼んでゐる。私はその聲を聽く、けれども私は何ごとをも理解することはできぬ。

默したる男！　お前は生きてあつた日も默してあつた。そしてお前は限りない力を私の上に持つてゐた。お前は死んだ、そしてお前は虛無のなかに默してゐる。けれどもお前は絶えず私の心に囁いてゐる。

お前は死の世界の、また夢の世界のその靑い光りをたゞ一人で寂しく見つめてゐる。

×

私はかれに送るために手紙を書いた。

「しかし私の文字がどれだけの慰めをかれに與へることができやう？」

私はその手紙を棄てた。

私はまた手紙を書いた。

「しかしこの手紙は少しも私の心を語つてはゐない。」

私はまた手紙を破つた。

私は第三の手紙を書いた。

「しかし、言葉をつらねたところで、お互にやさしい言葉を言ひかはしたところでそれが何であらう。」

私は手紙を裂いた。

「けれども私はかれに應へるだけの義務がある。私は手紙を書かなければならぬ。」

私は第四の手紙を書いた。
「しかし、私は手紙を出すことによりて、新しい人を知ることによりて、また新らしい不安や、絶望を感じなければならぬかも知れない。私は誰れをも知るまい。誰とも語るまい。」
私は手紙を裂いた。
人々は私を傲慢だと呼ぶであらう。冷たいこの心を蔑むであらう。
私は俯向いたまゝ人々の鞭を受けよう。

×

通りすがりに見る往き來の人々ほど懷しいものはない。私たちはその刹那だけ殆んど無意識的に人を見る。そして次の刹那には忘れてしまつてゐる。永劫の時空のたゞ一刹那に二つの靈が溶け合つて、訣れて、そして永遠に忘れられて行く。何といふ美しい人間世界の哀愁であらう。
私たちは旅人の名を訊ねてはならぬ。旅人の故鄕を尋ねてはならぬ。たゞかれの眼、かれの唇、かれの髮が私たちの胸に刻まれてあるがまゝに思ひ出の絲を手繰れば宜い。私たちは二度その同じ旅人を探してはならぬ。刹那的にして永遠に歸り來ぬものゝうちにのみ美しさがあり、懷しさがある。

×

「ありがたう。」といふ言葉を繰り返して言ふことのできた日もあつた。しかしこの頃では「ありがたう」といふ簡單な言葉すら語ることのできない日がある。
私に慰めをあたへてくれた人に對して「ありがたう」とも言はないで、たゞ頭を垂れたまゝでゐる自分を見出した時、私は一層自分を愛したくなる。

感謝の言葉を忘れた時、ほんたうに私たちの心は感謝に充ちてゐる。

×

花やかな劇場の幕間に私は露臺に出た。そこには月の光りが白く流れてゐた。私は不圖かつて數年の間聽き馴れてゐた聲の主を見出した。かの女！

聲の主の傍には可憐な子供が二人立つてゐた。

私は何のかゝはりもない人を見るやうな落ち着いた心で聲の主を見てゐた。

私は平靜な心を持つて椅子にかへつた。

恰度幕が明いたところだつた。

寂　心

寒い一月の夜であつた。
巣鴨橋の停留場に五つくらゐの男の子が夕刊を賣つてゐた。地はかち〳〵と凍つてゐた。霜をふくむだ凄じい風は電燈の光りをも消しはしないかとおもはれるまでに吹き荒れてゐた。
夕刊賣りの幼い舌は辛うじて「夕刊一錢」を繰り返すことができた。かれは大人の帽子を阿彌陀に冠つて、大人の首卷きを膝くらゐまで垂らしてゐた。
「夕刊一錢！」「夕刊一錢！」
かれは通りがゝりの人を見るごとに聲を擧げて叫んだ。かれの脣は夜目にもふるへてゐた。
電車を待つ五十くらゐの婦人がその子供の前に立ち停つた。婦人は溫かさうな襟卷やコートを持つてゐた。婦人は優しさうな聲を出して
「何と可哀さうな子供だらう！」
と言つた。
婦人は幾度かその子供の傍に立ち寄つて「何て可哀さうな子供だらう！」とくりかへした。
子供は「夕刊一錢！」をつゞけた。
婦人は「何といふ可哀さうな……」をつゞけた。
電車が來た。婦人は電車に乘つた。そして何時の間にか子供の夕刊賣りのことを忘れてしまつた。

子供は電車が出てしまつてからまで「夕刊一錢！」をつゞけてゐた。
誰れもが夕刊を買つてくれなかつた。

×

私は犬を見ても、猫を見ても、可愛らしい人間の子供を見ても、愛と同時に憎みの心が湧いて來るのを覺える。
私は犬を愛する。けれど少しでも犬が私から逃れようとする場合には、かれを地に投げつける。犬は四つん匍ひになつて悲しい眼を私に向ける。私は水を飮ませたり、肉をやつたりしてかれの頭を撫でる。私は悲しくて耐らなくなる。
次の日にまた私は犬を虐げる。そしてまた犬に水と肉とをやつて犬を可愛がる。おのづと私の眼が濕はふ。

×

或る日父が一羽の緋鷽を山からつれて來た。
少年の私はかの女の紅い胸毛や柔かな銀鼠のやうな翼を見た。「ほう、ほう」と啼くかの女の悲しいやうな、靜かな聲が、少年の私に遠い山の故鄕を想はせた。
私は學校の歸りには村の水車小屋に近い田圃でいろ〳〵な草の實をとつて來た。或る春先きの日、私が學校から晝餐に息せき切つて歸つて來た時、かの女は籠のなかにいつもの「ほう、ほう」をくりかへしてゐた。
私はあわたゞしく晝餐を食ひながら時折り緋鷽の方を見た。
緋鷽は啼いてゐた。
私が門を出ようとする時、緋鷽の聲がふと止つた。そしてその影が見えなくなつた。私は何氣なく緣端に出て伸び上つて籠のなかをのぞいて見た。

緋鷺は死んでゐた。
緋鷺の柔かい毛の下にはまだ靜かに温かみが流れてゐた。
私は大聲を出して泣いた。
母が裏の方から驚いて飛び出して來た時、私の手には首をがくりと垂れた緋鷺が抱かれてゐた。
柔かい毛の下の血は冷たく凍つてゐた。
もうあれから二十年ちかくも經つた。しかし幾度も〳〵生まれかはつて緋鷺があの故郷の山で啼いてゐるやうにおもはれてならぬ。

×

親鳥は木の實をついばむで巣にかへる。學者は本から探し得た知識を口頭についばむでその弟子たちにつたへる。親鳥は木の實を喰はなかつた。學者は本のなかの生命を自分の血と肉とすることはできなかつた。

×

マアカス・アウレリウスは哲人政治を實行した。かれは哲學者をもつて行政の要路に宛てた。哲學者は悉く朝廷の官吏となつた。かれはかくして理想的哲人政治が實行されたのであるとおもつた。けれどもかれの豫想は全然裏切られた。國民は誰れも哲學者たらん事を希望した。そして商人も乞丐も役者も工匠も哲學者となつた。かれ等は山羊髯を蓄へて政府の役人となつた。かれ等はパンをもとめんがために哲學者となつたのであつた。かれ等は貴婦人のパラソルをさしかけたり、またはかの女の愛犬の運動にお伴するやうな役目を仰せつかるやうになつた。國民はやがて野放しの山羊にも政府の年金が下るだらうと言つて笑つた。
かれは終に哲學者の法律が實現すべからざる理想であることを知つた。かれはその妻にも解せられず、殉教者的孤

獨の寂しみをいだいて紀元一八〇年三月十日陣中に歿した。

かれは聰明な、高潔な、慈悲深い主權者であつた、しかもかれは失敗した。かれの失敗の原因としては、何時も一つの主義または範疇のみに賴つて自己の生活を律して行かうとする人々と同じ過失を認めなければならぬ。かういふ傾向の人々の常として何時も人間を見ることを忘れて概念に生きようとしてゐる。そこから生活の破綻が芽ざして來る。

過去の宗教歷史にも幾度かこのやうな缺點が見出される。かれ等は愛、慈悲の宗教を押しひろめむがために、何時もその宗敵を罵ることや、殺戮することを平氣でやつてのけた。かれ等は十字架を押し樹てゝ異教徒を虐殺した。叡山の僧は法衣をまとひながら、宗敵の血をすゝつた。

單に宗教といはず、あらゆる思想家が一つの主義を標榜する時、かれ等は旣にマアカス・アウレリウスが步いたと同じ道を步いてゐる。

人生はひろい、世界は限りもない。小ひさな人間の手によつて編まれたる理智の網に人生のすべてをつゝむことは不可能である。

×

愛することは易い。けれども愛し貫くことはむづかしい。

×

木の根は何時も暗がりに沈默してゐる、木の葉は何時も明るみへ出て饒舌つてゐる。

人は同時に惡魔であることもできる。神であることもできる。かれが人を殺すときかれは强盜である。かれが嬰兒の顏を見てほゝ笑むだ時、かれはキリストである。私たちは罪人を殺さむがために絕えず神を殺してゐる。

×

人生の出發點に於いて私は人生を非常に嚴肅なものと想つた。けれども私は今では、人生といふものはそんなに嚴肅なものでもないやうな氣がする。たゞ運命のまゝに悶えつゝ悲しみつゝ墓場へ歩いてゐるやうな氣がしてならぬ。

自分の天才を自ら信じてゐる人々がある。私はそれがうらやましい。何の天才をも持たない私にとつては、私の明日がどうなるのか、それが不安でならない。

何うにかなるだらう。何うか爲しなくてはならぬとはおもつてゐる。けれども明日といふものは、私にとつては自分が切り開くものではなくて、やつぱり與へらるゝものとしかおもへない。

友人の言葉を聽いたことがある。「何を書いてもばか〱しいやうな。そして無駄なことをしてゐるやうな氣がしてならぬ」と。

悲しい言葉であると私はその時思つた。それが今私自身の上に事實となつて來た。

メレジュコフスキイの「先驅者」のなかにダ・ギンチは、初めを考へないで、終りのみ考へてゐるといふやうな言葉があつた。かれは「最後の晩餐」に於けるキリストの顏を描かむがために十七八ヶ年を費した。モンナ・リザを描かむがために三年を費した。かれは當時の他の繪畫家たちが數日で仕上げる人物畫に幾年を費してゐる。終りをのみ考へてゐたゝ非難されたダ・ギンチの非難は羨ましいほど尊い。

かれは十年も十八年も一つの繪を書きつゞけた。それでもかれはカンバスを途中で抛げ棄てなかつた。

私は二三枚書いては原稿紙を破つて棄てゝゐる。ダ・ギンチは初めを考へないで終りを考へてゐた。

私には初めもなければ終りもない。ダ・ギンチは苦痛な生活をつゞけた。けれどもかれには終りを考へることのできる大天才の自信があつた。かれには自分をば Man-God や Prime Mover であると信ずるだけの力があつた。

天才！　終りを見通すことのできるお前は苦しい、しかしお前は何ものをも見出すことのできぬ凡人の絶望を知ることができるか。

×

冬の日。

山の手線の數條のレールが血のやうな夕陽のなごりを浴びて、涯しもなく廣い武藏野を貫いてゐた。薄暗い凍てついた平原の中にレールは死のやうに横たはつてゐた。「過去」といふ恐ろしい人間生の勞苦を悠久の底に運び去つたレールはたゞひとりとりのこされて横たはつてゐた。

冷たく取りのこされた廢墟のレール。

夕陽と富士と煙のやうな森とレールと……そしてそこには人間の影もない。ものゝ音もない。

今日から幾億萬年の後、すべての人類が亡びて、人間の勞苦が悉く破壞せられたその折の姿を想像しながら私はレールの傍に立つてゐた。幾億萬年後の冷たい風が靜かに大地の涯から吹いて來た。そして音もなく、冬の黄昏れを歩むで行つた。五分、十分……。

けたゝましい地響の音をたてゝ貨物車が私の眼前をかすめて去つた。そして毒汁のやうな煙がレールをも富士をも森をもかくしてしまつた。

「幻想者！　お前は何時までそんなことを考へてゐるのだ！」

煙が森のなかに消えて行つた時、私の心の底に誰かゞ囁いてゐるやうにおもはれた。

「現實」の冷笑の聲がいつまでもどこまでも私の淋しい心を追うて來た。

放浪者の歌

或る聲が私の心に囁く
「お前はいつまで夢をつゞけてゐるか？」
私の心が應へる
「生きてゐるかぎり、私は夢からさめないであらう。夢は私の生活の糧である。」
その聲が訊ねる
「夢はうれしいか？」
私の心がこたへる
「夢は悲しい、夢は思ひ出すごとに私の胸を刺す。夢は柔かい荊棘である。」
その聲が囁く
「それならば、夢の荊棘を捨てたが宜い。」
私の心が應へる
「既う私の心は疾に眠つてゐたにちがひない、もし荊棘に刺されることがなかつたら。夢の荊棘は悲しい。けれども
その痛さと悲しさとを見守るために生きてゐる。生きては夢みてゐる。」
夢なき日の寂しさ。

悲しみもなく苦しみもなき日の寂しさ。
人はその日を幸福と思ふであらう。
夢みる人には、物思ふことなき日ほど虚なる日はない。
野に出でゝ耕す間、巷に出てペンを走らす間、あわたゞしい生活の間、人を怒り、人を呪ふ間、忘れられた夢の儚さ。
たゞ一人居る懶惰な時、何も爲ないで、何も考へないでゐる時、忘れられてゐた夢の香ひが私の寂しい心をふくよかにつゝむ。
ちくちくと刺す夢の荊棘!
心は古い傷に疼く。

人々はうつゝなに生きて愛しつゝ、笑ひつゝ、老いつゝ滅び行く。
私は夢に生きて、悲しみつゝ、苦しみつゝ滅び行く。
神は愛すべく、笑ふべく世の人を造り給へり。
神は夢みるべく、悲しむべくこの心を造り給へり。

×

五月雨のふり灑く日
傘をすぼめて歩くアスファルトの道
人々はあわたゞしく家に急ぐ
みすぼらしき我が影のいとしさ

家なき放浪者の心！　自由、はてしなき自由、かぎりなく寂しく、かぎりなくうれしき！

×

醜き野良犬
捨てられし犬
毛は拔けて、皮はたゞれた野良犬、雨に濡れて町角によろめいてゐる野良犬
或るものは「狂犬」と叫んで逃げる。或るものは氣味惡げに流し眼に見かへりつゝ過ぎ行く。
たゞれた皮膚は雨に疼くか
どろんとした眼の底に運命をかなしむ影の寂しさ。
泥をはねて疾走する自動車、電車に飛び乘る男、走る男、美しい女、放浪者！
靜かにざわめきのなかを黄昏が迫る。
よろめける犬の皮膚は五月雨に疼くか。濡れたまゝの皮膚を振ふだけの力もない。病犬の吐息は暗と霖雨に押しつまりさう。
人々は家路にいそぐ。
交番の赤い燈が點れる。

×

湖の傍で會ふた旅の新内語り。
背の高い男、たゞそれだけが私の眼にのこつてゐる。
それは星の夜であつた。私はその男の顏を見ることもできなかつた。

私は水の傍の草の上に腰をおろして聽いた。旅の男は積みかさねた柴にもたれながら語つた。
水と星とを見守りながら、或る時は眼を閉ぢながら私は聽いた。
私たちは靜かに別れた。暗のうちに私は「ありがたう」と言つた。旅の男も「ありがたう」と言つた。
私たちはお互の顏をも知らないで訣れた。
たゞ寂しい旅の男の聲と、三味線のリズムだけがいつまでも私の記憶にのこつてゐる。

×

花やかな人々の集りのなかに見出した哲人のみじめな姿。
銀のフォークの動めき、白いエープロンの女のスリッパアの輕げな音。
香高い葉卷のかをり、絹摺れの柔かなものゝ音。
顯榮と矜持と光りと幸福の渦卷のなかにつゝまれたたゞ一人の淋しい姿。
かれは人々と一緒に笑ふことはできぬ。かれは時折り眼を見開いては人々の花やかな語らひを眺めてゐる。かれは花やかな宴樂の後にひそむ人生の苦痛と絶望とを知つてゐる。かれはその終りをのみ豫覺するが故に何時も寂し。かれは現在を樂しむには餘りに賢い。
智慧の木の實を喰はぬ若き男女たちは花やかに舞ふ。
智慧の木の實を喰へるかれは若くして老いてゐる。
哲人よ、汝は呪はれてゐる。現在の歡樂を味ふには汝の眼は未だ見ぬ世界の悠久の悲しみを餘りに多く見てゐる。
哲人よ、汝の智慧を捨てよ。汝の眼を閉ぢよ。汝は自ら賢いと思つてゐるのか。汝ほど臆病なものがどこにあらう。
鳥は考ふることなく空をかけつてゐる。花は枯るゝことなく美しい花を開いてゐる。乙女は顧ることなく唱うてゐ

る。

哲人よ、汝はたゞ考ふるべく、たゞ批判すべく生きてゐる。

哲人よ、汝の批判と思索とを捨てゝ舞へ、唱へ。汝はまたファウストの悲しみを繰りかへしてはならぬ。

×

人々は歡樂の香に醉うてゐる。汝は何故あの紅い人いきれのなかに醉ふことはできぬのか。

哲人よ、汝は靜かに室の外に逃れる。冷たい風が夜の湖を滑つて流れる。

哲人よ、汝は嬰兒のやうになつて泣く。汝は世界の寂寞のなかに棄てられた嬰兒である。大地は汝の悲しい胸を抱く。汝はたゞ一人何時までも泣く。悠久な人生の運命を想ひつゝ。

窓からは明るい光りが洩れて來る。大廣間からは若い美しい人々の歡樂のどよめきがあふれて來る。

哲人よ、汝は冷たい大地の胸に抱かれつゝ泣く。

夜は暗い、歡樂のざわめきが窓から洩れて來る。

×

「訴ふるべき悲しみを持てる人のいかばかり羨ましき。」

山門の禪師は白き鬚を撫でつゝかく思ふた。

濱邊に若き男女の死體が流れ着いた。

「相愛しつゝ死ぬことの如何に美しき。」

山門の老僧はかく思ひつゝ須彌壇の前に立つた。

×

故郷の山の香、水の香、土の香、木立の香、その香のなかに編まれた夢の香！
厩の香、雨に腐る麥藁の香、苺畑の香、蠶豆の花の香、その香のなかにはぐゝまれた若い日の夢の香！

日に照つた野苺の紅い色、雨に濡れた柘榴の實のやうな花の色、その色につゝまれた若い日の夢の色！
國境の山の色、國境の川の色、筑紫の春を埋むる麥畑の色、その色にはぐゝまれた若い日の夢の色！

長崎から筑前に行く商人の唐笛の音、潮先の葦笛の音、そのものゝ音に眠つて見た若い日の夢！
筑後から來るあほだらきやうの木魚の音、豐後から來る琵琶法師の琵琶の音、その物の音にまどろみし若い日の夢！

悪の華

人は善人になる日がある、人は悪人になる日がある。恰かも美しい日と曇つた日があるやうに。
空は曇つてゐるといふ人がある。その人は曇つた日に空を見たからだ。
「かれは悪人だ」と評する人がある。その人はかれが悪人である日にかれを見たからだ。

×

晴天が一箇月つゞいても人間はあたりまへなことのやうに考へてゐる。雨が一日降ると人間は天を呪ふ。
人は十の善よりは一つの悪を記憶し易い。

×

かれは悪人の日に罪を犯した。そして善人の日に罰せられる。

×

野に花を摘む人は野の美しさのみを見る。
神は人間の世界から花を摘みたまふ。
神の眼には人間の美しさのみが見える。

×

極端に人を懐しむ日がある。教壇に立つてゐる間に耐らなく人々が懐しくなつて來る刹那がある。
私の眼は何時の間にか濕はふ。

色々な國から、色々な家から來た若い人々が、この寂しい心の所有主と面して坐つてゐる。そして誰れもが私を辱しめない。

この貧しい心の所有主がひゞだらけの思想を言葉につゞる時人々は靜かに私の言葉のリズムを聽く。

私は貧しい、見すぼらしい旅の樂師である。人々は私のこわれかゝつたマンドリンの音を聽く。

私の心はよろこばしさにわなゝく。私の眼は濕はふ。しかし誰れも氣付かない。

×

光りを浴びる花には暗黒を忍ぶ根がある。

善の花は惡の根から生まれる。

×

人を怒る時私たちは自分のすべてを投げ出してかゝらねばならぬ。人を怒ることは怒らるゝことよりも苦痛でなければならぬ。鷲が鳩を追ふ時、かれは滿身の力をもつてかゝる。それ故に鷲は綱にかゝつて生命を失ふ。

けれども自然は鷲の行爲を冷笑しない。

涙をもつて鞭打たるゝ時私たちはその鞭に感謝する。

冷笑をもつて鞭打たるゝ時私たちは反抗の念を抱く。

×

人間は生(ライフ)を生きんがために生まれて來た。けれども私たちの實際の生活はパンを得んがために却つて生(ライフ)を生きる力を滅殺してゐる。

もし私たちの生くることが、かの動物のやうな本能的な生活にのみ意義あるとするならば或ひは幸福であつたかも

知れぬ。けれども決して尊い生活ではない。

　私たちはもつと〳〵考へて見なければならぬ。私たちの生活はもつと思索することの多い生活でなければならぬ。少くとも私自身にとつてはもつと考へて生きて行きたい。馬車馬的に生活の糧をもとめなければならぬ現在の生活が決して眞實なものであるとはおもはれぬ。

　とは言へ私は思索すること、讀書することにのみに生活があるとはおもはぬ。けれどもモンテーンのやうな讀書することをすら止めたいといふまでになるには、私たちの生活は餘りに讀書の時間が足りない、思索の生活が足りない。

　このやうな苦痛は今日殆んどすべての人々が經驗する苦痛であるとおもふ。人々は自分の生活の糧を見出さんがために日毎、自分の生命のエッセンスの幾分づゝを少かな金錢と交換してゐるのである。これほど悲慘な生活があらうか。

　自然が人間を生むだ時、自然は人間に向つて大きくなれよ、伸びよと言つた。けれども人間は自己の生きんとする力を消耗することによりて少かに生活をつゞけてゐる。昔伊太利の町には雛を養はんがために母鳥のペリカンがかの女自身の胸を裂いてその雛に食はしたといふ傳說がつたへられてあつた。私たちは自分の肉體を養はんがために自分自身の魂を賣つてゐるのではないか。

　月末になつて幾何かの報酬を與へられた刹那。それが私たち自身の藝術的良心を賣つた結果として、また屈從に對する結果として與へられるものであることを考へずには居れない。しかも私はその生活方法から逃げて行くことはできない。私は自分の意氣地なさを呪ひたくなる。

×

　乞丐は私の扉に立つて乞ふ。かれは私の辱しめを甘受しつゝ私から少かな施物を受取る。私たちの心をして與ふる

といふ傲慢な感じを取り去らせなければならぬ。

今私の扉の前に立つたかれと、私自身の生活にどれほどの差があらう。乞丐は何故人の家の前から去らないのであらう。

×

極端な簡易生活を欲する時がある。極端な貴族生活を欲する時がある。極端な簡易生活と極端な貴族生活とは往々一致點を見出すことができる。

私は自動車を呪ふ。けれども自動車に乘つて見たいと思ふことは幾度もある。それは多くの場合時間の經濟や徒歩の勞力を省くといふことよりは、成るたけ見知らぬ人と一緒に坐り合せて電車に乘りたくはないといふ心からである。私は森を歩く時一人である。街を歩くときまたゞ一人であらんがために自動車の人を羨むことがある。

×

私は土地と相當の收穫とを欲する時がある。それは日々のパンのためにする群集生活の苦痛から遁れたいからである。

私はあらゆる人々の群集生活から離れたい。或る時は行脚僧となつて一人にならうともおもふ。そしてこの簡易生活の希望は變じて貴族的な土地所有者の生活を欲する心となることもある。

溫かい巢を拵へるか、でなければ限りもない空を渡り鳥となつて翔んで見たい。

×

私は石に腰掛けてゐた。若い外國人が私の前に立つた。そして私の傍にゐた男に話しかけた。私は外國人の通譯をしてやつた。外國人はシャツもカラアも持たぬ乞丐であつた。かれは三日間何にも喰べないと言つた。私の傍にゐた

男は何うしても金を與へなかつた。私はポケットから白銅を出してやつた。

若い外國人は出し抜けに私の手を握つて私の手にキッスした。私は驚いて力強く手を引つ込めて逃げるやうにして立つた。

若い外國の乞丐は私の方を見てゐた。私は何だか惡いことをしたやうな氣がしてならなかつた。

私はツルゲネーフが乞丐の手を握つて「友よ！」と言つた言葉を想ひ出した。

×

F先生が亡くなられた。しかもそれは非常に急な死に方であつた。土曜の日までレクチュアーをやつて翌の日曜の夜に亡くなられた。先生が三十五年が間一日も休講をされたことがなかつたといふのでそのお祝ひをされてからもう幾年か經つた。そのお祝の後も二度と休まれたことがなかつたことを考へるとF先生は四十年ばかりが間一日も休講なしといふ勤勉家であつた。しかも亡くなられる前の土曜日まで學校に出て日曜の夜死なれたのであるから、先生こそ眞個の人生の皆勤者であつた。

F先生はかうして亡くなられた。

私はF先生について今いろ〳〵なことを考へてゐる。

F先生は四十年一日の如く獨逸語を敎へて居られた。先生は大酒を嗜んで居られた。先生は瘦せこけた小ひさな馬の尻を鞭打つて一人乘の馬車で學校に來られたこともあつた。先生は湯に入つてもタバコを手から放されたことはなかつたさうである。

嘗て一度でも先生の口から死といふやうな問題について聽いたことのない私は、先生が亡くなられたことを聞いた時、死ぬべき人ではない人が死んだやうな氣がしてならなかつた。

あの背の高い、頑丈な先生は嘗て死といふことについて考へたことがあつたゞらうか。

あの獨逸の軍人のやうな強い顏と、罪のない笑ひ顏の所有主であつたF先生が死んだといふことは悲哀を誘ふ前にいたづら好きな自然の擽りを感じさせずには居ない。

校庭の櫻につながれてあつた古い馬車、世間を馬鹿にしたやうなカイゼル髭、そしてあの銅と鐵の合金をたゝいたやうな講座の上の聲……F先生はそれだけの印象を私にのこして亡くなられた。

F先生は何時も酒に醉ふたやうな顏をして居られた。先生はあの酒を飲んだ心で世間といふことをも死といふことをも忘れてゐられた。それでも死ぬ少か前、體の具合が惡いと言つて少しばかり苦しい顏をして居られた。

世間といふこと、死といふことを冷眼視して居られたやうなF先生も死ぬ數日前に苦痛といふことを知らねばならなかつた。

死は醒めたるものにも來る。

死は醉へるものにも來る。

先生は死をどのやうに見て死なれたのであらう。

先生はどこかで死を笑つて居られるやうな氣がする。それだけ先生の死はいたましい。

笑ひながら死ぬ人の死ほどいたましいものはない。人類は皆な寂しく笑ひながら死ぬ。

夢の香

夜明のそよ風が私の扉をたゝく
私はうと〳〵とまどろむでゐる
夜明のそよ風が私の扉をたゝく
私は見はてぬ夢のあとをたどつてゐる
夜明のそよ風が私の扉をたゝく
私は靜かに扉をあけた
そこには靜かな春の朝がまだ眠つてゐた
神は音もなく永遠に去り給へり

×

人に足を踏まれた時、誰れが踏むだのかも知らずに過すことができた時は非常にうれしい。顏をもたげず、また傍も見ないで、眼をつむるか、または下を向いたまゝで自分の足指の痛みをぢつとこらへてゐる時、私たちは誰れをも愛することのできるやうな氣がする。づきんづきんと疼く痛みの涙は、同時に寬大な自分の心を、何ものかにほめられてゐるやうな感謝の涙である。

×

私はいつまでも夢の靑草に生きてゐたい。

すべて美しきものは夢に生き、醜きものは現實に生きる。
夢を食ふ野に春が生まれ、果實を食ふ野に多が生まれる。
乙女は夢に生きるが故に美しく、中年の女は夢から醒めんとするが故に寂しく、老年の女は夢を失へるが故に醜し。
すべて刹那的なるものは美し。若くして死するものは美し。一日にして散る花は十日にして散る花よりも美しく、刹那的に碎くる朝露はさらに花よりも美し。
あらゆる藝術のうち音樂は最も美し。音樂は最も刹那的に滅びゆくが故に。
詩の美しきも、彫刻の美しきもその夢であるが故である。詩の美しきは聯ねられたる文字の美しきがためではない。文字の上に微搖せる詩人の心絃のせつなき情調が刹那的に滅び行くが故である。彫刻の美しきは大理石の白きが故ではない。天才の鑿の跟に生命の陽炎が刹那的に顫動せるが故である。
夢は靈の生活であつて、肉の生活ではない。
夢には靈肉の差別はない。夢の世界に入るときすべての肉は靈そのものとなる。
乙女の美しさを肉體に見出す人はまだ眞實に乙女を知れるものではない。かの女の瞳の澄めるを見よ、その底にははてしもなき夢の潮の深さが堪へられてゐる。
その唇を見よ、落日の如く輝ける唇の微動には夢の郷のかぎりもなきさゝやきがある。
その髮を見よ、ナルダの香油を灑がれたやうな若き髮の香を。そこには永遠に解くことのできぬ夢の國の甘い快い謎がもつれてゐる。
かの女の柔かい胸にふるへてゐる靈の香ひの白さよ。
されど夢を見る人は少ない。夢を知る人は更に少ない。

乙女はかの女自身の夢をすら見ないでゐる。
たゞ詩人のみが乙女の美しい靈の白い夢の香を見出すことができる。

鳥の暗い翅の美しさよ。
たゞ一色の暗のやうに見える磯鳥の翅!
そこには美しい色彩はない、けれども生まれたまゝの太陽が遠い太洋の涯からかの女の翅を照らすときかぎりもなく美しい色彩が流れ初める。
たゞ一色の暗のやうに見える磯鳥の翅!
そこには美しい瑠璃色はない、けれども夕暮の柔かい狭霧(さぎり)がかの女の翅をつゝむとき濃き淋しき夢の瑠璃色が一面にゆらぎ初める。
枯れ枝に宿つた鳥!
人間の世界の涯もなき寂しさの骨と骨との象徴!
呪はれたその聲の悲しさ、
たとへば低調子の旅の唱歌手を想はせるやうな。
暗い翅と暗い唄!　夢の國の魔法つかひ。
旅人はお前の唄に吉凶を占ひ、病める人はお前の唄に死の影をおもひ泛かべる。
お前は眼に見えぬ國の唱歌手である。
お前は夢の國の哲學者である。

お前は世界の中で一番單調な色と聲と形とを持つてゐる。お前はすべての複雜さを單調の底にかくしてゐる。お前は神祕の深い影を持つてゐる。お前は夢の國の鳥だ。

∷

鳥が眠つてゐる。
鳥が夢を見てゐる。
鳥よ、お前と私の夢とをとりかへて見よう。
それでもお前は私の夢のなかのいたいけな乙女の胸をつゝいてはならぬ。

×

この世界中がたゞ一色の暗につゝまれたら、
そして永久に人間の眼がとざゝれたら！
その時こそ始めて人間の靈と人間の靈とが往き通ふ。
人間の靈は梟の眼をもつてゐる。
太陽の光りが射すときかの女の眼はねむる。
私たちの眼は太陽を見るとき、いよ〱底深くかくれて行く。
光りがかくれるときかの女の眼がひらく。

×

眞理は乙女の如し。
眞理はいつも仄かなものゝ音の底にかくれてゐる。

眞理は正午の光りのなかにはない。眞理は暗の底にかくれてゐる。人間は眞夜中の眞理をつかむことはできない、人間には暗の底を見る力があたへられてないから。

眞理は黄昏の薄暗のなかに少かにその姿をあらはす。

けれどもかの女は非常にはにかみやである。一寸でも人間の跫音を聽けばかの女は暗の底にかくれてしまふ。

眞理をもとむるものは薄暗のなかに靜かに佇むでゐなければならぬ。

そして眞理の姿があらはれても手を差しのばしてはならぬ。唇を動かしてはならぬ。

眞理は人の聲を聽けばまつしぐらに暗の底にかくれる。

靜かなたそがれの祈り、そこに眞理があらはれる。

祈りはたゞ祈りでなければならぬ。祈りはもとむるこゝろであつてはならぬ。祈りはよろこびであり、感謝である。

春の風が青い麥の芽生を吹いて來るとき祈りがうまれる。祈りはもとむるこゝろではない。春のあたゝかな快い風とともに涯もなくあこがれ行く純一な心の翅のかけりである。

祈りは無限のよろこびとあこがれの流れゆく力である。

春のやはらかな微風が嫩葉を滑るときいろ／＼な祈りの聲がきこえる。

微風は何ものをももとめない。たゞ微風のよろこびと感謝とが、かれが歩み行く野と丘の嫩葉の上に祈りの聲をのこし、流れの岸に祈りのさゝやきを立てる。

眞理はもとむることなき祈りのさゝやきのなかにある。

眞理は敎會の聲高い祈りのうちにはない。眞理は靜かなアンゼラスの鐘の餘韻のなかに潜むでゐる。

×

春の夜であつた。
淋しい町端れのカフエの二階に私は靜かな春の夜のものうさを見つめてゐた。
薄汚ない卓子の上の木瓜の花！
その色は紅かつた、恰度富士の裾野の廐舍でTと見た木瓜のやうに。
Tは自殺した。
獨り動かすナイフの音の淋しさ。

三人の女

電車のなかに三人の女が並んで腰を卸した。一人の女は眼をつむつて、別れるまで默つてゐた。二人の女は慈善會や、貧民救濟會のことについてのべつに語つてゐた。女の寶石入りの指環が目立つて見えた。

三人の女は小川町の停留場で下りて行つた。

最後まで眼をつむつてゐた女は一等美しかつた。

犬

空には無數の凍つたやうな星がまたゝいてゐる。地にはさく〳〵と踏むごとに霜柱の聲が立つ。

私は物置きの小舍にはいつて行つた。眞つ暗な室の隅にかすかな犬の吐息が聞える。犬は二三日來病むでゐる。私は靜かに犬の方に步いて行つた。戶の外では深夜の森を寒い風が吹き荒れてゐる。

犬は私が近寄るのを知つて、がさ〳〵と藁の音を立てゝ私の足もとへ步いて來た。かれは切なさうに苦しい吐息をつゞけてゐる。

私の眼が暗に馴れるにつれて、私は窓から洩れて來る星空の光りにおぼろげに犬の姿を見とめることができた。犬は苦痛をこらへて尾をふつてゐる。かれは悲しいやうな聲を出して泣いた。かれは苦痛を私に訴へてゐる。私はぢつとかれの首をさすつてやつた。犬は柔順にその首を私の膝にもたせかけた。犬の仄かな呻き聲がいたましい心を喚び起す。

私の犬はもう二三日食事をしない。肉を持つて行つて口許に押しつけるとかれは傍を向いてしまふ。かれの眼が暗の底に靑い貝殼のやうに光る。その度に死の近づいたことを豫想させるやうで何となく淋しくも、無氣味にもなる。

この犬と同じ母犬から生まれた一年前の仔犬も昨年の冬の夜死んだのであつた。あれはこの犬よりは小ひさかつたが、耳朶はずつと垂れてゐた。あれは私の膝に抱かれたまゝ二三度悲しい絕望の聲をしぼつて死んだ。ほんたうに、この世の靈と肉體とが分れるときのあれが絕望の叫びであらう。私はあの聲を今にも忘れることはできない。

私は今夜にもこの犬がまたあのやうな聲を出すのではないかと思ふと、何となく悲しいやうな氣もする。

去年亡くなつた犬は區役所から持つて來た殺鼠劑を他家で食つて來て、それがために死んだのであつた。この犬も一月ばかり前私の留守に、交番から人が來て、緣の下に散布した殺鼠劑を食つたことがあつた。その時は早く氣がついて助けることができた。

「もう犬を飼ふことは止さう！」

私たちは犬が人に奪られたり、犬殺しにつれて行かれたり、病氣をするごとに、かうおもつた。

私は今夜も犬の首をさすりながら幾度もかうおもつた。

「けれどもこの犬は死なしてはならぬ。」

私は再びかう思つた。この犬は私の亡くなつた一人の友が、自殺をする數日前、私の家に來てこれの頭を撫でゝゐたことがあつた。そして私たちと一緒にその夜最後の散歩に森のなかを隨いて來たのであつた。

私はかれが自殺してからこつち、幾度も幾度もこの犬を伴れてあの森をさ迷ふた。そしてその度に三つの影が二つになつた寂しさを感じないことはなかつた。

それでも私はこの犬と一緒に散歩してゐる間は、あの友がまだそこいらの木立のなかゝらひよつくら歸つて來るやうな氣がしてならなかつた。

「お前は死んではならぬ！」

私はかう想ひながら犬の胸のあたりをさすつてゐた。夜は更けた。風は凄じい音を立てゝ高鳴りしつゝ何處へか夜の空をかけつて行く。

犬は切なさうな呼吸をくりかへしてゐる。かれは死ぬといふことがどんなことであるかさへ知つてはゐないやうである。かれはたゞ現在の苦痛だけを知つてゐる。それだけ私は犬の生活がいぢらしい。

かれは何か話しかけてゐる。たしかに話しかけてゐる。けれども何うしてそれが私にわからう。
私はかれの頭を輕くたゝいた。
「お前は死んではならぬ！」
「俺たちの友は自殺した。けれども俺たちはまだ生きてゐなければならぬ。お前は死んではならぬ。」
「おやすみ！」
私はかう言つて病犬の周圍に炭俵を屏風代りに立てゝやつた。私は戸をたてゝ室にかへつた。そして間もなく床についた。
亡くなつた友と私と犬の三つの影が野をさ迷ふてゐる。
やがてその影が二つになつた。
やがて影が一つになつた、
私は暗がりに眼を明けた。
戸外では冬の夜の風が荒んでゐる。
物置き小舍から時折り犬の呻き聲が聞える。

秋が來た

秋といふ言葉ほど色々な深い聯想を喚び起させるものはない。殊に親しい友を失つたり、孤獨といふことを愛する貧しい者の生活にとりては秋ほど懷しいものはない。庭には黃蜀葵が咲き、絲瓜の花が牽牛花とからみ合ひ、花魁草は一日々々と寂びて行く。夏の鬪ひに疲れ果てた草木は靜かに秋の日を待つてゐる。そして絕えず空から吹きおろして來る初秋の風にゆすぶられながら、秋の懷に抱かれるよろこびに小踊りしてゐるやうに想はれる。疲れたる自然！秋の家鄉に歸り行く自然！

　私はこのやうなことを想ひながらこの數日が間與へられてゐる朝の數時間を心ゆくばかり靜かな思ひにひたされてゐる。そして私自身の心に向つてもまた「汝疲れたる靈！」と叫ぶ。あわたゞしく朝の食事を終つて電車から仕事場へと一日々々を驅使せられてゐる私の生活にとりて、年に一度數日間かうして落ち着いた氣で疲れた自然を見まもることのできるといふことは淚がにじみ出るほど嬉しいことである。

　私は年々に人々と接近することの苦痛を強く感ずるやうになつて來た。嘗ては色々な人の集まりにも行つたことがあつた。けれども私は多くの場合裏切られた悲哀や、見すぼらしい自分の姿をさながらに暴け出した羞恥を抱いて歸つて來なければならなかつた。醜い女にとつて鏡はどんなに悲しい器であらう。けれどもかの女は鏡を捨てることはできない。貧しい自分にとつて人々の群は悲しい鏡であつた。けれども私は容易に人々の群から離れることはできなかつた。私は森を愛する。けれども私は森をさ迷ふ日よりは、銀座のはなやかな街や劇場の人いきれのなかに醜い自分を見出すことがどんなに多かつたであらう、貧しい人々が富める人々の宴會をながめてゐるやうに。私は臆病な眼

をみはつて花やかな都會の生活を見まもつてゐた。アカシヤや銀杏樹の並樹の蔭のペーヴメントを歩きながら私はデリカシイを持つた若い人々の姿や歩き振りを見た。かれ等の血管に流れてゐる都會人の血統といふことを想つた。同時に自分自身がリファインされぬ野の人の血を分ち持つてゐるといふ意識が悲しいまでに強くされた。ミレエの繪にある骨太な、日に焦けた野の人や畑の男たちの俤が懐しく、私は寂しい心を抱いて森にかへつて行く、森に歸つて行く自分の心は決して樂しいものではない。それは敗れたる者、追はれたる者の寂しい心である。暗い北國の人々にとりて南の明るい光りはなつかしいものであらう。けれども暗に馴らされた眼は何時までか光耀の眩惑に耐へ得ようぞ。暗きに生まれたるかれは暗きに生くべき運命に生みつけられてある。野の人は野の人として生くべく運命づけられてある。籠の鳥が野を戀ふところの本能を忘れないやうに自分の心は森の孤獨を愛することを忘れない。自分の血管の血は寂しい森を愛すべく生みつけられてゐる。

森のなかには憎惡もない、愛慾もない。すべてのものは自然が與ふる恩惠に生き、凋落する。かれ等は自然のまゝに生き、自然のまに死ぬる。そこには歡樂はないかも知れぬ。けれども死別を悲しむ慟哭はない。自殺はない。裏切られ、僞られたる寂しみはない。森は永遠に默してゐる。かれは私を拒みもしない。けれどもかれは私とともに泣きもしない。自然は萬有が孤獨であること、そして萬有は默しつゝ運命のまゝに生き、死にしなければならぬことを語つてゐる。悠久の寂寞！　それをのぞいて何があらう？

私は今靜かに秋に入つて行く草木を眺めてゐる。私の心奥とあらゆる事象の心奥とを通じて永久に流れて行く寂寞なる影の音を聽く。生まれなかつた前の世界、未だ知らぬ世界の住み家から何かの物の響がつたへられて來るやうにおもふ。自分の靈が見知らぬ世界の旅から旅へと經めぐつてゐる寂しさを思ふ。

×

素直に大きくなるべき森の樹が都會の道傍に植ゑつけられた。或る時は馬車の轍に傷つけられ、或る時は惡戯兒のナイフにさいなまれた。樹は何時の間にか不自然な形を形作るやうになる。人々は醜い樹の枝振りや幹を見て笑ふ。若い人々が年寄るにつれてその心は頑になり、その胸は冷たいものとなる。欺かれ、裏切られたる傷の名殘でなくて何であらう。嘗てはやさしかつた乙女の心も虐げられ僞られてはやがて人を殺し、人の肉を喰ふ。

日毎の新聞の三面を賑してゐる自殺、殺人、强盜、心中といふやうな記事を、私たちは他人事のやうに讀むでしまつてゐるが、「何時自分自身がその中の一人にならないとも限らないことを思へば慄然たらざるを得ない。「かの男は敎育があるからそんな無謀なことはしない」と人々は言ふ。そして多くの場合この言葉は眞實である。それは敎育あるがために立派な人間となつてゐるからでなく、むしろ色々な抜け道を發見してゐるからである。法律を知つた男が法律の網をくゞることを知つてゐると同じやうに、比較的理性といふものゝ發達した男女は巧みに自分の純な心を僞ることを知つてゐる。

自己を僞ることを敎へられなかつた野人は愛すべき罪人である。自己を飾ることを知れる賢者は呪ふべき善人である。

×

昔は草木も鳥獸も人類も一つの言葉を語つた。その言葉は音なき言葉であつた。それは心情から心情へ、心靈から心靈への言葉であつた。

人類が音を持てる言葉を用ふるやうになつたのは非常な不幸であつたかも知れない。鳥にも獸にも聲を與へられたことは不幸であつた。聲は安住の地を持たぬ巡禮者の歌である。かれ等は絶えずさ迷ふてゐるが故に絶えず唱ひつゝ道をもとめなければならぬ。

草木には聲がない。かれは一所に安住してすべてのものを感じ、すべてのものを見てゐる。かれは唄をうたふてさ迷ふ必要はない。かれの根は世界の底を貫く神祕の暗に通じてゐるから。

聲を持てるものはすべて地上を歩かなければならぬ。かれ等は一寸でも地下の暗に入ることはできない。神祕はすべて地下の暗から生まれる。

空の鳥を見よ、野の獸を見よ。人類を見よ。かれ等は聲あるがためにその翼と足とを持つて絶えず地上の世界を飛びまはらなければならぬ。かれ等は眼に見るものをのみ見、耳に聽くべきものをのみ聽く。かれ等には絶えず不安がある。

野の百合花を見よ、湖の藻の花を見よ。かれ等は聲を持たない。かれ等は永遠に沈默してゐる。その根は永遠の神祕を聽き、永遠の聲を聽いてゐる。かれ等は不斷一所に安住して永生の寂寞と歡喜とを靜觀する。

鳥や獸や人間が聲といふものを失つた時、かれ等の唇が冷たく緘ぢられた時かれ等は地下の暗い神祕を見出すことができる。

×

幾度となく人間の死を見るごとに、殊にそれが若い人々や幼い人々の死であるごとに、私たちは未知の世界といふことを考へずには居られなくなる。

私は一人の最も親しかつた友人を失つて以來この考へ方は一層強くはつきりなつて來た。かれは今どこかでまだ私を見てゐるやうな氣がする。

椎の並木の蔭を靜かに歩いてかれが何時かは私の家を訪ねて來るやうな氣がしてならぬ。私はぢつと庭を見つめてゐる。かれがこの刹那に歸つて來さうにおもはれる。かれが百年千年の後再び歸つて來さうにおもはれる。キリストの復活を待ちのぞむでゐた人々の心も恐らくこれであつたらう。

二十または三十といふ齢で死ぬことが決して自然であるとは思へない。かれ等は何のためにこの世界に生まれて來たのか。この世界に於ける仕事だけが人生のすべてゞあるとしたらかれ等は始めから生まれて來なかつたも同じことではないか。或る者は生まれた日に死ぬ。或る者は幼年で死ぬ。それでも何かの意味があつたと思ふ。「次來世の準備！」それがためにすべての人は生まれて來たのだ。

私はこのやうなことを考へることもあるやうになつた。しかしこの考へ方は決して親しき者を失つた悲しみをなぐさめることはできない。それは一種のあきらめであり、自分で自分を僞るものであるやうにおもはれる。次來世を信じようとする心と、否定しようとする心の鬪ひがかなり强い。

しかし、ともかく何れの時か、何れの處かでかれに逢ふことができるやうな感じは、すべての悲しい死別を經驗した人々の必ず實感するところであらう。

かれと一緒に歩いた秋の武藏野は今櫟の葉を落してゐる。かれと一緒に歩いた秋の道にはさながらに輕い埃が道傍の秋草にかゝつてゐる。かれが掬むだ流れも、かれが彳むだ森もさながら死のやうな秋の落莫を湛へてゐる。

悠久の孤獨の悲哀をいだいて私は秋の武藏野に立つてゐる。悠久の時の終りにかれが再び歸つて來るのであらうか。

秋風は武藏野の黍の葉をざわめかしつゝ吹く。かれの聲がどこかで聽えてゐるやうにもおもはれる。

×

東北の淋しい溫泉場でTに逢つた若い不運な女、K町でTの行李を擔いでくれた男、赤十字の病室でかれにイプセンの詩集“On the hill”を吳れた男、かれに觀音經を送つた常陸の男、澁谷にゐた若い夫婦の學校敎師、淺間でかれを救ふた小諸の牧師、淺間でかれを泊めた老農と娘、I火藥庫の作爺、女哲學者！　君等はかれが自殺したことをまだ知るまい。かれはまだこの秋の森をさ迷ふてゐると想つてゐるだらう。また何時かは君等の家を訪ねて行くであら

うと想つてゐるだらう。君等は幸福だ。

×

Y氏がフランスに行かれるのを麻布の龍土軒に送つたのは五六日前のことであつた。私は龍土軒の二階に上つた。そしてそこに渡頭の油繪がかゝつてゐるのを見た。それは大幅のもので室の一隅を占めてゐるものであつた。棹を持つた船頭の顔には寂しい夕陽が眞正面に映つてゐた。蝙蝠傘に夕陽を避けて正面を向いてゐる女、川の彼岸をながめてゐる農夫らしい男、舷に凭れて無心に水をかきまぜてゐる女の子……すべてこのやうな人物と夕暮の寂しい影とにつゝまれたその繪はこの華かな室には餘り調和しなかつた。けれどもその繪は私の心をまた新しい寂しさに暗くした。それは四五年前のことであつた。亡くなつたかれを聯隊にたづねた夜――雨の夜であつた――私は始めてその室に入つてその繪を見たのであつた。永劫に逢ふことのできぬ死別の寂しさが限りもなく私の心を穴洞のやうにする。

人々は笑ひ、人々は語つた。

フオークやナイフの音が明るい宴會の心をそゝつて來る。小ひさな囁き、低い物語り、そして時折は筒ぬけたやうな大きな笑ひ聲が室の一隅から起る。

「失はれたものは永遠にかへつて來ない！」

私は幾度か、かう思つてかれの面影を打ち消さうとした。

「けれども人生に二度と眞實の友はできない！」

私は再びかれの面影を描いた。

人々は笑ひ、人々は語つた。どつと哄笑が起つた。フオークの音、ナイフの音、……秋の夜は更けて行く。

私は六本木までひとりで暗い道を歩いた。幾臺かの電車が後から後から私を追ひこして行つた。

寂し武藏野

冬枯れの武藏野をさ迷ふ人々は、かの涯しもない曠原のたゞなかに黑い土を掘つたり、畦の藁をかついだりしてゐる男女を見るであらう。そこには幾千年來のどすぐろい土の色につゝまれた人間の苦痛と忍從の跟がかぎりもなくつづいてゐる。

或る頑丈な男は淺い流れに沿うて煤けたやうな楡柳（にれやなぎ）の下で新しいかれ等の收穫を車に積むでゐる。妻と娘たちは寒い筑波颪と氷つたやうな溜り水に手も足も霜やけだらけにして大根や白菜を洗つてゐる。黄昏れの暗がどこからともなく迫つて來るとき靜かに小石を嚙む轍の響と農夫たちの素樸な夕暮れの挨拶とが廣い武藏野の沈默をやぶる。疎な防風林に圍まれた百姓家からは力ない燈の光りが明滅する。白い夢のやうな徑が一直線に都會の方向へ平原のなかを滅えて行く。東京から歸つて來る荷馬車がやがて村境の木立にかくれる。馬は疲れた足どりで歩いてゐる。

私は武藏野の黄昏を愛する。そこには一つの音もない。そこには一つの影もない。煙つたやうな森の遠い輪廓や、またその森のかげを時折り流るゝともなく流れてゐる冬の川が曲り曲つて平原を縫ふてゐるのを見るとき、私はどこから來たのか、またどこに行くのかも知らない人生の寂しさについて想ふ。

思ひがけない方向から汽車が走つて來る。そして思ひもよらぬ曠原の涯になくなつてしまふ。しばらくはその黑い煤煙が丘や森にためらうてゐる。やがてその煙が消ゆれば、あとにはたゞ一條か二條かのレールが冷たい過去の死骸を曠原のなかに横たへてゐる。汽車もレールも武藏野の寂寞に抱かれてしまつて、私たちはそこに何の不調和をも見出すことはできない。

水鄕の眞ん中に城廓のやうにそゝり立つてゐる水力電氣の變壓所のやうな建物も、この廣い武藏野のなかに置かるるとき、それは一つも不調和な感じをおこさせはしない。その高い窓々から青白い電燈がともされるとき、それは却つて武藏野の寂寞を大きくするものとなる。

暗の夜には遠い水車の響やさゝやかな水の音の他に武藏野の寂しさは見ることも聽くこともできない。けれどもその暗のなかに光りがともされるとき武藏野の寂しさが、その光りとゝもによみかへつて來る。如何なる華やかなものも明るいものも、武藏野に抱かるゝとき、それは却つて武藏野の寂寞の內容を複雜にし、鋭くするに過ぎない。

武藏野の土、武藏野の丘、武藏野の流れ！　お前はあらゆる文明の華やかさと明るさとをお前の寂しい胸に抱きしめて、そして人間の努力のすべてをたゞ黃昏の沈默の底に葬つてゐる。

嬰兒の如く

靜かにこのころの思想界殊に文壇の傾向を眺めた人は誰れでも氣付くことであらう。それは餘りに自分の天才を堅く信じた人々の多いことである。そして理が非でも自分を最も大きなものであると信ぜしめようとする天才の多いことである。

まだ思想の定まらぬ靑年たちのうちには、殊にこれ等の所謂天才に崇拜の眼をそゝいでゐる人々の多いのは無理もないことである。

しかし百年の後、今日の文壇を顧みたる時果して今日の所謂新しい思想家、新しい天才のうち果して幾人が記憶せらるゝであらうか。

それについて思ひ出すのは郊外目白附近の何某と言ふ不思議な男が豫言者めいたことをやつて幾百千人の心を迷はし、幾十萬の財産を築き上げたといふ新聞の記事である。私はその何某といふ豫言者が捕縛せられたといふことにはさして興味を持たなかつたが、私が一層知りたいとおもつてゐるのは、その男に僞られた幾多の信徒の心持ちである。そのどこまでも馬鹿を見た人たちのことを考へると笑はずには居られないが、氣の毒な感じもする。

しかしよく〳〵考へて見るとこのやうな馬鹿氣切つたことは、今日の多くの自稱天才とその崇拜者たる多くの靑年の間にも絕えず繰り返されてゐる悲慘事である。

私たちは過去數年の間個人主義、または個性の尊さといふやうなことについてかなり聽きもし、聽かされもした。しかしそれが何時とはなしに、その聲をひそめて今度は更に新しい方面から理想主義や人道主義の名によりて若い人

人の心を動かすやうになつた。私たちはその度に色々な異つた人生の見方なり味ひ方なりをした。
しかし私たちはこの非常に急激な思想上の變化からしてどのやうな收穫を得たであらうか。
婦人の獨立　眞實な結婚、虚僞につゝまれた家庭の破壞、階級思想の打破、共同生活、個性の尊重、新しき女……から數へ立てゝ見たゞけでもかなり多くの新しい社會現象があらはれて來た。
尤もこれ等の生活現象はかの一部の頑なる思想を抱いてゐる人々が考へてゐるほど呪ふべきものでは決してないと思ふ。少くともかの自然主義的傾向の作物が輸入されて以來、イプセンやストリンドベルクや更にトルストイのやうな一種の理想主義的色彩の豐かな作家が紹介せられて以來、我が國の思想界は非常に眞劍になつて來たことは事實である。かれ等は兎も角自己について、人生について忠實に考へることを敎へられた。私たちはこの點に於いて、かの傳統的な思想上の漠然たる目標を目あてに生きてゐた從來の生活法に比較して如何に今日の人々が眞面目な生活を生きようとしてゐるかを思はずには居られない。
かの所謂先輩と呼ばれる種類の人々がかれ等自身の傳統的な道德生活の標語に立脚して自分等の規模に當てはまらない生活方法をば悉く邪道異端視してゐる間に、次の時代の若き人々は雄々しくかれ等自身の新しい道を歩いてゐるのである。
道德は死せるものではない。道德は生けるものである。道德は絶えず變化しなければならぬ。人生が不斷の創造であるかぎりは、道德も亦無論不斷に精進するものでなければならぬ。この點に於いて自然主義以來新しい思想が、我が道德觀念の上に幾多の新しい刺戟をあたへたことは非常によろこばしきことである。
かくして私たちの時代が要求する新道德を生むことができる。けれども新しき運動は何時も新しい危險を伴ふてゐることを覺悟しなければならぬ。危險のない所に甘い泉の水は湧き出ない。現にこの新しい思想のために幾多の家庭

は破壞せられ、幾多の男女は戀愛の犧牲となつた。しかし今日なほ多くの靑年が危險の渦中に投ぜられてゐる。

×

キリストは嘗て言つたことがある。「汝等の前に來る豫言者を注意せよ、かれ等は綿羊の姿にて來れども狼なり」と言ふやうな意味の言葉であつた。

今日の多くの思想家のうち果して綿羊を裝ふ狼がゐるか、何うか、といふことは私は知らぬ。恐らく今日の眞劍な思想家のうちにはそのやうな僞善者はゐないと斷言しても差し支へはないとおもふ。けれどもかれ等は確かにパリサイやサドカイの徒の傲慢な心をもつてゐることは疑もなきことである。

そこで問題はかうなつて來る。若い人に對しては「もつと〳〵賢くなれ、汝自身の眼をもつて、大自然の聲を聽け、汝自ら自己內心の靜かな囁きに耳傾むけよ」と言はれなければならぬ。そして所謂新しい思想家をもつて任じてゐる人々に對してはもつと〳〵敬虔な心をもつて新しい思想のためにどこまでも眞劍に突き進むで行くことをすゝめなければならぬ。けれどもまたかれ等は、かれ等が若い人々の心に植ゑ付けた不安不滿の生活狀態に對して何等かの解決をあたへるだけの責任を持つてゐる筈である。かれ等は若い人々の手の中にあつた古いものを投げ捨てた。されどかれ等は之に代るべき新しいものを與へなかつた。卽ち私たちの過去はひたすら破壞にのみ馴らされて來た。疑惑に充たされて來た。私たちは古い建物を破壞した。新しき殿堂はまだ築かれてゐない。

婦人問題に、家庭問題に、個人問題に、自然主義運動以來、またはイプセン、ストリンドベルクの影響以來荒らされてゐた我が思想界の畑はいまだに疑惑と不安につゝまれてゐる。こゝに理想主義または人道主義存在の意義がある。理想主義人道主義と呼ばれる一派の人々の運動に意義あらしめるものはこの荒蕪の地に新しき生命を與へ、新しき人生問題の方向を指示することを措いて他にない。

現在の思想界に缺けてゐるものはその力であり、權威である。野は既に切り拓かれてある。これに播くべき種子を與ふる人が生まれなければならぬ。私たちが何時まで破壞をつゞけてゐたところで新しい生命は生れない。私たちは建設の曙光を待つてゐる。新理想主義であつても宜い、人道主義であつても宜い、要は眞實に私たちの荒らされた心田に生命の新しい種子を與ふることのできる人を待つのである。

×

然らば私たちのこの荒れたる心田に建設の種子を播くべき大思想家が果して、今日生きてゐるか否かの問題が起る。不幸にして今日の我が思想界にはそれほどの權威ある人を見出すことはできない。

私たちは豫言者の出現を待つてゐる。そしてその豫言者は今の學者や所謂思想家の間から生まれやうとは思はれぬ。それは或ひは無學の人であるかも知れぬ。恰かも砂漠の大豫言者マホメットのやうに、或ひはキリストのやうに。口汚く罵り合つてゐる今の多くの思想家たちの淺猿しい論壇を見るにつけて、私たちは一層この感を深くする。「もつと靜かにしろ、默つてゐろ、そしてお前自身のうちに強い力を養へ！」

昔ソクラテスは自分の愚を知ることを以て大智の第一歩であると言つた。今の多くの思想家は餘りに自分を賢く見つもり過ぎてゐる。

私たちは今日の多くの思想家に對してキリストの言葉をかりて「嬰兒の如くあれ」と言はなければならぬ。自分等の力の弱小であることを自覺せよと言はなければならぬ。またかれ等が眞個に内心に燃ゆる新しい思想を抱いてゐるならば、かれ等は何時でも自分の主義に殉ずるだけの忠實な心を持つてゐなければならぬ。キリストが十字架についたのは世界の人々を救はんがためであつたと言はんよりは、むしろかれ自身の新しい主義に忠實ならんがためであつた。

血をもつて購はれた十字架に始めて永遠の意義があつた。

キリストはギリシヤ語も、ギリシヤ哲學も知らぬナザレの貧しい靑年であつた。けれどもかれは古來の哲學や神學が達せんとして達することのできなかつた神の國を見出した。神の國の扉を開く鍵は哲學でも神學でもなかつた。それはかれ自身によつてさゝげられたる血であつた。

×

カアライルは沈默の偉大を語つた。エマーソンもメエテルリンクも齊しく沈默の大なる力について說いた。蓋し私たちの思想がその究竟に達して將に全我的な實行に移らんとする刹那に沈默が生まれるからである。

饒舌は思慮の空虛から生まれ、思慮が充滿する時沈默が生まれる。

書籍や言論の上から新しい世界は生まれて來ない。書籍が燒かれ、言葉が滅びてしまつた時、眞實の人間の生活が生まれる。

野に耕せる農夫を見よ。かれは哲學を語らない。かれは新しい人生を叫ばない。かれはたゞ默しつゝ地を撃ち、地を耕す。かれは自らを愚なる者と信じ、自然に對して原始人的な敬虔な心を抱いてゐる。かれの默した鍬の双先きから野の生命が生まれ、かれの生命が育て上げられる。

私たちは大自然の懷のなかに抱かれなければならぬ、嬰兒のやうな柔和な心をもつて。

野に出でよ。そこには人間が築き上げた小ひさな哲學も藝術もない。そこには無心より無心に通ずる生命の神祕が漂ふてゐる。そこには春雨が灑ぎ、楡の芽生えが伸び、野生の花が香ふ。

饒舌なる思想家、自尊の心にかたまれる藝術家！

私たちは何時までも狹い自我の牢獄のなかに閉ぢこもつてゐてはならぬ。

野に出でゝ太陽を拜せよ。曠原の風に吹かれよ。そして自然の沈默が與ふる囁きを聽け。夜の雪は音もなく靜かに積るではないか。私たちの全生命が眞實に新しい生活の建設のためにさゝげらるゝ時、私たちはすべて沈默でなければならぬ。

パリサイの徒は巷に角笛を吹いた。

キリストは靜かに聲もなく十字架についた。

破壞せられたる人生の荒野に建設の曙光を齎す豫言者は嬰兒の如き柔順と沈默から生まれ出づるであらう。

×

若い人々は世の所謂思想家にのみ人生の諸問題を訊いてはならぬ。汝自身の日々の小ひさな生活問題は百の哲學者の架空的な學說にまさつてゐる。

日々に起り來る眼前の一つ〳〵のさゝやかな事件のうちに限りなき人生の生きた問題がある。その一つ一つの小ひさな問題こそやがて若き人々の心に「この人を見よ」といふ哲人的な強い信念をはぐくませる思想生活の糧である。

私たちは靜かに自己の內心の聲を聽かなければならぬ。自分の問題は自分で解決しなければならぬ。他人に與へられた百の眞理よりは、自己の生活から湧き出た一つの眞理は更に更に尊いものであることを知らなければならぬ。

豫言者はこの小ひさきかくれたる謙虛な心の生活者の心の奧に潛むでゐる。

豫言者は都會に生まれない。ライブラリイからは生まれない。顧る者もなき冬の夜の空を見上ぐれば幾萬の星がまたゝいてゐる。豫言者は冬の夜の空にある。

道もなき深山に花が開く。豫言者は深山の靜寂に住する。最も愚かなる、最もつゝしみ深き、勤勉なる農夫よ、お前の胸のときめきを聽け。お前の豫言者はお前のときめきのなかに囁いてゐる。

ミケランゼロの額

ミケランゼロやダ・ギンチの生涯を見て何時も私たちが深く感じさせられることは、死の最終時にいたるまで苦痛な闘ひをつゞけて行つたことである。しかしそれ等の闘ひは主義のためだとか、社會のためだとかいふやうなそんな大げさな戰ひではなくて、何時も自分一個のうちにある問題のための戰ひであつた。或ひは眞實を見出すために或ひは知識を見出すために、その長い生涯を苦しみぬいたのであつた。無論かれ等とても人間である、人間の弱い心も持つてゐた。「眠りはうれしい、けれども石となることは更にうれしい」と言つたのは八十歳のミケランゼロであつた。更に「知識は人間に神祕は神に」と叫んだのは晩年のダ・ギンチであつた。

かれ等とてもこのやうな絶望的な、またはあきらめの態度を取るやうになつた時代もあつた。

更にこのやうな弱い心はキリストにもトルストイにもあつた。しかもこの弱點は決してかれ等の生活なり、藝術なりをそれがために價値少なきものとはしなかつた。否、實はこの弱點こそかれ等の藝術や思想に對して私たちの懷しみを喚び起させるものであり、この弱點に打ち勝たうとしたかれ等の內的苦闘のうちにこそ、かれ等の思想や、生活や、藝術を偉大ならしめたところの生命が流れてゐたのではないか。

人間性の偉大さ、或ひは生活の眞實味といふものは畢竟するにこの內的苦闘の大小、深淺から生まれて來るものではないか。外的苦闘が私たちの人格構成に缺く可からざることはいふまでもないことであるが、外的苦闘が外的苦闘のみで終つたとするならば、それは私たちの生活にとりてさしたる意義を持つことはできない。外的苦闘が私たちの內生活に及ぼす動搖の大なるだけ、それは私たちの內生活にとりてより大なる意義を持つことゝなる。私たちは外生

活を絶えず內生活に生かすことを考へなければならぬ。

　ミケランゼロの生涯を考へるとき私たちは殊に深くこの感を抱かずには居れない。ミケランゼロの肖像を見て誰しも第一に氣付くのはその廣い額に刻まれたる幾條の深い皺である。この皺はダ・ギンチにもなく、ラフアエルにもない。ミケランゼロの藝術が伊太利の文藝復興期に於けるどの作家の藝術よりも、力強く、深さと鋭さと苦痛とを持つてゐることゝかれの額の皺とを結びつけて考へると、人々はそこに一脈の暗示がたゝへられてゐることに氣付くであらう。

　文藝復興は一面燦爛たる文華を競ふたが、同時に享樂的放縱な生活も亦その絕頂に達した。そのはなやかな浮薄な思想界に道義的觀念と火のやうな宗教心とを注いだものは殉教者サヴオナロラであつた。しかしてミケランゼロは實にサヴオナロラの聖徒的な宗教精神を受け容れた。かれはすべての人々が醉へるとき、醒めたるたゞ一人であつた。「我は常に孤獨なり」と叫んだかれはたゞ一人醒めてあらゆる人生の苦鬪に打ち克つてゐた。

　かれの鄕土フロレンスは生涯この偉人を追放した。「死ぬことは自分にとつて嬉しい、死ねば自分はフロレンスに歸れるから」と言つた偉人の心は終生かれ自身を迫害した母鄕フロレンスを忘れることはできなかつた。何といふ悲しい事實であらう。更にかれの父、かれの兄弟はかれを奴隷のやうに苦役せしめて、かれの金錢を貪つた。かれは水とパンとで生命をつないで、たゞ一臺のベッドに三人の弟子と共に起臥して働きつゞけた。或ひは法王の壓迫、ラフアエル派の人々の陷計等算へ來ればかれの一生は最も苦鬪多き生涯であつた。かれほど不幸なる人間は少かつた。けれどかれの大藝術を生むだものも半ば、かれのこれ等の外的苦痛にあつたことを考ゆれば、かれの生活は呪はるべきものではない。かれはこれ等の外的苦鬪の刺戟によつて、絕えずこの內的苦鬪を生かして行くことができた。しかしてかれの內的苦鬪はやがて不滅の大藝術品となつて現はれた。

「全世界が泣いてゐる時何うして笑ふことができよう。」かう叫んだかれの生活には笑ひといふものはなかつた。かれ

の生活は苦鬪と涙のうちに浸されてあつた。涙はかれの生活のパンであつた。孤獨と涙と苦鬪とに培はれたる藝術ほど力強いものがあらうか。トルストイの藝術、ドストイエフスキイの藝術、ミレエの藝術、ニイチエの哲學、悉くこの種の藝術や哲學でないものがあらうか。

生涯を鬪ひつゞけたトルストイ、生涯を苦しみ拔いたミケランゼロ！　トルストイの深い野獸的な苦惱の眼を見よ！ミケランゼロの深く刻まれたる苦役者の如き苦鬪の額を見よ！

私たちの外的苦鬪をして絶えず來らしめよ。そして外的苦鬪を外的苦鬪で終らせないで、それを內的な問題として生かさなければならぬ。かくして絶えず私たちの內的苦鬪の努力がつゞけられる。そこから大なる思想と藝術とが生まれる。

涙と苦しみとに培はれたる人格のみ人を動かすことができる。

メレジュコフスキイの「モンテーン論」のなかにかれは、モンテーンの懷疑說を論じて「かれは疑つた、けれどもかれは祈つた。かれの疑ひは根本的に人生の愛着に充ちてゐた」といふ意味のことを言つてゐる。

默しつゝ祈らん

このころ方々の論壇に人生の否定、肯定または人道主義といふことが賑かに論ぜられるやうになつた。大體から見るならば、今の思想界には善きにつけ、惡しきにつけ、生命、生活の强い肯定論者が多い。「より善き生活のために」といふことは多くの思想家、藝術家に共通な標語である。そしてそれ等の人々は一と口に人生の愛を說き、全人類の愛を說いてゐる。

この現象は當然來るべきときに來たりし現象であつて、自然主義の運動以來久しく索めてゐた新しい道が切り拓かれたのであると見ることができる。そしてこの運動は決して或る種の人々が想像してゐるやうに、反自然主義的なものではないと思ふ。又或る人々はこの人道主義によりて自然主義の橫暴を虐げるといふやうな考へをも持つてゐるらしいが、しかしもしこの種の運動の人々が自然主義的な人生の見方がどれほど眞劍なものであつたかに考へ及んだならば、所謂人道主義なるものゝ遠い源が何處に潜むでゐたかといふこともおのづから察することができるのではないかと思ふ。

人々が唱へてゐる人道主義なるものが、どのやうなものであるかをはつきり知らない私には一概に言ふことはできないが、もし我が國の人道主義者といふ人々がかのトルストイ風の流れを掬むのであるとするならば、尙更私は嘗て自然主義が各個人の心の底に立入つて悲痛な自己省察をやつたその宗教家的な殉教者的な心を尙一度人々は顧る必要が

あると思ふ。

イズムは大切なものである。また便宜なるものである。けれどもイズムは一時的なものである。それは思想界の流行に過ぎない。私たちはイズムに立ち據つて、自分のイズムをもつて、一樣に世間を律して行かうとしてはならぬ。イズムよりもつと尊いものは多くのイズムを作り出した人間そのものである。イズムの價値はその人間の價値によつて定まり、その背景として人間的な價値がなければそのイズムは穴洞の聲に等しい。

宗教が迷信に陷り易いのはイズムに據るからである。かれ等は自分の宗派心を滿足せしめんが爲に多くの血を流した。人を愛し、人を救ふべき筈の宗教ほど古來殘忍な戰を惹き起したものはない。何といふ恐ろしい矛盾であらう。人々は宗教よりも、教育よりも、文藝よりも尊い自分を知らなければならぬ。眞實の人間を摑み得た以上はイズムが何であらうと私たちは顧る必要はない。

モンテーンが抱いた疑惑は即ちかれの哲學であり、またそこからしてかれの懷疑的な否定的なイズムが生まれたのであつた。かれはできるだけ簡易な生活を欲した。かれは學問を呪ふた。かれはできるならばかれ自身の名をも忘れたいとねがつた。かれは即ちかれ自身の懷疑的なイズムに忠實ならんとしたのであつた。かれは實在のすべてを否定しようと努めた。もしかれが多くのイズムの迷信者と同じ種類の人であつたなら、かれは、しか爲終はせることができたであらう。けれどもかれは「疑ひつゝ、しかも祈つた」、「否定しつゝ、しかも愛した」といふではないか。私たちはこゝにまたイズムに據らんとする人の生活の矛盾を見出すことができる。

しかし同じ生活の矛盾であつてもかの宗教家が愛を叫びつゝ人を殺すのと、モンテーンが生を疑ひつゝ尙ほ生を愛するのと、この二つの間には量ることのできぬ本質的な差があることを忘れてはならぬ。

私たちはまた酒場から酒場へと歡樂の光りをもとめて歩いた詩人が、教會堂の石階にひざまづいて泣きつゝ祈つた

ことを知つてゐる。

　このやうな實例は日常私たち自身の生活に幾らもあり得べきことであつて、これは私たちの生活が決してイズムによりてのみ動かされるものではない證據である。否な、却つてイズムのない所に、偶然のうちに、不用意のうちに、純眞な人間性の愛、人間性の底にひそめる悠久の悲哀の發露を見出すことができる。

　何のイズムも知らないロシヤの片田舍の農民にも、自分の身を殺して氷河のなかに旅人を救ふだけの愛の炎は燃えてゐた。人類愛を說いてゐたトルストイにも百姓の接近を恐れて溝を跳び越えて逃げたといふやうな悲しい矛盾もあつた。

「詩を作るより田を作れ」といふ言葉はイズムの場合にも言ふことができる。巷に立つて角笛を吹く大豫言者よりは、靜かに、默しつゝ野を耕せる人の如何に尊きかを見よ。

　私はイズムを唱ふる人々の熱心を尊敬する。けれどもイズムを唱ふる多くの人々にかの懷疑的であつたモンテーンほどの謙虛な心のないことを悲しむ。かの頹敗的な詩人ほどの純な心を持つてゐないことを憐らずおもはずには居れない。

　私たちは眞實に自分を愛する道さへも知つてゐない。一人の友、一人の戀人をも眞實に愛し貫く事を知つてゐない。美しい名のもとに大きな說敎をすることも意味ある事であらう。けれどもこの貧しい心の所有者である自分自身の小ひさな日常の愛憎、生死の問題は誰が解いてくれるのであらう。

　私たちはどのやうなイズムに走らうとも自分のこの低い、しかし最も深い內心の叫びに耳傾けないで居られようか。

　モンテーンは疑つた。けれどもかれは祈つた。

孤獨を愛する心

Tさん。

醫師は人間の感情生活のすべてを私たちの健康狀態に歸納して判斷いたします。さういふ見方からするならば、私のやうなものゝ精神狀態は餘程怪しいものでなければなりませぬ。まつたく私はこのごろ一層人と話すことがいやになりました。人と顏を合はせることもいやになりました。いやになつたといふよりは苦痛になりました。たまに人に逢つても十分でも二十分でも默りこむでしまふことがあります。これは自分でも非常にいけないことであると思ひますが、どうも仕方がありません。醫師に言はせると精神狀態が幾らか變になつてゐるのかも知れません。

私はソクラテスや孔子(こうし)やキリストやあんな豪い人々が、何時もたくさんなお弟子たちを伴れて歩いてゐたことを考へると、その事だけでゝもほんたうに豪いと思ひます。

Tさん。私の一つのねがひは當分誰れにも逢はないでゐたいといふことです。私は今、東京では比較的靜かな町外れ見たいなところに住んでゐます。それでも私はまだいろ〳〵な人との交渉をつゞけて行かなければなりませぬ。それは私にとりてはかなり苦痛なことであります。昨年の暮ころ私は八王子附近に住まはうかと考へたこともありましたが、生活上の事情がそれをゆるしませんでした。しかし私は早晩東京から少し離れた田舍に引つこみたいとおもつてゐます。

私はアイヌのことを克(よ)く思ひ出します。高い文明を持つた異人種に壓迫せられて行く被征服民族ほど氣の毒なものはありません。精神上の生活から考へれば私のやうな人間はアイヌと同じ道をたどつてゐるのかも知れません。しか

しアイヌはたゞ山の奥へ奥へと退いて行くばかりでせう。私は何時かまた巷に出る日のあることを信じます。私は暫く人間の巷から離れたいと思ひます。けれどもそれは決して人間の巷を憎むからではありません。愛するからでもありません。人間の社會に對する愛憎の問題を考へる前に先づ自分自身をほんたうに考へ、自分自身を何の拘束もない生活のうちに置きたいからであります。小ひさな利己心を滿足させたいからであります。

キリストは、またトルストイは、人を愛せよと教へました。私は二人の言葉を信じます。けれども眞面目に考へて行けば行くほど、人を愛することの如何に困難であるかを知ることができます。そして私が愛を口にすればするほど私の愛は概念的なものになり、抽象的なものになつてゐます。私たちは愛を說きます、しかも私たちは芝居を見に行きます、カフェに行きます、私たちが愛せなければならぬ兄弟が巷に立つて一椀の食を乞ふてゐる時に。私たちは家を持ち、庭を持つてゐます、人々が路傍の土の上に臥せつてゐる時に。

說教壇の上に立つて愛を說く時私たちはフロックや禮裝を持つてゐます。そして私たちは滿足な着物一枚も持たぬ貧しい人の前で平氣で愛を說いてゐます。これは決して宜いことではないと思ひます。しかも私たちは自分の衣の更に美しからんことを欲し、自分の糧の更に豐かならんことをねがつてゐます。人の子には枕するところなしと言つたキリストの心を思ふと私たちは一日でも家のなかにぢつと寢てゐることなどはできぬ筈です。それに私は家を持ち、衣を持つてゐます。近ころ白隱和尚の傳を讀むだ時私は「厨下枯淡益々甚し、商家捨る所の敗醬を乞ふて日用に給す」といふ文字を見出しました。私たちに白隱のこの生活ができないかぎり、私たちの愛は眞實なものではないのではありますまいか。

Tさん。私が人を避けなければならぬのは、餘りに利己的な醜い自分を知つてゐるからです。私たちが集つて論ずることが餘りに空疎な議論であることを恐れるからです。私たちは石をパンに代へて愛を說いてゐます。私たちは先

づ沈默の美德を知つて、飢ゑたる人にパンをあたへなければならぬ。人は沈默のパンによりてのみ愛を實感することができます。

Tさん。私のやうな利己的な人間でも時々人を愛する心が湧くことがあります。そしてその愛は盲目的に動きます。私はその愛の心を自然のまゝに伸ばして行きたいと思ひます。私が人を避ける一つの理由はこゝにあります。私のやうな利己主義者の愛はキリストの愛のやうに絶え間なく流れ出るものではありません。私の心は冷たい憎みの砂利でいつぱいになつてゐます。その砂利の間から時々温かい愛の水が流れ出ることがあります。私はその愛の水の流れ出るとき深いよろこびを感じ、人間の戀しさを感じます。そのやうな時にならば私は何のやうな力強い人でも、富めるものでも自分の友だちとして受け容れることができます。けれどもそのやうな心持ちは滅多に醱酵いたしません。キリストの心のうちには何時もこの愛が燃えてゐたことであらうとおもはれます。私はキリストの心が羨ましくてたまりません。

Tさん。私たちが世のなかに出て、色々な人と接して行くためには、何時もこの愛の泉を豐かにたゝへて置く必要があります。女は人に接するとき薄化粧することを忘れません。私たちは人に接するとき自分の愛を喚びおこさなければなりませぬ。貧しい心の所有者にはこれはかなり苦しいことであります。利己的な私のやうな人間にとりては餘りに多くの人と接することは、畢竟自分の愛の破產を來すことになる恐れがあります。

Tさん。よく考へて見ますと私は自分自身をさへまだ眞實に愛してゐませんでした。また自分の周圍の可憐な人々をすら眞實に愛してはゐませんでした。私はドストイエフスキイのなかに出て來る小ひさな可憐な利己主義者を知つてゐます。「虐げられし人々」にも「死人の家」にも「貧しき人々」のうちにも無智な可憐な利己主義者が描かれてゐます。そしてそれ等の小ひさな利己主義者たちは何時も盲目的な愛の實行者——恐らくドストイエフスキイ自身——

ーの生命を貪りつくしてゐます。

Tさん。私はドストイエフスキイの盲目的な愛を懐しくおもひます。メレジュコフスキイが言つてゐるやうにトルストイは愛の實行に際して極めて合理的であり、批判的でありました。かれは一つの愛を施す時、その愛の結果を考へました。かれは三十ルーブルの銀貨をポケットに入れて、終日街を歩きながら、遂に施しをすべき機會を見出すことができませんでした。この愛の實行法は昔から賢い人々の愛の方法であります。

Tさん。天は心正しき人にも心惡しき人にも雨を降らすとキリストは言ひました。天の愛は殆んど盲目的に大きく、廣く、限りもないものであります。天の盲目的な雨は時として人を殺し、山を頽します。けれども天は限りもなく盲目的な愛をそゝいでゐます。

Tさん。私のやうなものでも、時折りは盲目的な愛を自分の周圍の小ひさな利己主義者たちの上にそゝいでやりたいと思ふこともありす。私がこの數年來ひとりでゐたいと思つてゐるのは、仍りこの盲目的な愛を周圍の少かの人々にあたへたいからであります。ほんたうに盲目的な愛を自分自身のうちに見出したいからであります。

Tさん。私は强ひて自分の貧しい愛を人々の上に廣くそゝぎたいとはおもひません。自分の小ひさな貧しい愛は自分の周圍にゐる可憐な利己主義者たちの間に經驗するにさへもまだ足りないくらゐです。何うしてこの貧しい愛の心をもつて巷に出ることができませう。私はなほ數年の間ひとりでこの貧しい愛の醱酵を見守つてゐなければなりません。

Tさん。人を愛するなどゝいふことを說くには私は餘りに利己的であります。私は思ひきつて愛憎の觀念から逭れたいとおもひます。私は門を鎖して自分の家を自分の城として、そのなかに自分ひとりの心を感るべく掻きみだすことなく住むでゐたいとおもひます。そしてもしこの利己的な心から愛の心が流れ出でた時、私はその愛を自分の周圍の小ひさな利己主義者たちの上に注ぎかけませう。私の家の家畜の上に、または草花の上に。そして尙ほ私の愛があ

り餘るほどゆたかにたゝへられてあるならば、私はその時初めて私の門を開いて巷に出ませう。

鳥は巣を忘れることはできません。鳥は空を翔ります。それでも鳥は必ず巣にかへつて來ます。私は巷に出て愛を實行することがあるかも知れません、それでも私の愛の泉が涸れた時、私は再び自分の寂しい家にかへつて來て、しばらく愛の心を自分一身のうちに、自分の小ひさな周圍の人々の間に醱酵させなければなりません。そして私は再び巷に出る日の愛を準備しなければなりませぬ。

Tさん。私は嘗て人の門に立つて愛をもとめて歩きました。私は愛の乞丐でありました。愛は乞ふものゝ前に決して與へられません。愛は與ふるとき私たちの生命となつて實感せられます。

Tさん。廣い人間の巷に立つて稀薄な愛の交換に日を過すことよりは、狹い自分の城廓のなかに燃えるやうな純な心の愛を經驗することが私にとりてはより多くの眞實さを感じさせるのであります。私は自分自身のうちにひろく人人を愛する心のないことを悲しいとはおもひませぬ。私はほんたうにたゞ一人を愛することを得るならば、私の生活は惠まれてあるとおもひます。私たちは多くの場合たゞ一人の人をすら眞實に愛し貫くことはできない悲しみを經驗しなければなりません。

Tさん。私は尙ほしばらく一人でゐたいとおもひます。たゞ一人で考へてゐたいとおもひます。そして先づ自分を愛し、自分の周圍の小ひさなグループの利己主義者たちを愛する心を、はぐくむで見たいとおもひます。

夜更けにすつかり窓を明けてペンを走らせてゐる時、前の椎の木立をかざして大きな月が出ます。私はこの小ひさな胸に徂徠する色々な懷しい人、戀しい人、慕はしかつた人々のことをおもひ出します。死んでしまつた人、行き方知れずになつた人、嫁いで行つた人、裏切つて走つた人、それ等の人々がみんな親しい心をもつて、私の胸によみがへつて來ます。森で梟が啼きます。遠くの汽車の音がします。森の下を急ぐ下駄の音がします。蟲の音がします。

高鳴る風の音がします。私の狭い庭を中心として展かれた夜半の背景のなかに大自然の音樂が奏でられます。縁端の沓(くつ)ぬぎの上に眠つてゐる犬が思ひ出したやうに眼をひらいては私の方を見ます。軒につるした岐阜提灯の燭(ともび)が薄い紙を通して熾々として燃えてゐるのが見えます。私の心は岐阜提灯を送つてくれた病身な靑年のことを想ひ出します。

Tさん。私にとつてこの夜更けの時間ほど懷しい時はありません。そこには訪ねて來る人もありません。なやましい生活の問題もはいつて來ません。

私は私ひとりのうちにすべての空間と時間とを通して、私の純な心をほしひまゝに生かしてゐます。純な利己心を。

Tさん。私の心は今、靜かに扉のうちに自分一人の姿を見つめてゐます。も少し私の心を擾きみださないで置いて下さい。

Tさん。私の心が愛にあふれやうと、憎にあふれやうと、どちらにせよ思ふ存分純な心持ちでこの心を生かして行きたいとおもひます。

も少しそツとして置かして下さい。この小ひさな利己主義者の心を。

雨あがりの日

雨あがりの日、銀座の或る町の角で人だかりを見た。

洋服の男が和服の男に頭を下げて詫びてゐた。そして洋服の男は一疋の犬から首輪を外して自分の手に握つた。二人とも自轉車を持つてゐた。

「人の犬を盜るなんていふことがあるか。」

和服の男は肩を顫はせて怒つてゐた。犬は洋服の男に盜まれて五六日その男に飼はれてゐたのであつた。

洋服の男は手持無沙汰に首輪と細い綱とをポケットに入れて、恥づかしさうに俯向いて自轉車に乘つた。和服の男も自轉車に乘つた。一人は右に一人は左に。

犬は暫く何つちにも動かないで兩方を見てゐた。二人の男がかなり離れてから犬は洋服の男の方へ五六間、走つた。恰度その時和服の男は振りかへつて口笛を吹いた。犬は和服の男の後を半ばためらふやうにしながら追ふて行つた。それでも犬はまた洋服の男の後に跟いて走つた。洋服の男は別に追はうともしなかつた。

和服の男は振りかへつた時、犬が向ふの方へ走つてるのを見出したので「チヨン！」と叫んだ。チヨンは振りかへつた。その聲のなかには怒りもあつた、けれどもその聲には正當な主人の權威と自信と力とがあつた。

犬は卒然として何の疑もないものゝやうに和服の男のあとを追つかけて行つた。

私は犬を盜むだ男の淋しい影を見送つてゐた。

×

夏の暑い日、天現寺橋の方から目黒に友人の家を訪ねたことがあつた。
その途中で私はズボンの裾と靴とが白く埃にまみれてゐるのに氣付いた。私は埃を掃ふために山の手線の土堤に上つて、そこにひよろ長く伸びてゐた一本の草を拔かうとした。けれどもその刹那に私は考へた。
「この草も夏の幸福を味はうとしてゐるのではないか？」
私は土堤を下つて小暗い杉の森を通りぬけながら私のポケットを探つた。そして古い紙片を見出して靴を拭いた。
その森を出外れたとき私は白い花をつけた枝が捨てられてあるのを見た。まだ折つたばかしの花であつた。
私は少し歩いたところに流れてゐる小川のなかに白い花を投げてやつた。
道で踏まれるより、幾らか長い生命を持たせたいと思つたからであつた。
私はその一日善いことをしたやうな氣がしてならなかつた。

×

Oさん、私はあなたのお手紙をいただきました。あれから三ケ月くらゐ經ちました。私はあなたが何んな方だか知りません。時折いろ〳〵想像することもあります。
Oさん、私は三度も四度もあなたに上げる手紙を書きました。書いては破りました。私は到頭あなたに御返事もあげませんでした。それでも私はあなたの町の名も番地もお名前も憶えてゐます。そして思ひ出すごとに御返事を差し上げぬことが濟まないやうな氣がしてなりません。それでも私は思ひ切つて御返事を書く事ができません。
Oさん私はこの二三年成るたけひとりで居たいといふ考へから知己を拵へることを避けてゐるのです。それはまだ私自身の歩むべき道をすら見出してゐない私が、私よりも若い人々を導くといふことが非常に恐ろしいことのやうに

おもはれてならないからです。私はパンを得るためにかなり色々な若い多くの人々と毎日接しなければなりませぬ。それは私にとつてかなり苦しい經驗であります。けれども私にはそれより他にパンを得る力がないからです。私は毎日意識しながらも恐ろしい經驗を繰りかへしてゐます。

Oさん。できるならば私はたゞ一人で靜かに考へてゐたいのです。この點だけでは私は平民の子でなくて貴族の子に生まれたらと思ふやうなこともあります。

私はあなたがどのやうな苦痛を持つておいでか、どのやうな方だか、少しも知りません。恐らくあなたは私を知らず、私はあなたを知らず、一生私たちは逢ふ機會もなくて滅えて行つてしまふのでせう。しかしそれも面白いではありませんか。

×

Oさん。私たちは自分等の先輩を訪ねて何か新しい慰めや力を得ようといたしますが、大抵な場合それは却つて私たち自身の心を前よりも暗くするに過ぎません。私たちが先輩を訪ねた時、その人が私たちに何か與へようとするなら、そして又私たち自身が何か得ようとするのでしたら二人とも呪はれなければなりません。

Oさん。どのやうな苦しいことがあつても私たちは自分のことは自分で決めて行くより他ありません。世界中の人人がみんな悲しむでゐるのです。一人だつて眞面目に考へてゐる人で泣いてゐない人はありますまい。人は自分だけの悲しみの重荷に耐へ切れないで苦しむでゐるのです。ですから、あなたが何處に行つて慰めを見出さうとなさつても人々は「私たちも苦しいのです」と應へるだけでせう。そして、その時あなたが「世界中の人が苦しむでゐる」といふことを自覺なされば、既うあなたは誰に賴る必要もないのです。あなたはその時力を見出すことができませう。私たちは自分の苦痛は自分ひとりで靜かに苦しむで行かねばなりませぬ。

Oさん私たちが他人に縋らうとしてゐるのは、まだ私たちの生活の苦痛が足りないからです。すべての人類がどれほど苦しむでゐるかといふことは、世界中の苦痛を一身に味ひ得た人のみが味ふことができるのでせう。

Oさん。私たちは自分の苦痛を癒されんことをもとめるよりは先づ人類の苦痛を見出さなければなりません。世界中の人が泣いてゐます。私たち一人が自分の苦痛から遁れる工夫をしてはなりませぬ。

Oさん私はひとりでこの悲しみをこらへてゐたいと思ふのです。あなたも一人で強く生きて行く決心をなさい。私のいふことは冷酷かも知れません。しかし人間は一人で生まれ、一人で生き、一人で死んで行かねばなりませぬ。

Oさん。私はあなたに御返事はあげません。

×

私はこの幾年が間、腰掛けて勉強することができたら何のやうに嬉しいだらうと思つてゐた。

その念がかなうてか、私は四五日前粗末だがテーブルと椅子を買ふことができた。急に書齋が狭くなつて、天井が低いやうにおもはれて來た。

私はこのテーブルに凭つて手紙を書く、本を讀む、原稿を書く。また朝と夕方には新聞をひろげながら倦怠の時を過してゐる。

私は次の日に銀座に行つて小ひさな花瓶を買つて來てテーブルの上に飾つた。

その明けの朝起きた時私は書齋にテーブルと椅子があることを忘れてゐた。

午後家に歸つて來た時また私はテーブルと椅子があることを想ひ出した。

その度に私は自分の書齋に對する懷しみを增して來た。

私は今日はまた雨のなかを街に出て犬のブロンヅを買つて來て机の上に置いた。

私は何を考へるともなしに椅子に凭れて私の書齋の新しい調度を見てゐる。

新しい所有を得たといふ矜りが私の胸に溫かい血を波立たせる。

私は何時までも生きてゐたい。そして何時までもこのアイドルな空想の時間をこのテーブルに凭れてくりかへしてゐたいと思ふ。

それが貧しい生活者の可憐な一つのねがひである。

×

去年の秋の彼岸ころ蒔いて、霜除けをしてやつたり、肥料をやつたりしたスヰート・ピーが辛つと五六日前少しばかりみじめな花を持つた。種子から手にかけた花は緣日で買つて來たり、草苗で植ゑたりした花よりは深い懷し味を感じさせる。それで暮方になつて暇さへあれば私は庭に出てスヰート・ピーを見てゐる。そして一つでも昨日より多く花がついてゐると、自分が生命の創造主であるやうな氣がして嬉しい。

けれどもそのやうな嬉しさがこみ上げて來るたんびにまた一つの寂しさが湧いて來る。

「俺たちは明日この家を出なければならぬかも知れない。」

家を持たぬ私、土地を持たぬ私は自分が培ふて蒔いた草花に對してさへも何時別れなければならぬか知れぬ不安を感じなければならぬ。

私はたゞ一坪で宜い、武藏野の眞ん中に私自身の土地を所有して見たい。

それが貧しい生活者の可憐な願の一つである。

沼の花

烏貝！　といふ名は恐らくほんたうな名ではなかつたと思ふが、これは私の故鄕の沼の池のなかに住むでゐる貝で、烏の羽根のやうに黑い、大きな貝である。私たち子供仲間ではさう呼んでゐた。大きな沼の貝を見るごとに思ひ出すのは銀さんといふ男の心中話である。銀さんは小學校を卒業するころまで靑洟を垂らしてゐたので、私たちは何時も靑銀と呼んでゐた。

銀さんは大百姓の子で、銀さんの父は大きな沼を持つてゐたが、その沼からは大きな烏貝がとれた。子供心に私はその大きな烏貝が欲しくてたまらなかつた。

椿の花が盛り上つたやうに咲く墓場の道で私は銀さんと出遇つたことがあつた。その時私は銀さんに烏貝を一つ沼からとつてくれないかと賴んだ。烏貝のかはりに私は銀さんが欲しがつてゐた燧石を銀さんにやつた。

銀さんは薄い氷の張つた沼の面を指さして

「氷が解けたらとつてやらう。」

と言つた。銀さんは靑洟を垂らして、燧石をかち〳〵やつて見ながら沼に沿ふた小徑を歸つて行つた。繡眼兒の高啼きや鵯の聲を聽きながら、私は姑く氷にとざゝれた沼の底に見入つてゐた。

春が來て沼には輝かな蘆の芽が出た。銀さんの家の牛が仔牛と一緒に沼の傍の草原のなかに寢てゐる日が多くなつた。私は銀さんに烏貝をねだつた。

「まあだ寒うて沼にははいれん。」

銀さんはかう言ひながらまた靑洟をすゝつた。
山には山櫻が散つて、茱萸の實が眞つ紅になつた。野苺の實を喰ひながら私たちは小鳥の巢を探して歩いた。山からは銀さんの家の沼が鏡のやうに反射してゐるのが靑い草原のなかに見えた。私は何時銀さんが烏貝をとつてくれるか、そのことばかり考へてゐた。
銀さんは今年もお定りのやうに落第した。私よりも三つ四つ年上であつたが、級は私より一つ下になつた。
夏になつて人の脊丈よりも高く繁つた蘆のなかには行々子が啼くやうになつた。沼には一面に菱の白い花が咲いた。ぢいッと耳をすましてゐると柊の葉のやうに厚い菱の裏にかつかつとものをついばむやうな音が沼一面にひろがつてゐた。沼の魚が菱の葉をつゝいてゐるのだと敎へてくれた男があつた。菱の花がひらくのだと敎へてくれた男もあつた。私は銀さんに烏貝をねだつた。
「子供が汚すと主さまが腹立てるいうてとつちやんがやける（叱る）。」
銀さんは靑洟を垂らしながら、かう言つて貝をとつてくれようとはしなかつた。沼には昔から主があると傳へられてゐた。昔、沼の畔にあつた城主が敵に攻められて、沼にはまつて死んだのであつたが、その城主が沼の主になつてゐた。年一度—冬の夜であるが—甲冑を着けた武士の一群が沼の上に蹄の音をさして通るといふ傳說が、私たち子供の頭には恐ろしい事實として刻みつけられてあつた。そこで沼では一人でも泳ぐやうなことはしなかつた。
何時の間にか私は烏貝のことを忘れてしまつてゐた。私は故鄕を出て久しい間旅から旅へと歩いてゐた。銀さんの家が左前になつて、大きな耕作地も沼も人手に渡つてしまつたといふことを聞いたのは、それから十二三年も後、私が故鄕に歸つて行つた時のことであつた。銀さんは長崎の造船の職工になつたり、兵隊になつて日露戰爭にも行つて來たといふことを聞いた時、私はあの「靑洟の銀さんが？」と言つて、何だか奇蹟でも見せつけられたやうな顏をした。

しかしそれから二三年經つて再び私が故郷にかへつたとき、私は更に恐ろしい奇蹟を見せつけられたのであつた。銀さんは長崎の造船を止して、田畑を賣りこくつた金で女郎を身請けしてだるま屋を出してゐた。そして同じ商賣仲間の顔役になつてゐた。銀さんと逢つても向ふでは私の顔を忘れてゐたので、私は別に聲をかけるやうなこともしなくなつた。私は少時故郷にかへつてゐる間に幾度も遊び人風をして歩いてゐる銀さんを見た。

暑い夏の盛りであつた。白い蓮の花が沼から薫つて來るころであつた。小ひさな靜かな村を驚かすやうな事件が起つた。村の人々は夜が明けたばかりであつたが、畑のなかの小徑を沼の傍の寺へ駈けつけて行つた。

「銀さんが死んだ、夫婦で死んでゐる。」

私も人々の後から寺の方へ走つた。寺は太昔の城の跡といふ小高い丘の上に築き上げられた石垣の上に建つてゐた。四かゝへも五かゝへもありさうな老松には白い苔が一面にまつはりついてゐた。寺の裏手は低くなつて、そこには沼の水が暗く沈んで、河骨の黄色な花が咲いてゐた。沼の水とひた〳〵に接したやうな、低い墓場があつて、頽れた蘭塔には黑い苔がその村の太昔からの先祖たちの血を貪り吸ふたのではないかとおもはれるやうな濕つぽい陰氣な香ひをたゝへてゐた。その墓場の片隅に小屋があつて、そこでは古い寺を再建するために木組をやつてゐるところであつた。銀さん夫婦はその小屋のなかで、咽喉を剃刀で切つて抱き合つて、死んでゐたのであつた。私はその時見た銀さんの胸から腕にかけての美しい刺靑を、今にも忘れることはできない。

「美事な死に方や。」「立派な覺悟や。」

誰れもかれも女郎上りの女と銀さんの死樣を見ながら褒めた。

私は靑洟垂らしの少年と、あの立派な遊び人風な態度の銀さんとを一緒にして考へるごとにいたましいやうな妙なアイロニイを感じずには居れない。村一番の長者の子、低能兒、破産、遊冶郎、美しい死樣といふやうた聯想の絲を

たぐつて見ると銀さんの一生は銀さんにとつて餘り悲しくない芝居であつたやうな氣がしてならぬ。銀さんは死ぬまで自分ひとりで面白い芝居をして死んだやうにおもはれてならぬ。

私から燧石を取つて、何時まで經つても私に沼の烏貝をくれなかつた銀さんは、何時も自分の芝居のもくろみばかり立てゝゐたやうな氣がしてならぬ。

夏が來て沼に菱の花が咲くころになると私は烏貝のことを考へてはひとりで可笑しくなつたりすることがある。その度に銀さんのことを思ひ出す。

「銀さんは死んだ、立派に死んだ。」

兎も角銀さんは綴りのついた芝居の幕を卸して美しく死んで行つたやうに思はれる。

時々銀さんの生涯を羨ましくおもふことがある。

今ころは故郷の沼には菱の花が白く咲いてゐるころである。

田端の丘

久し振りで田端の丘の上に立つた。そこからは遠くに荒川の流れが見え、柳の並樹も見えた。小臺の渡に通ずる一本の道路が靑い田圃のなかを白い夢のやうにうねつてゐる。馬車や荷車や人の影が何時の間にか水郷の木立のなかにかくれてしまふ。

何の音もなしに水郷の黃昏が迫つて來る。恰度山吹きが散つてしまつて蛙が鳴き出すころである。靑い田を吹いて來る風が、田舍の中學時代の幻影に醉ふてゐたころを想ひ出させる。何となしに私の胸が底の底で波打つ。

恰度十幾年前である、城下まで二里あまりの田圃道を毎日城の中の學校に通ふてゐたのは。

大きな樟が城の壕に沿ふて繁つてゐた。鶫がよく啼いてゐた。蘆の間には行々子が鳴いてゐた。そのころ知つてゐた人たちの俤が泛かんで來る。みんな十六七の若い生々した顏をしてゐる。

田端の丘の上に立つて私は暮れ行く水郷の空をながめてゐる。一週間があひだ朝から夜更けるまで馬車馬のやうに働いてゐる私にとつてこの丘の上に立つて、靜かに、ほんの少時であるが、このやうな追憶に耽ることはたまらなくうれしいことである。

水郷の間を點綴してゐる木立のなかゝら燈がまたゝき初める。まだ靑い田と白い道のげぢめはつく。木立の奥にかくれたやうにして燈がまたゝく。

荒川の流れと柳の木立が烟のやうになつて、やがては空と水と平原とが一つの色に滅えて行つてしまふ。

すべてのものが遠い遠い忘却の世界に亡びて行つてしまふやうである。

何となしに私の胸がいたいほど疼く。

私は武藏野を愛する。黄昏の武藏野を愛する。武藏野の涯に見る水鄕のたそがれを愛する。

そこには鐘の音も聞えぬ。水車の音もない。空を高鳴る風の聲さへ滅多に聞えない。すべては死せるが如く靜かな默思のうちに滅えて行つてしまふ。遠い遠い水鄕の涯に不圖見出さるゝ農村の燈がこの平野の落莫たる單調をやぶつてゐる。そのやうな遠い農村の燈を見出したとき私の胸は悠久な何ものかの影を追ふやうにして波打つ。少年のころの異鄕を欲りする冒險心に似た不安な落ち着くことのできぬあこがれと寂しさとが、冷たく硬化しかゝつてゐる私の心をほごし初める。靈のすゝり泣きが私の胸の底に聞える。

思ひがけぬ方向から思ひがけぬときに水鄕の靜默と暗とを破つて水平に燈が流れる。王子から千住の方に通ずる電車の燈である。この丘に立つてゐる私には電車の軋る音も聞えない。たゞ靜かな霧のなかをひとかたまりの光りが流れてゐるやうに見える。それが耐らなく寂しい思ひを喚び起させる。どこに行くのかわからない人間の靈を乘せた車が、はてしもない未知の世界へ夢の世界へと走つてゐるやうにおもはれてならぬ。

武藏野はどのやうな文明の偉力をもその寂しい影のなかに鎖してしまふ。

王子や十條あたりの汽笛が夕闇の靜さをやぶつて鳴りひゞくこともある。けれども次の刹那にそれは武藏野の靜寂の底に滅えて行つてしまふ。

水鄕の夕暮れはいかなる近代人のほこりをも死靜の底に葬つてしまふ。

私は丘の上に立つてゐる。

何となしに私の胸がをどる。

水郷が暗の底に憩ふ。燈がやがて暗の上に浮き出して來る。近代人の努力がすべて武藏野の暗に葬られる。

私は靜かに丘を下つてかへる。

私はまだ何かを武藏野の暗の涯に見のこして來たやうな氣がしてならぬ。

充たされぬ私の靈の寂しさ。

伊豆の海

大晦日の午後、空は近ごろの晴天つゞきに珍しくも薄曇りしてゐた。私は五六枚の地圖と四五册の本を包むで東京驛を立つことにした。慢性の扁桃腺がちく／＼痛み出して、兩の耳朶は發熱した加減で少しほてつてゐた。私は切符を買ふまでは幾度か旅行を止さうかと考へた。それでも「溫かい伊豆へでも行つたら！」と言つた小此木博士の言葉をおもひ出しては、また窓口に立つた。

「溫かい伊豆！」

私は譯もなしに伊豆の明るい海が戀しくなつた。溫かい南の國の海岸に育つた私にとつて東京の暗い冬の風は耐らなく冷たかつた。

私は國府津までの切符を買つて長い石だゝみの上をたゞ一人で歩いて行つた。東京驛としては珍しいほど客は少なかつた。

汽車の中はがら明きであつた。私はクツションの上に倒れるやうにして寢た。

「珍しく雨か雪になりさうですよ。」

一家族引き連れての避寒客らしい女主人の聲が聞える。

私は何の雨具の用意もして來なかつたことを想ひ出した。それでも次の瞬間には

「まゝよ濡れるなら濡れよ」といふやうな心になつて仰向けになつたまゝで薄曇りの空を見た。家といふものを持たぬ私は無理にも病の體を引き摺り廻して、そして「同じ寢附くのなら誰れも知らない旅の宿で寢附く方が……」とい

ふやうな自棄氣味な心も手傳ふて急に東京を立つことにしたのであつた。

昔フランスの或る學者は自分の名を忘れたいと願つた。旅は一時的ではあるが少なくともいろ〳〵なかゝはりや職業の壓迫といふやうなものを忘れさせることができる、私は何時も自分を忘れ、自分の生活をのがれんがために旅に出かける。

仰向けに寢てゐる私の前の窓をかすめて雜木林の梢が動き、灰色の雲が流れる。私といふ存在、梢、雲、そしてその他には社會もない、集團もない、家もない、友人もない、無限より無限へたゞ雲と梢と物の音とそれ等を思惟する私自身の意志があるばかり。やがて私自身も意識せられなくなる。たゞ雲とそして刹那的に窓の面に顯はれては滅び行く現象の世界のみ、そしてすべてが何のかゝはりもなく永刧に過ぎて行く。

旅！ 旅！ 無極の時空に流れ行く旅！ 幼い夢を追ふ私の心が、咽喉の疼痛をいたはるやうにして淡い感傷の涙に浸される。私はかの雪深いシベリヤの囚人が初夏の緑の野に放たれた日にでも感ずるであらうやうな、自由な空氣の暢然さを感じずにはゐられなかつた。

汽車は走つて行く。午後の陽が思ひ出したやうにくわつと窓を射す。そこには友もない、しかしそこには生活のためにする忍從や謙遜や苦しき笑ひもない。そこでは時を刻む必要もない。自分を殺す必要もない。たゞ自然のまゝの、あまやかされた寵兒として私は刻々に疼く咽喉の痛さを快い涙をもつて味つてゐた。

「死」といふ問題が遠い世界の出來ごとのやうに泛かんでゐることもある。次の刹那には蒼白い顏の死が硝子窓の外に冷笑つてゐるやうにもおもはれる。病みつゝもなほ生きて行くことの嬉しさを想はずには居れない。遠い平原の涯を白い冬の海に注いでゐる流れにも、砂丘から砂丘へとつゞく海岸の松並樹にも斷ちがたい愛着の念が湧く。

赤銅色の磯の男たちが午後の光りを浴びて思ふ存分新しい海氣を吸ふてゐるのが耐らなく羨ましい。

「どこまでも生きてゐたい。大地に喰ひついても生きてゐたい。」

國府津から小田原までの電車は冬の日には珍しい蒸すやうな溫かさである。容赦もなく埃が呼吸もつまりさうに車の明るい室に舞つてゐる。咽喉はいよ〳〵痛み出した。

早川口を立つた輕便鐵道の小ひさな、乘心地の惡い車が海岸の白い波を左手に見て、冬の淋しい山手にかゝつたのは夕陽のかげがすつかり函嶺の谷々を埋めてからであつた。さすがに冬らしい寒さが身にしみる。落葉し盡した伊豆の山骨の露はな背に黑い陰をつくつて蜜柑畑が夕暗の底に沈むでゐた。蜜柑畑の傍には小ひさな家が並んでゐて、軒とすれ〳〵に輕鐵の車は通つて行く。松飾の笹が汽關車に觸れてざわ〳〵と音を立てる。

「明日はお正月だ！」

今まで忘れるともなく忘れてゐた明日のことが思ひ出される。そして家といふものを持たぬ一人者の氣易さと淋しさとが、窓を通つて來る夕暮の海風にしみ〴〵と感じられる。

今しがたまで絕壁の黝い巖の下に白い渦を卷いてゐた怒濤が夢のやうな月の光りを浴びて煙るやうに見えると、遠い遠い水平線の涯が鈍色の空と一つになつて、そこにはたゞ空白な黃昏の色が遠い半圓を描いた相模灘の上に悠久な死靜の天蓋をかけてゐる。

十日あまりの月に照らされた伊豆の海と伊豆の山々を越えて、可憐なうすきたない汽車は高原のやうな耕作地を走る。間もなく海のなかに巨人の手のやうに突き出た眞鶴岬が見える。ちらほらと谿間々々から煙が見える。汽車は思ひ出したやうにスピードを速める。そこから道は一氣に下り坂になる。

月の光りに照らされた白い磯邊の燈も病める眼にはいたましい。

私は門川といふ淋しい驛で下りた。私は更に馬車に搖られて湯河原までゆく苦痛に耐へなかつた。私は直ぐ驛の傍

にあつた宿に泊ることにした。驛には旅藝人などを泊める家がたゞ一二軒あるばかりだといふことであつた。

私は靜かに自分の脈搏をはかつて見た。頭は壞れさうに痛んだ。騷々しい客人たちの乘換が濟むでやがて湯河原の方へ行く馬車の鈴や喇叭の聲が月の野面から滅えてしまふと、取りのこされた小驛の夜はとりわけて靜かであつた。直ぐ宿の下あたりで波の音が聞える。

私は惡寒のするのを耐へて二階の扉を明けて見た。白い海が煙つて眞鶴岬と初島の燈が見える。私は嘗てTが湯河原から歸つた折話してくれたあの島の乙女の悲しい物語りを想ひ出した。あの海をわたつて夜毎男を戀ふて伊豆の海岸まで波を切つて來たといふ娘のことや、自殺したTのことがごつちやになつて私の胸に泛かんで來た。Tが自殺をする少し前に一人でさ迷ふた十國峠あたりの高い連山には霜をふくむだやうな月の光りがはてしもなく靜かな寂しみのなかに溶けこむでゐる。Tの靈がまだひとりで寂しくあの白い月光を浴びて峰から峰をさ迷ふてゐるやうに想はれてならなかつた。

次の汽車の着くのを待つ乘合馬車がまた宿の後の野原の道を近づいて來る。小ひさなカンテラと鈴の音が旅らしい心をそゝる。隻脚の少年をいたはりながらTがそのガタ馬車のなかゝら蒼白い顏を出して私の名を呼ぶことがあり得るやうな氣がしてならなかつた。

下の土間からは湯河原の旅館から客引に來てゐる男たちの罪もない「女中の品定め」などが聞えて來た。

汽車が着いて、馬車の鈴が鳴つて、愛想の良い宿の主婦の癇高い聲や男たちの客を呼ぶ聲が、一としきり聞えて、それが止むと小ひさな驛はもとの靜けさにかへつた。同時にどかどかと大勢の人々が狹い――二室しかない――二階に上つて來た。旅から旅へと歩く田舍廻りのちんこ芝居の連中であつた。

私は次の室で久しいことぢつとかれ等の仙愛もない旅の話を聽いてゐた。

「勇さんは汽車に醉つちやつたのよ……」
「妾だつて歸りには小田原まで歩く方が宜いわ……」
娘たちは水を貰つて額を冷してゐるものもあつた。
今夜は湯が立たないといふので年増の女たちは近くの漁場へ貰ひ湯に出かけて行つた。私には旅から旅を歩く人たちの生活といふものが何となく懷かしかつたので次の室にはいつて行つた。十三四歲を頭に小ひさい娘達は直にこの新しい侵入者をも忘れて騷いだ。私は太夫元といふ五十あまりの男と話した。太夫は歌舞伎座の競太夫と一緒に名古屋あたりを歩いたことや、梅幸が榮三郎時代に一緒に雪深い北國を打つて歩いたことなどを語つた。
「人間も四十を越しちや思ひ切つたことができませんので、ほんたうに運命の挽回策はなりませんや。」
男はかう言つて靜かに波の音を聽くやうに見えた。男はまだ競太夫が死んだことも知らなかつた。私は新年號の演藝畫報を見せてやつたが、もう誰が誰だかちつとも見當がつかないと言つた。娘たちが我童の朝顏を見て「佳いわねえ」「文ちやんと同じ型ね」と騷いでゐるのを、かれは靜かに見るともなしに見てゐた。遠い日のはなやかな芝居者の生活の幻を追ふてゐるのであらう。私は敗殘者のなつかしさと傷はしさとを感じた。
かれはつまらないと言つた風にポンと輕く煙管を火鉢ではたいて、
「でもねえ、人間は何も運でさあ……」
かう言つたかれの顏にはまだ諦めても諦め切れぬかういう人々の淋しさを持つてゐた。
湯に行つてゐた人々が歸つた來たので、私は自分の室にかへつて眠ることにした。
私は寢床にもぐり込んでもまだ眠れないで、次の室の騷がしい聲を聽いてゐた。
「ツツンツツン……ツンテンツンテン……そこで初めて靜ちやんの袂をにぎるんだよ……」

お師匠さんと呼ばれる中年増のかすれた聲が聞えた。

床についてからも、かれ等は久しい間明日の芝居の道具立てやきつかけのことなどを語つてゐた。

「妾、でもあのどんどろが怖いわ。逃げ出さうかしらと思ふこともあつてよ。」

明日お里になる娘の子はかう言つて皆を笑はした。その子は一行の中の一番美しい娘であつた。

八疊の室に十人ばかりの男女が、足りない夜具を工夫して、床についたのは夜更けてからであつた。この群のうちのたゞ一人の男である太夫元だけは一人で寢てゐるやうであつた。

「誰れか太夫さんとこに行つてお上げ。」

師匠の聲がした。

「いやあだ、太夫さんなんか。」

可憐な娘たちの聲がして、皆なが一度に笑ひ出した。

何時の間にか皆なが靜まつた。遠い沖の怒濤と、直ぐ近くの磯に打つてゐる波の音がもつれつゝ聞えて來た。

「お客さん、おやすみのところ誠にすみませんが……」

かう言つて宿のかみさんが持つて來てそこに置いた宿帳をとつて私は初から繰り返して見た。客は一月に一度か二月に一度ぐらゐの割で、客の名前もみんな浪花節語りや、旅役者で埋められてゐた。

私は旅から旅とあてもなくさ迷ふかれ等の運命を想ふた。

隣の室で誰かゞ頓狂な聲を出して、

「今夜は大晦日ぢやないの？」

と叫んだ。

しかし誰も答へるものもなかつた。波の音のあひまに幾つもの可憐な鼾さへ傳はつて來た。

「除夜の鐘も鳴らないのか知ら？」

同じ聲がさう言つたが、誰れもまた何にも應へなかつた。

一度靜かに煙管をはたく音がして、次の瞬間に室はまたもとの靜けさにかへつた。

波の音が遠く滅えて行つた。

雁來紅

廣い海を眞正面に受けた砂丘の上に一本の若い樹がひよろ〳〵と伸びてゐた。若い樹はこれから思ふ存分夏の光りと海氣を受け容れようとしてゐた。柔かい嫩葉が黒い海面と陽に焦げた白い砂丘の上にくつきりと水々しい綠の色を投げかけてゐた。

遠い海をわたつて來た鳥も、これから海をわたらうとする小鳥も必ずこの若い樹の綠の木蔭をたづねて來た。そして小枝に憩ふた。

　木蔭が餘り狹い。

　梢が餘り弱い。

　何だか不安な樹だ。

小鳥たちはいろ〳〵な苦情を言ひながら若い弱々しい樹の梢を飛び歩いたり、若い葉をむしつたり、白い糞をひつかけたりした。

夏の鳥が去つてしまつて、秋が來た。秋から冬にかけて激しい暴風雨の日がつゞいた。高い砂丘の上まで海の潮吹がはね上げられて來た。若い樹は自分ひとりで秋冬と激しい戰ひをつゞけなければならなかつた。

再び夏が來た。樹は若い綠の葉をひろげて思ふ存分光りと空氣を吸はうとつとめた。

また海をわたる小鳥が飛んで來て砂丘の上の若い樹に集まつた。

　小ひさな樹だ！

頼りない樹だ！

葉は一日々々と喰ひちぎられて行つた。白い鳥の糞が梢といふ梢をつゝむでしまつた。

秋冬と戰つた若い樹は夏が來ても既う嫩い芽を出さなかつた。

その次の夏には小鳥たちは砂丘の若い樹のことを思ひ出しもしなかつた。そして新しい他の若い樹をもとめて翔んでゐた。

×

――さん

秋が來ました。大地は黃褐の色を露はにして、樹は落莫の聲を立てゝゐます。靜かに考ふることのできる秋、靜かに物思ふことのできる秋、孤獨を愛する私にとりてこれほど懷しい時はありません。

私は二三日前旅行から歸りました。私は何處にも出ないで終日すがれ行く庭を眺めてゐます。私は旅のうれしさをしみ〴〵味ひました。旅は寂しい、けれども旅は孤獨者の心をしみ〴〵と味ふことができます。私はその孤獨の味を何時までも保つて置きたいと思ひますので、誰れにも旅から歸つて來たことをも通知しないで一人で秋の庭を見守つてゐます。

庭には紅蜀葵も咲き、花魁草も向日葵も雁來紅も咲いてゐます。あなたはコスモスがお好きでした。私は旅に出て小ひさな驛や村の入り口などにあの華奢なコスモスを見るごとにあなたのことをおもひ出しました。

――さん。秋は孤獨者の心にも人をなつかしむ悲しい心を喚びおこします。

何とはなしに人を欲りする心、人を悲しむ心、私はその空漠たる愛と悲哀とをもとめてゐます。そこには何の理由

もありません。

ロシヤの廣野を步く旅人は地に口づけするといふことを讀むだことがあります。秋の野に立つて秋の聲を聽くとき私は大地の母を想はずには居れませぬ。あらゆる造化を生み、あらゆる生死を靜かに抱いてゐる大地の胸に立つとき私は地に口つけするロシヤの旅人の心を察することができます。私は無性に大地と、そして悠久の悲しき人生とを想ひ出します。

――さん。

秋が來ました。

楡や櫟の林を踏めばさく〳〵と秋の聲が立ちます。淺い谷をへだてゝ武藏野を奔る幾條の道には白い埃をあほる轍の音が聞えます。

私たちは聲を立てゝはなりませぬ。人間の言葉が話さるゝ時、秋の詩は悉く破られてしまひます。私たちは默して步かなければなりませぬ。

何となく悲しきおもひ！

たとへ戀する人々が二人步くとも、かれ等は語つてはなりませぬ。そこには過去に於いて失はれたる、また壞られたる戀の亡き骸が秋の寂寞となりて悠久の悲しみをたゝへてゐます。秋の野はすべて亡び行きしものゝ墓場であります。そこには聲なき悲しみの歌がうたはれてあります。

白い野菊の道が黄昏るゝころ地の底につゝしまやかな蟋蟀の歌が聞えます。大地はすべて秋の悲しみに泣いてゐます。

――さん。

何となく悲しき秋。私は丘に立つては涯しもなくつゞく武藏野の秋を見てゐます。音もなく往き通ふ野の人々、疲れた馬、空高く翔る鳥、野の收穫を積む男、白い道路の埃、すべてが私の寂しい心を喚びおこします。

私は終日野を歩く、私は疲れる、そしてそこにたほれる。私の寂しい心はいやましに寂しい。地の底にまた悲しい秋の聲を聽かなければなりませぬ。

秋また秋、私の寂しみはひろがつて行き、深まつて行きます。

何となく悲しき秋！

私の心が充たされぬかぎり秋は寂しい。

しかも私の心は充たさるべき機會を過去に失つたのでありました。

――さん。あなたは秋のやうに寂しい人であつた。あなたはまた私の心に永遠の秋をのこして行つた。

×

花やかな劇場のバルコニーであつた。まるい月がバルコニーを照らしてゐた。

私は一人の若い學生と語つてゐた。

――さん。あなたはバルコニーに立つた。私は久しい間沈靜しかゝつてゐた悲しみをくり返さなければならぬことを恐れた。私はあなたの視線を避けようとした。けれどもそれは無駄であつた。

私たちは何を語つたでせう。あれがあのやうな尊い機會に語らなければならぬ言葉であつたでせうか。

――さん。私たちは何でもない知り合ひが不圖出會つた時のやうな落ち着きをもつて、何でもないことを語りました。

幕明きの鈴が鳴りました。あなたは幸福に充ちた輝きと矜りとをもつて人ごみのなかにかくれました。

私は何でもないやうな靜かな顏をして若い學生と一緒に廊下を歩きました。

舞臺からは花やかなオーケストラの音が響いて來ました。フート・ライトの光りが美しい人々の顏を照らしました。

私は淋しい心をいだいて席に着きました。

私は悲しみからのがれようとはおもはぬ。人生の悠久な悲しみを宜い加減に切り上げてしまはうとするほど卑怯な生活はない。

悲しみを悲しまなくなるといふことはいたましい人生の疲勞である。感覺の痲痺である。

悲しみから救はれるといふことは決して悲しみをなくするといふことではない。悲しみをほんたうに味ふといふことに他ならぬ。悲しみをほんたうに味ふことができるとき、私たちの生活はより良きものに改められる。

「悲しめるものは幸なり。」けれども悲しみを感謝しつゝ味ふものでなければ慰めはあたへられない。キリストの生涯は悲しみの感謝に充ちてゐた。

貧しき者、悲しめる者、弱き者、無智なる者、沈默せる者、汝のうちからのみほんたうの生活が生まれる。

自分を天才だと信じてゐるものがある。大藝術家、哲學者、宗教家、教育家なりと信じてゐる者がある。しかしかれ等はまだほんたうに人間たることの光榮を感謝することを知つてゐない。

×

笑つた交番の巡査の顏、客と笑ひながら話してゐる電車の車掌を見出した時、人間の世界が急に廣くなつたやうな氣がする。そのやうな時私は世界中の人がまだお互に味方であることを深く考へさせられる。

×

人を呪ふてゐる義人は大抵最も多く人に呪はるべき缺點を自己のうちに持つてゐる。貧しき者にパンを與へよと叫

ぶ人は何時も自分より貧しい者にパンを與へる前に、先づ自分の分け前以上の分け前を貪ることを忘れない。

美しい主義の名の下に働く多くの人々は大抵左右に富者と貧人とを坐らして置いて燒いた胡桃を食ふ猿の役目を演じてゐる。

×

天才に生まれなかつたことを悲しむ日がある、每日のやうに。癩病患者でないこと、盲目でないことを感謝せずには居れない日がある、それは稀に。

平凡な人間に生まれ得た幸福を涙が出るほど感謝する日がある、更に稀に。

旅人となりて

――さん。今朝八時半の特急で下の關まで一氣に走ることにしました。避暑の客や何かで込み合ふことだらうと思つてゐましたが、さほどでもなかつたので大助かりでした。

東京を立つたときは珍らしく細雨を見ましたが、横濱あたりからすつかり晴れてしまつてもとの蒸し暑い天氣になりました。

靑い山、靑い畑が鐵道線路を挾むで迫つて來ると、谿間にも野の面にも白百合がちらほらと見えます。葛の花や槿花が畑にも、家のまはりにも咲いてゐます。空も山も流れも光りに輝いてゐます。

眼を閉ぢて轣轆たる音を聽きます。汽車はひたすらに光りの野を西に走ります。

「旅！」

何といふ懷しい言葉であらう。絶えず時間といふものに束縛されてゐる私、事務といふ苦しい鞭に打たれてゐる私も、今日ばかりは時といふことをも、氣兼ねといふことをも、責任といふことをも考へる必要はありません。食ふことのために、生きて行くことのために、自分の魂を賣らなければならぬ苦痛をも今日は忘れることができます。

私の周圍には見知らぬ男や女たちが、ひとり／＼の砦を築いて坐つてゐます。けれどもそこには愛着もなく、憎惡もなく、行人を送り迎へる行人の心は、雲や風の徂徠に對すると同じ無我無執の心であります。たとへ幾何の離愁ありとしても、それは一橋一山を超ゆる間には忘れられてしまふほどの淡き悲しみであります。それは美しい詩の如き哀愁であります。

人々は絶えず私の周圍に往來してゐますが、私の瞑想と沈默とをやぶることもありません。何時も何か追はれてゐるやうな恐怖を感じてゐた私は、今始めてそれ等の脅迫からのがれることのできたやうな氣易さを感じてゐます。私は誰に對しても何の交渉もなく自由に考へ、自由に呼吸し、自由に眠ることができます。私は孤獨なる者の孤獨なる生活を感謝します。

國府津に着いて始めて海らしい海を見、山らしい山を見るのは嬉しいことです。函嶺や乙女峠には雲がかゝつてゐます。私はあの山の背で笛を失つて道に迷ふた寂しい亡友を想ひ出してゐます。

函嶺に入りて、さすがに高原らしい凉しさを覺えました。文字通りに靑いカアペットを敷いたやうな裾野には、明け方の星をばらまいたやうに、白い百合が咲きこぼれてゐます。線路に沿うて圓い柔かな線を描いた丘には、離々たる靑草の上に盛り上げられたやうにして白百合が咲いてゐます。合歡の花も石竹も花魁草も女郞花も一樣に靑嵐と芳草のうちに八月の光りを浴びてゐます。

川は瘦せてゐます。白い礫の上を滑る淸冽な水は靑い山の根を縫ふては靑い嵐のなかにかくれて行きます。蓑を被て深潭に釣を垂れてゐる男もあります。高原を走る汽車を見下して更に高い山道を歩いてゐる少年の群もあります。

乙女峠には雨が降つてゐます。

「富士山は見えますか？」

私は突然隣の男に沈默を破られました。その男は始めて日本を旅行した臺灣人でありました。富士は雲に鎖されて見えませんでした。私はこの旅人に對して氣の毒に思ひました。私は少かに雲霧の間にほの見えてゐる富士の稜線をたどつてその男に富士の形を說明しました。

汽車は裾野を三島の方へ走つてゐます。時々橫なぐりに時雨のやうに寂しい雨が降つて來ます。斜に打ちつけられ

た雨の脚がまだ乾き切らぬ間に正午の太陽が焦くやうに硝子窓を射ます。けれども高原の風は靑く霽つてゐます、禁喫煙の禁を犯して煙草を喫かしてゐる男もあります。けれどもこゝではそれを憎む氣にはなれません。靄風と靑嵐の間につゝまれた人間の集合は自然が生むだ可憐な嬰兒の遊戯に過ぎません。かれ等の行爲はすべてさながらのもの、善きものとして受け容れらるゝことができるやうにおもはれます。

私は幾度か小ひさな行李の底から本を取り出しました。けれども私は直ぐ本を捨てました。どうしてこの偉大なる自然から私の眼を放すことができませう。

桑の畑、芋の畑、黍の畑をへだてゝ汽車は富士を中心に大きな弧を描いて走つてゐます。黍の赭い穗の上に雲の峰がかゝり、四十雀の唄が聞えてゐます。

馬洗ふ里の子供たちの上に煙をのこしつゝ汽車は鐵橋を渡つてゐます。

汽車は少時澎湃たる駿河灣の岸に沿うて走つてゐます。方々に小ひさな水泳場が見えます。黍畑のつゞいた砂丘の上に三色の旗が黒い海を背景にひら〳〵してゐるのもあります。

やがて汽車は變化の少ない平原の町と水田を貫いて走ります。中央山脈の山系が遠く紫色につゝまれて天空を走つてゐる他には、光景は極めて單調なものになつて來ます。

私は「白痴」を出して見ました。ドストイエフスキイの死刑に對する考へと死刑囚の話が「白痴」と呼ばれた薄命な若い貧乏な貴公子の口を通して語られてゐます。

死の執行は少くとも一週間後であると思つてゐた一囚人が、十月の暗い寒い朝の五時突然夢を破られます。かれは今朝十時に斷頭臺上に立たなければなりませぬ。死は餘りに早く囚人の上に振りかゝつて來ました。かれは最初信じませんでした。次の刹那に抗らひました。しかしかれは最後に默しました。

かれの周圍には幾千の男女が叫んでゐました。
「こゝに千、萬の人々があるが、誰一人殺される者はない、しかし俺一人だけが……」
死刑囚の頭は非常に冷靜でした。それだけかれの苦痛は殘忍でありました。僧侶は銀の十字架を囚人の唇につけました。かれは貪るやうに十字架に口づけしました。
「人に人を裁く權があるか？」私はトルストイの言葉を想ひ出しました。「人に人を殺す權があるか？」ドストイエフスキイはかく語ります。千、萬人のうち不運なる一人が斷頭臺の上に立ちます。
私は嘗て一本の木綿針を失つたゝめに上官に擲り付けられた兵卒を知つてゐます。一時間か三十分、歸營時間に遲れたがために鐵道線路に生命を捨てたといふ新兵の話を聽いてゐます。私は東京に歸つて來て社會的な地位や權榮をほこつてゐる多くの幸福な人々を見るごとに、「かれ等は嘗て一本の木綿針を失つたことすらもないか？」と考へずには居れないことがあります。
鞭打てる者と鞭打たるゝ者とが神の前に立つ日を私はいろ〳〵に想像してゐます。
――さん。うと〳〵と眠つてゐた眼に紅い蓮の花の咲いた田が長く長くつゞいてゐるのが映ります。淡い薫りが夢を誘ふやうに窓を襲ふて來ます。一羽の白い鳥が紅い花の上を靜かに翔んで行くのが靜かな抒情詩を讀むでゐるやうな心持ちを喚び起します。
――さん。追々陽が翳つて行きます。伊吹山の白く頽れた傾斜面が午後の太陽をまともに反射してゐます。
「白痴」の主人公の瑞西の物語りがつゞいて參ります。
病弱な老婦人と娘は縫ひ糸や煙草や石鹼を小ひさな窓から商ふてゐました。娘は或る日旅の商人に誘拐せられて一週間の後その男に捨てられました。娘は一週間靴もなしに歩いて歸つて來ました。着物は裂けてしまつてゐました。

かの女は恐ろしい寒い夜を野に眠りました。その間に女はすつかり風邪をひいてしまひました。女はその時から肺を患ふてゐました。母も村の牧師も小學校の校長も村の人々も子供たちも女を淫な女か惡人のやうにしてしまひました。子供たちは石や棒切れで女を迫害しました。かつて女は素直に母に仕へて母を養つてゐたのでした、けれども母は今では娘の罪をゆるしません。女は小屋のなかに藁の上に寢かされて食物さへ與へられません。村の老人も若い男女も瀕死の病人の上に冷笑と惡罵とを投げかけました。女は間もなく死にました。

「白痴」と呼ばれた薄運な若い貴公子はこの娘のたゞ一人の同情者でありました。村の子供達はこの貴公子の感化でやがて不幸な女の味方となりました。女は貧しい貴公子と、可憐な子供達の美しい同情を感謝しながら死にました。少年たちは女の柩に美しい花を投げました。かれ等は柩をかつがうとしました。かれ等は墓のまはりに花を植ゑました。

――さん。ドストイエフスキイの愛は或る場合には感傷的になつてゐることは否むことはできませぬ。「白痴」のなかのこの話などは殊にさう思はれます。私は「虐げられたる人々」を讀むだ時にも主人公の女に對する愛が餘りに美し過ぎることに氣づきました。

「このやうに沒我的な愛が實行せらるゝだらうか？」

私はかれの作物を讀むごとに、克くこんなことを考へさせられたことがありました。と、同時にかれの手紙のなかに見出だされるシベリア追放中の戀愛事件などを思ひ合せることがありました。

かれほど愛のために絶望したものもなく、かれほど愛のために眞劍になつたものもなかつたでせう。私は「罠のなかの狼」と言はれた氣むつかしやのかれと、作物を通して見る聖者のやうなかれを色々な意味に考へて見ました。

――さん。關ヶ原や醒ヶ井などといふ聯想の多い驛の名がつゞきます。芭蕉の夏草の句を想はせるほど山も平野も青々としてゐます。この附近から西は野の百合が紅くなります。

——さん。暗い杉の木立からはこぼれるやうに蜩の聲が聞えます。木の葉といふ木の葉は夕風にうらをかへして全山を銀のやうに白くしてゐます。空は曇つて來ました。また嵐になりさうです。涼しい雨が斜に吹きこむで來ます。

湖水に沿うた村々の家の白い壁に力ない夕陽の影が動いてゐます。田や畑の隅々に小ひさな木立があつて、そこには青い竹で作られた桔槹がかゝつてゐます。若い女たちが二三人づゝで耕作物に井戸の水を撒いてゐます。二段にも三段にも水車をかけて池の水をかひ出してゐるのも水郷の感じを深くさせます。

比叡の峰は曇つてゐます。黒い雲をやぶつて眞紅の夕燒が湖面を壓するやうに燃えてゐます。瀨田の流れに群をなして白い鳥が眠つてゐます。

人々は靜かに湖の上をながめてゐます。誰れの顏にも一日の旅の疲れが動いてゐます。

逢坂山の隧道を越えると大きな角の牛がのそ〳〵と荷車を曳いて近江の方へ歩いてゐます。黄昏は牛の背に落ちかかつてゐます。

日はとつぷり暮れました。

紅い提灯の燭が暗のなかに幾段にも幾段にも重なつて流れに沿うて映つてゐます。

鴨川の燭！

人々は窓を明けて暗の底に紅い燭を見出してゐます。

長い歩廊に下駄の音が響きます。思ひなしか下駄の音までがゆつたりと聞えます。

人々は大方出て行つてしまひました。新聞紙や折りなどの散らかつた薄暗い室のなかに、私はまだこれから先きの二百里あまりの旅路を想つてゐます。

さすがに旅らしい淋しさがどことなく漂ふてゐます。

――「第二感想集」了――

昭和六年五月廿五日印刷
昭和六年六月一日發行

一册・壹圓五拾錢

第二想感集

著作者　吉田絃二郎
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込（一八〇五番・八〇七番
一八〇六番・八〇八番・八〇九番）

全十六巻内容

巻	内容	収録作品	
第一巻	短篇小説集(1)	鳥の秋、法妙寺の叔母、山上の小屋、靜かなる死、姿見の前、小梅の母外十八篇	既刊
第二巻	短篇小説集(2)	大地の涯、熊のわな、彼岸詣り、憎、疲れたる魂、少年、濱、紙、外十六篇	近刊
第三巻	短篇小説集(3)	雉子笛を吹く人、神の子、青い毒薬、叔父夫歸、手紙、草の上、犬吠崎外十五篇	
第四巻	短篇小説集(4)	山寒し、二人の無能者、母を思ふ日、花梨の下、盗人の妻、二老人と彼外十二篇	
第五巻	短篇小説集(5)	芭蕉、壁、屋上白夜、笑ふ彼、秋、草枯れ、地に落つるもの外十七篇	
第六巻	短篇小説集(6)	父、金、家出、二人の老人、時計、秋の海、寒日、形見分け外廿二篇	
第七巻	長篇小説集(1)	靜夜曲、人間苦、光り地にありや	既刊
第八巻	長篇小説集(2)	無限、孤獨なる女、結構な空	
第九巻	長篇小説集(3)	白路、高原の日記、石に擊たるゝ女	
第十巻	戯曲集	大谷刑部、燕、忠信の父、狂人となる迄、清作の妻、丈草庵の秋、靜夜曲外十一篇	
第十一巻	感想集(1)	小鳥の來る日、生の悲劇、雜草の中、生命の微光	既刊
第十二巻	感想集(2)	草光る、生くる日の限り、旅人、山家日記	既刊
第十三巻	感想集(3)	木に凭りて、心より心へ、わが詩わが旅	
第十四巻	感想集(4)	靜かなる土、麥の丘、靑鳩	
第十五巻	感想集(5)	白日の窓、霧島紀行、春の日	
第十六巻	童話集	騎兵と馬、或る歩哨の話、熊とピストル木村軍曹と赤靴、外五十餘篇	